ＩＳ原作にたどり着け！　『本編完結』

エネボル

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日、少年は〝前世の記憶〟を取り戻した。織斑一夏の双子の弟――織斑秋斗である。秋斗は己が〝インフィニット・ストラトス〟の原作には登場しないイレギュラーである事を自覚すると同時に、自分と言う〝イレギュラー要素〟の結果、織斑家の財政が破綻寸前である事に気づいてしまう。

原作の織斑家姉弟は2人暮らし。故に原作通り一夏と千冬が二人暮らしならば、極貧生活でも運命的なアレで何とか原作には辿りつける。

だが異端の３人目が存在する事で大黒柱の千冬は過労死寸前だった。

故に現在の織斑家の状況は、まさに金なし！　暇なし!!　余裕なし!!!

「――――俺が織斑家を立て直す！」

これは千冬がブリュンヒルデになり、一夏がＩＳ学園に通うまでの、〝原作〟の始まる空白期を描いた、原作にたどり着く為に足掻くイレギュラー要素――『織斑秋斗』の物語である。

第一章完結。

第二章完結。

最終章完結。

５月２７日、無事〝本編〟の方、完結しました。

目次

第一章

01 俺が織斑家を立て直す！ 1
02 神戸牛の味 16
03 プレゼントＤＡＹ 27
04 白騎士の駆けた日 45
05 所謂、調子に乗った結果 56
06 切っ掛けと変化 72
07 フラグとは気づけば立っている……らしい 86
08 流石、主人公『原作』 97
09 嘘の一つや二つ 108
10 ある夏の一幕 120
11 諦めが肝心 131
12 分岐点　前篇 141
13 分岐点　後篇 153
14 『吉』と出るか『凶』と出るか 165
15 『いつか』に続く最善だと信じたい　前篇 179
16 『いつか』に続く最善だと信じたい　後篇 193
17 訪れた『転じ』の時…… 210

第二章

18 束の『難題』　前編 221
19 束の『難題』　後編 233
20 織斑家の『引越し』　前篇 241
21 織斑家の『引越し』　後篇 252
22 それは『ロマン』という憧れ　前篇 262

２３　それは『ロマン』という憧れ　後編 …… 276
２４　『少年』時代の終わり …… 287
２５　移ろい行く『時代』 …… 294
２６　中学での『出会い』 …… 302
２７　秋斗と『模型部』の愉快な仲間達　前篇 …… 314
２８　秋斗と『模型部』の愉快な仲間達　後編 …… 324
２９　『友情』そして終わりの始まり …… 332
最終章
３０　流血に濡れて、孤独を抱えて …… 342
３１　イレギュラーの悩み …… 357
３２　赤か、黒か…… …… 367
３３　ファッキン・ジャップ …… 376
３４　走り出したら、止まるな！　前篇 …… 386
３５　走り出したら、止まるな！　後編 …… 395
３６　『原作』にたどり着け！ …… 404
３７　その時は、それで良いと思った。 …… 413
３８　コラテラルダメージ　前篇 …… 423
３９　コラテラルダメージ　後編 …… 430
最終話　原作とは少し違う『未来』へ …… 444
番外編
タバネサブマリン♪　ラウラ・レポート　前篇 …… 453
タバネサブマリン♪　ラウラ・レポート　後篇 …… 464
ある日の兄弟 …… 473
天災の予感 …… 480
ロケットダイヴ …… 489

交錯する人々　胎動編 500
交錯する人々　束編 508
交錯する人々　千冬編 518
交錯する人々　飛翔編 527
夢幻の中の可能性 548
織斑兄弟の夏休み　ｓｋｙｒｉｍ編 559

第一章

01　俺が織斑家を立て直す！

ある日の事。

とある一人の少年が、４０℃に近い高熱を出した。

少年の命は一時期、医者からも危ういとすら言われたが、運の良い事に彼は寸での所で一命を取りとめた。

「……んぁ」

そして彼は、目を覚ました――――。

そして同時に、彼は自らの身に起こった、ある種の〝異変〟に気が付いた。

「――――起きたか！　私が判るか、秋斗(アキト)!?」

「……アキト？」

眼を覚ました少年の前に、凛とした黒髪の美少女が姿を現した。

少年は少女の呼び声に反応した。

己の事を〝聞き覚えの無い名前〟で呼ばれた事に対し、少年は反射的に首をかしげた。

「……寝ぼけているのか？　まぁ、無理も無いか……。一時は、命も危ういとさえ言われていたんだからな」

少女は心配そうな顔で少年の様子を覗き込む。そして「ったく、心配したんだぞ。馬鹿モンが」と、心の底から安堵する様に吐息を漏らして、少年の寝汗で濡れた額をやさしく拭った。

――――少年はされるがまま、心の中で首をかしげた。

（――――アキトってのは、〝俺〟の事なのか？）

少年――秋斗は、内心に湧いて出たそんな疑問に首をかしげつつ、一先ず目の前の少女の話に口裏を合わせた。

「一夏の奴も心配していたんだぞ？　まぁ、直に帰ってくるだろう。兎も角だ。良くなってくれて本当に良かったよ」

「あ、あぁ……悪い。迷惑、掛けたかな？」

「あぁ、盛大にな」
「……そうか」
迂闊な事を言える余裕も、そんな体力も無い。
秋斗は当たり障りの無い会話を続けながら、ふいに周囲を見渡した。
窓から差し込む小さな部屋。夕日の明かりで見る部屋の造りは悪く言えばボロッちい簡素なアパートそのもの。
家賃はおよそ4~5万と言ったところだろう。
「――――ただいま」
「と、そうこう話しているうちに帰ってきたな。おかえり一夏。今日は早かったな?」
(……一夏?)
玄関から声がした。
新たに登場したのはランドセルを背負った小学生ぐらいの少年だった。
将来は確実にイケメンと持て囃されるだろう整った面立ちを持つ少年は、少女に一夏と呼ばれていた。
秋斗の目の前で、黒髪の少女は、帰宅した一夏を迎え入れる。
――その光景を前に秋斗は、不意に無視出来ない重要なワードを聞かされた予感がした。
「お? おぉ、起きたのか秋斗! 学校の皆も心配してたんだぜ? もう大丈夫なのか?」
「あ、あぁ――――」
一夏は秋斗に気づくなり、そう声を弾ませながら駆け寄った。
一夏は乳歯の抜けたばかりの歯を見せつける様にして笑う。
「心配したんだぜ? 明日も寝込んでるのなら学校の皆で千羽鶴でも作ろうかって話もしてたんだぞ?」
「そ、そうか」
一夏は背負っていたランドセルを床に置きながら言うと、鞄の中からクリップで留められた数枚のプリント束を取り出し、それを秋斗に手渡した。

「はいよ、宿題。先生から預かっといたぜ。先生はしばらく待つから、良くなってから提出しなさいってさ」
「……ありがと」
「気にすんなよ。兄弟なんだから助け合うのは当然だろ？」
秋斗が礼を言うと、一夏は屈託のない表情で笑みを浮かべた。
秋斗の回復を、本当に心の底から喜んでいるようだった。
「――秋斗。とりあえず今夜一晩様子を見よう」
静かに見守っていた黒髪の少女が口を開いた。
「医者からは熱が下がれば大丈夫と言われたが、念の為に明日また病院に行こう。まぁ、峠を過ぎた。恐らくは明後日には、普通に学校に行けるようになるだろうがな」
「……学校か」
『学校』という単語を久しぶりに聞いた秋斗は、なんとも言えない小さな苦笑を浮かべた。
それを見た一夏は間髪居れずに尋ねた。
「なんだよ、嫌なのか？」
「――なんと言うか、〝説明〟が難しくてな」
秋斗は歯切れ悪く応える事しか出来なかった。
秋斗の曖昧な返事を聞いて一夏と少女は揃って首を傾げるが、直ぐに流した。
２人は熱に浮かされた病人の戯言として受け取ったらしく、不意に漏れた秋斗の小さな言葉を深く追及しなかった。
「今晩は安静にしろ」と言い残して部屋を出て行った少女――〝千冬〟の命を受けて、秋斗は部屋に独り、布団に横になったまま考えた。
――そして日が落ち、夜の帳が訪れる頃。
秋斗はようやく己の身に起きた奇怪な出来事を受け止め、現状を受け入れる事が出来た。
（――なにがどうなってる？　何で俺が小学生に？　なんで、〝織斑一夏〟と〝織斑千冬〟が目の前にいる？）
それはある意味で、一種の奇跡の様なシロモノだった。
この日を境に織斑秋斗（おりむらあきと）という少年は、『前世の記憶』と言うモノに目

覚めたのだ。
「何がどうなってるんだ、一体……」
秋斗は布団の中で酷く困惑し、そして余りに小さくなった己の掌――
――小学生の掌となった己の身体に視線を移した。

☆

織斑秋斗という少年が、その前世で読んでいたライトノベルに『インフィニット・ストラトス』という作品が存在する。
そしてその登場人物の中に、現在の秋斗の家族である『織斑千冬』と『織斑一夏』という名前が存在した。
インフィニット・ストラトスの物語は、今となってはもはや作品の具体的な話の流れすらもうろ覚えだ。大まかな筋書きとして、後にＩＳという超兵器が登場し、世の中の男女のパワーバランスが逆転し、女性優位となった世界で唯一の『男性ＩＳ操縦者』として覚醒した主人公――織斑一夏が、ＩＳを学ぶ為の学校に通うというぐらい。
しかし印象深い内容だった為、秋斗は今生の家族の名前を聞いた瞬間に、そんな前世で売られていた物語の事を思い出した。
秋斗は前世の記憶に覚醒してから直ぐに、一夏と千冬の名前と、その苗字に当たる『オリムラ』という名前の響きを聞いて、今生がそんなインフィニット・ストラトスの物語世界であるという可能性を考えた。
今思えば、それはあまりに荒唐無稽な発想だ。偶然、身内が同じ名前だったからと言う理由は、あまりにも短絡的。
しかし何故か、秋斗にはその瞬間、〝ソレ〟を見過ごしてはいけないという謎の直感が働いた。
熱が下がって早々に、秋斗はその予感を確かめるべく行動を開始した。そして程なくして、秋斗は今生が『インフィニット・ストラトス』という物語世界であるという大きな要因を見つけてしまった。
織斑家の後見人――その人物の名前が〝篠ノ之柳韻〟で、彼の娘の名前が〝篠ノ之箒〟だった。

それは件（インフィニット・ストラトス）の物語で主人公〝織斑一夏〟のヒロインと同じ名前だった。

兄として目の前に〝主人公〟が居て、その近くにヒロインまで揃っているという現実を目の当たりにした秋斗の動揺は大きく、その衝撃を受け入れるのに丸一日を要した程。

そして己が物語の世界に存在し、今の身内が登場人物の中でも最上位に位置する重要な存在である事を実感した時、秋斗は己の立ち位置が主人公の〝双子の弟〟と言う、ありふれた二次創作設定そのものである事を理解した。

そんな『真理』に辿り付いてしまった秋斗は、目の前にある現実を半ば本気で夢だと思った。

しかし数日を経ても現実は変わらずそこにあり、秋斗は次々と身近で発覚する驚愕の事実を前に強い疲労感を覚えていた。

「――――まさかもう一回〝ランドセル〟なんてモンを背負うハメになるとはな」

あくる日の朝。

まだ真新しいランドセルを背負って、秋斗は家を出発した。

この時の秋斗は6歳だった。そして双子の兄の一夏も同様に、織斑兄弟の2人は今年から小学校に通い始めたばかりのピカピカの一年生だ。

前世の記憶を取り戻す以前は当たり前だった光景が、今ではすっかり不自然に感じてしまう違和感。

そんな憂鬱な気分に苛まれながら、秋斗は一夏と一緒に学校へ赴く道中、ずっと顔を伏せていた。

「なぁ、秋斗。さっきから難しい顔してどうした？　まだどっか調子悪いのか？」

そんな秋斗（弟）の只ならぬ様子に気づいた一夏が、心配そうな面持ちで尋ねた。

「いや、別に何でもねェよ。気にしなくて大丈夫だ」

「そうか？　ならいいけど、病み上がりなんだから無理すんなよ？　具合が悪くなったら直ぐに俺とか先生に言うんだぞ？」

「あぁ、判ってるよ。大丈夫。ありがとよ、一夏」
心配そうに顔を見せる一夏に対して、秋斗は平静を取り繕った顔で応えた。
内心では現実に対する盛大な溜息を吐き、未だ続く現状への強い混乱と強い不安を感じていた。しかしそれらを一切見せる事はなく、秋斗は一つ溜息を吐いて顔を上げた。
一夏はそんな秋斗の返事を聞いて、それ以上の追及はしなかった。
それ以降、学校に赴く途中の兄弟の間に会話らしい会話は無かった。
しかしその静寂は今の秋斗にはとてもありがたいものだった。
（織斑一夏、か――――）
秋斗はふと、半歩前を歩く今生の兄の顔を見る。
原作を知っている立場として当初秋斗は、〝織斑一夏〟という人物に対して余り良い印象を抱けなかった。
先入観で人を推し量るのは良くないのは百も承知だが、しかし原作一夏の印象から、秋斗は一時期、心のどこかで一夏の事を避けていた。
言う事は立派だが、行動が伴わない。八方美人故に直ぐにフラグを立てるくせに、釣った魚に餌をやらないを地でいく朴念仁。
そんな悪いイメージがあった点も含めて、秋斗はかつて物語の登場人物として認識していた今の家族らと、改めてどう接するべきかと悩んでいた。
――――しかし振り返ってみれば、その懸念も最初の頃だけだったというのが今の感想である。
家族として寝食を共にして見ると、秋斗の中で一夏の評価は大きく変わった。
「――――あ、そうだ。柳韻先生には俺から言っとくからさ。今日は道場休んどけよ？」
「ぁん？」
無言だった道中で、一夏はふいに思い出したように言った。
姉の千冬が毎日のバイトで帰宅が遅い為、一夏と秋斗は学校が終った後、いつも後見人の篠ノ之柳韻の剣術道場に通っている。それは面

倒を見てもらっているというより、真面目な習い事に近い習慣なので、一夏は先の体調不良を考慮して、秋斗にその稽古を休むよう提案した。

一夏の提案を聞いた秋斗は、素直にそれに同意した。

「……意外だな。いつもなら休むの嫌がるのに？」

「流石に病み上がりで派手に運動したくはねぇからさ」

「そっか」

素直に同意した秋斗を見て一夏は意外そうな声を上げる。

そんな一夏を見て、秋斗は「確かに以前までの秋斗ならありえない返事だ」と、小さく自嘲を浮かべた。

千冬も含めると、織斑家の三姉弟は全員が篠ノ之柳韻の剣の弟子だった。

その実力は千冬がダントツで、次に一夏。そして越えられない壁の向こう側に秋斗という順で兄弟の実力が並んでいた。

秋斗が前世の記憶を取り戻す以前の状態なら、少しでも鍛錬を休む事に強い抵抗があった。

決して口には出さなかったが、以前までの秋斗には確かな形で姉兄の剣才に対する強いコンプレックスが存在していたからだ。

――しかし今となっては、そんなコンプレックスなど秋斗の中にはもはや存在しない。

「じゃあ、俺は先に行くぜ。秋斗も変に無理すんなよ？」

「はいはい。また放課後な」

「おう！」

学校の門を潜ったところで、一夏は励ますように秋斗の肩を叩き、グラウンドに集まっている学友達の方に駆けて行った。

秋斗は叩かれた肩に鈍い刺激を感じながら、その背中を見送って小さく吐息を吐く。

家族として一緒に生活をはじめて見ると、一夏という少年の非常に家族思いの心優しい性格を幾つも知った。

織斑家の状況は俯瞰して見るとかなり特殊で、一夏はそんな状況を小学生なりにも察し、バイトと学業を両立させながら一家を養う長女

――千冬の手を煩わせまいと、進んで家事の大部分を請け負っていた。

加えて今朝も朝早くに家を出た千冬を見送った後、一夏は頼んでも居ないのに態々秋斗（弟）の為に手の込んだ粥を用意した程。

「――――男兄弟なんて、喧嘩して何ぼのもんだと思ってたんだがな」

現実として実感する形で、秋斗は一夏の家族に対する献身を本物だと知った。

そして物語の中で強く描かれなかった部分を身近で感じた結果、秋斗は一夏の優しさを素直に評価し、心の中で少しだけ尊敬した。

同時に原作知識という先入観で推し量り、心のどこかで忌諱する様な対応をした事を、酷く情けないと反省した。

秋斗は既に、一夏を含めた〝織斑家〟そのものに対して、不満の吐息を漏らす事は無い。

湧き上がる溜息のほとんどは、大抵が目の前の現実に対してのモノばかりだ。

「……さて、俺も行くか。ったく何年ぶりだ？　小学校なんて――――」

家の中だけなら兎も角、これから小学生として生きなければならない現実を前に、秋斗は改めて深く溜息を吐く。

一夏と別れた秋斗は、そのまま真っ直ぐ己の在籍する1年3組の教室に向った。

蘇った前世の記憶は、それまでの秋斗の人生に大きく上乗せされるようにして、精神に染み込んでいる故、目覚める以前の記憶や交遊関係を失う事は無かった。

が、しかし大きく上乗せされた精神の加齢がある分、秋斗はどうしても以前までの級友らと、〝対等の視線〟ではいることが出来なくなっていた。

加えて数年ぶりの様な真新しい感覚を伴う新しい学校生活は、常に手探りの過酷さで秋斗に乗しかかる。

子供らしい〝若さ〟を無理やり演技し、『らしくない』という強い自己嫌悪に苛まれながらの一日が始まるチャイムを聞いて、秋斗はまた

しても憂鬱な吐息を吐いた。

☆

一月が経った。

途中から馬鹿らしくてやってられないと開き直った秋斗は、口調からして子供っぽくするのを止めて、普段の粗忽な言葉遣いに変えた。

この一ヶ月を通して、演じながら生きるのは辛いという結論に達したからだ。

秋斗は手探りながらも、この現世で生きて行く為の努力を不器用ながらも積んで過ごした。

前世で一通りの学歴は収めている、故に今更、小学生の授業に遅れはとらないならと、これから〝先〟を見越して予習復習がてら中学高校の参考書を読んでみたり、逆に周囲に〝神童〟と騒がれるのを避け、常に実力や学力の全力をセーブした行動を意識した。

どうしても無邪気さと無縁の老成した精神の影響で、級友と遊びに付き合う事が難しいと判断した時は、大人しくその輪から外れて一人で過ごす様にも気を使った。

以前に比べると秋斗の評価は、かなり変化したと言えるだろう。担任曰く、『誰とでも仲良く出来るが、基本的には独りで居る事を好む少し変わった性格の子供』。それがこの一ヶ月で積み上げた秋斗の評価だった。

無駄に良い子を演じる気もなく、あえて悪辣に生きる気も無い。明らかに友人の数が減ったが、気疲れする付き合いならば無理に続ける気も無い為、惜しいとも思わない。

前世の記憶を取り戻す以前と、現在を見比べた秋斗は、「まぁ、こんなもんだろう……」と、今日までの変化とその評価を肯定的に受け止めた。

自分がどこか〝変〟なのは、百も承知。故に、多少の事はある意味個性だと、秋斗は開き直る事にした。

――――そんな紆余曲折を経た秋斗がようやくこの現実に慣れた頃だった。

秋斗は偶然にも、〝織斑家〟の筆舌にし難い過酷な状況を知る事に

なった。

「――――11時か……」

隣の布団で一夏が寝静まった夜。

秋斗はスタンドライトの明かりで本を読みつつ、こっそりと姉――千冬の帰宅を待っていた。

時刻は午後11時過ぎ、直に日付が変わるという時間になってからようやく、千冬は帰宅した。

帰宅後の千冬は勤労帰り特有の強い疲労感を纏った煤けた出で立ちであった。

千冬は帰宅したその足で疲れた身体をズルズルと引き摺って歩くと、寝巻きに着替える事すらも端折り、一目散に布団に突っ伏して寝入った。――――そしてそれから4時間程経った後で、再び眠りから目覚めた。

疲れと汚れをシャワーで強引に洗い流した千冬は、まだ日も昇らぬ朝早くに家を出発する。そして朝の7時前になってから、何事も無かったかのように帰宅して、一夏の作った朝食をとってから学校に向った。部活をやっていない為、その帰宅は夕方頃になる。しかし学校から一度帰宅するなり、千冬は私服に着替えて再び出かけては、また夜の11時過ぎに帰ってくるまでバイトをする。

そんな生活スタイルが、秋斗の発見した千冬の毎日だった。

秋斗がそんな無茶苦茶な千冬の生活リズムに気づいたのは、本当に偶然だった。

前世の記憶に目覚めた影響で小学生の生活リズムに身体が慣れず、たまたま本を読んで夜更かしをした時に気づいたのだ。

もしもその時に秋斗が気づかなければ、千冬が倒れた後で織斑家の過酷さを兄弟は知る事になっただろう。

「……こんな無茶続けてたら、死んじまうぞ?」

深夜。

何時ものように帰宅し、そのまま一目散に布団に突っ伏して寝入った千冬に向って、秋斗は小声で言葉を投げた。

深い眠りに堕ちた千冬には、その言葉が届く事は無い。しかし泥の

ように眠るという比喩が本当に在るのだと知った秋斗は、日に日に状況に対して強い危機感を抱いていた。

織斑家には両親がいない。家に居るのは千冬と一夏と秋斗の3人のみで、故に千冬が、たった一人の稼ぎで織斑家の財政を支えている。

両親が蒸発した理由については、一夏も秋斗も詳しくは覚えておらず、千冬に聞いても話したくないと言う態度を見せる為、今となっては知る事は適わない。秋斗自身も、当初は親が居ない理由を〝余所の家の事情〟だとして深くは詮索しなかった。が、しかし今思えば、その考えがどれ程に冷淡で、楽観的で、軽薄だったか？

秋斗は身を削りながら毎日働き、疲れを押し殺して生き急ぐ千冬を見た瞬間、家庭の事情を他人事として捕らえていた自分を、情けないと嫌悪した。

仮にも前世の記憶で、それなりに社会を経験した過去を持つ身である故に、この家で秋斗だけは、大黒柱としてたった一人で家族を養おうとする千冬の過酷さを理解出来た。

ならば、もはや無関心で居る事こそが罪――そんな風に感じた秋斗は、遂に〝子供〟として無関心で居る事に決別を選んだ。

翌日の深夜――。

意を決した秋斗は、千冬が帰宅するのを待った。

昨日と同じく疲れ果てた様子で帰宅した千冬に、秋斗は言った。

「姉貴。気持ちは分かるけど、いつか死んじまうぞ？」

「……なんだ、まだ起きてたのか？　早く寝ろ。明日も学校があるだろう」

千冬は疲れの所為か、何時もより低い声で少し機嫌が悪そうに返す。

秋斗はそれを意図的に無視して、更に言葉を続けた。

「それは姉貴も同じだろうが。……って、冗談言ってる場合じゃなくて、こんな生活続けてたらマジで死んじまうぞ？　だから――」

「――子供は気にしなくて良い！」

千冬は表情を曇らせると、秋斗の言葉にそうぴしゃりと被せた。

前世の記憶を加味した秋斗の視点で見れば、千冬も十分に子供だっ

た。

両親が蒸発した理由を『捨てられた』と考えるなら、それが意地に繋がっている気持ちも分からなくは無い。しかしそれでも他ならぬ秋斗だけは、〝それ〟を言う必要があった。

その場を去ろうとする千冬を呼び止めた秋斗は言った。

「――――恨んだりしないから俺を児童養護施設に預けてくれ」

「っ!?」

千冬は振り返り、驚愕を貼り付けた顔で秋斗を睨んだ。

「お前――――」

千冬は反射的に右手を振り上げた。

しかし振り抜かれる事は無く、千冬は酷く打ちひしがれた様子でゆっくり手を下ろす。

秋斗はそんな千冬を正面から見据える。

「……死んだら終わりだぞ？　意地張ったまま、姉貴は先に逝くのか？」

「そんなわけないだろう！　私は――――」

「んな、ズタボロになっててよく言うぜ。一夏だって気づいてんだぞ！」

「っ!?　……一夏もなのか？」

一夏の件に関しては秋斗のハッタリだった。しかし今の段階では気づいているか不明でも、後に確実に気づくという予感があった。

その根拠は『原作ではそうだった』という荒唐無稽な理屈だが、それ故に『確実』だと秋斗は確信を持っている。

――――そして〝原作〟という存在を意識した時、秋斗はこの問題における最大の原因に気づいてしまった。

だからこそ秋斗は意を決し、この問題は他ならぬ己が言わなければならないと強く感じてしまった。

「……姉貴、もう一回言うぞ。恨まないから、俺を手放してくれ」

「――――っ！」

秋斗は千冬の眼を見据えて正面から言った。

千冬の過酷な現状の要因が、他ならぬ秋斗というイレギュラー要素

の存在にあったが故に――――。
　原作のインフィニット・ストラトスは、あくまでも千冬が一夏という弟を一人養う事で生まれた物語。
　そうである以上、現状を作り出した一番の要因は、他ならぬ〝織斑秋斗〟というイレギュラー要素の所為。
　故に秋斗は、己と言うイレギュラーの身を切る事を一切、厭わなかった。そしてそうする事が、もっとも確実に現状を救える方法だと察してしまった。
「……っ……私は頼りないか？」
「別にそうは言ってないだろ。それに、俺は姉貴ほど頼りになる奴を他に知らんよ」
「――――だったら！」
「だけど実際問題、意地張ってどうにかなる話でも無いだろ？」
　秋斗は淡々と言った。
　寧ろ、淡々と、としか言えなかった。
　前世の記憶と老成した人格の所為か、秋斗の心には織斑家に対するどこか他人事の様な冷淡な気持ちと、他人に対するような強い気遣いの気持ちが共存していたからだ。
　子供である事にも織斑である事にも強い執着が無く、そのどれもを捨てる事に戸惑いが薄い。
　幾ら肉体がそうだとは言え、もはや中身が違う。
　秋斗が暗にソレを訴えるような決別の言葉を放つと、千冬は顔を俯かせながら拳を握りこんだ。
　千冬は眼を潤ませながら言った。
「――――私は秋斗と一夏が居るから立っていられるんだ。……もう家族が消えるのは私には耐えられない。だから、だから秋斗……出て行くなんて言わないでくれ！」
「っ!?」
　千冬は痛いほどの力で秋斗の肩を掴み、掻き抱く様に秋斗の身体を捕まえるとそのまま嗚咽を漏らした。
　今度は秋斗の方が驚く番だった。

秋斗は千冬の豹変に驚きながら、どこか冷静な頭でその理由を察した。

（……そういえば、まだ16歳だったか）

秋斗はこの時になって、またしても忘れていた事実に気づいた。

原作では強い女性の代名詞として描かれている織斑千冬だが、彼女は現時点ではまだ、16歳の小娘に過ぎなかったのだ。故に、いくら後の世でブリュンヒルデと呼ばれても、まだ年相応に心は脆く、そして決して孤高の強い存在ではなかった。

秋斗は小さくなった小学生の身体で千冬を抱きとめながら、不器用な手つきであやした。

「俺は姉貴に死んで欲しくねェだけだ。今、無理して意地張るより、後々余裕をもって〝家族〟で暮らせるように、今出来る事を考えようって言ってるんだ。そういう言い方だったら、伝わるか？」

「……わからん」

「……姉貴」

「……嫌だ」

「……はぁ」

精神的に加齢した分を含めれば、秋斗の精神は千冬よりも年上になる。故に根気強く言い聞かせようと秋斗は、幾度と無く言葉を変えて言った。

しかし千冬に幾ら提案を繰り返しても、千冬は嗚咽を上げたまま頑なに首を横に振り、断固としてそれに反対の意を示し続けた。

千冬が落ち着くまでに10分以上の時間が掛かった。

秋斗は千冬に抱きすくめられたまま頭を悩ませた。

泣かれてしまった事も含めて、例え最善だとしてもこれ以上提案を強いたところで、何も変わる気がしなかったからだ。

存在を確かめるように抱きしめてくる千冬の腕の中で、秋斗は思った。

（……俺のツケは、俺が払うしかねェか）

原作のインフィニット・ストラトスという物語が始まるのは、一夏が高校生となった時。

つまり物語が始まる以前の生活は、どう転んでもその日に行き着くと考えられる。

だがそれに至るまでの道筋が秋斗というイレギュラーの所為で捻じ曲がり、決して安寧でない以上、秋斗には物語の傍観者として無為に時間を過ごす事が許されなくなった。

己と言うイレギュラー要素が、本来あるべき姿の物語を捻じ曲げたのならば、原作の前に崩壊しかねない織斑家の救済が己に架せられた責務。前世の記憶と原作知識を使っても、この困難に立ち向かう事が織斑秋斗（イレギュラー）の存在する意義だと、秋斗は舌打ち交じりに腹を決めた。

（――――判った。判ったよ。俺が織斑家を立て直せばいいんだな？）

この世に神様とやらが存在するなら「こんな試練を与えてくれた事を強く呪おう」と、その夜、織斑秋斗は決意した。

原作にたどり着く為の、織斑秋斗の物語が始まった。

02　神戸牛の味

一先ず、織斑家の状況を再確認しよう。
まず〝金が無い〟。
次に〝暇が無い〟。
そして最後に〝ヤバい〟。
『貧乏暇無し』とはよく言ったものである。
一家の大黒柱である千冬が懸命に働いてはいるものの、それでも家計は正に、火の車であった。
千冬はまだ高校生。故に勤労に割ける時間も少なく、また時給も安い為、織斑家には貯金と言う名の資産を作る余裕すらもなかった。
また2人の弟――秋斗か一夏の内、そのどちらかが働きに出られる年齢ならば少しは変わったが、現実は非情な事に、2人ともまだ小学一年生でしかない。
故に秋斗はこれらのハンデを抱えた上で、何とか原作ストーリーが始まる時期までの間、自身を含めた織斑家の3人を生存させる事が要求された。
（――――ぶっちゃけコレ……。ほとんど詰んでるような気がするぜ）
小学校の算数の時間。前世の教養と言うある種のチートのお陰で、秋斗は現時点の授業ならばまともに聞かずとも何とかなった。
なので秋斗は授業よりも優先して、現状の織斑家に適した迅速な財政再建プランの立案に頭を悩ませていた。
（一番確実な手段は、俺が児童施設に行く事なんだが――――）
最初に秋斗が考えた計画は、織斑家の状況を原作と同じ形の『姉弟の二人暮らし』にする事であった。
それが現時点で取れる対策として一番手っ取り早く、また同時に確実な形で損耗を減らせる解だと秋斗は思っていた。
しかし先日、それを千冬に提案した際、肝心の千冬に盛大に泣かれてしまった為、秋斗はその案を廃棄せざるを得なかった。
（まぁ、今になって思うが……一夏の性格からして俺が一人で身を切

ると言うのは、絶対に良しとはしないだろうな）

千冬の負担を減らす為に秋斗が独りで児童養護施設に行くとすれば、恐らくそこに一夏もついて来る可能性が高い。

秋斗は不意にその可能性が脳裏を過ぎるのを感じて、小さく苦笑した。

弟2人が同時に手元から去れば、流石に今度は千冬の方が精神が折れかねない。なのでやはり、直接的な口減らし案は廃棄する方が良いだろう。

となると、一家3人揃った上で『生活の基盤を磐石なモノにする』案が要求される。

（……マジでどうしたもんかねェ）

前世の喫煙習慣の所為か、秋斗は思わず鉛筆を口に銜えた。

（とりあえず千冬の姉貴が過労で倒れる前に不労所得で稼ぎ口を作るのが先決だな。こういう時こそ生活保護だが……後見人の居る未成年の家庭って保護を貰えるのか？　……手っ取り早く俺が〝内職〟でもやるって手も無い事は無いが――――）

秋斗が前世に行なった幾つかの内職。その中でも一番堅実に稼げる方法として、秋斗はラインスタンプ、エロ漫画、エロイラスト集のネット販売を脳裏に浮かべた。

肉体の年齢に眼を瞑れば、精神的には十分に老成している秋斗が、今更エロ関係を製作する事に抵抗など存在しない。

もとより前世では、ソレを生業の一つにしていた為、条件さえ揃えれば、今生でも小遣い稼ぎの同人レベルならば、やってやれない事は無かった。

しかし実行するには前提として、ある程度のネット環境と最低限の機材が必要になる。

金を稼ぐにせよ何にせよ、新しい事をはじめる際にはまず〝呼び水〟として、ある程度の纏まった額の支度金が必要なるのだ。

（流石に今の俺が銀行から金借りるってのは無理があるし、小学生の保証人になる奴なんているわけがねェ……。兎にも角にも、ある程度の元手が欲しい……）

金を稼ぐにはそれなりの元手が必要になる。
それはものづくりでも販売でもギャンブルにしても同じ。
問題は金を稼ぐ為の支度金をどう工面するかに尽きる。
とりあえず最低２０万。出来れば５０万の単位で、秋斗は資金を欲した。
「ん～、難しい」
「――――こら！　織斑君、授業に集中しなさい」
支度金を用意する手段に頭を悩ませる秋斗に、クラス担任の林から叱責が飛んだ。
「……っ!?　……すいません」
「ぼ～っとしてたらダメですよ？　幼稚園じゃないんですから。それとついでに６ページの問３に答えてくれますか？」
「……あ、はい」
秋斗は教師に指示された教科書の１６ページを開いた。
問３
Ａの果物屋さんで５０円のリンゴを４つ買いましたが、帰宅途中でＢのスーパーで４５円のリンゴが売られていました。
Ｂの店でリンゴを４つ買っていた場合、幾ら得をしたでしょう？
その問題を見た瞬間。
秋斗は天啓を得た様に支度金を用意する算段を思いついた。
「――――なぁ、一夏。お前、今幾ら持ってる？」
「は？」
放課後。秋斗は家路を共にする一夏にふと尋ねた。
「幾らって、いきなりなんだよ？　何か欲しいモノでもあるのか？」
「あるにはある。だがその為に一夏にちょいと協力して欲しいんだ」
「……なんだよ、藪から棒に？」
訝しがる一夏に、秋斗は算数の時間に閃いた『計画』を歩きながら話してきかせた。
「――――秋斗……お前よくそんな事思いついたな？　なんて言うか、スゲーな！」
「……だろ？」

秋斗から計画を聞かされた一夏は、素直に感心したと言う表情を浮かべる。
そんな兄からの賞賛に対し、秋斗はどこか悪辣に見える笑みを浮かべた。
「これでも色々考えて生きてるからな。まぁ、それは置いておくとして、だ。……一夏も薄々気づいてると思うが、姉貴の奴、毎日くたばりそうな勢いで身を削って働いてるだろ？　で、俺はそいつを手助けしたい。だがその為には俺一人の力じゃ無理だ。だから一夏に相談した。……どうだ、手伝うか？」
「そんな風に言わなくても手伝うよ。で、俺は何をすればいいんだ？」
「なに、そう構えなくても難しい事じゃない」
「え？」
秋斗は具体的な行動の仔細を一夏に話す。
計画の具体的な形を聞くにつれて、一夏の表情は真剣なモノに変わった。
流石主人公といった所か、その顔は小学生ながらも十分が風格のある様に見える。
「――と、こんな感じだ。最終的な部分で〝運〟の要素が絡むから、最後は祈るしかねェ。それに骨折り損になる可能性も高いが――」
「秋斗がそこまで言うって事なら、俺は秋斗を信じるぜ。それに俺って、実は結構クジ運良いんだぜ？」
「……知ってるよ。だから頼ってんだよ」
一夏は一切悩む様子を見せず、一応忠告として失敗する可能性を指した秋斗に、頼れと言わんばかりの力強い笑みを浮かべた。
流石主人公とでも言うべきか、一夏は時折、謎の運のよさを発揮する事が度々ある。
故に秋斗は、一夏のそれを頼りにするつもりだった。
千冬の名前を持ち出せば一夏が協力を断らない事は十分に予想できたが、それでもこれ程までに、弟の頼みに協力的な姿勢を見せる兄は他に居ないだろう。

（……なんか、純粋すぎて騙してるみたいな妙な罪悪感があるな。別に騙しちゃいないんだけども）

見た目だけなら一夏も秋斗も小学生。

しかし秋斗の内面は、十分に成人と言ってもいい。

誘い込むようにして幼い一夏を誘導するような形で無理やり協力させた己の手腕に、秋斗は「薄汚れているなぁ」と小さく自嘲を浮かべた。

「――――で、俺はとりあえず〝柳韻先生〟の所に行けばいいんだな？」

「あぁ、時間は掛かると思うが頼む。俺も後でそっちに合流するからよ。……頼りにしてるぜ？」

「任せろ！　それじゃ、早速行動開始といこうぜ！」

「あいよ」

やるべき事を決めた後、２人は競うように帰路について各々の行動を開始した。

――――そして二週間が経った。

ｐｒｐｒｐｒｐｒ♪

自宅の電話が鳴った直後。秋斗は飛ぶようにして受話器にかじりついた。

同様に一夏も台所から電話口に駆け寄った。

「――――もしもし？」

『どうも、織斑秋斗様ですか？』

「はい、そうですが？」

『……ご当選おめでとうございます！』

「っ!?」

待ち望んだ言葉を受けた秋斗は思わず拳を握り込んだ。そして一夏にどこか悪辣な笑みと一緒に、サムズアップして見せた。

一夏もそれで作戦成功を察して、秋斗の隣で大きく両腕を振り上げた。

「――――ただいま」

「お帰り、千冬姉ぇ！　すげーぜ！　秋斗の奴、マジでスゲーんだぜ

！」

「おいおい、どうしたんだ一夏？　少し落ち着け――――」

「これが落ち着いていられるかよ！　神戸牛だぜ！　神戸牛！　千冬姉、神戸牛って見たことあるか!?」

「……はぁ？」

夕方になり、千冬が学校から帰宅した。

千冬は意気込み過ぎの競走馬の様に強く興奮した一夏の出迎えを受けて、心底困惑した様子を表情に浮かべた。

詳しい話を聞こうとする千冬は、思わず秋斗に対して視線を向けた。

「秋斗、一夏の奴は一体どうしたんだ？　何が何やら――――」

「まぁ、見れば判るさ。……一夏、出してやんなよ」

「おうとも！」

秋斗の合図で、一夏は冷蔵庫からトレイに乗せた大きな霜降り肉を取り出して見せた。

そして肉を恭しく千冬に手渡した。

それはキメの細かい霜の降りた極上の牛肉だった。

千冬は受け取った高級食材を見て、普段の落ち着いた表情を秋斗も見た事の無い程の驚愕に変えた。

「ど、どうしたんだこんな肉……一体、何処で――――いや、どうやって!?」

一家を養う為に身を粉にして働く千冬が、その肉の価値に気づかないはずが無かった。

探るようにして睨む千冬に、秋斗は苦笑混じりに事の顛末を説明した。

「俺と一夏の2人で、片っ端から〝懸賞はがき〟を送ったんだよ。肉はその結果。――――ま、俺としちゃハズレなんだけど」

「懸賞？　はがきを送るにしても、それを買う金なんてどこから――――」

「んなもん、俺達の小遣いに決まってんだろ？　後はまぁ、柳韻先生の所で手伝いをやって、代わりに不要な〝お年玉切手シート〟を貰っ

て、それを使ったんだ」
「俺達、まだ働けないだろ？　でも何とか千冬姉の助けになりたくてさ。ちなみにこの計画は全部秋斗が一人で考えたんだぜ？　俺は考えに乗っかっただけだけど……」
「お前達――――」
千冬は肉を乗せたトレイを手にしたまま、顔を俯かせて肩を震わせた。
切っ掛けは算数の教書にあった応用問題だ。
金が無いなら、物を〝売って〟作れば良いという、それは実に単純な発想だった。
しかし売るにしても、それなりに価値があって尚且つ不要な代物でなければならない。
秋斗はそこから〝懸賞はがきの景品〟に着目し、それを転売する事を思いついた。
はがきを送るだけなら小学生でも出来るし、その上、懸賞の当たり品がそれなりに高価ならば、売れば確実にはがき一枚分よりも儲けが出せる。売る為に大人の同伴こそ必要だが、そのくらいの頼みを引き受けてくれる大人の知り合いは周囲に腐るほど居る。後見人の篠ノ之柳韻と、その道場に通う大人達だ。
更に言えば、懸賞に送るはがき買うのにもそれなりの金が掛かる為、それを補う手段としても篠ノ之柳韻が非常に頼りになった。
篠ノ之道場は多数の門下生を抱えており、柳韻自身も古風な人物。故に御中元お歳暮の文化も大切にするし、〝年賀はがき〟は毎年莫大な量が来るのは予想できた。
そしてその予想は見事に的中し、篠ノ之道場には使う予定の無い大量の〝お年玉切手シート〟が存在した為、秋斗は一夏と協力して、篠ノ之道場の掃除や雑事を手伝い、その対価として不要な切手シートを譲り受けたのだ。
「――――後一ヶ月遅かったら、切手シートの引き換えは出来なかったけどな。まぁ、あれだ。思い立ったら吉日っていうのか？　まさにそんな感じだったな」

「いや、ほんと秋斗はマジでスゲーよ！」
「わかったから、落ち着けよ一夏……（一番スゲーのはお前なんだからよ）」
秋斗は一つの結果として神戸牛を手に入れた経緯を話して聞かせた。
我ながら計画と言っておきながらも、随分と運否天賦に頼った皮算用だらけのザル計画だと、秋斗は自嘲する。
しかも一夏の持つ主人公補正と言うか、運命力というべき謎の運の良さを頼った計画だ。
計画を作ったのは秋斗だが、実際の所、成功に漕ぎ付けさせたのは一夏の運。神戸牛を当てたのは一夏の送ったはがきなのだ。
ソレを思うと、秋斗は手放しで賞賛してくれる一夏こそ、一番賞賛されるべきだと思った。
が、説明するにしてもその凄さは〝自覚させると消える〟と言うある種の予感があり、秋斗はむず痒い気持ちになる。
「……すまない」
「ぁん？」
千冬は唐突に謝罪の言葉を零した。
秋斗の思考と一夏の興奮は、それによって唐突に遮られた。
「千冬姉？」
「……どうした？」
「……っ！」
不意に秋斗と一夏は、肩を震わせて静かに泣きだした千冬に強く抱きしめられた。
「……すまない！　不甲斐ない姉で――――」
「気にすんなよ千冬姉。だって俺達家族だろ？　千冬姉一人に無理させるわけには行かないじゃないか？」
「……あぁ。すまん……ありがとう！」
泣きながら零される謝罪の言葉に一夏は優しげな笑みを零す。
（……後の世界最強は意外に泣き虫なのな）
秋斗は姉の涙をあえて見ないようにするのが出来る弟なりの優し

さだと小さく苦笑を漏らした。
その日の夕食は実に豪華な仕上がりとなった。
織斑家で一番料理が得意なのは原作通り一夏である。
故に当然、この日のメインディッシュの調理には一夏が名乗りを上げた。――――その様はまるで関羽のようであった。
ちなみにその際に行なわれた織斑家会議で、篠ノ之家に肉の一部をお礼としてお裾分けする事が決まる。
料理番組で培った技術を発揮した一夏の手により、この日の夕食は神戸牛のステーキとなった。
それを一家3人で切り分けて食した。
「……美味いな」
「あぁ。って、いうか神戸牛ってのはこういう味なのな。初めて喰ったからほかと比べてどう美味いのか説明出来ねェな」
「なぁなぁ、秋斗。やっぱり時計とか狙うより食材狙おうぜ？　絶っ対、そっちのほうが良いって！」
三者三様のコメントを残し、織斑家一同は初めての高級食材に舌鼓を打つ。それは秋斗にしても初めて食べる肉であった。
「食って終わりの食材より、元手を作ってその資金を増やすのが先。まずは姉貴の稼ぎ以外での収入源を確保して、貯金と〝ゆとり〟を作る、だな。一夏には悪いけど、食卓に彩を添えるのは少し待ってくれや？」
この調子では一夏は食材狙いで懸賞を送りかねないので、秋斗は苦笑交じりに釘を刺した。
「……秋斗の言い回しはわかりづれーよ。もう少し簡単に言ってくれ」
「と、いうか秋斗。そもそもお前、どこでそんな知恵を拾ってきた？それに高熱を出して以来だが……その、なんと言うか少し〝雰囲気〟が変わったか？」
「ん？　そう見えるか？」
穏やかな食事が続く途中で、千冬はふと、訝しげな表情を浮かべた。
一夏もまた千冬の言わんとする所を察したのか、興味深そうな視線

を秋斗に向けた。
その質問は何れ来るだろうなと、秋斗は半ば予想していた。
しかし、〝今〟来るかと、小さく苦笑を漏らす。
秋斗は内心でどのように説明するかを思案する。
「――――変わったって言うか、ちょっとそろそろ本気出そうと思ってな。いつまでも兄貴や姉貴の後ろをついて歩くのも情けないだろ？　だからまぁ、少し意識してみたんだが、姉貴達は前の俺の方が好きかい？」
秋斗は逆に質問を投げた。
具体的な説明をするより、拘る必要の無い小事としてサラリと流す方が良いと思ったからだ。
千冬は少し思案の表情を浮かべ、ふっと小さく笑みを浮かべる。
「……いや、どちらかと言えば今の方が好みだな。以前のお前は私や一夏に手を引っ張ってもらう頼りない奴だった。それに比べると、今の方が確かに頼りになるな」
「俺も別に悪い感じじゃないと思うし、良いと思うぜ？　そのイメチェンもありだと思う。それにやっぱ、千冬姉と同じでなんか頼もしくなったと思ったし」
「……そっか」
千冬の一夏の感想を聞いて、秋斗も笑みを浮かべた。
前世の記憶に目覚める以前の自分――そのズレは確かに存在し、そして誤魔化しようが無い。
しかし前世も今もどちらも同じ秋斗であり、どちらの記憶も己のモノで、本物なのだ。
以前の〝織斑秋斗〟という人格を、今の自分が消去してしまったわけではないが、流石に自分でも感じる様な急激な変化が己の身に起こった。それを最も身近に居る織斑家の2人が、どう思うのかだけが、秋斗には少し心配だった。
しかし2人の答えを聞いて秋斗は安堵した。
「――――なら、問題ない。しばらくこの路線でいかせて貰うわ」
「しばらくって、お前またイメチェンする気かよ？」

「どうだかな。……まぁ、よほどの事があればまたキャラ変更するかもな？　でも多分、死ぬまでこのまんまかもしれないとだけ言っとく」

「おいおい、なんなんだそれは？」

苦笑する一夏と千冬に冗談めかした言葉を送り、秋斗は癖になったどこか悪辣に見える小さな笑みを浮かべた。

一家は夕食を終えた後、『はじめて神戸牛を食った記念』として、３人で一枚の写真を撮った。

０３　プレゼントＤＡＹ

時の流れは意外に早い。
特に年を重ねた者ほどそう思う。
そして精神的には十分に年を重ねている秋斗も、その例に漏れなかった。
秋斗が織斑家の財政を立て直す為に最初の策として毎月の小遣いを使って懸賞はがきを送り始めてから約半年。
季節は夏を過ぎて秋となり、そして冬になった。
世間ではクリスマスシーズンと呼ばれる時期で、イルミネーションの輝く街の雑踏を、親子連れや恋人達が楽しそうに歩き始める頃だ。
友達や家族と楽しく過ごしたクリスマスの経験はあれど、未だ秋斗には、恋人と甘いクリスマスを過ごした経験がなかった。
そんな男一人の寂しいシングルベルを幾度も過ごした前世の記憶が不意に蘇る。
秋斗はふと、「流石に今生では、一回ぐらいリア充やってみたいぜ……」と密かに思った。
「――――なぁ、俺の人生のメインヒロインって何処に居ると思う？」
「は？　メンヘラ？　いきなりどうしたんだよ、秋斗？」
「……俺が言うのも何だけど、お前（一夏）はその難聴を意識して治した方が良いぜ？　割と本気で忠告しとく」
「……はぁ？」
終業式を終えた後、一夏と秋斗は一緒に帰路に着いた。
秋斗が何気なく口走った〝メインヒロイン〟と言う単語を、一夏は何故か〝メンヘラ〟と聞き取った。
そんな一夏の難聴ぶりに秋斗は、既に将来『朴念仁』と化す十分な素養が備わっていると思った。
恐らく今後、一夏には恐らく原作通りの男達が血涙を流して羨ましがるような青春が約束されている。それを身内として間近で見せられ、もしも己が灰色の青春を送る事になった場合、もしかすれば秋斗は己が修羅に堕ちるかもと少し不安になった。

ちなみに原作で言う一夏のヒロインにあたる篠ノ之箒だが、実はこの時点で既にその姿を何度か目撃していた。

織斑家の後見人である篠ノ之柳韻の娘――篠ノ之箒は、秋斗や一夏と同様に、柳韻の開いている道場で剣の修行に励んでいるからだ。

柳韻の門下生に限らず、所謂『習い事の場』と言うのは、基本的に同好の志や同郷の者が集まる事が多い。

故に必然的に年齢に関係ない交流が生まれ易い。

しかし篠ノ之箒は誰に声を掛けられても素っ気無い態度で返事を返す事で有名だった。

何時も独りで黙々と剣を振っているのが印象的で、一夏はそんな箒とは学校で同じクラスに在籍している為、幾度か「一緒に鍛錬しないか？」と度々声を掛けていた。

しかしその時の箒の返事は後のヒロインにあるまじき非常に冷淡な態度であったと言うのが一夏の談。

そして今日もまた、学校が終って道場に向うと、篠ノ之箒が道場の片隅で独り黙々と剣を振っている姿が見受けられた。

「……なぁ、声掛けねェの？」

秋斗は稽古着に着替えた後、箒の姿を見かけて一夏に尋ねた。

「どうせまた無視されるから、ほっとく。それより行こうぜ」

「ふ～ん。（……まだフラグが立ってないのかねェ）」

箒に対する一夏の様子は、誰に対してもフレンドリーな一夏にしては珍しく、毛嫌いする様な態度だった。

原作知識はあれど秋斗の中にあるソレは結構曖昧で、作品中のどの時系列でどの人物同士が関わりを持ったのかについては殆ど判らない。

故に此処から篠ノ之箒が後の一夏のヒロインに相当する人物と化すのがいつなのかと、秋斗は密かにその瞬間を見るのを楽しみにしていた。

秋斗はそれとなく2人の様子を気にかけつつ、今日の鍛錬を開始した。

（……俺が居るせいだろうか？）

秋斗はふと、己と言うイレギュラー要素が、またしても作中の展開（運命）に妙なズレを生じたさせたのかと不安に思った。

自分がイレギュラーだと言う引け目がある為、自分から無闇に原作をかき回すつもりはない。

が、それでも何かしらのイレギュラーを発生させてしまった可能性を考えると少し不安になった。

現時点ですら原作の流れにたどり着けるかの不安がある。

その為、秋斗は原作に沿うように多少の梃子入れは必要だろうかとも少し考えた。

しかし己の存在が確実に影響を及ぼした織斑家以外の部分で、積極的に環境を変化させるのは何かが違うと感じ、最終的には一夏と箒の関係には静観を選ぶ事にした。

――――ふとその際に何か重要な見落しをしている様な気もしたが、その時の秋斗は気のせいだと感じた。

☆

冬休みに突入した初日の午後。

千冬は秋斗と一夏に本日渡された〝通知表〟の提出を要求した。

「『――――授業中に上の空になる事が多く、注意力散漫な点も多くあります。しかし成績自体は非常に良く、もっと積極的に授業に取り組めば、更に上の結果も出せると思います。』……秋斗。お前確か夏休みの前にも先生から同じ点を叱責されなかったか？」

「……まぁ、そうっすね」

「内申評価に関しては一夏を見習え」

秋斗はあらゆるテストの平均点を全体的に高く揃えているので成績の上では非常に優秀の括りにされていたが、代わりに内申評価は少し悪かった。

授業中にどうやって金を稼ぐかを考え続けている所為だ。

流石にソレを千冬に説明すると今度は色々ややこしくなるので、秋斗は素直に叱責に対して頭を下げる。

千冬は丸めた通知表で秋斗の頭をパコリと叩いた。
そんな秋斗の横では、同じ様に正座する一夏が苦笑を浮かべていた。
ちなみに一夏の評価だが、こちらは正に文武両道を体現しており、内申評価に関しても『協調を重んじ、率先して日直や清掃などの活動に取り組んでいる』という高い評価を受けている。
秋斗と一夏は二卵性の双子で、現時点では外見の差は少ない。しかし成績を見れば、兄弟の違いは明白だ。
理数と美術に秀でるのが秋斗、文系と体育と内申評価に秀でるのが一夏と言った具合である。
「とりあえず学年末の評価には期待しておこう。さて、と……。話は変わるが時期的にクリスマスだ。お前達何か欲しいものはあるか？」
通知表の確認が終った後、千冬は弟達に珍しい事を尋ねた。
家が貧乏である事を知る秋斗と一夏は、千冬の言葉に同時に目を丸くした程。そんな弟達の内心を察して、千冬は微笑を浮かべながら言った。
「今年はお前達のやった懸賞はがきのお陰で、中々美味い飯が食えたからな。そのお礼だ。年に一度の事だから、なるべくは要求に応えるぞ？」
「本当にいいのかよ、千冬姉？」
「……おい、姉貴。熱でもあるのか？」
「……お前達は私を何だと思ってるんだ、特に秋斗？」
思わず呟いた秋斗の一言に対して、千冬は少しだけムッとした表情を見せる。
秋斗主導で懸賞の当選品の転売を始めたが、実際それで生活が楽になったとは言い難い。
そしてその稼ぎは秋斗が求め、期待した水準に比べると実に微々な結果だ。
なのでプレゼントを買う金があるなら少しはバイトを休めと言うのが、秋斗と一夏の率直な感想であった。
しかし表情を見るに、千冬は頑として引きそうにない。

秋斗は一先ず参考までに一夏に問うた。
「一夏はなんかあるかい？」
「ん～どうだろう。……しいて言うなら新しい包丁とまな板、かなぁ。この前の懸賞で当たった黒鯛（チヌ）を捌いた時に、両方ともボロボロになってさ。出来ればソレを買い換えたいかな？」
「……なんというか、もう少し子供らしい要求は出来ないのか？いや、私も世話になっている手前そう強くは言えんが――――」
何とも一夏らしい答えを聞いて千冬は苦笑いを浮かべる。
文武両道、質実剛健を地で行く千冬だが、家事だけは天敵だからだ。旧世代の様に男が仕事、女が家事と言う風聞は薄まってはいるものの、やはり女として思うところはあるのだろう。
そんな表情を浮かべる千冬をフォローするように、秋斗は同情的な笑みを浮かべた。
「まぁ、一夏だから仕方ねぇさ。幸い舌は壊れてないんだから、姉貴もやろうと思えば直ぐに料理ぐらい作れるさ」
「……私だって料理ぐらい作れるぞ？」
「はいはい」
千冬はムッとした表情をうかべた。
「まぁいい。ならば一夏には良い包丁を買ってやろう。――――で、問題の秋斗はどうだ？」
「……問題ってなんだよ？」
「お前今年の誕生日に自分が何をやろうとしたのか忘れたとは言わさんぞ？」
「……流石に反省してるよ。もう二度とやらねぇから安心してくれ」
千冬が釘を刺すように眼光を鋭くしたので、秋斗は小さく溜息を吐いた。
遡る事、約3ヶ月程前。一夏と秋斗の誕生日である9月の時も、今日と同じく千冬は奮発して2人にプレゼントを贈ろうとした。その際に秋斗は千冬に1万円ほどのフィギュアを頼み、「一年くらい寝かせてオークションに出せば、買った時の3倍くらいの値で売れる」と

口走った。
結果として秋斗は千冬に拳骨で殴られたので、流石に今回は同じ轍を踏む気になれない。
「――――欲しいモノ、ねぇ」
秋斗はふと、天井に視線を移した。
誕生日の時は織斑家の財政を立て直す事に傾倒しすぎて、他人の気持ちを蔑ろにしすぎたと流石に反省している。なので今回しっかりと〝好意〟として千冬からプレゼントを受け取るつもりだった。しかし漠然と『欲しいモノ』と言われても、直ぐには思いつかなかった。
加えて前世の記憶に目覚めた弊害として、秋斗には年相応の子供という意識が非常に希薄になっている。前世で一度成人している所為か、秋斗の中には〝欲しいモノは自分で買う〟という意識が強く存在し、同時に誰かに買って貰うという事そのものが妙に恥ずかしく思えてしまう照れがあった。
「……ちょっと思いつかないから、しばらく考えさせてもらっても良いか？」
「そんなに悩む事か？　それ程難しく考える事でも無いと思うが――――」
「出来れば一夏の頼んだ包丁みたいに観賞用で終りたくないからな。使い続けて価値があるみたいなモノの方が良いだろ？」
「いや、別に俺の真似なんてしなくていいんだぞ？　秋斗は秋斗の好きなもん買ってもらえよ」
一夏が口を挟んだ。
「それがあるんだったらこんなに悩んでないんだな、コレが」
一夏の言葉に、秋斗は思わず溜め息を吐いた。
実際の所、一夏の『包丁が欲しい』という願いは、秋斗的には実に盲点を突かれる提案だ。家計を助ける上に長持ちして、値段もピンキリで、しかも一夏の趣味に合っている。
そんな打ってつけのプレゼントが存在すると知ってしまえば、秋斗も織斑家の生活に直接的な形で役に立ち、尚且つ無駄でない代物をと思ってしまう。

秋斗はしばらく思案に耽った。
（――――プロダクト方面の材料を揃えるにしても、基本的に消耗品。今後の事も考えるとネット環境の整備の方が先だが――――）
家事に関しては殆どが一夏の領分なので、秋斗はそれ以外の部分で家に役立つ道具を模索した。
そして行き着く答えが、結果的に一つしかないと思った。
しばしの黙考の末、秋斗は思い切って口を開いた。
「……しいて言うなら〝パソコン〟が欲しい。しいて言うなら、だけど――――」
今後の生活の為にＰＣは何れ手に入れる必要があった。
そもそも支度金を工面して真っ先に用意しようと思った道具がＰＣなのだ。
小学一年生が欲しがる〝玩具〟にしては、余りに高価過ぎる品物。
家計の苦しさを良く判っている為、秋斗は言うだけ言ってからその言葉を冗談だと流そうとした。
――――が、そこで誤算が起きた。
千冬は秋斗の言葉を聞いて、ふっと小さく笑みを浮かべた。
「お前も大概だな？　一夏と同じでもっと子供らしいモノを欲しがればいいものを。まぁいい。パソコンが欲しいなら、私の〝知り合い〟に丁度そういうのが得意な奴が居る。確約は出来んが、もしかしたら手に入るかも知れんぞ？」
千冬はやれやれと小さく吐息を吐きながら言う。
「……え、マジで手に入っちゃうの？」
対する秋斗は千冬のそんな言葉に思わず耳を疑った。流石に言うだけ言ってみようと思った冗談交じりの提案が、余りにすんなりと実現しそうな予感に、酷く困惑した。
千冬は秋斗の問いに小さく頷いて肯定の返事を返す。
「嘘は言わんよ。ただし、本当に確約は出来んからな？　ちなみにそいつは柳韻先生の娘で、ついでに私とは〝腐れ縁〟の馬鹿だ。秋斗がパソコンを本当に欲しいのなら、私から直接奴に頼んでみよう」
「腐れ縁の馬鹿？　なぁ、秋斗。柳韻先生に箒以外の娘なんて居たっ

け？」

「……」

一夏は首を傾げて秋斗の方を見る。

そして同じ頃。秋斗は今の今まですっかり忘れていたある原作の〝登場人物〟の事を思い出した。

（……そうだ。そう言えば、姉貴の幼馴染にハイパーチートなハイテク人間が、居たじゃねェか！）

千冬は溜息を吐きながら〝篠ノ之束〟の名を口にした。

「私の小学校からの腐れ縁でな。少々どころか、かなり人格に難ある〝天災〟と呼ばれる女がいるんだ」

☆

原作のタイトルにもなった〝インフィニット・ストラトス〟。その名を冠するマルチフォームスーツを開発した天才博士こそ、件の千冬の幼馴染である〝篠ノ之束〟その人だ。

秋斗はその存在を千冬が仄めかすその瞬間まですっかり忘れていた。

篠ノ之束は原作でもかなり重要な位置にいる人物で、彼女の人物像を思い出すと、まるでパズルが次々嵌るように欠けていた原作知識のいくつかが蘇った。

なぜ忘れていたのかはこの際どうでもいい。

それより重要なのは、意外に原作と言う形で覚えている物事が、秋斗の思っている以上に少ないと言う現実にあった。

篠ノ之神社や柳韻先生の自宅に何度か赴いたが、そんな〝天災〟が潜んでいる気配など微塵も無かった。しかし篠ノ之家の玄関を見れば、間違いなく天災のモノであろう〝靴〟が置いてある。

（――――不味いかもな）

秋斗は密かに内心で強い危機感を覚えた。

具体的な事は殆ど覚えていないが、原作の大まかな流れとして幾つかヤバめの出来事が存在する。

そして現実となった今、それらは将来的に起こるのだ。
ソレを乗り越えてた結果の物語が原作では描かれているが、己と言うイレギュラー要素を内包した状態では流石に全ての結果が原作と同じになるとは考え辛い。
良くなるならば問題ないが、悪化したら最悪だ。
目下のところ原作にたどり着く為に乗り越えなければならない大きな事案は二つあり、秋斗は千冬から篠ノ之束の名前を聞いた瞬間、それまで忘れていた一つ目の、作中最大の〝事件〟の事を思い出した。
（――――白騎士事件ってもう起こったっけか？）
秋斗は何となくで覚えている原作知識と〝現実〟のズレを確かめる為、宿題の読書感想文を書くついでに独り、県の図書館に赴いた。
この世界の科学技術は秋斗の生きた前世よりもいくらか進んでいる為、情報を手作業で探すという手間が殆ど無い。
秋斗は図書館に置かれた情報端末で3年前から今日までの間の期間に絞り、『白騎士』をキーワードに検索を開始した。
しかし半ば予想した通り、今日までの間に『白騎士』が登場した大掛かり事件は一件たりともヒットしなかった。
秋斗は結果を見て、思わず眉間に皺を寄せた。
（……『白騎士事件』は確か劇中で〝10年前〟って書かれて無かったか？）
秋斗は思わず鉛筆を齧り、顎の下に手を乗せた。
千冬と一夏の年齢差から逆算すると、一夏が高校一年になった段階で千冬の年齢は23～25歳前後。つまり千冬と同い年の束は中3～高2の間には既にISの基礎理論を発表しているという計算になるのだ。
そして千冬は現在16歳の高校一年生。つまり『白騎士事件』も、現時点では既に〝起こった〟か、またはこれから〝起こりうる〟と予想される。
――――しかしそうなると篠ノ之家が引っ越してないのはなぜだろう？

ＩＳを作った結果で篠ノ之一家が離散となったと考えている秋斗は、思わず現時点での原作とのズレのような状態に思わず首を傾げた。

「セカンドが来る小４ぐらいまでは、一夏と同じ学校だったんだよな？　これから離散すんのか？　……わけが判らねぇ。どういうこった？」

『白騎士事件』でＩＳの性能が世界中に示され、それが結果的に世界中の男女のあり方と、軍事のパワーバランスを変えた。そしてＩＳの存在を中心に、原作の舞台であるＩＳ学園は作り上げられる――――。

しかし〝あるはずのモノ〟が無い、起こるべき事が起こっていない、と言う現実を前に秋斗は強く困惑した。

続けて秋斗は同様の方法で、今度は『篠ノ之束』についての検索を掛けた。

――――すると今度は幾つかヒットがあった。

篠ノ之束に関する記事には医療や科学、数学、物理学の方面に多く、詳しい事は理解できないものの共通して非常に年若い天才だという記述があった。

秋斗はその中でひっそりと『――夢のマルチフォームスーツ――』というまとめを見つけた。

・新世代の航空宇宙理論として篠ノ之束が学会に持ち込んだのは、無限の成層圏を意味するインフィニット・ストラトスと名付けられたマルチフォームスーツの構想だった。あらゆる分野で賞を総なめする若き大天才が、非常に強い意気込みを持って発表したその設計理論は非常に難解で、且つその開発、運用に要求される技術は余りにも荒唐無稽であった。

・結果として篠ノ之束女史の意気込みも空しく、結果的にＩＳによる宇宙開発構想は受け入れられなかった。しかしその中にある技術の一部は非常に革新的であったのは確かで、後に多くの学者によって研究が進められたその成果のいくつかは、今日の社会に反映されている。

秋斗は記事の読後に、なんとも言えない歯がゆさを感じた。
「――――要するに一番重要な部分を否定されたけど、中身の一部は本人の与り知らぬ所で勝手に研究されて、いつの間にか発表されてて、評価されてたって事か？」
秋斗は不意に前世の友人の零した愚痴を思い出す。
彼は『論文を発表するのが教授の仕事だ』と酒の席で話し、同時に「研究室の助手達が発見した成果でも、大学教授の名前で発表される」と言った。
「……なんだろうな。俺がもし篠ノ之束だったら、無茶苦茶腹立つ様に思える記述に見えるんだけど」
まとめによると篠ノ之束が心血を注いだＩＳは多くの学者の失笑を受けて評価をされず、その技術の一部だけは他が後追いで、しかも篠ノ之束を除いた形で検証、研究されて評価を受けている。
秋斗は独力でＩＳを開発し、『白騎士事件』と言う無茶苦茶な形で世界にＩＳの性能を見せようとした篠ノ之束の心中に少しばかり同情できるような気がした。
原作の篠ノ之束は他人に対して〝凡人〟と平然と言ってのける性格で、故にプライドも相応に高いと見えた。
つまり不満があれば、素直に怒る事をいとわない性格であると予測が出来るのだ。
人であるなら誰にでも〝感情〟は存在し、その感情を律して生きるのが、ある意味で社会人たる所以だと言われている。
しかし秋斗が思うに学者とは、半ば『世捨て人』。社会人としての完成度は二の次である事が多く、加えて『白騎士事件』当時の篠ノ之束は高校生。
そんな周囲と隔絶した天才が、ある意味で〝ぶち切れた〟結果が『白騎士事件』であると考えるなら、秋斗は人死にが出ないように配慮しただけ、原作の結果はマシなんじゃないかと密かに思った。
「しかしどうするかな。この調子だと、まさかこれから白騎士事件が起こるのか？」
秋斗は鉛筆を咥えて視線を宙に移した。

学会でＩＳの発表は既に行われた後。しかし肝心の『白騎士事件』に関してまだ起きていない。

『白騎士事件』は後の『女尊男卑社会』に繋がる為、個人的には起きて欲しくない事件だ。――――が、しかし織斑家の状況を考えると、ＩＳが社会に登場してくれる事自体は寧ろ大歓迎なのだ。

千冬が世界的に有名な日本の国家代表としてＩＳ乗りになるし、一夏が原作のルートを辿る為の重要な鍵となる。そして秋斗にとっては件のＩＳ時代における姉兄の活躍が、莫大な稼ぎの源泉となる可能性があった。

今後、千冬がＩＳ乗りとして日本の国家代表になった際、モンド・グロッソ（世界大会）に出場する機会は2回ある。逆算して恐らくだが、秋斗と一夏が小学5年生になる頃の1回目と、原作で一夏が誘拐されたという中学の頃の2回目。つまり原作の通りに時間が進めば、秋斗が小学5年生になるまでの〝約3年〟と言う期間が、秋斗が乗り越えるべき鬼門となる。

件の期間を一家3人で無事に乗り切る事が出来れば、その後は世界的に有名人と化した千冬の稼ぎで、織斑家の生活が安泰となる筈。しかし逆に『白騎士事件』が起こらず、ＩＳが世界に登場せず、千冬が一般人のままで今後も一家の貧乏生活が続けば、その時点で織斑家の滅亡エンドは確定。千冬は確実に過労で倒れ、年齢しだいでは一夏と秋斗は最悪施設送りとなり、原作崩壊というバッドエンドを迎える事になる。

「何とか原作に沿ってほしいが、どうなることやら……」

様々な思案を重ねた結果、秋斗はさっさと原作通り、篠ノ之束に『白騎士事件』を起して欲しいと思った。

「――――少年よ、一体何をそんなに難しい顔をしてるんだい？」

「……ぁん？」

ある意味で〝世界が崩壊する日〟を待ち望んだ矢先の事。

秋斗は真後ろから見知らぬ人物に掛けられた。

その声に振り返ると、そこにはメカメカしいウサギ耳と空色のエプロンドレスを纏った一人の美少女が立っていた。

――――篠ノ之束であった。
「やっほ～♪　キミがちーちゃんの言ってた〝変わってる方〟の弟くんだよね？」
「……篠ノ之束？」
「ピンポンピンポン♪　流石に調べてるだけあって、よく知ってるねぇ。花丸を上げよう！　だけどなんで顔を知ってるのかな？　キミと会うのは初めてだよね？」
「……」
秋斗は脈絡無く登場した〝天災〟を前に、表情と感情を押し殺しながら内心で酷く驚愕した。

☆

「――――いやぁ、半ば冗談だったけど、怪しい人に付いて来るのはちょっと感心しないぞ？　ショッカーみたく拉致されて改造されちゃっても知らないよん♪」
「その時は超変身したウチの姉貴が、地の底まで博士を追い詰めるよ。んで、姉貴必殺の〝モツ抜きパンチ〟が炸裂する。……たぶん死ぬほど痛いと思うぜ？　ご愁傷様。ウチは貧乏だからちょっと香典出せねェと思うけど」
「……ちーちゃんのモツ抜きパンチかぁ。リアルに想像出来ちゃったよ、うん。……あんまり冗談には聞えないから想像したくないね。普通にお話しようか？」
「……了解」

当たり障り無く冗談を交えた会話が成り立っている手ごたえを感じて、秋斗は内心で密かに安堵した。
同時に〝一定以上の興味は確実に持たれている〟と推測した。
正直に言うと秋斗は、篠ノ之束と会うのを光栄に思う反面、強い不安を内心に感じていた。
突如現れた篠ノ之束に話があると言われて、秋斗は束と一緒に図書

館のオープンテラスに場所を移した。
　興味の無い人間に対しては徹底して歯牙にかけない不遜な性格。そんな風に描かれた原作と、それ故の所業のいくつかを知る身としては、篠ノ之束は怖い相手だった。
　秋斗は自分でも強く自覚するほど、この世界ではイレギュラーな要素。故に束に妙な興味を抱かれ、千冬同様に振り回されるのは勘弁願いたいと強く思った。
　それを如何にかして誤魔化すべく、秋斗は違和感の出る年相応の対応等するだけ無駄と考え、あえて内心の動揺を押し殺しながら、なるべく対等に話が出来るように、あえて束と同様の胡散臭い〝道化〟を演じる事にした。
　――――奇しくもその対応は世間で異端とされる束が、世間に対して理解される事を放棄し、結果作り上げた現在のキャラクターに何処と無く似ていた。ソレは秋斗が知る良しも無かった事であった。
「ちーちゃんからキミがパソコンを欲しがっていると聞いてね。早速、持ってきてあげたのさ」
「……持ってきた？　現物がもう此処に？」
「もちろんさ。ほいっ、あげる」
「っ!?」
　青空の下に出て早々。束は空中に手を翳すと、何も無い空間から魔法のように一台のラップトップを取り出して見せた。
　ボディーは黒く、ワンポイントにウサギを模した手製のロゴ。その作りは市販品のように洗練されている。間違いなくそれは、篠ノ之束本人によるワンオフの一品だった。
　秋斗は魔法のような所作であっさりと取り出されたノートＰＣを見て、そう直感した。
　そして目を丸くする秋斗に対し束は、悪戯が成功した様なドヤ顔を浮かべて言った。
「何も持ってないように見えた？　残念だけど、量子格納していろいろしまってあるのさ！　驚いた？　た？」
「……まるで魔法だな？」

「理解出来ないモノを魔法の一言で片付けるから凡人は凡人のままなのだよ。理解出来てしまえば実に簡単なトリックだよ、ワトソン君？」

「多分、その理屈を理解出来るのはこの世界でアンタだけだと思うぜ、ホームズ」

「咄嗟にそういう台詞を返せるなら、キミも大概じゃないよね♪」

束は秋斗に手製のノートＰＣを渡しながらそんな風に評した。

「……動作確認しても良いか？」

「もちろんさ。あ、ちなみにありあわせのパーツで作った代物だからね？　その点だけは先に謝っておくよ」

「……ジャンク、ねェ」

秋斗は束の謝罪に苦笑いを返しながら、早速モニターを起こして電源を入れた。

束はそれをジャンクの寄せ集めと言うが、立ち上げて一秒にも満たない時間で完全に起動しているほどに処理が早い。

――その時点で秋斗は、どこか嫌な予感を感じていた。

先ずデスクトップを確認する。インターフェースは秋斗の知る限りの複数のＯＳを混ぜ合わせたような形で、恐らくソフトウェアの面からしても自作された手製のプログラムによるものと推測出来る。

流石にソフト面では秋斗もその凄さの全てを図れないが、逆を言えば多少なりとも知識のあるハード面では既製品との比較が出来るという事だ。

秋斗はタッチパネルを操作しながら、恐る恐るそのマシンスペックを確認した。

「――〝デュアルオクトコア〟ってなんだよ。聞いた事ねぇよそんなモン。それに内蔵容量が６Ｔってさ……」

「ん、足りないかな？　あぁ、心配しなくてもちゃんと水冷だよ♪」

「そういう事を言ってんじゃねぇよ。……何に使うんだよ、こんな廃スペック」

文句の様な言葉を放った秋斗だが、その顔に喜色が浮かぶのまでは隠せなかった。

グラフィックボードもメモリーも秋斗の知らない名前のモノばかり。しかしその性能は恐らくだが、最新のＭＭＯを４つ同時に立ち上げた上で、それらを並列して遊んでもヌルヌルと動きかねないと思わせるほど狂っている。それ程に気持ちが悪い。

そしてそれが理解出来てしまう秋斗の前世の積み重ねが、篠ノ之束の天才たる所以を違わず理解出来てしまった。

「博士スゲーな！　ジャンクで作ったって絶対嘘だろ？」

秋斗の驚愕を見て束は少しだけ嬉しそうに言った。

「そんなに凄いかなぁ。消費電力は兎も角、屋外での稼働時間は３日も持たない失敗作だよ？　それに市販品より１キロも重たいし。どうせ４，５年も経てば似たような性能の奴が出回るよ」

「市場で５年も早い技術を適当に作ってみせるのが、そもそも馬鹿だぜ。いや、この場合は天才か？　まぁ、どっちにせよ、だ。博士スゲーよ！」

「……ちーちゃんの弟君にしては、意外なほどギーグな趣味をしてるんだねぇ」

束は感情の見えづらい空笑いを浮かべながら、小声で言った。

「……なぁ、本当に貰って良いのか博士？」

秋斗はひとしきり動作を確認した後、改めて束に問うた。

秋斗がＰＣを手に入れたかった最大の理由はネットに今後の稼ぎの礎を築く為であり、それは束の作った怪物ＰＣの様な性能など必要とせず、精々中古で買えるような型落ちのタブレットでも十分だったからだ。

使用目的を怒るんじゃないかと言う不安を感じつつ、秋斗は尋ねた。

「なぁに？　不満なのかな？」

「いや、不満どころか凄い嬉しいよ。だけどこんな凄いモンを無料で貰うとなると流石に不安だ。使いこなせる自信がねェし、なにより後で買い取れって言われても、ウチにそんな金払う余裕なんかない。……本当にいいのか？」

「あぁ。その事？　だったら気にしなくていいよ。キミの好きなよう

に使えば良いさ」
　秋斗の不安を余所に、束はあっけらかんとした様子で言った。
「お礼ならちーちゃんにたくさん払って貰ったから必要ないよ。寧ろ私としてはこの程度で良いのって思うくらいだし。まぁ、多少なりともモノの価値が判るみたいだから、後になってお金を請求するつもりも無いから安心して持って帰りなよ」
「……そう、か。ありがとう」
「うん、どういたしましてだね。それじゃ、大事に使うんだよ？」
「あぁ。間違いなく１０年は大事にすると思う」
「よろしい！」
　秋斗はぎこちない礼を返した。
　ソレを受け取ると束は徐に席を立った。
「さて、もう少しお喋りしたい所だけど、そろそろ時間だ。この辺でお暇するじぇい！　もし修理や相談なんかで束さんの助けが欲しい時は、篠ノ之神社の境内で空に向って指を鳴らすんだぞ♪」
「『来い、タバネガンダム！』って感じで？」
「にゃははは、そうそうそんな感じそんな感じ。あ、そうだ。ついでにキミの名前教えてよ？」
　踵を返す途中でふと、束は思い出したように秋斗に尋ねた。
　秋斗は原作知識で知る篠ノ之束の性格から、的確にその意図を察した。
　秋斗は一瞬だけ眼を見開き、そして小さく息を吐きながら名乗った。
「……織斑秋斗。まぁ、好きに呼んでくれ」
「アキト。アキト君ね……うん、覚えた。じゃあ次から〝あっくん〟って呼ぶね。じゃあ、サラバダー♪」
　かみ締める様に秋斗の名前を呟く束は、去り際に右手を振り上げた。
　そして直後、目にも留まらぬ速さで何処かに走り去った。
　天災の異名に相応しく現れる時も去る時も唐突だ。
　そんな風にして束が去った後、秋斗は「まるで台風だな……」と内

心で密かに思った。
そして安堵を確かめるように、盛大な溜息を零した。
「……とりあえず嫌われるよりはマシな結果に終ったよな？」
誰に対しての台詞なのか自分でも定かでなかったが、秋斗はそんな独り言を吐息交じりに呟いた。
――――篠ノ之束に認識される。
その結果は、ある意味で極上。ある意味では、己というイレギュラーが、物語に正式に認められた様に思えた。
篠ノ之束の劇中イメージからして、露骨に邪険にされて排斥される様な関係であるよりは、間違いなく好意を持たれている方がマシ。しかし劇中の千冬や一夏、箒の様に、今後束から滅茶苦茶な形で事件に巻き込まれる可能性も十分に含んでいる。
秋斗はソレを避ける為にあえて〝道化キャラ〟で対応した。
なるべく素に近い口調で冗談を多分に含み、その上で素直に友好さを顕にしてみた。
が、その意を何処まで束が汲んでくれるかは分からない。
「……まぁ、成るようにしかならねぇか」
秋斗は再度小さく溜息を吐き、天災から渡されたクリスマスプレゼントを手にゆったりとした足取りで帰路についた。
――――その日の夜。
世界中から日本の首都に向けて複数の弾道ミサイルが飛来し、突如訪れた一機の白いＩＳがその脅威を打ち払った。

０４　白騎士の駆けた日

織斑千冬

私には、２人の双子の弟がいる。両親を失った私にとって２人は、もはや唯一にして最愛の家族だ。

当初、施設に送られる私達兄弟の面倒を見ようとして、幾つかの親戚が私達の前に現れた。しかし養うとは名ばかりで、連中の本心は透けて見えた。

財産管理が出来ない未成年の小娘を相手に、体よく擦り寄ってくるのは、どれも遺産を目当てにした魑魅魍魎ばかり。

そんな風に誰も信用できなくなった私は弟達を連れ、感情に任せて親戚の家を出た。――――今、思えば、相当な無茶をやらかしたと猛省するべき軽率な行動だった。

結局逃げだしたは良いが、未来を見据えると完全に道を見失ったに等しい結果となり、私はそこで恥を忍んで師に助けを乞うた。

あの時、柳韻先生が手を差し伸べてくれなかったら、私達姉弟は今頃、どこぞの公園で垂れ死んでいただろう。

――悪い夢を見ただけ。と、私は弟達にその日以前の生活をそう言い聞かせ続けた。短い間に生活環境が大きく変わり続けた所為か、一夏も秋斗も当時の事を殆ど覚えていない。しかし私には、それが２人には最善の様に思えた。

それから程なくして、私は柳韻先生の伝で安いアパートを借りた。敷金も礼金も無しの低家賃。そんな条件で且つ、雨風を凌いで生きられる生活環境を与えてもらった。

師から受けた恩は、剣も含めて莫大なモノになる。私は師から受け取った恩と言う名の負債の大きさを実感し、素直にそれ以上の情けを受け取れなかった。学業と合わせてバイトに勤みながら、独りで家族を養う為に奔走する様になったのは、ある意味必然だったとも言えるだろう。

が、しかしそれは逆に小学生にも満たない弟達の面倒を見られないという事でもあり、結局私は家族を養う事も半端にしか出来ず、再び先生の家族の手を借りてしまった。

そして中学も3年になった頃。私は弟達の為に高校に行く事を断念した。しかし師には、「高校は最低限出なさい」と叱責をされた。

将来的にどんな仕事に着くにせよ、高卒の学歴は社会で最低限必要になる。だが高校に通うにしても学費を賄えず、また高校の学費まで師に面倒まで見てもらうわけにも行かず、私はどうすればよいかと途方にくれた。

――そしてその時に腐れ縁の親友が言った。

「答えは簡単さ。特待生になればいいんだよ。それなら学費なんて免除されるじゃん♪　難しく考える事なんて何処にも無しだ。やったね♪」

普通に難しい事をさも当然のように簡単に言ってくれる親友に対して、私が盛大な溜息を吐いた事は今でも覚えている。

彼女――篠ノ之束とは小学生からの腐れ縁だった。出席番号もそれ程遠くない為、時には進級して始業の日から同じ班にされた事もある仲だ。

そんな篠ノ之束は自他共に認める天才だ。特に学業の分野では、二番手すらも圧倒的な成績で振り千切る程。しかしその性格は、私の知る限りで〝最悪〟に類する部類の破綻者だった。

人を人とも思わず、話しかけても無視するのが普通という態度。柳韻先生を初め、想ってくれる人間が周囲に多く存在するにも拘らず、それらを徹底して理解しようとしない傲慢な様子が、私には酷く癇に障り、故に大嫌いだった。

――正直今も、その点だけは嫌いだと束に公言している。

そして、そんな束に私が遂に本気で拳を振り上げる時が来るのは、時間の問題と言えた。

しかし何故かそれ以来問題児扱いだった束に正面からモノを言える存在として、常に私と束が同じクラスに振り分けられる様になったのはある種の皮肉だろうか？

――師の娘なので公私共に無視できない存在。当初の束にはその程度の認識しか存在しかなかったが、不思議と時間が経つと、御互い下の名で呼び合う仲になった。

互いに歯に衣を着せぬ言い方が出来て、腹を立てて拳を振うやり取りが叶うからだろうか？

不思議な話だが〝頼りになる友人〟の名を挙げろと聞かれたら、私は篠ノ之束と答えるだろう。そしてそれは束にしても同じであるらしい。

だからこそ束は私に、〝笑われた己の夢に繋がる技術と発想〟を、世界に見せ付ける為に手伝ってくれと、初めて頭を下げて頼んできたのだろう。

「――――今更だが、やはり正気の沙汰とは思えないな」

「じゃあ、やっぱり辞めにする？」

「いや、ここでお前を独り放置すれば、この後どんな事をしでかすか判らんからな。手綱を握っておけるなら握っておく。協力を受けた以上、なるべく最善となるように手を尽くすのが私の責任だ」

「わ～お。流石ちーちゃん！　束さんが女だったら完全に惚れてるね！　結婚しようか?!」

「死ね！」

「酷い！」

空色のエプロンドレス。メカメカしいウサギ耳のカチューシャ。

童話『不思議の国のアリス』をそのまま現実に持ち込んだ様な奇抜な出で立ちの親友の、相変わらずな阿呆発言を受けて、千冬は徐に溜息を吐いた。その表情も恐らくは酷く不快に歪んでいるはずだが、生憎今の束からはそんな千冬の呆れの表情を見る事は叶わなかった。

「――――まぁ、それはさておき〝調子〟はどうかな？」

「散々テストに付き合わせておいてよく言う。今更、問題等あるものか」

「だよねー♪」

千冬が微かに身体を捩ると、装甲板の擦れあう音が周囲に響いた。

束が密かに建造した秘密ラボの格納庫。そこで千冬は、全身を白い装甲で覆った形状のＩＳ――〝白騎士〟に身を包んでいた。

これから行う実験の規模を考えれば尋常でない緊張を感じて然る

べきだが、意外なほど千冬の動揺は少なかった。
身に纏ったＩＳの産み出す全能感が、緊張を緩和するからだ。
故に千冬の精神は、今、風の中を漂う凧にも似ていた。
「あ、そう言えば〝あっくん〟に会ったよ。ちーちゃんの言うとおり、ちょっと変わった子だったね」
「……会ったのか？」
「うん。今日、調整したＰＣを渡してきたの。でね。こっちが恥ずかしくなる程、すっごい喜んでた」
千冬は束が秋斗を認識して〝愛称〟で呼んだ事に強い衝撃を感じた。
そんな千冬の内心の動揺を尻目に束は続ける。
「〝触った機会もない〟くせに、なんでスペックとかを把握できたんだろうね？　まぁ、そういうわけだから、ちょっと気に入っちゃったかもね♪」
「……ちなみに聞くが余計な事はしてないだろうな？　コイツ（プラズマブレード）の切れ味は貴様が一番良く知っていると思うが――」
「ストップ、ストップ！　何もしてないって！　ちょっとお話してから、ＰＣ渡してバイバイしただけだよ！　あっくんにも釘を刺されたし、本当に何もしてないからちょ～～っとその柄にかけた手を降ろそうか？　ね？　ちーちゃん!?」
「……ちっ」
「ねぇ、なんで今舌打ちしたの？　ねぇ？」
「さぁな。自分で考えろ、天才」
そんな普段どおりのやり取りの片手間に、束も束で、着々と〝下準備〟を進めていた。
現在、手製のスパコンを使って束が行っているのは、世界各国の軍事基地に対するハッキング――軍事基地の遠隔操作で発射可能な弾道ミサイルシステムを掌握し、それらを日本の首都に一斉に叩き込む為の準備である。
千冬との日常の一幕のようなありふれたやり取りをしつつ、束はその天才的な手腕で史上最悪の愉快犯としての下地を作っていく。

それを千冬は狂気と称したが、それは当初に比べると随分とマシになった部類の報復活動であった。

宇宙に行きたいと無邪気に願った夢を形にする為、その翼を発表した束だったが、その才能に嫉妬する多数の学者から彼女は笑いものにされた。

周囲と隔絶した天才は理解されない孤独に苛まれ、その理解されない憤り故に、周囲を凡夫と言い切ってしまう。

千冬は束に常々、自分から歩み寄る努力をしろと説教を零した。

――――なんで理解されないのかな？

学会での発表の後、束は泣きながら千冬に訴えた。

ＩＳを発表したのは束なりの友好――自分を晒して歩み寄る為の努力である。

しかしそんな束なりの歩み寄りの努力は盛大に失敗した。

そう察した千冬は、その時の束に対する相応しい慰めの言葉を思いつけなかった。

束は再び理解される努力を放棄し、結局は天災として元の鞘に戻った。

学会での一件を知った千冬は、しばらくそっとしておこうと束の態度に口煩く言わなかった。時が傷を癒してくれるだろうと考えたのだ。

しかしそれから少し経って、事態が一変した。

束が発表したＩＳの技術の一部が、束の知らぬまに世間に発表されたのだ。

確かに束が基礎を作った技術であるという点だけは明らかにされた。が、しかしそれはＩＳが否定した際に捨てられた研究のひとつであり、束にしてみればＩＳが認められなくては意味の無い代物。言うなれば心血を注いだ研究のひとつ。

それを凡人の勝手な都合で、意地汚く利用されるが如き所業に、束は強い憤りを見せた。

「――――そこまでするなら、所謂〝本物〟って奴を見せ付けてやろうじゃないか」

確かに名声は得た。そして金銭も支払われた。しかしそんな事はどうでもいい。束が研究に心血を注いだのは他ならぬ夢の為であり、それを一度笑っておきながら、その一部を己の与り知らぬ所で勝手に利用された。

それだけが許せず、束は千冬も見た事がない程の、かつてない規模の怒気を見せた。

そんな束に迂闊な行動を避けるようにと千冬は強く説得した。

もしもその時、千冬が止めなければ、束は独自にＩＳを開発してでも件の企業や学者の所在地に直接強襲を仕掛けていただろう。

「……邪魔するなら、ちーちゃんでも容赦はしないよ？」

「協力してやるから報復するにしても、もう少し穏便にしろ！」

「どのくらい？」

「無差別テロなんて論外だ！　気持ちは分かるが、殺しは絶対にダメだ！」

「……わかったよ。じゃあ、〝ビビらせる〟だけにしてやる」

ＩＳによる直接強襲という名の無差別テロ。一時期はそれすら強行しようとした束であったが、千冬の強い説得を受けて遂に、『日本を射程圏におさめる各国の軍事基地を掌握し、そこから弾道ミサイルを発射させて、それらをＩＳの力で海上迎撃する』というある意味で人的被害０の形に報復を落ち着かせた。

確実に世界中が大混乱する計画だが、しかし計算の上では死傷者は出ない。

何も知らない一般人からすれば、それは十分に悪辣なテロ行為だが、束にとってはこれ以上の妥協など絶対に出来なかった。

そして同時に丁度その頃。

束の繰り出す過激な発想を幾度も諫め続けた所為で、千冬の感覚もほとんど麻痺しており、且つ同時に精神的な限界が近づいていた。

その頃は丁度、千冬の弟――秋斗が高熱を出して倒れていた時期にあたる。

千冬は２人の弟を養う為、朝は新聞配達、昼は学校、そして夜はバイトに出る生活を送っていた。そんな生活で家庭を蔑ろにしていた

と気づいた千冬は見た目以上に限界に近く、回復した秋斗の口からそんな自身の状態を指摘される程。

千冬は秋斗の言葉に気にしなくて良いと強がってみせたが、そんな強がりも通じなかった。

普段は一夏に一歩下がる形の大人しい性格の秋斗が、その時の千冬には見た目以上に大きく見えた。

――俺を児童養護施設に預けてくれ。

そんな風に続く秋斗の台詞に千冬は殴られたような衝撃を受けた。とてつもない怒りが沸くと同時に、自身を打ちのめす強い無力感に崩れ落ちそうになり、反射的に手も上げそうになったが、千冬は秋斗の眼を見てどちらが正しいかを理解してしまった。

――姉貴は俺達を残して逝くのか？

そんな台詞に、千冬はそれまでの〝強がり〟を保て無くなったとめどなく溢れてくる嗚咽を押さえられず、千冬はその日泣き崩れた。

そしてそれから程なくしたある日。千冬は家に帰ると興奮気味の一夏と、苦笑気味の秋斗に出迎えられた。

聞けば、秋斗と一夏が協力して家計を助ける為に〝懸賞はがき〟を出しまくったと言う。

はがきを送るだけなら小学生でも出来る。そして懸賞の景品を売れば金が出来る。

懸賞に送るはがきを買うのにも金が掛かるが、2人はそこで師である柳韻を頼り、協力して篠ノ之道場の仕事を手伝いその対価として不要な〝お年玉切手シート〟を譲り受けることで実行した。

まだ小学一年生で働きに出る事も出来ない子供だが、2人のとったその行動は、眼から鱗が落ちる程に大胆な発想だ。

千冬は思わず最愛の弟達を抱きしめながら、謝罪の言葉を無意識に漏らしていた。

千冬はその日に食べた肉の味を、生涯忘れる事は無いと思った。

まだ子供だと思っていた2人の弟は、千冬が思う以上に立派に成長し、姉として誇らしく思う程。そして同時に何よりも愛おしい。

千冬はこの時、２人を〝絶対に護る〟と決意を固めた。
そして晩餐後に家族３人で記念撮影をした後で、千冬はその足で束の下を訪れある提案をした。
「――――ＩＳのテストパイロットが欲しいのなら、要求どおり私が手を貸してやる。だが、やるなら徹底的にやれ。お前は犠牲者ゼロの最高の作戦を立てろ。そして私は最高のＩＳ乗りとして、お前の夢に徹底的に手を貸してやる。ただし、私は高いぞ？」
「……つまりそれは私に雇われるって事かな？」
「そうだ。その代わりお前の言うＩＳの最高の乗り手になってやる。不服はないだろう？」
「いいよ♪　そっちの方が気合が入りそうだし、そうしよう！　あ、でも束さんの〝ものづくり〟に対する要求は厳しいよ？」
「望むところだ。ただし、夜間のバイトを辞めるんだから、それ以上の額は出せよ？」
「もちろん、さ♪」
友人ではなく〝共謀者〟として、千冬は『白騎士計画』に全面的に手を貸す事を決めた。
その条件として千冬は夜間のバイトを辞め、代わりにそれ以上の対価を束に要求する。
発明家として既に幾つかの特許を持っている束の資産は相当なモノである為、束は契約と言う形で『白騎士計画』の専属パイロットに千冬を雇った。
千冬が積極的に計画に尽力した事で、当初予定されていた白騎士の開発は、その完成度を高める為のブラッシュアップに大きく時間を取られ、その完成を大きく遅らせる事になった。
そして計画自体も幾つか見直され、確実に死傷者０というのを目標にして、幾度も緻密なシミュレーションと調整が重ねられた。
そして遂に今日。クリスマスを目前にするこの日――――『白騎士計画』は実行される。
「――――ねぇ、ちーちゃん」

「……なんだ？」

手製のカスタムキーボードを軽快に弾きながら、束は言った。

「今更ながらに思うんだけどさぁ、1年も間を置いたら〝怒り〟って結構おさまるモンなんだね。1年前に白騎士計画を実行するって決めた時は、もっとぶっ飛んでてハイな気分だったんだけど、今はそれほどなんだ」

「……なんだ？　辞めるなら私はそれでも構わないぞ？」

「いいや、辞めないよ。別にそういうつもりで言ったんじゃないし。ただね。想像してたよりも〝黒い気分〟じゃないんだ。不思議なんだけど、遂に白騎士を見せられるっていう〝嬉しい気持ち〟の方が強いんだよ。……なんでかなぁ？」

尋ねられた千冬は束の言わんとする気持ちの出所を察し、苦笑をもらした。

「始まりこそ不純な気持ちでも、その過程は一切の妥協無く、純粋でひた向きだったからな。それにこれからやる事もある意味では、お前にとっての勝負なんだろう？　自分の最大の力を発揮して、限界まで努力を尽くす……試合に臨む時、私もそれに似たような感覚を覚えたよ」

「ふ～ん。確かに言われて見ればそうかもしれないね。そうか、これが〝挑む〟っていう気持ちなのか」

束は心なしか声を少しだけ弾ませた。

その才能ゆえに今まで競う相手など存在しなかった束。加えて挑む気概など持たずとも、容易にこれまで結果を手に入って来てしまってきた。

だからこそ束は、宇宙という未知に魅せられた。ソレを生き甲斐とした。

しかし今日は違う。

ある意味で今日は、束にとっての初めての挑戦の日となる。

己の才と己の夢に最大に心血を注いだ結晶（IS）を、全世界に見せ付けてやる為の発表会なのだ。

「――――悪くないね」

束は高揚した様に、小さく笑みを浮かべた。その笑みはピアノの発表会で己の出番を心待ちにする様な、純粋な少女の顔に似ていた。

そして束は最後の仕上げとばかりに力強くエンターキーを叩いた。

「さて、ちーちゃん。そろそろ本番を開始するよ。掌握したミサイルは２０００発。だけど実際に日本列島に直撃するコースを取るのは、計４６９発。撃墜する順番や位置情報は随時私がオペレートするから、ちーちゃんはミサイルの破片に巻き込まれて落っこちないように注意する事。ここまでは良いかい？」

「あぁ、散々シミュレーションで繰り返した事だからな」

「各国の軍も間違いなくしゃしゃり出てくると思うけど、そっちの方の処理も予定どおりにね？」

「判ってる。空母だろうが戦闘機だろうが任せろ」

最後のブリーフィングを終えて、千冬は光学迷彩を纏った白騎士を駆り、ＰＩＣを起動させてゆっくりと夜空に舞い上がった。

一年を通して幾度もシミュレーションを重ね、幾度も飛行練習を繰り返した千冬の動きに一切の淀みはなかった。

当初はプラズマブレード一本を武器にした白騎士も度重なる改良を加えられ、遂にはブレード2本、レーザーキャノン2門と大幅な戦闘力の底上げが行なわれた。

千冬が所定のポイントに辿りつくと同時、束は掌握したミサイル郡を一斉に日本に向けて発射する。

――――そして程なくして、日本中が、世界中が大パニックを起した。

イージス艦の迎撃許容数を上回る数の弾道ミサイルが雨の様に降り注ぐ頃。

織斑千冬に最適化された原初のＩＳ――〝白騎士〟が、流星となって夜空を掛けた。

ＩＳは世界にその性能を見せつけた。

飛来する無数のミサイルを全て洋上で撃墜する白い騎士の姿は、束が求めたとおりに世界が目撃した。

『白騎士事件』と、後にその夜の出来事は歴史にそう記された。

一発の被弾も許さず、一発の撃ち漏らしも無く、そして一変の破片一つ零さずに日本列島を護りきった白騎士。

その存在を確保せんと、各国の軍隊が次々と戦力を送り出した。

しかしスクランブルした２００以上の戦闘機を速力だけで振り千切り、巡洋艦のミサイルを切り払い、動きを眼で追う衛星軌道上の監視衛星８機を撃墜した後、白騎士は朝焼けと共に姿を消した。

「――――おつかれ様！　ちーちゃん、最高だったよ！」

光学迷彩を纏って束のラボに帰還した千冬は、溢れんばかりの笑みを見せる束の労いを受けた。

０５　所謂、調子に乗った結果

新年を迎えてから半月程経った頃。
連日のように世界中のニュースを騒がせているのは、先日世界を揺るがした『白騎士』についてである。
先の一件は原作と同じく、『白騎士事件』と言う風に世間にその名が浸透した。
その搭乗者が一体誰なのか？
それについての情報は一切無く、未だ謎に包まれたままだ。
しかし『白騎士』と名付けられた〝インフィニット・ストラトス〟という存在を作り上げた人物は、直ぐに判明した。
『――――それで篠ノ之博士は日本の危機を察して、独自開発した例のＩＳ――白騎士を緊急出撃させたという事でしょうか？』
『危機は別に感じてないけどね。まぁ、概ねはその通りだよ。以前、学会でＩＳを発表した時に老害共に夢物語だって散々馬鹿にされたからね～。だから実際にＩＳを作って、それで一人で月まで行って証明してやろうと思ってね。開発の経緯はそんな感じかな？』
お昼のワイドショーを電波ジャックし、司会者と衛星通信で対談する人物。
彼女こそ、この一件の〝黒幕〟だ。
白騎士を開発した科学者――篠ノ之束。今までは一部の学者界隈でしか知られていなかったその天才の名は、今回の『白騎士事件』で、恐らくアインシュタインを凌ぐ勢いで世界に広まっていた。
『今回のミサイルが降ってきた件についてだけど、まぁ『暗礁宙域での小惑星迎撃能力』と『超音速機動』のデータ採取に丁度良かったかな？』
『か、稼動実験って……いやいや、そんな理由でミサイルは疎か各国の軍をあしらった上で衛星も撃墜したと――――』
『だって警告しないと、どうせお前らの事だからＩＳの性能を見て絶対に掌を返すじゃん？　それにあの時、私の造ったＩＳを無断で確保しようって型落ちの戦闘機で群がってきたじゃないか？　なんなら

あの時群がってきたハエ共の、各国の機体の識別コードを順番に晒してやろうか？』

『止めてください！　国際問題になりますので！』

『国際問題？　そんなのは束さんの知ったことじゃないね。まぁ、要するに、だ。こっちはお前らの考えそうな事は全部御見通しなんだよ。そういうわけだから、衛星を落としたのはある種の警告と受け取ってくれたまえ。――――調子に乗るとこうなるぞ♪　っていう感じにね』

『警告、とは……それは一体誰に対しての警告なんですか？』

『世界中の有象無象――まとめて全部に決まってるじゃん？　例えば私が学会でＩＳを発表した時は散々馬鹿にしておきながら、その時発表した『高速リンク通信』とか『神経の知覚予測挙動』とかの技術は都合よくパクって勝手に発表したクソ共とかね。しかも粗悪な劣化コピーで完成とかのたまったゴミくずとか？　まぁ、ちなみにそれがどこの企業のなんて奴かは一応言わないでおくけど』

『あ、あの博士……すみません。もう少しその……発言に配慮してもらっても良いでしょうか？　一応テレビ放送ですので――――』

『あ～あ～聞えませ～ん。まぁ、そういうわけで、今日は皆に、ＩＳを『宇宙に行ける新しい翼』としてまずは覚えて欲しいって事を言いに来たんだ。で、今回の事件でよく分かったと思うけど、時速２０００キロで飛翔するスペースデブリや暗礁を破壊して、安全に宇宙を観測するだけの性能がある事は十分に理解してもらえたと思う。さて、そろそろ時間も迫ってきたしこの辺でお暇させてもらうよ。またね♪』

『ちょっと篠ノ之博士！　博士――――』

束は言いたい事を言い切ると勝手に通信を切って番組を混乱させた。そもそもテレビ放送をジャックして突然持ちかけられた対談なので、始まりからしても唐突だった。

そんな風にして、束は不定期に各国のメディアをジャックし、世界中にＩＳについての説明を繰り返している。

その様はまるで突如発生する台風に等しく、ネット上では既に〝天

災〟という渾名がつけられ、束の事が知れ渡っていた。
そんな一幕を自宅のテレビで見ていた織斑家一同もまた、世界中の多くと同じく、束のフリーダム具合を見て唖然とした。
「……なぁ、千冬姉？　なんて言うか、あのスッゲー自由な人が、柳韻先生のもう一人の娘さん？」
「あぁ。残念ながらな。まったくどうしてあんな馬鹿が柳韻先生の家に生まれたのか、甚だ疑問だが――――」
苦笑いを浮かべながら一夏は千冬に尋ねる。千冬はそんな一夏の疑問に渋い表情で肯定の返事を返した。
「それにしてもあの馬鹿が。公共の電波に言葉を乗せるなら、もっと言い回しを考えろ」
千冬は友人として恥ずかしいと言った様子で、気炎を吐いた。
「でも博士だから仕方ねェんじゃねェか？　俺と会った時もあんな感じだったしさ」
そんな一夏と千冬の直ぐ近くに座る秋斗は、むしろ２人と逆で、どこか好意的な苦笑いを浮かべていた。
「それにあそこまで突き抜けて自分を通すと逆に清々しいよ。ネット上だと流石天才って意見がチラホラあるし」
束からプレゼントされたＰＣを使い、秋斗はネットの海に潜り、多くのＳＮＳやニュースサイトのコメント欄にある、束を肯定する意見のいくつかを２人に伝えた。
案の定、その意見に千冬は酷く不快な表情を浮かべていた。
「そう言えば秋斗の貰ったパソコンって、さっきの束博士が作った奴なんだっけか？」
「あぁ。市場だと５年先のスペックを積んだバカ性能のな。たぶん買おうと思ったら１００万払っても足りないと思うぜ？」
「マジかよ！」
モニターを覗き込むようにして一夏が問う。
秋斗が冗談めかしてその価値を日本円で換算すると、一夏は心底驚いたと言う表情を浮かべた。
貧乏な家庭なので、お金については一夏も結構敏感だった。

「まぁ、時間が経てば似たような性能の奴が市場で売られるって言ってたけどな。大げさに自慢すると面倒くさい事になるから、しばらくは秘密にしといてくれよ」
「……わ、判ったぜ」
「そんなにビビら無くても、ちょっとやそっとの事じゃ壊れないから安心しろよ」
「いや、そうは言ってもさ、１００万だろ？　秋斗、お前良くそんな高価なもん普通に触れるよな？」
「いや、まぁ高価っちゃ高価だけどもＰＣだぞ？　壷とか触ってるんじゃねェんだからよ……」
恐々とした視線をＰＣに向ける一夏に、秋斗は思わず苦笑いを浮かべた。
ＰＣを入手したその日の夜は一夏も、普通に興味深そうな顔で「俺にも触らせてくれ」と言ってきたのが、まるで嘘のようだ。
ＰＣに対する一変したその様子に、秋斗は兄（一夏）を、馬鹿だなぁ～と思いつつ、同時に微笑ましいと感じだ。
「それはそうと、だ。秋斗、結局お前はＰＣを使って何がやりたかったんだ？　わざわざネットの口座まで作らせて？」
と、脇から千冬が口を挟んだ。
千冬は割りとアナログな人間で、現代の生きる若者としては少々心もとないレベルでデジタルに疎い。
故に秋斗がＰＣを使って初めようとした事について、まるで理解していない様子だった。
「まぁ、現時点では〝ブログ〟かな？　後はまぁ、いろいろ？」
「……何で疑問系で言うんだ？」
「いや、だって出来る事を全部説明しようと思ったら日が暮れちまうんだもん。だから〝色々とある〟、としか言い様がねェ」
呆れた様子の千冬に、秋斗は笑いながらそう返した。
千冬に頼んでネットバンクに個人用の口座を開いた秋斗は、入手したＰＣを使って真っ先にブログを開設した。
秋斗が前世で培った技術を使い、テキストファイルで作成したＨＰ

に埋め込まれたブログ――通称『オリムラ日記』は、現時点では一夏の料理や、織斑家3人についての日々が淡々と書かれる毎日更新しているだけの実に平凡なサイトだ。

バナー広告を設置してあるので、アクセスが増えれば収入源ともなりうるが、現時点での収入はあってないようなもの。

しかしこのサイトを作った秋斗の思惑は、中長期を見据えた形の、将来的な不労所得の資金源とする為であった。

収入と言う結果が出るのは恐らく、後の第一回モンド・グロッソで千冬がブリュンヒルデ（世界最強）となるその時。全ては後の『織斑千冬公式ファンサイト』の下地として使用する為の〝土地〟のようなもので、要するに原作で身内が有名になるのを知っているが故に出来る先行投資の一種だ。

将来的に千冬が有名になった際、確実に誰かが千冬のファンサイトを開設するだろうと見越した秋斗は、簡単などんぶり勘定でその利益を換算した。

そしてその結果、予想される莫大な利益を黙って他人に譲ってやるのが心底惜しいと思い、将来確実にその既得権益を織斑家で独占する為に、今から行動を開始した。

流石にブログを開設した思惑全てを千冬本人に明かすわけにはいかず、未来が原作に近づかなければまるで意味がない計画だが、失敗したところで損失が無い故に、秋斗は躊躇無く実行に移す事にした。

ブログ自体は目下の、『織斑家の厄年』を乗り切る為の打開策ではない為、資金策を行なったとは言い難い。

しかし人生は厄年を越えた後も続き、それ以降の期間の方が長い。

将来家を出るまで貧乏であり続ける等ゴメン被りたいし、既に家族となった以上、織斑家の2人には、出来れば原作よりもマシな生き方をしてもらいたいと秋斗は思う。

故に、ファンサイトと化す予定のブログで得られる収入は、ある意味で双子の兄の一夏の将来に対する積み立てでもあった。

この世界の一夏が原作どおりにＩＳ学園に行くのかは、一夏が中学3年の受験期まで判らない。

それに受験会場を間違えなければ、一夏は普通に予定通りの進学先に通う事になる。

しかし予定通りの進学にせよ、原作一夏の進路の選び方は秋斗も思うところがあった。

原作一夏は家計の為に中卒で働きに出ようとし、それを叱責された結果仕方なく高校を選んでいる。

家族を助けたいと思う心意気は立派だが、秋斗が思うに中卒で仕事が見つかるほど社会は甘くない。加えて仮に就職出来た所で過酷な仕事で薄給な業種しか選べない。一時的に確かに金は手に入るがそれだけで、より大きな稼ぎを得る為の転職も難しくなる。少なくとも、学歴の無さは確実に転職やその後の信用の問題で、確実に一夏の足を引っ張ると思った。

秋斗も別に学歴至上主義な人間ではないが、最低限世間で必要とされるものは手に入れておくほうが良いと考える側だ。更に言うと、そんな急ごしらえな応急手当を繰り返すより、根治を目指して『より確実に稼げる技術と人脈と資格』を手に入れるまで、歯を食いしばっても大人を頼るべきだと考える。

原作一夏の最大の欠点である『視野の狭さ』と『想像力の欠如』。そして妙なところで意地を張り、短絡的な行動を直ぐに選ぶ暗愚な性格は、今の余裕の無い生い立ちが生み出した弊害だと秋斗は考えた。

そしてそんな弊害を受けたまま、『世界で唯一の男』として、ＩＳという身の丈に余る強大な力を得てしまったのが原作の一夏。

故に秋斗は、一夏が中学に通う頃には織斑家の財政を完全に立て直す事を目標にした。その上で一夏に、安心して健全な青春時代を送ってもらい、精神的なゆとりと視野の広さを学んで成長して貰いたいと考えた。

家族である以上、一夏との関係は、どう足掻いても秋斗の一生について回る問題だ。故に一夏が立派になってくれるのは、秋斗にとっても将来の助けになる。

剣道でもなんでも好きな事に打ちこめる精神的な余裕を持ち健やかに青春時代を暮せば、一夏がＩＦと原作のどちらのルートに行って

も決して損にはならない筈。それに一夏の剣は千冬譲りで、恐らく全力で励めば全国でも通用する。そしてその実績は、確実に将来の一夏の助けになるだろう。

例え未来に『ＩＳ学園』が誕生せず、一夏が唯一無二とならない未来が訪れたとしても、織斑家が健やかに生きられる道を用意したい。

故に秋斗はブログを開設した。

――――と、言葉で説明するとこの様に長々語るハメになる為、秋斗はその心の内を千冬と一夏に一切明かさなかった。

ガラじゃない上に、実際にはそれ程殊勝に深刻に考えた結果なわけでも無いからだ。

単純に将来、千冬の人気で他人が金を稼ぎだす事を考えたら、ムカついた。それが動機の七割なのだ。

「――――っと、写真はこれでよし。なぁ、一夏。なんか面白い話してくれ」

「急に振るなよ。面白い話って言っても、いきなり出来るかよ。もうちょっと具体的に言ってくれ」

「しかたねぇなぁ」

秋斗はブログの更新作業を一夏にも手伝わせた。

作業自体は非常に簡単だが、ちょっとしたデジタルの手解きには丁度いい教材だと思ったからだ。

「なら一夏の料理写真で日記を書くから、詳しい内容をくれ。作り方とかコツとか頑張った点とかそういうのならどうだ？」

「まぁ、そのくらいだったら簡単だけど――――」

「なら、折角だ。教えたんだから今日のところは一夏が書いてくれ」

「ちょっと待て！　俺が打つのか!?」

秋斗は場所を空けて、一夏の前にノートＰＣを置いた。

一夏は預けられたＰＣを秋斗に押し返そうとした。

「そんな高価なモン触れねぇよ！　秋斗が使えばいいだろ！　俺が触ってもし壊れたら――――」

「あのなぁ……」

１００万と聞かされた事が未だに尾を引いているらしく、そんな兄

の様子に秋斗は溜息混じりに言った。
「多少荒っぽく使っても壊れねぇよ。高価な道具ってのは、それ相応に頑丈に出来てるんだ。百均の包丁と、一万円の包丁で例えれば判るか？」
「……まぁ、そうだけど」
「だったら判るだろ？　だから安心して使えよ一夏」
「判ったよ」
　一夏は渋々納得し、不慣れな知識でキーボードを叩き始めた。
「秋斗は本当に物知りだな。つくづく感心させられる。ＰＣにしてもいつの間に覚えたんだ？　学校か？」
　そんな兄弟のやり取りを脇で見ていた千冬は、穏やかな表情で秋斗に問うた。
「……まぁ、そんなところかな？　モニター越しにネット世界を散々見たから、余計な事は一杯知ってるぜ？」
「頼むからあの馬鹿みたいにはなってくれるなよ？　それが姉としての唯一の頼みだ。将来、酒を飲もうがタバコを吸おうが許せるが、束みたいな奴になるのだけは勘弁してくれ。それだけは許せそうにない」
　秋斗の冗談交じりの返事に、千冬は深い吐息を混ぜてそう言った。
　秋斗は思わず肩を竦める。
「何度も言うけど俺みたいな凡人がどんだけ望んでも博士みたいにはなれやしねぇっての。だからいい加減、安心してくれよ」
「……信じてるぞ、秋斗。アイツみたいなのが身内に増えるとか、本っ当に嫌だからな？」
「はいはい」
　織斑家にＰＣが登場して以来、千冬は秋斗に『頼むから束みたいにはなるな』と、たびたび釘を刺してくる。
　秋斗は溜息混じりに返事を返し、ふと、丁度〝篠ノ之束〟の話題が出たので千冬に〝ある事〟を尋ねた。
「――――なぁ、姉貴？　そういえば博士って一人で〝白騎士〟作るぐらいなんだから、その手の機材とか工場とかも持ってるんだろ？」

「ん？　まぁ、そうだが……お前は本当に唐突だな？　今度は一体何を思いついたんだ？」

千冬は少し眼光を鋭くした。その表情に微かに動揺の色があった。

白騎士の正体が千冬である事を知るのは、原作知識で知っている秋斗を除けば、千冬と束のみ。

秋斗に原作知識が存在する事を千冬も束も知らない為、現状では当事者以外知る者は居ないというのが千冬達の認識だ。

故に秋斗は白騎士についてはあえて知らない振りをした上で、言葉を選び千冬に尋ねた。

「思いついたって言うか、ちょいと模型作りたくてさ。もし博士が、その手の工作道具とか塗装する機材とかを持ってるなら、少し貸して貰えないかと思って」

「模型？　プラモデルとか、か？　まぁ、奴ならその類の道具は確実に持っていると思うが――――」

「千冬姉！　プラモ作るなら俺も作りたい！」

人差し指で突く様にブログを書く一夏は、振り返ってそう口を挟んだ。

秋斗が発した提案は、千冬が想像していたよりもずっと子供らしい願いだったらしく、千冬はそれに安堵したかのように、小さく溜息を吐いた。

「わかった。なら一度尋ねてみよう。だが知っての通り、奴は〝ああいう〟性格だからな？　あまり期待はしてくれるなよ」

「ダメな時は、自分で買うさ」

秋斗も一夏も織斑家の後見人である柳韻からいくらかお年玉を貰っているので、仮に束に断られても資金の当てはある。

「――――無駄遣いは避けろよ？」

そんな秋斗の内心を見透かした千冬は、吐息混じりにそう釘を刺した。

☆

冬休みが終わり学校が再開する。

再会した学友達の繰り出す話題はどれも、冬休み中に起きた『白騎士事件』についての事だ。

篠ノ之束が基礎理論を発表したマルチフォームスーツ。その一つの完成系である『白騎士』の姿が、小学生男子の心を強く掴んで放さない程に強い魅力に溢れていたからだ。

両肩に設置された二門のレーザー砲。両腕のプラズマブレード。そして白の全身装甲――――。

それらはまさにロボットアニメの主人公機と呼ぶに相応しい形状で、度々電波をジャックしてテレビに登場する篠ノ之束博士がＩＳを宇宙に行く為の翼だと説明した為、男子の多くが自然と宇宙に対する夢を抱いていた。

それは冬休みの宿題の一つである作文を発表する際に、顕になった。

『私の夢』

ソレを作文に書く事を求められた多くの少年達は、皆等しく、将来は絶対にＩＳに乗りたいと語った。

（――――可哀想だけど、実際女しか乗れねぇんだよなぁ。ＩＳって）

そんな男子が多数発生する中で、秋斗はそんな級友達の台詞に苦笑を漏らした。

秋斗は課題のテーマを聞いた際、実に小学校らしい課題だと微笑ましく思っており、そんな課題を出した担任に感心した。

どんな荒唐無稽な夢を描いても笑って許される世代だからこそのテーマ。

そして一度人生を生きた記憶を持つからこそ、秋斗は夢を口にする事がどれ程大切且つ、願いを実現させる為の最善の方法かを良く知っている。

故に密かにだが、秋斗は今生の子供達が心にどんな夢を描くのかを少し楽しみにしていた。

――――しかし蓋を開けてみれば、男子の多くがＩＳ乗りになりたいと語った。

結果、秋斗は、なんとも言えない苦い表情を浮かべる事しか出来な

かった。
少年達の抱いた〝夢〟の結末を、秋斗だけは原作知識という形で知っている。つまり秋斗だけが、ＩＳが女性にしか反応しない事を知っている。
後々数多くの男子が、今回抱いた夢に敗れる事を思うと、秋斗は彼らに内心で励ましの言葉を、乾いた拍手を送る事しか出来なかった。
「――――じゃあ次は、織斑秋斗君。よろしくお願いします」
「はい」
そして秋斗の番が来た。
秋斗は担任に指された後、起立して一度教室全体を見渡した。
課題を配った担任の思惑が実際どうなのかはさて置き、秋斗は密かに、授業や課題の裏側にある教師側の〝思惑〟を想像するのを、最近の趣味にしていた。
大人な精神で受ける小学生の授業は退屈だが、意外に道徳や文系の課題は面白い。なぜなら感性に訴えかける課題は、教育者側が自分達にどのような形に成長して欲しいかを想像する余地があるからだ。
教育を施す側の意図を想像する。
そんな風にして見つけた授業中の暇潰しは、ある意味で中学生が〝授業中の教室をテロリストが占拠する〟類の妄想に似ていた。
「私の夢。１年３組、織斑秋斗。僕の夢は――――」
――――そして今回。
そうした〝遊び〟の一環で秋斗は、『担任の涙腺を破壊する感動の作文を作ろう』という悪戯を思いついた。
決して授業に迷惑をかけず、結果として評価しかされない。且つ、傍から見て面白い結末を――――。
そうしたルールを自らに設けた秋斗は今回、何時に無く真面目に課題に取り組んだ。
一拍置いてから、秋斗は手がけた作品を読み上げた。

『私の夢』　１年３組　織斑秋斗
僕の夢は家族揃ってハッピーエンドを迎える事です。

僕の家には両親がおらず、家族は僕と、９歳年上の姉と、双子の兄の３人のみ。そして後見人の柳韻先生の手助けのお陰で、何とか成り立っている家庭です。

姉は高校生ですが、毎日僕ら兄弟を養う為に、朝早くから新聞配達のバイトに行き、学校から戻って、夕方から夜遅くまでのバイトに出ています。加えて今の社会は高卒の資格が必要なので、姉は僕らを養うと同時に、学費の免除の為に常に高い成績をキープして特待生として学業にも励んでいます。

これがどれほどの大変な事かは、まだ働いた事の無い僕でも想像は出来ます。

しかし姉は僕と兄に心配を掛けないようにと、常に「大丈夫だ」という強い表情を見せて、早朝の新聞配達の仕事はつい最近、バレるまでずっと秘密にしていました。

僕は、いつか姉が倒れるのではないかといつも心配に思っています。そして出来る事なら今すぐに働きに出て、姉を助けたいと思っています。

でも僕と兄はそんな家の中で率先して家事をやる事しか出来ません。

だから僕はせめて家事だけでもと、何時も家の仕事に全力で取り組みました。

しかし僕よりも兄の方が料理が上手なので、僕はいつもその点だけは兄に任せきりになってしまいます。そして今年一度、僕は熱を出して兄と姉の両方に物凄い迷惑を掛けました。

２人とも、「大丈夫だから安静にしてろ」と優しく言ってくれました。

しかし僕はそれをとても嬉しいと思うと同時に、とても悔しく感じました。

二度と倒れてなるものか！

僕はその時にそう強く決意しました。

僕はまだ自分が将来、どんな仕事に就くかを決めていません。ですがどんな仕事に就くとしても、それが家族の助けとなる仕事に就きた

いです。
　姉や兄が体調を崩したらその時は医者に、もしも事件に巻き込まれたならその時は警察官や検事を目指すと思います。
　なので今は将来自分が何を目指す事になっても大丈夫な様に、いろんな事を学んでいきたいと考えています。
　まだ小学生なので働きたくても働けず、家族の助けになれない事が何よりも辛いですが、それでも僕は家族を助けられる男になり、その上で家族揃って幸せになる事を夢に思っています。
　家族である姉弟３人で『ハッピーエンド』を迎える事が、僕の夢です。

「――――以上です。ありがとうございました」
　我ながら感動の作文だと内心で自画自賛しつつ、秋斗は手ごたえを確認するようにこっそりと教室全体を見渡した。
　教室はシーンと静まり返っていた。
　秋斗が終わりを伝えても、他の生徒の発表と違い、拍手は直ぐに飛んでこなかった。
　秋斗は一瞬首を傾げたが、直後に凄まじい量の拍手が送られた。
「織斑君!!」
　担任の林が一際大きな拍手を送り、泣きながら秋斗に駆け寄った。
「織斑グンの、家族に対ずる優じい、気持ちが大変よく伝わってきました……グズッ。先生も力になりますから、辛い事があったらクラスの皆や、先生に素直に頼ってくださいね！」
「……アッハイ」
　半ばシャレも混じっているが嘘は書いていない。
　秋斗は自分で仕掛けておいた悪戯に対し、想像以上の反応を見せた担任の言葉に戸惑った。
　実のところ、織斑家の事情を主観的な視点で少々大げさに書いた秋斗の作文は、秋斗の想像以上の破壊力を秘めていた。
　秋斗は担任の目から涙が一滴程溢れ、教室が少ししんみりしてくれれば御の字と言う軽い感覚で悪戯を仕掛けた。

しかし蓋を開けてみれば、担任が泣き止むまで〝授業が停止する〟という事態が発生した。加えて担任と同じ様に涙腺を破壊された多くのクラスメイトが、秋斗の肩を「頑張れ！」と励ますように叩いてくる始末。

「――――おい、秋斗。お前一体、何やったんだ！」

「いや、悪い。……ちょっと大げさに作文書いた」

「はぁ？」

給食を挟んでの昼休みに、秋斗は一夏に呼び出された。

秋斗の書いた作文は職員室で話題になり、秋斗の在籍する3組生徒の話も相まって、1年生の間では『織斑兄弟は大変な状況で生きている可哀想な奴ら』という強い同情に溢れていた。

「突然皆から頑張れとか、何か困った事があったら相談に乗るとか、スゲー言われまくったぞ？　一体、お前……何をやったんだよ？」

「マジかよ……」

巻き込まれてしまった双子の兄の追求に、秋斗は苦笑いを浮かべながら正直に言った。

「冬休みの作文でちょっとな。姉貴が朝晩働いてるから、いつ倒れるか心配だっていう内容の話を書いたんだよ。別に嘘は書いてないぜ？　と、言うより寧ろ、真実しか書いてない。……それでこの結果だ」

「……本当だろうな？」

一夏は疑うように眉を顰める。

「家族の事で嘘書いたってお前には判るだろうが？　だから本当の事しか書いてねェよ。まぁでも、先生が泣いたらおもしれぇかなと思って、悪戯心でちょっと調子に乗ったってのは、ある。ま、気になるなら現物を職員室行って見せてもらってこい。多分一夏も少なからず思ってる事だと思うぜ？」

「よく分からないけど、嘘だったら承知しないからな？」

去っていく一夏の背中を見送り、秋斗は改めて起した騒ぎの大きさを実感して、少し反省した。

「――――っ？」

秋斗は不意に、一夏の在籍する2組から強い視線を感じた。
振り返ると、一人の女子がジッと秋斗と一夏の居た辺りを窺っていた。どうやら先の一夏と秋斗のやり取りに聞き耳を立てていたらしい。
秋斗が顔を確認しようと視線を向けた瞬間には、少女は既に明後日の方を向いていた。――――しかし後姿でも、彼女が〝篠ノ之箒〟である事は直ぐに判った。
（……来てたのか）
秋斗は箒が学校に来ている事を知って意外に思った。
『白騎士事件』の後、束から話を聞こうとする多くのマスコミが篠ノ之神社に押しかけ、近所ではちょっとした騒ぎになったからだ。
初めこそ神社の管理人や篠ノ之の両親が相手をしていたが、終には束が量子化した白騎士を取り出し、マスコミらを恫喝。そんな騒動で道場の門がしばらく閉じた。
それから少し経って神社周辺に不気味な程の静寂が満ちる様になった為、近所では『大きな力』が動いたと噂され、秋斗も国家クラスの権力が介入したのだと推測していた。
結果的に神社周辺と束本人からの取材が封じられた事で、マスコミや国民の多くが白騎士とＩＳについての情報に飢える。
そして束はそんな世間を余所に気まぐれに衛星を介した電波ジャックでテレビ放送に乱入、思いついた様に時々ＩＳについてのコメントをする様になった。
束の作ったＩＳと、その気まぐれの影響で日本は疎か世界中が〝篠ノ之〟という存在について詳しく話を聞きたいと思っている。
束の妹である箒が学校に来れば、それだけ彼女は注目を受けてしまう。
それが今の篠ノ之箒の立場だ。
（普通なら学校休んでも文句言われねェだろうに――――。何て言うか、スゲェな。アイツ）
冬休みが明けて普通に登校してきた箒に対し、秋斗は感心した。

☆

――――その後、秋斗の書いた作文は担任の手で市の作文コンクールに送られる事になり、結果見事〝最優秀賞〟を取るまでに至った。

地元新聞にも内容が取り上げられ、結果的に秋斗の作文は姉の千冬にも読まれる事になった。

内容に感動した千冬に泣かれ、そこに誤解を解いた一夏が加わり、秋斗は家族2人から盛大に作文を褒められるという最大の辱めを受ける事になった。

その後贈られた賞状を額縁に入れると千冬が言い出し、一夏は使い方を覚えたラップトップを使い、秋斗の与り知らぬ間に独自に『オリムラ日記』を更新。『自慢の弟』と言うタイトルで、秋斗の作文についての記事をネットの海に放流した。

秋斗がそれらに気づいた時には既に遅く、家には立派な額縁に入った賞状と、己の書いた作文を題材にした記事がネット世界に存在していた。

「……誰か俺を殺してくれ」

秋斗はこの時、二度と真面目に作文を書くまいと心に誓った。

06　切っ掛けと変化

季節は春を迎えた。

秋斗と一夏は進級して二年生になり、そして約1ヶ月が経過した頃だ。

『白騎士事件』から数えておよそ半年程が経過し、世間の様相もその日から大きく変わった。

その間に起こった大まかな出来事の中で最大のものと言えば、やはりＩＳについてだ。

先ずＩＳを開発した篠ノ之束は超法規的措置という形で、世界各国から『白騎士事件』に関する一切を許された。

事の発端は先の『白騎士事件』で、日本人である束の作ったＩＳによって、自国の監視衛星を撃墜された各国が、強く日本を非難した事に遡る。

『白騎士事件』の直後。

日本政府は多額の賠償金を世界各国から請求されたが、そこへ束が珍しく自ら登場した。

そして、「白騎士で撃墜した各国の監視衛星なら、束さんが再設計建造してあげてもいいよ？　なんだったら白騎士の二号機、三号機の実験ついでに、それを衛星軌道上に設置してあげても良いけどどうする？」という旨を発表した。

日本政府は束の話に直ぐに飛びつき、その対価として束の身柄と研究。そして家族の保護を自ら請け負い、同時に束の後ろ盾となった。

束の立案した衛星打ち上げ計画は着々と進み、新しい人工衛星はそれぞれ、元通りに宇宙に上げられた。

またその際に計画で運用されたＩＳが、〝女性のみにしか反応しない〟と言うある種の弱点を発露したが、これに関しては現在、束が自らが陣頭に立ってその解析に向かっている。

そして日本はＩＳによる衛星の打ち上げと、衛星本体の賠償を対価に負債の完済を宣言したが、世界各国は当然、それを素直に是と出来なかったのは言うまでも無い。

確かに衛星は元通りだが、この一件で各国の軍はＩＳにそのプライドを大きく傷つけられた。更に言うと衛星の再設置云々の件は、ただ日本の高い工業技術力を見せつけられただけに等しいからだ。加えて文字通り世界中の軍事力を鼻で笑う性能を見せ付けたＩＳを、〝日本だけが保有する〟という状況に、各国は密かに強い危機感を抱いていた。

目敏い政治屋の各位は、今後始まるＩＳの開発研究に、自国も食い込めないかという下心を抱き、軍部は世界のパワーバランスの崩壊に強い懸念を示す。それら多くの国々、人々の思惑から、各国は国連を通して日本に対し、〝ある条約締結〟を迫った。

・ＩＳの軍事利用目的での使用と研究の禁止。

・ＩＳの情報開示。

・ＩＳ研究の為の超国家機関の設立。

後の〝アラスカ条約〟である。

世界各国は束の開発した『宇宙に行くための翼』を、短慮にも〝超兵器〟という視点でしか見る事が出来ず、故に日本だけがその戦力を独占する事を良しと出来なかった。故に世界は日本がＩＳを絶対に戦争利用出来ないようにと連携して先手を打ち、更に日本にその条約を結ばせる為に、現国連の主要7カ国を通じて日本の島国特有のアキレス腱を突いた。

日本に対する貿易の輸出制限。

日本が条約を結ぶ事を良しとしなければ、各国はそんな経済制裁を開始する用意がある。世界は日本にそう迫ったのだ。

国連を通して行われた日本に対するある種の恫喝は、ある意味で二度の世界大戦の切っ掛けを髣髴とさせるものであった。しかし過去二度に渡り行われた世界大戦とは違い、今回の日本にはたった3機とはいえ超兵器――インフィニット・ストラトスが存在する。故に〝軍事力〟としてそれらを表に出せば、容易く日本は要求を突っぱねる事が可能であった。しかしＩＳを軍事力として表に出し、その力で世界に威を振りまけば、それは日本の国是である「平和」を自ら破るに等しい行為だ。日本がソレを破る可能性は薄かったが、同時に日本が第

二次大戦で世界から孤立した際の過去を振り返れば、決して楽観できる話でもない。

故に国連側も、日本に対するこれら対応には〝賭け〟に等しい気持ちを抱いた。

一歩間違えれば、第三次大戦の勃発――――。

だが、そんな危ない橋を渡ってでも、一国だけの独占保有を許されないのがその時点でのＩＳに対する世界の認識であった。その価値は比喩ではなく、核にも迫る脅威に等しかった。

そして日本が最初の返答を出すまでに掛かった一週間の間、世界は冷戦当時さながらの、強い緊張感に包まれた。

一週間の後、国連を通して通達された提案に対して日本は、『世界平和を自ら破壊する事は望まず――――』という前置きを踏まえてから、条約文の中身に幾つかの添削を行なった上で各国に情報開示と条約締結に向けた前向きな姿勢を示して見せた。

そして先月の半ば。数ヶ月に渡って重ねられた慎重な議論の末、日本を中心とした諸外国の間で遂に、ＩＳ運用協定、通称――アラスカ条約が結ばれる事になった。

「――――なぁ、秋斗。もう１１時だぜ？　いい加減寝ろよ……」

「あぁ、悪い。起したか？」

秋斗はネットニュースのまとめサイトで、この半年の間に起きたＩＳを巡る世界情勢を改めて調べていた。

夜も遅く、そろそろ千冬が帰ってくる頃である。

「……カチカチうるせーよ。あと、あんまりパソコンばっかり弄ってると、いつか千冬姉に取り上げられるぜ？　そうなっても俺は知らないからな？」

「すまん。そろそろ寝るわ」

「……おう」

秋斗は目を覚ました一夏の文句に素直に謝った。

織斑家の家は２ＬＤの安アパート。故に兄弟の寝る部屋は一つしかない。

寝ている人間の横で明かりを使うのは流石に無思慮だったと反省

しつつ、秋斗はＰＣの電源を落とした。
世界は未だに大きな動揺と混乱を抱えていた。その最たる原因はＩＳにあるのはいうまでも無いが、次点では篠ノ之束本人の動向そのものにある。
アラスカ条約の締結と同じ頃、国連とは別に〝国際ＩＳ委員会〟という組織が新たに設置された。
そして委員会はその直轄に、ＩＳの研究機関を新設し、まるで篠ノ之束に媚を売るようにＩＳ研究に対する強力なバックアップ体制を作った。
そんな風に強力な支援体制を作ることで束の協力を得ようと画策した各国であるが、その発足と同時に彼らは辛酸を舐めさせられた。
理由は束から発せられた〝ある文句〟にある。
『――――はぁ？　英語で説明しろ？　国際標準？　知らないよそんなの。何で束さんがキミ達の基準に合わせなきゃいけないのさ？　それにＩＳの事は私の書いた論文に全部書いてあるよねぇ？　まさかそれも読まずに集まったの？　まさか冗談だよね？　もしそうなら馬鹿じゃないの？　ねぇ。もう一回言ってあげるよ。馬鹿じゃないの？　――――日本語喋れない奴を相手にする程こっちは暇じゃないんだよ。帰れよ』
曰く、委員会が発足した当時に、真っ先に束から送られた言葉がそれだ。
余りにも横暴で余りにも傲慢な物言いだが、誰もがその言葉に対して首を縦に振らざるを得なかった。
当然、横暴だという文句も多数噴出したが、束がそんな意見を聞き入れるような人格者でない事は、既に周知の事実となっている。
故に各国が束と彼女が生み出したＩＳの技術を得る為に先ず、新たな公用語となる〝日本語〟の習得を迫られる事になっていた。
（……まぁ、俺としちゃ嬉しいがねェ）
今後ＩＳに携わりたい国では日本語教育が必修科目となる予定だ。
その流れに世界中が大迷惑を被っているが、純粋な日本人にとっては非常にありがたい話である。

海外に出かけても話を向こうから合わせてくれるからだ。
秋斗は明日に備えて眠りについた。
明日は日曜。織斑兄弟にとってある意味で〝特別な日〟である。
翌朝の7時に目を覚ました秋斗は起床と同時に再びＰＣを起動させた。
そして同じ頃に目を覚ました一夏と協力して、未だ深く眠る千冬を起さぬようにと注意しながら朝食を作り始めた。
完成した朝餉を部屋に持ち込み、秋斗はＰＣを操作して毎週お世話になっているネットチャンネルに繋げ、兄弟は仲良く揃って朝食と習慣となっている番組の視聴を開始した。

☆

8：19
『――――止めるんだノビヒコ！　俺はお前とは戦いたくない！　もう止めてくれ！』
『俺とお前は戦う事でしか分かり合えない！　剣を取れ！　Ｂ・Ｂサニー！』
『止めろ！　止めるんだ！　これ以上は――――』
『煩い！　戦え……俺と戦えッ！』
兄弟同然に育った2人の少年が悪の組織に拉致された。救出された片方は人の心を取り戻したが、もう片方の心は悪に染まったまま――そして憎悪の手先となり、嘗ての友に剣を振るう。
人の心を取り戻した戦士Ｂ・Ｂ（ブラック　ブレイド）サニーは、必死に嘗ての友に呼びかける。しかしその声を無視して宿敵シャドウジョーカーは襲い掛かった。Ｂ・Ｂサニーはその仮面の奥で涙を流した。だが涙は顔を覆う仮面に阻まれ、その悲哀をシャドウ・ジョーカーに伝える事が出来ない。シャドウジョーカーの言うとおり、Ｂ・Ｂサニーは戦う事でしか応えてやる事が出来ないのだ。
『うぁあああああああ』
Ｂ・Ｂサニーは慟哭し、拳を振り上げた。叫びを上げたその声は余

りに悲痛だった。
　振り上げた拳がシャドウジョーカーの仮面に叩きつけられる。
『そうだ、それでいい……それでいいんだ……』
　とその時、シャドウジョーカーが微かに呟いた。
　その言葉の意味を推し量る事が出来るのは、シャドウジョーカーのみ。そして戦いの模様を見守るＢ・Ｂサニーの仲間達は、嘗ての友が殺し合う様を沈痛な面持ちで見届ける事しか出来なかった。

「――――っ、Ｂ・Ｂサニー！」
「……」
　戦いの模様を見守るのはＢ・Ｂサニーの仲間だけではない。日本中にいる多くのちびっ子と、夢を忘れずに生きる大きな御友達がそうだ。
　そして織斑家の一夏と秋斗もその内に含まれていた。
　テレビの中で戦うヒーローの、これまでに見せた事の無い壮絶な様子を見て、一夏は戦いに含まれる身を引き裂くような悲哀に拳を握り締めた。対する秋斗は微かに目を細め、無言でその模様を見守っている。
　戦いの最中に何時も流れる挿入歌が、今回だけは違っていた。主題歌のリズムをオルゴールの音で刻んだＢＧＭだ。
　そんな優しくも悲しいメロディーの中で戦う親友同士の壮絶な決闘に、一夏は思わず呟いた。
「何で判らないんだよ……一番悪い奴がそこにいるじゃないか！　なんで親友と戦ってんだよ、サニー！」
　Ｂ・Ｂサニーに戦いを仕掛けるシャドウジョーカーと、ソレを見てうっすら笑う全ての元凶。「もし俺がその場に居て、一緒で戦うことが出来たなら」と言いたげな表情で、一夏は拳を握って戦いを見守った。
「倒して欲しいんだろうなぁ。多分」
　そんな一夏の感想を脇で聞いた秋斗は淡々と言った。
「どういう事だよ？」

「戦う事でしか分かり合えないって言うのは言葉の通りだろ？　〝もう自分にはそれしか出来ない〟って気づいてるからだ。シャドウジョーカーにまだ『心』があったとしても、改造された身体の所為で戦う事を自分で止められないんだろうよ。んで、それに気づいたからB・Bサニーは親友を楽にしてやる為に拳を握った。……要するそう言う事じゃね？」

「……」

「元凶を倒すよりも友達を助ける方が何倍も大事な事だろ？　それに周りの仲間を見てみろよ。皆、B・Bサニーの戦いを邪魔しないし、同時に敵の良いようにもさせてない。……仲間として、B・Bサニーの固めた覚悟を邪魔しないって、連中も腹を決めてんだ」

B・Bサニーは啼きながらその拳を振りぬき、シャドウジョーカーの力の源であるベルトのバックルを貫いた。B・Bサニーの腕に血が滴ると同時に、壮絶に戦った宿敵同志にして親友同士は、再会を確かめ合うように抱き合い、その動きを止める。

崩れ落ちるシャドウジョーカーを支えるようにして、B・Bサニーは腕の中にその身体を引き寄せた。

『……すまない』

シャドウジョーカーはB・Bサニーの謝罪に対して、小さく首を横に振る。

『……ゴウタロー……ありが……とう』

シャドウジョーカー最期の言葉にB・Bサニーは泣いた。

無表情な仮面に隠されたその下で全力で泣いた。そして硬く拳を握り『必ずその仇を取る』と誓う。

B・Bサニーは、親友を二度と敵に利用されぬようにと、その亡骸を己の能力で光に変えた。

余りにも壮絶な話に見入っていた秋斗は、視聴しながら食べようと思った朝食に殆ど手をつけられなかった。

一夏も同様であった。

「なぁ、あの場合は友達として倒してやるのが正しいのか？　もっと他に何か方法無いのかよ？」

番組の視聴を終えた後、食事を再開した秋斗に一夏は尋ねた。

一夏の質問に、秋斗は視線を宙に移す。

「あ～、どうだろうな。もしかしたら、あったのかもだが――――」

「だったら――――」

「だけど仮にそれがあったとして、そんな〝余裕〟なんてなかっただろ？　助けるなんて余裕がある奴にしか出来ねぇよ。それに放っておけばシャドウジョーカーは敵に操られたまま。どんどん他の人間を拉致して改造してくるし、〝助けられるかもしれない〟なんて気持ちで問題を先送りにしたら犠牲者が出る。だから、Ｂ・Ｂサニーが自分の手で親友を倒した。その答えを俺は間違ってるとは思えないな」

「間違ってるだろ。助けられるならそっちを選ぶべきだ！　俺ならぜってーそうする」

「ふ～ん」

正しい日本人男子の教育として秋斗は毎週日曜朝の『超英雄時間』に一夏を同伴させた。

半分は秋斗の趣味であるが、これが意外に功を奏した。

一夏は今日も立派に、ヒーロー達からその生き様や考え方を学ばされた。

先ほど視聴した『マスクドライダーＢＢ』はそのビジュアルも含めてシリーズの中でも既に傑作として名高い。

視聴後、一夏は秋斗の解釈を聞いて不満そうな吐息を吐く。

「納得できねぇよ」

「ほぅ、じゃあ一夏がＢ・Ｂサニーだったらどうするよ？　例えば千冬の姉貴が改造されて、お前の前に立ちはだかったらどうする？」

「絶対助ける。助けるに決まってる。あたりまえだろ？」

「それはどうやって？　姉貴は一夏の言葉に耳を貸さずに『戦え』と言うだけで、一夏がそれに応じなかったらクラスメイトを殺すとしたらどうする？」

「それは――――」

意地悪な質問を送ると一夏は言いよどんだ。
秋斗はコーヒー牛乳を飲みながら、ゆったりとその答えを待つ。答えの内容よりも考える事自体に価値があると考えるからだ。
故に秋斗は、静かに一夏の答えを待った。
「……わかんねぇよ」
しばらくの沈黙の後。
一夏は答えを見つけられずに降参の溜息を吐いた。
「まぁ、そうだろな」
秋斗は一夏の性格を察していたが故に、その答えを聞いて思わず苦笑を漏らした。
「……秋斗ならどうするんだよ？」
一夏は唇を尖らせ、逆に秋斗に問題を振った。
「俺か？　俺なら状況にもよるが、もし俺がＢ・Ｂサニーなら迷わず姉貴にＢ・Ｂキックを叩き込んで潰しに行くぜ？」
「はぁっ!?」
間髪いれずに答えて見せた秋斗に、一夏は驚きを見せた。
「なんで！　千冬姉だぞ？　お前そんな、家族をそんなあっさり――」
「家族で、姉貴だからだろ？　敵の手に利用されて悪事を重ねてるんだろ？　俺にＢ・Ｂサニーと同じ力があって、戦うか迷ってる間に誰かが泣くなら、身内としてその行動を止めに行く。最悪、倒す以外に方法が無くてもな。それが姉貴の誇りを護る事にもなると思わないか？」
秋斗は前世で好きだったヒーローの台詞と、原作一夏が放った台詞のそれぞれを混ぜ合わせて言った。
「家族を倒す事の何処が護るって言うんだよ。護れてないじゃないか？」
「そりゃ皆が納得できる上手い方法があるなら、迷わずそっちを選ぶさ。だけど思い通りにならない事の方が世の中多い。だから皆〝選ぶ〟って段階になると意見が割れる。一夏と俺の意見が相容れなくても、そいつは当たり前だ。……とりあえずここまでは良いか？」

「……あぁ」
　秋斗は一夏の理解が追いつくように言葉を一度きり、そして言い聞かせるように言葉を続ける。
「俺が思うに『護る』とか『助ける』っていう言葉の解釈は一つじゃない。例えば家族を養う為に毎日働く事や、料理作って家族の腹を満たしてやるって事も、十分に護る、助けるって意味になると思ってる。敵を倒して命を救う事じゃなくて、誰かの為を思って躊躇わずに行動出来る事、〝その全て〟が、俺は助けるや護るって言葉に含まれると思ってる」
「……そうなのか？」
　一夏は理解出来る様で理解出来ない様な、キョトンとした表情を見せる。
　秋斗はそんな一夏に対し、前世の記憶によって精神的に加齢した年長者としての言葉を送った。
「勘違いしねぇ様に言っておくが、誰かを〝想って行動する〟ってのは、あんまり格好いい事ばかりじゃないぜ？　テレビのヒーローは〝あえて〟それを格好良く演出して見せてるけどな」
「そうなのか？」
「そうともさ。実際現実で、ヒーローみたいな事をやりたがる奴が居るけど、そういう奴を傍から見ると意外に滑稽だしウザイだろ？　クラスに一人ぐらい居るんじゃないか、妙に正義感ぶってる可哀想な感じの奴？　勝手な基準で良し悪しを判断して、他人の都合に文句つける様な感じの？　それと一緒だよ。本人的には護りたい助けたいと思って行動してるのかもしれないが、理解されなかったらただのウザイ独りよがりの馬鹿にしか見えない。それに自分の基準で良し悪しを判断するから、結果的に騙されて悪に手を貸していたってことも十分ありえる。んでもって、選んだ結果に後悔する日も来る。もちろん行動や判断を家族や友達から非難される事だってある」
　それだけの言葉を一気にまくし立てると、一夏は押し黙った。
「――――でもまぁ、それでも諦めずに誰かの為を想って行動して、もしそれが誰かに〝理解〟されたら、そいつはヒーローになるかもな。

ま、俺にとっては千冬の姉貴やお前がそれに当たるが――――」
「俺や、千冬姉が？」
付け加えるような一言に、一夏は顔を上げた。
「あぁ。俺が熱出した時、嫌な顔一つせずにお前俺の事、風呂入れて頭洗ってくれただろ？　ついでに三食、毎回味を変えてお粥を作ってくれたし、姉貴は言わずもがなだ。今もクタクタになって寝てる通り、毎日毎日俺達の為に凄まじく働いてる。……俺は一夏や姉貴が俺を想って行動出来る人間だと知ってるから、俺にとってはヒーローと呼べる」
「いや、それは……って、いうかソレを言うなら秋斗だろ？　秋斗が懸賞はがきを出すって言ってなかったら、食えなかったもんたくさんあるし。それに冷蔵庫やテレビとか手に入れたのは秋斗じゃないか？　お前の方こそ、ヒーローだよ」
「そうか？　そいつはありがとよ。んじゃ、ソレを踏まえて聞くが、俺が今から見知らぬ誰かを無差別に殴ろうとしたらお前はどうするよ？」
「いきなりなんだよ、そんなもん止めるにきまってるだろ」
「どうやって？」
「そりゃ……ぶん殴っても――――」
「じゃあ、何で止めるんだ？」
「そんなの……家族だからだよ、それにそんな行動を起こした理由も知りたいし、何より許せないからだ」
「なぜ、許せない？」
「なぜって、そんなの当たり前だろ！　いきなり誰かを傷つけるなんて」
「じゃあ、その『当たり前』って言葉で濁さずにどんな〝気持ち〟が湧いたのか言葉にしてみなよ」
「それは――――」
一夏は一瞬、言いよどむ。
そして少し間を置いてから、不安そうに言った。
「……見たくないからだよ。誰かを傷つけてる家族の姿なんてさ」

「じゃあ、ちゃんと理解出来てるじゃねェか？」
「……へ？」
一夏はキツネに抓まれたような顔をした。
そんな一夏に苦笑を送りながら秋斗は言った。
「身内が誰かを傷つけようとした。それを放って置けば誰かが犠牲になる。そんな家族の姿を見たくない。だから家族として止める。――今、一夏の言った言葉は、さっきのB・Bサニーの例えで出した俺の答えと一緒だよ。……んでもって、B・Bサニーがシャドウジョーカーを倒すと決めた理由の一つがそれだ」
「あ！」
一夏は最後のピースが嵌ったような顔をした。
「親友の過去を知ってるだけに、その変わり果てた姿を見たくない。でも放っておけば周りに犠牲が出続ける。だから友殺しの罪を背負ってでも親友を倒す覚悟をした。これ以上罪を重ねて欲しくないから。加えて敵に操られてるなら尚更だ」
「……そっか。そう言う事か！」
ついに納得した一夏は、大きく溜息を吐いた。
「〝護る〟ってすげぇ大変な事なんだな。っていうか、ヒーローって凄いな！」
感嘆とした様子で深く息を吐きながら、一夏は言った。
「今更、気づいたのかよ。でも多かれ少なかれ、誰しも意外に当たり前にやってる事だぜ？　無論、一夏や姉貴もな。まぁ、重要なのは今の自分に何が出来るかを知る事だ。『強くなるなら己を知れ』って柳韻先生もよく言ってるだろ？」
「おぉ、確かに！　じゃあ、俺もB・Bサニー見たいに皆を護れるようになれるかな？」
「さぁ、な。とりあえず眼に映る全部を護りたいなら、最低でもB・Bサニーより強くなる必要があると思うぜ？」
「――っ、それはちょっと厳しいな」
「でも挑み甲斐があるだろ？　道場でこの間、姉貴を超えるかもしれないって褒められたんだし。ま、諦めなければ可能性はゼロじゃねェ

さ」

一夏は番組が終った直後の歯がゆさから一変して、強い決意に満ちた笑みを浮かべた。そして掻き込むようにして食べ掛けの朝食を一気に平らげると、徐に竹刀袋を持って立ち上がった。

「っべぇな。よっしゃ！　なんか無性に稽古したい気分になってきたぜ！　ちょっと素振りしてくるけど、秋斗も来るか!?」

「行かねェよ。剣で強くなるのは一夏に任せる。ま、頑張って来いや」

「そうか。んじゃ、行って来るぜ！」

「おう、いってら」

一夏は食べ終わった食器を片付けると、そのまま駆け足で家を出発した。

時刻は朝の9時。道場はまだ開いていないので、恐らく公園にでも行ったのだと秋斗は予想する。

「……一夏はヒーローになるだろうなぁ。多分、姉貴も」

秋斗はぼんやりと、独りになった部屋で笑みを浮かべた。

決して主人公として生み出されずとも、人はヒーローになる事が出来る。

その条件とは目立ち、大衆に〝理解される事〟であると、秋斗は様々なヒーロー作品を見た結果、そう結論を出した。

目立つだけではまだ不足。重要なのは存在を理解される事だ。

身内として贔屓目に見ても、一夏には十分にその素養があるように見えた。そして千冬も同じ。

秋斗は思わず苦笑を漏らす。

「流石、〝織斑〟ってことかな？　さて、俺はどうなるかねぇ……」

上から目線で説教がましく一夏に言った台詞を思い出す。

とてもじゃないが秋斗は家族2人と違い、自身にヒーロー的な素養が一切ない事を自嘲した。

「――――に、しても今週のB・Bサニーやべぇな。まだ中盤も始まったばっかりの癖に、こんな最終決戦前みたいな内容で大丈夫かよ？」

秋斗はPCを操作し、ネットチャンネルの履歴からもう一度今週の『マスクドライダーBB』を視聴する。

そして愛用するオークションサイトのページを開き、１０００円で落札した『可動フィギュアのジャンク詰め合わせ』の配送指示と、懸賞の当たりである不要な家電の入札状況を確認した。

07　フラグとは気づけば立っている……らしい

先ほどの弟（秋斗）とのやり取りで無性に汗を流したくなった一夏は、竹刀袋を持って家を飛び出した。

鍛錬には篠ノ之の道場を使いたい所だが、流石に時間が早すぎた。

なので一夏は家から程近い場所にある近所の公園へと向った。

「――――さて、と……」

公園について早々に、一夏は竹刀袋から愛用の〝木刀〟を取り出した。

柳韻の教える篠ノ之流剣術。その本質は戦場で生み出された実戦向きの剣だ。故に伝統なのか、普通の剣道を倣う際も、素振りなどの基本動作の殆どを木刀を使って学ばされる。

しかしそんな理由以上に、今の一夏は竹刀よりも木刀を使いたい気分であった。

軽く柔軟をして筋を解した後、一夏は背筋を伸ばして木刀を正眼に構えた。

公園までの道のりを走ってきたので身体は既に十分温まっている。

「っ……はぁっ！」

裂ぱくの気合を入れて、幾度も素振りを繰り返す――――。

無心で幾度も繰り返す――――。

その様は公園の散歩を日課にしている老人が、思わず振り返って顔を綻ばす程だ。

それ程に今の一夏には、若い活力が満ちてあふれていた。

年若い少年が特撮番組に影響される事は珍しい事ではない。何処の家庭に生まれた少年でも、一度くらいは経験がある事だ。ヒーローの背中に追いつきたい。ヒーローの生き様に感銘を受けたからこそ、その在り方を目指したい。そんな願いを、一夏はこの時純粋に強く抱いていた。

しかしその決意の多くは成長と共に色あせていく場合が殆どである。最期の瞬間までそう在れる者はほんの一握りで、そう多くはないだろう。

だが今日、一夏という少年の中に目覚めた『強くなって護れるようになりたい』という強い気持ちは、その後の人生を左右する程の固い決意と化していた。そしてその決意が後の一夏の生き様の根源に昇華していくと、一体この時誰が予想しただろう？

――――そんな一夏を見つめる一つの視線があった。

「織斑の兄……？」

素振りする一夏の姿を見かけたのは、偶然にも一夏と同じ小学校に通う同級生――篠ノ之箒であった。

箒も偶々、今日は公園で鍛錬をしようと出てきた所である。理由は姉（束）が朝から家に居るからだ。故に箒は、珍しく屋外に鍛錬場所を探している途中であった。

たまたま足を運んだ近所の公園で箒は、篠ノ之流の素振りを繰り返す〝一夏〟の姿を発見し、何となくその足を止めた。

剣の道を歩み始めたのは、織斑兄弟よりも箒の方が早かった。

箒には、父――柳韻譲りの剣才と厳しい鍛錬に対する強い情熱が在り、故に篠ノ之道場に通う同い年の間では密かに〝最強〟という名の評価を受けていた。

尊敬する父から授かった技の結晶――それがある種、形となった渾名。当然箒はその誉れに対して強い誇りを持っていた。

しかしそんな矢先。

箒の前に織斑兄弟が現れる。

織斑兄弟は箒が父以外で尊敬する姉弟子――織斑千冬の弟達であり、両名とも箒と同い年であった。

同じ小学校に通う同学年として、箒は兄弟の入門の際に2人と引き合わされた。

『織斑秋斗……』

『……篠ノ之箒、です』

『俺は織斑一夏。よろしくな！　同い年だし箒って呼んで良いか？』

自己主張の薄い物静かな兄弟の弟――秋斗。それだけなら、まだ箒にとってはマシだった。

しかし問題はその兄の一夏だ。一夏は箒の苦手な、気安く馴れ馴れしい性格の少年だった。

箒は顔を突き合わせた瞬間から、織斑の一夏の方とは性格的に絶対〝相容れない〟と感じた。

それが邂逅した際に箒が抱いた兄弟それぞれに対する感想だ。

そして織斑兄弟が入門してから三ヶ月が経ち、その三ヶ月という短期間で、兄弟はそれぞれ才を顕にした。

弟の秋斗は器用であるが気迫が薄く、柳韻に『剣よりも無手の方が向いている』と評され、兄の一夏は姉の千冬と同様に『爆発力に優れ、更にコツを掴んだ後の成長力は目を見張るものがある』と高く評価された。

経験者の箒をして、特に一夏の方が内に秘めるその剣才は〝異常〟に思えた。

――――そしてそれから二ヵ月が過ぎ、道場内で門下生同士による腕試しの試合が開かれた。

箒はその時の試合を今でも思い出す。なぜなら幼い時期から木刀を振るっていた箒が、初めて屈辱を受けた試合となったからだ。

勝負内容は紙一重の僅差だが、剣を振るった回数と年月が箒に強い敗北感を与えた。

無論、その相手は織斑一夏だ。

その日以来、篠ノ之箒にとって織斑一夏の存在は、ライバルを超えて〝敵〟と化した。

『……なぁ、そんな隅っこに居ないで皆と一緒に稽古しようぜ？』

『……』

試合の後、幾度か一夏の方から、箒に話しかける事が度々あった。

が、箒はその一切を無視した。

馴れ合いを求めるような一夏の言葉は、箒には〝強者（才能）の持つ余裕〟にしか聞えなかったからだ。

一夏の成長振りは、箒の姉である束と同じく〝才能〟によるものだと箒は密かに感じていた。

そもそも箒が束を避ける様に鍛錬をする様になったのは、姉に同じ

土俵に入ってきて欲しくないというある種の自衛である。束が箒と同じく剣の道に興味を抱き、それを学び始めれば、恐らく束は何時ものやり方（才能）で、箒の積み上げた努力を灰燼にしかねない。故に箒は己のアイデンティティを護る為にも束を避けた。

そんな姉（束）と同様の在りかた（才能の力）で己を打ち砕いた織斑一夏の存在を〝敵〟と呼んだのも、そんな感情が根底にある故――――。

そして箒は、一夏に勝つ為に、以前にも増して独りでの鍛錬に傾倒する様になった。

箒が意固地になる頃。箒の性格とはまるで間逆の一夏は、いつの間にか道場の他の同い年達と、仲良くなっていた。結果として道場の輪の中心に居る一夏をいつも強く拒絶する箒は、自然と道場での孤立を深めていき、その様子を心配した父と母から「もっと周りに対して懐を広くしなさい」と、度々箒に叱責を受けるようになった。

しかし箒はそれを頑固に聞き入れず、ひたすらに打倒織斑一夏の剣を独りで研ぎ続けた。

――――しかしそれから程なくして、箒の抱く織斑一夏に対する敵意が、少しだけ軟化せざるを得ない事件が起こった。

去年の冬休みが明けてから、まだ間も無い頃。

箒の在籍する学年で、織斑一夏の弟――秋斗の書いた作文が噂になった事が切っ掛けである。

この時の箒は織斑家について、親から一応の事情を少し聞かされていた程度で、その内情についての深い理解は一切なかった。故に箒は、秋斗の書いた作文で織斑家の事を知る事になる。

地元の新聞で取り上げられた秋斗の作文の全文を読み、そこで初めて織斑家の事情を知った箒は、ふと、自分のそれまでの一夏に対する態度を恥じた。

「――――ふぅ、これで３００。っと、少し休憩……。あっ、しまった！　タオルと水筒持ってくるのすっかり忘れてたぜ、ちくしょう」

素振りを終えた一夏は頭を抱えた。

どうやら竹刀袋〝しか〟持たずに家を出てしまったらしい。その

事に一夏は今更気づいた。
一夏は仕方ないと頭を振り、公園の水呑み場で水分補給を行う。
その際。一夏は初めて箒が見ている事に気づいた。
「あれ？　……篠ノ之じゃん。なにしてんだ、こんなとこで？」
「っ!?」
箒の存在に気づいた一夏は、声を掛けるべきかを一瞬だけ悩んだ。
今まで散々無視されてきた経験が脳裏を過ぎったからだ。しかし直ぐに他の同門に対するモノと同じ調子で、一夏は言葉を投げた。
そして声を掛けられた箒は、一夏に見つかった事で、動揺を顔に浮かべていた。
そんな箒の様子に一夏は首を傾げる。
「いいかげん、返事ぐらい返せよな。で、お前も鍛錬しに来たんだろ？」
「……あ、あぁ。そうだ」
「なら丁度良いや。折角だから一緒にどうだ？」
箒の下げている手提げと竹刀袋と見て一夏はそう提案をした。
『……』
箒は一夏の提案に一瞬悩んだ。
しかし家に帰っても〝姉〟が家に要る事を思いだして、箒は初めて、一夏の提案に乗る事に決めた
そんな気まぐれが働いた理由は、間違いなく織斑の家庭事情を知った所為だ。
勝負の場は除くとしても、流石にこれまでの様に常に邪険な態度を貫けるほど、箒は冷淡ではなかったのだ。
「……おい、あまり肩を冷やすな」
箒は仏頂面で、手提げに入れていたタオルを一枚取り出し、一夏に差し出した。
箒の行動に一夏は目を見開いた。
道場で幾ら話しかけても無視される相手に突然施しを受ければ、誰だって驚きで固まる。
一夏はぎこちない様子で箒からタオルを受け取ると、戸惑いつつ礼

を言った。
「……ありがとう、それと悪い。今度、洗濯して返すよ」
「……別にいい」
　箒は素っ気無く返した。
　一夏は軽く苦笑いを浮かべた。
「いや、ちゃんと洗って返すよ。と、言うか、篠ノ之って俺の事嫌いじゃなかったっけ？」
「……馴れ馴れしい奴は誰だって嫌いだ。だから勘違いするな。別に私は、お前と馴れ合う気はない。……でも、タオルぐらいは貸してやる」
「お、おう。そうか。よくわかんねーけど、ありがとな」
「……」
　タオルも買えない程に貧乏なら、流石にそれくらいは貸す――――。
　箒の台詞はそんな同情の気持ちに満ちていた。しかし面と向って他所の家庭の〝貧乏〟を指摘する程恥知らずでも無い。箒の人見知りと口下手が作用して、その言葉は主語を欠いた妙な言い回しになった。
　もしも一夏が箒の内心を知る機会が在れば「流石にそこまで貧乏じゃねーよ！」と返すところ。だが一夏にそんな察しの良さ等あるはずが無く、一夏は箒の言い回しに疑問を浮かべ、素直にもう一度礼を言った。

☆

　特撮を見て奮起した一夏が勇み足で修行に赴いた後。秋斗は二回目の『マスクドライダーＢ・Ｂ』の視聴を終えると、今年の〝夏休み〟に始める計画の準備を進めた。
　今年の夏休みは、秋斗にとって今後を左右する重要な勝負の季節となる。
　まずネットオークションで安いジャンクフィギュアのパーツを数

百円単位で競り落とした秋斗は、ホームセンターの通販サイトでポリエステルパテや紙やすり、デザインナイフ等を買いこんだ。

夏に行なう資金策は、これまでのような小銭を稼ぎとはわけが違う。秋斗が自身の前世で培った〝腕前〟が、盛大に試される大掛かりな代物だ。加えて計画に投入する資金も、今回の為に懸賞品を売って作った秋斗の個人資産の約８割を投入する程。

現段階ではまだ実行段階に程遠いが、秋斗はその為の準備を進めるのに余念はなかった。

「――――とりあえず、夏の前には準備を終えたいところだな。それと後は、博士がどう動くか、か……」

祈る事は山ほどあった。計画の成功はもちろんだが、それ以前に秋斗がノートＰＣを手に入れた時と同様、〝天災様〟の気まぐれが起こる事を秋斗は祈っていた。

既に千冬を通じて布石を打っている。しかし今の世界情勢を見るに束はかなり多忙だ。故に秋斗の祈りが通じる可能性は、贔屓目に見ても５０％と言ったところだろう。

一応だが、秋斗は最悪束の協力が無くとも計画が成り立つ様にと今回のプランを組んだ。故に束の協力が成否に大きな影響を与える事はないが、その場合単純に、計画の実行自体が大幅に遅れてしまう事になる。

秋斗は座椅子に背を預け、祈る様に腕を組んで天井を睨んだ。

（……『人事を尽くす為に天災を待つ』ってか？）

秋斗は思いついた下らない諺を内心で呟き、大きく溜息を吐いた。

去年と同様、秋斗は一夏と協力して、今年も篠ノ之神社の年始の手伝いを行なった。無論、いくらかの御駄賃と懸賞はがき用のお年玉切手シートを手に入れる為だ。そしてＰＣと電子口座の入手した後は、懸賞品を街の質屋ではなくネットオークションを流す方向にシフトした。景品の売却によって得た資金の一部を家に収めつつ、同時にコツコツと口座に貯めていくらかの個人資産も作った。それを使い、ホビー雑誌に掲載された限定受注生産のフィギュアを購入して、時間を置いてからの転売活動も行なった。

数千数百円の儲けを求めて毎日オークションサイトで市場価格を繰り返し確認する日々。当然、ブログ『オリムラ日記』の更新も同時進行――――。

普通ならば十分すぎる対策の数々を秋斗は行なった。

しかしそれでも織斑家を立て直すには、もっと大掛かりな〝治療〟が必要だった。

「まぁ、以前に比べると幾分かマシになったけど……」

秋斗はチラリと、千冬の眠る隣の部屋の襖に視線を移した。

最近の千冬は以前に比べて、身体に配慮したペースで仕事をする様になった。

それを秋斗は喜ばしいと思うと同時に、その弊害に眼を瞑る事が許されない現実に顔をしかめた。

『白騎士事件』を境に千冬の夕方のバイトの稼ぎが目に見えて減少したのだ。それは単純に労働時間が短くなったという意味でなく、時給そのものがごっそり減ったとしか考えられない状態になっていたのだ。秋斗はその理由を、バイト先が潰れたのだと考える。

（――――幸いなのはいくらか貯金がある事か）

秋斗は通帳を眺め、現状に対して可能な限りに早く手を打ちたいと焦った。

秋斗が『前世の記憶』に目覚める以前に比べると、確かに現在の生活には、幾分かの〝ゆとり〟がある。

焼け石に水でもめげずに続けた金策と、他ならぬ千冬自身の頑張りのお陰だ。

その〝ゆとり期間〟に千冬が休息するのは多いにアリだ。だがその〝ゆとり〟は、貯金を切り崩して得た一時的な小休止に過ぎない。

つまり、何れ〝終わり〟が確実に来る。

「――――ん、秋斗だけか……一夏はどうした？」

「さっき、竹刀もって出かけてったぜ？」

「……そうか」

隣の部屋の襖が開いた。

眼を覚ました千冬が起きたのだ。

千冬は寝起き眼を擦りながら、のそりとした獣のような動きで秋斗の前に立った。

秋斗はその様子に小さく笑った。

（……一応女なんだから、もうちっと恥らえよ。どこの誰に貰われるかは知らねぇけど？）

高校2年生となった千冬は現在、華の17歳。家族として贔屓目に見ても十二分に美少女だ。

しかしスタイルが幾ら魅力的でも、パンツ一枚、ノーブラTシャツで堂々と部屋を歩き、寝癖頭で盛大に口を開けて欠伸をしている様では台無しだ。

もしも一夏が居たら、真っ先にその格好に声を荒げる所である。

あまり普段の格好に頓着しない秋斗は、そんな千冬の様子に対して特には言わなかったが、内心では忠告と小さく苦笑を漏らしていた。

「ふぁ～あ……で、秋斗は行かなかったのか？」

「まぁ、俺はそれほど剣道好きじゃないしね。てか、それよりも風呂入ってきたら？　……顔、ヤバイぜ？」

「……失礼な事を言う。まぁ、いい。そうする」

「飯は？」

「食べりゅ」

半分程寝ぼけている様子の千冬は、ノロノロとした足取りで風呂場に向った。

普段の凛とした姿とは大違いである。そしてそんな姉の朝飯（エサ）を用意する為に、秋斗も席を立った。

飯の準備と言ってもゼロから作るわけではなく、今朝の時点で作ったサンドイッチの余りを器に盛るだけである。付け合せに一夏の作ったのコンソメの野菜スープを暖め、最後にコーヒーを煎れたら完成だ。

秋斗は換気扇のスイッチを入れて、薬缶に水を入れて火に掛けた。

――その時、玄関先でチャイムが鳴った。何故か〝三三七拍子〟のリズムで。

秋斗は来客の仕掛けた悪戯に思わず吹いた。

「……誰だよ？」

千冬が風呂に入っているので対応は秋斗が行なうしかない。

明らかに配達や、集金とは違うタイプの来客だと判り、秋斗は一端火を止めて溜息交じりに玄関先へと向う。

その間も三三七拍子のリズムで、玄関のチャイムが鳴らされ続けた。

一度だけならまだしも連続して続けられると腹が立ち、秋斗は玄関を開けると同時に怒鳴った。

「うるせェな、この野郎！」

「ちーちゃん！　遊びに来たよぉぉおお！　ひっさしぶりぃ！」

扉を開いた瞬間。

大きくて柔らかいモノに顔を包まれた。

それどころか全身を抱きすくめる様に拘束された。

「……あり？　ちーちゃんの感触じゃない」

来客は篠ノ之束であった。

束は抱きついた相手が千冬でない事に気づき、首をかしげながら抱擁を解く。

そして千冬と間違えて抱きついた〝秋斗〟を確認し、右腕を振り上げて挨拶した。

「おぉ！　あっくん！　久しぶりだね♪」

「……博士か」

幾ら豊満な女子高生の胸とはいえ、不意打ちで顔面を叩きつけられてはそれなりに痛い。

幾らおっぱいが柔らかいとはいえ、人間の顔面とは急所の塊なのだ。

それが結果としてラッキースケベであっても、強かに鼻を打ち付けられたら誰だって呻く。秋斗もその例に漏れなかった。

「痛ってェ――――」

秋斗は強かに打った鼻の痛みで、思わず顔を押さえた。

――――人事尽くして天命を待つ。

先ほど秋斗はそれを少しアレンジした言葉で天災（篠ノ之束）の登場を祈った。

しかし実際に天災が目の前に訪れると、秋斗はその行動を早まったかもと、少しだけ後悔した。

「ちーちゃんは？」

「風呂、入ってる」

「ほほぅ、それなら束さんのやる事は一つしかないぜ！　止めてくれるなよ、少年！」

言うが早いか、束は秋斗の脇をすり抜けて千冬の居る織斑家の風呂場に突入した。

――――そして程なくして、千冬の怒号が部屋中に響いた。

０８　流石、主人公『原作』

「――――で、何の用だ？　私としては、しばらくはお前の顔を見ないで済むと思っていたんだがな？」
「久しぶりに顔を見せてあげた親友に対して、それはちょっと酷くないかなぁ。あ、あっくん。出来ればタオルとか貸してくれると嬉しいんだけど、無いかい？」
「秋斗、雑巾だと。出してやれ」
「……流石に雑巾は冗談だよね？　あっくん、出来れば普通にタオルを貸してくれない？」
　秋斗は姉の命令と、今後も頼みを置きたい天災の間に挟まれて、思わず溜息を吐いた。
　束の格好は、秋斗と最初に出会った時と同じで、『不思議の国のアリス』の出で立ち。だが来訪して早々に入浴中の千冬の下に突撃した為、その反撃を受けて今は衣装も髪も全てずぶ濡れの状態だった。
　とりあえず秋斗は間を取り、台所に置いてある揚げ物用の〝キッチンタオル〟を束に渡した。
「……こいつは確かにタオルだね。こりゃ一本取られたぜ♪」
「おい、束。無駄遣いするなよ？」
「判ってる、判ってる」
　束はからからと笑いながら、秋斗の渡したキッチンタオルで身体を拭き始めた。
　とりあえず秋斗はその間に、束の分のコーヒーを用意する事にした。
「――――で、改めて聞くが一体どうした？　例の〝研究島〟でＩＳを作ってるんじゃなかったのか？」
「作ってるよ。まぁ、実際はＩＳ本体より、そのコアの量産だけどね。と、言うか最近はそれしかしてないよ」
「なんだ。お前の事だから、さっさと宇宙開発の方向に進んでいくかと思っていたんだが、随分と消極的じゃないか？」
「それがねぇ聞いてよ、ちーちゃん。ちょっと束さんにも良く分から

ない問題が起こってさぁ」
「例の、『女にしかＩＳが反応しない』とかそういう類か？」
「そう、それ」
サラリとした口調で束の口から次々零れてくる世界規模の話に、秋斗は現実味を感じなかった。
秋斗は話を適当に聞き流しつつ、薬缶のお湯でインスタントのコーヒーを溶かし、２人分のコーヒーを準備して千冬と束の間に傍聴人として加わった。
ＩＳが世界に登場した当初に、各国の間で結ばれた〝アラスカ条約〟。それから少し間を置いてＩＳコアの管理に超国家組織〝国際ＩＳ委員会〟が設置された。その動きに平行するようにして国連の主要七カ国を初めとする各国政府は、それぞれの政府機関の直轄組織として、ＩＳに関する専門の委員会の設置を急いでいる。
ＩＳを核に匹敵する脅威として認識した世界は、この短期間にＩＳに関する研究土壌の確保や法整備に急ぎ、次世代の〝抑止力〟として、その戦力の確保を目指して動き始めた。
しかし金と人材が動くのは、全て後々の兵器利用の為である。
故に現状では、束が繰り返しメディアをジャックして言った〝宇宙を目指す為の翼〟というＩＳ本来の在り方は二の次であると、束は愚痴を零した。
「――――アラスカ条約でＩＳの軍事利用は無しだと決まったはずだが？」
「あんなの所詮、形骸だよ。どうせ今後、ＩＳの数が増えれば直ぐに改定されるし。今も条文の抜け道探しみたいなやり方でＩＳの戦闘利用を考えてるよ」
「……戦闘利用？」
「そ。なんか各国で独自のＩＳを作って、それをオリンピックみたいな競技種目として戦わせるんだってさ。提供した白騎士二号、三号は今、そんな感じで研究されてるね。まぁ、目指すところがエンタメだからいいけど。それより早く宇宙行こうぜって考える束さんとしては、それがすっごく歯がゆいぜよ」

「……ＩＳを使った対戦競技か」
　束の話を聞いて、千冬は顎に手を当てて顔を伏せる。
　同じ頃。秋斗は現時点ですでにモンド・グロッソの原案が存在する事に内心で驚いていた。
「ちーちゃんは興味ある感じかい？　まぁ、でもそれが実現したらちーちゃんならぶっちぎりで優勝できるかもね。っていうか、ちーちゃんがそれに参加するなら、ちょっと興味が沸いてきたかも」
「どうだろうな。世の中、上には上が居る。そう簡単にはいかんさ」
「え～。ちーちゃんよりＩＳを上手く使える奴なんて居るわけ無いじゃん♪」
「……おい！」
　千冬は底冷えするような低い声を出した。
　すると束は「あ！」という顔をして、咄嗟に秋斗の方を見た。
　秋斗は千冬の一変させた空気に戸惑い、思わず首をかしげた。
　そして一拍置いてから、「あぁ、そう言えば白騎士は姉（千冬）貴だったか……」と、原作を思い出して納得した。
　秋斗が一瞬反射的に首をかしげた事が幸いしたのか、千冬は安堵したように溜息を吐いた。
「あ、あーそう言えば忘れてたね。……それはそうと、あっくんへの御土産も持ってきたんだっけ♪　束さんとした事がすっかり忘れてたぜ！」
「あぁ、以前電話で頼んだモノか？」
「そうそう、それそれ」
　束と千冬は何事も無かったかのように話を変えた。
「土産？」
　それまで静かに２人の話を聞いていた秋斗は、突然切り替わった話題の中心に繰り出された事に、首をかしげた。
「コンプレッサーとエアブラシとレギュレーターと水抜き……後、リューターと各種バイトだっけ？　必要なんでしょ？　ついでだから塗装ブースも含めて、実家の倉庫から全部持ってきてあげたよ♪」
「え――――？」

以前、ラップトップを取り出した時と同様の所作で、束は量子格納したそれら数々の工具を次々と空中から取り出して見せた。
何度見ても魔法にしか見えないその技に秋斗は目を見開いた。千冬も同様だ。
しかし千冬と秋斗浮かべた驚きには、それぞれその意味が大きく違った。
秋斗の方は〝目的を達する為の道具が、ほとんど揃った〟という喜び。
千冬の方は初めて目の当たりにする〝ＴＨＥ機械〟に対する強い戸惑い。
「ＩＳ作り始めたら普通の模型作るのに飽きちゃったしね。束さんは自分で使う道具は基本自作してるから、昔使ってた市販のお古でいいなら全部あげるよ。あぁ後、余ってる塗料がいくらか有るけどそっちも要る？」
「え、待って。マジでくれるのか？　要るよ、要る要る、超要る！」
「うむ、素直でよろしい」
秋斗は思わず身を乗り出して、反射的にそう口走った。
秋斗の反応に束は笑顔を浮かべると、ワンルームマンションに設置してある小さな正方形の冷蔵庫を一つ取り出してみせた。
扉を開けるとシンナーの臭いが漂った。
秋斗はラッカーとエナメルと数本の有機溶剤が入ってる事を確認し、思わず顔を綻ばせた。
「……全部ガイアノーツかよ、しかもマジョーラこんなに譲ってくれるとか正気か？」
「お、そこに眼をつけるとは中々分かってるね？　もし使うんだったらプライマーとかトップコートも出すけど必要かい？」
「もちろん。くれるなら貰うぜ。博士、ありがとな！　いや、本当に！」
「ふはは、どういたしまして♪」
「……おい、待て。お前達ちょっと待て！」
――――と、その時、千冬が声を荒げた。

「束ぇ！　その道具の山は一体なんだ！　それと秋斗！　プラモデルを作るんじゃないのか！　一体なんなんだその工具の山は！　説明しろ！」

束が秋斗に用意した無数の工作具は、千冬にとっては名も知れぬ不思議なカラクリでしかなかった。

そしてそれらの道具は、基本的に運動畑に生息する千冬にとって、正に未知の存在。人は己の理解の外側にあるモノに対して、ある種の〝恐怖〟を抱き、ソレを取り出したのが世間で〝天災〟と呼ばれる篠ノ之束であるならば尚更。

――しかし、そんな風に千冬の内心に湧き出た恐怖や忌諱の感情を、秋斗は咄嗟に理解できなかった。

故に秋斗は、一体何をそんなに怒るのかが判らず、首をかしげながら千冬に説明を始めた。

「いや、どれもこれも姉貴に説明した通り模型〝作る〟為の道具なんだけど？　プライマーってのは金属塗装前に下地を作る為の薬品で、トップコートってのは――」

「あっくん、あっくん。ちーちゃんは〝こういう〟の詳しくないから、その説明じゃ無理だよ」

と、その時秋斗の説明を遮るように束が口を挟んだ。

束はいつの間にか秋斗の真後ろに立っていた。

――なぜか後ろから抱きすくめるようにして、秋斗の肩を捕まえるように両手を置いていた。

「それより束さんも質問があるんだけど、いいかな？　なんで使ったことも無いような道具の事をキミは知ってるんだい？　私の作ったＰＣのスペックも普通に理解してたよね？　なんで？」

「っ!?」

束はぐっと顔を近づけて秋斗に問うた。

不躾にいきなり顔を寄せられた秋斗は、思わず反射的に束から身を引いて離れようとするが、肩を掴んで固定されている為に、それが出来なかった。

「――――っと、博士！　悪いんだけど、ちょっと放してくれない？

……近いんだけど、顔が」
「ダメ。今は束さんの質問に答えてくれる方が先でしょ？　で、なんで？」
「なんでって。そりゃ、知ってる事を知ってるって以外に答えようがないだろ？　……って、いうか頼むから、もう少し離れてもらえません？」
「……ふ～ん」
秋斗の答えを聞いて束はにんまりと笑う。
それは束と初めて会って、名を聞かれた際に浮かべられた笑みに似ていた。
「おい、束。私の弟を放せ。と言うか気安く触るな。馬鹿がうつる」
その時、千冬が秋斗の目の前に立った。そして束の腕を外そうと、千冬は秋斗の肩に置かれた束の手首を力強く掴んだ。
千冬は何時に無く剣呑な雰囲気していた。なぜなら千冬の目には、悪魔（束）が弟を遠い異世界に連れ去ろうとしている様に見えていたからだ。
――――そして千冬と束が秋斗を間に挟み、対立の構図を取った。
秋斗から視線を外した束は千冬に笑顔を向ける。そしてふと思い出したように言った。
「あ、そう言えばさっき此処に来る途中の公園で、ちーちゃんのもう一人の弟君を見かけたよ」
「一夏がどうした？」
「そうそう、その子。イチカって言うんだね。うん、覚えた。でね、そのいっくんがね、公園でウチの箒ちゃんと一緒に仲良く素振りしてたんだ」
「……なに？」
束の話に千冬は眉をピクリと動かした。
（アイツ（一夏）修行するって言いながらフラグ立てに行ったのかよ。流石、主人公。すげぇな）
秋斗は束の言葉を聞いて、ふとそんな感想が脳裏を過ぎった。
束は言葉を続けた。

それはある意味で千冬の地雷を自ら踏みにいくような台詞だった。
「もう、あれだね。ギャルゲーで言うなら超王道的な幼馴染ルートの、回想シーン見たいな感じだ。『大人になったら結婚しよう』とかって台詞も秒読み段階だったんじゃないかなぁ。まぁ、箒ちゃんは基本的にツンデレキャラだから、今はツンツンするだろうけどね。でね、ちーちゃん。そこまで考えた時にふと思ったんだけどさ。箒ちゃんがいっくんと『結婚』したら私もいっくんのお姉さんになるじゃん？」
それならもう、今日からあっくんの事も私の弟にしてもいいんじゃないかな？　っていうかそうする事に決めたよ♪　だから今日からちーちゃんも束さんの家族だね。改めてよろしくね♪」
「……は？」
発想の飛躍っぷりがまるで棒高跳びだと思った瞬間。秋斗は千冬の立つ位置から、〝ガリッ〟という何かを削るような重い音が響くのを聞いた。
「私（千冬）と束が家族になる、か……。しかも一夏がよりにもよってお前の妹と結婚してだと？　中々、面白い事を言う奴だな。冗談にしては気に入った」
先の音が、千冬の立てた〝歯軋り〟であると気づいたのは、その直後の事。秋斗が千冬の顔を見た瞬間であった。
人間は顔から一切の感情をなくしても〝笑み〟を浮かべられるのだと、秋斗はこの日初めて知った。
「私は別に冗談なんて一言も言ってないよ。あれ？　ちーちゃんはいっくんと箒ちゃんが結婚するのは嫌なの？」
「一夏が誰を娶るのかは、それこそ一夏自身が己で将来決める事だ。その時の相手に箒が選ばれる可能性もあるだろう。――――が、それはあくまでも未来の話。今この瞬間に、貴様が一夏と秋斗の〝義理姉〟になるというのは聞き捨てならん。そしてこの私が許さん！」
「でも時間というのは、何時の時代も未来に向って進んでいくモンだよ？　私の見立てでは、もう〝フラグ〟という芽は既に萌えているから、後は育んでいくだけ。所詮、時間の問題だと思うよ？　それなら遅いとか早いとかの理屈なんて、殆ど意味をなさないよね？」

「……ソレが貴様の答えか？」
「だとしたら、どうするのかな？　かな？」
千冬と束の対立が作り出す剣呑な気配に、身の危険を感じた秋斗は徐に挙手して言った。
「ストップ。家の中は狭いから、続きは外でやってくれ」

☆

「――――ただいま。あれ？　秋斗、千冬姉は？」
「おかえり。姉貴ならたぶん博士と殴り合ってる」
「……は？」
昼頃になって一夏が帰って来た。
秋斗は質問に短く返事を返しながら、束に譲ってもらったエアブラシの組み立てを行なっていた。
「博士って、箒の姉さんの事？」
「そうその人。さっき来てたんだ。で、これ全部貰った」
「貰ったって、お前……何なんだよこの機械？」
一夏はエアブラシと塗装ブースを指差す。
そんな一夏の疑問に、秋斗は一つずつ答えた。
「こっちがエアブラシと塗装ブース。こっちのはリューターっていう切削用の道具。ちょっと夏休みに本格的に金を稼ごうと思ってさ」
「前に言ってた模型作って金稼ぐのに必要っていう道具？」
「そうそう」
「へぇ」
一夏にとっても目の当たりにするのが初めての工具ばかりだ。故に一夏は、興味深そうな表情で道具のいくつかを手に取り、分からないなりにそれらの造りを確かめはじめた。
「なんかこう……プラモ作るのってもう少し簡単そうなイメージあったんだけど、そうじゃなさそうだな」
「まぁ、説明書通りに作るプラモなら簡単だよ。ただ、俺がやろうと思ってんのは、少しそれとは違うけど……」

「……手伝おうかと思ったけど、俺には無理そうだな」
一夏は肩を竦めてやれやれと息を吐いた。
そんな一夏の様子に、秋斗は思わず苦笑を浮かべ、話題を変えるように一夏好みの思い付きについて話した。
「一夏って〝野菜〟とか育てるのに興味ある感じ？」
「野菜？　なんだよ突然？」
「トマトとかきゅうりとか、一年の頃にアサガオとか育てたみたいなノリで、育てる気はあるかって聞いてんだよ」
「おぉ！　家庭菜園って奴か！　もちろんあるぜ。出来るならやってみたい」
一夏の趣味に掠る分野で話を振ると、予想通りに興味を示した。
秋斗が食材を自作するという点に気づいたのは、偶々今年の最初に、学校でプチトマトの栽培をさせられた事がきっかけだ。
「調べてみたらそんなに難しそうでもなかったからよ。折角だから一夏が主体になってやってみたらどうだ？　自分で育てた野菜とか調理し甲斐あるだろ？」
「いいな、それ。でも俺の小遣いとかで出来るかな？」
一夏は興味を引かれたが、不安そうに言った。
しかしこんな事もあろうかといった様子で、秋斗は悪辣な笑みを浮かべた。
「そのくらいの金なら全然あるぜ？　こういう時の為に懸賞はがきの景品を売りまくってきたんだからよ」
「ほんとか！」
「あぁ、やるっていうなら、道具を揃えて早速始めてみるか？」
「やる！」
一夏は拳を握り締めて気合の篭った返事を返した。
秋斗はそんな兄の様子に苦笑を浮かべながら、ラップトップのブラウザにホームセンター系の通販サイトを開いてみせる。
「あ、そうだ」
「ぁん？　どうした？」
一夏はふと、思いついた様に言った。

「どうせ野菜を育てるならいっその事、道場の皆で育ててみないか？」
「……は？」
「いや、俺一人でやるより皆の手を借りて一斉にやった方が、たくさん採れるだろ？　鉢植えの数が増えるだけなら、手間もそんなに変わんないだろうしどうだろう？」
　一夏の思いつきに、秋斗は思わず目を丸くした。
　しかし考えてみると、それは実に理に適った合理的なプランである。
「……道場の皆って事は、栽培の場所は道場の庭先にすんのか？　まぁ、一斉に介するならその方が都合がいいか。大人の監修もあるし、企画としては割りと面白いんじゃねェか？」
「秋斗もそう思うか？」
「あぁ、悪くないと思うぜ」
　秋斗は思わず思考を加速させた。
「それと、どうせなら柳韻先生にも積極的に協力してもらって、もっと〝大掛かりな企画〟にしてみても面白いかもな。先生の顔の広さなら、畑を持ってる知り合いとか居るだろうし。それならプチトマトどころか玉ねぎとか芋とかも採れるかもな？」
「おぉ！　確かに！」
　家庭菜園を飛び越して、大掛かりな農業体験企画として立ち上げる。
　そんな風に飛躍させた秋斗の考えを聞いて、一夏は多いに乗り気を見せる。
　――――そしてそれから数時間程が経過した。
　昼食を取ったその足で、一夏は篠ノ之道場へと向った。
　そしてなんとその日の内に、篠ノ之道場に通う年の近い同門達を巻き込み、柳韻に直談判をして農業企画を実現可能な段階まで推し進めてしまった。
　秋斗にとってその展開の早さはまさに予想外であり、そして同時に一夏の侮り難い行動力には思わず舌を巻いた。
　秋斗からすれば、夏休み前の期間を使って、少しづつ企画が立ち上

がればと考えていた。それが蓋を開けてみれば、一夏は思いついたその日の内に、企画を〝実現可能な段階〟にまで、独力で導いてしまっている。

これればかりは流石の秋斗も、想像できなかった。

夕方。道場から帰宅した一夏は、この企画成立と事の顛末をドヤ顔で話した。

そして笑みを浮かべて言った。

「最近、秋斗に頼ってばかりだったからな！　たまには兄貴としてスゲェところ見せないとさ！」

「……大した奴だよ、ホントに」

秋斗はその言葉を聞いて、流石主人公なだけあると素直に感服した。

09　嘘の一つや二つ

ＩＳ研究の拠点として日本政府から束に貸与された〝ある人工島〟。

そこに近々、ＩＳに携わる次世代の技術者や搭乗者の育成を目的とした、ある種専門の高等教育機関が設置されるという。

アラスカ条約の明文にある〝超国家の研究機関〟設置の一環で、それはＩＳ管理を主とする国際ＩＳ委員会とはまた別の、来るべきＩＳ社会の人材育成を視野に入れた計画だった。

話によると近いうちに、件の島は日本の統治から外れて、あらゆる国家の枠組みを越えた交流場になるという。

「――――で、その〝ＩＳ学園〟とやらでお前（束）は教師でもやるのか？」

七月の半ば。

腐れ縁の友人（篠ノ之束）からの電話を受けた千冬は、話を聞くなり思わず茶化した。

〝ありえない〟と判りきっている為、その返しは完全に皮肉だ。

故に束も、そんな千冬の言葉に吐息交じりで答えた。

『まさか。そんな有象無象の凡人に構ってる余裕なんて、後にも先にも存在するわけ無いじゃん。唯でさえ委員会に押し付けられた研究者（笑）に、知識を叩き込むので大変なのにさ』

「それでもお前が見ず知らずの誰かの頼みを聞くとは意外だよ。……珍しい事もあったもんだ」

『別に聞きたくて聞いてるわけじゃないよ。コアの研究で有象無象の凡人達のデータが必要なだけ。そうじゃなかったらこんな要求、最初から突っぱねてるに決まってるじゃん』

「そう言うな。私も個人的にだが、お前が教鞭を握っている姿を見てみたいと思う。……まぁ、お前の生徒になる奴らには不憫な話かも知れんがな」

『それはちょっと酷くないかな～。まぁ、その通りだけど。で、その学園発足企画の第一陣として、近いうちに一般向けのＩＳ適正調査が始まるらしいんだ。まぁ、間口はかなり狭いみたいだけど。でも試験を

パスしたら国からの支援もいっぱい出るみたいだよ？　ちーちゃんとしては〝都合〟がいいじゃないかなぁ』

「……なに？」

世間話もそこそこに束はようやく本題を切り出した。

「……それは暗に、私にＩＳ乗りになれと言っているのか？」

『そうだよ。それ以外にある？』

「……」

束の言わんとする事を察した千冬は、少しだけ眉間に皺を寄せた。

最初のＩＳ――〝白騎士〟の正体は決して明かさない。

なぜなら、それが束と交わした最後の契約だから。

開発者ならまだしも実際に事件を起した〝張本人〟ともなれば、その責任は何らかの形で世界中から追求されるだろう。

故に千冬は、ＩＳが今後どういう筋道を辿って社会に浸透していくにしろ、リスクを避ける為に自ら関わりに行きたいと思っていなかった。

『私はね。ちーちゃんと一緒に宇宙に行きたいなぁ。それに誰にだって〝秘密〟の一つや二つはあるもんだよ。私やちーちゃんにしたってそうだし、あっくんだって同じだよ』

束はそんな千冬の戸惑いや憂いを遮る様にして言った。

それは想像した以上に純朴な理由で、実にらしいと思う提案だった。

――――が、そんな言葉の中に見つけた〝ある一つの単語〟に引っ掛かりを覚えて、千冬は思わず眉間に皺を寄せる。

「……なぜそこで〝秋斗〟の名前が出てくるんだ？」

千冬は白騎士云々を一先ず脇に置き、思わず尋ねた。

『別に。ただ、あっくんもあっくんなりに、ちーちゃんやいっくんに楽させたいって、色々秘密にして頑張ってるって言っただけさ。この間もチャットで『白騎士のＣＡＤ』が欲しいって頼まれたしね。〝また〟なにやら面白い事を考えてるみたい。――――おっと、これは秘密だったかな♪』

「……おい、何だそれは？　お前、あれほど言ったのにまさか秋斗に〝

妙な〝事を吹き込んだのか?!　と、いうか、なぜ秋斗と個人的に連絡が取れる?　私は聞いてないぞ!」

千冬は思わず声を荒げた。

『別に束さんが誰とお友達になろうと、ちーちゃんには関係ないじゃんか。それにあっくんに渡したPCは束さんが〝調整〟したものなんだよ?　チャット機能を遠隔操作でインストールしてあげるぐらい朝飯前さ。それに一応言うけど、束さんからあっくんに〝モノを教えた〟事なんて、一度も無いよ?』

「……よく言う。PCに始まり、今度は模型作りと言って妙な機械を惜しげも無く渡してるじゃないか?　らしくも無い。お前はそんな気さくな女じゃないだろう?」

『心外だね~。そもそも最初に頼んできたのはちーちゃんの方なのにさ。第一、あっくんの欲しがる道具なんて全部市販で買えるんだよ?　つまり私が持ってても使わないゴミさ。それを譲ってあげるのがそんなに不思議かなぁ?』

「……お前が他人に何かを〝譲る〟というのが解せん」

『わ~お。ちーちゃんが普段、私をドンな風に見てるかよく判る台詞だねぇ……』

「事実、お前の心は狭いだろ?」

『まぁ、ね~』

千冬は強い警戒心を纏って追求するが、束は『暖簾に腕押し』な飄々とした態度で言い返した。

『〝気にいった相手〟に良くしてあげるのが、そんなに変な事かなぁ?　それに束さんがどういう存在か知ってるくせに、他の凡人と違ってあっくんは私にリソースの無駄遣いを強要とかしないしね。まぁ、言ってみればちーちゃんと一緒だよ。気に言った理由としては。それ以上の答えはないよ」

「……」

束が楽しそうな声色で言い返した言葉に、千冬は思わず詰まった。

束はそれを見透かしたように言った。

『まぁ、束さんを疑いたがるのも無理はないと思うがね~。私だって

あっくんにこんなに興味が沸くとは思わなかったし。多分、根っこの部分が似てるのかな？　まぁ、それはそうと話を戻すけど、〝誰にだって墓の下まで持って行きたい秘密〟はあるモンなのさ。偶々ちーちゃんにとっての〝白騎士〟の真相がソレだってだけ。明言しなきゃ大丈夫だよ。それに、〝強み〟を生かしてお金を稼げるなら、ちーちゃんだって望むところでしょ？』

「……相変わらず回りくどい言い方をする奴だ。はっきり言え。なぜ私をもう一度ＩＳに乗せたがる？」

『そんなの決まってるじゃないか――――』

そこで束は言葉を切った。

『――――親友なら同じ〝目線〟に立って欲しい。それにＩＳが完成したその片割れが、〝無名〟のまま埋もれて死ぬなんて絶対に嫌だモン……』

束の声色が寂しげなモノに変わった。

流石にそこに含まれる〝感情〟を察せぬ程、千冬も束との付き合いは薄くなかった。

☆

多くの技術者にとってＩＳとは、ある意味で『海外の輸入製品』と同じ感覚。

なぜなら技術提供を受けて、初めて大掛かりな研究が始まるという構図が、まさにソレだからだ。

世間は七月。

今日は一学期最後の終業式である。

その行事に参加する直前、秋斗はテレビニュースの経済コーナーを見てふと思った。

（――――株、買いてぇな。てか、絶対買おう）

手元に資金さえあれば、秋斗は今直ぐにでも投資を始めただろう。

なぜか？

それはＩＳの登場と、ソレに含まれる革新的な技術によって、各分

野で様々な動きが広がったからだ。
簡単に言ってしまえば、世界中の先進国で景気回復の兆候が見られたからで、ある。
重工、電子、医療、通信、物流――――。
日本もＩＳの齎した技術による〝特需景気〟によって、少しずつだが〝不景気〟と呼ばれた冬の時代から脱却を始めていた。
ＩＳが軍事兵器なら、これらの経済結果はありえなかっただろう。
しかしＩＳの研究も、その恩恵である特需景気も、日本国民にはもろ手を挙げて喜ばれていた。
なぜか？
『アラスカ条約』の明文に〝ＩＳの軍事利用は不可〟とある故だ。
故に戦争アレルギーとも言われる多くの日本人は、ＩＳの研究に携わる事や研究によって富を得る事に対して非常に肯定的になれたのだ。
このＩＳ特需という景気の回復が、民間の私生活に影響及ぼすのも、もはや時間の問題だと専門家は言った。
が、ソレを非常に喜ばしいと思う反面、秋斗は同時に苦笑いを浮かべざるを得なかった。
（織斑家的には良いこったけど、男としちゃあちょっと複雑だねぇ……この流れは――――）
ＩＳ原作の特徴である『女尊男卑』思想。
この景気回復の影響が、後の原作と同じ歪んだ思想の浸透した未来に繋がる予感がしたのだ。
前世で原作を読んでいた身としては、たった１０年でそんな思想が世界に浸透するのをありえないと考えていたが、今の社会と経済の動きを見ているとそれが意外にありうると思ってしまう。
なぜか？
女性にしか扱えないＩＳの登場で、今日（こんにち）の不景気に終止符が打たれ、後にそのＩＳが国防の要となるからだ。
――――女が不景気から社会を立て直した。
――――女が国防を司る様になった。

――女しか乗れないＩＳのお陰で〝核の傘〟が半ば形骸化し、ソレに護られずとも国家が独り立ちする可能性も生まれたから。

ＩＳ保有国として脚光を浴びれば、必ずそう言われる日が来るだろう。

それで女性側の自尊心が非常に高くなる事に、秋斗は頷けてしまったのだ。

『やはり男はダメだ』

と、女にしか扱えないＩＳで経済復興すれば、国民感情として女性側にそんな意見が出るのは十分にありえる。

全ての女性がそうで無いにしろ、ＩＳで〝良くなった事実〟だけを掻い摘み、無理に話を誇張して極端な男不要論を持ち出す勘違い馬鹿は確実に現れ、そして大騒ぎするはずだ。

秋斗はその手の馬鹿に大きな力を渡した結果が、所謂原作の『女尊男卑社会』であると考えた。

しかしそう思ったところで今の秋斗に出来る事は何も無く、故に秋斗は憂鬱だったのだ。

（……肩身の狭い時代を生きるのは嫌だが、それでも納得して〝諦める〟しかねぇのかな）

今日も朝早くから『女性の社会進出』を声高に叫ぶ街宣車が通った。

とある政党の女性政治家だ。

来るべきＩＳ中心社会とソレを、形成する女性の社会的地位向上を謳い上げる団体。

彼女らはその後援会の規模を着々と増やしている。

それは秋斗の様な原作知識が無くとも、今後『原作と同じ未来』が来る事を予想した者が、現時点でも少なからず居るという証拠。

（たぶん、大まかな流れは変わらねェだろうな。さて、どうなる事やら――――）

秋斗は安堵と憂鬱の混ざった深い吐息を吐いた。

「おい、秋斗。朝から辛気臭い溜息なんて吐くなよ。明日から〝夏休み〟だぜ？　もっと喜ぶところだろ？」

「あぁ、そうだな」

一夏はそんな苦言を呈した。
後にこの世界で唯一となる一夏は、明日からの夏休みに向けて既に顔を綻ばせていた。
――――微笑ましい。
秋斗は思わず、そんな苦笑を漏らした。
そんな一夏の様子を見てから、秋斗は未来に対する憂いを脇に置いて、目の前の現実に対す思考に切り替えた。
明日――否、今日は『現状可能な織斑家最大の資金策』の実行日である。
そして一夏も秋斗とは別に、自身で企画した野菜の栽培計画を発動する。
故に織斑兄弟のこの夏休みに賭ける意識は非常に高かった。
一学期最後の終業式に出席した後、二人は家に帰って直ぐに〝夏休みの宿題〟に取り掛かった。
「――――日記ってホント厄介だよなぁ……」
「その日の朝飯に何を作ったかで良いんじゃねェか？」
「あぁ、それもそっか」
テーブルに宿題を広げて、秋斗と一夏はそれぞれの分の宿題に取り掛かった。
書き取り、計算問題、読書感想文3冊分、毎日の一言日記、自由課題。
これに加えて毎日のラジオ体操と、一定のプール参加。
正直言えば、マジで面倒くさい課題ばかり。
秋斗は込み上げる溜息を押し殺しながら、計画を阻む邪魔な宿題（障害）を一つずつ処理していった。
そして途中で一夏の様子を確認しながら、難しい内容については教えつつ、秋斗は書き取りと計算問題集を半日掛けて終わらせる事に成功した。
「――――次の次は読書感想文か」
「あ～俺苦手だわ。そういえば秋斗は作文得意だったっけ？」
「……その話はやめろ」

学校から貰った原稿用紙を取り出す手が思わず固まった。
一夏の一言で、秋斗は思い出したくも無い黒歴史が脳裏を過ぎるのを感じる。
秋斗は一夏を軽く睨んだ。
「ごめん、そんなに怒るなよ。でも悪い意味で言ったんじゃないぞ？」
「……知ってるよ。でもあんまり思い出したくねェから、その話は忘れてくれ。……な？」
「……はい」
一夏は素直に頷いた。
秋斗もそれを確認して、小さく溜息を吐く。
そして学校の図書館で去年。暇つぶしに読んだ本の内容を思い出しながら、秋斗はサラサラと感想文を書き始めた。
――――しかし、ソレとは対照的に一夏の感想文を書く手が止まっていた。
「……なぁ、秋斗。何か良い本ないか？　読みやすくて面白い感じのでさ」
「……ソレを探すのがこの課題なんじゃねェの？　まぁ、いいけど。まぁ、読みやすいっつったら『バリーバートン』のシリーズだな。俺もその内容で書いてるし」
「へぇ、どんな内容なんだ？」
「まぁ、おおざっぱに言うなら――――」
『バリーバートンと星達の意思』
『バリーバートンと秘密の地下研究所』
『バリーバートンとアンブレラの囚人』
『バリーバートンと炎のタイラント』
『バリーバートンとゴリラの武装師団』
『バリーバートンと蟻のプリンセス』
『バリーバートンと死のウィルス』
秋斗は全七巻のサブタイトルと、大まかなあらすじを説明した。
「――――中年魔法使いバリーバートンが魔法の４４マグナムを使って、悪の魔法薬品企業アンブレラと戦う話だ。アンブレラの研究施設

に侵入したり、ソレが生み出した改造生物と戦ったり、要人救出やテロの阻止もやったりする。んで、各巻の最後では必ず、それぞれの最終決戦の舞台が爆発炎上するな。……中々面白いぞ？」

「へぇ～。それって学校の図書館にも有るか？」

「ある。と、いうか俺は全部学校で読んだ」

「そっか。じゃあ今度、俺も試しに借りて読んでみるぜ。ありがとな」

「あぁ」

一夏は感想文に取り掛かるのを辞めてその日の宿題はそこで打ち切りにした。

そして気晴らしとばかりに、夕食の買出しに出て行った。

秋斗は独り静かになった家の中で読書感想文を書き終えた後、ノートＰＣを開いた。

そして直ぐにメールをチェックした。

案の定、束からの新着メールが届いていた。

：タイトル　【ＹＡ―ＨＡ―　束さんだＺＥ】～＝＝Σ（（（　つ・、ω・、）つ

：

：ハローハロー元気にしてるかな？　かな？

：注文どおりＰＤＦで白騎士の三面図、送ってあげたから確認してね。

：あと、出来上がったら私にも写真見せて欲しぃ～な～

：ＪＰＥＧでいいからカモンⅢ（。д。Ⅲ）カモーン♪

：もし仕上がりが良かったらこの間の件は了承してあげるかもよ？

：それじゃ頑張ってね～。

：応援してるジェイ（（〇（、ω、〇）しゅっしゅっ

：

：束博士より

最近になって束は、秋斗のノートＰＣに対してハッキングを仕掛け、知らない間にソフトを勝手にインストールしてくる。

故にいつの間にか、秋斗のＰＣに搭載されたチャット機能とメール機能のリストの一番上には、篠ノ之束の名前が存在した。

愉快犯的な行動だが、ＰＣの製作者本人である事と、今は害悪でない事から、秋斗は半ばその行動を諦める事にして、逆にその伝をちょくちょくと利用させて貰っていた。

秋斗は束からのメールを読んでから、同封されていたＺＩＰファイルの白騎士のＣＡＤ（設計図）で作ったＰＤＦ（画像）資料を確認した。

白騎士のデータを欲したのは夏休みの自由研究と、今後の為だ。

この夏休みで秋斗は、独自の資金策と平行して、『白騎士のフルスクラッチ』をやろうと考えている。

そして上手く作れた場合は模型雑誌に投稿し、将来的にはソレを複製してもらって『篠ノ之束監修』の名の下に『レジンキット１／１２スケール　白騎士』として、ネットで売り捌こうと考えていた。

メールにある〝了承〟とはまさにソレの事。

将来的に様々な国家で様々な企業が独自にＩＳを製作するが、最初の〝白騎士〟に関してだけは、その著作権も版権も最後まで束が握っている筈と考えた秋斗。

ならば誰よりも先に束から〝許可〟を得る事が出来れば、それは強力な〝切り札〟となると秋斗は思ったのだ。

束からしてみれば、態々模型としてフルスクラッチする手間等掛けずに、設計データから３Ｄプリンターで複製を作って、売ればいいだけの事だ。

実際それを思いつかない束ではないと、秋斗も提案した時点では考えていた。

が、『中々面白い』とチャンスをくれた束からの返事を見て、秋斗は思わず笑みを零し、気合を入れなおした。

「――――よっしゃ！　作るか！」

白騎士の模型製作に取り掛かるには、先ずはそれなりの材料が必要になる。

そしてその為の準備資金を作るのも夏休みの課題であり、ソレこそがこの夏に秋斗が行なおうとする最大の資金策だ。

秋斗はネットオークションで競り落としたフィギュアのジャンクパーツを取り出し、ベランダに設置した塗装ブースで作業を開始し

た。

束からお古の模型道具を貰ってから、秋斗はちょくちょくと作業を進めているが、秋斗はその度に千冬と一夏の〝妨害〟にあっている。故に秋斗にとって、この夏の間にどれだけの期間、独りで〝家に引き篭もれるか〟が勝負だった。

部屋の中でポリパテを使えば『臭い』と言われ、換気扇のある台所や風呂場で作業すれば、『辞めろ！』と怒鳴られ、そして辿りついたのが家のベランダ。

ホームセンターで買った蛸足の延長コードを伸ばして、スタンドライトの明かりをベランダに点し、秋斗は作業を開始した。

夏の夕方と夜は直ぐに明かりに蟲が寄ってくるので、材料と同時に殺虫剤も常に用意しなければならないのが誤算だった。

そんなベランダの模型ブースで心身共に疲弊しながら、家族にも明かさずたった一人で怒られながら秋斗の行なう資金策とはつまり――『改造フィギュア』であった。

秋斗が今年の夏休みに実行しようと考えた手段は、版権の厳しい某特撮ヒーローの改造フィギュアを製作して、ソレを『趣味で作ったものですが、置き場所が無いので売ります』と、いういいわけで、ネットオークションに流す事であった。

黒か白か言えば限りなく黒に近いグレーで、著作権違反で企業に通報されたら言い逃れできない完全アウト。

今生のネット社会にも改造フィギュアは出回っているが、まだ逮捕者が居ないのがある意味で救いである。

秋斗の前世ではそれで見せしめの逮捕者が出た事案だが、秋斗は織斑家を立て直す為の資金策にあえてそんなハイリスクな道を選んだ。

なぜなら、『道具と技術さえ揃えば、容易に稼げるから』だ。

秋斗は短時間で可能な限り量産をして、それを最低回数のオークションで売り払い、後は自らアカウントを停止して逃げる計画を立て、それを実行するために今回の夏休みを待っていた。

捕まったら全てがアウトだ。

悪い偶然を引いて、いきなり己が見せしめでしょっぴかれる可能性

も勿論ある。

しかし現実問題、8歳の子供が正当な手段で潤沢な資金を用意するにはどうすればいい？

親が金持ちという条件が成立しないなら、それこそ何かしらの不正に手を出さねば不可能なのだ。

前世の知識と前世で染み込んだ内職の技が秋斗の武器。

ソレを最大限に生かす手段が、秋斗にとっての改造フィギュアだ。

秋斗はネットでかき集めた画像資料を下に、『マスクドライダーBB』やその過去のシリーズに登場する、〝人気は高いがマイナーで、確実に玩具として生産されない〟だろう怪人や戦士を選んで作った。

芯となるジャンクフィギュアをナイフで削り、それにポリパテを盛り、リューターや紙やすりで切削し、ナイフで筋を彫り、またパテを盛るを延々と繰り返す。

全身を蚊に刺され、削りカスで粉塗れになりながら、秋斗は今年の夏休みを過ごした。

そして秋斗の作った最初の改造フィギュアには――――7万の値が付いた。

１０　ある夏の一幕

ある日の昼下がり。
秋斗の下に、覚えのない荷物が届いた。
箱を開けると、中には束からのメッセージカードと、一組のヘッドセットが梱包されていた。
「なんだこりゃ？」
と、その時だった。
秋斗が荷物を受け取った瞬間を見越したようなタイミングで、秋斗のラップトップからアラームが鳴った。
童謡をアレンジした様な独特な着信メロディーに、秋斗は聞き覚えがあった。
そして同時に気づく。
秋斗のＰＣには、いつの間にか音声通話ソフトがインストールされていた。
まさか、な――。
この時点で半ば想像した通りの展開になりそうだと、秋斗が通話の開始ボタンを押す――――。
『やぁやぁやぁやぁ、あっくん！　久しぶりだね～。束さんだよ♪　元気にしてたかな？』
〝天災〟のけたたましい挨拶が、秋斗の耳を劈いた。
「やっぱり博士だったか。脈絡無く〝ヘッドセット〟を送りつけてきたのはこの為っすか？」
『えへへ、驚いた？』
「まぁ、はい。――そういえば声を聞くのは数ヶ月振り？」
『そうだね。メールでは頻繁にやり取りしてたけど、やっぱりこっちの方がデータの送受信も容易だしさ、何より声も聞けるから便利だと思って。早速インストールしといてあげたよ♪』
「そいつはどうも。一応、礼は言っときます」
『ふはは、よきに計らいたまえ！』
世界で最も有名な学者と言われる篠ノ之束からの個別通話の誘い。

コレがどれ程光栄な事であるかは、ＩＳが登場してからの、世の中の動きを見ていれば容易に想像が出来る。

相変わらずな人だと、秋斗はまるで変わりない束に対して、苦笑を浮かべた。

現在、秋斗のラップトップは、その所有権こそ秋斗の側にある――が、唯一既製品と違うのは、いつ何時でも創造主である束からの干渉が防げないという点だ。

ある意味で、常時世界最高峰のセキュリティーが働いているに等しい事だが、同時にそのバックアップの頼もしさが、秋斗に「将来的にプライベートな情報携帯端末を持つ事が出来るだろうか？」という不安を掻き立てさせる。

しかし人間とは慣れる生き物である。

今更束が、どれだけ高度なＰＣのプロテクト解除やハッキングを初めとするサイバーテロのノウハウを見せつけようと、秋斗は対して驚かなくなっていた。

「――で、いきなり個通を送ってきた理由は？　アンタ、そんなに暇じゃないでしょ？」

『そうだよ。思わず暴れたくなるくらいめちゃクソ忙しいよ。具体的には世界中の人工衛星を叩き落してやりたくなるくらいにね。だからこの憤りを誰かに吐き出したいなァと思って。と、いうか少し口調が変わった？』

「変わったと言うより、こっちが自然。今更、博士に気取って話すのもどうかと思って」

『うん。まぁ、私も堅苦しいのは嫌だし、全然いいけどね』

「そいつはどうも。――で、愚痴なら聞くからとりあえず落ちつこう。博士が暴れると世界がヤバイ」

『え～そんな怯えなくてもいいじゃん。冗談だよ～』

「何割くらい？」

『二割くらいかな？』

「冗談の方が二割？」

『もち、だね。流石束さんが認めただけあるよ、うん。花丸をあげよう

♪』

「少し錯乱してるようにも見えるけど、まぁ何時もの博士だね。とりあえず一度深呼吸をしてみようか？　それで大抵の不平不満は落ち着くとおもう」

『なんかその対応ってマニュアルを持ってるみたいだね。ちーちゃんにでも聞いたのかな？　そんなに面倒くさがらずにお話しようよ』

喜色交じりの天真爛漫な声色だが、その中に暴走寸前の機関車にも似た〝危うさ〟がある。

秋斗は直感的にそう感じた。

なので一先ず、束の話を聞く事にした。

束は現在、世界各国の支援を受けて日本のある人工島に作られた、ＩＳの研究開発場に住んでいた。

そしてそこで世界各国から派遣された技術者や研究職員達と、切磋琢磨の日々を送っているらしい。

誰かと歩調を合わせて物事に取り組む――という点に関しては、恐らく束の人生に於いて初めての事。

普段なら、凡人と同じ空気を吸う事すら嫌う束が、その状況に辛抱しているのは奇跡に近い。

それ程に、世界レベルの人材、資金、資材のバックアップが得難いものなのだろう。

しかし逆に、その束なりの気遣いが、相当の不満を内側に押し殺す原因にもなっていた。

スタッフの日本語がどれだけ稚拙で、聞き取り難いか――。

金を出した程度で偉そうに振舞う各国政府の高官達の態度――。

施設の飯が不味い――。

束に個人的な自由が無い――。

凡人が凡人過ぎる――。

エトセトラ。

そんな数々の不満のその中でも、束はある一点に置いて非常に不満を感じたらしい。

それは、今後各国が莫大な資金を投資して作られるＩＳ専門の教育

機関の、そのセキュリティーシステムがザル過ぎる事だ。

『――――本当にどうしようも無いくらいのダメダメなシステムだって指摘してあげたら、勝手に怒り出してさ。それならやってみろって偉そうに言うから。カチンと来ちゃって。で、ちょっと本気出してセキュリティーの骨子を作ってあげたのさ。まぁ、ぶっちゃけ手間が掛かるくせに、なんの面白みも無い仕事だったけど、これも私のＩＳが宇宙に行く為に必要だからと思って我慢して協力してあげたんだ。だけど問題はその後だよ！』

「何か問題が？」

『なにかもクソも無いよ！　厚意で頼みを聞いてあげたら、どいつもコイツもそれで調子に乗りやがってさ～。アレもコレもって次々面倒事を運んでくるんだもん。久しぶりに笑いながらぶち切れそうだったよ。と、いうか〝次にその口を開いたら、お前の国の人工衛星が全部灰になると思え〟って言っちゃったよ』

「そいつは中々――で、その人は笑ったかい？」

『ん～にゃ、全然。寧ろガクガクブルブルで青い顔して帰ったね。マジでザマァ、だね♪』

「そりゃ、そうなるだろうに……」

束の愚痴の半分を、秋斗は作業の片手間に聞き流していた。

が、それでも大まかに事情を察した。

そして秋斗は思わず苦笑を漏らす――。

白騎士の〝オリジナル〟といわれる一号機の所有権だけは、現時点も束自身のまま。

世界で3機存在する白騎士シリーズの、二号機、三号機は技術開発支援で世界各所を転々としているが、オリジナルの一号機だけはいつ何時でも〝戦闘稼動〟に持ちこめる様に、束自身が万全な整備の上で、常に量子格納した状態で傍らに侍らせている。

つまり〝衛星を全部灰にする〟という恫喝は、決してただの脅し文句や冗談等では無い。

束は常に思い立ったら、本当に衛星の撃墜を可能にするレベルの軍

事力を〝携帯〟して歩いているのだ。
故に秋斗が、恫喝を受けた人物の心中を察するのは容易かった。
秋斗は束の逆鱗に触れた件の人物に対して、密かに胸中で哀悼の意を捧げる。
『あ～、言いたい事全部言ったらスッキリしたよ。やっぱり溜め込むのは良くないね』
「溜め込んで良いのはお金だけってね。それ以外は、過ぎると邪魔になるだけだから、どこかで処理した方が良い」
『お、中々良い事言うね～。つまりこれからも束さんの愚痴を聞いてくれるって事かい？　束さん期待しちゃうよ？　よ？』
「まぁ、時間が余っている時に限るけど、それでよければいつでもどうぞ――――」
束の愚痴を一先ず聞き終えた秋斗はふと思った。
そういえばＩＳの研究に対しての直接的な愚痴は一つも無かった、と――。
『いや～、ふと思い立ってヘッドセットを送ってあげた甲斐があったね。この手の愚痴は今までちーちゃんに聞いてもらってたけど、最近は途中で電話を切ってくるからね。それはそうと、あっくんの方はこの夏休みどうだった？　何か面白いことでもあった？　と、いうかこれは勘だけど、あっくん束さんの話を真面目に聞いてる？』
「ん、聞いてるよ」
秋斗は製作中のフィギュアのシルエットを確かめる様に、天井の明かりに翳した。
「面白い事か――――」
秋斗は紙やすりでパテを切削しながら、ふと考え込む。
「そう言えば、一夏が企画した農業体験に、道場の皆で行ったかな。後は作った例のアレが、意外にオークションで売れた事ぐらい？」
『おぉ。いいね、いいね。なにやら面白そうな匂いがするね。折角だからその話聞かせてよ』
「大まかな事は以前、メールに書いた通りだけど――――ま、いいか」
秋斗は夏休みに起きた出来事のいくつかを話して聞かせた。

☆

小学生の夏休みは平日よりも早い起床が求められた。
そして起床して早々に小学生一同は公園などの最寄の集会地点に集められ、健やかな朝を迎える為にラジオ体操を強いられる。
それは実に〝夏らしい〟行事である。
だが秋斗と言う少年は、昔(前世)からこのラジオ体操と言う文化を嫌っていた。
好きな時に起きて、好きな時に眠る――。
休日のあり方は、そうであるべきと考えているからこそだ。
故に秋斗は、無理やり早起きを強いられるラジオ体操が嫌いだった。
しかし前世は自身を産んだ母親が、そして今生の織斑家には〝規律に煩い真面目な狼〟と呼ばれる姉の存在がありサボタージュを許されない。
「――――こんなもん、昼間やったって同じだろ」
「おい、ぶつくさ言ってないでちゃんとやれ秋斗。一夏を見習え」
「ほら秋斗、頑張れよ！」
「帰りたい……」
朝から元気な姉と兄に挟まれた秋斗は、眠気混じりの欠伸をかみ殺して、ラジオのリズムに合わせて身体を動かした。
視線を横に向ければ、秋斗と同様に帰りたいという顔をした大勢の同級生(なかま)が居る。
また逆のほうに視線を向けると、朝早くから親しい友人らと会える事を楽しんでいる同級生の姿もある。
ちなみに一夏は後者の側である。
そんな集まりの中には、近所の大人や老人達の姿もあった。
そしてその一団の中には、秋斗も良く知る篠ノ之柳韻とその娘の篠ノ之箒の姿もある。
秋斗は篠ノ之親子を見てふと思った。

（――流石に〝博士〟が、ラジオ体操なんてするわけねェよな）

仲良く並んで体操する篠ノ之親子を見て、秋斗はもっとも縁の深いその家の長女（束）の姿が無い事に気づく。

まぁ、世界からＩＳという力で〝自由〟を勝ち取った天災様が、こんな面倒くさい庶民的な行事に参加するわけがないか――。

と、秋斗は納得し、無心で体操を終えた。

「――――なぁ、一夏」

秋斗はラジオ体操の出席の判子を貰いに行く途中で、ふと一夏に問うた。

「出席の判子って〝自作〟したらダメかな？　プラ棒の先端に教科書体で〝出〟の文字を彫るだけなら、多分出来ると思うんだが――――」

「ぶっ！　ちょっと待て、ダメに決まってるだろ！　なに言ってんだ、お前！」

「……ダメか？」

「あったりまえだろ！　そんな縋るような眼をしたってダメだ！　第一、千冬姉にそんな誤魔化しが通用すると思ってんのかよ？」

「……儚い夢だったか」

「――お前、どんだけラジオ体操嫌いなんだよ」

立ちはだかる千冬と言う名の強大な障壁の名を出され、秋斗は思わず天を仰ぐ。

規律にうるさい千冬ならば、不正を絶対に許さないだろう。

秋斗は自分でも性格的に束に近いモノがあると思っている。

なのでこの瞬間に限っては、束が姉であってくれれば良かったのに――と、強く思った。

「――お前達、朝から何を騒いでるんだ？　また、サボりの相談か？」

そこへ箒がやってきた。

私服姿の子供が多い中で、箒の出で立ちは聊か目立っていた。

箒は柳韻と同じで、道場で纏う稽古着の出で立ちだった。

現れた箒に対し、一夏は挨拶もそこそこに反射的に言葉を返す。

「ちげーよ。俺は止めてる側。サボろうとしてるのは何時も通り秋斗

の方だよ」
「まったく相変わらずだな。お前は――」
一夏の返事を聞いて箒は呆れと嘲笑を含んだ吐息を漏らす。
秋斗は内心で、相変わらずと言われるほど、長い付き合いじゃねェんだけど？　と、小さく溜息を吐いた。
柳韻も箒も、一夏や千冬と同じタイプの人種である。
つまり、朝から元気な側の人間だ。
そして妙に真面目で説教くさい台詞を吐く――。
「情けないぞ秋斗。そんな事だからいつまで経っても一夏に勝てないんだ。もう少し、シャンとしたらどうだ？」
箒の在り様は柳韻に似て実に古風で微笑ましい。
が、世の中にはどうしても〝タイミング〟というモノがある。
そして、得てして〝正論〟とは、正しいが故に人を不快にさせる事が多い。
秋斗は生意気な小学生そのものである箒の言葉に、思わず舌打ちを出しそうになった。
相手はまだ小学生――。
なので秋斗は、咄嗟に不満を飲みこんだ。
「失礼な事を言うんじゃないよ。生憎だが剣道と、料理と、内申評価と、友達の多さ〝以外〟なら、今のところは全部俺は一夏に勝ってるつもりだよ」
「――なんだよ、その中途半端な自慢。あと身長は俺のほうが高いぞ？」
「うるせぇな、おめェ（一夏）は黙ってろ」
「と、いうか秋斗よ。男子たるもの全てに勝って見せるくらいの気概を持たんか！」
箒の台詞に秋斗は思わず、口もとをへの字に曲げる。
愚直で、真っ直ぐなひた向きさ――と言うのは、傍から見る分には美しいと思うが、それに自分が付き合わされるのは勘弁願いたい。
その意味で秋斗の性質は束に近く、故に箒と千冬の存在を苦手としていた。

そして箒も少なからず、秋斗に対してそんな予感が有るのか、秋斗の見せた表情に目尻を吊り上げる。

「――お前は、一夏に負ける事を悔しいとは思わんのか？」

「別に、かな？」

「なんだと!?」

「そもそも勝てる要素があるんだから、何を悔しがる必要があるよ？　別に全部負けてるわけじゃないんだぜ？」

「だが！」

「相手の全てを凌駕したいって思うのは分からんでもないけど、そりゃちょっと流石に無理だぜ？　どんな人間にも長所と短所があるんだし。博士だってそうだろ？」

「――――っ」

束のことを仄めかすと、箒は顔を俯かせる。

そして囁くような小声で言った。

姉さんに勝てる要素なんてあるもんか――、と。

秋斗は微かに聞えたその言葉に、ふと思案をした。

秋斗が思うに、箒は一夏にも束にも強いコンプレックスを抱いている。それどころか、身近に居る全ての人間に対して、コンプレックスを抱いている気がある。

頑固で融通が利かない為、愚直に不器用に真正面から挑んで、必然的な負けで傷を負って、最後に泣く――。

秋斗には箒がそういう存在に見えた。

だからこそ、少し考え方を変えれば、もっと気楽になるのにとも思う。

もっとも、それが出来ない頑固者だからこそ、篠ノ之箒は箒なのだろう。

このまま放って置いても原作には辿りつくと思うが、少しくらいは背中を押してやってもいいんじゃないか？　とも思う。

（さて、なんと言うべきか――――）

――と、そこに一夏が口を挟んだ。

「束博士にも出来ない事ってあるのか？　宇宙に行ける天才なのに

？」

一夏には箒の呟きが聞えなかったようだ。

まったくもって意外だと言う様子で、一夏は尋ねる。

そして、そんな一夏の問いがきっかけとなり、箒はまさか――という様子で顔を上げる。

「いや、別に宇宙に行けるから、何でも出来るってのは違うだろ？　実際、能力が頭脳系に極振りになってるっぽいから、家庭的な事は全部妹に負けるって言ってたし――」

「マジか！　じゃあ料理で勝負したら俺も束博士に勝てるか！」

「お前（一夏）なら余裕だろうな。ボッコボコに出来ると思うぜ？　後、裁縫の分野でも余裕で勝てるな。――箒も勝てるんじゃないか？」

「え――」

「え、じゃなくて、お前も料理とか裁縫は出来るだろ？　って、いうか出来るって博士から聞いたんだけど、違ったか？」

知ってか知らずか――。

恐らく主人公体質の影響が出たのだろう。

一夏が思わぬきっかけを作ったので、秋斗はそれに便乗する事にした。

「いや、それは――確かに、勝てる……な。私の方が、姉さんより料理は出来る。と、思う。……後、裁縫も」

「なんだよ、じゃあ全部は負けてねェじゃん？　後、俺はちなみに掃除と洗濯と模型作りと写真と絵画の分野でも博士に勝てる気がする。箒はどうよ？」

「わ、私は――剣道と料理と裁縫と掃除と――後は、えっと――」

「別に難しく考えなくても、勝てる気がしたなら、それは全部勝ちって事でいいんだよ」

「――それは大げさじゃないか？」

一夏が眉を顰める。

「勝手に思うだけなんだから、解釈なんて自由だろ。それに負けてると思って、いじけて生きるよりよっぽど健全だろうが？　それになにより――楽だろ？　楽をするってのは、生きる上で結構重要なんだぜ

？」

「お、おう。そうか――――」

「何か間違っている様な気がするが、妙な説得力があるな」

箒は秋斗の言わんとする事を深く察せず、首をかしげて一夏の方を見る。

しかし一夏も、秋斗のいう事に半信半疑な様子だった。

真面目で健やかな子供の成長に、害を及ぼしかねない〝ひねくれた生き方〟の説法だが、コンプレックスに悩むよりは良いだろう。

秋斗はそう考える事にして、しばらく一夏、箒の2人と、『どの分野なら〝天災〟に勝てるか？』の談義に花を咲かせた。

その日以降――箒とは不思議とよく遊ぶ仲になった。

11　諦めが肝心

季節は秋。

読書、食欲、そしてスポーツや芸術の季節と、大抵の人間は連想する季節。

織斑三姉弟も、そんな世間の例に漏れなかった。

今年の秋は例年と少しだけ違う。

なぜなら、今年の夏に起きた小さな〝変化〟が、一つの形として身を結んだからだ。

「――よっし、出来た！　秋斗！　晩飯出来たって千冬姉に伝えてくれ！」

「自分で呼べよ。面倒くせぇ」

「ベランダに居るんだから、声かけるぐらい直ぐ出来るだろ？」

台所で夕餉の支度を終えた一夏が、弟（秋斗）を呼ぶ。

が、それに返す弟（秋斗）の声は、いささか鬱陶しそうである。

「――別に好きでベランダに居るんじゃねぇっての」

秋斗は一夏の声に一つ舌打ちをする。

台所に隣接するリビングの、戸を開けた先にあるベランダの一角。

そこには、風除けのダンボールをくみ上げて作った秋斗専用の模型用作業ブースがあった。

そこで秋斗は連日、己の考案した資金策（改造模型製作）を進行していた。

千冬と一夏が臭い臭いと喚くが故に、仕方なく吹きさらしの屋外に作った模型用の作業スペース。※（洗濯の際に邪魔だと小言を言われる事も多い）

その場所で作業する事を自分で選んだ秋斗だが、実際の所その場所に一番不快な思いをしているのは、言うまでも無く秋斗本人である。

秋斗は作業の手を止め、少し棘のある声で千冬を呼んだ。

「おい、姉貴！　飯だとさ！」

秋斗は途切れてしまった集中力を惜しみながら、ベランダの手すりから顔を覗かせて一階の駐車場で竹刀を振る姉（千冬）を呼んだ。

「――あぁ、判った。直ぐ戻る」

千冬は秋斗の声を受け、正眼に構えていた竹刀を降ろした。
文武両道を体現する勤勉さ。
学校も仕事も休日というにも拘らず、千冬は己を鍛える事に余念がない。
その性格には実に頭が下がると秋斗は思う。
「――鍛錬ならいつも道場でやってるのに、何で今日は駐車場でやってんの？」
「道場に行けば後輩の指導だの何だのと、いろいろ付いて回るからな。それが煩わしかった。後、今年は少々本気を出したいからな。その為に自分の時間が欲しかっただけだ」
「ふ～ん。まぁ、よしなに……」
千冬は今日、珍しく朝から夜までずっと自宅にいた。
秋斗の齎した資金策が功を奏して時間が出来たと言うより、寧ろその逆――最近の千冬は〝何らかの目的〟があって、あえて自分の時間を作っているように見える。
秋斗はそれを少し不思議に思ったが、特に気にはしなかった。
「――ふふふ、今日は遂にコイツのお披露目だ。良く味わってくれよな！」
食卓に向うと、そこでは一夏が不敵な笑みを浮かべていた。
秋斗は夕餉のメニューをチラリと見る。
これ見よがしに食卓のセンターに置かれているソレを見て、思わず溜息を吐きたくなる。
「……なんだ、漬物かよ」
「おい、なんだよその言い方！　もっと驚けよ！」
「すげー〝糠漬け〟がセンターポジションにある。こんな食卓なんて初めて見たぜー」
「……お前（秋斗）、やっぱり馬鹿にしてるだろ？」
食卓のセンターに置かれているのは小鉢に盛り付けられた糠漬けだった。

それは今年の夏に一夏が自ら企画を立ち上げた〝農業体験〟の結晶で、農家の夫妻から分けてもらった糠床と夏野菜を使って作られたものだ。

漬けた野菜は織斑家のこだわりシェフ一夏が、自分で畑から選んで採取したキュウリと茄子。

誤解がない様に言うが、秋斗も一応、一夏がこの糠漬けにかける思いの程を良く知っている。

その為、口では茶化したが、結果として一つの作品として器に盛られている様を見て、その努力の結晶を決して馬鹿にするつもりはない。

ただ単純に、今は虫の居所が悪かっただけである。

――後は、ドヤ顔で出された夕食のメインが漬物という食卓に、心から心が踊らなかっただけだ。

そしてそこへ、タオルを肩に引っ掛けた千冬がやって来た。

「さて、今日の夕食は――なんだ漬物か」

「千冬姉までそう言うことを言う！　２人とも漬物馬鹿にすんなよな！」

食卓を見るなり溜息を吐いた千冬に、一夏は声を荒げた。

「文句があるなら２人とも食うなよな！」

「いや、そうは言ってないだろ？　悪かった。ごめんよ一夏」

「そうだな。嫌とは言っていない。だがまぁ、気を悪くしたなら謝るよ。すまんすまん」

食に対して一夏は一家で一番煩かった。

小言が始まる前に秋斗と千冬は手を合わせ、箸を取る。

「――食べる前に２人とも手を洗ったか？」

「……この漬物美味いな、姉貴」

「だな。流石一夏だ」

「無視すんなよ！　ってか、２人とも手を洗えよ！　まず！」

「多少小汚い方が身体に免疫力がつくっぽいってアルファ部隊のコール二等兵が言ってた。だから問題ないさ」

「そう言うことを言ってんじゃねーよ！　ったく、お前は本当に――

――」

「一夏、食卓で騒ぐな」

「千冬姉まで!?」

そうして、織斑家の秋の夜は更けていった――――。

☆

――それは一夏の作り上げる傑作（料理）とは、また別の意味で非常に緻密で繊細な、実に手間の掛かる作業だった。

なにせ一体作れば最低でも〝５万〟の値が付き、売れてしまう。

あらゆるものには〝市場価値〟と言える価格の目安が存在するが、コレに関してはまだ、適正な価格が備わっていない。

故に言い換えれば、現状は『出来が良ければ物好きが潤沢な金を払ってくれる』のだ。

改造模型――。

それは現世において、未だ誰にも開拓されていない前人未到地（フロンティア）である。

だからこそ秋斗はそこに一筋の希望を見出した。

故に――

「ほんの数ヶ月でこの稼ぎ――まともに働くのがアホらしくなるぜ、まったく――」

と、例え臭いと家族に怒鳴られても、例え雨に濡れながらの作業になっても、秋斗は改造フィギュアを作り続けた。

そして法を犯す事も辞さない覚悟で始まった資金策は、その甲斐あって、秋斗が想定した以上の莫大な金を生み出した。

経費を差し引いた純粋な利益だけでも１３０万円――。

月で換算すると、秋斗の稼ぎは世間で言うところの平均的な社会人の所得を大きく超えていた。

ネットバンクの残高を見て、秋斗は思わずほくそ笑む。

が、そうした幸運も、決して長くは続かなかった――――。

『――しかしまぁ、派手に稼いだもんだね。かなり危ない所だったん

じゃないかい？』

「まさかこんな短期間で対策が採られるとは、予想してなかったな……」

ラップトップにインストールした音声通話ソフトを使い、今日も秋斗は束と通話する。

よほど仕事が退屈なのか、毎日のように連絡を取ってくるからだ。

秋斗は今日も、〝天災〟とマンツーマンと言う世間の科学者や政治関係者が知れば、大いに嫉妬するであろう貴重な時間を過ごしていた。

『2ヶ月だっけ？　例のアレを売り始めてから最初の見せしめが出るまでに？』

「そう。たった2ヵ月――俺は半年は持つだろうと思ってたんですけどね。腹が立つほど世間の対応が早い――――」

永遠にバブル景気は続かない――。

しかしもう少し夢を見させてくれてもいいだろうと、秋斗は思った。

今生の社会に〝改造フィギュア販売〟というジャンルを開拓した秋斗の流れに続く形で、世の中の模型ディーラーが動き出したのが先月の事――。

そして今月になり、遂に世間に改造フィギュアを作っていたディーラーの中で〝逮捕者〟が出たのだ。

『逮捕されなくて良かったね。あ、未成年なら逮捕はされないんだっけ？』

「さぁ。知らん」

秋斗はニュースサイトの記事を読む。

先日逮捕された模型ディーラーは、己の行動を罪だとは思っていなかったようだ。

言うなれば、皆が動いて甘い蜜を吸っていたから、自分もそれに便乗した――。

それだけである。

しかし法律的にはグレーゾーンなので、権利会社が黒といえば、問

答無用で黒になる。
　それは仕方のない事だった。
「まぁ、今回の逮捕は見せしめだろうし、まぁ――今後もオークションに出展自体は出来るだろう。ただ、半年に一回とかになるかな？　今度は塗装済みオリジナル改造プラモで売ろうか……」
『あっくんも懲りないねェ。いーけないんだー♪　逮捕されても知らないよ？』
「博士にゃ言われたくねーな」
　幸いな事に今回の逮捕されたのは秋斗とまるで面識の無いディーラーだった。件のディーラーが逮捕された理由は、独自にｗｅｂサイトを立ち上げて版権フィギュアの改造製作を代行するという明らかな営利目的があったからだろう。
　改造フィギュアの分野ではパイオニアとも言えるポジションに居て、それでも逮捕を見逃されたのは、それが理由だろうと秋斗は考える。
　秋斗はフィギュアを、あくまでも〝処分〟と言う名目で吐き出した事が命運を分けた。
　だが秋斗は、速やかに改造フィギュアの市場から手を引く事を決断した。
　なので今度は、また別の分野で資金を得る準備を始めなくてはならない――――。
『今度は何をやるのかな？　かな？　夏に送った〝白騎士〟のデータでガレキでも作る？』
「白騎士のガレキねぇ。少し前から貰ったＳＤとＣＡＤの図面を見ながらボチボチ作ってるけど、もう少し時間がかかるかも。ワンフェスには出せないだろうから、ネットでの限定受注販売になるかな。まぁ、それより――――」
『ん？　どうしたの？』
　秋斗は目下の悩みを束に打ち明けた。
「いきなり１００万も稼いだ事を、姉貴（千冬）にどうやって伝えようかと

思って――。仮にも逮捕者が出た手段で稼いだ金だから、詳しく説明するのは正直避けたい。と、いうか稼ぐ事に傾倒し過ぎて、どうやって姉貴に稼いだ事を説明するか、まるで考えてなかった。もしも今、姉貴が俺のネットバンクの口座を確認してきたら、俺は死ぬかも知れん」

『あ～。うん、そうだね』

「――博士」

『何かな？』

「――なんか、誤魔化す良い方法ないっすか？」

仮にも天災と謳われる存在に、秋斗は縋った。

真面目な狼とも称される織斑千冬を相手に、逮捕者が出る方法で金を稼いだ事を説明するのは、絶対に避けたかった。

知られれば間違いなく怒られるだろう――。

しかも、どのくらいの怒りとなるのか、まるで予想が出来ないのだ。

秋斗は今になって己の迂闊さを呪った。

最初に気づけ、と――。

どうやって自分の稼ぎを織斑家に反映させるかを考えていなかった己の阿呆さ加減に舌打ちしながら、秋斗は束に助けを求めた。

束は少し悩み、そして口を開いた――。

『人間ってのはね。諦めが肝心な時もあるんだよ。だから――』

「いやいやいや、なんかあるだろ！　それでも天災かよ！　まるで役にたたねーじゃねェか！」

『失礼な事を言う子だねェ!?　第一、ちーちゃんを出し抜ける方法があるなら寧ろ、私がソレを知りたいくらいだよ！』

「いやいや、博士は〝織斑千冬〟に怒られた人間部門のギネスホルダーだろ!?　なんかあるだろ！　なんか良い方法が――」

『だからその膨大な思案回数の結果が、速やかに諦めろなの！』

「……マジか？　マジで諦めるしかないんですか？」

『マジだよ。――ごめんね』

「……終った」

秋斗は憂鬱な気持ちで吐息を吐いた。

「折角稼いだのに使えないとか――俺は馬鹿だ……」
怒られるのを避けるなら、改造フィギュアの稼ぎの秘密も、その金も墓の下に持って行くしかない。
しかし口座の記録に数万、数十万単位の入金記録があり、そして残高は１００万を超えているのだ。
小遣いの無駄使いをしていないかと、千冬が残高の抜き打ちチェックでもしようものなら、絶対に追及される――。
秋斗はそれを如何にかして、誤魔化す方法を思案した。
「――なぁ、博士？」
『ん？　なんだい？』
「博士ってさ、どのくらいチートなん？」
『ん～、自分で言うのも何だけど超絶チートかな？』
「――具体的に言うとどのくらい？　ペンタゴンとかハッキングできるか？」
『その程度、超余裕だね。と、いうか回線が通って電子制御されてる場所なら、大抵潜り込めるね。最近だと――あぁ、いや。これは内緒♪』
「なに？　人工衛星でも乗っ取ったん？」
『もっと凄い事をかな？　でも、秘密。残念だけど教えてあげないよん♪』
「だったら――」
秋斗は通話の向こうで、ドヤ顔を浮かべている束の顔が見えた様な気がした。
「だったらネット上に架空の名義の口座って作れるか？　ネットバンクの履歴を消去したりとか――」
『その程度ならものの数分もあれば余裕だよ』
「――マジで？」
秋斗の脳裏に、状況を一変させる案が浮かぶ。
『なに？　もしかしてあっくん、私にそれをして欲しいのかい？』
「いや――まぁ、でもお願いっちゃお願いかな」
『――？』
連日、個通をするようになってから秋斗は束の性格を何となくだが

把握していた。

なぜ短期間で把握できたかに、理由があるとすれば、ただ何となく……秋斗と束は似ていたからだろう。

束は自分の能力を、つまらない事で無闇に利用されるのを酷く嫌う。

そして秋斗自身も物を作る人間であり、だから無粋で無闇な要求は自分でするのもされるのも余り好きではない。

だからこそ、だろう。

先ずは自分でやってみる――という気概を見せるという提案の仕方を、秋斗は無意識に行なっていた。

「俺に電子分野と言うか、ハッキングとかのやり方を教えて欲しい。簡単だって言うなら口座云々の問題は自分で解決してみたいんだけどどうだろう？」

『なるほど。そういう頼り方は嫌いじゃないね。ただ〝やって〟って言うだけなら、あっくんの事、少し嫌いになってたかも』

「要求するだけってのは俺も好きじゃないから言わないよ。作ってくれって報酬も出さないで頼んでくる連中とか嫌いだし――」

『居るねェ、確かに。あっくんの場合は学校とかでかい？』

「ん～まぁ、そうだね。（ぶっちゃけ前世の事だけど……）――まぁ、覚えられるのなら、自分でやり方を覚えた方が良いかなと――。まぁでも、その類の教科書なんて何処にも無いから、結局は博士頼みになるんだけど――」

おべっかに聞えるかもしれないと秋斗は思った。

が、本心であった。

そしてその気持ちが伝わったらしく――

『うんうん、御礼をする気持ちは大事だね。それと、そう言う事なら束さんが手を貸すのも吝かではないよ♪　そっか、そっか！　あっくんも電子分野に興味あるんだね♪』

「まぁ、身近にＩＳなんてスゲー代物を作った人が居るから、興味は出るよ。ぶっちゃけ白騎士カッコいいし」

『ほほぅ。じゃあ、今日からあっくんは束さんの〝弟子一号〟とするよ。これからあっくんには、広大な宇宙を目指して粉骨砕身の覚悟で勉学に励んでもらうよ♪』

「――――え？」

束は秋斗の提案に対して、斜め上の好意的な答えを返した。

なので秋斗は戸惑いを隠せなかった。

ハッキングについて勉強しようと言う気概を抱いたのは本物である。

が、正直言うと片手間くらいの手伝いでもあれば御の字。というぐらいで考えていた。

なので秋斗は、いつの間にか〝天災の弟子〟にジョブチェンジした己に気づき、そして焦る。

また、押してはいけないスイッチを押してしまった様な、そんな冷や汗が背中に流れるのを感じた。

『束さんの作ったＰＣなら初心者用のデバイスとして丁度いいから、一先ずはそれで勉強する事にしよう。とりあえず教材をＦＦＴＰに放り込んどくから、ダウンロードしてね。今、送ったよ』

「え？　あ、はい――――」

『よし！　じゃあ、レッスン１開始するよ～♪』

「ちょ――――」

そして秋斗は天才の弟子としての一歩を踏み出す事になった。

12　分岐点　前篇

夕日が照らす安アパートの駐車場で、竹刀を正眼に構えた少女がいた――。

意志の強さを象徴する釣り眼がちの鋭い眼光で、千冬は仮想の相手と対面する。

鍛錬の際、千冬が想定する相手は師の柳韻である場合が多い。

しかし此処最近は、千冬は自分自身を仮想敵に選んでいた。

「――――っ」

千冬は悩んでいた。

選ぶべきか否かを――。

事の発端は7月の終わり頃だ。

同級生でありながらも既に己の進路を決め、ある意味で社会に出ている束が、千冬の下に寄越したある電話の内容。

ＩＳ乗りになって欲しい――。

束は千冬にそう提案した。

世間を多いに震撼させた『白騎士事件』――。

公式には発表されていないものの、千冬も束と同様にその渦中の人物だった。

親友の頼みとはいえ、己が世界を混乱させたテロに等しい行為に手を貸した事を、千冬は今も内心で密かに恥じていた。

故に、束の後を追うようにＩＳの分野に身を投じる事を素直に良しと出来なかったのだ。

気にしなくて良いと束は言うが、ソレを判断するのは千冬自身である。

真面目に慎ましく、不義理を良しとせず、清廉に生きよう――――。

師である柳韻を無意識にも倣って生きたが故に、千冬は悩む――。

「――――ふう」

息を一つ吐き、剣を降ろす。

答えは既に出ているに等しいのだが、その最後の一歩が踏み出せない――。

ここまでにするか――と、剣を担いで家に戻ると、珍しく双子の弟の秋斗の方が、キッチンに立って夕餉の支度を行なっていた。
「ん、今日は秋斗が作るのか？」
「あぁ。一夏の奴は明日に備えてまだ剣を振るってさ。たぶん、まだ道場にいると思う」
手早く豆腐を切り、油揚げと戻したワカメを鍋にくべて、秋斗は味噌汁を作っていた。
料理といえば一夏の印象が強いが、秋斗もそこそこ以上に料理を得意としている。
千冬は秋斗の手際を見ながら、ふっと苦笑を漏らす。
「秋斗は器用だな」
「ん、そうか？」
「あぁ。羨ましいよ――」
「――俺は、どれかを極める方がよっぽど凄いと思うけどな」
「私の場合は融通が利かないだけさ」
「俺の場合は飽きっぽいだけだよ」
ふっと、お互いに笑みがこぼれた。
自分に足りない部分を羨ましく思うというのは、本当らしい――。
千冬は密かに思った。
秋斗は姉馬鹿なフィルターを通さずとも、非常に器用で優秀な子供だ。
常人の斜め上を行く発想を思いつき、ソレを実現する行動力を持ち合わせる。
そして監督を無視して、勝手にどんどん歩いていくような少年だ。
秋斗が大人の庇護を求めなくなったのはいつからだろう？
千冬はふと考える――。
「――なぁ、姉貴よ？」
「ん、なんだ？」
千冬は思考の海から浮き上がった。
秋斗は夕餉の支度をする手を止めずに、予定を聞くような何気ない調子で口を開く。

「――今日、剣道辞めてきた」
「――――は？　辞めた？」
千冬は秋斗の台詞に思わず眼を丸くした。
良い意味でも悪い意味でも千冬は秋斗に驚かされる事が多い。
そして今回もそうだった。
「――なぜだ？」
千冬は問うた。心なしか、声が低くなってしまった。
だが問う以前に、千冬には何となくその理由を察する事が出来てしまった。
以前、秋斗は剣道にさほど興味が無いと言っていたのを覚えていたから。
しかしこうもあっさり――。
しかも既に辞めているというのはどういう了見だ？　と、千冬は思った。
「剣よりやりたい事を見つけたから、そっちに時間を割きたい。そんだけさ――」
秋斗はあっけらかんと言った。
その様子はどこか、親友（束）の浮かべる空笑いに似ていた――。
「――そうか」
本人にやる気が無いのなら仕方の無い話――。
だが千冬にとっては非常に思い入れ深い分野だ。
故に、簡単に捨て去った秋斗の行為に、千冬は少なからずショックを受けた。

☆

秋斗達の住む地域では、毎年秋～冬の頃に市の剣道の大会が催される。
なのでこの季節になると、剣の腕に自信のある面々は、その表情に険を作り始める程だ。

会場にはテレビの中継も入る為、学生でない社会人などは寧ろ、この大会に出て成績を残す事を目標にする事も多い。
篠ノ之道場の中で、特に今年の大会に対し、強い意気込みを見せている者が3人居る。
一人は一夏。
一人は箒。
そしてもう一人は千冬である。
まず一夏と箒だが、2人は子供ながらもその背中に背負う偉大な名前があるからだ。
そして、それを意識出来る様になった年頃だからだろう。
一夏は昨年の大会覇者である〝織斑千冬〟の名前が――そして箒には、己の剣の師であり父の〝篠ノ之柳韻〟の名前がある。
しかし低学年の部門で大会優勝と言う頂を狙うには、お互いに相手を打ち倒すのは必須となる。
故に2人は、この大会で間違いなく戦う宿命にあった。
――だが2人のその関係には、以前のような険悪さが見られなかった。
箒が徐々にだが、周囲に歩み寄る姿勢を見せたからだ。
最初は織斑兄弟に対して、敵意に近い一方的な嫌悪を抱いていた箒。
しかしちょっとした歩み寄りの機会があり、夏頃から〝好敵手〟とも〝友人〟とも言い換えられる関係に変わった。
少なくとも秋斗はそう感じていた。
そして最後の一人の織斑千冬の方は言わずもがな――。
千冬は同大会に出場する面々の中では、中学生の頃から毎年優勝、もしくは準優勝と言う驚異的な成績を治めている。
家庭の事情から部活動に参加する事はないが、その実力は付近の高校に通う剣道部員に決して引けを取らず、また容姿からファンも多い。
大会でもっとも注目される選手の一人と言っても過言ではない。
そんな千冬だが、最近はいつも以上の覇気に満ちて、修練を重ねて

いた。
千冬は普段から、並々ならぬ努力を苦とも思わない文武両道の体現者である。が、今年は夏の終わり頃から異常なほどに己を追い込んでいるように見えた。
その理由に関しては、秋斗も一夏も分からなかった。
だが、明日の大会で、何か強い決心を固めようとしている――。
そんな予感がした。
大会を前日に控えたある日――。
秋斗は最近、夕食の準備を代わってくれと言う一夏の頼みに応え、今日も晩の食卓を司った。
秋斗は姉と兄の明日の勝利を祈って串カツを作った。
「まぁ、とりあえず俺は応援してるから、2人とも頑張ってくれ」
「――――なぁ、秋斗は本当に剣道辞めるのか？」
「あぁ」
「……なんでだよぉ」
一夏は寂しそうに口を尖らせる。
心なしか、千冬も寂しそうに見えた。
秋斗は本日付けで、篠ノ之道場を辞めた。
そしてその旨を、先ほど姉と兄に話した。
たまたま託児所代わりに預けられた場所が剣道場だっただけで、秋斗自身にはそれほど剣に対する強い思い入れがない。だからこの先もズルズルと道場に通い続けるより、いっその事、きっぱりと足を洗って自分の道を行こうと考えた故だ。
加えて、束の〝弟子〟になった事もある。
だが、それについては千冬にも一夏にも明かしていない。
言う必要も無いと思ったからだ。
だから秋斗は『やりたい事を見つけた』という言葉で、一夏と千冬を突き放した。
その言葉も本心ではある為、嘘ではない――。
「まぁ、姉弟といっても、皆が皆同じ道を行く必要もねぇだろ？」
「もう決めたっていうなら、何も言わないけどさ――。一言ぐらい相

談してくれたって良いだろ？　突然、辞めるってなんだよそれ――」

一夏は、秋斗が剣道を辞める事に対して、最後まで不満そうだった。

夕食の時も風呂上りも、そして寝る直前になってもしつこく説得してきた。

が、秋斗の決心が固いと知ると、遂に諦めた。

「――じゃあ、明日に備えて先に寝るから」

「あぁ。おやすみ」

まだ２０時だというのに、一夏は明日に備えて先に布団に潜っていった。

リビングには千冬と秋斗が残った。

「――なぁ、秋斗？」

「ん？」

千冬はテレビの音量を下げながら、ＰＣで作業に向う秋斗に尋ねた。

「お前、私に何か隠してないか？」

「――何で？」

「……なんとなくだ。後、もしかして剣を辞めた理由もそこにあるんじゃないか？」

「――っ」

動揺が表に出そうになった秋斗は、咄嗟に内心で素数を数えながら、穏やかに一拍呼吸を置く――。

千冬は秋斗に視線を向け、小さな溜息を吐いた。

「……もう一回聞くが何を隠してる？」

「寧ろ、姉貴は何が気になるん？　俺が何を隠してると？」

「質問に質問で返すな、と言いたいところだが、まぁいい――。そうだな。最近、束と何をコソコソ始めたんだ？」

「あぁ。それか――」

改造フィギュアを売っていた事は、まだ知られていなかったらしい。

なので、秋斗は内心で少し安堵した。

「――博士から電子工作（ハッキング）を教わってる。まぁ、プログラムの云々につ

いてとか、設計やらなんやら――説明が難しい事さ」
　これは本当のことだった。
　秋斗は此処最近になって、束から電子工学やプログラミングと言った、束が専攻する分野の一部を教わっている。
　千冬は秋斗の顔をジッと見た。
「――――はぁ。あれほど言ったのに結局そっちに進んで行ったか」
「そんなに俺が博士とつるんでるのが嫌か？」
「嫌というか、アイツと関わって碌な事になった例がないからな。――まぁ、それはいい。ただ、危ない事はしてないだろうな？」
「何を持って危ないと言うかは理解しかねるけど、出来ない事を無理やりやろうとはしてないよ。流石にそこまでの度胸はないし」※（ハッキングの勉強中）
「――――そのイエスともノーとも取れない曖昧な言い回しを聞くと、あの馬鹿を思い出すな」
「気のせいだろ？　俺は元からこんな感じだ」
「……」
　千冬は眼光を鋭くするが、直ぐに眼を伏せた。
「余り、アイツを真似してもらいたくない」
「寧ろ、真似しようと思っても出来ない事のほうが多くて困ってるくらいだ。世間じゃ色々言われてるけど、実際、真面目な話をしてみると尊敬出来る科学者だよ、博士は」
「そうか――。まぁ、お前もアイツの認める数少ない友達らしいからな。今更、奴との付き合いを辞めろとは言わんよ。だが、余り影響されてくれるなよ？　私の周りに束は二人も要らん――」
「んな、大げさな――――」
　千冬は嬉しそうにも、寂しそうにも見える笑みを浮かべた。
「――そういえば、姉貴も明日の大会に出るんだよな？　最近よく駐車場で竹刀振ってるけど、なんか去年より気合入ってないか？」
「そう見えるか？」
　秋斗は、ふと気になった事を尋ねた。
　千冬は秋斗の質問に、ジッとテレビに視線を向けたまま曖昧に頷く

――。

「別に誰かを打倒する為に剣を振るってるんじゃないさ。まぁ、機会が来たら話す。遅くとも今年の春には、な」

千冬はそこで話を打ち切り、風呂に向った。

☆

同じ土俵に立って分かる〝偉大さ〟というモノが存在する。

秋斗は最近、強くそれを感じた。

千冬に改造フィギュアを売って稼いだ事を誤魔化す為、軽い気持ちでハッキングを教えてくれと束に嘆願した秋斗は、気づけば束の弟子になっていた。

秋斗は総数１０００枚に上るであろうＰＤＦファイルに眼を通し、束が世界から〝天災〟と呼ばれている所以を知る。

束が学者として専攻している分野は、化学、科学、電子、光学、工学、医療、物理、量子、機械設計、整備と、大雑把に分けるだけでも非常に多岐。

そして言うまでも無く、それらの分野はどれ一つとして容易いものではない。

束と言う存在は全てにおいて、並み居る世間の天才達を軽く凌駕する逸材だったと、秋斗はこの時改めて思い知った。

『――じゃあ次は、昨日の続きから行ってみよう♪』

束が専攻する分野の中で、秋斗は機械と電子工学とプログラム――そして〝ＩＳ〟に関するその他諸々を師事した。

毎日束から送られてくる課題を解き、夜は音声通話による指導を受けながら、プログラムの構築や束手製の電子模型キットの制作に励む――。

教えについていけたのは、前世の記憶と言うある程度の学習の下敷きがある事、そして己の身体が想像以上に高スペックだったからだ。

「――――感謝しねェとな」

『ん？　何か言った？』

「いや、なんにも」
最初は頭の痛くなりそうな分野だと感じた勉強が、日を重ねる事に少しづつ理解出来るようになった。
自分の知識や行動の範囲が広くなる手ごたえを感じると、不思議と勉強の日々が楽しくなった。
何より秋斗は、己の中にある才能に気づけた。
考えてみれば当然の事だが血の繋がる姉兄同様に、秋斗も十分に才気溢れる器だった。
それが、秋斗の成長を加速させていく――――。
『――――じゃあそろそろ、あっくんお待ちかねの〝情報の改竄〟に挑戦してみよっか』
「――いざ自分でやるとなると、結構緊張するな」
『大丈夫大丈夫、バックアップしてあげるから肩の力を抜きたまえよ、少年♪』
「スゲェ頼もしいけど、ある意味で滅茶苦茶怖い援護だぜ」
秋斗は束の作ったファイヤーウォールで、プロテクト解除を含めた電子領域への侵入、そして情報改竄と言ったハッキングのノウハウを学んだ。
そして今日は遂に、〝実地訓練〟である。
一夏が寝静まり、千冬がバイトに向った深夜。
今日も束の弟子としての訓練が始まる――。
「――で、実地として今日は一体何を？」
『なに、簡単なお遊びさ。ちょっと覗いて帰ってくるだけだよ♪』
秋斗の最終目標である企業のネットバンクの情報改ざんは難易度が高いので、手始めに手軽な〝悪戯〟を以てして、学んだ技術のテストをする事になった。
その教材として運悪く白羽の矢が当たったのが、以前秋斗が自作の改造フィギュアを売りつけたネットオークションの顧客達である。
束は秋斗のＰＣにテスト内容を送った。
『――それじゃ説明するね。この間、あっくんがフィギュアを売ったお客さんのメールアドレスから相手のＰＣに進入して、モデムからＩ

Pアドレスを取得。そこから個人情報を抜き出して、その勤め先からお客さんの給与明細を拾ってきたら合格ね』

「相手がヒキニートだった場合は？」

『その場合はその家族のでいいや。あぁでも、個人事業主だったらちょっと厄介になるね――』

「個人情報を抜いてくるまでで良くないか？　流石に国税庁に仕掛けるのは勘弁して欲しいんだけど――」

『う～ん。まぁ、それでいいか』

「じゃあ、それで――。で、制限時間は？」

『まぁ、初めてだし１５分でお願い。束さんが作ったソフトがあれば余裕でしょ？』

「――やってみる」

秋斗はメールボックスから、改造フィギュアを高値で落札してくれた大きな悪いお友達のメールリストにザッと眼を通した。

「――こいつにするか」

『お、どんな奴だい？』

「ん～俺のフィギュアを４０万ぐらいまで競り合って落としてくれた中国人――かな？　名前がそれっぽい」

『へ～』

秋斗はメールの文章を開き、束にも読めるように繋がるチャットにコピペした。

これでもしもの時のバックアップに、束も対応がとれる。

『――ガクバリ？　ブキバリ？』

「どっかで見たことあるんだけど、なんだったか忘れた。たぶんまぁ……中国人だろうな」

『そうだね。じゃあコイツにしよう♪』

ちなみに秋斗と束は読めなかった嵌張（カンチャン）というＨＮである。

『さて、それじゃあ、準備してね、よ～～い』

「――――」

『はじめ♪』

「っ！」

秋斗はＨＮ嵌張（カンチャン）に向けて、ハッキングを敢行した。
束側のモニターでも秋斗の状況は見られる為、２人はしばし無言で状況に対応する。
「――――送信元を辿ってみたかぎりだと日本人っぽいな」
『だね。だけど――――ちょっと癖のある相手かなぁ』
メールの送信先を辿ってアドレスから登録住所と家族構成を抜き出していく――。
が、侵入の段階で思わぬ抵抗を受け、秋斗は少し焦る。
『落ち着いて。ちょっと手ごわいけど、こっちの情報が抜き出される事は無いから』
「そうは言ってもめっちゃ手ごわいぞ。なんだこれ――――」
『……確かに、初めてでこれは厳しいかもね。援護するから撤退して』
「くっそ！」
何時に無く、束は冷静な声で言った。
その判断に舌打ちしつつ、秋斗は回路を遮断する。
『――――っと、コイツは意外に手ごわいね。ど素人かと思えば中々強固なサイバーテロ対策してるじゃないか。あっくん。コレたぶん――相手は〝素人〟じゃないよ』
「……マジかよ」
秋斗は思わず困惑した声を漏らす。
『時間稼ぎに特化してるソフトを積んでるね。多分、仕掛けた相手に反撃する為のシステムだと思う。その手の事に詳しいバックアップ体制が向こうにはあるみたい。相手のＰＣのプロテクトを組んだのは恐らく、本職（ハッカー）の人間かな？』
「おい、博士大丈夫か？」
『余裕余裕。まぁ束さんに任せなさい。どう頑張ってもあっくんが疑われる事はないし、相手はサーフジインターネッツの途中で運の悪い事に粗悪なウィルスに感染したって思うだけだよ。まぁ、情報は貰うけどね♪　ほいっ、完了！』
束は手早く情報を抜き出して、回線を閉ざした。

秋斗にも見えるように、束はチャットに相手の情報を載せた。
――その情報を見た瞬間、秋斗は思わず声を失う。
「……」
『いや～中々いい暇つぶしになったぜ。に、してもあっくんって、かなり籤運がいいよ。いや、悪いのかな？　こんな大物引っ掛けるなんてさ♪　〝更識〟って確か、日本のなんかの組織だよ。絶対ヤクザを殺すヤクザみたいな組織？　よく分からないけど、どうやらそこの〝娘〟のＰＣだったみたいだね。しっかしまぁ、予想以上に抵抗するもんだからつい中のデータもろもろフッ飛ばしちゃったぜ♪』
「まさかとは思いたいが――」
秋斗はある一人の原作キャラを思いだした。
そしてそれを決して言うわけにもいかず、秋斗は心の中でその青い髪の少女に深く頭を下げる。
『個人用のＰＣにここまでプロテクト掛けてる相手もいるんだねぇ。まぁ、話が本当なら金持ちらしいし。えっとこのサラシキ――トウナ？　カタナナ？　って読むのかなコレ？』
「――多分、カタナって読むんだと思う」
『へーまぁ、どうでもいいけど』
「せやな」
恐らく妹にプレゼントしてやろうと思って、秋斗のフィギュアを買ったのだろう。
秋斗はこの秘密もまた、死ぬまで秘めておこうと心に誓う――。
またそれはそれとして、更識家の次期当主と目される青髪の少女は、ＰＣに溜め込んだ秘蔵の妹画像のデータが吹き飛んでいる事を知って発狂したらしい。
『――まぁ、流石に今回は運が悪かったね。でもまぁ、この経験も確かな血肉となったでしょ？　じゃ、次行って見よう！』
「……了解」
天災の弟子として、秋斗はこの日６人分の個人情報を、実地訓練として取得した。

13　分岐点　後篇

知らない世界を知り、思いも寄らぬ技術を手に入れた。それが所謂、世間で言うところの〝悪事〟であった事、そして想像以上に容易に習得、そして実行出来てしまった事――。

秋斗にとって束に教えてもらったハッキング、クラッキングと言う技術は、思いも寄らぬ楽しさを与えてくれた。

誰にも悟られる事無く進入し、情報を抜き取って離脱する。その緊張感と、ある意味で空間を支配しているような全能感が、一種の麻薬に近い感覚だったからだ。

想像以上にストレスが溜まっていたらしい――。

秋斗は徹夜明けの気だるい頭で思う。

秋斗は己の存在が〝イレギュラー〟であると気づいた時点で、その人生の存在意義、行動目的を〝織斑家〟に見出していた。その上で、上乗せされた前世の経験と言う恩恵を武器に、あれこれと思案を重ねて実行に移してきた。

しかし目覚めから2年経っても、秋斗が思うほどに家庭の状況は変わっていない。

理由は小学生と言う身体の不便さと、保護者と言う枷にある。

遅々とした歩みで漸く大きな稼ぎのあてが出来たと思えば、僅か2ヶ月で世間に対応された。加えて稼いだ額を自由に動かすには、どうにも千冬という保護者の監視が邪魔となる。そして家では常に一夏と生活スペースを共有し、完全にプライベートな時間は極僅か。真面目で厳格そして規律にうるさい清廉な人柄の家族の存在は、尊敬こそ出来るが、同時に息苦しい。故に秋斗は、自然と内に溜めたストレスを〝悪事（ハッキング）〟で解消する事に傾倒した。

それはある意味で、仕方の無い話だったのかも知れない。

なぜなら秋斗は、家族に対しても決してその心の内を殆ど見せる事は無かったからだ。

自分がそれ程、褒められた類の人間でない事を理解している。

だからこそ世間で言う〝天災〟と友好を結ぶ事が出来たのだ。

そんな風に秋斗は己を客観的に分析する。
織斑家の事は嫌いじゃない。むしろ好ましいとさえ思う。しかし時に〝鬱陶しい〟と思ってしまう感情は別物である。故に秋斗にとって、織斑家の存在は他ならぬ〝家族〟に違いない。
だからこそ秋斗は、あえて自立の道を選んだ。
あえて家族と別の道を行く事で、その力を発揮できる時間を求めた。
その枷の象徴である〝剣〟を捨てる事で――――。

☆

大会当日――。
大方の予想通り、小学生の部の優勝争いに箒と一夏の名前が挙がった。そして高校生の部ではぶっちぎりの成績で千冬が準決勝へと駒を進めていた。
千冬の快進撃は同じ学年の高校生にはとても止められない。寧ろ、大学生や社会人の大会に出て優勝を狙えるほどだろう。
そして観客席では、同じ事を思う千冬のファン達が、盛大に歓声を上げていた。
その一角で秋斗は、懸賞で当てたデジカメを握り締めて、姉兄の大会模様を写真に撮った。同時に平行して、持参したラップトップを広げて、ブログ『オリムラ日記』の更新を行なう徹底振りだ。
「姉貴はこのまま優勝だろうな。それと、そろそろこの辺から一夏のヨイショも始めていくか」
秋斗は大会模様を千冬の活躍だけでは無く、一夏の活躍もしっかりとブログに書いた。
これで原作通りにならずとも、一夏の名前は嫌でも世界に広がる筈。一夏も主人公に相応しい高いスペックを持つ人間なので、千冬と併せて〝美形剣士姉弟〟という売り方でファンを作っていけば、この先に〝ＩＳ業界〟に行かずとも就職はしやすくなる筈だ。
と、秋斗はひそかに邪笑を浮かべた。

コレはいつぞやの黒歴史拡散の意趣返しではない。断じて否だ。
もしかすれば心のどこかにそんな気持ちは少しはあるかもしれないが、将来の憂いを取り除きたいという弟としての献身が勝るのは確か。
秋斗はそんな風に未来を見据えた先行投資という名目で、姉と兄の活躍を写真に収めた。
――――重ねて言うが、断じて将来的に、若かりし日の織斑千冬と織斑一夏と言うブロマイドを作って、それを販売したいわけではないのだ。
閑話休題
「――――に、してもなんで態々攻撃する時に声を出すんだろうな？」
秋斗は一夏達の決勝戦を待つ傍らで、ふとそんな疑問を抱いた。
声を出せば、確かに気合は入る。――――が、態々狙いを口にする事に意味は有るのか、否か？
特に深い理由は無いものの、秋斗の脳裏には不意にそんな疑問が過ぎった。
「それは気、剣、体。ソレが揃った一撃が有効打というルールだからだよ」
「ぁん？」
すると脇から声が掛かった。
秋斗は思わず振り返る。
「恐らくだが、剣道の普及した明治の頃に、倒幕の率役者となった志士達の流派の影響もあるのだろう。それに相手を威嚇せずに戦う獣は居ない。まぁ、攻撃部位を宣言するのは、それが競技だからだと、納得しておきなさい」
束と箒の父――篠ノ之柳韻がそこには居た。
秋斗は思わず、ペコリと反射的に黙礼した。
「――――隣、良いかね？」
「え？　あぁ、どうぞ」
柳韻は一言断りを入れてから、秋斗の座席の隣に腰を下した。
会場では次の準決勝に向けての小休止の時間が取られており、周囲

の観客も飲み物を買いに行ったりと、自由に席を立って動いている。
そんな矢先に、態々横に座ってきた元師匠（篠ノ之柳韻）とのまさかのマンツーマンに、秋斗は妙な居心地の悪さを感じていた。
秋斗は既に道場を辞めている。
故に、なぜ今になって柳韻が会いに来たのか不思議だった。
秋斗と柳韻の間にはしばしの沈黙が続いた。
そして柳韻はポツリと口を開いた。
「束も小さい頃に同じ問いを私に投げたよ。『なぜ声を出すのか？そこに意味が有るのか？』と、言う具合に」
「まぁ確かに、博士は型に嵌る事を嫌いますからね。博士は伝統とかにあんまり興味が無いタイプだと思いますよ。時々思いますけど、物凄い革新的な人ですから」
「うむ。私もそう思う。きっとあの子に関してはその〝解釈〟で正しいのだろう」
「……」
政治思想で言うなら保守。そして生活態度、家柄、好みも古風な篠ノ之家の中で、束だけが唯一、超絶にリベラルな側の人間である。
故に、時々本当に柳韻の娘なのかと疑いたくなる対極具合を感じる束だが、だからこそなのだろう。
柳韻の子供として違和感の無い子どもが〝箒〟であるなら、束は生まれた時から篠ノ之にとっての〝異端〟であり異才――故に〝天災〟と呼ばれるのも頷ける。
そしてそう成ったことも、ある意味では必然な事に思えた。
「――秋斗君から見て、ウチの束はどういう風に見えるかね？」
「どういう風、ですか……」
柳韻の問いに、秋斗はふと考えた。
「まぁ、おもしろい人……ですかね？　喋ると疲れるけど、それ以上に面白い事を常に教えてくれる人？」
「……なるほど」
柳韻は秋斗に真っ直ぐな視線を向けた。
「キミに高校生の娘の事を頼むのもなんだが、これからも束とは仲良

くしてやって欲しい。それと時々でいいから、束とは普段どんな話をするのか教えてくれないか？」

「……え？」

「あぁ、いや。無論、出来ればでかまわない」

意外とは思わなかったが、まるで予想していなかった柳韻の提案に、秋斗は思わず眼を丸くする。

その上で言葉を返した。

「別にそれくらいは構いませんけど、先生が思うほど、大した話はしてないですよ？　博士と俺の話なんて、大抵が取り留めの無い下らないモンっすから」

「かまわない。寧ろ、あの子が普段、どんな話に興味を持ちどんな様子で友達と居るのかを知りたい」

「――――なるほど。つまり先生は、博士ともっと仲良くしたいんですね？」

「――っ!?」

言いづらそうな柳韻の様子を見て、秋斗は直感的に悟った。

柳韻は束と仲良くしたい。

そしてそれを正面から尋ねると、柳韻はその厳格で無愛想な顔に少々の赤みを差した。

――――秋斗の直感は、正解だった。

「はぁ。実に情けない話だが、どうにも昔から私にはあの子の事が理解できなくてね。箒は非常に分かりやすいのだが、束に関してはどうも――――」

「まぁ、それは――――」

高校生の娘と話したい父親。

前世の知り合いの中に、丁度そんな問題を抱えていた人物が居た事を、秋斗は思い出す。

まさに今の柳韻の姿が、その時の友人の重なって見えた。

なので秋斗は、少しだけ思案をした。

が、直ぐにコレが、中々の難題であると思った。

（――――どっちかが折れないと無理だろ？）

秋斗は思わず苦笑した。
織斑として世話になった柳韻と、友人兼師匠でもある束。篠ノ之の家庭事情を詳しく知らない秋斗だが、織斑とは決して無関係では無い縁の深い家なので、その関係に不和があるよりは仲良く出来る方が良いと思う。
故に、秋斗は少し考えた末に口を開いた。
「――――先生は博士がどれだけ凄い人間なのか、具体的に分かります？」
「具体的に、と言うと？」
「時代劇を見た事が無い外国人と、根っからの時代劇ファンの日本人。その２人が話をしようと思ったら、まずお互いをある程度知らない事には、話なんて出来ないでしょ？　要するに、先生は博士の好みとか長所を知らなさ過ぎるんですよ」
「なるほど。確かに私には束の作ったＩＳや、その研究に対する理解が大きく不足している、か……」
「まぁ、そう言うことっすね」
柳韻は素早く、秋斗の言わんとする意図を解釈した。
柳韻は決して鈍い男ではない。そして確かに、現状を改善したいという意欲がある。
不器用でもその意欲に応えたいと思った秋斗は、一つの策を提案した。
「とりあえず先生。まずは〝メールの使い方〟でも覚えてみたらどうっすかね？」
「メール？」
その時、柳韻は非常に高い壁にぶち当たったような、とても険しい苦悶の表情を浮かべた。
なぜなら普段から着流しを着用する人間に、到底使ったことも無いであろう電子機械を、１から勉強して使い方を把握しろと言うのだ。
それは中々酷でな提案であった。
が、それはもちろん秋斗も承知の上だが、しかしそれが一番手っ取り早いとも思った。

故に、秋斗は言った。

「博士は毎回、俺の所に連絡してくる度に、まず研究所での愚痴を言ってくるんですよ。研究に関する愚痴とかじゃなくて。まぁ、所謂〝職場の愚痴〟みたいな感じの奴ですわ。だから普段から先生が『調子はどうだ?』とか、『ちゃんと飯食ってるか?』とかを、メールとかで聞いてみたら、少しはリアクションが返ってくるかもしれません」

「――――無視されるのがオチではないかね?」

「もし無視されてるってなら、教えてくれれば俺が直接怒っときますよ。何ならウチの姉貴も派遣します。だから絶対に〝無視〟はさせないです」

不安な様子の柳韻に、秋斗はきっぱりと言った。

「まぁ、重要なのは、博士と話したいが為に、先生が態々苦手な事を勉強してるっていう〝姿勢〟を見せる事だと思いますよ? 少なくとも、察しの良さと頭の回転は世界最高峰ですから、理解されないって事はないと思います」

「――――なるほど」

と、そこで柳韻は苦笑いを浮かべた。

「束は頭脳だけは早熟だったが、心の機微についての理解が苦手だった。だからよく千冬君には迷惑を掛けたらしい。しかしその点、秋斗君は束と似ているようで、しっかりしているな?」

柳韻の言葉に、秋斗も思わず苦笑を漏らした。

「〝変わってる〟とはよく言われますけど、俺は博士ほど大した人間じゃないですよ」

「いや、そんな事はないさ。現にキミのお陰で少し悩みが解けた気がする。……礼を言わせてもらう」

「いえいえ――」

柳韻は相手を子供だと侮らず、しっかりと誠意のある感謝の姿勢を見せた。

秋斗はそれに苦笑いで返しつつ、視線を会場の中心に移した。

「――――そろそろ準決勝が始まるみたいっすね。ちなみに先生はどっちが勝つと思いますか? 俺は〝一夏〟の方だと思ってますけ

ど？」

話題を変えるように秋斗は問うた。

秋斗の不敵な笑みを受け、柳韻は小さく苦笑を浮かべて準決勝に向う〝箒〟の姿に視線を向ける。

「――――無論、箒だ」

柳韻は短く言った。

一夏と箒は男女混合で競う低学年の部に参加し、これから準決勝の舞台で争う所である。

決戦に挑む一夏は、高校生の部での千冬の快進撃を知っているのか、それに続こうという強い意気込みの姿勢を見せている。

だからこそその姿勢を買おうと秋斗は思ったが、同時に密かに思った。

（……せわしなく手をグーパーさせてやがるから、こりゃあ〝負け〟かもな）

それから程なくして低学年の試合が始まり、一夏と箒の戦いが始まった。

気合の篭った数回の打ち合いの末に、箒は一夏を下して決勝に駒を進めた。

残念ながら、一夏の戦いは秋斗の予想した通りの結末に終った。

☆

「くっそぉ！　あと少しだったのに――――」

剣道大会の低学年の部が終わると、一夏は悔しさに涙を流した。

一夏の結果は三位。その結果は、剣を学び始めた期間からすれば、相当に良い結果だと言える。

が、しかし一夏の胸中は違った。

箒との模擬戦における対戦成績は、６対４で一夏の方が勝っていた。なのに土壇場で負けを引いてしまったからだ。

加えて一夏にとって、密かにこの大会に向けて立てた己の中の〝誓い〟が、果せず終った事。

その誓い――〝姉弟で優勝を取る〟という目標が果せなかった結果に、一夏は泣いた。

「――もう泣くな。一夏」

「っ!?　千冬姉」

一夏(弟)が泣いているという知らせを受け取った千冬は、己の決勝大会直前の短い時間を使って、その様子を見にやって来た。

千冬に対して一夏は、懸命に涙を見せまいと顔を背けた。

が、しかし涙と嗚咽は隠せず、一夏は千冬に肩を優しく叩かれた。

「千冬姉、ごめん……」

「おいおい、なんで私に謝る？　精一杯やったんだろう？」

「それは――優勝できなかったから」

「三位でも立派じゃないか？　負けたのは残念だったが、私はお前を誇りに――」

「違うんだよ！　優勝じゃなきゃダメなんだよ！」

「……一夏？」

一夏は泣きながら言った。

千冬は大会の覇者。そして今年の千冬は、相手に一切のポイントを取らせずに大会を勝ち進んでいた。ならば自分も〝弟として〟そうあろうと、一夏は千冬の背を追う戦い方をしていたのだ。

それは千冬の後を継ぐのは自分だという小学生なりの気負いである。

だが準決勝までは上手くいったが土壇場で箒に負けた。故に、だからこその『ごめん』であると、一夏は言った。

「――馬鹿だな、お前は」

「え？」

「気持ちは嬉しいが、私は私、一夏は一夏だ。私の真似をしたって意味が無い。お前はお前にしかなれないんだぞ？」

千冬は苦笑いを浮かべながら、一夏をあやすように言った。

「それに相対した箒をちゃんと見ていたか？　相手に礼をした時も、私の真似をしようとする事ばかり考えていたんだろう？　だからこんな悔しい負け方をしたんだ」

「でも千冬姉は、俺の誇りだから――――だから、俺は勝たなきゃ――秋斗の分まで――――」
「――――あぁ。私もお前達が誇りだよ。だから、次は負けるな。いい加減涙を拭け」
一夏の言葉に千冬は一瞬眼を見開き、そして誇らしげに笑みを浮かべて、一夏の顔をハンカチで拭った。
そして程なくして、高校生の部の試合が始まるというアナウンスが響いた。
「さて、そろそろ時間だ。秋斗も観客席にいるだろう。一緒に応援してくれるな？」
「当たり前だよ！」
一夏はごしごしと袖で涙を拭った。
「千冬姉、絶対優勝してくれよな！」
「あぁ、任せろ――」
千冬は一夏の背中をポンッと叩き、近くに居た道場の仲間達に預けて決勝の舞台へと上がった。

☆

高校生の部の大会決勝には多くの観客が注目していた。
他ならぬ千冬が戦うからだ。
それを証明するように、観客席の視線は第一試合から一方的に先取を重ねて勝利を積み上げてきた千冬に向うモノが殆ど。
しかしそんな有象無象から向けられる〝期待〟よりも、千冬の胸中には一夏に貰った『誇り』と言う言葉と、弟2人の視線を強く感じていた。
（……こんな私でも誇ってくれるのか）
千冬は一夏の言葉を思い出し、面の下で思わず苦笑を浮かべた。
なぜなら決勝の舞台に上がった千冬自身が、先の一夏に送った言葉よりも、更に酷い理由で剣を握っていると自覚しているからだ。
全てのきっかけは『白騎士事件』。そしてその翌年の七月に受け

取った束から提案にある。
ＩＳ乗りになるか、否か。
そんな風に束から問われた答えを、今日のこの大会で出そうと考えていたからだ。
（……ふっ）
舞台に上がる途中で、不意に千冬は込み上げる自嘲を感じた。
千冬は他ならぬ白騎士事件の実行犯。そしてそんな己が、何食わぬ顔でこれからの〝ＩＳ業界〟に参入する事を、出来レースを享受するに等しい不正と考えている。故に、今日まではその道を堂々行く事に恥を感じていた。――――が、しかしそれでもその道に進む事を、受け入れつつあったからだ。
『白騎士』を演じたが故に、自身が持つＩＳ適正がその理論上の最高に近い事も知っている。
そして適正テストを受ければ落ちる事がありえないという確信がある。
そもそもＩＳ自体が、他ならぬ千冬自身の手によって、その根幹から調整された代物なのだ。
――――全ては家族に安寧を与えるが故に。これまでの貧乏暮らしから抜け出し、もっと美味い物を喰わせ、もっと広い家に住まわせ、欲しい玩具を躊躇無く買ってやれる生活が欲しい故に。
そんな願いの為に、千冬は一夏が密かに誓いを立てたように、この大会で己の進退を見極めようとしていた。
もしもこの大会で一本でも取られたら、ＩＳ業界には行かない。
それはそんな誓いであった。
出来レースを受け入れるなら、己は常に『最強』であらねばならない。それが当然であり、それが責任だと千冬は考えた。
そんな風に考えてしまう不器用な人間だからこそ、千冬は先程、一夏を泣かせてしまったのが他ならぬ己の責任であると責める。
そして一夏にいらぬプレッシャーを与えてしまったが故に、千冬は決断した。
（この程度の大会で相手に掠らせるようであれば、この先に待つ世界

と言う舞台では戦えない。だから勝つ。勝ちに行く――――だから、コレはけじめだ――――）

そして決勝が始まった。

千冬は対面の相手に礼をした。

だが、先ほど一夏に送った言葉とは対照的に、千冬の目には相手は映っていない。

弟に送った言葉とはまるで対照的な自身の胸中に、千冬は面の奥で自嘲する。

これからやろうとする戦いも、この先進もうとする道も、誇りとは程遠い卑怯者の歩く道だと知るからこそ。

故に千冬は、全ての〝業〟を己が背負うと決めた。

そして一夏と秋斗の2人に、この先も常に〝最強の姉で在る〟という夢を見せる決意を固める。

――――そしてこの戦いがその為の第一歩だと、千冬は強く踏み出した。

「――――許しはこわん。恨めよ……」

「っ!?」

壮絶な覇気を纏った千冬は、今大会最速の一本を取った。

続くように2本目――有象無象の全てを蹴散らすが如き鋭い突きが、相手の喉を一撃で穿った。

勝利が確定した瞬間。千冬は観客席で見守る弟達に、チラリと視線を向けた。

一夏は勝利を心の底から喜び、秋斗はその勝ち方に苦笑いを浮かべている。

――――そしてその大会の後、千冬には〝一撃女〟という異名が付いた。

また同時に、織斑家にとって一つの転機となる瞬間は、直ぐそこまで迫っていた。

１４　『吉』と出るか『凶』と出るか

『ＩＳ適性検査』という調査が、民間の女性を対象にして広く行なわれるようになった。

世界の不況に歯止めを掛け、次世代の抑止力となりうるＩＳの可能性に向けられる期待は大きく、故に女性権利団体をはじめとする多くの女性政治家達はメディアを通し、世の女性陣に対して声高にその検査への参加を促していた。

世界が徐々に原作の世相に移り始めている正にその頃。世間では丁度、年が明けた頃にあった。

「――――あけましておめでとうございます。先生、今年もよろしくお願いします」

「あ、あぁ。うむ。いや、こちらこそ――」

織斑３姉弟は新年の挨拶の為に篠ノ之神社へと向った。

参拝の前に柳韻の元を訪れた一同は、篠ノ之一家（※束を除く）に礼をする。人ごみに浚われぬように一夏と秋斗の手は千冬によってしっかりと握られ、２人は千冬が挨拶するのに合わせて同じ様に頭を下げた。

ＩＳの名前が世間に浸透するにつれ、篠ノ之束の名前とその実家である篠ノ之神社の名前も全国区へと広がり、ここ数年の参拝客数は増加の一途を辿っている。

視線を脇に逸らせば、直ぐ近くに公安の警備隊が街頭や境内に数多く立っているのが見えた。

秋斗は千冬と一夏が柳韻の妻や箒と談笑するのを一歩下がった位置で眺めつつ、そんな神社の様子を静かに観察して時間を潰した。

「あぁ、そういえば先生、博士にメール出しました？」

「ん？　あぁ、弟子や妻に教えてもらいながら続けているよ。返事は素っ気無いがね――――」

不意に秋斗は柳韻に尋ねた。

去年の暮から続けている〝お節介〟についてである。

「まぁ、照れてるんでしょうね」

「――ふっ、かもしれないな」
柳韻の苦笑交じりの返事に、秋斗は少しだけ安堵した。
束は当初、柳韻の送ったメールの類に一切眼を通していなかった。なので秋斗は直ぐに『メール無視が続くと、〝一撃〟女の派遣もやむなし』という旨を束に口頭で伝えた。その所為か現在は一応、父娘間に言葉のやり取りがあるらしい。
ぎこちなかった親子関係は少しずつだが前に進み始めている。
そんな気配を感じて、秋斗も小さく笑みを浮かべた。
「――なぁ、千冬姉！　おみくじ引こうぜ！」
「おみくじか。そうだな。折角だから引いてみよう、秋斗もやるか？」
「あぁ、折角だからな」
柳韻への挨拶を終えた一同は、境内の一角にあったおみくじのコーナーに向う。
こういう祭りで出費がどうのと考えるのは無粋であると、千冬は一夏が自分の財布から金を出そうとしたのをやんわりと止めて、代表して三人分のクジを買った。
「……末吉かよ」
引いたおみくじを開いた一夏は『末吉』の文字を見て溜息を吐いた。
「逆に考えろ。新年早々に運を使わなくて良かったと思えばいいんだ」
「だけどさぁ『心辛くも己を律して――』って書いてあるぜ？　嫌でも不安になるだろ。で、そういう秋斗はどうなんだよ？」
「俺は吉だったぜ？　ちなみに『企みは上手くいく――』って書いてある」
秋斗の引いたクジには『吉』の文字が書いてあった。
その結果を見せると、一夏は口を尖らせた。
おみくじの占いによると秋斗の今年は〝物事が上手く運ぶ〟らしく、これから先を思うとその結果は幸先の良いものである。
秋斗は小さく笑みを浮かべた。
「ま、クジの結果なんてただの目安だよ。後は勇気で補えばいいだ。頑張れ一夏」

「お前は結果が良かったからそう言えるんだろ？　ったく。で、千冬姉はどうだった？」
　一夏は千冬の袖を引いて尋ねた。
　千冬は引いたおみくじを開き、やや固い表情を浮かべていた。
「姉貴、どうしたん？」
「……凶だ」
「は？」
「だから……『凶』だよ」
「……マジで言ってんのかよ」
「あぁ」
「……凶なんて初めて見たぜ」
　千冬のおみくじの結果を聞いて秋斗と一夏は思わず眼を丸くした。
「なぁ、千冬姉。凶って具体的になんて書いてあるんだ？」
「どうやら『周囲がいろいろと騒々しくなる――』らしい……。後はいろいろ不穏な事が多く書いてあるな」
「まぁ、元気出せよ、姉貴。……なんだったら〝りんご飴〟でも食うか？」
「いや、いらん」
　千冬の引いたまさかのおみくじ結果に驚きつつ、一同はクジを結んで帰路に着いた。
　冬の寒空の下を3人で歩く途中で、秋斗はふと、先ほど引いた千冬の〝凶〟の由来についての心当たりを見つけた。
（――まさか去年の〝あれ〟か？）
　昨年の剣道大会における千冬の活躍は新聞で大きく取り上げられ、またそれと平行して千冬は〝一撃女〟の異名を得た。そして大会の模様を仔細に書いたブログ『オリムラ日記』のアクセスカウンターは、凄まじい数の閲覧入場者数を刻んだ。
　結果的にオリムラ日記は人気ブログへと変貌し、その勢いは秋斗の仕込んだ広告収入が織斑家の財源確保に足りうる程。
　が、しかし千冬にとっては非常に〝不愉快〟な話でもあった。なぜなら人気の火付け役となった千冬の新たな異名である〝一撃女〟の

謗りを、千冬は非常に嫌っていたからだ。
具体的に千冬がどれほどその名を嫌っているかと言うと、迂闊に口走れば『私をその名で呼ぶな』と胸倉を掴まれ、殺気を叩きつけられる程。
試しに一度秋斗が冗談交じりに『一撃女』と口走った時はその身にアイアンクローを受ける結果となり、ふらりと訪れた束が冗談めかして囃し立てた時はその頭を水洗便所に叩きつけられる結果となった。
――――故に、千冬の前で『一撃女』という単語だけは口にしてはならない。それは普段からお茶らけた態度の束をして、真顔で忠告する禁句と化した。
しかしそんな恐々とする一部を余所に、千冬の『一撃女』という異名は、既にネット社会に拡散――更に近隣住民の間でいくらか広まってしまっていた。そして今後さらに増えるであろう織斑千冬のファンの間で、件の『一撃女』の逸話は、後々まで語り継がれる事になる。
将来、織斑千冬がブリュンヒルデと言う伝説を打ち立てた時、これらの逸話が間違いなく序章を飾る事になるのは言うまでも無いと、秋斗はそんな風に千冬の引いた凶の意味を推測した。

☆

〝破滅〟とは往々にして、欲をかき過ぎる事と相場が決まっている。また『自分だけは大丈夫』というある種の楽観が、数多くの物語での碌な結果を生み出さない原因とされていた。
そして今回、秋斗にとって想定とは聊か違った形であるももの、想定よりかなり早い時期にブログ『オリムラ日記』が一定以上の結果を出した。それは非常に喜ばしい事であったが、欲を言えば秋斗はもっと積極的な形で『一撃女』というキャラクターを利用すれば、もっと稼ぎは伸びると思った。
ブログのファンが増えるのは、将来的な資産が増えるに等しい。
故に秋斗は非常に歯がゆい思いをしていた。
「くっそぉ。一撃女ネタ使いてぇ……」

それを実行した後の事を考えると実に恐ろしい。恐ろしいが、確実に益は手に入る。誰も自ら死にたくは無いが、しかし益は欲しい。

ソレはまるでギロチンの先にある財宝にも似た誘惑であった。

――――結果として、秋斗は口惜しさに眉をしかめつつ、その誘惑を振りほどいた。

増えたアクセス数を上手く利用する算段は既にあった事。そして剣を捨てる事で生まれたある種の〝余暇〟が在った事。その二つを意識する事で、秋斗はあえて目先の利益に飛びつく必要はないと、自分に言い聞かせる事に成功した。

そして秋斗は余暇を使い、今回の悔しさをバネに、これまで遅々として進めていた『白騎士』のフィギュア製作を本格的に急ぐ事にした。

白騎士のフルスクラッチ。

それが今回、秋斗の行なおうとする新たな資金策である。

もっともそれは以前の改造フィギュア製作と違い、直接的な金銭を得る為の計画ではなく、どちらかと言えば〝売名行為〟に近い。即ち、今回の〝一撃女〟騒動でそれなりの数のファンが付いたので、そのファンを捕らえたまま新しいファンを釣って来る為のエサだ。

秋斗は早速作業を進め、その途中で経過を動画に纏めて動画サイトに投稿した。――そしてリンクをブログの方にも張った。

瞬く間に秋斗の上げた動画のアクセス数は伸び、比例してブログのカウンターの数は増える。そして動画投稿サイトのトップページには秋斗の動画の紹介文が乗せられ、ブログのランキングでも上位を取るほどになった。

そこまでは秋斗が予想した通りの結果であった。

白騎士への興味は世界中に強く根付いているが、実際物好きが白騎士の資料を探そうにも、偶然撮影出来た解像度の低いスクリーンショットしか存在しない。故に〝白騎士〟という存在には例えどんな形であれ、多くの人間が眼を引かれる事になると秋斗は思っていた。

加えて秋斗には製作者本人（篠ノ之束）から惜しみなく提供された資料がある。

それのお陰で秋斗は世界で唯一、非常に完成度の高い白騎士のフィ

ギュアを作るチャンスに恵まれていたのだ。
　そのアドバンテージを確実に物にする為の努力を秋斗は惜しまなかった。故に前世と今生の改造フィギュア製作で培った技術を惜しみなく投じた。
　そしてそれが今回、意外な形で功を奏した。
　しばらくしてから秋斗の下に、玩具会社からのメールが届いたのだ。
『――――結構、話が大きくなったねぇ』
「博士が許可をくれたら会社を介してキットを売る方向でいきたいんだけどダメかな？」
『別にいいよ。そろそろ他の国でもＩＳが作られるだろうし、ＩＳが広まっていくのは私としても嬉しいしね』
「……マジでか？　いや、許可をくれるのは全然嬉しいんだけどさ。博士ってこういうのをもっと嫌がると思ってたぜ……」
『失礼な事を言うね、キミは？　私だって凡人を評価する事はあるよ。それに私も玩具出すんだもん♪』
「……は？」
　１月も半ばに差しかかったある日。
　去年から引き続き弟子として束からの個人授業を受けていた秋斗は、その合間に白騎士のガレージキット販売の許可を束に求めた。
　玩具会社から届いたメールを簡潔に纏めると、秋斗を原型師として、件の白騎士のフルスクラッチの量産販売を任せてはもらえないかという内容である。
　秋斗は是非その話を受け取りたかったが、その為には前提として束が販売許可を出す必要がある。
　故に秋斗は、玩具会社との交渉が滞り無く進むよう、事前に束にフォローを入れておこうと動いた。
　が、しかし束から返された前向きな返事に思わず眼を丸くした。
『あっくんが動画を投稿して直ぐ後ぐらいだったかなぁ。玩具会社から連絡が来てね。それで是非白騎士の玩具を作りたいって言うから、良いよって返事をしてあげたのさ♪　あ、ちなみにあっくんの作るの

はガレキだけど、私の作るのはプラモだから、購買層が被るって事は無いと思うよ？』

「……マジかよ。博士も〝作る〟のかよ」

束の方でも『白騎士』をモデルにした玩具を売り始めるという話が進んでいるらしい。

秋斗はそんなサプライズを受け、なんとも言えない困惑とした溜息を思わず吐いた。

「博士も作るんなら、俺の作ったキットの方はあんまり売れないかもな」

『いやいや外装データから３Ｄプリンターで出力しただけの玩具なんて束さんは興味ないからね？　仮にも〝ものづくり〟をやってるなら、一から原型を作ってみせろっていう条件を出したよ。だから、モノさえ良ければあっくんにも十分勝機はあるさ♪　あ、ちなみに監修は厳しく行くから覚悟しておくんだね』

「……玩具会社の原型師と出来で勝負するってか。中々の難題だな？」

そしてその後。秋斗は玩具会社からの依頼を正式なものとして受け取った。

そして契約書類のいくつかが、後日秋斗の下に郵送された。

玩具会社を介して秋斗が売る事になる白騎士のガレージキットは、最終的に篠ノ之束監修という名前が付く。

また原型製作の代金とそのロイヤリティーは常に秋斗の側に支払われるらしい。

そして一番重要な現時点での秋斗と束の関係だが、実は玩具会社側でそれを知る者は居なかった。その証拠に別途、メールで以前秋斗が束から貰った資料の一部と同じモノが、後から玩具会社側から提供されたからだ。

秋斗は来年の１２月の販売を目処に、玩具会社との事業契約を結ぶ事を決める。

――――しかしそれに差し当たり、問題が一つだけ浮かび上がった。

外注として働く秋斗が未成年である事。そしてその事業契約書に保護者の判子が必要だったのだ。

「――――姉貴（千冬）も、あれで一応未成年だからなぁ。保護者の判子となると、柳韻先生に判子押してもらうしかないか。……そうなると、博士と繋がってるって事がバレるな」

両親のいない未成年と言う煩わしさに、秋斗は幾度となく大きなため息を吐く。

秋斗は正直、博士との友好がある事を隠すつもりはないが、逆に大きく世間にアピールするつもりも無かった。絶対に煩わしい事になるからだ。

しかし保護者としての判子がなければ、企業との事業契約が結べないという新たに発生した問題に、秋斗は思わず頭を悩ませた。

『――――そう言えば話は変るけどさ。ちーちゃんってちゃんとＩＳの適性検査受けた？』

「んぁ、検査？　なんの？」

『ＩＳの検査だよ。搭乗者のデータが欲しいから民間からも最近有志を募ってるの知らないかい？　束さんの見立てではちーちゃんはかなり素質があるからね。何ヶ月か前に薦めてあげたんだけど、今どうしてるかなぁと思って』

秋斗はとある〝ネット銀行〟にハッキングを仕掛けていた。

電子世界で幾つかの複雑な作業を続けながら、秋斗は作業の片手間にあっけらかんとした様子で束に返した。

「自分で聞けばいいじゃん。んでもって、俺は特には聞いてないかな？　あんまり自分の事をペラペラ喋る人じゃないし」

『え～、あっくんは気にならないの？　ちーちゃんなら間違いなく最高のＩＳ乗りになれるんだよ？』

「俺はそれより、どうやって保護者の判子を誤魔化すかで頭が一杯だよ。それに姉貴の人生なんだから、そんなもん姉貴が好きなように選べばいいさ。どうするにせよ、俺がやる事は変わらんよ」

『……あっくんのやることって？』

「とりあえず一家揃ってこのクソみたいな貧乏生活を脱出する。今は

それ以上に求めるモンはないよ」
『……そっか』
束は少しだけ悲痛そうな声を漏らした。
そんな束の様子に今度は秋斗の方が話題を変えた。
「あぁ、それはそうと博士はちゃんと柳韻先生に返事を返してるか？
なんか弟子とか奥さんに頼んで、必死に携帯の使い方を覚えたみたいだけど？」
『あぁ、それはちゃんとやってるよ。すっごい面倒だけどね。どうせ説明したって9割9分わかんない事だろうけどさ。わざわざ説明して返事してあげてる。まぁ時々だけど箒ちゃんの事や箒ちゃんからの連絡も混じってるからね。面倒だけど無視はしてないよ♪』
「そいつは重畳――よし、出来た！」
『お、完成かい？』
「あぁ。とりあえずこれでようやく自由に金を動かせる筈だ。チェックしてくれ」
『おーけーおーけー♪　お、結構いい出来だね！　これなら普通に使っても問題ないよ。花丸を上げよう♪』
「よっしゃ！」
秋斗は作業を終えて背筋を伸ばし、勝鬨を上げた。
束の最終チェックもクリアし、遂にようやく願いが〝実った〟と実感できた秋斗は、盛大に息を吐いた。
秋斗はこの瞬間、遂にネットバンクに架空の口座を作る事に成功した。口座の名義は『オリムラモモハル』。それは秋斗の作った〝存在しない人間〟が有し、秋斗が自由に使える口座だ。
秋斗は早速『モモハル』の口座に保有する資金の殆どを移し、元の『アキト』の口座から不自然な金額移動履歴を削除した。
「……これで表と裏の口座が揃った。やっと『自由』だ」
小学生として動かすのに不自然な額の金は『モモハル』の口座から、それ以外は表の秋斗の口座からという使い分けが出来る。それは千冬の目や世間の眼を欺き、自由に資金を動かして活動できるに等しい。秋斗はそれを得た喜びと、その荒唐無稽さを自分の力で成し遂げ

た感動に笑みを浮かべた。
『おめでとう、あっくん、物凄い悪い顔だね？　とりあえず今日から君もこちら側の人間だ。歓迎しよう、盛大にな♪』
「こちら側って何さ？　まぁ、兎も角、ここまで漕ぎ付けられたのは間違い無く博士のお陰なのは確かだけど。その点は本当に感謝してるよ。ありがとう！」
『いやいや教えがいのある生徒で束さんこそ嬉しいよ』
秋斗の心の底からの礼に対して、束も普段の空笑いの中に若干の照れを混ぜながら謙遜の言葉を零した。
『――――で、ちなみに聞くけどこんな口座作ってどうするのさ？』
「そりゃもちろん、〝派手〟に金を動かす為に決まってんだろ？」
『……派手に？』
「そう、派手に」
モニターの奥で不思議がる束に対し、秋斗はとても小学生とは思えない笑みを浮かべた。その笑みはライブチャット越しに見た束が少しだけ戦慄を感じる程であった。
千冬譲りの鋭い眼が光る整った面立ちは連日の不摂生によって荒れ、正統派に成長しつつある兄の一夏に比べると実に対極的な〝悪辣〟という言葉の似合う。
そんな笑みを浮かべた秋斗は、「まずは〝下準備〟だな」と、小さく呟いた。
ハッキングと言う技術で〝世間を欺く〟事に成功した結果、秋斗は今まで封じられていた手段を解禁する事に、もはや躊躇いの吐息等微塵も無かった。今まで打ち立てた資金策はどれも『本気』ではあったが、決して『全力』ではない。しかし、遂に、秋斗は〝全力〟を発揮する事が出来る。なぜなら幾度も足を引っ張ってくれた〝未成年〟と言う名の枷が、ようやくその効力を失ってくれたからだ。
――――それから3ヶ月の時が流れた。

☆

ＩＳの登場お陰で景気が回復し少なくとも１０年は安泰に見えるという意見が芽吹く昨今。世界中の投資家達はＩＳの分野で最先端を進む日本に期待し、同時に技術を引っさげて各国に散っていく研修者の動きを見ていた。

株を買うならば今しかない――――。

そんな風に思うのが、現段階での多くの投資家達の意見であった。

無論、秋斗もその内の１人である。

そして今生の世界において唯一秋斗だけがこの先に確実に上がるであろう企業の名を知っていた。

一つはフランスのデュノア社。

原作では傑作機と言われる第二世代機ラファールを開発しており、原作に登場した頃には既に落ち目な印象があるものの、ラファールが発表したタイミングで確実に一度はその価値が跳ね上がると予想できる会社だ。加えて原作に在る数少ない名前付きのＩＳを作った企業なので、原作の流れに沿いつつある現在の世界情勢から見ると、７割ぐらいの感覚で当たると予想できる手堅い投資先である。

そして日本の倉持技研を支援する日本の手堅い重工系企業。

こちらは主だった会社の名前こそ分からないものの、国産株なのでその動向は海外株よりも把握しやすい上に、技研は原作で〝暮桜〟、〝打鉄〟、〝白式〟の実績がある為に、デュノアの様に一点賭けと言う豪快な博打を仕掛ける必要が無い。故にこちらも十分これらも勝負に出る価値の在る賭けであった。

現実に置いてこの様な投資方法等実現できない。仮に実現できたとして、秋斗がやろうと目論む投資は所謂『インサイダー取引』に値する犯罪だ。

しかし秋斗に躊躇は無かった。そしてそれら取引を成功させる為に、秋斗は〝封じられていた手段〟を解いた――――。

株式のトレードと言っても、秋斗は絶対に〝資金の借り入れ〟をする気はなかった。秋斗の持論として基本的に博打というのは〝あぶく銭〟の中で遊ぶくらいが丁度良いからだ。しかしこれから行なう賭けはその持論を大きく崩していた。

秋斗がかき集めた投資の資金は、改造フィギュアの利益とブログの広告収入。そして懸賞はがきの商品転売で作った貯金の幾らかをあわせた、およそ２００万円。

しかし流石にソレを全て使うことは出来ないし、それだけでは心もとない。

故に秋斗は、今まで『年齢制限』と言う壁の所為で参入できなかった〝エロ同人産業〟で資金をかき集める事を選んだ。

秋斗はまず、家に一夏と千冬の居ないタイミングを見計らった。

次に同人系のダウンロード販売サイトの管理会社にハッキングを仕掛け、サイト内で使用するアカウントを取得した。

その後、テキストファイルに一万字ほどの台本シナリオを書き、その台本を個人で活動している声優達を雇って読ませ、音声ファイルを作成。同時にイラスト投稿サイトの絵師達に絵の依頼を出して表紙絵を発注した。

最後は受け取ったそれらを一纏めにしたＺＩＰファイルを商品として、ダウンロードサイトでの販売を開始した。

――――それは所謂、エロ音声作品である。

完成した商品の原価はおよそ１７万程で、秋斗はそのファイルの一つを５００円で売った。

そして運の良い事に秋斗は、１ケ月でその原価の回収に成功した。その翌月も売り上げが伸び、遂にはサイトのランキングに秋斗のサークルとその商品が乗る。そして結果的に更なる利益を伸ばした秋斗は、続くように第二、第三弾のエロ音声商品の開発を急いだ。

一度人気が出れば後は、ソレを維持し続けるだけである。特にエロという産業で特異でニッチな需要を求める様な人間は、己の求めるような代物があれば金を惜しまず落としてくれる。故に秋斗は、意図的に商品を特化させる事で得たファンを裏切る事無く、それをより良く仕上げる事に傾倒した。そして今生のエロ産業も、秋斗の前世で培った経験の例に漏れず、予想通りの結果を示してくれた。

最終的に秋斗は〝大きなお友達〟の為に商品を５つほど作り、その段階で現場作業から完全に身を引いた。そして台本のシナリオ製作

すらもライターに委託し、完全にサークルの『運営管理』の立場に移行した。
秋斗が最終的に行なう作業は『金を右から左に移すだけ――』というに等しく、そんな手間だけで金を産み出すシステムの開発に秋斗が成功した頃に世間は、既に４月に差し掛かっていた。
その頃の秋斗の月収は４０万を超えていた。
そして遂に、秋斗はそんなエロで生み出した資金力を元手に、株式トレードを開始した。
『――――あっくん、最低だね。どん引きだよ』
本気を出した秋斗の動向を最も近くで見ていた束は、最終的に声に不満を滲ませながら秋斗の行動をそう評した。
「俺じゃなくて、オリムラモモハルのやった事だから俺に言われてもな。……ていうか博士。俺がどうやって投資の資金を作ったのか知ってんの？」
『……し、知らない知らないっ！』
「ふ～ん。まぁいいけど。あぁ、ちなみに誤解があるかもだから一応言っておくけど、俺は殆ど金を動かしただけで、元凶はシナリオライターとか絵師だ。どん引きするような〝えぐい性癖〟を持ってるのは俺じゃなくて雇った連中だから、その辺は誤解しないでくれ」
『……っ!?』
モニターの奥で顔を赤らめる束が見える気がしたが、秋斗はそれを気にせず、エロで稼いだ元手で株を買い漁り始めた。
このトレードの結果が出るのは、もう少し先になる。国産株は兎も角、デュノア社の株だけはラファールを開発する瞬間まで塩漬けにして寝かしておく必要があるからだ。
『……ふんっ！　全部融かせばいいんだ』
「いい加減、機嫌直してくれない？　別に俺も好きでやったわけじゃないんだけど？」
『嘘だね。物凄い悪い顔してたもん！』
「っていうか勝手に調べて、踏まなくてもいい地雷を踏んで自爆したのは博士の自業自得じゃん？」

『……いつか、ちーちゃんに言ってやる』
「その時は姉貴の携帯に『一撃女のちーちゃん大好き♪』ってメール爆弾を送るけど、本当に言うの？」
『くっ、流石に束さんの弟子なだけあって、憎たらしいほど効果的な反撃を思いつく。……なんて可愛げのない！』
「別に博士がなんもしなきゃ、俺もわざわざそんな事しませんっての。……そろそろ機嫌を直してはくれませんかねぇ？」
『……ふんっ』
それから束の機嫌が直るまでに聊かの時間が掛かった。それだけが今回における秋斗の誤算だった。
「――――さて」
今回の件で秋斗に実現可能な資金策は殆どが終了したと言える。そして少なくとも『織斑家の厄年』である3年を、何とか無事に乗り切る程度の預金の確保には成功した。
これにより秋斗の前には〝最後の難関〟である最も厄介な戦いが立ちはだかる事になる。
即ち、大手を振ってこれまでの秋斗の稼ぎを堂々と使って貰う為の説得である。
「……流石に話せない事も多いけど、やるしかねェよな」
白騎士のキットを玩具会社と売る為の許可も含めて、説得には幾つかの〝真実〟を話す必要も出てくるだろう。
相手は千冬と柳韻の2人。
柳韻の方は束と言う前例のお陰で落ち着いて対応してくれる可能性があるので、問題は千冬である。
「姉貴がもう少し不真面目で、過保護じゃないなら楽なんだけどな」
吉と出るか凶と出るか――――。
企みが上手く進むというおみくじの占いを信じて、秋斗は仕上げに取り掛かった。

15　『いつか』に続く最善だと信じたい　前篇

「――――織斑の気持ちも分からなくはないんだ。ただ先生は、決断を焦りすぎていると思う」
「分かっています。ですが、もう決めたことですので」
「ふむ……」
時間は少し遡る――――。それは冬休みが明けた半ばにして、春休みを前にした最後の進路相談の頃である。
織斑千冬は個人面談として、高校の担任教師とマンツーマンで問答を繰り広げていた。
千冬の学年は今年の春から高校3年となる。故にその先の進学、就職等の進路について、放課後に担任と1人1人個別に面談する機会が組まれていた。
先の剣道大会で既に己の進路を見据えた千冬は、必要な書類を集めて、それに望んだ。
担任は机の前に置かれた千冬の『IS適正診断の報告書』と、日本IS委員会が発布した『IS操縦者候補生試験の嘆願書』に視線を落とす。
「ISについては先生も詳しく知っているわけじゃないからなんとも言えないが、その候補生を目指すのは高校を卒業してからではダメなのかな？　織斑の成績なら奨学金が出る優秀な大学だって推薦してあげられるし、そちらに進学してからの方が、試験を受けるにせよ就職と言う形に落ち着くにせよ、先生は良いと思うんだが？」
担任は難しい表情で千冬の意見にそう言葉を返す。
しかし千冬はその言葉を重々承知した上で、首を横に振った。
「申し訳ありませんが、大学に進学する気はありません。それに今回の応募試験を逃せば次がいつになるか分かりません。それに試験はコレが第一回目ですから、下手な基準がない分、十分に受かる可能性があると思います」
「しかしだね――――」
「それと適正調査を受けた段階で既に、政府の方から是非試験へとの

推薦も受けています。先生から許可を頂ければ直ぐにそれに向えるよう、準備も進めています」

千冬は適正診断書に書かれた、理論上の最大値に等しい『Ａ＋』の己の適正を示す。

「試験に受かって候補生となれば、国からの給金も出ます。安易に進学したり就職する以上に、私には都合が良いんです」

「……利点だけを見れば確かにそうだが、それ以外の事もちゃんと考えているか？　仮に試験に受かれば良いが、落ちた時は？　要項には最終審査が出るのは半年先。夏には約一ヶ月間の研修――落ちれば当然、夏休みが無駄になるし、受かったとしても卒業するまで学校を続けられるか？　それに試験の資格者は１６歳～２５歳。単純な数字で考えても、相当狭き門になると思うが？」

「無論、それは承知の上です」

「いいや、わかっていない。いいか、織斑。お前のやろうとしてるのは一種の〝博打〟だぞ？　確かにＩＳって言葉は最近よく騒がれるようになったが、まだその分野は誰にも未来が見通せないベンチャー事業みたいなモンだ。お前はそれに挑戦しようとしてるんだぞ？」

「……」

織斑千冬は自他共に認める優秀な生徒である。同高校に特待生免除で通学できる数少ない学生の内の１人であり、生活態度は真面目そのもの。家庭の事情によって部活動に励む事は無いものの、もし高校剣道の公式試合に出る事が出来れば学校の顔役として、全国有数の有名選手として名を馳せていただろう。

故にそんな千冬の将来について、千冬を預かる高校の担任は、なるべくならば最善の未来を約束してやりたいと思っていた。

そうして始まった個人面談の席で、千冬は一種のベンチャーとも言える昨今に名を聞くようになったＩＳの分野に進みたいと言った。

「家族の事を思うんだったら、もっと堅実に物事を見据えた方がいいと思う。少なくとも、先生はそう思う」

決断を焦る理由は担任も重々承知の上だが、それでも厳しくそんな言葉を千冬に送る。

ＩＳについて現段階で明るい人物など今の民間に存在するとは思えないし、幾らその分野がこれから先を担う産業になるという様な意見があれ、それは政府のプロパガンダのようなもの。

一生を左右する大事な若い時期に、そこへ人生を預けるような真似をするのは危険だと担任は思っていた。

――――しかし千冬はソレを聞いても尚、頑なに言葉を続けた。

「すみません。ですがお願いします。試験を受けさせて下さい！」

真剣な様子で真っ直ぐに担任の眼を見据えた千冬は頑として引かず、正面から頭を下げつづけた。

「――――やれやれ、随分と長かったみたいだな？　廊下まで話が聞えてきたよ」

「あぁ、時間を掛けてすまなかった」

結果的に千冬の進路相談は予定されていた時間を３０分程オーバーした。加えて今日だけでは決着が付かず、話し合いは次の機会に持ち越された。

教室を出ると次の面談者である篝火ヒカルノが退屈そうな様子で立っており、千冬はそれを見て一言ヒカルノに詫びる。が、ヒカルノはそれに対して首を横に振った。

「いやいや、織斑のお陰で話を通しやすくなったからな。もし私が先に面談をやっていたら、立場は逆になっていたかもしれないし」

「……そうなのか？」

「あぁ。私もＩＳっていうベンチャーに、飛び込んでみようと思っているからな。この場合先にソレを言ったほうが、担任から強い引止めに合う。織斑が担任の体力を減らしてくれたお陰で、私の方はスムーズに話が進みそうだ。その点は感謝しておくよ」

ヒカルノはそう言ってひらひらと手を振り、千冬の脇を通り過ぎるように面談に向った。

篝火ヒカルノは千冬と同じく特待生で、意外な事にその縁は束に匹敵するほどに長い。しかし今の様に話をする機会はそう多くなかった。

趣味を驀進する天災の束。過酷な経済状況に四苦八苦する千冬。

そんな所謂一般的ではない2人に比べると、ヒカルノは確かに変人に類するが〝まとも〟な部類に入るからだ。故に馴れ合う機会が無かった為である。

「――――そういえば、まさかアイツも試験を受けるのか？」

ふと、千冬は帰路の途中で、先のヒカルノの台詞を思い出した。

ヒカルノの事はあまりよく知らないが、少なくとも先の言葉は同じ分野を目指そうとする者に対しての言葉だと思った。

それに気づいた時、千冬の心に小さな感動が湧くのを感じた。

意外な事に千冬は、同じ分野を目指す〝仲間〟が身近にいた事を知って心強さを感じていた。

そしてそれから一週間ほど期間が置かれ、千冬の二回目の面談が開かれた。

その際に開かれた話し合いは担任と生徒の個人面談ではなく、学年主任や校長を含めた教師数名と、千冬やヒカルノを初めとする操縦候補生を希望する2、3年生の女子生徒が一堂に会する形になった。

その席で学校側の教師一同は、職員会議で急遽作り上げた試験を受けるにあたっての大まかな条件を幾つか生徒達に発表した。

・前代未聞の試験で有る以上、滑り止めをはじめとする予備の進路を確実に用意する事。

・書類選考後の本試験については学校での成績を鑑みて、受講可能か学校側が判断する事。

・試験にさしあたり試験に関する休学は一応の単位とする為、独断での退学はなるべく避ける事。

それら3つを最低条件に、それ以外の細かい幾つかのルールを遵守させる事で、初めて候補生試験を受けさせると教師達は言った。

「どうした？」

「いや、まさか此処まで私の意見を汲んでくれるとは予想外でね」

千冬は受験希望者として名簿に名を書く途中で、含み笑いを浮かべていたヒカルノに気づき、理由を尋ねた。

「前例が無いからしり込みするのが教師側の意見だ。なら幾つかの規約を作ってそれを遵守する形にすれば安心するだろうと思って、雛形

を作ってこの間の面談で担任に伝えたんだが……まさか殆どそのまま使ってくるとは思わなかったよ」
「……お前が作った？」
「作ったと言われると語弊があるけどね。大まかな事は私が提案したよ。意外だったかい？」
ヒカルノは悪戯っぽく笑う。
そこで千冬は思い出した。そう言えば篝火ヒカルノは束に次ぐ才女だったと――――。
「まぁ、キミの親友（篠ノ之束）なら、こんな回りくどい真似なんてしないだろうがね」
「いや、あの馬鹿（束）のやり方は良くも悪くも直球過ぎる。寧ろ、今回の篝火の様な〝社交的なやり方〟を少しは見習わせたいくらいだ」
「おや、嬉しい事言ってくれるじゃないの？　褒めても何も出せないよ？」
「別に何もいらんさ」
織斑千冬と篝火ヒカルノ。
彼女らは後にブリュンヒルデとなり、そしてその剣となる傑作ＩＳ暮桜を生み出した世界有数の技術者となる。
後の歴史にＩＳ時代と記される時代の先駆けとして、２人の名前はＩＳ学園計画のその第一期生として記される。
その第一歩が踏み出されたのは、原作を７年遡った冬の終わり――春の初めの頃であった。

☆

四月になり、双子の織斑兄弟はそれぞれ小学校三年生へと進級した。
低学年と言われた時期も終わり、少なからず大人びた意識が芽生え始める頃。
世間では織斑の兄の方と呼ばれる一夏は、早起きすれば学校に行く前の短時間でも鍛錬は出来る事に気づき、それ以来毎朝学校に行く直

前の早い時間にも自己鍛錬を行う様になった。
きっかけとなったのは、去年の剣道大会での敗北である。
あの時余計な事を考えずに真剣な気持ちで闘っていれば負けなかった――。
一夏はそんな風にして当時の悔しさを未だ思い出す。妙に気負って千冬を真似るような行動の末に失敗した経験は、苦い思い出として少年一夏の胸に深く刻まれていた。
故にその悔しさを噛み締めるような気持ちで、今日も一夏は、朝焼けの中を独り黙々と走っていた。
懸賞で当てたＭＰ３プレーヤーを身につけ、イヤホンから流れる軽快な音楽と共に町内を一周。一夏が鍛錬の中で流すその曲は、曲名こそ知らなくとも一発で使われた映画の名を思い出せる程に有名な一曲だ。
『ロッキー』
それがその映画のタイトルである。
一夏が件の映画を見た切っ掛けは、試合で敗北し憔悴しきった一夏に秋斗が思いつきで見せたからだ。
「……勝利を諦めるな！　次は絶対勝つ！」
一夏は己が主人公であるような勇ましい気持ちを抱いて朝焼けの中を走り、家の前に着いたところでようやくその足を止めた。
「――――ただいま」
「お帰り」
汗を拭きながら一夏が玄関の戸を開けると、目の下に薄っすらと隈を作った弟の秋斗が一夏を出迎えた。
どう見ても寝ていないだろう秋斗の様子を見て、一夏は思わず眉を顰めた。
「ちゃんと寝ろって千冬姉にも怒られただろ？　いい加減にしろよ、お前」
一夏は思わず苦言を呈した。
秋斗は毎晩のようにヘッドセットを嵌め、ノートＰＣに向ってなにかの作業を行なっている。詳しい内容を聞いても一夏には理解でき

なかったモノ事ばかりだが、明らかに秋斗の生活は不健康で不健全だと一夏は思った。故に一夏は兄として、何かに付けて小姑のように、秋斗の生活態度に小言を漏らすようになった。

「怒られたぐらいで人は死なねぇよ。それと文句なら博士に言ってくれ」

秋斗は一夏の小言を右から左へと聞き流すように、手を振りながら返した。そして欠伸をかみ殺しながら、愛用のノートＰＣを立ち上げて再びなにかの作業を続けた。

一夏から見て最近の秋斗の様子と態度は、千冬の友人である天災科学者――篠ノ之束を髣髴とさせた。なので一夏は、『奴に口で言っても聞きやしない』という束に対していつも姉が零す愚痴の意味を、段々と理解し始めていた。

秋斗という弟を一夏は、正直な話〝凄い〟奴だと認識している。具体的にどう凄いのかを説明出来ないにせよ、ソレは間違いない。要するに一夏にとって秋斗とは自慢の弟なのだ。

成績（理数系）は学校でもトップクラス且つ非常に物知りで、一夏には到底出せないような斜め上を行く発想を思いつく。加えてそんな奇抜な発想を容易く実行してのける妙な行動力がある。

秋斗の思いつきの中で最も印象深いモノを上げろと言われたら、一夏は真っ先に〝懸賞はがき〟の事を思い出すだろう。

なぜならあの一件で一夏は、秋斗に対する今の尊敬の気持ちを確立させたからだ。

故に一夏は、心の奥底で『いつか秋斗にも勝ちたい』と思っていた。もっとも『勝つ』と言っても既に武では一夏の方に軍配が上がる為、意味合いとしては秋斗以上の『頼りになる男』になると言ったところだ。

――そんな秋斗という弟は、一夏にとって非常に頼りになると同時に、非常に『厄介な存在』にもなりつつあった。

「おい、秋斗！　湯煎だかなんだか知らないけど、パーツ鍋で茹でるの止めろって言ってるだろ！　後、風呂場で塗料吹いただろ!?　シンナー臭いぞ！」

一夏は浴室に向う途中の台所で、キッチンタオルの上に乾された無

数のフィギュアのパーツを発見した。それだけならまだよかったが、その直後。シャワーを浴びようと浴室の戸を潜った瞬間、一夏は鼻を突いた不快な有機溶剤の匂いに思わず声を荒げた。

風呂とキッチンは一夏の聖域である。それを間違いなく犯し汚した原因の秋斗に、一夏は全裸のまま歩みよって怒鳴った。

「ぁん？　シンナーに臭いなんてあるわけないだろ？　後付された臭いはあるけど――――」

シンナー等の危険性について学校でも習った為、一夏は雑多な管理で容易にソレを使う秋斗に対し怒りを顕にする。しかもソレを風呂場で使った事に強い怒りを覚えた。

が、それに対する秋斗の返事は屁理屈交じりの上に、まるで反省の色がなかった。

「そう言う事を言ってんじゃねーよ！　学校で習っただろ！　シンナーは歯とか骨を溶かすって！」

「希釈された市販のシンナー程度で骨が溶けるわけねぇだろ？　あんなモン、大げさなふかしだ。んでもって臭いが気になるなら換気扇でも回しとけよ。っていうか、回してあるだろ？」

「それでも臭うんだよ！　っていうか、模型弄るならベランダでやれって言ってるだろ!?」

「風の強い中でどうやってトップコート吹けと？　それに経験上、夕方頃になればもう臭わねぇよ。っていうか第一、わざわざ朝に風呂入らなきゃ良いじゃん？　それに前から思ってたけど、お前一日に何回風呂入るんだよ？」

「なっ!?」

「一日に3回とかちょっとありえねぇだろ？　ガス代って地味にデカイんだぜ？」

「ぐっ――――」

無駄に知識があって知恵が回る分、口では一切、一夏は秋斗に勝てる気がしなかった。

確かに一夏が朝夜二回に加えて毎朝の鍛錬後にもう一度風呂に入るようになってから、織斑家のガス代が少し高くなった。

ソレを思うと実に反論し辛い意見である。しかも秋斗は判った上でソレを指摘している。

「そ、ソレをいうなら秋斗だって毎日毎日たくさん電気使ってるじゃないか！　アレとかアレとかアレとかだって無料じゃないんだぞ！」

一夏は苦し紛れに秋斗の持つリューター、コンプレッサー、塗装ブース、ノートＰＣ等を指差した。

織斑家でマルチタップが全部埋まる程の電化製品を所有するのは秋斗である。その電気代を考えれば、入浴が一度増えるぐらいどうという事はないと一夏は言った。

そこで初めて秋斗は、痛いところを突かれたという様子で舌打ちした。

「――ただいま。……おい、何をやってるんだ、二人とも？」

そこへ朝のバイトから帰ってきた千冬がやって来た。

「あぁ、千冬姉お帰り！　ちょっと聞いてくれよ秋斗が――」

「……このタイミングで関羽が出るか」

「おい、コラ。誰が蜀の英雄だ？」

一夏は味方を見つけたように顔をほころばせる。対する秋斗は鬱陶しそうに顔をしかめた。

千冬は剣呑な雰囲気の弟達を見て溜息混じりに言った。

「とりあえず一夏、風呂に入るんでないならパンツぐらい履け。話は秋斗から聞いておく。――おい、秋斗。誤魔化すなよ？」

一夏はそこで全裸だった事に気づいた。一夏は慌てて股間を隠し、そそくさと浴室に戻った。

その背後で『誤魔化しは無し』と釘を刺された秋斗が溜息混じりの様子で、「風呂でトップコートを吹いた」と千冬に打ち明けた。

朝食の前に一度、千冬の雷が秋斗の脳天に落ちたのは言うまでも無い。

☆

「ねぇ、あっくんは何で剣道辞めたの？」

「あ～、ガラじゃないからかな？」
　秋斗は少し考え、隣に座る束にそんな言葉を返した。
「ガラじゃない？　どういう事？」
「……なんていうか、技は身に付けたいけどルールに縛られたくないっていうの？　一文銭をぶった切った座頭市の居合いは覚えたいけど、姉貴とか一夏とか箒みたいに〝クソ真面目〟に武道に精進はしたくないみたいな？　……あと、剣よりも銃とかナイフの方が好きだからかな」
「へぇ、そうなんだ。初めて知ったよ。でもそれってちーちゃんに言わない方が良いかもね。たぶん呆れられるよ？」
「ンな事は百も承知よ。だから博士にしか言わんよ」
　目を丸くする束に秋斗は苦笑いを浮かべながら言った。
　剣を辞めた理由について千冬や一夏に散々聞かれたが、そのどれもが作った理由である。そして本当のところを言ったのは、今回の束に対してが初めてであった。
　そんな秋斗の言葉に束は少し声を弾ませる。
「……そうなんだ。じゃあ、銃とかナイフの何処が気に入ったのさ？」
「昔『荒野の七人』って映画を見てな。それに出て来るジェームズ・コバーンがスゲェ格好良かったから。後は『エイリアン２』に出てきたパルスライフルのＳＥが気に入った感じ」
「映画好きなの？」
「まぁ、それなりに。〝サメ〟から〝トマト〟から〝ゴアい〟のから〝ホラー〟までなんでも」
「……〝なんでも〟じゃないじゃん。あっくん、それ物凄い偏ってると思うよ？」
「頭使わなくていいのが好きなんだよ。爆発とか銃撃とか血飛沫とか。なるべく説教臭くてかったるい意識高い系のシーンが少ない奴が良い。っていうかウチの家族は全員そうだと思うぜ？」
　秋斗は顎で、目の前にいる千冬と一夏を指す。秋斗ほど変な偏りはないものの、一緒に暮らした結果３姉弟それぞれの映画趣味は意外に似ていると思っていた。

秋斗はもう一度束に視線を移す。そしてふと、束の不思議の国のアリス的な出で立ちを見て思った。
「――――博士って『パンズラビリンス』だよな。もしくは『チャーリーとチョコレート工場』？」
「……ねぇ、それどういう意味？」
「いや、別に深い意味はない」
「じゃあちーちゃんとか箒ちゃんとかを映画で喩えたらどうなるの？」
「姉貴は間違いなく『沈黙』――もしくは『エクスペンダブルズ』だろ？　んで、箒は『伊丹』作品系？　一夏は……『マーブル』系のヒーロー物かな？」
「じゃあ、あっくんは？」
「俺？　俺は『ターミネーター1』か……『大脱走』、もしくは『アイアムレジェンド』？　『シェーン』とか『ダーティーハリー』って言いたいところだけど、多分そうはなれねぇと思う」
「……幾ら束さんが天才でも、あっくんのその基準が良く分からないよ」
それからしばらく束との映画トークに興じながら、秋斗は目の前で繰り広げられる二つの戦いが終るのを待った。
「――――ねぇ、あっくん。いつ聞こうか迷ったんだけどその〝タンコブ〟どうしたの？」
「ぁん？　まぁ、ちょいとな……」
「ちーちゃんにやられた感じ？」
「まぁね」
束は秋斗の脳天に作られたタンコブを撫でる様に擦った。
秋斗は大人しくされるがまま、今朝の一件を束に話した。
「――――お風呂場でトップコートねェ。普通に塗装ブースの前じゃダメだったの？」
「いや、別に構わない。ただなんとなく〝説得〟の前に一度下らない事で怒られて評価下げといた方が良いかなと思ってさ」
「……どういう事？」

「〝荒唐無稽〟な事って、ある程度馬鹿なキャラじゃないと受け取ってもらえないじゃん？　実際博士もそうやってキャラ作ってんだろ？」

「……」

束は秋斗の言葉に無言で笑みを浮かべた。

珍しくその日は束が日本に居た。秋斗と束は殆ど毎日のように連絡を取り合っている仲だが、意外に直接顔を合わせた回数は数えるほどしかない。

そんな2人が本日、顔を合わせた場所は篠ノ之道場である。

2人は仲良く座布団を並べ、道場の片隅で目の前で繰り広げられる二つの戦いを眺めながら、のんびりとこの後の会食の為に時間を潰していた。

一夏対箒、柳韻対千冬の試合――――。

それぞれの立ち合いは実に対極的だ。一夏と箒の方は隙在らば仕掛けると言う〝動〟の展開が多く見られ、対照的に千冬と柳韻の立ち合いは高度な読み合いを前提とするが故に、動きの数に比べて一つ一つの動作の質が非常に高い。

普段ならそのどちらの試合にも同門の弟子達という観客がつくが、本日この道場にいるのは篠ノ之、織斑の両家族のみ。故に二つの試合を観戦する客は、秋斗と束の2人しかいない。

「――――何でそう思うのかな？」

束はいまだ続く二つの試合から一切目を逸らさずに、秋斗に問う。

秋斗はその質問に、同じく視線を向けずに返した。

「なんとなく、かな？　博士的な言い回しをすると凡人？　所謂パンピーみたいな連中に、普通じゃねェような手段でやらかしたあれこれを上手く説明しようと思ったら、博士みたいにやるのが一番だなって思ってさ。一々説明出来ないような〝結果〟だけど、それを無理やり見せ付けて、なんやかんやで強引に受け入れてもらうっていうの？　それって道化キャラじゃないと無理だろ？　多分博士なら、それ判った上でやってる方が自然かなと思っただけさ」

別に秋斗は束がキャラクターを演じている事に気づいていたわけ

ではなかった。ただ、己がやった幾つもの資金策と、それによって生み出された結果を千冬達に説明する為の最善を考えた際に、もっとも身近に居た一番優秀な人物とその思考が偶然被っただけの事である。そしてこれまで積み上げた束との信頼と、間近で実感したその優秀さに、あえて理解した上で自ら演じていると解釈したほうが、より〝らしい〟と思ったからである。

――――そしてその秋斗の解釈は、正しかった。

秋斗が言葉を切ると、束はまるで観念したかのような深い吐息を吐いた。その様は秋斗が今までに見たことが無い様子であった。

「はぁ、ばれちゃったかぁ～」

「あぁ、やっぱり演技してたんだ」

「そりゃあね。ああいうキャラの方が楽なんだもん。真面目なキャラだと相手が理解出来るまで説明してって言われるじゃん？　そんなの真面目に相手してたらキリが無いし」

「そらそうだ」

秋斗は束の漏らした本音を聞いて、苦笑混じりに同意した。

「に、してもあっくんは流石だね。本当に小学生なの？」

「まぁ、実際の所、俺には前世の記憶があるからな。だから頭脳は大人で身体は子供な感じのキャラなんだよ」

「……え、本当？」

「え、信じるの？」

秋斗の言葉に束は年相応の笑みを浮かべた。

「ごめん。今一瞬、信じかけたかも。なんかあっくんを見てると、私が今まで会ってきた人がどんな感想を抱いたか分かる気がしてきたよ」

「なに、胡散臭いって？」

「うん。って言うかあっくん本当に束さんの後継いでみる？」

束は秋斗の眼を真っ直ぐに見据えて言った。

それは今までの様な言葉遊びの延長ではなく、ある種本気の誘いであるように見えた。

秋斗は一瞬、宙に視線を移して吐息を一つ吐いた。

「……悪くないけど、もうちょっと待ってもらえません？　今は少し

やる事があるんで」
秋斗は少し考え、そう言葉を返した。
織斑家を立て直す為に積み上げたプランは既に最終段階にある。
あと一つ――――このすぐ後に始まる〝最後の試練〟を無事乗り越えれば、それで一応の区切りがつくからだ。
「――――そう。じゃあ、気が向いたらいつでも言ってね」
束はそう言って。そして再び表情に何時もの空笑いを貼り付けた。

16　『いつか』に続く最善だと信じたい　後篇

篠ノ之束がその人生において偶然出会った織斑秋斗という少年は、所謂〝卵〟の様なモノ。

羽化した後に産まれるそれが、鳥なのかトカゲなのかドラゴンなのかすら想像も出来ない未知と可能性を秘めた原石に等しかった。

世間一般でいう天才のイメージとは、『0から1を産み出す存在』、もしくは『1を十か―に変質させるか』のどちらかにあるとすれば、篠ノ之束が前者の側に属し、織斑秋斗が後者の側に属すだろう。

そんな風に、ＩＳを生み出した稀代の天才である束をして、織斑秋斗のこれまでに見せた様々な〝応用〟は、まさに他に類を見ないと呼ぶに相応しい才能だ。

――――故に束は、近年ポッと湧き出た『最も真新しく且つ、最も難しい難題』の解明を、この時、秋斗に任せてみようと密かに思いついた。

難題とはつまり〝ＩＳ〟に関してだ。

要するに『なぜ女性にしかＩＳコアが反応しないのか？』で、ある。

その疑問についての答えは現時点で約８割と言ったところ。が、しかしそれは全て机上の空論でしかなく、理論とは常にその傍らに証明が付きまとうモノだ。

故に束は、その最も重要な証明を得る段階を、改めて秋斗に一任しようかとぼんやりと考えついた。

――――断じてそれに至った理由が、目の前の勝負を観戦するのに飽きてきたからではない。また決して、別に〝暇〟になったわけでも無い。

「――――ねぇ、あっくん。ちょ～っと付き合ってくれないかなぁ♪」

「ぁん？」

千冬達の勝負を束と同じ様に退屈な表情で眺めていた秋斗。

秋斗がそんな突然の声に脇を見ると、そこには何時に無く胡散臭い笑みを浮かべた束がいた。

先ほどまでのどこかしおらしいナチュラルな調子がすっかりと消

え、そこには世界を震撼させた〝天災〟の姿があった。
秋斗は思わず一歩後ろに下がった。
そんな秋斗に束は後ろ手を組んでじりじりと迫りながら、笑みを浮かべて言った。
「もぅ、そんなに逃げないで欲しいな♪　そんなに時間も取らせないし、別に痛くも無いからさ♪」
「待て待て、いきなりどうしたんすか？　後、具体的な説明を省くな。あと、近い。近いっす。博士」
「そろそろ飽きてきたしさ。場所を変えない？　大丈夫、優しく教えてあげるからさ♪」
「……アンタ、いったい何の話してんだ？」
「いいから、いいから♪　束さんを信じてさ――――」
ワキワキと両手を動かしながら迫る束だったが、台詞はそこで一端途切れた。――――殺気を感じたからだ。
束が飛びのくと同時にそれまで束の頭があったその位置に一筋の剣閃が走った。同時、千冬の怒号が道場に響いた。
「何をやっとるか、馬鹿ウサギッ！」
「あっぶな!?　ちーちゃん、ダメだよ。そんなの人に向って振り回しちゃ。危ないよ？」
「危ないのは貴様の方だろう？　私の弟に何をしようとした!?　言え！」
千冬は秋斗を背中に匿いながら、剣を構えて束を牽制した。
ふと脇を見れば、既にそれぞれの勝負は終っており、柳韻と一夏がなんとも言いがたい微妙な顔を浮かべ、箒が軽蔑するような冷たい視線で束を見ていた。
「あらら。ちょ～っとした御茶目じゃん？　ＷＨＹ　ＳＯ　ＳＥＲＩＯＵＳ？」
周囲の様子に束はおどけた調子でそう言うと、肩を竦めてにこりと千冬達に笑顔を浮かべた。
対する千冬はかつて〝一撃女〟と評された修羅を彷彿とさせる覇気を纏う。

――――そんな2人の様子に柳韻は徐に溜息を吐きながら、秋斗を手招きした。
「秋斗君、ウチの娘がすまなかったね。思えば、あの子は昔から大人しく待つというのが苦手でね。迷惑をかけただろう？」
「いえ、まぁ、知ってて油断してたのもありますから。……それよりウチの姉貴もこれから騒がしくしそうなんで、こっちこそすみません」
「いや、かまわない」
「……止めないんスか？」
秋斗が柳韻に問うと、柳韻は静かに吐息を吐いて肩を竦めた。
「久しぶりにあの子にしてやれることが説教だと思うと気が重い。が、まぁ折を見て止めに入ろう」
類稀なる身体能力を無駄に高度に駆使した千冬と束のじゃれ合いを見て、柳韻は深い溜息を吐く。
そんな柳韻に対し秋斗は内心で頑張れ先生という、励ましの言葉を送った。
「あ、そうだ先生。この後、飯の時に言おうと思ってた頼み事があるんですけどいいっすか？」
「……なんだね？」
秋斗はふと、『丁度良いタイミング』なのではと思い、予てから柳韻に振ろうと思っていた提案を唐突に出した。
「実はちょっとした商売を始めようと思いまして。んで、その書類を作ったんですけど最後に保護者の判子が必要なんです。だから柳韻先生に代わりに印を押して欲しいんですよ」
「……同じ聡い子でもそうした話をちゃんと通してくれるだけ嬉しいよ。詳しい話は後で聞くから、箒達と先に行って待ってなさい」
「どうも」
柳韻は一瞬、しみじみとした吐息を漏らした。
よほど束が散々やらかした経験がある所為だろうと、秋斗は思いつつ、同時に想像以上にトントン話が進みそうな予感を感じて密かに笑みを浮かべた。
それもこれも丁度良いタイミングで束が、〝素頓狂〟な事をやらか

してくれたお陰。
　そんな風に師にある意味での感謝の念を送りつつ、秋斗は〝この話〟に関しては道化を演じる必要もないかと、安堵の吐息を吐きながら、一夏と箒の方に向った。
「――――私が言うのもなんだが、秋斗はもう少し〝友達〟と言うのを選んだ方が良いのではないか？」
　道場を出て一夏と箒と一緒に篠ノ之家の居間に向った秋斗は、そこで箒からなんとも言えない言葉を受けた。
　篠ノ之家の造りは住人達に良く似合う古きよき日本家屋で、織斑家に比べると遥かにデカイ。
　一同は篠ノ之の母からジュースを貰い、夕食が出来るまでの空き時間に雑談に興じた。
「自分の姉に向って随分と辛辣だな？　なに？　まだお前等、ギクシャクしてんの？」
「茶化すな。それとギクシャクは……してない筈だ。でも、幾ら天才だからってあの振る舞いは見てるほうが恥ずかしいだろう？　もう少しシャンとすれば出来るのに、とはいつも思うが――――」
「そりゃ博士のレベルでクソ真面目になったら、凄い疲れるじゃん？」
「……疲れる？」
　箒はコテン、と首を傾げる。
　が、秋斗はその質問に答えを返さず、逆に質問を振った。
「それよりふと思ったんだけど、俺も箒も御互い友達を選び出したらボッチにしかならなくねぇか？」
「な！　私はボッチではないぞ！」
「いや、ボッチだろ……？　どう思う一夏？」
「ん？　まぁ確かに箒は、もう少し周りに愛想良くした方が良いと思う。ソレは秋斗にも言える事だけど」
　一夏は広い畳の上にゴロリと寝そべりながら苦笑混じりに言った。
　そんな一夏の意見に箒は、少し思うところが有るのか顔を伏せた。
　が、しかし秋斗は一夏の言葉に思わず言い返した。
「いや、俺の愛想は良いだろ？」

「秋斗の場合は愛想は良くても付き合いが悪いんだよ。学校の皆で何処行こうって話が出てもお前絶対に断るじゃん？」
「だって面白く無さそうなんだもん」
「いや、面白いから！　家に引き篭もってるより絶対面白いから！　そういうところがダメなんだよ、お前は」
　一夏はやれやれと身を起こしながら溜息を吐いた。
「……引き篭もりって、ますます姉さんにそっくりだな、秋斗は」
「失礼な事を言う。俺と博士が似てるって冗談にしては笑えないな？　それに俺は引き篭もりじゃないぞ？　まぁ、家に居るのは嫌いじゃねぇけど、断じて引き篭もりじゃない」
　一夏と箒の辛辣な意見に、秋斗は思わず口をへの字に曲げた。
　が、しかし一夏と箒はそろって首を横に振る。
「いや、自分では分かってないと思うけどお前、束さんにそっくりだよ。千冬姉に怒られてる時なんか、まさにそうだぜ？」
「お父さんから習った言葉で『類は友を呼ぶ』という言葉もある。私も秋斗と話していると時々、姉さんと話しているような錯覚を抱くことがある」
　一夏と箒は互いに頷きながら言った。
　そんな2人に秋斗は思わず溜息を吐いた。
「……お前等、そろって好き勝手に散々言ってくれるな？　そんなに気が合うなら『結婚』しろよ、もう」
「なっ!?　なぜ、そう貴様の意見は飛躍する!?」
「なに、マジになってんだよ？」（WHY SO SERIOUS？）
　顔を赤らめて声を荒げる箒に秋斗は、肩を竦めて苦笑を浮かべる。
　またその様子を見て、「いつの間にフラグが建ってやがったんだ？」と、一夏に同様の笑みを向けた。
　しかし対する一夏は不思議な事に、秋斗の零した冗談に少しだけ不快そうな表情を浮かべていた。
「なぁ、秋斗。冗談でもそういう事言うのは止めた方がいいぜ？」
「ぁん？　どうしたよ？」
「前に箒とかを苛めてた連中がそう言ってた。女の子と友達だからっ

て、直ぐに結婚しろっていうのは変だろ？」
「おい、一夏。私は別に苛められてなんかいない！　それにその話はするなとあれほど――――」
「……何の話だよ、一体？」
　不愉快そうな箒を制して、一夏は数日前に学校の教室で起こった事件を秋斗に話した。
　数日前、掃除の時間にふざけていた男子を注意した箒が『男女』と囃し立てられ、一夏が仲裁に入ると、ソレを見た悪ガキ達は更に2人を纏めて『夫婦』だと更に煽ったらしい。
　それを聞いた秋斗は、なんとも小学生らしい稚拙な話だと思わず苦笑を浮かべた。
「――――なるほど。つまりさっきの俺の台詞は、正に悪ガキ連中のと同じだったと？」
「流石に秋斗のは冗談だって分かるけどさ、やっぱりでも気分悪いぜ。そういうので茶化されると」
「ふ～ん。そいつはすまんかったな。じゃあこのネタはしばらく自重するわ」
「……自重ってなんだ？」
「控えるって事さ」
「いや、止めろよ。控えるんじゃなくて」
　それから話題を変えるように、3人は箒が見つけてきたトランプに興じて時間を潰した。
　最初は普通の勝負だったが、余りにも脅威的な強さを発揮した秋斗に痛烈な惨敗を続けた一夏と箒の2人は、いつの間にかタッグを組んで秋斗を負かそうと画策を始めた。
　そんな2人の様を見て秋斗は、「割りと良いコンビじゃないか」と密かに笑みを零しつつ、粛々と2人から勝ちを拾い続けて時間を潰す。
「――――お前等本当に弱いのな？」
「お前が強すぎるんだよ、クソが！」
「ダウトと七並べが強いとか最悪だな……」
「そう褒めるなよ。照れる」

「「褒めてないっ！」」
二人揃って声を荒げるところも仲の良さの現われだと、秋斗は苦笑を浮かべる。そして口に出さずにもう一度『結婚しろよ』と、内心で皮肉った。

☆

日は落ちて時刻は夕食時に差し迫った。複数の来客にも対応できる篠ノ之家の大きな座敷のテーブルには、その季節の旬をふんだんに使った和食が並んだ。一夏は料理人としてそんな食卓に深く感動し、「おばさんスゲェ！」と、篠ノ之の母を賞賛した。
食卓に篠ノ之家の一同と織斑家の一同が同時に会するのは、実に久しぶりの事である。以前は稽古の終わりに織斑家が食卓に招かれる事もそう珍しいことではなかったが、束がＩＳを発表してから篠ノ之家の周辺が慌しくなるに連れて、自然とその機会は失せていった。
加えて束も一緒にとなると、恐らく初めてである。
上座に家長の柳韻を置き、次に客人である織斑家の一同を年長順に上座の側へ、その対面の下座に篠ノ之家一同が座る。
「――――食事の前に幾つか伝えておきたい事がある。皆、それぞれよく聞いて欲しい」
一同を前に篠ノ之家の家長――柳韻は厳格な様子でそう口を開いた。
柳韻の妻もこの時ばかりはいつもの柔和な顔を少しばかり固くし、箒はそんな両親の様子に少し困惑の表情を見せる。不思議と箒の視線は姉――束の方に向き、束はそんな風に妹から向けられた視線に気づくと、なんとも言えない苦笑を浮かべた。
そして千冬は目を伏せ、一言一句聞き逃さぬようにと視線を柳韻に向ける。一夏もそんな姉の様子に倣う。――――秋斗は一歩引いた様に、腕を組み顎の下に手を添えて柳韻の言葉を待つ。
そもそも今回のこの催しは、千冬と柳韻が双方に伝えておく事柄がある故に始まったモノであり、秋斗はそれに便乗する形で〝例の件〟

を話そうと思っている立場。
　故に秋斗は、タイミングを見計らっていた。
「――――前置きを長くしても仕方が無い。結論から言わせて貰うと、だ。一年後に、この道場を閉める事にした」
「……え？」
　最初に疑問のような吐息と言葉を漏らしたのは一夏と箒であった。
　そして同じ頃、千冬は柳韻の言葉に明らかな動揺を込めた視線を向けた。
「あの、お父さん。道場を閉めるとはその……どういう意味なんですか？　まさかそれは――――」
　箒が信じたくないと言う様子で柳韻に問う。一夏もまた、同様の意を込めた視線で柳韻を見た。
　柳韻はそんな2人の視線を真っ直ぐに受けとり、重々しく、そして短く頷いた。
「そうだ。一年後に我が篠ノ之流剣術道場の門は閉める。そして政府の指示に従い、一旦この地を〝去る〟事に決めた」
「それは引っ越すってことですか、先生！」
　溜まらず声を上げた一夏の言葉に柳韻は「そうだ」と、短く頷いた。
『引っ越す』その単語に一同の中で最も大きな衝撃を受けた箒は、擦れた声で「……なんで？」と問うた。
「……箒ちゃん達を守る為だよ」
「姉さん？」
　そこに口を開いたのは束だった。束は箒に対してなんと声を掛けたらよいか分からず、明らかに手探りな様子で慎重に言葉を選びながら口を開いた。
「……此処から先は私が引き継ぐけど良い？」
「あぁ、お前に任せる」
「そう」
　柳韻に素っ気無く了承を得ると、束は注目を集めて言った。
「そもそもの発端は私の所為なんだ。ちょっとばかり派手に名前が売れすぎちゃってね。警戒はしてたけど、見通しが甘かったみたい。ど

うしても悪い事を考える連中が、〝家族〟を誘拐して私に言う事を聞かせたいらしいんだ。それで、そうした脅迫文がこっちの家や私の研究所の方に最近結構届いててね。だから……一度箒ちゃん達は名前を隠した方が良いと思ったのさ。……お父さんも前々から政府の方で保護プログラムで匿うっていう話を受けてたみたいだし――」

「……脅迫文だと？」

束の言葉に真っ先に千冬が反応した。

「それは本当なのか、束？」

「うん……。残念ながら事実なんだよねぇ、コレが」

束は珍しくどこか達観した様子で深々と頷いた。

そしてもう一度箒に向かい、「ごめんね」と素の口調で、小さく謝った。

☆

名声が高まるとそれに比例して相応の悪意が周囲に付き纏う様になる。故に束は先手を打ち、『白騎士事件』の直後、あえて電波ジャックを繰り返して世間に己の〝人柄〟を売り込んだ。

各国の軍事力を鼻で笑い、群がるマスコミを武力で恫喝し、凡人には決して御しきれないという自由な人物像を前面的に押し出して、縦横無尽に荒唐無稽な存在として暴れまわった。

全ては『常人には理解出来ない破綻した人物像』を世界に発信する為――所謂〝一般的〟と言われる大半の恫喝手段に対し、先んじて牽制の釘を刺す為だ。

決して常識的な物差しで計られる存在であってはならない。故に、それこそが束が〝天災〟の仮面を纏う理由である。

全ては〝篠ノ之箒〟の存在に帰結する。全てを切り捨てる事で問題の９割が解決するにも関わらず、そんな不安定な道を突き進んだのは『箒の姉でありたい』と言う小さな願いが根底にあるが故だ。

（――面倒くさい、姉妹だよな。本当に）

秋斗は、箒に対しＩＳを作った己を恨めという様子の束を見て、思わずそんな風に内心で吐息を漏らした。
片方はコンプレックス持ち。片方はコミュ障で、なまじ頭が良すぎる。
加えてすれ違っていた期間が長い所為か、御互いに他人に対する様なレベルで気を使っている。
もっとも、小学生と高校生の小娘達に円滑なやり取りを期待しろと言うのも酷な話なので、秋斗はぎこちない様子で御互いの次の一言を待っている箒と束に、助け舟を出した。
「――――先生、政府の保護って具体的にどう言うのなんすか？」
それまで静観していた秋斗がついに口を開いた事に一同の視線が向いた。
柳韻は秋斗の言葉を受け、難しそうに眉を顰めた。
「それについてはまだ調整中らしい。一先ず、篠ノ之の名前を隠して地方に引っ越すのは決定という事だが――――」
「一年後にそうなるという事ですか？」
「あぁ。具体的な時期は定かでないが、早まる事はあってもそれより遅くなる事はないとの事らしい」
「じゃあ、先生！　今年で箒は転校するって事ですか?!」
「一夏……」
その瞬間、一夏が口を挟んだ。
一夏は具体的に転校という言葉を出し、それを聞いた箒は更に大きくショックを受けたようで、顔を伏せた。
秋斗はそんな一夏を無視して柳韻と、そして束に言った。
「――――んじゃ、具体的に、もっと話を政府と詰めた方が良いですわ。考え方を変えると、それってどう考えても博士に対する体の良い人質扱いですよ？　直前になって一家離散でバラバラに引越し、なんて事にならないよう、その点だけは最初に明らかにしといた方が良いと思いますが……博士はどう思う？」
「……あ、うん。そうだね！　その点だけはしっかり話をしておくよ。ちゃんと箒ちゃんが家族と一緒に居られるようにするからね？」

秋斗の意見を聞いて束は目を見開き、力強い声で箒に言い聞かせた。

対する箒はまだ混乱が収まらぬ様子で、一言、短く口を開いた。

「……姉さんはどうするんですか？」

「え？」

「姉さんが……その、原因だって事はわかる。……でも、一緒に引っ越さないんですか？」

その質問は箒自身を除く篠ノ之の一家全員に向けて放たれたものであった。

一同は沈黙する。

中でも束は一瞬、表情に強く悲痛なものを浮かべた。

――が、直ぐに何時もの空笑いを浮かべて言った。

「お、まさか箒ちゃんのデレ期到来かな？　嬉しいなぁ、だけどちょっと束さんと一緒には無理かなぁ。件の凡人共の事もあるから、私が皆と顔を合わせるのは出来て数回くらいだと思う。でも連絡は出来るようにするから、安心してくれていいよ」

「……そうですか」

――そんな篠ノ之の姉妹のやり取りから少し離れるように、千冬が柳韻に問うた。

「まさかこの様な話だとは――」

「すまない。キミ達にも迷惑を掛ける。せめて千冬君が成人するまでは身近で見守ってやりたかったんだがな」

「いえ、それは……しかし私も非常に残念です。先生から受けた恩は返せないほどありますから……それはそうと、さっき束の言った『脅迫』というのは本当の話なんでしょうか？」

「あぁ、度し難い事だがね。古来より大きな力には魑魅魍魎が群がる。束の作ったＩＳもそうなのだろう……実に嘆かわしい事だが――」

柳韻は深々と吐息を吐く。

「私１人ならば問題ないが、まだ箒は幼く弱い。今ならば多くの人目を避けて疎開するのは容易いと聞かされるとどうしても、な」

「そうですか……」
「なに、何れまたこの地に戻るつもりだ。少なくとも、今生の別れにする気はないよ」
「そう、ですか――――」
千冬は悲痛な表情を浮かべた。
篠ノ之家の引越し。約一年後に予定されたソレは、奇しくも原作と同じ流れであった。しかし原作と少し違うのは、ぎこちなくも成立している篠ノ之の姿だ。
これが幸か不幸か秋斗には判断が付かなかったが、一個人として、秋斗は彼らに幸あれと内心で祈った。
秋斗はふと、脇に座る一夏を見る。
するとそこには箒と同様に大きなショックを受けた一夏が居た。
道場が無くなる。ライバルが消える。
現時点で生き甲斐に等しいその二つが、同時に消える現実を前にすればこうもなるかと、秋斗は溜息を吐きながら一夏の肩を叩く。
「……おい、一夏？」
「……なんだよ？」
「今年逃したら、箒にリベンジするチャンス無いぞ？　御互い剣道を続けてれば中学高校で会う事もたぶんできるが、少なくとも同じ大会の土俵で雌雄を決するのは今年で最後だぜ？　どうすんだよ？」
「っ!?」
去年の秋の剣道大会で惨敗を喫した一夏は、秋斗の台詞にビクリと肩を震わせた。
「っ、そうだな……負けっぱなしで転校させて堪るかよ。絶対勝ってやるさ」
「向こうも間違いなくその気で来るぜ？　まぁ、後悔せんようにな」
「……なぁ、お前、俺の事励ましてるのか？」
「どうだかな。まぁ、好きに受け取れよ。色男」
秋斗は一夏に、どこか悪辣に見える笑みを送った。
「――――さて、少々食事の前には暗い話題だったが、私と束からの話は以上だ。これ以上は冷めてしまうから先に食べよう。千冬君と秋

斗君の話はその時でいいかな？」
　柳韻が締めくくり、一同が箸を取ったところで千冬がやや首をかしげた。
「構いませんが、……秋斗も何か話す事があるのか？」
「まぁ、な。空気を変えるぐらい馬鹿馬鹿しい話だから、真面目な話なら姉貴に先を譲るぜ」
　千冬が首を傾げるのに合わせて、一夏も箒も、篠ノ之の両親も同じ様子を見せる。
　唯一、秋斗の話す内容を現時点で知っている束は、先程よりもやや近い位置で箒の隣に座り、どこか期待するような好奇の視線を秋斗に向けていた。
『――――援護要る？』と、束は微かに唇を動かした。
　秋斗は『状況によりけり』と、同じ様に唇を動かして返す。
　そんな秋斗と束のやり取りを尻目に一同の食事は進み、そして千冬は幾ばくかの時間を置いてから姿勢を正し、一同の注目を集めてから口を開いた。
「私の話と言っても、そう大した事では……ある、か。実は、今年の〝ＩＳ操縦者候補試験〟を受ける事にした。その事を全員に伝えておきたい」
　千冬は少し照れくさいのか、淡々とそんな風に己の進路選択を打ち明けた。
「なぁ、秋斗。ＩＳ操縦者候補試験……ってなんだ？」
「読んで字の如く、ＩＳの操縦者になるテストだろ？　受かったら……〝一撃女〟が空を駆ける事になる。つまり最強になるってこったな」
「おい、馬鹿やめろって！」
　思わず口走った『一撃女』のワードに、千冬はジロリと秋斗を睨みつけた。だが流石に恩師の前で手は出せなかったらしく、睨むだけに留めた。
　また秋斗の方はというと、そんな〝些細な事〟より千冬が遂にＩＳ業界に踏み出す事を知って大きな笑みを浮かべていた。理由は言わ

ずもがな。これで最終的に、織斑家が貧乏のまま終る可能性が大きく減ったからだ。

そして秋斗と同様に明らかな喜色を顔に浮かべる存在がもう一人居た。無論、束である。

「ちーちゃんも遂にＩＳ乗りになる決意を固めたんだね！　っしゃおらー！」

「束、行儀が悪いわよ」

「うるさいな。もぅ、今はそれどころじゃないんだよ！」

束は声を張った事を母親に注意されつつ、千冬の進路決定に大きく喜びをみせる。

「まだ試験を受けると言っただけだ。受かったわけでも無いのにそうはしゃぐな。鬱陶しい。と、いうか貴様は知っているだろう？」

「ちーちゃんの口からあえて聞くって言うのがこういう場面では重要なのさ♪　それに試験なんてもう受かったようなもんだよ」

束の言葉に千冬は、少し恥ずかしそうなそぶりを見せる。

「その試験と言うのは詳しく分からないんですが、大学に行くのとかとは違うんですか？」

と、そこで箒が尋ねた。

「あぁ。進学とはまた違う。進学はお金が掛かるが、こちらの試験は受かれば国から給金が出て、そのままＩＳ乗りとして国家の所属になれるそうだ。所謂、公務員――学校の先生や警察、自衛官みたいなモノになると思ってくれれば良いさ」

「へぇ」

「ダメだよ、ちーちゃん。そんな公務員だなんて夢の無い説明なんかしたら誤解されちゃうじゃん！　箒ちゃんＩＳ乗りって言うのはね、これからの未来で一番人気のある仕事になるんだってことを良く覚えておいてね？　実際にそうなるからさ！」

「はぁ……そうですか」

束は千冬の言葉に慌てて口を挟み、そう箒に言い聞かせるように言った。

箒はそんな束の言葉にやや胡散臭そうな視線を向けたが、逆に一夏

はそんな胡散臭い話に眼を輝かせていた。
「束さん束さん、ＩＳ乗りの仕事って宇宙に関係する事っすか!?」
「お、いっくんもＩＳに興味が有るのかい？　そうだね。最終的には宇宙に行ってもらいたいけど現時点では……っと、これは秘密かな？」
「え？」
「ふふん、覚えておくといいよ。いっくん。きっと三年――いや、二年後かな？　きっと面白い事が起こるからさ♪」
「えぇ、なんですかそれ。すっげぇ気になる！」
束は一夏の期待を煽るように仄めかす。
そんなやり取りが目の前で繰り広げられる中、秋斗は内心で「恐らくモンドグロッソの事だろうな……」と、束の言う言葉の意味を密かに予想した。
「――と、まぁ私からの話は以上だ。受かるかはどうかは分からんが、今年はこの試験に賭ける。受かればその業界に就職と言う形になるだろう。それで……なんだが、な」
「……ぁん？　どうしたん、姉貴？」
「……千冬姉？」
「いや、それでなんだが、実はお前達と柳韻先生に先に謝っておきたい事があるんだ」
千冬はそこで一旦、言い辛そうに言葉を切った。
そして柳韻と一夏、秋斗を確認するように、視線を送った。
「……恐らくだが、今まで以上に家に帰るのが難しくなる。だから出来れば、私の方の試験が終るまで、先生の家で２人の面倒を見てもらえないでしょうか？　先の引越しの件もあると思いますし、不躾な提案でご迷惑なのは重々承知の上です。ですが、お願いします！」
千冬はそこで深々と篠ノ之夫妻に頭を下げた。
千冬の悲痛な顔を見ると、それがどれだけ苦渋を孕んだ決断なのかは容易に想像が出来た。
加えて今年一年以内に篠ノ之家が引っ越すという話を、正に先ほど聞いたばかりである。

こんなタイミングでこんな話題を切り出さざるを得なかった千冬の心情は如何ほどだったか？　秋斗はそんな風に千冬の心情に同情をしつつ、同時に、切り出すならこのタイミングしかないと確信した。

――――しかし同時にタイミングを察した〝天災〟が、にんまりとした笑みを浮かべて先に口を開いた。

「全然大丈夫だよ、ちーちゃん。〝あっくん〟が何とかしてくれるよ♪」

「……束？」

「……何を言ってるんだお前は？」

柳韻も、その妻も、箒も、一夏も、そして千冬も、束の言葉に首を傾げた。

そして束の言葉にあった見知った名前の存在――秋斗の方に一同の視線が向いた。

「――――今の台詞のタイミング、絶対狙ってただろ？　なんで横から掻っ攫うのさ？」

全員の視線を受けながら、秋斗は苦笑のような自嘲のような、そしてどこか悪辣な風で、師である束の空笑いに似た印象のある笑みを浮かべた。

「ふはは、そんな美味しい場面を逃すほど束さんが悠長だとでも思ったのかね？　甘いよ、あっくん。チョコパンやＵＣＣより甘いぜ」

「いやいや空気読めよ。『その言葉が聞きたかった』って台詞をピノ子が言っても仕方ねェだろ？　ブラックジャックが言わないと――――」

「それはそれは、あっちょんぶりけ♪」

束がシリアスな空気をぶち壊した事を透かさず察した秋斗は、直ぐに束の天真爛漫なペースに合わせた。

何時もの音声通話の時の様な気安いやり取りを少し交わした後、一言断りを入れてから、秋斗は席を立った。

――――そして家から持ってきた鞄から、分厚い封筒を取り出し、それをちゃぶ台の上にポンッと置いた。

「ま、茶番はこの辺にして、だ。姉貴、ココに『５００万』用意したか

ら、バイト辞めちまえ。こんだけ在ればしばらく安泰だろ?」
「なっ!?」
束を除く一同が、秋斗のそんな行動に大きく眼を見開いた。中でも、千冬は顎が外れんばかりの驚愕を貼り付けて固まっていた。
「に、しても窓口使わずに〝現金〟を引き出すのは結構しんどかったぜ……。現金輸送って中々神経使うのな? 二度とやりたくねェわ」
秋斗は取り出した一万円札の束を千冬に突きつけながら、〝この日〟の為に身につけた道化師のような悪辣とした笑みを浮かべて言った。

17　訪れた『転じ』の時……

昔話をしよう。それはまだ織斑家が破滅に向っていたころの話だ。
千冬はなんとか家族を救いたいと思っていた。だから身を粉にして働いた。
だけど家族の中から〝変わり者〟が現れた。
そいつは〝秋斗〟と呼ばれていた。何もかもを欺いて笑う『第二の天災』。
故に千冬は困惑した。
「――――どういう事だか説明してくれるんだろうな、秋斗？」
「話すと長いが、まぁ、それでもいいなら少しずつ話そうか」
織斑秋斗の戦い。
転生してから約3年にも及ぶ長い織斑家救済の戦いは、この日一先ずの終わりを迎えた。
一時期は如何にして己の荒唐無稽さを誤魔化そうかと必死に考えた秋斗だが、彼は最終的に、あえて隠さず己の異才っぷりを全力でひけらかす事を選んだ。
その決断を出した日、秋斗は思えば随分と大きな回り道をしたもんだと、感傷に浸る。
そして遂にその時がやって来た。
秋斗は現金で用意した５００万円を前に、千冬と、己に近い関係者一同に多くを明かした。懸賞品の景品転売から端を発した資金策から、その後の改造フィギュアのオークション販売、ＷＥＢ広告を乗せたブログの開設、白騎士のフィギュアのフルスクラッチとその後の公式販売化、株式――。
流石に同人界隈でのサークル活動やハッキングによる電子情報の改ざん等の部分は一切明かさなかったが、それでも一同はこの時初めて織斑秋斗と言う少年の異才をまざまざと見せ付けられ、そして圧倒された。
「――――どうして一言も言わなかったんだ？」
千冬が声を震わせて尋ねた。

「目に見える形としての〝結果〟が無いと、誰もこんな話信じねェだろ？　姉貴にとっちゃ、俺はまだガキなんだから。……で、実際どう？　夢みたいで馬鹿みたいな話だろ？」

「……っ」

千冬の目の前に重ねられた５００万円分の札束。

それを用意してのけたのがたった９歳の子供という現実。

目の前に証拠となる現金がなければ、絶対に誰も秋斗の話を真実だとは思わない結果を前に、千冬は沈黙する。

秋斗はそんな千冬に向って苦笑を浮かべた。

この瞬間に至るまでには、様々な葛藤や試行錯誤が秋斗の中には生まれた。そうした中で手札を確認し、その末に選んだ答えが多くを明かす事だった。

（――――博士ならもう少しマシな答えが出せるのかねぇ）

不意に秋斗は目の前に座る束を見た。束はなんとも言えぬ様子で静観に徹していた。

そんな束に秋斗は内心詫びる。

（すまんが、師匠、後で一緒に怒られてくれ）

そして秋斗が半ば予想した通り、――――その瞬間、千冬が泣いた。

秋斗はソレを見て、腹を決めた。

「そのしかめツラはなんだよ？　笑え、喜べよ、ちーちゃん。泣いてる暇なんてないぜ？　これで憂いはさっぱり消えたんだ。ＩＳでも何でも好きに未来を掴みに行けばいい。それで今のクソみたいな貧乏生活を抜ける為に戦うつもりなんだろ？　そんな顔してどうする？　顔上げて笑ってくれよ♪」

泣いた千冬に秋斗は、己の好きな映画に登場した道化師（ジョーカー）と、師の言い回しを借りた台詞を贈った。

以前千冬に泣かれた際に秋斗は、その涙を不器用にも受け止めにいった。が、今回はあえてソレを放棄して全力で道化に成った。

放棄する事で己がイレギュラーである事を暗に訴えると同時に、今の世界に蔓延する『天災ならば仕方が無い』というある種の観念にも似た〝諦観〟を、自身に根付かせようとしたのだ。

秋斗は悪辣とした笑みと言葉の中に、そんな意を込めていた。

☆

――――季節は移り変わり、半年後。

秋斗はブラックの缶コーヒーを片手に夕刊を広げて、紙面を読んでいた。

その一面には搭乗者の纏った〝秋桜〟の写真が、デカデカと映し出されていた。

「――――日本初のＩＳの名前は〝秋桜（コスモス）〟か。中々良い名前じゃん」

国産ＩＳ――秋桜。

それは束の作った〝白騎士〟の設計理論を正統に継承した全身装甲タイプのＩＳで、白を基調に四肢の先から友禅の様な薄紅色の彩色がグラデーションに施されるという実に日本的な印象が強い機体であった。

原作に登場する第二、第三世代のＩＳとは違い搭乗者の顔が大きく隠されるデザインの秋桜だが、その写真に写る搭乗者は、見る者が見れば直ぐに〝織斑千冬〟だと判断出来る。

秋斗が現金で５００万円を用意し、千冬がＩＳ操縦者試験を受ける事を決意した日から半年が経った現在。千冬は日本初の民間から輩出された〝ＩＳ操縦者〟という立場に成り上がっていた。

操縦者試験という狭き門を潜った千冬は、初の国産ＩＳ〝秋桜〟の専属の操縦者に選ばれ、結果、現在は高校を休学して時間の殆どを倉持技研での仕事に費やすようになった。

今や所属する技研のテストパイロットという立場にある為、並みの会社員を遥かに凌ぐ高給取りだ。

「これで収まるところに収まったっていう、感じかな？」

３年前の過労死寸前な草臥れきった様子からすると、今の千冬は大躍進した結果の様に見える。しかしこの先の未来で、更にその名が世界に広まるのだから末恐ろしい。

そして千冬の躍進のお陰で間違いなく織斑家の生活は豊かになっ

た。加えて秋斗の方でも、玩具会社と提携した『白騎士のガレージキット』の販売が来年の春に始まる。既にその原型は出来上がり納品済みなので、今後はよほどの事がなければ織斑家が傾く事はないといえる。

つまり秋斗が3年前に決意した『織斑家救済』という願いは、現時点で果たされたと言えるのだ。

後は自然と、時が原作の頃に移ろい行くのを待てば良い――――。

故に秋斗は、深々と安堵の吐息を漏らして、訪れた『休息』を心から満喫する日々を送っていた。

秋斗は箱単位で購入した缶コーヒーに舌鼓を打つ。前世から愛飲していた味を堪能した後、飲み終えた空き缶を部屋の隅に置いてある『空き缶専用のゴミ箱』に投げ入れる。そして左手で秋斗はもう一本、ダンボールから新しい缶を取り出した。

「少し前は缶コーヒーを買うのすらも贅沢だったんだがなぁ」

秋斗は小さく笑った。

今では『５００万円事件』の影響で、一夏も千冬も秋斗が個人で持つ結構な額の預貯金の事は知っている。故に缶コーヒーを箱で買っても、無駄遣いするなという小言を貰う程度で済む。

先の一件で失ったものは確かにあるが、代わりに秋斗は『異端』という正にあるがままの評価を得た。つまり家族の間でも、〝普通〟や〝一般〟と言う煩わしい枠を気にせず、より素の状態を晒せる様になったのだ。

密かにストレスの原因だった他を欺く窮屈さ。それを家の中で感じる必要が無くなったある種の精神的な自由は、何物にも代えがたい安寧を秋斗に与えていた。

「――――おい、秋斗。お前コーヒー飲みすぎ。身体に悪いぞ？」

プルタブに指を掛けた矢先。秋斗は脇からそんな小言を受けた。

振り返ると右手に豚のしょうが焼きの皿を掲げた一夏が立っていた。

「ほら、飯出来たから、机の上を片付けろよ」

「お前は一々煩いねェ。小言言わないと死ぬのか？　マグロか？」

「どうだっていいよ。ほら、早く動く動く！」
「はぁ～あ。ったく」
一夏の言葉に溜息を吐きながら、秋斗は食卓の上を片付け始めた。
「――――千冬姉は残業だって？」
「あぁ。さっき電話でそう言ってた。だから遅くなるってよ。まぁ、流石に朝帰りはないと思うぜ？　もしそうだったら明日は赤飯でも焚いてやれ」
「赤飯？　何で赤飯なんか焚くんだ？」
「ま、そのうち分かるさ」
兄弟２人で食卓を囲む。
この家で秋斗と一夏の２人で囲む食卓はそう珍しいものではないが、逆にこの半年で食卓の彩りが大きく変わった。少なくとも肉が毎日テーブルに並ぶようになった。
以前は電気やガスの料金に一喜一憂し、閉店間際のスーパーによって、わざわざ廃棄前の食材を数グラム単位でより多く得ようとしていた。
ソレから考えると、随分と人並みの贅沢が許される様になったと秋斗は思う。
また大きく改善された食生活の影響からか、少しずつ一夏の身長が、同い年の男子の平均を上回りはじめていた。
「なぁ、最近、千冬姉の残業多くないか？」
「まぁ、ようやく仕事が軌道に乗り始めた頃だろうからな。これからたぶん、もっと忙しくなると思うぜ？」
「……そっか。あんまり前と変わってないな」
「ぁん？」
『５００万円事件』を境に、すっぱりと全てのバイトを辞めた千冬であるが、かといって家に居る時間が長くなったわけではない。少し前は勉強と試験、そして最近は仕事。故に休日に家を空ける回数は、以前とそれほど変わっていないのだ。
バイトを辞めた結果、家族の時間がもう少し増えると密かに期待していた一夏は、現状が少し寂しいようだ。

と、一夏の吐息の中にそんな感情を感じた秋斗は、悪辣に笑いながら一夏に尋ねた。
「どうした、いっくん。ちーちゃんがいなくて寂しいのか？」
「違う！　っていうか、お前、束さんの真似はやめろって千冬姉に散々怒られただろ？　まだ懲りてねーのかよ」
「懲りるわけないだろ？『男には、例え負けると分かっていても、戦わなければならない時がある……』って言葉を、俺はハーロックさんから学んだからな。容易く姉貴の思い通りにはならんよ。ノートＰＣ（トチロー）の死を無駄にするわけにはいかんし」
「……」
『５００万円事件』の際に千冬に見せた秋斗の振る舞いは、正に『第二の天災』と呼ぶに相応しい。故に千冬は秋斗に強い影響を与えた張本人として、束に真っ先にその怒りの矛先を向けた。また秋斗もその際に千冬の怒りの一端を受ける事になり、結果として苦楽を共にしたノートＰＣ――通称『トチロー』という、かけがえの無い〝相棒〟を失った。
秋斗はその際、前世でゲームをやり過ぎた友人が親にプレステ捨てられ、嘆いていた事件を思い出した。
生まれ変わった今になって、そんな前世の友と悲しみを分かち合う事が出来る事を知った秋斗は、今でも件の事件を思い出して感慨深い吐息を吐く。
「――今、思い出しても悲しい事件だな。良い相棒だったんだが」
「くっだらねぇ……」
秋斗に向って、一夏は呆れた様子で深々と吐息を漏らした。
「千冬姉にパソコン取り上げられたのは、完全に秋斗の自業自得だろ？　やり過ぎたんだよ、お前は」
一夏は千冬を髣髴とさせる清廉な様子で、きっぱりとそう断言する。
その調子を見て秋斗は少しばかりイラっとした。
「……良い子ちゃん振りやがって」
「なんか言ったか？」

「何にも」
一夏の難聴振りを確かめるようにボソリとそう零した秋斗は、次の瞬間にはあっけらかんとした調子を取り戻し、そしてその影で小さく息を吐いた。
現在、秋斗の手元には束作のノートPC（トチロー）が無い。先の一件以来、千冬がどこかに隠してしまったからだ。幸いにしてパスワードがなければ中を開く事は出来ず、流石に千冬も破壊まではしなかったのでいつかは取り返すことが出来るだろうが、それでも失った事実は大きく、秋斗に凄まじい痛手を与えたのは事実である。
とは言え、バックアップはクラウドの方にあり、そして同時に密かにだが、秋斗は別の形で失った力を取り戻していた。
「――――実は第二第三の〝トチロー〟が『既にある』と言ったら一夏はどうする？」
「頼むからもう、本当に懲りてくれよ！　秋斗！」
悪辣と笑う秋斗の言葉に、一夏は心から叫ぶようにそう訴える。
が、秋斗は小さく笑うばかりでその訴えを飄々と流した。
「まぁ、俺の事は一端置いておくとして、だ。一夏の方の準備はどうよ？　そろそろだろ。例の剣道の大会は？」
「ん？　あぁ、その話か」
食事の途中で、秋斗は話題を変えるように、現在一夏の傾倒する修行について尋ねた。
修行と言うと仰々しいが、今の一夏にはそんな言葉が相応しく思える。それ程までに、今年の大会に向ける意気込みは凄まじいのだ。
無論それは箒の側にも同じ事が言える。
「もちろん抜かりないぜ。今年は絶対箒に勝つつもりだからな」
一夏はニカリと、自信の溢れる笑みを浮かべる。
「そうか。ま、勝ち逃げされないように頑張れや」
「応とも！」
一夏は気合を入れるようにその日は茶碗に三杯もお代わりをした。

☆

それから一週間ほどの時間が過ぎ、昨年千冬が己の人生を見定めたのと同じ秋の剣道大会が今年も開かれた。

例年と違うのはエキシビジョンとして柳韻の居合いと剣舞が特別に披露された事である。

去年と同様に観戦席に座る秋斗は、自前で買ったタブレット――〝トチロー2号〟を手に、その居合いと剣舞の模様を動画で撮影して、せっせとブログに上げた。

また千冬は大会には参加しないものの、昨年の覇者としての言葉を求められ、同じ高校に通う剣道部のメンバーに叱咤激励を送っていた。

織斑、篠ノ之の両家にとって一番のメインイベントである一夏対箒の試合が始まったのは、それからしばらく時間が経った後――それは図らずも決勝の舞台で行なわれる事になった。

「……去年の雪辱は果させてもらうぜ。勝ち逃げなんて、絶対させてやらねーからな！」

「望むところだ。貴様にはこれまで散々辛酸を舐めさせられたからな。今回も私が勝たせてもらう！」

壇上に向う途中で一夏と箒はそう言葉を交わした。

一夏は箒が引っ越す事を知って以来、この日の勝利を目指して修練に励んだ。

また箒は引っ越す事に大きなショックを受けていたが、今日の為に厳しく自分を追い込む一夏の覇気に当てられ、その想いとライバルとして恥ずかしくないよう一層剣に励んでいた。

御互いのそんな様子を近い位置で見ていた関係者一同は、そんなどちらもを強く応援する。

――そして勝負が始まり、一進一退の攻防が続いた。

一夏の踏み込みを箒は鋭く捌き、更に隙を見て果敢に返す。

一夏の体格がやや大きくなった事で一目には箒の方が不利に見えるが、その程度は些細な事だと箒も気迫は微塵も一夏に引けを取らない。そして経験の差が出たのか、鋭い篭手が一夏を穿ち、箒が一本目

を先取した。
審判の旗が揚がると会場が湧いた。
とても小学生とは思えぬ息を呑む攻防がそこにはあったからだ。
「ふぅ……」
面の下で一夏は吐息を吐く。
理解はしていたが、箒は強かった。それが改めて理解できて嬉しいという気持ちが一夏の胸に湧く。
同時に、故に負けたく無いと言う憤りが湧いた。
「絶対勝つ……！」
一夏の執念が届いた様に、2本目は一夏が取った。
あえて肩に打ち込ませて密着したところを強引に腕力で弾き、その隙を突いて胴で薙ぎ払ったのだ。
三本目――――。
会場が静まり返る中で、一夏と箒は同時に動いた。
御互いが隙を誘い巧みな連続技で翻弄する末に、箒と一夏の面が交錯した。
そして白の一夏の側の旗が上がった――――。
「――――これで漸く引き分けになったな？　いっその事、帰ってから決着つけるか？」
「流石に今日はもう勘弁してくれよ……」
大会が終り、その帰路の途中で秋斗は一夏に尋ねる。
一夏は首を横に振りながら勘弁してくれと吐息を吐いた。
そんな一夏の様子を見て、箒が鼻息荒く告げる。
「私は一向にかまわんッ！」
「いや、だから勘弁してくれって、箒」
「軟弱な事を言う……負けるのが怖いのか？」
「お前だって、フラフラじゃねーか？」
「っ!?　そんな事は――――」
「あるだろ？」
一夏は呆れた様子で箒に言った。
箒はどこか寂しそうで、焦りを抱えているようにも見える。

（――――時期的にそろそろか）

秋斗は口に出さずに、内心で密かに思った。

箒が転校する日は直ぐそこまで差し迫っている。冬を迎える頃にはこの日本のどこかに引っ越すという話が出ているものの、詳しい事は秘匿されている為、具体的な日取りは未定――。極端な言い方をすれば、大会の終った今日、もしくは明日の内にでも、どこかに引っ越しかねないのが今の篠ノ之家の状況だ。現時点でも篠ノ之道場にはかつて世話になった多くが挨拶に訪れており、また学校では送別会に近いお楽しみ会が一夏と箒のクラスで開かれたらしい。

そして既に秋斗も一夏も箒にはそれぞれ餞別を贈っている。

秋斗は懸賞で当たった『目覚し時計』。そして一夏の方はネタなのか本気なのかいまいち判断がつかないが。自家製の『食べるラー油』を贈っていた。

流石にもう少し形に残るものにした方がいいのではと気を利かせた秋斗は、後日一夏にリボンを贈らせに走らせた。

「――――と、悪い。着信だ」

秋斗は自前で買ったスマホに掛かってきた通話の知らせを受けて、一夏と箒から少し離れた。

「もしもし？」

『やぁ、やぁ、やぁ、元気にしてたかな？　貴方の束さんだよ♪　今、あっくんの後ろにいるの』

「……は？」

秋斗は思わず電話の主――束の言葉に振り返った。

すると先ほど通過した電柱の影に、見覚えのあるメカメカしいウサギ耳のカチューシャをつけた束がそこに――――居なかった。

『冗談だよ♪　まだまだ修行が足りぬようじゃな。もっと精進しなきゃダメだよ？』

「……ご忠告痛み入るぜ、お師匠。で、どうしたんです？」

秋斗は溜息をひとつ吐き、電話を続けながら歩みを再会した。

『５００万円事件』の影響で束は織斑家に出禁となっている。加えてノートＰＣ『トチロー１号』が千冬に没収されたので、実は秋斗と

束がこうして話すのは意外に久しぶりの事であった。
『ん～まぁ、用件って程じゃないだけどね。ちょっと今から言う住所を覚えて欲しいのさ』
「住所？」
『そう。そこにあっくんに渡したいモノが置いてあるんだ。次の指示はそこに在るから、時間がある時にちゃんと自分で行って確かめるんだよ？　ちなみに拒否はダメだからね♪　拒否したら自動的にエッチな手段でお金を稼いだ事をちーちゃんにバラシマス。ソレが嫌ならちゃんと先生の指示に従いなさい。それでこの間の事は許してあげる』
それは余りに唐突な提案だったが、秋斗に拒否権は無かった。
ただでさえ『５００万円事件』の時に、秋斗は束に大きな借りを作ったのだ。
弟子の尻拭いは師匠の役目とは言え、盛大に千冬に対するアフターケアの大部分を束に分投げた身としては、例えエロ同人で稼いだ云々の言葉が無くとも、秋斗は束の頼みを了承するつもりだった。
秋斗は吐息を一つ吐く。
「……別にそんなに釘刺さなくても。で、とりあえず俺は時間を見つけて早い内にその住所とやらに行けば良いんですかい？　良く分からんけど？」
『そう言うことだね。じゃ、今から言うからちゃんと覚えるんだよ～』
秋斗は電話越しに聞かされる住所を脳裏に刻んだ。
束の脈絡の無い申し出はコレが初めてでは無かったので、秋斗はこの時はそれ程大した案件ではないと高をくくっていた。
しかしこの時の会話が、後の世に影響する難題を正に吹っ掛けられたその瞬間だと知るのはそれから間もなくの事だ。
――――そうして秋の終わりが近づく頃、束を含めた篠ノ之の一家は、織斑家の一同の前から姿を消した。
織斑秋斗の原作にたどり着く為の物語は一応の終息を迎え、そして時の移ろいと同じく、次の段階へと進み始めた。

第二章

18　束の『難題』　前編

インフィニット・ストラトス。

それは全地形に対応する『夢のマルチフォームスーツ』として誕生した、宇宙開発や宇宙探査を目的とする〝未来への翼〟である。

開発者、篠ノ之束が手ずから製作した『白騎士』の登場より3年。まず日本の倉持から国産の第一号『秋桜』が誕生。続いてアメリカ、ロシア、ドイツ、フランス、イングランドという、名だたる世界の先進国が、次々と独自のＩＳの開発に成功した。

それら多くのＩＳは後に〝第一世代〟と称される。

そしてまた、そんな第一世代の誕生ラッシュを皮切りに、世界の技術は大いに進歩したと言えるだろう。

しかし、そんな風に数多くの技術者が血眼になって研究を重ね、人々の生活に密接な形で強い影響を与えたＩＳには唯一、どうしても解き明かせない『ブラックボックス』が存在した。

ＩＳをＩＳ足らしめるモノ――『ＩＳコア』である。

それは所謂、普通の機械の機関や動力部とは一線を画した代物で、比喩をもってしかその説明が出来ない程に複雑怪奇。言うなれば、『人工的な生命体』にして、『模造された機械の魂』と呼べる代物だ。

ソレだけが唯一、世界は解き明かせなかった。

現時点で『ＩＳコア』を独自に産み出し、それを有する技術を保持する者は世界で唯一、ＩＳのパイオニアにして〝天災〟と称された科学者――篠ノ之束のみとされている。

ソレを証明するかのように、独自にコアを研究して自社製のＩＳコアの量産に拘った多くの技術者や企業は、ここ数年でその勢いを大きく削がれていた。また一向に解き明かせぬコアの複雑さに労力を割かれ、ＩＳ本体のフレーム開発という分野で大きな遅れを取った。

そんな流れの中で、かつては老舗と呼ばれた大手の企業が衰退し、逆に中小に過ぎなかった子会社が隆盛すると言う現象が、世界中の至

る所で散見された。
また投資を生業とする人間にもその影響は大きく、一晩で莫大な財を作った者も在れば、逆に一晩で命を絶たざるを得ない程の負債を手にした者も存在した。
ＩＳという強烈な光は、世界の中にそうした闇も同時に作った。
――――故に、だろうか？
束は『ＩＳコア』について一切、その情報を明かさなかった。否、明かしたが、あえて凡人には理解出来ない複雑怪奇な説明のみしか行なわなかった。――――そしてＩＳの開発ラッシュに沸く世界中を尻目に人知れず世界から姿を消した。
束が３年程移り住んだ人工島の研究室で作られた総数５００個のＩＳコア。それを残して、束はまるで初めから居なかった様に忽然と歴史の表からその姿を消した。
残された『ＩＳコア』と、『世紀の大天災』の消息については、世界中で様々な憶測と陰謀論が叫ばれたが、遂に誰もその真意にたどり着く事は出来なかった。
この世でただ一人、天災が弟子と慕った〝少年〟を除いて――――。

☆

「――――〝此処〟、がそうなのか？」
朽ちて捨てられた工場跡地。有刺鉄線で厳重に入口を封鎖されたその場所を訪れた件の少年は、手にしたスマホに表示させたメモを片手に思わず首を傾げた。
年の頃は１０に差し掛かったばかり。鬱蒼とした黒髪を無造作に流してゴム紐で結い、平均的に見て十分に整ったと言えるその面立ちには猛禽の様な強い眼光と年齢に不相応な深い隈。
磨けば光る素材にも拘らず、まるでそんなモノには興味がないと言わんばかりに、黒を基調にした簡素で質素な衣装に身を包んだその少年の名は、〝織斑秋斗〟と言った。

秋斗は再度、手にしたスマホのメモを確かめる。が、やはり住所に間違いは無く、この廃工場が〝今度の目的地〟のようだ。
（もったいぶって今更、博士は何を見せてくれるのやら――――）
秋斗はそんな思いで小さく溜息を吐くと、実にかったるそうな足取りで封鎖された入口の有刺鉄線を潜り、その敷地に足を踏み入れた。
その直ぐ脇に見つけた入口の立て札には、土地の所有者である〝宇佐美アリス〟の名と、進入禁止の警告札が掛けられてあった。
秋斗がこの廃工場を訪れたのには理由がある。遡る事一年ほど前だ。それは師と仰いだ〝天災〟篠ノ之束が、その失踪の数ヶ月前に残した『ある伝言』が切っ掛けであった。
『渡したいモノがある――』
その時の束は単刀直入にそんな言葉を残して、電話越しの秋斗にある場所の住所を伝えた。
その最初の目的地は近所の畑。
秋斗が電話から二日後に件の場所に向うと、その畑の側溝の脇にブリキで作られた〝人参〟の模型が置いてあるのを発見した。
人参の模型は中が空洞で、そこには束直筆の手紙と奇妙な機械のパーツがあった。
あっくんへ
今、この手紙を読んでいるという事は、どうやらちゃんと約束を守ってくれたようだね。
と、言う訳で次の指示に移らせてもらおう♪　あ、でも安心してよ。ユグドラシルの葉っぱを探して来いとか言う無茶を言うつもりはないからね？
有象無象の凡人は〝天災〟とか呼ぶけど、束さんもそこらへんの常識は弁えてるよ。
きっとあっくんの事だから今頃「面倒くさ……」とかって思ってるんでしょ？
当然、そんな事は束さんも分かってるつもりだよ。でもゴメンね？
あぁ、それと以前使ってた〝通話ソフト〟のログにＵＲＬを貼ったから、それの確認もお願い。

今、ＰＣなかったんだっけ？　まぁ、でも問題はなかろう！
エッチな手段で一杯稼いでたんだから、新しいのなんて直ぐに買えるよ。
捨て値のパーツで自分で組んでも良いしね。でも、ちーちゃんから返してもらう方が良いかも。
あぁ、それと――――――――
いい加減、「本題に入れ」って？
仕方ない。そうと言われちゃ仕方ない。詳細は二枚目に記載してあるよ！
天才の束さんより
ＰＳ。この手紙は最後まで捨てたらダメだよ？
それが最初の手紙である。
そして同封してある〝二枚目〟に記載された住所。『その位置から東方向に３８６ｍ先にある公園の西入り口から右手に２本目の桜の根元』に向うと、秋斗はまた別の束の手紙と、機械部品を発見する事になった。
そんな風に束が次々指示する〝宝探し〟染みた遊びにつき合わされたのが、この一年の秋斗である。
失踪した〝天災〟篠ノ之束が残した『遺産』の調査。
大げさに言えばそんな言い回しも出来るが、実際には下らない手紙と、ネットでも容易に取り寄せられるような数百円程度の機械部品が見つかるばかりである。流石に秋斗も〝何かしらの意味〟がなければとても付き合ってられないと思い、そろそろこの茶番に飽き始めていた。
そして根気強く束の茶番に付き合ううちに、秋斗は５年生となっていた。
世界各国がＩＳの独自開発に成功し、来年を目処に国際ＩＳ競技種目モンドグロッソが開かれようとしている頃。
そうして最後に辿りついたのが、この廃工場であった。
「おじゃましま～す」
秋斗は飄々とした足取りで、朽ちた工場の建物内部を散策した。

トタンの屋根は風化して一部が崩れており、雨漏りの所為で残された大型機械は錆び付いている。他人の気配は当然無く、雰囲気は霧の中を歩くホラーゲームを髣髴とさせる程。とはいえ、並みの小学生ではない異端者――秋斗が、その程度の雰囲気に動じる事はなかった。

故に秋斗は欠伸交じりに内部を探索する。

――そうしてしばらくすると、秋斗のスマホが謎のメールを受信した。

「んぁ？」

メールに宛名はなかった。しかし題名部分に短く、『2階、女子トイレ　個室の3つ目♪』と記されていた。

流石の秋斗も〝この状況〟で匿名のそんな通知を見て平静にとはいかなかった。

秋斗は一瞬背筋に冷たいものが走るのを感じた。が、しかし文面の最後の〝♪〟を見て直ぐに送り主を想像できた為、程なくして安堵の吐息を吐いた。

そして秋斗は指示通りに女子トイレへと向った。

既に廃屋と化しているので、トイレは既に水の流れすらも止まっている。

秋斗はそんな様子を眺めつつ、指示にあった個室の戸を開く。

すると中には、洋式の便器が一つ――。

「……此処か？」

秋斗は半信半疑で便座を上げ、次にタンクの蓋を持ち上げた。

タンクの中には鈍い光沢を持つ、掌に収まるような金属質の〝ナニカ〟が転がっていた。

「――なんだ、こりゃ？」

ソレは今まで束から送られたパーツ類とは一線を画す奇妙な素材の様に見えた。

思わず首を傾げた矢先――。

秋斗のスマホが再び鳴った。

「もしもし――」

『やぁやぁやぁ！　遂にそこまで辿り着いたんだね！　おめでとう！

流石、束さんの弟子なだけあるよ』

「……博士か？」

『イェ～ス。束さんだよっ♪　一年ぶりぐらいかな？　元気してたかな？　かな？』

「……どこかで見てるのか？」

数ヶ月前に失踪したと世間で騒がれた束。その人物からの直接の連絡に驚きつつ、秋斗は見越したようなタイミングでの連絡に、思わず周囲を見渡した。

『いや、直接には見てないよ。だけど張り巡らせたセンサーと、置いておいた〝ソレ〟に触れたでしょう？　その反応を見て、遂に来たか！　と、確信したのさ♪』

束はそんな秋斗の様子を察したかのように、種を明かした。

「センサー？　まさかさっきのトイレに行けっていうメールも――」

『そ。予めその廃墟に仕込んでおいたセンサーから送られたものだよ。おっと、驚いてもらっちゃ困るよ？　その程度の仕掛けなんて大したモノじゃないしね。それにそもそもその土地は、〝今日の日の為に〟束さんが買っておいた場所だし』

「……そっか」

『ありゃ、あんまり驚いてくれないねぇ。久しぶりにしては淡白な反応でちょっと寂しいよ。一体、どうしたの？　具合悪いの？』

「いや、相変わらずな博士で安心した所だよ」

秋斗は万感の思いを吐き出すように、短く返した。

篠ノ之一家が地方へ転居したのを皮切りに、程なくして束も世界からその姿を消した。原作でもその通りの展開になっていたのを知っていた秋斗は、世界中の人間に比べてその失踪に対する驚きは少なかったが、逆にこうして脈絡の無い連絡が自分に届くのは意外に思えた。

それだけ懇意にされている事をありがたいやら、不安にやらと思いつつ、秋斗は尋ねた。

「――で、この丸一年近く掛けた茶番は一体、何すか？　いきなり

失踪した理由とか、世間じゃ色々騒いでるけど、そんな事はどうでもいいから、流石にそろそろこの〝茶番〟の理由を説明してはもらえませんかね？」

秋斗は便座の上に腰を下し、そして先程見つけた謎金属を掌で転がしながら、問う。

対する束は電話の奥で苦笑を浮かべたように声に小さく吐息を混ぜた。

『茶番とは酷いなぁ、結構真面目に考えたのに。まぁいいや。で、あっくんは最初の手紙に記した〝ＵＲＬ〟の中身は見てるよね？』

「一応」

秋斗は出発点となった最初の手紙に同封してあった指示を思い出す。

その指示は、まだ織斑家の救済に秋斗が四苦八苦していた頃、連日束と会話して過ごした音声通話ソフトのチャットログに残されたＵＲＬを見ろと言うものだ。

件のＵＲＬはストレージサービスのもので、秋斗はそこで、〝何かしらのプログラムコード〟が書かれたＺＩＰファイルをダウンロードさせられている。ソレを読み解く為に、千冬にマジ土下座をしてノートＰＣ（トチロー１号）を返却して貰ったのだ。なのでよく覚えている。

ふとそんな風にこの一年を振り返る秋斗を見越して、束は言った。

『――――つまり、コレで〝材料〟は全て揃ったと言うわけだ』

「材料？」

『そう。これからあっくんには束さんの弟子として、一つ〝課題〟に取り組んで欲しいのさ。と、いうより今までの〝茶番〟は全てこの時の為の準備期間だね。あっくんにはこれから、たった今手にしたその〝ＩＳコア〟を育てて欲しい』

「……は？　ＩＳコア？」

秋斗は思わず手の中に収めた謎金属に視線を落とした。

篠ノ之束が失踪した事で、もはや世界に５００しかないと言われたＩＳの心臓部。それが今、この瞬間に己の掌にあるという事実を聞かされ、秋斗は思わず眼を見開いた。

『あっくんに今日までの面倒を積み重ねて貰ったのは、世間を欺く為だと思ってくれて良い。まぁ私が失踪したのと同じ理由だよ。手元にあるって事が知られると実に面倒くさいんだよねぇ……』

「それはどういう――――」

『私の中で、実は既に〝ＩＳ〟が男に反応しない理由が分かっている〟と言ったらどうする？　世間に身を晒している状況でその条件を発表したら、今の世間はどうなると思う？』

「……は？」

束は声の中に少しばかりの寂しさと苦悩を滲ませ、そんな風にぼやいた。

『――――さて、あっくん。コレが最後の伝言だよ。今まで渡した手紙の内、最初の一枚は全て〝縦読み〟。そしてそれがパスワードだ。ランダムに解除コードが変わる様になってるから、今までの手紙の中のどれが今の〝当たり〟かは分からないけど、ソレを使って開いた先が、『白騎士』の生まれた場所――束さんの旧ラボ。そこであるモノを作ってもらう為に、あっくんには今日まで動いてもらったんだ』

束はそんな風に、ある意味で最後となる言伝を秋斗に送った。

『面倒かもしれないけど、私が信用できる男の子はあっくんしか居ない。だから、ごめんね？　コレはあっくんにしか頼めない仕事なんだ。どうかな？』

「……とりあえず、話が見えてこないからもう少し具体的に説明してくれ」

秋斗は小さく吐息を吐き、そして言葉の続きを促した。

☆

５００作られたＩＳコアはその管理を超国家機関、国際ＩＳ委員会が行なっている。作られたコアは国土の広さや人口や技術力の優劣で配布数が取り決められ、ソレを使う事で、世界はＩＳを独自に開発した。

ＩＳは世間に着実に普及を始めている。

傍から見れば、それは発明家としては大成功の部類だと言える。
が、しかし束には、そんな世間の様子が〝想定〟したＩＳの未来に繋がらない道筋を辿っていると思えた。
そんな風に秋斗は、束から失踪した真意を聞かされた。
『――――５００って数は、まぁ、競技には丁度良くて戦争利用するには心もとない数だ。だからココらが潮時かなぁっと思ってね。男が乗れない理由を明かすのもそうだけど、これ以上はＩＳコアの生産の目処が立たないって事になればさ、そんなに軍事軍事と言われないでしょ？』
与えられた人工島の研究室。世間に繋がるその場所に居る限り、束は確実にＩＳコアの生産を今後も〝せっつかれる〟。だからこそ一時的に世間から身を隠したと束は言った。
宇宙開発を目的とするならば５００あれば十分。
より必要であるならコアの増産も受け入れるが、しかし〝今の世間の流れ〟でこれ以上のコアの生産は、ＩＳの本来の目的から外れかねない。
そうした理由を、束は珍しい比喩を用いて端的に語った。
『別に束さんは〝アルフレッド・ノーベル〟になりたいわけじゃないしね』
「ノーベルって、確かダイナマイト作った発明家だったっけか？」
『そ。そのノーベルであってるよ』
秋斗の意見を束は苦笑混じりに肯定した。
アルフレッド・ノーベル。それは〝ダイナマイト〟を作り出した発明家にして、世界平和を尊んだ偉人である。
彼の生み出したダイナマイトは元々、鉱山開発や開墾作業という現場で人々の暮らしに役立つようにという希望を持って生み出された。が、しかし結果は性能故に世界中の戦争に利用されて武器と化した。
ノーベルは晩年になってもダイナマイトの発明を悔やみ、そしてダイナマイトの発明で得た莫大な財を使って、〝ノーベル賞〟という人類の平和と発展を称える賞を作り、没した。
珍しく他人の名前を口にした束は、そんな彼の偉人の様に〝成りた

くない〟という自身の本音を秋斗にだけ吐露した。
「……ＩＳも何れダイナマイトに等しくなる、か」
宇宙開発という本来の目的を忘れて、ただの一つの武器、抑止力と化す。
その流れは確かにダイナマイトに等しいと秋斗は思った。
そして、そうした流れに釘を刺す為の失踪であり、コアの生産数の打ち止めだと束は言った。
秋斗は不意に、原作でＩＳが〝超兵器〟として描かれている描写を思い出した。
（そういや、原作じゃドイツのＩＳ特殊部隊のキャラが居たっけな。それにアメリカ製の〝ゴスペル〟だったか――――）
原作のインフィニット・ストラトスは結局のところ、ＩＳを兵器にしたいのか、宇宙に飛ばしたいのかがまだ不明だった。
そして原作のその時期の束はある種の『狂人』にも似ており、享楽的に事件を起してＩＳを自ら戦わせているようにも思えた。
その真意を今現在の秋斗が推し量る事は出来ないが、しかし後に、今の束がそうなる事を思うとなぜだか少し悲しくなった。
保持する性能故に関心が軍事に向くのは仕方がない。
事実、『白騎士事件』でもその性能が大きく取り沙汰されている。
未知より、目先の利――――。
まだ世間の小学生の方がＩＳに対して夢を見ている様な気がして、秋斗はそんな〝現実〟の有り様に今生でも溜息を吐く。
『――――まぁ、そう言うわけだから束さんは失踪したわけですよ♪たった５００しか作れないんじゃ、まかり間違っても〝兵器として優れてる〟なんて寝ぼけた事、言えないしね』
束の声には諦観のような色が篭った。
何時に無く、束にしては真面目なその声のトーンが、秋斗には不思議と哀しんでいるように聞えた。
そしてそんな束の言葉を聞く最中、秋斗は不意に前世の事を思い出していた。
（……そう言えば、割りと早死にしたっけな）

おぼろげだが、秋斗はかつて〝夢〟に生きていた。その人生を総括すると、『好きなように生きて、好きな様に死んだ』とも言える。

やりたい事、学びたい事を軸に生きた。その結果が今日に続く〝天災〟の弟子だと思うと、秋斗は〝今〟の状態がなるべくして成ったとさえ思えた。

そして同時に思う――――。今生はどう生きようか、と。

そんな風に秋斗は自問するその傍らで、束にも問うた。

「――――なぁ、博士は今の世界をどう思う？　面白いと思うか？」

『……うん？　いきなり、妙な事を聞くね。そりゃあ不満はいっぱいあるけど、そこまで嫌じゃないよ。どちらかと言うと〝面白い〟って思ってるよ？』

「……そっか」

束のそんな返答を聞いて、秋斗は思わず小さな笑みを浮かべた。

「……事情は大体分かった。博士の選んだ事だ。俺はソレで良いと思う。――――で、俺に何を手伝って欲しい？」

『手伝ってくれるのかい？』

「あぁ。今更手を引くってのも寝覚めが悪い。俺に何が出来るかまでは保証してやれないけど、それでもいいなら、手伝ってやるよ」

秋斗はそんな風に言葉を返して、手の中に収めたＩＳコアに視線を落とした。

コレまでは原作にたどり着く為に生きてきたが、たどり着いた先でも人生は続くのだ。

その時になって、今の自分がどうしているのかは分からないが、少なくとも所謂〝普通〟の中に納まる気がしない。

更に言うと、だ。

「博士とつるんであれこれ企むのは結構面白いからな。少なくとも、俺は退屈はしない。博士はどうよ？」

『そうだね。束さんもそれは同じかな？　だから協力してくれるのは本当に嬉しいぜ！　いやぁ、流石あっくんだね！　頼もしすぎる！』

「……煽てても期待に添えるかはわからねぇけど、な。まぁ、〝退屈〟はさせないつもりだ」

束は秋斗の了承の返事を聞いて、そんな風に喜色を上げた。
その声の色は原作からイメージされる束とは大きく違っていた。
そんな風に、今生の〝友人〟に与えた自身の影響を鑑みて秋斗は、寧ろこのままで良いと改めて思う。
『斜に構えて世界を諦観する』なんていう遅まきの中２病を煩う原作を思えば、今の方が遥かに好ましい。
故に、それから程なくして秋斗は自宅に戻った。そして必要な道具や材料、『宝探し』で得た束の手紙と各種パーツ。手元に戻ったノートＰＣ（トチローー１号）を手に、秋斗は再度家を出発して、束が最後の目的地に示した〝旧研究ラボ〟に足を運んだ。
篠ノ之神社から南に歩いて５００ｍ先――そこはＩＳコアを見つけた廃工場と同じく、打ち捨てられた倉庫があった。
秋斗は朽ちた外観に似合わない厳重な鋼鉄の扉と電子ロックの前に立ち、パスワードを入力した。
『愛と勇気とＩＳ愛して』
時間によってランダムに正解が移り変わる為、正解を見つけるのに少し時間はかかったものの、秋斗はついにパスワードを探り当てる。
「まぁ、確かに内容を聞く限りじゃ、一夏や姉貴（千冬）には無理な話だ。俺にしか出来ないって言うなら、やってみるか」
決意を新たに、秋斗はＩＳの生まれた『始まりの地』に降り立った。
そこで秋斗は、男の為の〝ＩＳ開発〟という未曾有の『難題』に取り掛かった。

19　束の『難題』　後編

ＩＳコアが男に反応しない理由。否、反応はするが女の干渉に比べて著しく〝反応が薄い〟理由については、早々にその原因が束によって突き止められていた。

そもそも男女の違いと言うのは何処に有るのか？

身体機能の違いや思考の差異。それら男女の違いを発現させる因子。

それを突き止めれば、自ずと答えは出ると束は言った。

「――ここまで来ると、もはや機械じゃねぇな……」

束が秋斗に譲り渡した旧研究秘密基地。そこはかつて束が白騎士を生み出した秘密ラボである。

秋斗はかつて束が座った椅子に腰を下して、大きく背筋を伸ばした。

《吾輩は猫である（名前はまだ無い）》という基地を統括する〝自立コンピューター〟に記録された白騎士の開発情報。その記録を読み解いた秋斗は、ＩＳという代物に対してそんな感想を抱いた。

それから程なくして秋斗は、束からの依頼を遂行するにあたり別途でラボに送られた『ＩＳコアに関する束独自の考察』のレポートに眼を通す。研究の前提として量産された５００個の原点、つまり〝オリジナル〟と称される『白騎士』本体に搭載された純粋な『ＩＳコア』について知る必要があったからだ。

そうして束の考察を読んだ秋斗は、ＩＳコアが『まだ性別の判別出来ない妊娠初期段階の〝受精卵〟』に近いと知り、同時に自ら最適な道筋を思案して〝自己進化〟する擬似生命である事を理解した。

秋斗はＩＳという存在がもはや〝機械〟の範疇に収まらないと判り、故に呆れの吐息を吐いた。

ＩＳの荒唐無稽さは産みの親（篠ノ之束）に良く似ている。

そして同時にその有り様は篠ノ之束の天才性に等しく規格外。

（とてもじゃないが、流石にあの人（束）の弟子ってのは自惚れが過ぎたな。コレが本物（天才）って奴か……）

秋斗は改めて〝天災の弟子〟を名乗る己の不相応さに苦笑がこぼ

れた。
一時期は束から直接〝知識〟を教え込まれた。
それ故に多少は並の人間よりも賢しくなったという自覚があった。
が、しかしその自信はたった今、木っ端微塵に砕かれたのだ。
「流石師匠、頭おかしいだろ？　……御見それしたぜ、まったく」
改めて清々しいほどに己が〝凡人〟であると理解した秋斗は、一息吐いた後でようやく己の役目を果すべく行動を開始した。
幸いにして秋斗に求められている役目はそれ程に難しくはない。
とはいえ、その一端を任せられる条件を聞けば納得の仕事だ。
ならばせめて仮にも〝弟子〟を名乗った以上、その仕事だけはしっかり完遂してやろうと、秋斗は気合を入れなおした。
「さて――――」
秋斗は先ず《吾輩は猫である》に保存された設計図を開き、その手順を工作機械に〝命令〟として入力した。そしてメンテナンスベッドと呼ばれる作業台の上に、一年掛けて束から贈られた無数のパーツとＩＳコアを設置した。精密な仕事であるのは容易に想像出来る為、秋斗は重ねて３回程〝パーツの不足が無いか〟を確認した後で、《我輩は猫である》を介し〝実行〟の指示を送った。
――――程なくしてメンテナンスベッドの脇から無数のアームがヌルヌルと現れ、各種パーツを自動で組み上げていった。
それを待つこと１０分――――。
メンテナンスベッドの上には、図面通りの形に組みあげられた『銀色の懐中時計』が横たわっていた。
完成したそれを確認した秋斗は、続けざまにノートＰＣ（トチローⅠ号）から伸ばした接続コードを『懐中時計』の裏にあるダボ穴に接続して、時計の内部に搭載された『ＩＳコア』に以前束から贈られたプログラムコード（命令）を入力する。
程なくして『懐中時計』が時を刻み始め、秋斗はそのカチカチとした秒針のレトロな音を聞いて、安堵の吐息を漏らした。
コレを作らせるために、束は一年掛けて秋斗を振り回したのだ。
「〝ＩＳ〟って言うのが、段々よく分からなくなってきたぜ」

秋斗は『懐中時計』を摘み上げるように持ち上げ、ソレを繁々と眺め、確認する。

その懐中時計は束が設計したＩＳの〝一種〟にして、同時に今後のＩＳと秋斗自身の〝未来〟を左右する代物だ。

とてもそんな大きな可能性を秘めた代物には見えないが、秋斗は身に付ける為にラボに残された廃材を機械で加工して鎖を作り、『懐中時計』をペンダントの様に首から提げた。

☆

多くの動物はその受精卵の段階で全て〝雌〟である。故に〝雄〟という個体はある意味で、雌から進化した生命だ。

つまり〝雌〟の形こそ、生命においてはもっとも純粋な形と言えるだろう。

そして『ＩＳコア』の有り様は、秋斗が評したようにある種の〝擬似生命〟と呼ぶに相応しい。それ故に、原初の『ＩＳコア』の持つ自我、もしくは性別が〝雌〟に近いと考えるのは不自然な事ではない。

ＩＳコアの開発の段階で、理論上は束も十分、男にも反応すると思っていた。

しかし結果は女性にしか反応せず、男がＩＳに乗る事は叶わなかった。

ソレについて原因を探った束は、ある日、ある一つの結論にたどり着く。

産み(束)の親と育て(千)の親(冬)。

そのどちらもが〝女〟であった事に原因があるのでは？　という考えに至ったのだ。

元々女性は〝共感〟と言う形で同性間の感覚共有に長ける。そしてＩＳコアが雌として自我と共感の能力を用いてそう女性を理解したと考えれば、男に対する〝反応の薄さ〟は決して不自然な話ではない。

つまり決定的な男に対する情報、理解の不足に原因があるのだと束

は考察を纏めた。
ならばソレを学習させる機会を与えるのが一番である。
束は程なくして、そう原因に対するアプローチを考え付いた。
――――そして他ならぬ秋斗に、その白羽の矢を撃ち立てた。
人選について今更説くまでもない。束にとっては最も身近な男であるが故。
加えて原初のコアである白騎士のＩＳコアに、その生体情報を提供した織斑千冬の血縁者の〝男〟という出自。
無論、今日に至るまでの積み重ねた信頼も在る。
それに条件が〝同じ〟で明確な差異を持つ、双子の兄、一夏の存在があった。
秋斗の方で蓄積したデータの〝偏り〟を修正する『処方箋』として、間接的に一夏についても観測すれば、自ずとＩＳコアの学習進歩は早いだろう。
以上の理由から、束は緻密に計画を打ちたて人知れず開発した〝５０１〟番目のコアを秋斗の手元に贈りつけた。
そして自ら設計したＩＳコアソケット――である『懐中時計』を秋斗に作らせたのだ。
『懐中時計』内部に搭載されたＩＳコアは、秋斗を介して男という存在に対する学習を始めた。
蓄えられた秋斗の生体データは将来的に量産された５００のＩＳコアにアップデートされる事になり、後にＩＳ唯一の欠陥である『女性にしか扱えない』という〝バグ〟を取り除くワクチンと化す。
そんな重要な使命を請け負い『懐中時計』を完成させた秋斗は、その日以降、トレードマークのように時計を首から提げるようになった。
懐中時計に搭載されたＩＳコアは決して、ＩＳとして展開する事はない。
ＩＳの機能として備わっているのは精々、搭乗者を保護する『シールド防御』と『絶対防御機能』と、『学習機能』のみ。
つまり有り体に言ってしまえば護身グッズのようなモノだ。

秋斗はそれを身につけ、なるべく年相応の日常を心がけるよう、束に頼まれた。

（年相応の日常、か――――）

秋斗は不意に、束に課せられた使命が、後に原作一夏が自ら解き明かす謎の一つなのではと感じた。

もしそうであるならかなり重要な未来を奪い取ったような気もするが、秋斗の持つ原作知識にも、そのような描写がない事。そしてそこまで描かれた部分を見ていない事から、直ぐにその考えを打ち消した。

秋斗は小さく吐息を吐き、傍らの筐体に座る一夏に視線を送った。

「――――どうする？　まだやるかい？」

「くっ……」

秋斗は悪辣に笑った。

そんな笑みを受けた一夏は、悔しさに歯噛みしながらポケットの中身をまさぐった。

一夏は再び握り締めた〝１０円〟を片手に、もう一度、秋斗に勝負に挑む。

「っ！　このやろう！　次は絶対勝つからな！」

「一夏、頑張って！」

一夏の後ろで覗き込むようにして立つ茶色のツインテールの少女が、ピョコピョコと跳ねる。

彼女は４年の頃に一夏の在籍するクラスに転校してきた中国人――凰鈴音。

織斑家の住所と越してきた鈴の家が近所という事もあり、程なくして織斑兄弟は鈴とよくつるむ様になった。

『Ｇｅｔ　Ｒｅａｄｙ――』

筐体から音声が漏れる。

３人が訪れたのは校区から少し離れたところにある『１０円ゲーセン』と呼ばれる類の駄菓子屋で、そこは型落ちした古い対戦ゲーム筐体が１クレジット１０円という破格の値段で遊べる場所であった。

小学生の小遣いでも容易に筐体で長く遊べるので、秋斗達は最近見

つけたこの店に良く訪れる。
　そしてそんな秋斗と一夏が熱を上げて対戦するのは、かつては一世を風靡したタイトルにして、今は型落ちしたロボット対戦ゲーム。通称『電脳戦士タングラム／サターン』。２本のスティックと計４つのボタンでロボットを操縦して競う対戦格闘ゲームだった。
　秋斗にとっては懐かしい、そして一夏にとっては先日受けた〝影響〟をモロに刺激する事から、２人はこのタイトルでの対戦を繰り広げていた。
「〝キヨカゲ〟で近接格闘を仕掛けるな、とは言わねぇけど……もう少し考えて突っ込んだらどうよ？」
「うるさい！　くっ、逃げずに当たれよ、くっそ！　おい、いい加減、その〝設置砲台〟使うのやめろよ！」
「んじゃ、近づいてやるよ」
「その〝変形体当たり〟もヤメロォ！」
　一夏の駆る白の鎧武者――『キヨカゲ―７４７ａ』は、その装いに違わぬ高い格闘戦能力を持つ機体である。故に、一夏はどうしても格闘戦を仕掛けたいらしい。
　一夏は気迫を纏って秋斗の駆る『バルサイファーΔ』のピンクの影を追うが、いつの間にか設置された〝ダガー〟と〝レーザー砲台〟に翻弄され続けた。そしてじりじりと四方八方からの砲撃で大きくＨＰを削られた一夏の〝キヨカゲ〟は、遂に空中で飛行形態に変形した秋斗の『バルサイファーΔ』の〝特攻〟体当たりを受けて爆散。
　一夏は通算して５連続の敗北を迎えた。
「……終止、ってな」
「くっそ、後ろからチマチマ卑怯な攻撃ばっかしやがって。正々堂々勝負しろよ！」
「正々堂々なんて物好き同士が共有する性癖みたいなもんだ。あと、ゲーセンでその言い訳は寒いぜ？」
「なんだよそれ……よくわかんねぇけど、この外道！　チクショウ！」
「なんとでも言え、負け犬」
「くぅっ」

がっくりとうなだれる一夏に、秋斗は平静とそんな言葉を送った。
篠ノ之一家が引越し道場が閉鎖された為、放課後の一夏の元気は結構有り余っている。故に対戦ゲームでソレを発散するのは非常に都合が良く、また一年ほど前まで織斑家にはゲームを買う余裕すらもなかったので、一夏はその楽しさにようやく気づけたらしい。加えてゲームとはいえ〝対戦〟と言う形の勝負事でこれ程に秋斗にボコボコにされた経験も薄い為、一夏はすかさずもう一度連コインをしようとポケットを漁った。
が、そこへ鈴が一夏を無理やり押しのけるように筐体に座りこみ、操縦桿を握った。
「そろそろ代わりなさいよ、一夏！」
「お、おい、鈴！　押すなよ――――」
「仇は私が取ってあげるわよ！」
「……へぇ、調子に乗って潰されにきたのか？」
「今日こそアンタを負かしてやるわ！」
秋斗の軽口に鈴が吼える様に返す。
去年、転校してきたばかりの頃の鈴はもっと淑やかな性格で、日本語も今ほど堪能ではなかった。そして中国という生まれと〝リンイン〟と言う名前の響きから、一時期は『パンダ』という悪い意味での渾名を付けられ、クラスでからかわれていたそうだ。ソレを救ったのが例の如く一夏だったそうで、それ以来、鈴は一夏とよくつるんでいる。
また鈴の実家の中華屋が旨い安いと評判で、最近の織斑3姉弟はそろってその店の料理の世話になっている為、鈴の存在はある意味で〝妹分〟に近い。
コレがセカンド――即ち一夏の後のヒロイン2号である。
「覚悟なさい、秋斗！　私の『アームド―フェイ』がアンタをシバく！」
「ＯＫ。なら御望みどおり、正面から相手してやるよ」
鈴が選んだのは女性型にして軽量高速近接機体の『アームド―フェイ』。
対する秋斗は機体は鈍足重甲高火力の『テツヲ―Ｖ』。

「おい。正面からってお前……殴り合いするんじゃねーのかよ？」
秋斗の機体セレクトを見て一夏はそんな風にぼやいた。
対する秋斗はニヤリと口元に笑みを浮かべて、平静に言った。
「火力ブッパも専門用語で殴ると言うんだぜ？　まあ見てろ。……ガチタンと相対する〝怖さ〟ってのを教えてやるよ」
「一夏、放っておきなさい。秋斗のひねくれた言い回しなんて今更でしょ。それにその装甲を正面から削りきれば何も問題はないんでしょう？　上等じゃない？　速度で翻弄してボコボコにしてあげるわ！」
鈴は八重歯を牙の様に剥く。
秋斗はそんな鈴の台詞に悪辣に笑って返し、操縦桿を握りこんだ。
「そんな軽い機体でこの『テツヲ―Ｖ』の装甲を削りきるってか？　心意気は〝良し〟だが、２０秒で消し炭にしてやるよ」
「ぶっ潰す！」
『Ｇｅｔ　Ｒｅａｄｙ――』
――そんな３人の戦いは日が暮れるまで続いた。
秋斗の首から提げた懐中時計に宿るＩＳコアは、粛々と秋斗から〝男〟を学習し続けていた。

２０　織斑家の『引越し』　前篇

『モンドグロッソ』とは、後に世界中を沸かす事になるＩＳを用いた対戦技術競技構想の事である。

その発想はＩＳが登場してから間もなくに存在していたが、近年になり日本で開発された秋桜を初めとする先進各国が独自に開発したＩＳが多く出揃った事で、遂に実現と言う形に相成った。

開催は１０月末。

後に世界有数の競技としてオリンピックに取って代わるほどの人気を見せる競技大会だが、現時点では次世代の抑止力としてその名がうたわれるＩＳと、それを中心とした社会基盤の形成を目的にした民間に対するデモンストレーションの意味合いが強い。

――言うなればまだ、〝競技会〟と言うよりも各国のＩＳ技術の交換交流を目的にした〝博覧会〟に近い。

故にＩＳを用いた〝試合〟と言う要素は、現時点ではまだイベントの一つでしかなかった。

「――開催場所は東京万博の跡地か」

倉持技研ＩＳ開発研究室――。

そこは初の国産ＩＳである秋桜を開発した日本有数にして世界有数の技術研究機関だ。

また数少ないＩＳ搭乗資格を有する正規パイロット――織斑千冬を初めとする、これからのＩＳ社会を牽引する人材が多く集う場所である。

千冬は己が所属する日本のＩＳ委員会から発布された、『第一回モンドグロッソ』に関する通達書類を読み、ホッと小さく息を吐いた。

「無駄に長距離移動せずに済んでよかった。と、言ったところかい？

まぁ、確かに、弟君達を放って海外出張しろというのはオリムラには酷な話だからな」

「む……。別にそういうわけではないが――」

千冬は不意に脇に視線を移した。

千冬の傍らに居たのは同じく技研の開発部に所属し、操縦者として

千冬の同期となった篝火ヒカルノである。
ヒカルノは千冬の表情を見て御見通しだと言う笑みを浮かべた。
「今更言葉にして説くまでも無い。織斑が〝ブラコン〟なのは周知の事実なんだ。いいじゃないか、ブラコンで。熱いブラコンなら上等よ」
「……その口を閉じるか、死ぬか選べ、篝火。後、いい加減周囲をうろつくならもう少しマシな格好をしろ」
「おや、コイツは失敬」
千冬は怒気を見せながら右手の五指をゴキリと鳴らす。
対するヒカルノは終止飄々とした態度で片腕を挙げ、それを詫びた。
――――ヒカルノの出で立ちはＩＳスーツの上に白衣とゴーグル着用と言う、実に奇怪な様子であった。
千冬とヒカルノは、『その幼少から就職に至るまでの進路が同じ』という類を見ないほどの腐れ縁。
だが実際に２人が交流をするようになったのは、意外に最近である。
偶々一緒の高校を目指し、偶々同じ進路を選び、偶々同期としてＩＳ業界に携わる事になった。ソレからなのだ。
腐れ縁故に前代未聞のＩＳ業界に進んだ両者。その関係は操縦者試験の合格者同士による助け合いが必要でなければ、もしかすれば今も始まってすらいなかったかもしれない。
「――――ところで、先程からオリムラは何をそんなに熱心に見ているんだ？」
昼の休憩時間。技研の社員食堂で昼休憩を取る千冬の対面に座ったヒカルノがそう尋ねた。
千冬は右手に箸を持ち、鮭の切り身を口に運びながら短く応える。
「不動産カタログだ」
「不動産？　引越しでもするのかい？」
「あぁ、秋斗にせっつかれてな……」
「秋斗というのは確か、この間オリムラがウチの部署に見学に連れて

来た双子君の弟だったかい？」
「そうだ」
「人目をはばからずに『千冬姉、千冬姉！』と興奮して叫んでいた少年から視線を逸らして、他人の振りをしていた方の？」
「……あぁ、そうだ」
ヒカルノの思い出すような言葉にそう短く肯定した千冬は、恥ずかしそうに苦悶の表情を浮かべた。
ヒカルノが秋斗の事を知っているのは、以前千冬が話したが故。
しかしそれ以上に、先日受け入れた小学生団体の〝社会科見学〟が、他ならぬ一夏と秋斗の属する小学校だった事に、その一端が在る。
これからの未来を背負って立つ次世代の子供達に対し、早期にＩＳについて理解を深めてもらおうという思惑で、倉持技研は秋斗達の小学校の社会科見学を受け入れた。そして訪れた学生らの相手をしたのが、他ならぬ千冬やヒカルノを初めとする操縦資格を持つ者達だったのだ。
その時にヒカルノと千冬は、デモンストレーションという形で、小学生らの前で秋桜を使ったＩＳ同士の模擬戦を披露。その際千冬の弟の一夏が、その様子に興奮気味な様子で『千冬姉、頑張れ！』と全力で応援し、そんな兄の様子を見て秋斗は恥ずかしそうに他人の振りを決め込んでいた。
そんな千冬の微笑ましい双子の弟達の様子は、未だにヒカルノを初めとする倉持の職員一同の記憶に新しく、故に、ヒカルノは千冬の弟の名を聞いて、直ぐにその顔を思い出す事が出来たのだ。
「あのキュートなお尻達は良く覚えているよ。是非、何があったか聞きたいな。話してくれ」
「……なに？」
淡々とした様子でとんでもない事を呟いたヒカルノに、千冬は摘み上げた鮭の切り身を思わずポトリと箸から取りこぼした。
「ブラコンと呼ばれるのが嫌ならそういう反応を一々見せないほうがいいぞ」
「おい、篝火……」

「そうカッカするなよ、オリムラ。ただの冗談さ。まぁ、確かに可愛いかったのは事実だが――――」
「おい、篝火！」
「席を立つな。食事中だぞ？」
「くっ！」
声を荒げた事で社員食堂にある目が千冬に集中する。
思わず立ち上がりかけた千冬はヒカルノの正論を受けて、渋々と言った様子で姿勢を元に戻した。
「ったく、私の幼馴染という奴はどいつもコイツも――――」
「心外だな。私は篠ノ之よりかは幾分か真面目だぞ？」
「……ならばさっさとその格好を改める事だな。馬鹿者」
「こりゃ失敬」
ヒカルノの出で立ちは今も尚、ＩＳスーツに白衣であった。
後に千冬が身内ネタでからかわれるのを酷く嫌うと言う性分が形成されたのは、正にこの頃。千冬はそんな風に当時の事を振り返る。
閑話休題。
千冬は小さく吐息をつくと、家を新調しようと決意した経緯をヒカルノに話した。
「流石に一夏も秋斗も５年生になったからな。いつまでも手狭なアパートで暮らすのも辛いらしい。まぁ、幸いにして以前に比べて蓄えも十分出来たからな。だからそろそろ引越ししてはどうかと先日切り出された。それ故だ」
「なるほど。確かにいつまでも男二人が相部屋というのも酷な話だ。それに男にはいかんともし難い生理現象があると聞く。……なるべく早いうちに個部屋を用意してやるのも、悪い話ではないだろう」
「……生理現象？」
「おや、保健体育の成績ではぶっちぎりのオリムラにしては察しが悪いな。判るだろう？　ナニだよ。ナニ」
「っ!?」
ヒカルノのあっけらかんとした言葉に、千冬は思わず赤面した。

☆

時は少し遡る――――。

社会科見学で千冬の駆る秋桜の模擬戦闘の様子を観戦した織斑兄弟が、その後『１０円ゲーセン』の筐体で凌ぎを削り合う少し前の事だ。

その頃秋斗は、図らずも前代未聞にして『織斑家最大の危機』とも呼べる重要な局面に相対していた。

事の発端はトレードマークの『懐中時計』を首から提げるようになって間もなくの――秋斗が珍しく家に一人だった時の事だ。

千冬は例の如く仕事。一夏の方も友人達の遊びに出かけているので、その時の秋斗は久しぶりに〝エロ同人サークル〟での仕事とブログの更新作業に勤しんでいた。モンドグロッソの構想と、日本初のＩＳ搭乗資格を有した千冬の存在によって『オリムラ日記』は既に〝ＩＳ〟に興味を抱いた数多くのファンを抱える１０万人規模の人気ブログと化し、また一夏の料理ブログ、秋斗の模型ブログとしてもそれぞれ人気が伸びて、そろそろカテゴリーごとに分けて兄弟で別々にサイトを管理運営した方が良いかと悩んでいる正にその時。

買い溜めした缶コーヒーを取りに台所に向った秋斗は、買った覚えのないＵＳＢメモリが調理棚の直ぐ脇に置いてある小物入れに入っているのを見かけた。

「――――なんだ、こりゃ？」

秋斗は基本的にＵＳＢを使わない。なぜなら外に情報を保存しておく意味があまりないからだ。

故にそんなモノが家にあるのを疑問に思った秋斗が、思わずそれを手に取ったのは必然と言える。

秋斗は首を傾げながら机に戻るとそれまでの作業を一端止めて、缶コーヒーのプルタブを開けながらＵＳＢメモリに保存されたファイルを開いた。

「……一夏の、だな」

保存されていたのは以前。社会科見学で見たＩＳスーツを纏った

姉――織斑千冬の写真の数々である。

秋斗は直ぐに、そのＵＳＢメモリの持ち主を一夏だと察した。

一夏は去年の誕生日にデジカメを欲しがり、そして買って貰ったデジカメを社会科見学の際に持ち込んでいたからだ。

故に秋斗は、写真がその時に撮られたモノであると推測した。

写真は何れもピンボケしており手振れの所為で殆どまともに取れていないモノばかりだが、そもそもからして技研には機密情報も多くある為、撮影自体が許可を出された限定区画のみしか許されていない。

故に、これら写真は言わば盗撮の証拠であった。

秋斗は一夏にとってコレらが叱られる危険を冒してまで手に入れた、〝悪戯の結晶〟なのだと解釈した。

そう思うと一夏の撮影した下手糞な写真の数々を微笑ましく思う。

――しかしパパラッチ染みた隠し撮りの趣味は頂けない。幾らコミュ障のキモオタなカメラ小僧でも、レイヤーさんを撮影する際には必ず〝面と向って許可を得る〟のが避けられぬ仁義にして礼儀なのだ。古事記にもあるように〝挨拶〟を欠くと言うのはそれ程に失礼に当たる行為。例えそれが身内であってもだ。

加えて個人で楽しむだけでネット拡散まではしていないものの、それでも撮影禁止の場所で国の重要機密の一端を撮影してのけるのは、流石に悪戯にしても過ぎると、秋斗は思った。

「さて、どうするか――」

気づいてしまった以上、秋斗は追求するか、放っておくかの二択を迫られた。

下手に追及してその欲求を抑え、この後に一夏に盗撮趣味と言う性癖が芽生える可能性を考えると、見てみぬ振りをする情けを選ぶべき。つまりシグルイ的な情け深さを見せるところである。

が、しかし逆に放った結果で悪化した場合、未来のヒロイン達に申し訳が立たない。

「……そもそも、なんでアイツ（一夏）は姉貴の写真なんか撮ったんだ？」

――と、不意に秋斗の脳裏にそんな疑問が過ぎった。

件の社会科見学には卒業アルバムの写真を撮影する学校所属のカメラマンも同行していたのだ。それに撮影場所が限定されていたとはいえ、普通に持ち込んだカメラで千冬の写真をとる機会も決してなかったわけではない。現に一夏も、許可を取った場所で堂々、千冬や秋桜の姿を撮影していたのだ。

「――――まさか、アイツ……」

秋斗は不意に、考えたくもないある可能性が脳裏を過ぎるのを感じた。無論それは、一夏がＩＳスーツを纏った千冬の姿を撮りたかったという可能性である。

秋斗はたどり着いたそんな結論に、まさかという思いで思考を加速させた。

（確かに許可された場所での姉貴は上着を羽織ってた。ＩＳスーツはその構造上レオタードに近いし、身体のラインが浮き彫りになってる。一夏は今年で俺と同じ１１歳だから、まぁ……〝女体に興味を抱く〟にしては少々早すぎるにしても、決してありえない話じゃない。しかし実姉だぞ？　……アイツ、正気か？）

そう言えば――。と、そこで秋斗は思い出した。

最近秋斗が一家の洗濯をする機会が少なくなり、代わりに一夏が進んで肩代わりする様になった事だ。

当時は篠ノ之道場が畳まれ、余った余暇を家事に費やそうとする手持ち無沙汰故の行動だと思った。が、逆に考えるとそこで何かの歯車が狂ったのでは？　と秋斗は考えた。

現に先日、こんなやり取りが兄弟の間であった――――。

『千冬姉ももう大人なんだから下着ぐらい自分で洗えばいいのにな。ちなみに秋斗、レースとか素材によってはただ洗濯機に放り込むだけじゃダメなんだぜ？　手洗いしないと破けるんだ』

『良く知ってるなそんな事。気にした事ねぇわ。って、いうかまさか一夏は姉貴の下着全部手洗いしてるのか？』

『……ん～まぁ、流石に全部はやってないぜ？』

歯切れ悪く秋斗の質問に答える一夏は、その後風呂場の桶にお湯を溜めて千冬の靴下等の手洗いを始めた。――――その様子は贔屓目

に見ても、どこか楽しそうに見えた。
「……ちょっと業が深すぎやしないか、ワンサマー？」
今まで触れたエロゲージャンルなら秋斗も大概だという自覚はあれど、決して現実で理想を追い求めた事は一度として無い。
仮にそんな奴が実際に存在するとすれば、例え秋斗でなくとも関わりを避けるのが普通だと言えるだろう。
故に大抵は己に刻まれた業――例えばロリコンや熟女スキーであっても冗談のトーンで話すのが普通である。
が、この時秋斗は、多分に大げさではあったが、今は女性に対する興味であっても、このままでは最悪、一夏の初恋の相手がかなりの確率で千冬になるという未来を想像して、結果織斑家が崩壊する未来を感じ戦慄を覚えた。
色を知る年頃がどの程度の年齢なのかは人それぞれである。
秋斗にしたってその前世の小学生くらいの頃には、一応だが淡い初恋の経験がある。
故に一夏にもソレが訪れる事を別に歓迎しないわけではない。
――が、しかし身内だけは流石にどうだろう？
秋斗は老婆心ながらも、今生の兄の将来を案じて、縋るような気持ちでネットの〝知恵袋〟に相談を持ちかけた。

質問　アーキトクテさん
兄が姉に恋慕を抱いてるっぽいです。どうしたらいいですか？
突然ですみません。身内の事で相談なのですが、僕には双子の兄が居ます。ウチの家庭は少し複雑で、両親が無く姉と双子の僕たち兄弟のみの家庭です。そして最近ふと気づいたのですが兄が姉に興味と言うか、どこか恋慕に近いモノを感じているっぽいです。
決定的な証拠というわけではないのですが、姉のレオタードスーツを隠し撮りした兄の写真を発見しました。それと最近は兄弟で家事を分担しているのを兄が良く肩代わりしてくれるのですが、姉の下着を嬉しそうに手洗いしてました。
流石に僕も変だと思うのですが、どうしたらいいでしょう？

家族としての感情で兄と姉の事は尊敬していますが、流石に兄のコレが行過ぎると思うとちょっと……という感じです。
何も知らずに放っておけばよいのでしょうか？
それとも何かしらの形で忠告をした方がよいのでしょうか？
なにぶん事情が事情なので周りにも相談できません。
ちなみに僕と兄は小学生、姉は社会人です。
よろしくお願いします。

回答　ゲッコウさん
一時の気の迷い……捨て置け。

回答　バーテクスさん
釣りではないという予測の下で真面目に返答させてもらうと、一般的な男子が最初に異性を意識する場合、その母親や身近な母性を持つ人間が対象になる事が多いそうだ。が、しかしキミの家庭は少々複雑な家庭のようなのでこの例からは少し漏れる事になるな。
故に、まずは母親の代わりに母性を与えたキミの姉に、キミの兄が恋慕を抱いた結果を、ある意味で避けられぬ事だと理解する事だ。
その上で、〝環境が変われば多少は変化する〟事を考え、最初は静観するべきだと私は考える。
家族の間で話し合うのも重要だが、それ以前にまずは冷静且つ客観的な視点で状況を待つことも重要だ。
例え話になるが、進級したその先で同年代の魅力ある別の女子や男子に巡り会う事もあるはず。
それを待ってからでも行動は遅くはないだろう。
が、逆にその上で状況が悪化した場合は、もう一度相談に乗ろう。
健闘を祈る。

回答　アップルボーイさん
初恋ですか。大丈夫です。僕にも似たような経験があります。なので心配せず見守ってあげてください。

回答　吊るされた男さん
で、それが何か問題？　いいじゃん、仲が良くて楽しいじゃん！
お前も混ざれよ！

以下略――。

相談してから程なくして幾つかのレスが付いたのを確認した秋斗は、その中で参考になりそうなアドバイスを一つずつ拾い上げた。

匿名のネットで相談したというだけあって、アドバイスは実に玉石混淆。だが、真面目に応えてくれた者もそれなりに多くあった。

秋斗は返された意見を纏めあげて思案する。

目下のところは二つの選択肢――。

一つが何も知らぬ存ぜぬを通しきり、事態を傍観して時間の流れに身を任せる事。

もう一つが環境の変化を自ら促す事だ。

「――環境の変化、か」

中でも一番具体的な形で応えてくれた意見の中には、引越ししろと言う言葉もあった。

回答者は恐らく大げさな比喩としての意味で、生活環境に大きなショックを与えろと言ったのだが、秋斗は意外にそれも有りではないかと考え付いた。

秋斗も一夏も既に高学年に差し掛かった。

故にそろそろ、この狭いアパートでの3姉弟相部屋生活と言うのも問題がある。

千冬にしても流石に着替えやらを見られるのは恥ずかしいだろうし、一夏にしても精通する頃には個室の一つも欲しがるだろう。

ソレに関しては先人の〝男〟として確実に保障できる。

故に、秋斗は思った。

（よし、引越ししよう……）

そうと決まれば秋斗の行動は早いモノで、秋斗は直ぐに表裏合わせての預金の残高に眼を通し、近所でよさげな物件のリストをネットで調べ始めた。

そしてその日の夜――。

「――おかえり、姉貴。さぁさぁさぁ、まずは座ってくれ」

「おい、どうした、秋斗？　何をそんなに――」

「いいからいいから。とにかく姉貴は座ってくれ。後、一夏も」
「お、おう」
夜。帰宅した千冬を秋斗は迎えた。無論、その席には一夏も同伴させた。
家族3人が座るその日の夕餉は全て、珍しく秋斗が拵えた。
机の上に並ぶのは何れも旬の食材を使ったモノである。
一夏の作る料理とは味付けが多少異なるものの、秋斗も十分に料理上手の部類に属す腕前の持ち主。故にその完成された料理を見て、千冬は顔をほころばせた。
「……随分と豪華だな」
「だろ？　流石に一夏には勝てんがな」
「いやいや、普通に旨いぜ、コレ？」
早速合掌して、一夏と千冬は秋斗の作った夕食に舌鼓を打つ。
そして空気が程よく弛緩したところで、秋斗はついに本題を切り出した。
「姉貴と一夏にちょっと相談したいことがあるんだけど、そろそろ引っ越さないか？」
「……は？」
「……引越し？」
秋斗の言葉に千冬と一夏は思わず顔を上げた。
特に千冬は眉を顰めた上で声を低くし、明らかに不審がっていた。
「……秋斗、今度は一体何を企んでる？　またあの馬鹿の差し金か？」
「違う違う、別に博士は関係ねぇよ。ただ純粋に、そろそろこの家、狭くね？　って思っただけさ」
秋斗は肩を竦めながら、正攻法に引越しを提案した。

21　織斑家の『引越し』　後篇

「――――と、言うわけで俺ん家、引っ越す事になったから」
「え……？」
ある日の放課後。家路を共にする鈴に向けて、一夏は笑顔を浮かべながら言った。
気軽な口調で言い放つ一夏のそんな台詞を受けた鈴は、表情をピキリと凍らせた。鈴の表情はまるでこの世の終わりが来たかの様に悲痛なモノに変っていた。
それもそうだ――――。
と、そんな2人の様子を半歩後ろから眺めていた秋斗は思った。
「……言葉が足りねぇよ、阿呆」
「え？」
秋斗は小さく溜息を吐き、仕方なく兄（一夏）のフォローに入る。
原作ではという一種のメタ的な視点でだが、この時点の鈴は既に一夏に対して好意を抱いている様に見えた。そして同時に鈴自身の実体験から、〝引越し〟という単語と一緒に〝転校〟の言葉を連想（イメージ）するのは無理からぬ話。
もっとも、そんな心の些細な機微を理解しろというのも一夏（朴念仁）には難題だろうと、秋斗は半ば諦めを混ぜた吐息交じりに言った。
「別に引越しって言っても転校するとかじゃねェ。今住んでるボロアパートから歩いて10分ぐらい？　の、別の家に移るってだけだ」
「あっ、あぁ！　そうなの!?　そうならそうと先に言いなさいよ、馬鹿！」
「痛って！　痛ぇな、おい。叩くなよ、鈴！」
秋斗のフォローを受けた鈴は安堵の吐息を漏らして、同時に言葉を欠いた一夏の肩をグーで殴る。
「驚いた私が馬鹿みたいじゃない！」
「はぁ？　なんだよそれ」
一夏は鈴の憤怒を〝解せない〟といった様子で口をへの字に曲げる。

そして説明してくれと言わんばかりに、秋斗に視線を向けた。
事の発端は数日前だ。
秋斗が一夏の加速するシスコンを懸念し、それに対し〝歯止め〟をかける為の生活環境改善――つまり一家の引越しの必要性を説いた頃にまで遡る。
秋斗が珍しくその日の夕食を用意して、なるべく当たり障り無く正攻法な手段で千冬に引越しを提案した時の事。
秋斗は3人で住むには今のアパートが手狭という意見に加えて、コレまでに行なった様々な資金策が家を買うに十分な結果を出した事を千冬、一夏に伝えた。
ブログの広告収入、株式と、千冬の給料の一部を積みたてた貯金――。
現在の織斑家には、それら一時期の貧乏生活が嘘の様な資産が備わっている。
故にそれらを使えば新居購入の頭金ならば十分に払えると、秋斗は千冬に提案した。
しかしそんな引越しの提案に一夏は前向きだったが、千冬の方は余り乗り気ではなかった。
理由は買い物慣れしていない事と、余りに大掛かりな出費への懸念。そして気持ち的に弟（秋斗）が用意した資金を当てにする事への忌諱である。
確かに常識的に考えれば素直に頷く方が不自然な提案で、いくらこの時点で様々な〝前科〟を明らかにしたとはいえ、やはり千冬の中ではまだ秋斗は〝幼い弟〟なのだ。
故にそんな千冬の葛藤を察した秋斗は、この案件に関しては時間を掛けてゆっくり説得していく方向で対応しようとその日は諦める事にした。
――が、昨日の段階で家に戻った千冬は少しばかり顔を赤らめた様子で、『そろそろお前達も一人部屋が欲しいだろうし、……引っ越すか』と、引越しへの強い決意を顕にした事で事情が変わった。
ちなみにこの千冬の決意を後押ししたのは、千冬の同僚である篝火

ヒカルノ女史である。ヒカルノ女史の『年頃の男子の性欲について』というある種のレクチャーを受けた事が、千冬の考えを改めさせる発端となったそうだが、それについて秋斗が知る事は無かった。

そんなこんなで昨日、織斑家で開かれた家族会議の末、今年１０月を目処に一同は新居へ移転する事が決まった。

秋斗は突然掌を返した千冬の意見転換に首を傾げたが、それはそれで良いかと意思と結果だけを受け取る事にして、思考を放棄した。

織斑家にとって引越しはこれ以上に無い程のビッグなイベントである為、一夏はまだ数ヵ月もあるというのに今から引っ越しの日を心待ちにしている。そして鈴を初めとする学校の友人達に、繰り返し引越しの話をしていた。

「――――どうせならシステムキッチンがある家が良いよな。あと風呂もでっかい奴！」

引越しの日程は１０月の頃。千冬の今年最大の大仕事『モンドグロッソ』を終えてからだ。

加えて１０月は織斑兄弟の誕生日でもある為、ある意味で今回の引越しで移り住む〝新居〟が、今年の誕生日プレゼント。故に、一夏は終始新居に求める希望を口にした。

一夏の新居に求める第一要望は、〝使いやすいキッチン〟と〝広い風呂〟。

耳にタコが出来る程に聞かされたそんな一夏の希望の言葉に、秋斗は半ばウンザリとした様子で一夏、鈴と一緒に家路へと歩く。

「ねぇ、転校するんじゃないとしても、具体的にどの辺に引っ越すの？　何時？」

「まだ場所も日取りも決まってねぇよ。これから探すところだ」

鈴の質問に秋斗は思わず苦笑を漏らす。そして言った。

「千冬姉の仕事的に１０月終わりぐらいが良いんだっけ？」

「あぁ」

「ふ～ん。じゃあ日取りが決まったら教えてよ。手伝ったげる」

「そいつはどうも。んじゃ当日は鈴の店の軽トラ出してくれ」

「へ？」

秋斗は鈴の申し出にそう言葉を返した。

☆

ネットで掻き集めた物件資料と、近所の不動産屋から貰った物件の冊子。

それらを手にした秋斗と一夏は夕食後、新居の物件探しを開始した。

そして程なくして帰宅した千冬も交えた織斑3姉弟は、議論を重ねながら新たな家の姿を模索した。

一夏の希望であるデカイ風呂とシステムキッチン。それらを兼ね備えるとなると、やはり一軒家が候補に上がる。

賃貸ではなく一軒家の購入を考えると色々手間と金が掛かるのだが、今回の引越しで頭金を初めとする予算に関しては千冬の給料と秋斗の資産。保証人は千冬の勤め先である倉持技研と日本ＩＳ委員会。故に銀行の借り入れ審査で落ちる事もほぼありえない為、〝よほどの物件でもない限り〟どんな家でも買える。

なので秋斗も一夏程ではないが密かに己の〝希望〟を入れるつもりであった。

「――――なぁ、千冬姉はどんな家が良いと思う？」

「そうだな。なるべく住みやすい家が良いな。とりあえず、それぞれに専用の部屋があるのは大前提だが――――」

不意に一夏から話を振られた千冬は、風呂上りのラフな格好で缶ビールのプルタブを開けながら応える。

「やはり風呂がデカイというのは魅力的だな。その点に関しては一夏に同意するよ」

「だよな！　ほらみろ、秋斗！　やっぱり風呂は重要なんだよ。日本人はそうで無くちゃ！」

千冬の意見と同じだった所為か、一夏は嬉しそうに笑みを浮かべる。

そんな一夏の様子に秋斗は吐息を吐いた。

なぜなら秋斗は元々カラスの行水でシャワー派。そして湯船は肩こりと腰痛が辛い時に使う程度なので、そんな一夏の過剰なまでの〝風呂至上主義〟な意見に余り同意は出来なかったからだ。

「デカイってのはそれだけ掃除が面倒くさいんだぜ？　選ぶのは良いけど掃除はお前（一夏）がやれよ？」

「分かってるさ。そんな事、初めから秋斗には期待してねーよ」

一夏は秋斗の否定的な意見に唇を尖らせた。

「ったく、考えられねーよ。風呂は何よりも重要だろうが……」

「んな、わけねぇだろ、アホ。家の内装より〝立地〟の方が重要だ。スーパーとか薬局とかコンビニとか郵便局とか銀行とか駅とか……そういうのがなるべく近い物件にしないと後で不便になるんだぜ？

……家にゃ、車が無いんだからよ」

秋斗はそんな持論を一夏に返した。

と、そこに千冬が口を挟む。

「――――確かに言われてみれば、秋斗の言う立地も重要な要素だな。コンビニが遠いのは私も困る」

「千冬姉？！」

秋斗の意見に納得した様子を見せた千冬は、そこで同時に買い漁ってきた各種酒の肴の入ったコンビニ袋に視線を向けた。

アルコールを嗜むようになった千冬は宅飲みを好む様になった。なので〝コンビニ〟の近さというのは非常に重要な懸案事項であるらしい。

まさかの千冬の同意に一夏は裏切られたような顔をした。

そんな一夏を捨て置き、秋斗はコホンッと一つ、咳払いを打つ。

「とりあえず、だ。〝マンション〟か〝一軒家〟。この二つでまずはどっちが良いか決めようぜ？」

秋斗は候補としてファミリー向けのタワーマンションの一室と新築の一軒家の二択で、大まかな新居選びの方向性を決める事にした。

「――――マンションか一軒家かにするなら、俺は一軒家の方が良いなぁ」

「なぜ？」

「え？　だって二階建てとか憧れるじゃん」
秋斗の問いに、一夏は間髪いれずに応えた。
物心ついた時から狭いアパートに暮している身としては、見た目からして〝家〟というテンプレ染みた概観のモノが良いらしい。
そんな一夏の意見に、秋斗は思わず苦笑を漏らす。
「姉貴（千冬）は？」
「……そうだな。どちらでもかまわんが、まぁ〝一軒家〟だな。長く住むなら尚更だ」
「じゃあ、一軒家で決まりだな」
家族3人でそれぞれの個室を求めつつ、システムキッチンとデカイ風呂を求めるならば〝一軒家〟がもっとも条件に合致しやすい。が、逆に立地という利便性を少し妥協する必要が出て来る。
また一軒家を買う際に一番面倒な事といえば、町内会への参加義務がある。それらに眼を瞑れば、一軒家も十分あり。
秋斗は余り近所付き合いに積極的な方ではないし、千冬は仕事で家を空ける事が多い。しかし一夏は性格的にソレら町内の義務を果たす事を余り苦に思わない律儀な性格である。
故に近所付き合いも一夏が上手くやってくれるだろうと秋斗は思い、姉兄の意見を聞いた上で、秋斗はディスプレイに表示させた物件サイトから検索候補を『一軒家』に絞った。
「さて――――」
ふと、そこで秋斗は視線を上げた。
そもそも引越しをしようと思った発端は、一夏の過ぎたシスコンを懸念してである。
引越しそのものも生活環境を大きく変える事で、姉弟間の近すぎる距離を少し壊そうと思ったからだ。
もしも今の織斑家が一軒家に移り住んだとしたら――――。
と、秋斗は不意にそんな思考に囚われた。
「ん？　なんだ、お前（秋斗）も飲みたいのか？」
見上げた視線の先に千冬が座っていた。
千冬は秋斗の視線に対し、ビール缶を揺らしながらそう問うた。

千冬は風呂上りのラフ過ぎる格好でビール缶を傾けている。更に言うと、肩にバスタオルを引っ掛け、ホットパンツ姿で台所の椅子の上に胡坐を掻いている。

その姿は欠片も『淑やかさ』が感じられないほどに〝漢らしい〟。

そんな千冬の様子に秋斗は思わず苦笑を漏らした。

「要らねぇよ。って、いうか姉貴よ。仮にも〝女〟ならもうちっとマシな格好したらどうよ？」

「む？」

秋斗は思わず言った。

最近は『モンドグロッソ』という大掛かりな仕事を控えている所為か、相当に疲れが溜まっているらしい。ソレを証明するかのように既に結構な量の空き缶が、千冬の座る台所テーブルの周辺に積み上がっていた。

「秋斗は私に家の中でも緊張していろというのか？　酷い弟だな……」

千冬は素っ気無くぼやいて、グビリと缶の中身を煽った。

実は既にこの時点で千冬は結構酔っていた。

一見冷静に見えるが、心なしか平時よりも饒舌だったからだ。

それを察した秋斗はもう一度、溜息を吐く。

「気取らない生き方は結構。だが誰かに貰われるつもりがあるなら、もう少し考えなよ。見た目との〝ギャップ〟が激しすぎるのも考えもんだぜ？　特に女は、な」

贔屓目なしに千冬は『美人』の部類に入る。そして『美人』というのは実際の育ちがどうあれ、見た目の良し悪しで育ちが良いと勘違いされる場合が非常に多い。

それは実に勝手極まりない世間からの偏見だが、残念な事にその偏見というある種の〝期待〟を悪い意味で裏切るギャップ――つまり性格や行いを見せてしまう事は、世間にとって非常にマイナスな評価を産んでしまう。

綺麗だからこそ傷が目立つとでも言うべきか、それが『美人』という生き物の背負う宿命なのだ。

故に秋斗は家族として、なるべく早くに嘘でも〝女らしさ〟を持てと、千冬に忠告した。

――――しかしそこで同時に思った。

（あれ……待てよ。ひょっとして――――）

秋斗は思った。

引っ越した先の家で千冬に個室を与え、余りに低いその自活能力が想像を超える〝惨状〟を生み出したら――。

もしもその余りの〝残念さ加減〟を見た一夏の心が、耐えられなかったら――。

秋斗は不意に、『どうしようもない千冬の〝暗黒面〟を一夏に見せ付けつける事が出来れば、ある意味で過ぎた一夏の初恋（シスコン）も終るのではないか？』という思考に至った。

発想の発端は『恋心を抱いてしまった美女のウ○コの臭さを思い知って、その恋を終らせようと考えた男』を描いた文学小説である。なぜこのタイミングでそんな前世で読んだ物語のあらすじを思いついたのかはさておき、秋斗は〝ギャップ〟という凶悪な力に賭けるのも〝あり〟ではないかと思いついた。

秋斗はふと、一夏の方を見た。

一夏は真剣な様子で、不動産カタログの中から好みの〝一軒家〟を探す作業に勤しんでいた。やはり風呂とキッチンの要素はどうしても譲れないらしく、備え付けの湯船や換気扇の大きさ等を見て、一夏は物件の取捨選択を行なっていた。

「――――相変わらず生意気な奴だ。なに、もしもの時は〝お前達〟に頼るから、孤独死するつもりは微塵も無い。それとも何か？　束の面倒は見るくせに、私の事は放っておくつもりか？」

「っ!?」

と、そこへ千冬から声が掛かった。

気づけば千冬は秋斗の背後に立っていた。そして猫を抱き上げるようにして、千冬は後ろから秋斗の身体を持ち上げた。

女の細腕とは思えぬその力強さに、秋斗は思わず「マジか……」と、吐息を漏らす。そして背中に当たる想像より大きな胸の感触以上に、

想像以上の千冬の〝膂力〟に驚きを感じた。
「そんな未来は絶対に許さんからな？　よく覚えておけ、秋斗。……と、いうかお前、痩せたか？」
「ぁん？　何が――――」
千冬は不意に首をかしげた。そして一人納得した様子で吐息を吐く。
「なるほど。アレほど束の真似をするなと言っておいての結果がコレか。日の当たらない部屋で毎日毎日パソコン弄ってるから〝もやし〟になるんだ。分かったら外に出ろ馬鹿モンが。なんなら私が鍛えてやろうか？」
「二体、何の話をしてるんだ？　とりあえず分かったから、放せよ。酔っ払い」
「……何やってんだよ。千冬姉も秋斗も。狭いからこんな所で暴れるなよ。下の階に響くだろ？」
一夏が千冬と秋斗のやり取り（スキンシップ）を見て、心なしか羨ましそうに苦言を呈した。
秋斗は思わず「なら、お前（一夏）が代われ」と言いそうになったが、それはソレで問題があると思い直して、咄嗟に口をつぐんだ。
一夏も秋斗と同じで小学校の高学年になったので、流石に姉に抱き付かれたいとは素直に言い出さない。その程度の自尊心（プライド）は既に形成されている。――――しかし一夏は内心で、確実に〝代わって欲しい〟と思っている。
そんな一夏の内心を察した上で、同時に過ぎる兄のシスコンに楔を打ち込みたいと考える秋斗としては、素直にそんな一夏の思惑に乗せられるわけにはいかなかった。
故に何も言わずに溜息を一つ吐いて、秋斗は視線を一夏から逸らした。
（めんどくさ……）
未来の為に一夏のシスコンに楔を打ち、未来の為に千冬に女らしさを身につけさせてやりたい。
織斑家の最善を思う秋斗の目の前には、常に高い壁が立ちはだか

る。

せめてそれらを同時に叶え得る可能性を秘めた新天地への転居に、秋斗は〝希望あれ〟と願った。

22　それは『ロマン』という憧れ　前篇

ガヤガヤとした昼時の喧騒に満ちる一軒の中華飯店。
数年前に建てられたその店は、割りと近所でも評判の食事処である。
土曜の昼。
平日の同じ時間帯に比べると、平時その店に訪れる客層とは少々、違う顔ぶれが揃っていた。
彼らは年齢もバラバラで、しかも一部は国籍すらも怪しい。
そんなある意味で〝濃い〟面子がそろって座る店のカウンターには、一人の少年が腰を下していた。
銀色の〝懐中時計〟を首から提げるその少年は、そんなこの店の常連達に引けを取らない程の〝濃いキャラクター〟として、店によく馴染んでいた。
「――――3が来るな」
「おいおい、正気かよ〝秋坊〟。そりゃねぇよ」
「アキトは相変わらず勝負師ネ」
「いやいや、別に単勝では賭けねぇよ。でも芝で２０００だろ？　これ、多分いける気がするんだよな。記念で一枚くらい買っても良いと思うぜ？」
「ねぇよ」
「サスガにちょっとソレはナイワ～」
秋斗は今朝買ったスポーツ新聞をカウンターテーブルの上に広げて言った。
秋斗のそんな予想に対して苦笑混じりの苦言を呈すのは、店の常連である土建屋の社長――榊と、店の近所に住む謎の中国人の老人――劉である。
その2人も秋斗と同様のスポーツ新聞を目の前に広げて、赤のボールペンを片手に真剣な様子で〝本日のレース〟の予想を立てていた。
加えて視線の先には、この店の店主が同様の顔で同じ新聞を広げている。

「――――良い歳した大人が何やってんだか……」
店の奥に続く母屋の扉から、栗色のツインテールを揺らした少女が現れた。
秋斗もよく知る凰鈴音だ。
鈴は徐に腰に手を当て、秋斗を含めた大人達に呆れの吐息を吐いた。
「んぁ？　なんだ、鈴か。居たのかよ」
「居たわよ！　って、いうか此処は私の家なんだから居るに決まってるでしょうが！　それと！　なんで秋斗まで競馬予想してるのよ!?」
鈴の登場に秋斗は視線を上げて、また新聞に視線を落とす。
そんな秋斗の様子に、鈴は眉を吊り上げてキャンキャンと怒鳴った。
「別に予想するくらいなら無料なんだから良いじゃん？　そう怒る事もあるまいよ？」
「そうそう。折角だから鈴ちゃんも一つ予想を立ててくれや？」
「1から18の間の番号でネ」
土曜である今日は、この店に集う一同にとっては重要な日。
秋のG1――世間では天皇賞と呼ばれる大レースの、まさにその当日である。
「お父さんも何か言ってよ?!」
「あ、いや……うむ、でも秋斗君の予想はよく当たるからなぁ……」
「お父さん！」
鈴は父親に矛先を向けるが、鈴の父――凰大力（ファン・ターリー）は苦笑を浮かべるばかり。
そんな凰親子を尻目に、秋斗はポケットに忍ばせたスマホから馬券の購入サイトにアクセスを掛ける。
電子世界で作り上げた秋斗のもう一つの顔（アバター）である『オリムラ　モモハル』の名義で、秋斗はこっそり予想した三連単の馬券を次々買い漁った。
11ブラコーンウルフ
12バーサークモッピー

２３ドラゴンスブター
２４バイオサンドウィッチ
３５アザトゥイアメジスト
３６ガンタイシルバー
４７グレートマイトカンザシ
４８ヌードエプロン
５９バインボインマヤー
５１０アリスアッパラパー
６１１メシマズクロニクル
６１２マドカギガ
７１３サンライズゴールド
７１４オータムロールペーパー
８１５ホーステイルレズ
８１６ゴシックキャット
９１７マスタングリボルバー
９１８クッコロシルバリオ

オッズでは3枠5番のアザトゥイアメジストが一番人気。そして4枠7番のグレートマイトカンザシと、3枠6番のガンタイシルバーが続く。

ラジオから流れる解説アナウンサーの声を聞きながら、秋斗は昼食に〝チンジャオロース〟を注文した。

鈴の店に訪れると一夏は酢豚を、千冬はホイコーローを、そして秋斗はチンジャオロースをよく注文する。

店の主の大力（ターリー）は本場中国で修行を積んだ本物の中華を食わせてくれる。そしてその味だけは流石の一夏も再現出来ないらしく、故に織斑家の一同は足?くこの店を訪れるのだ。

「――――さて、予想はどうなる事か。当たると良いねぇ」

「こんなモン（競馬）の何が面白いのかしら……」

鈴は秋斗の隣に座ると、肘を突いた手に顎を乗せてそう溜息を吐いた。

「ま、勝ち方が分かんねぇならつまらんだろうな」

「ギャンブルに勝ち方もクソもないわよ。ただの無駄遣いじゃない」
「……まぁ、それも確かにそうなんだが。俺、馬で負けた事一度もねぇんだよな」
「へ？」
鈴の胡散臭そうな表情に対して、秋斗は悪辣に笑みを浮かべながら言った。
数あるギャンブルの中でも〝競馬〟に関しては唯一、黒字を生み出す事が出来る。それが秋斗の持論である。
なぜか？　それは裏で当たりを絞れるスロットや、競艇や競輪の様に人間の力が強く及ぶ種目ではないからだ。
故に馬に関してだけは、秋斗は勝てるギャンブルだと常に思っていた。
ギャンブルで負けが込む人間の思考としてその際たる例が、〝己の決めたルール〟に従えない事である。次は当たる。と、そんな風に勝負の中での通算した勝ち負けを考え、予め決めた予算額――つまり最初の〝自分ルール〟を破ってしまう事が、もっとも負けに繋がる理由なのだと秋斗は思っていた。
故に秋斗は常に一度の勝負の賭け金や、その日に使う資金の限度の中でどんな形の勝ち負けが起ころうとも、一時的な結果に左右される事無く勝負を行なう賭け方を長く続けていた。
秋斗の賭け方とはつまり、一度の勝負で勝ち負けを決めてはならない事。つまり〝年間を通した勝ち負けの通算で、最終的に黒字か否かで勝敗を決める賭け方〟で、ある。
どんなに予想が高くとも単勝では絶対に買わない。
上限に設定した金額以上の資金は絶対に使わない。
酷い負けで無い限り、必ず毎週末に勝負をする。
そして一年という長期スパンで考え、その年に競馬をするかしないかを決める。
そんな買い方で秋斗は長年、競馬を嗜んできた。
無論、この賭け方で勝てるか否かは人それぞれ。それなりの馬に対する知識や経験の積み重ねも必要になるし、元よりセンスのない人間

が真似しても必ず益が出るとは限らない方法だ。
しかし秋斗にはこの賭け方が性に合っており、その賭け方で毎年黒字を作ってきた。
年間の予算に１００万を用意して、年間で５０万の黒字を出すという効率の悪いやり方だが2年、3年と続けばそれなりの額になる。まさに『ちりも積もれば山』というギャンブルだ。
大きく張って、勝つも負けるもギャンブルの楽しみ方の一つであるが、旅行先での一期一会の賭場で無い限り、秋斗は基本的に広く小さく賭けるスタイルをとる。
そして今日も、秋斗は『オリムラモモハル』という架空の名義で作ったアカウントと裏口座を駆使して、当たる確率の高い組み合わせを順に一つ一つ潰すように買った。
普通に働いて資金を稼ぐ方がよほど尊いし、益も高い。
なのでそれはまさしく〝遊び〟というに他ならない範疇の道楽だが、秋斗はストレス発散と趣味をかねて、毎週末、鈴の店に訪れる常連達と共に競馬を楽しんでいた。
「――――に、してもいつも思うが、秋坊はどこで競馬予想なんて覚えた？　ん？」
秋斗の隣に座る土建屋の社長――榊が中華ソバを啜りながら問うた。
秋斗が裏で密かにスマホを使って馬券を買っている事を知らない為、店の常連達は秋斗の事を競馬予想好きの『モノ好きな趣味を持つ小学生』としか認識していない。
故にか、榊は半ば呆れた様子で言った。
「俺にしたって競馬やマージャンも学生の時に覚えたがよ。今更だけど秋坊の趣味は早すぎるぜ。この先、碌な大人にならねェぜ？」
「そんときゃ、榊さんとこの会社に就職するからよろしく」
秋斗は左手に持った箸で榊の頼んだ餃子を一つ取り、あっけらかんと言ってのけた。
「カカカ！　アキトから貰った借りが多すぎるからネ。真面目に将来、アキトの就職先を考えてやらんといかんヨ、榊さん」

「劉さんまで……」

近所に住む中国生まれの老人――劉が笑いながら言った。

劉は鈴の一家が日本に移住する際に、その引越しを初めとする身辺の手伝いをした人物である。そして織斑兄弟がまだ幼い頃からこの近所に住んでいる胡散臭い老人の筆頭として有名な御仁だ。

独特の訛りを伴う口調と、日課のように毎日欠かさず近所の公園で演舞のような〝型〟を披露する姿。古くからその姿を遠巻きに見ていた所為か、秋斗は以前から、劉を妙な〝凄み〟を持つ不思議な老人として認識していた。――しかし交流は無かった。

劉と秋斗が交流を持つ様になったのは鈴が日本に引っ越してから。そして古くに、鈴に格闘技の手解きを指南した〝先生〟だと紹介をされて以来である。

近所の胡散臭い老人が実は拳法の使い手だった。そんな〝ロマン〟を目の当たりにした秋斗が、その心をくすぐられてしまうのは仕方の無い話である。また秋斗はその前世で人並みに〝燃えよドラゴン〟の影響を受けた身。故に程なくして、秋斗が劉とよく話す仲になったのは必然だと言える。

「――借りといえば、だ。そう言えば鈴ちゃんから聞いたが、お前さん（秋斗）、引っ越すんだってな？」

思い出した様に尋ねる榊に、秋斗は思わず鈴の方を振り返った。

鈴は肩を竦め、はにかみつつ言った。

「榊さんの会社ならトラックたくさんあるし、引越しの手伝いするなら丁度良いと思って聞いてみたのよ。悪い？」

「いや。ただ〝トラック貸してくれ〟なんていう冗談をマジで考えてくれたのかと思ってさ」

「なによ、冗談だったの？」

「まぁ、最初はな。だけど嬉しいぜ。随分と気を利かせてくれるじゃん？　ありがとよ」

近所から近所への引越しに業者を使うのも馬鹿らしい。故に秋斗は、知り合いのツテを借りて何とか引越しの手間を減らせないものかと考えていた。

榊が会社のトラックを使わせてくれるのであればそれに越した事はないと、秋斗はありがたく鈴と榊の申し出を受け取った。
「家はもう見つけてあんのか？」
「あぁ。こっから歩いて１０分ぐらいの所。向こうのデカイ通りをはさんだ先」
「最近、出来たあの新築か？　あそこを買ったのか。また、良いところに引っ越すもんだな？」
「いままでがクソ貧乏だったから、このくらいの贅沢はあっても良いだろう？　まさに、姉貴様様ってな」
秋斗は笑みを浮かべて、来週に迫った第一回『モンドグロッソ』に思いを馳せる。
千冬がＩＳ乗りになり社会的に大きな信用を得てくれたお陰で、秋斗が想像する以上に織斑家の状況は好転した。今回、日本を代表するＩＳ乗りとして出場する千冬の名前は既に、近所でももっぱらの噂となっている。
加えてブログ『オリムラ日記』のアクセスカウンターもスロットマシンよろしくブン周り、現在の織斑家には嘗ての様な生きるか死ぬかに近い貧困の影すら見えない。
「モンドグロッソかぁ……」
鈴はカウンターテーブルに頬杖を突きながら、物憂げな吐息を吐いた。
「鈴ちゃんもＩＳ乗りになりたいのかぃ？」
「ん～、まだわかんない。でも社会見学でＩＳ見に行った時の千冬さん、凄くかっこよかったしな～。私も目指したら成れるかしら？」
「成れるんじゃね？」
「夢を抱いたら先ずは一歩踏み出してみる事ネ。悩む前に進むがよろし」
秋斗と劉は軽い調子で鈴の背中を押した。
鈴がこの先ＩＳ乗りとなるのかはまだ不明である。だが未来が原作に向っているのならば、恐らくはそうなると秋斗は思った。
しかしその過程で鈴とその父――大力（ターリー）の関係が拗れると思うと、ど

うにも歯がゆさを感じた。何がきっかけで、何が原因で鈴の家が離散する事になるかは、原作知識を持つ秋斗にも分からない。

故に、秋斗も未来を前に静観する他無かった。

（――――確定した未来か）

と、秋斗は不意に思った。

ある意味で未来を知っている身だが、その実、未来を自ら変えるような事を、秋斗は今まで意識した事がなかった。

歪んだ現状を知る形の未来に繋げる事は意識しても、それからあえて大きく外れる様な事を考えなかったのだ。

なぜか？

それを考えると、秋斗は自分の中に答えが出ない事に気づいた。

「――――鈴ちゃんがＩＳ乗りになるとして、だ。秋坊は将来どんな風になりたいんだ？　まさか本気で俺の会社に入りたいわけじゃないだろう？」

「ぁん？」

榊の問いに、秋斗は思考の海から復帰した。

「……将来、か」

秋斗は咄嗟に答えに詰まった。

そんな秋斗を尻目に、店の大人達と鈴は、口々に勝手な秋斗の将来予想を立てた。

「アキトならきっと面白い大人になるネ。間違いないヨ」

「そうか？　俺は碌でもない男になりそうな気がするがな。アウトレイジに出て来る〝丸暴〟みたいな感じの。……店長はどう思う？」

「秋斗君の将来、か。そうだなぁ……一夏の方はまだ想像しやすいが、秋斗君の場合はどうだろう？　誰も想像のつかない事を平然と仕事にしてそう、かな？　ゴーストバスターズみたいな」

「お、中々良いセンスだネ店長。だったらワタシはメン・イン・ブラックを薦めるヨ。もしくは戦艦ミズーリの謎のコックだネ」

「違うわよ劉さん。秋斗の事だからもっと斜め上に行く筈よ。隕石に穴を開けに行く海底油田採掘業者みたいなアレよ！」

「……お前等、普段からどんな風に俺の事見てるんだ？」

秋斗は思わず溜息を吐いた。
「そこまで素っ頓狂な将来を御望みなら、俺は将来〝クリント・イースト・ウッド〟か〝ジェームズ・コバーン〟を目指すぜ」
「秋坊。それはちょっと無いわ……」
「ちょっと、それは無理、かな……？」
「誰、それ？」
「……」
辛辣な意見の数々に秋斗は思わず口をつぐんだ。
特に鈴の〝知らない〟という意見には、衝撃と言い換えてもいい〝強いカルチャーショック〟を感じた。
嘗て憧れたヒーロー達が、今となってはその名前すらも知られていないと言う時代の移ろいを感じた秋斗は、思わずその悲しみに顔を伏せる。
――――すると脇から声が掛かった。
「その方向性なら多分、アキトは〝ミッキー・ローク〟とか〝ヴァンダム〟とかが似合うネ。なんなら格闘技教えてあげようカ？」
秋斗は劉にポンっと肩を叩かれた。
「劉さん……」
秋斗は、思わずその手を取った。
深い皺の刻まれた手には妙な力強さがあった。
胡散臭い老中国人として近所にその名が知られる劉だが、この瞬間は秋斗の頼もしい味方だった。
「アキトには多分〝才能〟在ると思うヨ。興味があるなら、ワタシが〝ヴァンダミングアクション〟を伝授してやろうゾ」
劉の提案に、秋斗は思わず眼を見開いた。
その脇で鈴が『私が必死に勉強した格闘技の名前ってヴァンダミングアクションって言うの？　なんかやだな……』とか言っていたが、秋斗はソレを一切無視して劉に問うた。
「……俺、ヴァンダムに成れますか!?」
「なれるヨ。アキトしだいね。あ、月謝は月々3，０００円ネ」
「おいおい、劉さん。そいつはちょっと胡散臭すぎるだろう？　と、言

うかガキからたかろうとするなよ」
「いやいや、榊さん。ワタシ凄く真面目ヨ？　アキトに才能在るのも事実。大丈夫、中国人嘘吐かない」
「胡散くせぇ……」
榊は劉の物言いに眉を顰める。
そんな大人達のやり取りを尻目に秋斗は思考を加速させ、そして腹を決めた。
「……よし、決めた！」
「秋坊⁉　お前まさか――――」
「俺、将来〝ジャン＝クロード・ヴァンダム〟目指すわ」
秋斗は沈黙の末に、月々３，０００円の月謝で劉から格闘技（ヴァンダミングアクション）の手解きを受ける事にした。
「――――お前は何を言ってるんだ？」
「ジャンクロードって、誰？」
鈴の店から帰宅した秋斗は、千冬にそんな将来の決意を顕にした。
引越しに先立っての荷造りを進める一夏と千冬は、また秋斗が馬鹿な事を言い出したという呆れの表情を浮かべた。
そんな姉、そして鈴と同様にヴァンダムを知らなかった一夏に対して、秋斗は思わず唇を尖らせた。
「たまには外に出ろって散々言ってきたのは姉貴だろうが。だからちょっと現代のヴァンダミングアクションの伝道師になろうと思ってな。剣は一夏と姉貴の独擅場だろ？　だから俺は格闘技をやってみる事にしたんだよ」
「……なんだよ、ヴァンダミングアクションって？　っていうか格闘技？　そんなの何処で教えて貰えるんだ？」
「そいつは秘密。まぁ、しいて言うなら〝友達〟かな？」
秋斗は鈴の店での一幕をぼかして伝えた。
具体的には店の客に格闘技の指南が出来る人物が居たというくらいである。
ソレを伝えると一夏は言った。
「教えてもらえるなら俺もちょっと興味あるかも。俺もやろうかな」

「断る。ヴァンダムを知らんアホには絶対教えてやらん。シスコンは木刀でもしこってろ」
「え、なんだよそれ！」
一夏は秋斗の台詞の半分も理解していない様子で、ただ否定された事だけを察して唇を尖らせた。
その脇で千冬は少し顎に手を当てて黙考した。
「まぁ、また訳の判らん事を言い出したのは何時もの事だが、まぁいい。柳韻先生にも秋斗の無手術は褒められていたからな。好きにやってみると良い。部屋に篭るよりは健全だ」
「え、いいのかよ。千冬姉？」
「あぁ、かまわん」
千冬は素っ気無く言うが、少しばかり嬉しそうに口元を緩ませていた。どうやら束を髣髴とさせる引き篭もり癖を持たれるよりは、外に出ている方が良いらしい。
そんな千冬の放任的な意見に一夏は少しばかり不満そうな声を漏らすが、最終的には小さく溜息を吐いてしぶしぶ納得した。

☆

黒海の海底を進むオレンジ色の潜水艦。それは世界中のどの国にも属さない唯一の個人所有のモノだ。
平均的な潜水艦に比べると居住スペースがかなり広く取られ、内装は持ち主の趣味を反映して非常に独特。モフモフなカーペットの上には得体の知れぬジャンクパーツが所狭しと散らばり、壁際に置かれた大型機材全て、件の潜水艦を作り上げた本人による自作である。
「さてさて、状況はどんな感じなのかなぁ～っと♪」
その艦の主――篠ノ之束は、秋斗に任せた５０１番目のＩＳコアの学習状況を確認した。
織斑秋斗という少年は、自他共に〝天災〟と称される束をして不思議な少年だ。年相応という意識が薄く、その趣味は幅広く、思考はまさに常道から外れて斜め上を飛ぶ事が多い。しかし結果だけを見る

と、一見素頓狂な発想でも最終的に上手く着地してのける妙な器用さがある。

こと、発想という点においては、束は秋斗を比肩しうる者と認めていた。

故に弟子と認め、束自らＩＳコアの一つを任せた。

そんな秋斗が常に首から提げる〝懐中時計〟こそ、秋斗に任せたＩＳコアである。それは白騎士の様にＩＳとして展開する事はないが、ＩＳを凌ぐ特有のシールド防御機能と絶対防御機構は併せ持っている。

しかしその本質は秋斗の護身ではなく、秋斗から〝男〟について学習する事にある。

――――男を学習する。

それはＩＳがあるべき本来の形に進化する為に必要な要素だ。

しかし如何に束が天災だとしても、ある意味で概念的なそれを〝生娘〟が理解するには非常に難しい問題だった。

故に束は秋斗に任せた。

『――――ねぇ、５０１番ちゃん。そろそろ男の子がどういう存在か理解出来てきた？　どんな感じか教えてくれない？』

束は自作したヘッドマウントディスプレイを使い、ＩＳのコアネットワークから秋斗の５０１番が持つ潜在意識にバーチャル空間で語りかけた。

ＩＳコアには皆自我が存在する。

その搭乗者を理解する事でＩＳコアは自然と自我の形や、仮想空間内で使うアバターの傾向も独自に進化する。

まだ秋斗の５０１番は仮想空間で使う自我の形すらも曖昧だったが、しかし束の質問に応えるだけの意識は芽生えていた。

コア５０１番は、今日まで学習した事を〝映像〟のイメージで束に伝えた。

超火力で鈍足の戦車を振り回して一夏の乗ったロボットを追い詰める秋斗の姿。可変式の高軌道戦闘機で鈴のロボットを追い詰める秋斗の姿。大型筐体で二挺のガンコンを駆使し、ひたすらにゾンビを

撃ち殺す秋斗の姿。汚い部屋の中でタバコの煙にまみれながらマージャンを打つ秋斗の姿。中年の友達らと真剣な様相で競馬予想して、楽しそうに小銭を稼ぐ秋斗の姿。ゲームセンターで初心者狩りをする高校生の筐体に乱入して、狩られた初心者と同じハメ技で高校生をボコボコにし、悪辣に笑う秋斗の姿。胡散臭い近所の老人から格闘技の手解きを受け、天性の才能を発揮してメキメキと実力を伸ばす秋斗の姿。教育実習生の胸をジッと見据え、帰宅してからソレを基にしたエロシナリオを書く秋斗の姿――――。

他にも様々なイメージが束に渡された。

５０１番目のＩＳコアが秋斗から回収した〝男〟のサンプルは、何れも束の理解の外にあるモノばかりだ。

束は思わずぼやいた。

『……えっと、大丈夫、かな？』

一先ず秋斗のデータを平均化する為に、最寄りの男子である一夏の観測状況を束は問うた。

すると５０１番目のＩＳコアは一夏の観測記録を束に見せる。

学友と親しげに話す一夏。楽しそうに食事を作る一夏。帰宅してからあられもない格好で酒を嗜む千冬から視線を逸らしつつ、チラチラとその格好を盗み見る一夏。秋斗の言動や行動に時に呆れの、時に怒りの声を出す一夏。真剣な様子で黙々と竹刀を振る一夏。秋斗お勧めの映画の濡れ場から、眼を逸らす一夏。

等の記録がそこにはあった。

『ん～む。なんというかいっくんの方が平均的？　かなぁ……』

年相応なという意味では間違いなく一夏に軍配が上がるだろう。

束もそう思わざるを得ない結果がそこにはあった。

『――――お母様』

『お、もう喋れるのかい？　何々、どうしたの？』

コア５０１からの初めての質問。

ディスプレイに表示されたその文章の羅列に、束は思わず身を乗り出して尋ねた。

〝疑問〟を抱く事はそのものが自我の形成に最も重要な要素の一

つ。故に束は落ち着きを払ってコア５０１の言葉を待った。
『――――ロマンとは何ですか？』
『……は？』
『ロマンです。〝男は例え愚かしくともそれに殉ずる日が来る〟と〝男には例え負けると分かっていても、戦うべき時が来る〟と、マスター（秋斗）がそんな風に言っていました。それは全てロマンであるとも。お母様、ロマンとは何ですか？　どのような概念なのですか？』
束はこの日、生まれて初めて〝わかりません〟と返さざるを得ない質問を受けた。

23　それは『ロマン』という憧れ　後編

アラスカ条約で取り決められたＩＳの軍事利用の禁止。
その条文があれど、これより数年先の世界中の軍隊では、ＩＳを使った特殊部隊の設立が急がれた。
なぜか？
それは条文の文面が" 軍事利用を目的としたＩＳの開発は原則禁止〃という形であり、モンドグロッソに出場する為の新型ＩＳ――その〃試作実験機体〃を軍に払い下げるのであればルール上は問題ないという抜け穴を突いたからだ。
しかし幾ら条文の抜け道を突いたとはいえ、そのようなＩＳの軍事利用に難色を示すモノは確かに存在する。
故に、政治家は考えた。
〃モンドグロッソ〃における出場ＩＳの機体レギュレーションが、そのまま軍事利用されるＩＳの保持出来る性能限界のボーダーラインとなれば良い。
つまり、例えパーツの限界性能を測る為の高性能な〃試作機〃を作りそれを軍に払い下げるとしても、モンドグロッソのレギュレーションを大幅に超える性能を持ったＩＳの使用については、ある種のリミッターを掛ける事で、その性能限界の余剰部分を〃封印〃すれば良いと考えたのだ。
――――後に世界中のＩＳの〃統一規格〃となるモンドグロッソの出場レギュレーションであるが、現時点ではまだそれ程に細かく決まっていたわけではなかった。故に、後の世の人間が今日を振り返ると、栄えある第一回大会の模様は、酷く滑稽でいて、魅せモノとしてはある意味で３流に映るイロモノな大会であった。

☆

遂に開催されたモンドグロッソ。
その模様を一夏と秋斗は、他の出場者の親族と一緒に東京万博跡地

のアリーナの貴賓席で見ていた。
この日の為に海を渡って各国のＩＳが日本に到来した。
アメリカの〝スターエンジェル〟。
イギリスの〝クインズガウン〟。
フランスの〝ジャンヌメイル〟。
ドイツの〝デアメテオール〟。
イタリアの〝ベルジネ〟。
ロシアの〝スヴィトラーナ〟。
等、他にも様々――――。
「――――機体もそうだが、こういうのって結構お国柄が出るよな？」
「おい、千冬姉が出てきたぜ！」
一夏は秋斗の肩を叩きながら、デジカメを取り出した。
日本製ＩＳ――〝秋桜〟を纏った千冬を先頭にする日本代表選手団の入場。
その模様を一夏は懸命に撮影した。
そして秋斗もその隣でスマホで写真をとりつつ、殆どリアルタイムでブログ『オリムラ日記』に開会式の模様を持ち込んだノートＰＣ（トチロー１号）からアップした。
出場する国家は計１２カ国。
ＩＳの登場からたった数年で、世界は栄えある試作一号機の開発に成功し、遂にこの日を迎えた。
高速飛翔部門、近接格闘部門、狙撃部門、そして総合戦闘部門――――。
それら四つの技能を駆使する世界初のＩＳ競技大会『モンドグロッソ』。
その模様は〝全世界同時中継〟という類を見ない態勢で開かれた。
選手宣誓が始まる――――。
代表としてそれを行なうのはＩＳを世界に送り出した日本の選手団のリーダーを務める千冬であった。
千冬は緊張した面持ちを浮かべつつも、堂々とした佇まいで力強く宣誓の言葉を述べた。

その姿は、もはやひとつの地方都市に収まる非力な少女ではなかった。日本の、そして世界の最先端を走るコレからの〝強い女性像〟そのものである。

まだ開会式だというのにも関わらず、至る所で千冬の堂々たる姿に憧憬と羨望を抱く少女達が大勢いた。

（――――長かったよなぁ）

秋斗は万感の思いで、この日の到来を素直に喜んだ。

あの日――前世の記憶に覚醒した日に秋斗は、己（秋斗）というイレギュラーの存在故に、織斑家のあるべき姿を変えてしまったと自覚した。その頃の悲壮な模様は、今でもよく覚えている。

それ故に秋斗は今日までの間ずっと、破綻寸前の家を何とか存続させようと奮闘を続けた。

秋斗に求められたのは〝未来を変える〟事ではなく、〝未来を繋げる〟事。それは変える以上に困難に見舞われる日々であった。

なぜなら未来は容易く変わり、移ろい行くものであるからだ。

故に今日の〝結果〟が、確実にそうなるとは決して言い切れない。

だが秋斗は、この日――遂に千冬が〝ブリュンヒルデ〟と成る事を確信していた。

晴天の空を、友禅にも似た白と紫を纏ったＩＳが舞う――――。

日本の文化を象徴する〝着物〟のような外観のＩＳ秋桜は、他の国が作ったＩＳに比べると聊か貧弱な印象だった。が、しかし目に見える以上の性能を道具の内に秘めるのが、古くからの日本のお家芸である。無論、秋桜にもまさしくそんな日本を体現する比類なき性能が備わっていた。

千冬は一振りの日本刀を右手に下げた。

着物の様な外観のＩＳと、たった一振りの日本刀を構える千冬の出で立ちに、多くの外国人観戦者が『サムラーイ！』と、沸き立った。

千冬は観客の声を無視して一足飛びで刀を振るう――――。

その剣は一夏も秋斗もよく知る『篠ノ之流』の上段剣技だ。

ＩＳの高い速力と旋回性能。それらを駆使して、縦横に連続して振るわれる秋桜の刀は、何処までも流麗であった。そして対するＩＳの

エネルギーシールドをたった一撃掠めただけで、大きく切り裂いた。
続く二回戦、三回戦と、千冬はＩＳの持つ『瞬時加速』という特殊な推進技法に剣技を組み合わせた〝ＩＳ用抜刀術〟を披露し、観客を多いに湧かせた。
『瞬時加速』とは惑星の重力圏から緊急離脱する為に束が付与させた推進技術である。
それは地上の――しかもアリーナという閉鎖空間の中で使うには、非常に制御の難しい技だ。故に理論上では可能でも、実際にその技法を戦術として意図的に駆使して戦う選手は、他にいなかった。
『瞬時加速抜刀術』――それは原初と呼ばれる近接戦闘術の奔りとなる。そしてＩＳならではの技術と日本古来の剣術を組み合わせた、新世代の〝実践戦闘技法〟として、後の〝一撃必殺剣〟と共に千冬の代名詞と化した。
――他にも数多くの次世代に続く新しい発見が、大会中の至る所で見受けられた。
各国のＩＳはその基礎的な部分は共通しても、付与し、重視したそれぞれの性能によって、その外観が大きく異なっている。
例えばアメリカ製の〝スターエンジェル〟は強力な推進性能と大口径拳銃を携行し、まさに〝アメリカン〟な印象の強い機体に仕上がりだ。例えるなら豪快なボディにハイパワーエンジンを乗せて転がすキャデラックに近いだろう。また量子格納技術を駆使した〝クイックリロード〟という技術と、それを併用して行なわれる銃撃の嵐は圧巻で、その圧倒的な火力と弾幕の前には、多くの観客が顔を青ざめさせた。
またイギリスの〝クインズガウン〟は、その出で立ちに鋭さと曲線的な流麗さを兼ね備えている。世界で唯一の〝女王〟を有する先進国という自負故か、女性のみに纏うことを許されたＩＳに付与させる性能も、何処と無く〝象徴的〟な形でたった一つを突き詰めている。ソレを証明するかのように、レーザー兵装を用いた機体は本大会ではイギリスが唯一であった。
ドイツの機体は極めて知的に堅実な造りで、冒険はせずにＩＳの基

礎理論を下に一つ一つの性能を模範的な形で高く纏めてある。しかしデザインセンスは圧巻で、他の国々が頭部を覆うバイザー状のヘルメットを採用する中、ドイツの〝デアメテオール〟だけは、同乗者の顔が大きく剥き出しに見える機体デザインだ。美女がＩＳを纏って戦う姿に多くの男性客の目が釘付けになり、大会中の瞬間的な視聴率はドイツの〝デアメテオール〟が掻っ攫ったとも言えるだろう。――また、この衝撃が後に第二、第三世代機の開発に強い影響を与えたと、一体この時誰が思っただろうか？

そんなこんなで結果的にＩＳの技術交流会とも言い換えられる第一回目のモンドグロッソは、大盛況の下に終了した。

狙撃部門ではイギリス。

高速飛翔部門ではアメリカ。

そして近接格闘部門と総合戦闘部門では、日本が優勝を掻っ攫った。

それぞれの部門の優勝者には〝戦乙女（ヴァルキリー）〟の意匠が凝らされたメダルが贈られた。

そして総合部門の優勝者には〝ブリュンヒルデ〟の称号とメダルが贈られた。

表彰台の上に立ち、この日〝世界最強（ブリュンヒルデ）〟の頂に立った千冬は、小さな苦笑と、そして誇らしげな笑みを弟達に見せた。

「――――優勝おめでと、世界一位さん」

「おめでとう！　千冬姉！　スゲーよ！　本当にすげーぜ！　世界一だぜ？　世界一！」

「あぁ、２人ともありがとう」

大会が終った後、各国のインタビューワーの声に応える記者会見が開かれ、そして織斑千冬の名前は全世界へと広がった。

千冬がまともに帰宅出来る様になったのは、大会が終了してから４日後の事であった。

☆

「いや～めでたい！」
「めでたいネ、めでたいネ！」
「千冬さん！　おめでとう！」
鈴の実家の中華飯店はその日、貸切となった。近所に住む多くの千冬のファンや嘗て篠ノ之道場で凌ぎを削りあった仲間達が一同に介し、飲めや歌えやのどんちゃん騒ぎと相成った。
特に古くから織斑家の過酷な環境を知る近所の知り合い達は、これ程の大躍進を遂げた千冬に惜しみない賛美のお言葉を送っている。
千冬はそうした面々に囲まれ、苦笑と困惑した様子で一つ一つ言葉を受け取った。
元より、あまり褒められ慣れていないのだろう――。
秋斗はこっそりグラスに注いだ紹興酒を嗜みつつ、遠巻きにそんな千冬と周囲の様子をそっと眺めていた。
一夏は大力（ターリー）と一緒に厨房に入って、手際を学びながら祝いの一品を作っている。
鈴は独楽鼠の様にチョロチョロと参加者の間を走り回り、グラスを変えたり料理を運んだりと店の看板として動いている。
土建屋の榊は身振り手振りで試合の様子を思い出すように仲間と語り合い、劉老人は試合に出たＩＳ操縦者の誰が一番美人であるかに周囲と議論を重ねている。
「……あ～、酔ってきたな」
子供の身体である所為か、想像していた以上に酔いが回る感覚が早かった。
秋斗はふわふわと足元が軽くなる様な、気持ちの良い酔いの感覚に身を任せてまどろみ、そして不意に視界の端に映った灰皿に置かれたまだ長いシケモクを見て、思わず「吸いたいな……」とぼやいた。
その矢先――――。
秋斗のスマホに電話が掛かってきた。
「――――ぁん？」
秋斗はスマホを取り出した。
ディスプレイに表示された名前は篠ノ之束であった。

『やぁやぁ、あっくん。久しぶりだね♪』
「おぅ、どうしたん？」
『いや～ちょっと相談があってね。それより今何処にいるの？　なんか騒がしいけど――――』
「ん？　あぁ、モンドグロッソで姉貴が優勝したからな。そのお祝いさ」
『あぁ、そうなの。それでなんだ』
「喧しいならちょっと場所を移すから、少し待ってくれ」
『了解、了解♪』
秋斗は席を立った。
「あれ、何処行くの？」
「ちょっと、クソ堕ろしてくる」
「あっそう」
呼び止める鈴にそう言い残して、秋斗は店のトイレに篭る。
そして再びスマホを耳に当てた。
「――――で、なんだっけ？」
『いや、ね。実はあっくんに託したコア５０１の事なんだけど、ちょっと困った事聞かれちゃってさ～』
「困った事？」
『〝ロマン〟とは何かって質問なんだよねぇ、コレが』
「はぁ」
束は言った。
秋斗に託したコア５０１が生まれて初めて疑問を持ち、それに対する上手い答えが見付からない。
〝ロマン〟というのはヒトの数だけ千差万別であり、どれ一つをとっても『共通』する答えがあると思えないからだ。
ましてコア５０１の自我はまだ生まれたばかり。
冗談交じりの適当な返事を返して、〝アホの子になっては困る〟と束は言った。
「――――別に良いんじゃね。適当で？　〝それは宇宙だ〟とか言っとけばいいだろうに？」

秋斗はほろ酔い気分でそう言葉を返した。
『何言ってるのさ。此処が正念場なんじゃないか！　真面目に考えてよ、あっくん！』
「……何、怒ってんだよ」
『怒るよ！　凄く真面目に考えてるんだよこっちは？　そもそもあっくんがロマンとか吹き込むから、ややこしい事になってるんじゃないか！』
「でも〝男〟を理解させるんだろ？　ロマンへの理解は要るだろ？」
『っ！　そうだけど……そうだけどさ――――』
束は歯がゆそうな声を出した。
一見すると〝らしくない〟束の様子に、秋斗は思わず首をかしげる。
「一体どうしたよ？　普段ならお茶らけてる博士が、今日は何時に無く真面目じゃねぇか？」
『そりゃ、ここの所しばらくずっと真面目なトーンで〝男の子のロマン〟についてどう概念的に説明しようか悩んでたんだもん……。こうもなるよ』
束の声の中には明らかな疲れが混じっていた。
『せめてもう少し自我が発達してくれる頃に尋ねてくれたら、まだ答え様もあったんだけどね。今の段階で適当に答えを返したら、その言葉が自我の根幹になっちゃうんだよ。だから流石にこればっかりは真面目にならざるを得ないよ』
「……まるで〝オカン〟みたいな事を言うのな？」
『へ？』
秋斗は思わず苦笑混じりに言った。
世間では〝天災〟と言われ、自由奔放、天衣無縫を地で行く束が、この時は子供の将来を真面目に考える世間の母親に思えたからだ。
母になると女は変わるという。ＩＳコアが本当の意味で束の〝娘〟に等しいのならば、この変化もありえるか、と秋斗は内心で思った。
「そう心配しなくても大丈夫だと思うけどな？　親が居なくても子供は育つって言うだろ？　俺の家を見てみろ。姉貴が世界一位に成れ

る程度には立派だろうが？」
『……なんか、間違ってる気がするけど凄い説得力だね』
「実際、そんなもんだ。ＩＳコアってのは生き物みたいに作ったんだろ？　だったら生き物と同様に接してやれば良いのさ。ロマンが分からねぇって言うなら、どんな答えでも返してやれば良い。大体、ロマンなんて人それぞれなんだ。自分で見つけるモンにしか〝正解〟はねぇよ」
『……じゃあ、あっくんの考えるロマンってどんなものなの？』
「俺の？」
秋斗は束の神妙な様子の問い掛けに、ふと、宙に視線を移して考えた。
「――――昔、裸でサボテンの上に飛び降りた男が居て、ソレを見てた奴が『何でこんな事をしたんだ？』って、尋ねた。そいつは『その時はそれで良い』と思ったそうだ」
『……それはどういう意味なのかな？』
「分かんないか？　傍から見れば馬鹿な行いでも、自分が大切だと思ったなら素直に実行すれば良いって事。例え道楽でも損な事、馬鹿な事を態々やってのける奴はそうは居ない……だからそんな生き方を実際にやって楽しんでる奴には憧れる。そういう生き方にロマンを感じる、かな？　ま、女には分からねぇか」
『……むぅ』
束は飲み込み辛そうな声を出した。
「俺からすると、博士の作ったＩＳこそ、ロマンの塊だけどな？　宇宙に行ってどうしたいか以前に、宇宙に行きたいってだけでその〝翼〟を作っちまったその行いこそがロマンに殉じてるよ」
『……あぁ！　確かに!?』
「今、気づいたのかよ」
灯台下暗しとも言うべきか、難解な思考に囚われてすぐ脇に転がっていた答えに気づかなかったらしい。
そんな束の感嘆とした声に、秋斗は思わず苦笑を漏らした。
「ま、あれだ。コア５０１に〝お前がロマンだ！〟って眼を見て言っ

てやれ。それでもわからねェならさっきの俺の台詞を伝えれば良いと思うぜ？　大丈夫、博士の作ったＩＳはアホにはならねぇよ。俺を信じろ。博士を信じる俺を信じろ」

『な――っ!?』

秋斗は酔いの所為か何時に無く饒舌になっていた。

だからこそ、そんな何時もに比べてそんな荒っぽい台詞が出た。

電話の奥で何かモノをひっくり返すような音が響いた。

『な、何言ってるのさ、あっくん！』

「ちなみに今の台詞も、一種の〝男のロマン〟を表す台詞だな。まさか人生で使う日が来るとは思わなかったけど。ま、そういうわけだから。コア５０１にはそう伝えといてくれ」

『あ、うん……分かったよ』

束はしおらしい様子で、小声でそう返した。

そして呼吸を整えるように一拍置いて続けた。

『――ちなみに今のやり取りとかは全部５０１ちゃんも観測してるから。あえて伝えなくても伝わってると思う』

「あ、そうなん？」

『そう。今後はソレを意識して行動して欲しいかな？』

「ふ～ん」

束の言葉を聞いて、秋斗は首から提げた懐中時計の文字盤を撫でた。

「そう言うことなら話は早い。マジで育てるような〝意識〟で過ごせばいいのな。デジモンみたいな感じで？」

『あ、うん。近いと思う。でも５０１ちゃんは一応女の子なんだからそこは考えてあげてよ？　へんな事を吹き込み過ぎないでよね？　理解不能で後でへんなエラーが出たら、実験も意味が無いから』

「女の子ね。了解了解。つまり俺はリュック・ベッソンの『レオン』に出て来るジャン・レノみたいな、カッコいいおっさんになればいいわけね。任せろ」

『……あっくん、本気で分かってる？　なんか、今日ちょっと変だよ？』

「あ～少し酔ってるかもしれない」
『酔ってるって……お酒飲んだの!?』
「目の前に紹興酒があったからな」
秋斗はあっけらかんと言った。
それからしばらくコア５０１に対するアプローチの具体的な注意、改良点を話して、電話を切った。

「――――まだ心臓がドキドキする」
不整脈や動悸による息切れに悩むほど老けていないつもりだが、突然自身の身に起こった強い衝動に束は焦りを感じていた。
――――この感覚はなんだろう?
顔が火照った。鼓動が止まらない。そして秋斗の先の台詞が耳から放れない。
束にとってそれは初めての感覚だった。否、感情とも言い換えられる。
通話が終った後、ソレは何時もの事なのに、不思議と今日は〝名残惜しい〟と感じてしまった。そして同時に、また〝話したいな〟と思った。
「……どうしよう」
何に対しての〝どうしよう〟なのか、束は自身でもよく分かっていなかった。
ひたすらに身体を駆け巡る強い焦燥の感覚に、どうしようもない歯がゆさを感じていた。

24 『少年』時代の終わり

「――――これで、この家で暮らすのも最後だな」
「お～い、秋斗！　写真とるからコッチ来いよ！」
「あぁ」
あくる日の朝。長年過ごしたアパートを前に秋斗は感慨深い溜息を吐いた。
隣室や上の住人が立てる物音が響き、狭い湯船、狭いキッチン、狭いベランダに感じた多くの不便。それらも今となっては良い思い出だ。
物心ついた時からこのボロアパートだが、もう二度と帰宅しないと考えると少しだけ憐憫を感じる。不満はアレど、やはりそれなり以上の〝愛着〟は感じていたらしい。
と、秋斗はそんな感傷に浸りつつ、一夏の呼ぶ声に振り返ってその方に足を進めた。
「じゃあ千冬姉はそこ、秋斗はそっちな」
「何も、こんな所でまで写真を撮らなくても良いだろうに？」
「なに言ってんだよ、千冬姉。思い出を残しとけって言ったのは千冬姉じゃないか？　ほら、ぶつくさ言ってないで並べよ」
「わかった、わかった」
千冬は呆れた様子で、デジカメを構える一夏に吐息を返した。しかし呆れは感じていてもそんな弟の様子が微笑ましいのか、千冬は薄っすらと口元に笑みを浮かべていた。
秋斗と千冬がアパートの入り口の前に並んで立つ。
一夏は被写体の収まり具合を確認してからタイマーを入力して、小走りで姉弟の隣に並んだ。
パシャリ、とフラッシュが焚かれる。
晴天の下。この日、織斑3姉弟は遂に新居へと引っ越した。
新たな住居は二階建ての一軒家。しかし二階の天井裏に続くロフトがある為、ある意味で三層構造となっている。
一階部分は広いダイニングキッチンとリビングを併合したワン

ルーム。
二階部分には姉弟それぞれの〝専用〟となる個室が3つと、クローゼットが一つ。
風呂は大きく、トイレは一階と二階に一つずつ。
引越しの業者を介さずに、近所に住む土建屋の榊を初めとする住人の手助けを借りて、織斑家の引越しは行なわれた。
「一夏！　こっちの荷物は何処に置けば良いの!?」
「それは台所用品だからとりあえず一階部分に集めてくれ。皿とか入ってるから落とすなよ、鈴！」
「わかってるわよ！」
応援に駆けつけた鈴を招いて新居に集った一同は、早速荷物の運び入れを行なった。
「秋斗、こっちの荷物は何処に下ろせば良い？」
「それは一夏の荷物だからとりあえず2階の廊下に集めといてくれ。俺か一夏の名前が書いてある荷物は全部2階でよろしく」
「わかった」
「――――に、しても、姉貴は良くあんなデカイ箱運べるよな」
「……何か言ったか、愚弟（秋斗）？」
「別に何にも」
「おい、秋坊！　荷物はコレで全部か？」
「あぁ、ありがと。榊さん。助かったぜ。お礼に今度、飯でも奢るわ」
「抜かせ、ガキに奢ってもらうほど卑しくねぇよ！」
榊の会社が有する大型トラックに載せた家財道具を、一同はせっせと家の中に運び入れる。
以前住んでいたのが小さなアパートである所為か、それ程大掛かりな家具を直接運ぶ作業はほとんど無い。
引越しに先立って古い家具の多くは処分したからだ。しいて言うならダイニングテーブルと昔懸賞で当てた大型のテレビぐらい。
およそ二時間ほどで引越しの荷物運びは終了した。
しかし、忙しいのはこれからである。
「――――御疲れさん。差し入れだ」

秋斗は愛飲するブラックの缶コーヒーを全員に配った。
「すまねェな、秋坊」
「いいって事よ。頼んでるのはこっちなんだからな」
「で、この後の予定は？」
「もうそろそろ『密林』で買ったソファやら棚やらが届くから、それの到着を待って再開って所かな？」
「そうか。だったら先にトラックを会社に戻して来るわ」
軽く手を上げ、榊は引き連れた数人の会社の部下を残して、一旦織斑家新居を離れた。
「はぁ、しんど。それにしてもアンタ、よくブラックなんて飲めるわね？」
「なんだ、鈴は飲まないのか？」
「いらないわ」
差し出した缶コーヒーを突き返された秋斗は、怪訝な表情で尋ねた。
鈴は手拭で汗を拭いながら、言った。
「女の子に飲み物出すなら、せめてブラックじゃなくて微糖ぐらいにしなさいな。そういう気の利かせ方が出来ないとモテないわよ？」
「あっそうなん？」
「そうよ」
小学校も高学年に差し掛かると、男子よりも女子のほうが背が高くなる。気づけば鈴の視線が、秋斗とほぼ同じ高さになっていた。
密かにそれに気づいた秋斗は「思春期って奴ね」と、恋に恋する年頃になった友人の成長に内心で小さく驚いた。
「悪かったな。姉貴はブラックでもゴクゴクいくから、まったく気にした事がなかったぜ」
「……千冬さんは、別よ。たぶん」
秋斗が豪快にブラックコーヒーを煽る千冬を指差すと、鈴は視線を逸らしながら苦しそうに言った。
流石に織斑家との近い付き合いが1年も過ぎると、千冬のカッコ良い部分と残念な部分が見えてしまうらしい。千冬に憧れている鈴と

しても、やはり女としてちょっと……と、思う部分はあるようだ。
秋斗は鈴につき返された缶のプルタブを開けた。
「よぅ、秋斗！　そろそろどっちがどの部屋使うか決めようぜ？」
そこにバタバタと階段を駆け下りて一夏が現れた。
二階建ての家に住むのを誰よりも心待ちにしていた男である故に、その顔はとても輝いていた。
「別にどっちでも良いよ。一夏が好きな方使えばいいさ。そうだろ、姉貴？」
「あぁ。好きに選ぶといい」
「ホントか？　じゃあ一番デカイところ使って良いのか？」
姉と弟の返事を聞いて、一夏は嬉しそうに返す。
一番デカイ部屋と言っても他と比べて一畳ほどデカイというだけであって、別にそれ程の大きな差がある訳ではない。
しかし本人が強く希望するならと、秋斗も千冬も一夏にその部屋を譲る事にした。
「何よ、アレ？　まるで玩具買って貰った子供みたい」
「そう言うなよ。微笑ましいだろ？」
「ま、それは確かね」
鈴は一夏の様子に思わず笑ってみせる。
思春期に突入した所為で少し大人ぶりたいのか、秋斗は鈴の台詞も十分に微笑ましいと密かに思った。
――それから程なくして、秋斗が『密林』で注文した家具が届いた。
食器棚、ダイニングテーブルと椅子×４、キャビネット複数、各種カーテン、カーペット×４、ソファ、ベッド×３、机×３。等、様々――。
秋斗は新居に引っ越すという事で、それに相応しい新しい家具を、競馬やエロ同人サークル、原型師としてのロイヤリティー、株式の儲け等の貯金を吐き出して一斉に買い揃えた。
この時点で秋斗の使った貯金は２００万円を超えるだろう。
それ程の大出血に、千冬は無言で秋斗の頭に拳骨を落とした。

届いた家具を組み立て、運び入れ、そして整理を終えるころにはすっかりと日が落ちていた。

結局作業の全てが終ったとは言えず、細かい整理等は翌日に持ち越された。しかし、人手が必要な作業はコレで終了したと言えるだろう。

その晩。

一夏は引越し作業を手伝ってくれた面々に、新しいキッチンを使って夕食を振舞った。※その際に榊を初めとする近所の住人達に、千冬がひた隠しにしてきた料理を初めとする家事の不得手が露見したが、それについては割愛する。

そうして全ての作業が終わり、織斑家の一同を除いて全員が帰路に着いた後。秋斗は新たな己の城と化した自室のベッドに横たわり、万感の思いで深々と吐息を吐いた。

「はぁ、これでようやく終ったぜ」

思えば長い道のりだった。初めは薄汚いボロアパートから始まったのだ。それが今は、エアコン完備にベッドを置き、特注の２０００×８００の机と作業椅子、個人用の模型ペースを備えた鍵付きの個室でゆったりと過ごす事が出来るのだ。

しかも一家３人で、である。

これほどの織斑家の進歩に、感動するなと言う方が無理である。

「……俺、超頑張ったよな？」

誇りたいと思って始めた事ではないが、それでも己を誇らしく思う。

引越しを始めようと思った最初の動機も、今は余り考えたくは無かった。

「――――しっかし、金が減ったな」

秋斗はスマホから表と裏の口座の残金を見た。一時期は１０００万を上回る預金があった口座の中身は、既に１００万を下回っていた。

引越しの頭金。そして新調した家具。それらも安くはなかったが、厳密に言うとそれで全てを使ったわけではない。

一応投資など種金は別に保存してあるのだ。
が、実際に動かせる額としてはもはや殆ど残っていない状態だ。というのも原因は最後に買った個人用の趣味――２１インチのモニター３枚と、ゲーム用のデスクトップ、左手デバイス、ゲームマウス、メカニカルキーボード、無線ＬＡＮルーター、ヘッドセット、５．１サウンドスピーカー、インクジェットプリンター、外付けＨＤＤ×２、ペンタブ等を買ったのが原因なのだ。
しかしこれらを買わなければ、特注のＰＣデスクを買った意味が無い。
秋斗は束から贈られたノートＰＣ（トチロー１号）と、スマホ（トチロー２号）、タブレット（トチロー３号）を世間から秘匿する活動用に置き、新たに買ったデスクトップ（トチロー４号）を個人的な道楽に使い分けるつもりだった。
「ま、無いなら稼ぐしかないな」
秋斗はふっと悪辣に笑みを浮かべて、ベッドから身を起した。
金が無くなったとはいえ、一時期の本当に何も無い状態から資金を作った時に比べれば、今の環境は月とすっぽんにして雲泥の差がある。
加えて先のモンドグロッソの影響で世界中の株価も軒並み大きく変動しているのだ。世間は第一世代機を改良した第二世代機の開発に動き始め、その結果以前塩漬けにしておいたデュノア株も順調に育ちつつあるのだ。故に、損失を補填するだけの要素は幾らでもあると言えよう。
しかも以前に比べて、急ぐ必要が無い。単純に今は秋斗個人の金が無いだけで、織斑家自体には千冬の稼ぎという磐石な基盤が既にあるのだ。
故に、秋斗は微塵もこの状況に不安など感じてはいなかった。
「やっぱり、慣れ親しんだところから始めてみようかね。久しぶりに模型でも売ってみるか」
秋斗は新しい作業場の調整もかねて、久しぶりに改造模型を作る事にした。
ネットオークション界隈での改造模型販売は、既に見せしめの逮捕

者が出た事もあり、随分と下火になっている。なので以前と同様の短期集中の限定という形で、謎の改造模型師〝アーキトクテ〟が復活するのも悪くはないだろうと思ったのだ。

リスク回避の意味でも、師匠から学んだ電子工作術の練習になる。アカウントを架空の人間に挿げ替えて、身元割り出し不可能な逆探知防止処理をする程度の事は十分可能――。故に、そこに躊躇う意味すらもない。

「そんじゃぁ、ま。久しぶりにやりますか！」

秋斗は以前の家から捨てずに持ち込んだジャンクパーツとパテの余りを使って、新たな作業場での作品作りに没頭した。

――そして季節は移ろい行く。

秋斗の少年時代が終る頃に、秋斗にとって『最後の試練』がゆっくりとその鎌首をもたげようとしていた。

25　移ろい行く『時代』

『――――先程入った情報によりますと、欧州鉄道のイギリス東部〝アッシュフォード〟とフランス北西部〝カレー〟間を繋ぐ英仏海底トンネル内部で亀裂が発生し、流入した海水によって走行中の列車が脱線するという事故が発生しました』

番組を中断して報道機関のアナウンサーが、事の顛末を説明した。

鬼気迫る様子の報道の機関の話によると、ドーバー海峡の海底に通された鉄道用海底トンネルの内部で突如、亀裂が発生し、トンネル内部に海水が流入。それにより走行中の列車が脱線、緊急停止を起した。そして停止した列車内部の乗客達は自力での脱出を図ろうとするも、流入した海水によってトンネル内が漏電している為にそれも不可能と判断。故に列車内部に取り残される事になったと言う。

浸水の影響でトンネル内部が水没するのも時間の問題であるが、同時に現場に救助部隊を派遣するのも困難という状況に、英仏の両政府は共同で〝ＩＳ〟を用いた作戦部隊を編成し、共同で救助作戦を敢行した。

――――しかしこれらの懸命な救出活動も空しく、乗客の半数は水没する列車と共に命を落とした。そしてこの事件が後に、欧州最悪の列車事故として歴史の教科書に残る事になる。

また同時にこれ程の災害で半数の命を救って見せたＩＳの〝可能性〟に、英仏両国――ひいては欧州圏全体が、これからの『ＩＳ社会』に対する先進的な高い意識を持ち始めた。

「――――ひでぇ事件だな」

織斑秋斗は株式市場を見て、先の英仏海底トンネル事件の爪痕を思い知った。

列車の乗客には欧州経済界でも有力な人材も多く搭乗し、同時に邦人も搭乗して居た為、結果として事件後はその犠牲の影響が直接市場に反映されたのだ。

秋斗が欧州圏で持つ株式はフランスのデュノア社がもっとも多い。しかし決してそれだけではない。秋斗が持つ日本株――特に欧州圏

に支社を持つ日本企業株も間接的なダメージを受けたのだ。
秋斗は損切りという形で他の投資家達の動きに合わせ、潰れそうな保有株を売り飛ばし、そして同時に再度、この事件後に隆盛するであろう企業に再投資した。
また秋斗は、この〝列車事故〟というキーワードで原作のある〝キャラクター〟の存在を思い出した。
名前はセシリア・オルコット。イギリスの貴族令嬢である。作品に登場した段階では高飛車で高慢。日本人を〝文化的に後進な、極東の猿〟と吐き捨て、紆余曲折を経て一夏ラブになったヒロインだ。
秋斗は思い出したそんなヒロイン――セシリア・オルコットの最初の性格に、思わず苦笑を漏らした。
確かに〝自動車〟も〝戦艦〟も〝学校〟のチャイムのキンコンカンコンの音も、全てイギリス発。今でこそ日本車、そして戦艦大和が世界有数となったが、その起源はイギリスにあると言える。そう考えると、日本は確かにそれを後から〝習った〟形になるからだ。
――もっとも、改良する事に掛けては世界有数の変態的国家である日本に教えた所為で、そのルーツとしての影が薄くなった事まではフォローできない。
そう考えると、秋斗はセシリアが日本を文化的に後進と言うのも、それ程に的外れな意見じゃないと思った。
今回の列車事故で既に英国政府は事故の再発防止と同時に、ＩＳを用いた特殊作戦チームの設立に重きを置いている。そんなイギリスの動きに他のＥＵ参加国が大人しくしているだろうか？　――否。それは確実に無いと言える。
秋斗は間違いなくイギリスを発端として、欧州圏のＩＳ開発競争は激化するだろうと思った。更に西側のそんな動きにアメリカとロシアの２大強国が黙って居る筈も無いと。そしてアメリカとロシアが動けば、当然日本を初めとする国々もそんな動きに倣っていくと思った。
そもそもイギリスがもう少し大人しければそんな未来は無い。
が、しかし現時点では〝女性にしか搭乗出来ない〟ＩＳを、世界で

唯一〝女王〟を有するあの先進国（イギリス）が軽視する筈が無い。
それを証明する様に英国政府は、列車事故の後に自国の１０代女性（ティーン）を対象として、積極的な形でＩＳ適性検査に登録参加させ、今まで以上に国一丸とした形で、ＩＳ搭乗者の教育を推進する旨を発表した。
そんな欧州のうねりを起点に、結果としてコレからのＩＳ社会と、それに付随して生まれる淀み――『女尊男卑』の激化が始まると思うと、秋斗は憂鬱な気分になった。
「世間って奴はホントに面倒くせぇよな。もうちょっと気楽に生き易くならんもんかね？」
秋斗は懐中時計（５０１）を握りこみ、どんどん男に面倒くさくなるであろう社会の動きに、陰鬱とした溜息を吐いた。
――陰鬱と言えば、秋斗の胸にはもう一つ〝陰鬱な懸念〟がある。
「第二回モンドグロッソ、か……。どうしようか――」
秋斗は深々と、もう一度溜息を吐いた。
それはセシリア・オルコットの名前を思い出したと同時に思い出した〝織斑家最悪の事件〟である。
ドイツでの大会決勝で一夏が誘拐され、千冬が大会を放り出すという事件だ。
一夏を誘拐したのは亡国（なにがし）某――秋斗も詳しい名前を覚えていないテロリスト集団である。
そしてその目的は不明だ。
少なくとも現時点で秋斗に分かるのは、物語で言うところの〝悪役集団〟である事のみ。
「……これ絶対、俺も巻き込まれるよな？」
秋斗はそうぼやきながら自室のベッドに四肢を放り投げた。
テロ集団が原作で一夏を誘拐したのは恐らく、千冬の〝唯一の親族〟であるからこそ。
ならば織斑家のイレギュラー要素である秋斗も、それに眼をつけられない筈がない。
更にいえば、原作に不要なイレギュラー要素として、この事件が原

因で秋斗の存在が消える可能性も無きにしも非ずだ。
――――どうしよう。と、秋斗は何時に無く真剣な形相で天井を睨んだ。
（……流石に今更、素直にくたばってやる気はねぇ。パッと思いつく限りだが、姉貴の応援にドイツに行かないっていう手があるな。まぁ、一夏はゴネるだろうが、最悪出発前にセガールよろしく手足を軽く折ってやるしかねぇ。……いや、ちょっと待て。確か誘拐事件の後で、姉貴はドイツに出向するんだよな？　ドイツに行って軍の教官をするんだっけか？　それって原作で確か――――）
秋斗はうろ覚えの原作知識を、記憶の底から無理やり搾り出した。
そしてラウラ・ボーデヴィッヒという一夏の5番目のヒロインの存在を思い出した。
そして、ラウラ・ボーデヴィッヒがドイツで千冬の指導を受ける事自体が、原作の中ではかなり重要な要素の一つである事に気づいた。
「……つまり一夏がドイツで誘拐されてくれないと、ラウラの未来やその他云々が大きく破綻する可能性があるってことか？」
秋斗はそこまで考えて、一夏のヒロインの多さと状況の面倒くささに思わず舌打ちした。
「本当に面倒くせぇな。ヒロイン多すぎだろ？　なんだよ〝5人目〟って。ふざけてるのか？」
己の身の安全と一夏の安全を取るなら〝ドイツに行かない〟という選択肢一択。だがヒロインの未来を護るのであれば、一夏もろとも秋斗もテロリストに誘拐されろという選択が必要になる。
百歩譲って秋斗自身のヒロインであるなら良し。それなら多少は命を張ってやる事もやぶさかではないからだ。
しかし何が悲しくて他の男の――しかも〝5人目〟のヒロインの為に命を張らなければならないのか？
ソレを考えると、秋斗は心の底から一夏を腹立たしく思った。
「――――アイツ（一夏）いっぺん、マジで死ねば良いのにな。何で俺がこんな目に……」
どこぞのニューヨーク市警の禿げた不死身男ではないが、秋斗は思

わずそんな吐息を漏らした。
「もう、いい加減にしろよ！　千冬姉ェ！　コレで何回目だよ！　部屋のゴミ箱が一杯になったら下に下ろせっていつも言ってるだろ!?」
その時、階下から一夏の声が響いた。
新居に引っ越してから一ヶ月に一度は聞くようになった声である。
その原因は案の定だが、新居に越してから千冬のずぼらさ加減が更に悪化したからだ。
個室と言うプライベート空間が生まれたお陰で、千冬は一人静かに杯を傾ける楽しみを知ったのだ。その所為か、リビングで飲む回数と同じくらいに自室で飲む回数が増え、その結果、織斑家の掃除洗濯を司る一夏は日に日にゴミが溜まる千冬の部屋と、置き去りにされた容器にたかる〝蟲〟を見て遂に何かが振り切れたらしい。
丁度今日がその日か、と、何時ものアキトなら軽く流す所。だが今日は秋斗も虫の居所が悪かった。――――主に未来の一夏の所為で。
故に、何時にも増して響く一夏の怒号に連鎖するようにして、秋斗も舌打ちした。
「後、カップ麺食べるのも良いけど、食べ終わった容器を部屋に置きっぱなしは止めろよ！　後、洗濯物も――――」
「うるせぇな、シスコン！　偉そうにほざくな、アホ！　後、でけぇ声で喚くなこのヤロウ！」
秋斗は苛立ちを吐き出すように、思わず階下に向って叫び返した。

☆

蛍の光なんたらかんたら、仰げば尊しどうたらこうたら――――。
桜舞う季節の晴天の空の下で行なわれる卒業式。
秋斗と一夏は6年通った小学校を卒業した。その日ばかりは普段授業参観にも顔を出せない千冬も、他の父兄と一緒に参列した。
千冬は第一回目のモンドグロッソで世界的な有名人と化した為、他の父兄の千冬を見る視線は非常に多かった。
そしてそれに付随してか、その弟である秋斗、一夏に向かう視線も、

何処と無く〝有名人〟を見るような奇異の視線が多くあった。
――――やっとランドセルからもオサラバ。秋斗はそんな清々しい気持ちで、卒業証書を肩に担いで桜並木を歩く。
そして今度は学ランに袖を通して、専用の通学鞄を持つ日々が始まると溜息を吐いた。
中学生――それは人生で最も人間が〝お馬鹿〟になる年代であり、同時に過去を振り返ると最も恥ずかしい思い出が誕生し、そして最も楽しい思い出が生まれるとされる時期だ。
秋斗は前世の経験でソレをよく理解していた。
故に、今生では流石に同じ轍は踏むまいと固く決意する。
「――――ブッカブカだな？　本当にこんなにデカイ制服買う意味あるのかよ？」
「あるよ。一番背が伸びる時期だからな。特に姉貴が長身なんだから、俺やお前（一夏）がちんちくりんのままなんて、そうありえないだろ？」
「そうかなぁ」
購入した真新しい学生服に袖を通した一夏は、姿見でその具合を不安そうに確かめる。
秋斗も一夏も、世間でいう〝萌袖〟のように指先ほどしか出ないサイズの、ブカブカの学ランに身を包んでいる。故に、その〝着られている感〟を不安に思う気持ちは秋斗にはよく分かった。
「あ、そうだ。一夏」
「なんだよ？」
「今の内に〝ボタン〟大量に買っとけよ？　卒業する頃にはたぶん、全部配る事になるからよ」
「え？　そうなのか？」
「……一夏の場合は多分そうなるんじゃねェかな？」
秋斗はふと、思いついて一夏に忠告した。
後にヒロインが5人も出来る男なのだ。ソレを考えるとこの中学時代にどれだけの女を引っ掛けるのか想像もつかない。
加えて、今生の一夏は中学の部活で本格的に剣道をやろうとしている。背が高くなり、顔も良しで、性格も良し。勉強も秋斗程ではない

が出来る上に、無類の剣才があるので部活動での大活躍は容易に想像出来る。そんな男がモテない筈がない。

　要素を上げてみると〝女にモテる為に生まれて来た〟ような男である。そこまで来ると嫉妬は疎か、呆れすらも通り越して秋斗は笑えてきた。

「まぁ、騙されたと思ってチビチビ買い集めとけ」

「ん～よくわかんねーけど、分かったぜ」

「おい2人とも、着替え終わったか？　終わったら写真を撮るからそのまま庭に並べ」

「はいよ、千冬姉！　んじゃ、行こうぜ秋斗」

「はいはい。……ったく、本当に写真撮るのが好きな一家だな」

　一夏は気合を入れるよう真っ直ぐ背筋を伸ばし、秋斗はポケットに手を突っ込んだダラダラとした足取りで庭先に下りた。

「秋斗、もうちょっと背筋を伸ばせ。一夏、もっと顎を引け」

　デジカメを構えた千冬の指示に従い、秋斗と一夏は織斑家の新しい庭先に並び、学ラン姿の写真を撮った。

「どんな感じに撮れた？」

「ざっとこんな感じだ」

「……なんか、かっこわりぃ」

　デジカメのメニューで先程撮影した一枚を確かめる一夏は、写真の具合に顔をしかめた。

　だぼだぼの学ランに身を包んだ姿はお世辞にも決まっているとはいい難い。

　多少はかっこよさを意識したい年頃にとっては、余り残したくない写真であった。

「まぁ、いいじゃないか。人生、そう良いことばかりじゃない。コレも思い出だ」

「なんだよ、じゃあ千冬姉の中学の写真見せてくれよ？」

「……そうだな。俺達の写真は見ておいて姉貴のだけ見せないってのはズルイよな？」

「あ、いや私のは――――」

秋斗は一夏の言葉に便乗して悪辣に笑った。
千冬は珍しく露骨に狼狽していた。
「生憎だが、私の写真はない。その頃はカメラも家になかったからな」
「……本当かよ、それ？」
「あぁ、間違いない。だから撮ってない」
「ふ～ん」
堂々と腕を組んで視線を逸らす千冬。その様子を見て流石に何もなかったと流すほど、秋斗は鈍感ではない。
故に、秋斗はポケットからスマホを取り出した。
「じゃあ、博士に聞いてみるか……」
「っ!?　待て！　早まるな秋斗！」
秋斗の〝殺し文句〟に、千冬は遂に悲鳴を上げた。その様子に一夏と秋斗は思わず笑みを浮かべた。
「……この様子だと〝有る〟みたいだな？」
「あぁ。みたいだな。ついでに束さんが持ってるらしい。秋斗、もし手に入ったら俺にも見せてくれよ？」
「あぁ、良いぜ。折角だから若かりしブリュンヒルデって事でファンに公開しよう」
「頼む！　頼むからそれだけは頼むから勘弁してくれ！」
「じゃあ、千冬姉。これからは部屋にゴミ溜め込むのを止めろよな？　洗濯物もちゃんと脱いだら籠に入れてくれよ？」
「わかった。わかったから！」
桜舞う季節に、千冬の悲鳴がこだました。

26　中学での『出会い』

秋斗達が中学に進級すると、遂にそこで〝女尊男卑〟の息吹が見えた。

そこにはモンドグロッソでの千冬の影響も、もちろん有る。

そして〝己も強くあろう〟とする思春期特有の気の強い大柄な女子が、1～3年のどの学年にも一定数存在していたからだ。

同時に教育者として少し破綻気味な、処女をこじらせた喪女教諭の、女子生徒贔屓な態度もあるのだろう。

中学に進級する事で近隣の小学校の卒業生は、一同に一つの学校に集められた。そして先輩後輩という序列の中に放り込まれた。それから程なくして新入生は、上級生の醸し出す〝男より女が優れている〟という態度によって思想に感化される。

それは二次成長期が男子より一足早い女子程に顕著になる。そして男子はそんな女子の掌を返したような態度の変化に追従できず、つい従ってしまう。そんな悪循環がそこにはあった。

世間は未だ、それ程に強い女尊男卑の思想はない。が、しかし少なからず女性側の立場が向上していたという空気はある。

そして社会の縮図とも言える中学校という狭い世界の中では、既にそうした後の社会の歪な規範が出来あがりつつあった。

――――そしてそんな世界に新入生として入学した織斑兄弟は、入学早々にして全校の注目の的であった。

『爽やかな方の織斑』と呼ばれる一夏は、姉譲りの剣才で瞬く間に剣道部で名を挙げた。

その実力と、日に日に成長する身長、面立ち、社交的で穏やかな振る舞いによって、入学してから一週間で、一夏は8人の上級生から告白を受けたと噂になった。

対する『不健康な方の織斑』と呼ばれる秋斗は、脇目も振らずに帰宅部に在籍。そしてゲームセンターで知り合った御手洗数馬と、その小学校時代の友人であるオタク集団と共に模型部の助っ人としての学校生活を始めた。

当初の評価としては、一夏の方に軍配が上がる。が、しかし秋斗も〝織斑〟である所為か、所謂普通に比べると十分に目立つ事を直ぐにやらかしてのけた。

（――――はぁ、かったる）

出席番号０５　織斑秋斗。

出席番号の順で席に並び座ると、秋斗は丁度廊下側の後ろ角にその席が出来る。

立て付けの悪い学校の引き戸からは常に隙間風が吹き、最も日の当たりが悪いポジションにある為、そこは５月なのに肌寒い位置だ。

コレだけでも相当に不愉快なのだが、それ以上に秋斗は中学生活を辞めたいと悩んでいた。

授業を担当する教師の珍しいモノを扱うような視線と、他の小学校からやって来たクラスメイトから見世物パンダ扱い。更に噂の〝織斑〟を一目見ようと、次々上級生が顔を拝みにやって来る。――――しかも秋斗の席が廊下側にある所為で、いやおう無しに見物客の視線が集中する。

「……はぁ」

どうせ義務教育なら不登校でも卒業出来る。高卒の資格は通信教育で取って、大学なり専門学校に出れば新卒採用の資格は十分取れる。就職が出来なくても別に今までどおりの手段で金を稼げば良いだけの事。文句を言われるなら早々に家を出れば良い。つまり何も問題ない。と、そこまで下らない妄想を広げた末に、秋斗はシャープペンを置いた。

教卓の上の時計を見て、秋斗はまだ残り時間が１５分もある事に気づく。

（……さっさと帰りてぇな）

秋斗は大きく欠伸をしたのち、先程まで解いていた数学の〝中間テスト〟の用紙を裏返した。

それから続く英語、歴史、理科、国語の試験を同じ調子で受けた秋斗は、答案の返却日に４９８点と言う学年最高の結果を一学年の生徒全員の前に叩きつけた。

「――――なんかお前等兄弟ってさ、チートだよな？　姉もスゲェし」
「……何がだ？」
五反田弾の台詞に一夏は首をかしげた。
そんな一夏を見て、弾は呆れた様子で言った。
「なにがって、兄は剣道部期待の星。弟は学年の主席。姉貴は世界一位……コレを〝チート〟と呼ばずして何と呼ぶんだよ？」
「……しいて言うなら変わり者、かな？」
そこへ秋斗が口を挟む。
ボケなのかマジレスなのか分からない秋斗の微妙な返しに、弾は短く「馬鹿言え」とぼやいた。
ある日の昼休み。
給食という文化の無い中学校の為、秋斗と数馬は共に昼飯を囲んだ。そこに隣のクラスに在籍する一夏と、その友人になった〝五反田弾〟という少年がやって来た。
折角だからという一夏の鶴の一声で、一同は屋上に場所を移して弁当箱を開けた。
男――四人。後に互いを親友と呼び合うこの４人の友情は、この時に始まったと言えるだろう。
「しっかしまぁ、話は変わるが一夏はホントにモテるな？　何でそんなにモテるんだ？　何かの特典か？　神様ってマジでいるの？」
「……なんやねん。その二次創作ＳＳみたいなんは？」
特徴的な赤毛男――五反田弾の軽口に、関西弁の少年――御手洗数馬は呆れた様子で突っ込みを入れる。
「いや、だってそう思いたくなるだろ？　８人だぜ、８人？　これはもうトラックに轢かれて加護をもらったとしか説明できないだろ？」
「んなわけあるかいな。と、言いたいところやけど。せやな～。まぁ、そう思いたくなる気持ちは分からんでもない」
「だろ？」
自己紹介もかねて一同は軽く身の上を話した。
数馬は小学生時代に一度関西から引っ越して、その影響が強く口調に出ると言う旨を話し、弾は実家が定食屋で家族にリアル妹が１人居

る事を明かす。
　そうした家庭の話を続けるうちに段々と打ち解け、遂に一同の矛先は話題の宝庫である一夏に向いた。
「に、しても不思議と言えば秋斗君の方はモテへんなぁ？　なんで？　似たような顔しとるんに？」
　数馬は首を傾げて尋ねた。
　確かに双子と言う出自で、面立ちもそれ程に差があるとは思えない。秋斗も尋ねられると確かに疑問に思った。
「そうだな。確かにそんなに見た目は変わらねェのにな？　なんでだろ。遺伝子の不思議なところだ。多分一夏の顔は、織斑の子孫を残すのに最適化されてるんじゃね？」
「マジで？」
「マジでか!?」
「いやいやいや、んなわけねーだろ！　秋斗も適当な事言ってんじゃねーよ！」
　と、一夏は恥ずかしそうに声を荒げた。
　一夏は垂れ目で温和な顔。
　秋斗は千冬と同じく鋭い眼に加えて、束のような隈が特徴。
　どちらも整った顔立ちなのは明確なので、入学して早々に〝双子〟の兄弟は注目された。
　しかし一夏と違って秋斗の方はまるで異性に告白される気配が無い。この場に揃った一同――秋斗も含めて、それが不思議でならなかった。
　その話題で一同はしばし駄弁る。
「――――オタク趣味やからかなぁ。〝模型部〟って典型的なそれやん？　俺らとつるんどる所為もあるんかもね」
　と、数馬は吐息をつく様に言った。
　するとそこへ弾が気づいたと言う様子で言った。
「あ～、そう言えば数馬は模型部だっけ？　だったらそうかもしれねーぜ？　最近俺の妹もそうなんだけどよ、ちょっとアニメの美少女抱き枕を使ったぐらいで蛇蝎の如くキモがりやがったんだよなぁ――

――」

そんな弾の意見に秋斗と数馬は反射的に口走った。

「……いや、それは弾がキモイだろ？」

「せやな。それは流石に弾がキモイわ。趣味は客観的に見て、多少は隠すなりのデリカシーは利かせんと」

「秋斗、数馬も！　お前等、ヒデェな！」

弾は辛辣な秋斗と数馬の台詞を受けて、衝撃を受けたようにのけぞる。

そしてグリンっと、首を一夏の方に向けた。

「一夏!?」

「な、なんだよ、弾」

「……俺の趣味はキモイのか？」

「あ～、おう、多分な」

「……」

一夏は若干引くような顔で、弾に止めを刺した。

そして丁度そこへ、チャイムが響いた。

☆

雑然とした街の繁華街。その場所は住宅地から自転車でおよそ15分といった場所にある。

古くから商店街として栄えたその場所は、今日も多くの人通りで賑わっていた。

立ち上る紫煙。路上の吸殻。ゴミ箱からはみ出した空き缶。そして繁華街ならではの吐瀉物の痕跡――。

そんな薄汚れた路地を歩いた先に有る一軒の雑居ビルには、ゲームセンターがあった。

ゲームセンターという土地柄は、古くから――と、言っても対戦格闘ゲームが登場した辺りから、あまり青少年が屯する場所として、相応しく無いと言う評価を受けている。

特に極端な物言いをする教育者は、訪れる客層に問題があると言った。

しかしそれは流石に言い過ぎだと、多くの若者は思う。
金を使っての遊戯を楽しむ施設である故に揉め事が起こりやすい印象はあるものの、実際はそこまで〝世紀末〟な環境ではないのだ。
――――しかし例外は存在した。
「――――おい、馬鹿共。ちょっとツラ貸せ」
「ぁん、なにお前？　誰？」
「中学生？」
へらへらとした調子で歩く2人組みが人気の無い路地に入ったところで、首から懐中時計を提げた少年が後ろから声を掛けた。
2人組みの男はかったるそうに振り返る。――――が、その返事を聞くよりも先に、少年は手前に居た1人目の膝を素早く蹴りつけた。
「――――ッ!?」
痛みに呻くよりも先に体勢の崩れたところを狙って、少年はその顎先に掌打を叩き込む。
その一発で完全に意識を立たれた男は、路上に崩れ落ちた。
「なっ!?　なんだよ、いきなり!?」
2人組みの片割れは、相方が突然地面に倒れた事で完全に戦意を喪失していた。
しかし少年はそれすらも意に介さず、呆気にとられて何も出来ずに居る片割れの男に足払いをしかける。
男は姿勢を崩して尻餅をついた。
いきなり仕掛けられた暴力に恐れ戦いた男は、慌ててその場から逃げようと尻を浮かす。――――が、それより早くに、少年はその肩口を踏みつけるようにして靴底で蹴りつけた。
「な、なんすか！　なんなんすか!?　一体――――」
その時点で勝敗は決まった。既に成人に程近い男は鼻水をたらして、涙目で敬語を使った。
その様がこの場の強者を明確に証明していた。
「……財布出せ」
「へ？」
懐中時計を揺らす少年は男を踏みつけたままの姿勢で、真上から顔

を覗き込むように短く言った。
「財布を出せ。早く」
「は、はい！」
男は慌ててポケットからヴィトン皮の財布を抜き取り、ソレを震えながら差し出す。
少年はソレをひったくるように奪い取ると、中身の数千円を抜き取り、空の財布で男の頬を引っ叩いた。
「――――大の男がガキからカツアゲするんじゃねぇよ。今度、俺のダチから金とってみろ。次は前歯を叩き割るから覚えておけ」
「は、はい！　すいませんでした！」
少年――織斑秋斗は止めに一発鋭い回し蹴りで男の意識を刈り取ると、急いでその場からダッシュで離脱した。
そして一目散に道を走り、待たしてた友人と合流した。
「おい、〝数馬〟。ほら」
「――――取り返してくれたんか!?」
数馬の頬には殴られた痕跡が残っている。それは先程のチンピラにカツアゲされた痕だった。
秋斗は数馬に、先程チンピラから取り返した５０００円を渡した。

――織斑秋斗と御手洗数馬と出会ったのは、繁華街に有るとあるゲームセンターであった。
そのゲームセンターには1フロアの半分を占有する二つの人気対戦格闘ゲームの筐体が有る。
〝浮かされたら負け〟というシビアな目押しのコンボで凌ぎを削りあう３Ｄ格闘ゲーム――『剛拳』の筐体郡と、同人から出自したキャラクターを対戦格闘に持ち込んだ『プリズマブラッド』の筐体郡。その２つのタイトルに命を燃やすプレイヤー達が醸し出す、どこか一触即発に近い微妙な空気――――。
秋斗はそこに蔓延する相変わらずな空気に、思わず苦笑を漏らした。
精度の高い目押しコンボと、〝浮かされたらほぼ負ける〟というシ

ビアなゲーム性故に、『剛拳』は初心者には敷居が高いと言う印象がある。

加えてこのゲーセンに訪れるプレイヤーの印象が、余計に初心者への〝とっつき辛さ〟を与えている。

薄汚れた作業着姿で椅子に胡坐を掻く厳ついオッサン、ピアスを開けて髪を染めた強面の若者、そしてホスト、等――――。

たまたま秋斗が訪れるゲームセンターの『剛拳』プレイヤーがそうなのかは分からない。

だがどうにもこの周辺の『剛拳』プレイヤーには、そんな厳しい印象を持つ者が非常に多かった。

ちなみに隣り合う『プリズマブラッド』の筐体だが、こちらはガリガリな中高生や、大学生、キモデブ眼鏡の大きな御友達といった〝如何にも〟な風体のオタク勢が多い。

――――故に、だろう。

『剛拳勢』は『プリブラ勢』をキモいオタク集団と軽蔑し、『プリブラ勢』は『剛拳勢』を態度の悪いチンピラ集団だと内心で軽蔑する空気が有る。

直接煽りを口に出したり、プレイヤー同士が拳で対立するという大きな揉め事はまだ起きていない。

だが何れそうなるであろうという空気が、そのフロアには感じられた。

「……ま、別にどうでも良いけど」

秋斗は肩を竦めて、さして気にする様子を見せずに目的の『剛拳』の筐体の方に歩いた。

中学に進級した秋斗は暇を見つけると大抵ゲームセンターに通っている。趣味も多分にある。が、その理由の半数は劉老人から格闘技の手解きを受ける様になったからだ。

意外に格ゲーが〝イメージトレーニング〟の役に立つ。――――とは流石に言い過ぎかもしれないが、劉老人から手ほどきを受ける前の精神統一に、格闘ゲームは丁度良かったのだ。

そしてその日の鍛錬前にも、秋斗は乱入を待ちながらＣＰＵ戦を消

化しているプレイヤーの台に乱入した。
相手は〝浴衣はだし〟コスの『リリ』。対する秋斗が使うのは〝デフォルト色違い〟コスの『ブライアン』。
コレは秋斗の偏見だが、美麗なグラフィックと無数にあるコスチュームの影響で、『剛拳』プレイヤーを使うがその持ちキャラの見た目は、そのままプレイヤーの自身の趣味や性癖に直結する。
故に今回の『浴衣はだしコス』のリリを使う対戦相手を、秋斗は密かに「中々、業が深いな……」と評した。
――ちなみに余談だが、秋斗のもう一つの持ちキャラはレザースーツの『ニーナ』である。
「……あれ、織斑君やん？」
「ぁん？」
実力伯仲。
互いに譲らず、何とか秋斗が勝ちをもぎ取ったその瞬間だった。
秋斗は対戦相手から声を掛けられた。
対戦相手の顔を態々覗き見るのは余りマナーが良いとは言えない行為。しかし秋斗は特に気にせず、その声にふと顔を上げた。
そこには同じ年頃の眼鏡の少年が座っていた。
彼こそが、秋斗の後の友人となる〝御手洗数馬〟である。
「……誰？」
「いや、同じクラスの御手洗なんやけど。織斑君やろ？　弟の方の？」
「あ、あぁ」
対面に座っていたのは、今年四月に秋斗と同じクラスに組み入れられた眼鏡の少年――〝御手洗数馬〟だった。
そして『はだし浴衣リリ』というチョイスを堂々選ぶ数馬を見て、秋斗はその時、直感的に『コイツとは友達になれる』と確信した。
それが、御手洗数馬との出会いであった。
――――そんな御手洗数馬と知り合ってから程なく。
秋斗は中学で知り合った友人が、皆所謂〝苛められっこ〟に近いと気づいた。

それは趣味がキモがられると言う表現が一番しっくり来るだろう。
特にクラス内の気の強い女子やＤＱＮ系の運動系男子というスクールカーストの上位層の過激派から、余り良く思われていないタイプが多い。
そういえば、と秋斗は思い出したが、始めの頃は〝あの〟織斑という事で数馬や今の友人達とは少し距離が置かれていた様な気がした。
なので『剛拳』の台で勝負する〝きっかけ〟がなければ、秋斗は未だに〝彼ら〟と話をする事はなかっただろうと感じた。
「――――そもそもだ。絡まれたら走って逃げるぐらいの事はしようぜ？　数馬だって客層の悪いゲーセンってのは、空気でわかるだろ？」
「……ごめん」
中学の昼休み。
秋斗は昨日の起こった〝カツアゲ事件〟のちょっと説教をかねて、数馬を筆頭にする模型部のメンバーと昼食を共にした。
御手洗、若原、山口。皆、秋斗と同様に模型部に所属し、件のゲーセンで〝拳を交わした〟友人達である。
そして全員が、同中学では有名なオタク（模型部）の巣窟に生息する所為か、不健康そうな顔ぶれが多い。
「でも『剛拳』の筐体置いてあるのって、あそこしか――――」
「行くなとは言ってねぇだろ？　気をつけろって言ってんの。それと。まさか次も〝助けて貰える〟なんて、都合の良い事考えてるわけじゃねぇだろうな？」
「……うっ、せやね。それに関しては本当にゴメン。次からは気をつけるわ」
「おぅ」
秋斗の持つ千冬譲りの鋭い眼光を受けて、数馬は苦い顔で肩を竦めた。
そこへ若原が茶化すように口を挟んだ。
「逃げろと言われても、デブがそう簡単に走れたら苦労しねぇよ。デブの機動力は並じゃないぜ？」

「なら尚更、走って減量しろよ微笑みデブ（若原）。てか、絡まれて逃げないなら、せめて財布護って一発殴るぐらいの気合は見せろよ。それが出来ないなら冷静に店員か警察呼べ。後、ちなみに立会いでその〝贅肉〟は間違いなく武器になるぞ？」

「でもさ、秋斗。いきなり人を殴るのは流石にやばいんじゃないの？」

「ぁん？」

そこに山口が真面目を気取って言葉を挟んだ。

「別に誰彼かわまず殴れとは言ってないだろ？　ボコられて、財布取られるくらいなら、せめて相手に手傷を負わせてやるぐらいの気合は〝見せろ〟って言ってんの。それが出来ないなら〝逃げろ〟だ。お前等文句多すぎだろ。どっちも出来ねぇっていうなら最初からゲーセンなんて行くの止めとけ、アホ」

手厳しい意見だったが、下手に絡まれ、金を失い怪我を負わされる事を思えば、その方がマシだと秋斗とは思った。

一応友人なのだ。なので忠告はした。

しかしそれでも懲りないならば、後は各々の自由――。〝捨て置くだけ〟だと、秋斗はそれ以上の叱責をやめた。

「……なぁ、秋斗君はなんぞ武道とかやっとったん？　財布取り返すぐらいやから強いんやろ？」

「ぁん？　あぁ、なんだったら紹介してやろうか？　ジークンドーの達人なんだけど」

「……マジで？」

恐る恐ると言った様子の数馬の質問に、秋斗は何気なく武術の師匠――劉老人の事を話した。

ひ弱な模型部のオタク達だとは言え、彼らも一応男であるらしく、〝強さ〟というモノにはそれなりの興味がある様子だった。

「近所に住んでる〝劉〟っていう胡散くせぇ爺さんなんだけどな？　なんだったら会ってみるか？　習うなら毎月、月謝に３，０００円取られるけど」

「えー、金取るの？」

「そりゃお前、この世に無料なんてあるわけねぇだろ？」

強さに対して少なからず存在する〝憧れ〟。

この時の秋斗は、少なからずソレを兼ね備える存在だった。

故に一同は秋斗の話に食いつき、程なくして数馬を初めとする模型部の面々は、劉に会う事を決めた。

――――コレの出会いが、そしてこの模型部達との〝交友〟が、後に起こる事件の引き金になるとは、この時の秋斗はまだ予想すらしていなかった。

27　秋斗と『模型部』の愉快な仲間達　前篇

広大なフィールドを駆け巡るＭＭＯの世界を、秋斗は中学で知り合った友人――御手洗数馬と共に走り回る。
数馬は妖精を基礎にした女性体でキャラを作り、大剣を得物にする。
秋斗は機械（キャスト）の女性体でライフル銃を得物にする。
受注したクエストを請け負った2人は、必要なモンスターの素材を集めて経験値と資金を得る。
――そしてその足でＮＰＣの構える武器屋に向かった。
「……なぁ、数馬」
『なんや？』
「……これ、ほんっとうに〝クソゲー〟だな？」
『評価が早いわ！』
「いや、だってさ――」
ボイスチャットで数馬と話しながら、秋斗は武器屋で愛銃のカスタムを行なった。
改造にはゲーム内の敵がドロップする通貨と、改造専用の素材が必要になる。
秋斗は当初は５０万はあったはずのゲーム内通貨（メセタ）をすっかり融かしきり、そして改造に必要な素材（グラインダー）を使い切った。
【――ふむ、失敗じゃないかな？　また来たまえｗ】
資金（メセタ）と素材（グラインダー）を集めさせ、そして肝心なところで何時も失敗をする。
そして詫びを入れる様子も無く〝ねっとり〟とした煽り口調でまたの来店を持ちかけるＮＰＣの言葉には、このゲームの多くのプレイヤー（アークス）が殺意を抱いている。
秋斗ももちろん、その内の1人だった。
「……コイツ（ドウ）、マジでぶっ殺したいな」
『それは全ての〝アークス〟が思っとる事やと思うで？　で、秋斗君は結局どこまで武器、改造できたん？』
「一回だけ＋7まで行ったけど、最終的に＋4になった。コレを〝改

造〟と言ってのけるドウドゥ殺したい……」
『うわぁ。ご愁傷様……。そんなら次は〝モニカ〟に頼んだらどう？』
「無理。そもそも〝可愛いから許される〟とかいう考えが、この世で一番許せん。失敗した時〝ドウドゥ〟より腹立つから却下。アイツこそ死ねば良いのに』
『――――秋斗君、そうとう苛立っとるな。……気持ちは分かるけど』
秋斗がこのオンラインゲーム――〝幻想惑星〟に誘われたのは入学して間もなくの頃だ。
それは中間テストが終ると同時の頃。
そのきっかけは秋斗が半ば数合わせとして所属する〝模型部〟の、その部長――〝青峰清十郎〟の放ったある一言にある。
「――――コラボするらしいでござる」
「は？」
「〝コラボ〟って何がっすか、部長？」
「オンラインゲーム〝幻想惑星〟の女性キャスト専用の装備に、日本製ＩＳ〝秋桜〟と、アメリカ製ＩＳ〝スターエンジェル〟と、ドイツ製ＩＳの〝デアメテオール〟を模したアバターが出るらしいでござる。コレは由々しき事態でござるよ……。早速、模型部の総力を上げて、そのアバターのクオリティーを確認する必要があるでござる」
秋斗の通う中学の模型部。
その部の存続すらも危ぶまれる一種の同好会とも呼べる小さな部だ。
設立当初はそれなりの人数が在籍していたらしいが、今ではまともに活動するのは3年生の部長〝青峰〟ただ1人。
顧問も美術部と兼任されて居るような弱小文化部だ。
そこに今年、新入生として入部したのが、関西眼鏡こと〝御手洗数馬〟、微笑みデブこと〝若原〟、ガリガリノッポの〝山口〟、そして不健康な方の織斑こと〝織斑秋斗〟である。
青峰は油っぽい髪を後ろで縛り、そして油分のついた眼鏡を光らせながら言った。

「わからない、という顔をしてるでござるな？　まぁいいでござる。一から説明するので良く聞いて欲しいでござるよ」

青峰は特徴的なござる口調を使い、新入生達に今回の目的を話した。

事の発端はオンラインゲーム〝幻想惑星〟の大型アップデートの情報が解禁された事にある。その大型アップデートで、前回のモンドグロッソで人気となった第一世代の〝ＩＳ〟を模した多くの武装やアバターが、ゲーム内のプレイヤー装備として配布される事になったのだ。

そのコラボは一種の〝話題集め〟である。が、しかし逆に考えれば今まで機密情報が多くて深く観察する事が困難だったＩＳの情報が手に入るに等しい。

しかも3カ国のＩＳの機体の外見データを、一同に収集するまたとない機会だ。

故に模型部として、今回の〝幻想惑星〟のアップデートは重大な事件だと青峰は言った。

「模型部として収集したＩＳアバターの概観のデータを下に、ＩＳのフルスクラッチするでござる。そして今年の夏の７月２４日のワンフェスでソレを展示するでござる！」

と、青峰は夏休みに先立ち、今後の部の方針を発表した。

その勢いは青峰の背景に爆発エフェクトが見える程。

そう青峰は力強く宣言した。

青峰清十郎――彼は同中学で『最もキモい』という女子の熱い支持を受ける模型部の首領である。

その出で立ちは何処までも不潔で、同時に常人には計れぬ凄まじい情熱に満ち溢れていた。

「――――でもよ、部長。ワンフェスに出るって言っても、そう簡単に出られる場所じゃねエぞ？　事前に申請しとかねエと……」

「その心配は要らないでござるよ、同志〝秋斗〟。毎年拙者は、自腹でワンフェスの申請を出しているでござる。だからもう、今年の夏に出る事は決まっているでござるよ。それにＩＳの模型はアニメ作品と

は違うでござる。拙者独自の調べによるとＩＳの模型は事前の審査等も必要ないらしいでござるよ」

秋斗の指摘に青峰はドヤ顔で言った。

その言葉に秋斗は思わず尋ね返した。

「……え、マジっすか？」

「マジでござる。だから秋斗殿が昔作った〝白騎士〟のキットも普通に売れるでござるよ、ただし、その場合は身バレを覚悟する事になるでござるが――――」

「っ!?」

青峰は秋斗の肩を掴むと、顔を寄せてそう小声で言った。

模型部で唯一、青峰だけが秋斗の〝造形師〟としての顔を知っている。

身バレという言葉に秋斗がほんの少し苦渋の色を見せると、青峰はそこで顔を離した。

「こほんっ！　と、いうわけで諸君には早速今日から、〝幻想惑星〟をやってもらうでござる。……既にアカウントを持っている者は？」

「あ、俺持ってます」

そこで数馬が挙手をした。

その名乗りに青峰は深々と頷いた。

「よろしい。では若原君と山口君と秋斗殿は、御手洗君と同じサーバーで新規のアカウントを制作して、早速今日から〝幻想惑星〟にログインして欲しいでござる。作るキャラクターは女性体のキャストで統一。丁度３人居るから、山口君はデアメテオールの装備を、若原君は秋桜装備、秋斗殿はスターエンジェルの装備を、それぞれ集めて欲しいでござる。御手洗君は３人のキャラのパワーレベリングと、メセタの回収。同時にアップデート直後に拙者と一緒に〝武装〟のドロップマラソンをお願いするでござる」

「……ドロップマラソンか。それは中々に過酷やなぁ」

テキパキとした青峰の指示に、数馬は苦笑混じりに溜息を吐いた。

有能か無能かでいえば青峰は間違いなく有能な側の人間である。

しかしその能力の使い方がそこはかとなく間違っているのと、その濃

いキャラクターが故に、女子からの人気が著しく低い。
もう少しまともになれば評価は直ぐにでも逆転する程の逸材だが、それが出来ないあたりがなんとも青峰らしいと秋斗は思った。
「部長、どうせオンゲをやるなら、部のギルドハウス的なモノがあった方がいいのでは？　〝幻想惑星〟の仕様にそれがあるかは分かりませんが――――」
ガリガリノッポ――山口が挙手をした。
幸か不幸かこの場にはオンラインゲーム初心者が1人も居ないので、青峰の話を理解するのに戸惑う者は居ない。
山口の発言に青峰はまたしてもそこで、短く頷いた。
「良いところに気がつくね、山口君。ギルドハウスに関しては拙者が代表して作るでござる。その部屋を〝第二の部室〟とするでござる。それと今の内に支度金として部費を渡すでござる。これをスタートダッシュ課金に使って欲しいでござるよ」
そう言って青峰は懐から一万円の入った封筒を部員全員に渡した。
弱小文化部の模型部にまともな部費などあるわけが無いので、それは青峰の〝ポケットマネー〟であった。
流石は近所の大病院――青峰医院の息子。その実家の経済力は相当だと、秋斗は思わず苦笑を漏らした。
「――――部活でオンゲをマジにやるなんて話。初めて聞いたぜ」
「安心しろ、俺もだよ」
秋斗のぼやきに、微笑みデブ（若原）が同じ様な苦笑を浮かべた。
「この部費でキャラのステータスや、プレイ環境の改善に課金をするのは自由でござる。だけど必ず〝フリーショップ〟のパスだけは買って欲しいでござる。特に武装は自力でドロップか他のプレーヤーから買うしかないので、とにかく拙者達には資金（メセタ）が必要でござるからな。今の内に資金（メセタ）を集めて欲しいでござる」
「了解だ。とりあえず、その〝幻想惑星〟ってゲームにログインすれば良いわけね。ゲームに長く時間が取れるかはわからねェけど」
秋斗は溜息混じりに言った。
「ログインの頻度はそれぞれの生活を鑑みてお願いするでござる。出

来ればＩＮする時間帯は合わせて欲しい。それとサーバーアップデートは6月でござる。まぁ、でも気負う必要はないでござるよ。恐らくネットにもスクショや動画も上がるでござるからな。とにかく本番の7月のワンフェスに間に合うように、〝模型〟を作り上げる方が重要でござる」

「……なぁ、ちょっと待て部長。まさか一ヶ月弱で3体分のＩＳをフルスクラッチさせる気か？」

アップデートが6月。そしてワンフェス当日が7月２４日。その余りに滅茶苦茶なスケジュールを聞いて、秋斗は思わず眉間に皺を寄せた。

はっきり言ってそれは無謀な試みである。

1体ならまだしも3体分ともなると、夏休みをフルに使っても怪しいレベルである。

そんな秋斗の指摘に数馬も若原も山口も、同様の不安を表情に顕にした。

すると青峰はブラインドカーテンの方をクルリと向き、少しばかり肩を竦めて悲痛な様子で言った。

「……確かに、無茶なスケジュールである事は承知の上でござる。そもそも夏のワンフェスに出るだけなら、例年通りに拙者が作った朝潮型駆逐艦のフィギュアだけでも良いでござる。だけど今の５人でワンフェスに出られるのは、コレが最初で最後でござる」

「そうか!?　冬のワンフェスは2月――」

と、微笑みデブ（若原）が青峰の言わんとする事に気づいた。

青峰はその声に対し、静かに後姿で頷いた。

「そう。ワンフェスは年に二回しかないでござる。そして夏を逃せば、次の冬のワンフェスは2月。その頃には3年の拙者は既に部を引退しているでござる。だから新入生の皆と、こうして一丸となって戦えるのは、この夏のワンフェスが一度きり。……だからこれは拙者のわがままでござる」

「部長……」

そこで青峰はクルリと振り返った。

その顔には死に場所を見出した戦士のような笑みが浮かんでいた。
「この中学生活で、拙者はずっと孤独だったでござる。だから最後ぐらいは模型部に情熱を費やしたと誇りたいでござる。――――例え、原型が未完成だったとしても」
「「「……」」」
青峰の眼は、真剣だった。
キモイと蔑まれ、オタクと罵られ、そして仲間も集まらないたった一人の模型部で、孤独で長い戦いを貫いた〝男〟の眼だった。
その姿が一同の心の琴線に触れた。
生まれた時間も、場所も違う。しかし集ったそれぞれの心には、熱いサブカルへの情熱が宿っている。
だからこそ後輩として、そんな人生の先輩の姿を放ってはおけなかった。
「――――〝模型部〟最初で最後の戦いか……胸が熱くなるな」
山口が笑みを浮かべた。
「あぁ、部長にだけ良い思いはさせませんよ。俺も手伝います」
若原がフッと小さく微笑んだ。
「せやな。此処で逃げたら男が廃るわ。せやろ、秋斗君？」
数馬がニヤリと笑みを浮かべて、傍らの秋斗に視線を送った。
「……そうだな」
そして秋斗は青峰と、それに付き従う模型部（バカヤロウ）一同を見て小さく溜息を吐いた。
「ひとつきで3体分の模型か。まぁ道具と素材を一切ケチらずに、現地で原型の展示をするだけってなら、何とかなるかもな。……手を貸してやるよ。以前の〝ノウハウ〟を活かせば何とかなるだろう」
「秋斗殿……皆……」
青峰は直角に腰を曲げて、深く礼をした。
「ありがとう！」
青峰の眼からは一滴の涙がこぼれていた。
そして秋斗を含めた模型部一同は、オンラインゲーム〝幻想惑星〟に重課金（アーク）プレイヤー（ス）として舞い降りた。

☆

秋斗が模型部に属した理由はその趣味も多分にある。

しかし真の理由はソレでは無く、真相は嘗て秋斗が〝白騎士〟のフルスクラッチを製作した伝説の〝造形師〟である事がバレたが故。

そのきっかけは入学当初の入部案内便りを手に、模型部の部室である〝第2美術室〟と、その準備室を訪れた際に起こった。

その部屋には秋斗が会社を介して売った白騎士のガレージキットの完成見本と、同時期にネットオークションで密かに売った〝改造模型〟が飾られていた。

ソレらを見て秋斗が思わず、「なんで、コレが此処にあるんだよ……」と呟いたのは仕方の無い話であった。

そして部の案内をしていた青峰が、耳ざとくその言葉を聞いたのがきっかけだった。

そこからはじまった青峰の鋭い指摘によって、秋斗はやむなく織斑と篠ノ之が幼馴染の関係で、秋斗はその縁で古くに束と知り合った事を明かした。

ソレを聞いた青峰は驚くと同時に、納得と言った様子を浮かべた。

――――そして真剣な表情で土下座をした。

「秋斗君！　いや、秋斗殿！　謹んでお願い申し上げる次第にござる！」

「ちょ、先輩何やってんスか!?」

「模型部に入って欲しいでござる！　秋斗殿が最後の希望でござる！」

「……はぁ？」

聞けば、ショーケースに展示された白騎士のガレージキットと改造模型は、これまで部の〝宝〟として、今までに在籍した多くの模型部学生の教本として崇められていたそうだ。故に、ソレを作った本人が目の前にいると知った青峰が、秋斗に敬服する態度をとったのはある意味で仕方の無い話と言える。

そこからの1時間にも及ぶ強い説得と、青峰の模型や趣味にかける熱い思いを聞かされた秋斗は、ついに模型部に入部する事になったのだ。

入部に関して青峰と交わした契約は、3つ。

・決して白騎士のガレキを作った〝伝説の原型師〟である事を明かさない事。

・そしてそれに関する一切の口外を禁じる事。

・最後に補欠部員として入部し、積極的な活動が無くても文句を言わない事。

それらを条件に、秋斗は模型部に籍を置いたのだ。

ギルドマスター：部長がログインしました。

部長：『――――コンコン。お待たせしたでござるよ！』

カズマックス：『お、部長や。部長が来よったで！　コンコン』

アーキトクテ：『コンコン。今日はゆっくりツスね』

部長：『ちょっとした用事があったでござるよ。他の2人はどうしたでござるか？』

カズマックス：『先に落ちよりました。今は俺らだけっす』

アーキトクテ：『とりあえずちゃっとめんどくさ。ボイス繋ぐからはいって』

部長：『ok』

〝幻想惑星〟のギルドチャットに〝青峰〟のログインが表示された。

ボイスチャットで通話していた秋斗と数馬はチャットを使って部長に語りかける。

ついでなので、秋斗はその裏でボイスチャットを部長にも繋いだ。

「っと、コレで聞こえるかな？　どうっすか部長？」

『――――感度良好でござるよ。いやはや、遅くなってすまんでござる。それより朗報でござるよ。拙者の友人が今度の計画に手を貸してくれるでござる』

ボイスを繋いで早々に、青峰は何時ものござる口調で挨拶した。

『へぇ。そうなんや。どんな人なん？』

『ドイツ人の学生でござるよ』
「ドイツ人？」
『昔、艦コレのイベントで知り合った友人でござる。部の皆で今年のワンフェスに出ると言う云々の話をしたら、協力してくれると言ってくれたでござる。今からちょっと呼んでくるので少し待ってて欲しいでござるよ』
「了解。……ドイツ人ね」
青峰はそういい残すとギルドハウスを出て件の〝友達〟との合流に向った。
『どんな人なんやろうね？　俺、ドイツ語とか出来へんで？』
「俺も無理。〝ジークハイル〟と〝ハーケンクロイツ〟と〝ジュマイザー〟しか分からん。あ、あと〝ビスマルク〟」
『流石にそれは俺も知っとるけど、それは言わんほうがええで？』
「せやな」
『――――合流出来たでござる。そのままロビーに集合して欲しいでござるよ』
『ほい』
「了解」
青峰の合図を受けて、秋斗と数馬はギルドハウスからクエスト出発地点のロビーに向った。
青峰の示すアイコンを探してその方に行くと、そこには〝クラリス〟という名前の、ロリ萌えな女キャラが立っていた。
クラリス：『はじめましてクラリスです。ドイツ人です。よろしくです。話は聞かせてもらった！　地球が滅ぶ前に、是非協力させてください！』
青峰がクラリスをギルドに登録し、ギルドチャット欄にそんなログが流れた。
青峰が連れてくるだけあって中々〝濃い〟、と秋斗は思った。

２８　秋斗と『模型部』の愉快な仲間達　後編

机の上に転がる無数のエナジー飲料の空き缶。
３枚ある２１インチのディスプレイの明かりがその部屋の唯一の明かりである。
そんな部屋の主である織斑秋斗は、左手デバイスとゲームマウスを駆使して、ひたすら同業の廃人（アークス）達と共にＭＭＯ〝幻想惑星〟の中を走り回る。
頭に装着したヘッドセットは常にギルドメンバーと繋がっている。
そして今日もひたすら実装された新マップを、目的を同じとする２０人ほどの集団と一緒にグルグルと走り回る。
レアエネミーからドロップする最後のコラボ武器――二挺拳銃（ツインマシンガン）『ストームイーグル』の回収を目指して――。
「出たか？」
『まだや』
『出ないでござる』
『出ないです……』
秋斗の疲れた声での問いに、数馬、青峰、そしてドイツの新メンバー〝クラリス〟が溜息交じりで返事をした。
アップデート直後の一同のテンションは既に風前の灯である。
特にそろそろこの連続マラソンで３０時間が過ぎようとしている秋斗、青峰、数馬の声には覇気が無い。
アップデート直後は新メンバー〝クラリス〟がボイスチャットに初めて参加したこともあり、一同のテンションもそれなりに高かった。銀髪幼女アバターという９９パーセントが〝ネカマ〟だと思うキャラクリのクラリスが、リアル女性だったからだ。
しかしもはやそんな事などどうでも良い。早くこの〝苦行〟から解放されたいと、一同は思っていた。
レア度８という微妙なレアリティであるが故に、マラソンの途中で一同の脳裏には幾度となくある考えが過ぎった。
スクラッチ（課金ガチャ）が先か、ドロップが先か。そんなある種の〝哲学〟染み

た思考である。
　ＩＳコラボ規格の大型アップデートから、今日で3日。そして今日はアップデート直後の休日。そして時刻は朝の４時を迎えた――――。
　それは金曜の夜からログインして、土曜日をフルに使い、そして日を跨いで訪れた日曜の朝の４時という表記である。
　ネットに上がるＩＳのコラボ武装のスクショはどれも解像度が低い上に、角度が固定されてしまっている。故に模型を作るためには、やはり現物を手に入れるしかなかった。
　だが実装されたＩＳのパーツは、武装を込みで全部で１５個。その１５個のアイテムの内、アップデート直後のスクラッチ（課金ガチャ）でその半数を手にした模型部一同は、次に市場に流れた未所持のパーツをプレイヤーの開くフリーマーケットで買い集めた。
　それでキャラクターに装備させる武装以外のパーツは全て揃った。
　その時は〝意外に早くコンプ出来る〟と思っていた。
　――――しかし思えば、この時既に予感はあったのだ。
　肝心の武装だけが、まだ市場には流れていなかった。そして見つけても例外なく手の届かない法外な値段に設定されていた。
　故に、ならばとドロップを求めて探し始めたのは必然だったと言える。
　――――そしてそこから地獄の耐久レアドロップマラソンが始まったのだ。
　クラリス（α）を含めてギルドメンバーは計６名。一度にマップに出撃するのは４人として、残り２人は常にフリーマーケットを開いて資金集めと市場の調査。
　そうした役割分担で新武装堀りは６人で交代で行い、休憩を挟みつつ人海戦術で行こうと画策した模型部＋αだったが、早々にその計画――〝オペレーションリボルバー〟は破綻する事になった。
　なぜか？
　それは想像以上に回線が不安定だったからだ。
　アップデートが終ったのは金曜の夜。そこから土日に掛けて、速攻

で実装された新マップで、レア堀マラソンを行なおうとする同業（アークス）の廃人達が、一同に介した結果である。

それ故に自宅のネット回線に難がある山口、若原と、ドイツからネットを繋いでいるクラリスの新マップへの出撃が困難になり、その〝しわ寄せ〟が秋斗、数馬、青峰の3人に降りかかった。

最初の作戦が早々に破綻した事で、急遽一同は作戦を練り直した。

市場に流れたＩＳ武器を買う為の資金集めに、山口、若原、クラリスが通常マップへと動き、そしてドロップ武器を求めて青峰、数馬、秋斗が新マップを担当する。そんな作戦である。

これを一同は皮肉を込めてプラン（計画？　そんなモンねェよ）Ｂと呼んだ。

そんな出たとこ勝負という〝気合〟に他ならない正面からの耐久マラソンの末に、数馬が8時間程で、残る3つのＩＳ装備の内の一つ、〝秋桜〟装備の大剣『牡丹（ぼたん）』を出した。更に3時間後には、今度は秋斗がレアドロップを掴むが、解析すると中身が既にドロップした『牡丹（ほたん）』だった為にソレを売って、ドイツ製ＩＳ〝デアメテオール〟の槍を模した武装《ワルキューレ》を購入。そして残るはアメリカ製ＩＳ〝スターエンジェル〟の武装である二挺拳銃（ダブルマシンガン）――『ストームイーグル』一つのみ。

その最後の一つを求めて秋斗、青峰、数馬の3人は眠気をエナジードリンクで誤魔化しつつ、掘りを続けた。

――そして今に至る。

途中で幾度か回線が安定し、その際に若原、山口、クラリスがそれぞれ可能なタイミングで応援に駆けつけるが、それでも出なかった。

秋斗、数馬、青峰の3人は途中で仮眠を挟むべきかと悩んだが、時間をフルにネトゲに使えるのは今休日しかないと、身体に鞭打ち捜索を続行した。

若原と山口とクラリスは資金集め担当である為、幾度か抜ける事は出来た。

しかし秋斗達はレア泥マラソンの円滑な遂行の為に、トイレや食事の暇を惜しんで走り続けた。

そして３０時間。

『……ねぇ、３人とも大丈夫？』
「……ぁん？　ごめん、聞いてなかった。なんか言ったか？」
『大丈夫やで……。なんか偏頭痛が痛いけど』
『……右に同じでござるよ』
クラリスは不安そうに３人に問うた。
リアルの生活と時差で連続してのログインは難しくとも、クラリスは精一杯、時間の許す限りを使って模型部と共に戦った。
初めは女性だから、外国人だからというちょっとした垣根もあったが、今や模型部全員がクラリスを６番目の部員だと認識している。
そしてクラリスも模型部のメンバーを掛け替えの無い〝戦友〟だと思っていた。
そこには男女の垣根を越えた友情があった。
だからこそ、クラリスは言った。
「……次で最後にしよう。これ以上は、皆死ぬです」
「……っ」
クラリスの言葉を受けて、３人の脳裏に諦めが過ぎった。
アップデートからまだ三日なのだ。
日を改めて時間を置けば、市場に適正価格できっと溢れかえる。それを買えば良い。そして幸いな事に第一世代のＩＳはドイツ製を除き〝ほぼ全身装甲〟なので、機械的なパーツは殆どレジンで複製して組み合わせれば良い。
それに日本製のＩＳ秋桜は、その形状が最も『白騎士』に似ている。故に市販の白騎士のキットを買って、フルスクラッチでは無く〝改造〟と言う処理を施すのもありだ。
そんな考えが一同の脳裏を過ぎった。
「……確かにそうだな。一度に全部集めるよりも、集める作業と製作を同時進行した方が賢明か。だがよ……〝２カ月〟切ってんだよ、ワンフェスまで」
『っ!?』
秋斗の言葉にクラリスは悲痛な様子で言葉を飲み込んだ。
そして秋斗の台詞に続けるようにして、数馬と青峰は言った。

『せや。単純な確率で言っても、人数が揃って時間がある時にやらな〝レア堀り〟は成功する確率は薄いんや。明日頑張るんやない。今を今この瞬間を頑張るんや！　今を頑張ったモンだけが、明日をつかめるんや！』

『……クラリス殿の不安は分かるでござるよ。だけど意地があるんでござるよ。此処まで貫き通した意地が！』

続々と〝続行〟の意思を見せる男達――――。

その決意の固さにクラリスは悲痛な吐息を漏らすが、同時にハッと気づいた。

『皆……そうか。コレが――コレが〝サムライスピリッツ〟』

クラリスは秋斗達の意地を間近で感じ、そんな風に評す。

その言葉に男達は笑った。

「あぁ。そうだ。そして此処が……この戦場が――――」

『『「俺達の魂の場所だ（や）」』』

睡眠不足と極限の疲労の中、男達は慟哭した。

その言葉にクラリスは感銘を受けて息を呑む。

『――――わかった。なら、もう何もいわない。私も戦う！　人間として、５５５（ファイズ）として！』

「上等、それでこそレイヴン。歓迎しよう盛大にな！」

『そうや。１人１人は小さな火でも、２人揃って炎になる。炎になったガンバスターは無敵なんやで？』

『天使とダンスでござる！』

全員が全員。もはや自分が何を口走っているのかまるで把握していないと言うカオスな状況の中――――最後の掘り（ラストダンス）が続行される。

そしてそれから程なくして窓の外から明かりが射し込んだ。

――――連続耐久マラソンもついに３２時間目に突入する。

しかしそれでも、『ストームイーグル』がドロップする事は無かった。

「クソ……ここまでか……」

途切れそうになる意識を限界で繋いでいたのは執念だった。しかしそれすらも引きちぎる様な強烈な眠気が秋斗を襲った。

『……もう、いっぱいでち』
『朝潮……拙者に勇気を――――』
『……そろそろタイムリミットです。ごめんなさい』
リアルの事情、そして極限の疲労と睡眠不足――――ー。
全員の心が折れかけた。
掘り(夢)というのはまさに呪いに等しいと、全員がそれを痛感した。
――――しかし、その時だった。
『こちら山口！　市場にて『ストームイーグル』発見！　繰り返す！　ストームイーグル発見！』
『直ぐに全員の資金を集めて、エントランスに集合してくれ！　この値段なら買えるぞ！　９０万だ！』
『『『「――――っ!?」』』』
ボイスチャットに山口と若原の声が飛び込んだ。
２人は裏で、懸命にサーバー内の全てのチャンネルのフリーマーケットを巡回していたのだ。
回線の都合で新マップに突入できない分を、山口と若原はそれぞれの行動で埋め合わせていた。
その思いが奇跡を呼んだ。
『緊急離脱！　全員ギルドホームに撤退でござる！』
青峰の言葉に掘りを続けた一同は一斉にマップから離脱する。
そして今まで貯めたゴミに等しい武器や防具、素材を全て売りはらい資金を結集した。
――――そして遂に、秋斗は手にした。
「これで……これでようやく揃った！」
アメリカ製ＩＳ『スターエンジェル』。
その防具、武器をコンプした己のアバターを見て、秋斗は万感の思いで吐息を吐く。
それはこの場に集った模型部全員も同じであった。
『……本当に奇跡は起こるのですね。タカヤノリコの言葉は本物だった！』
「あぁ。俺達全員の勝利だ」

『長かったわぁ』
『部長も数馬も秋斗も御疲れさん』
『いやぁ、よかった。本当に良かったっすわ』
ギルドハウスにて御互いの健闘を労う一同。
その中心に立ち部長――青峰清十郎は言った。
『皆、本当に良く頑張ったでござる。秋斗殿も数馬殿もクラリス殿も……そして若原殿も山口殿も。此処に作戦の成功を宣言するでござる！』
全員が勝鬨を上げた。
それは長く険しいワンフェス出場への、ほんの小さな始まりの一歩。しかし彼らは、その一歩を踏み出す事が出来たのだ。
『皆。本当に良く戦った。本国の軍人にも、これ程のガッツを感じさせる男はそうは居ないと思う。それは私が保証する。貴方達こそ、本物のヒーローです！』
「ありがとよ。クラリスも遠いところから態々済まなかったな」
『そんな他人行儀な事、言わんといてぇな。クラリスさんやって、十分根性有る。それは俺ら全員が保障するわ。なぁ？』
『あぁ、もちろん』
『あたりまだな』
『拙者も同じである』
そんな模型部一同の言葉に、クラリスはボイスチャットの向こうで嬉しそうに笑った。
『クラリッサです。私だけハンドルで名乗るのも変だし、覚えといてください』
去り際にクラリスは本名を明かした。
ボイスチャットで模型部一同はハンドルネームを使わず呼び合っていたので、コレで全員が互いの名前を知った。
「クラリッサか。どっかで聞いたこと有る名前だけど何だったか忘れたな」
『秋斗君、それ多分装備の事やと思うで？』
「あぁ、なるほど」

思考能力が極限まで低下していた結果、秋斗は原作に登場したドイツ女性軍人――クラリッサ・ハルフォーフの事を思い出せなかった。

『では皆さん。そろそろ落ちますです。ワンフェス頑張ってください。その前に寝ましょう！』

「うぃ」

『了解。言われんでも流石にもう寝るわ……限界……』

『それでは諸君、おやすみでござる』

〝ノシ〟とチャットに書き残し、一同は競う様に解散する。

そして戦いを終えた秋斗は、一目散にベッドに身を投げた。

29 『友情』そして終わりの始まり

夏の中体連が終った。

中学で織斑双子兄弟の『爽やかな方』と言われる一夏は、一年生にして剣道部団体戦のレギュラー出場を勝ち取っていた。

同大会に先鋒として参加した一夏は、その努力と才能で鍛えた腕前で、悉く対戦相手を打ち倒していった。

そして剣道部は団体戦で地区優勝を飾り、最終的には全国ベスト16まで辿りついた。

無論、彼らが打ち倒した相手には〝強豪〟と恐れられる全国大会常連校もあった。

故にこの夏の日々は、一夏を含めた中学の剣道部にとっては掛け替えの無い青春の思い出となった。

また一夏は個人戦の方でも全国で3位という脅威的な成績を残し、夏休みが終わる頃には〝織斑一夏〟という名前が一夏達が通う中学、そして近隣の中学では有名選手として広まりつつあった。

それが織斑一夏の中学一年生の夏である。

「――――おめっとさん」

「おめでと、一夏！」

剣道部の打ち上げは別で開かれた。しかし友人として個人的に一夏を祝おうと、その祝賀会が鈴の実家の中華飯店で行なわれた。

集まったのは数馬、弾、鈴、秋斗の計4人。

祝賀会と言っても別に真新しく何か特別な料理が振る舞われたり、ビール掛けや樽を割るわけでもない。

身近な友人同士が集まって、晩飯がてらにちょっと豪華な中華を喰うという、軽いノリである。

その席で弾は個人的に気になった疑問を、〝秋斗〟に尋ねた。

「なぁ、秋斗さ。お前なんで剣道やらねぇの？」

「……ぁん？」

「いや、な？　千冬さんと一夏がアレだから、秋斗も才能在るんじゃないかと思ってさ。もしそうなら凄い勿体ないなぁと思ったり思わな

かったり」
「……何が言いたい？」
弾の歯切れの悪い質問に、秋斗はウーロン茶のグラスを傾けながら先を促した。
すると弾は頭を掻きながら、「あ～もぅ！」っといった様子で、端的に言った。
「いや、だから！　お前も剣道やってたら一夏程とは言わんけど、絶対モテてるって話だよっ！」
「あぁ、そう言うことか」
秋斗はそこで、弾が言わんとする言葉の意味を察した。
「そう言えば、そうよね。昔は秋斗も剣道やってたんでしょ？　何で辞めちゃったの？」
と、弾と秋斗の話に鈴が口を挟んだ。
織斑兄弟との付き合いは、このメンバーの中では鈴が古参である。
そしてどこかで一夏が話してきかせたのか、鈴は以前に秋斗も剣道をやっていた事を知っていた。
その質問に秋斗はふと視線を宙に移し、そして左手に持った箸で餃子を口に放り込みながら言った。
「まぁ、単純に飽きたから、かな？　後はそうだな。姉貴と一夏を見てりゃ分かると思うけど、同じ土俵で勝負して勝ちに行くってなるとかなり〝しんどい〟だろ？　だからさっさと身を引いたんだよ」
より深く話を掘り下げれば、そこに更に〝当時貧乏だった織斑家の為、金を稼ぐ為に時間を欲した〟という言葉が付け加えられる。
しかし秋斗はその理由に関しては、態々明かす必要も無いと口を閉ざした。
「まぁ、要するに……俺は〝出がらし〟なんだよ。織斑家の」
「――――あぁ、なるほど。兄弟間の才能の格差って奴か。判るぜ？」
秋斗の返しに、弾はそんな風に納得して小さく吐息を吐いた。
今居るメンバーの中で兄弟――妹を持つのは弾、1人だけである。
故に、何となく秋斗の言った理由には、心当たりがある様子だった。
「俺の妹――蘭の奴もなまじ勉強出来て、運動できるからよ。親戚と

かで集まるとすっげぇ可愛がられてんの。今はもう諦めてるけど、小遣いとかお年玉を合計したら、多分アイツ（蘭）、俺より貰ってんじゃねェかなァ……」

弾は吐息交じりに言った。

「〝出がらし〟って、流石に卑下しすぎやで？　秋斗君はかな～り〝個性〟あると思うけどなぁ」

そこに数馬が苦笑いを浮かべながらそう相槌を打った。

すると一夏も同様に相槌を打って、そして渋い顔をして口を挟む。

「何が出がらしだよ、まったく。お前はそんな薄い奴と違うだろ？　大体、ウチ（織斑家）で一番滅茶苦茶やらかすのは何時もお前（秋斗）じゃねーか？」

「ぁん？　んなわけねぇだろ。滅茶苦茶って何を――――」

「この間は飲まず食わずの引き篭もりネトゲ廃人。その次は千冬姉と似たり寄ったりでまったく家に帰らずに、部活の先輩の家に入り浸る半浮浪者。しかもそんな自由奔放な生活してるくせに成績は学年主席。……俺の方がよっぽど地味だぜ？」

「……え？」

「え、それマジ？」

一夏の言葉に弾と鈴はぎょっと驚いた様子で眼を剥いた。

中間テストと同様に期末テストでも秋斗は一位だったが、その裏で行なわれた様々な〝余罪〟を聞いたのは初めてだったからだ。

そんな鈴と弾のリアクションを受けた秋斗と、そしてその頃の全貌を良く知る数馬は、苦笑いを浮かべる事しか出来なかった。

「まぁ、……〝部活動〟の一環だ」

秋斗は短く言った。

「いやいやいや、ネトゲをやる部活なんてきいたことねーよ。なに？　模型部ってそういう部活なの？　俺も入ろうかな……」

「入部するのは自由やけど、その代わり一切女子にモテへんくなるで？　それで良いなら、弾も入ればええんちゃう？　後、ネトゲやからって並みの運動部より楽とはかぎらへんで？」

数馬は弾の言葉にしみじみと言った。

それに対して鈴は、理解が出来ないと言った様子で首をかしげる。

「運動部よりキツくて、しかもネトゲをやる部活って、何？　意味がわかんないんだけど？」
「まぁ、真実は模型部しか知らん話や。やけど、色々あったんやで？」
……特に今年の夏はね」
「なんだよそれ。それスゲー気になるんだけど？」
数馬の言葉に一夏は恐る恐る、だが興味深そうに尋ねた。そして秋斗の方を見た。
「なぁ、秋斗。お前、今年の夏何やってたんだ？」
「……〝修羅〟に入ってた。まぁ、一言で言うならそんな感じかな？」
秋斗はコトリとグラスを置いて、深々と吐息を吐いた。
ネトゲ廃人な生活も、その後に行なわれた模型部部長――青峰清十郎宅に入り浸った生活も、全ては模型部活動の為である。
それは運動部が大会に出るように、毎日過酷な練習を積み重ねるのと根本は同じである。
唯一、違うのは単純な〝理解者〟の数だけだ。
寧ろ大会があるから練習をする運動部員よりも、秋斗は模型部全員の夏のワンフェスに掛けた〝思い〟の方が強いと思っていた。
学校の記録にも残らない。
表彰があるわけでも無い。
参加するには自腹を切るしかない。
そして成し遂げたとしても、それが一般人（パンピー）に理解されるとすら思えない。
故に傍から見ればそれは余りにも非生産的で、労力の無駄とも思える趣味への限界挑戦とも言える無謀な試みだった。
しかし最初で最後の模型部５人で参加するイベント――夏のワンフェスに出たいという部長――青峰清十郎の気持ちと、その意思を汲み取りその為に夏を捧げた模型部員の全員の覚悟は、ひたすらに純粋だった。
故にそんな模型部を〝嘲笑う〟存在は、例えそれが家族や友人であっても、秋斗は許せそうにないと思う。

「――――まぁ、色々あったんだよ」
秋斗は夏の出来事を思い返した。

☆

夏のワンフェス。
それは現在の模型部〝5名〟で参加出来る唯一の、最初で最後の大きなイベントだった。
それを目指す為に、秋斗も数馬も山口も若原も全員がその身を削った。
模型部が今年の夏のワンフェスを目指すのは、オンラインゲーム〝幻想惑星〟のコラボ企画として配布された3機の〝ＩＳを模した装備〟にある。
秋桜、デアメテオール、スターエンジェルの3機。
ＩＳというマルチフォームスーツは前回のモンドグロッソで一気にその名が世間に浸透し、それが故に敢行されたオンラインゲームとのタイアップ企画であった。
現在、秋桜を除いてネット上にもＩＳに関する詳しい資料が存在しない。
故に、ゲームとはいえＩＳを模した装備が出る事を知った一同は、『コレしかない！』と思った。
加えて〝海外製のＩＳ〟の資料を得るまたと無い機会である。
故に早速それら〝資料〟の収集に、模型部一同は動き、全員でオンラインゲーム〝幻想惑星〟の世界にログインした。
ドイツからの応援――〝クラリッサ〟という戦友の援護もあり、模型部はゲーム内で、地獄（デ）の３０時間耐久（ス）レアドロップマラソン（チ）（マー）を駆け抜け、目的の3機のＩＳの装備と武器のデータを手に入れる事に成功した。
その過酷な戦いの末に模型部――クラリッサを含めた一同の結束が、先輩後輩や男女、国境の垣根を越えた〝熱い友情〟に昇華したのは言うまでも無い。

それは過酷な合宿を乗り越えた運動部の絆に勝るとも劣らないだろう。

そんな〝最初の資料集め（ネトゲ廃人プレイ）〟を終えた模型部一同は、睡眠という少しの休みを置いて直ぐに、イベントに展示するＩＳ３機分の模型の制作に取り掛かった。

学校の部室で作業するだけでは時間が足りないと悟った部長青峰が部員を実家に呼び、そこで入り浸っての作業を早々に提案。

もしも青峰が医者の息子でなく、その潤沢な経済支援による素材提供と、ＭＡＹＡや３Ｄプリンター等という高価な道具による作業の効率化がなければ、状況は更に過酷になったといえるだろう。

更には学生の本分として、七月の頭には期末テストが迫っていた。

補習を受けるハメになればそれだけ作業の時間が削られる。

その為、模型部一同は勉強も平行して行なう必要があった。

しかしそこでも青峰が、発起人（いいだしっぺ）としての〝男気〟を見せた。

期末テストを見越した青峰は、先輩としての経験とその無駄に〝高成績を叩きだす頭脳〟を生かし、模型部一年生部員全員に、過去に出題された期末テストの出題傾向を伝授したのだ。

それにより模型部一同は１人も赤点も無く――――と、いうより寧ろ学年の上位成績者に全員がその名を連ねるという結果を出した。

――そんな期末テストを無事に乗り越えた模型部一同は、終業式を経て夏休みに入った。

イベント前の最後の追い込みとして、秋斗達はほとんど家に帰らず青峰の実家に入り浸った。

そして来るべき７月２４日――――。

模型部一同はワンフェスの会場となる〝幕張メッセ〟の土地を踏みしめた。

「――――拙者は、この日を生涯忘れる事は無いでござるよ」

青峰はワンフェス会場に用意したサークルの椅子に座り、傍らの秋斗にそう言い聞かせた。

秋斗は青峰の言葉に受けつつ、この日のために作った模型部のブースに展示された３機のＩＳの模型に視線を移した。

会場に足を運んだ無数の模型ディーラー。そしてサブカルを愛する数多くの来場者。

それら多くの人々が模型部のブースの前に足を止めて、『写真撮影いいですか?』と、尋ねてくれる。

余りに過酷なスケジュールと時間の無さがたたり、まともに塗装して完成見本として展示出来たのは〝秋桜〟の模型一つだけだったが、それでも多くのお客さんが『凄い!』や、『感動した!』という言葉を贈ってくれた。

賞状にも残らず、表彰台にも登る事の無い、自己満足を突き詰めた世界だが、その中で模型部一同の心は確かな感動で満たされていた。

「……最初に話を聞いたときは無茶苦茶だと思ったけど、終ってみればいい思い出だな。よかったよ、部長と戦えて」

「それは拙者も同じでござるよ。ありがとう、秋斗殿。コレで心置きなく卒業できるでござる」

撤収作業の途中で、秋斗と青峰はそんな言葉を交わした。

そして互いに、この日の友情が恐らく生涯続いていくと感じた。

☆

夏休みが終わり、季節は秋になる。

季節は文化祭のころだ。

文化祭の部活の出し物で模型部は、夏のワンフェスに展示したアメリカ、日本、ドイツ製の3機のＩＳ模型を、完成見本として展示する事にした。

この文化祭が今年の模型部が参加するイベントとしては最後になる。

しかしイベントと言っても、文化祭で部として新しい模型を造る気は無い為、この時の模型部にはわりと暇があった。

故に、そんな時間を使って、秋斗はかねてより数馬、若原、山口に紹介しようと思っていたジークンドーの師範――劉老人を紹介した。

趣味の方向性は違えど、全員がそれなりのオタクである。

加えて男らしく、強さには一定の興味がある。
そして〝いじめられた経験〟から、護身としての幾つかの技を覚えて〝自信をつけたい〟という意思もあった。
流石に秋斗程の天性の才覚はないにしても、その結果数馬達はそれまでのインドアな趣味から一変して、鍛錬に外に出る機会が多くなった。
劉老人が鍛錬に付き合う時間は基本夕方から夜である。
そんな劉老人との鍛錬を行い、夕食に鈴の中華飯店に訪れた秋斗含む模型部は、開口一番に鈴にある指摘をされた。
「――――折角なんだから、もう少しマシな髪型にしてみなさいな？　その方がモテるわよ、きっと」
「ぁん？」
「前々から思ってたんだけどさ。あんた達全員顔立ちは悪くないのよ？　特に秋斗。アンタもうちょっと外見を意識しなさいよ。勿体無い」
「……外見ねぇ」
「外見か」
「外見なぁ」
「外見……」
兼ねてから秋斗は、鈴と弾からもう少し身なりを整えろと指摘されていた。
秋斗の髪型はこの時点で肩まで届くほど伸ばし放題。そして服装は、削りカスと塗料の飛沫がついた汚い装いである。
また数馬他、模型部全員も似たり寄ったりな出で立ちである。
鈴は最近顔を見せるようになった秋斗含む模型部一同を見て、常々歯がゆく思っていた。
「模型の完成度に拘る前に、自分の完成度に拘りなさいよ。そんなだから模型部はキモいとか陰口叩かれてるのよ？　悔しくないの？」
「まぁ、悔しいと言うか……なんだろうな。どうでもいいんだが――――」
「その考えが良くない！　絶対に何とかしなさい！　何とかするまで

出禁にするわよ！」
「……そりゃ横暴だろ」
「横暴じゃない！」
鈴はますます意固地になった。
何をそんなに鈴は意地になっているのか判らず、秋斗は首をかしげた。
「――――そりゃお前、秋斗が本気出せば一夏に匹敵するだろうからさ」
「……どういう意味だよ？」
翌日の放課後。
一夏は部活に行き、鈴は基本女子のグループで行動する為、帰路を同じにする弾に秋斗と数馬は昨日の鈴の一件を相談した。
すると弾はあっけらかんと言ってのけた。
「お前等も知ってると思うけど、鈴の奴は一夏に惚れてるだろ？」
「あぁ」
「せやな。それがどうかしたん？」
半年もつるめば微妙な人間関係も多少は把握出来る。故に、この時点で弾も数馬も鈴が一夏に惚れている事は看破していた。
だからこそだと、弾は言葉を続けた。
「我等が同志〝織斑一夏〟だが、あいつは凄まじくモテる。入学直後に上級生のお姉様８人から告白された事も記憶に新しいだろう？
そして、この間の中体連で一夏の人気は近隣――否、全国区に広がりつつある。だから鈴は不安なのさ」
「それはしゃあないんちゃう？　鈴が好きになってしまったんやから、鈴がそれを受け止めるしかないで？　一夏が悪いとか言う話ちゃうやろ？」
「そりゃそうさ。だけど、一夏に一極集中する人気を散らす事が出来るとしたらどうする？」
「……は？」
「あ、なるほど。そう言うことか」
弾の言う言葉の意味を秋斗は察せず、数馬は察した。

その様子に弾は小さく溜息を吐いた。
「おいおい、秋斗も自覚無しかよ。いいか？　お前本気出せば一夏並とは大げさかもしれないが、間違いなくモテる。だから鈴は秋斗に本気出してもらって、一夏の女性人気を少しでも散らしたいんだよ」
弾の台詞に数馬もうんと頷いた。
それを見て、秋斗は思わず溜息を吐いた。
「……んな回りくどい事せずに、好きなら好きってさっさと告れよ。あの酢豚娘」
「ま、そいつは無理だろうな。肝心なところでアイツ（鈴）へたれだもん」
「弾にヘタレって言われるなんて相当やな、鈴」
男３人のそんな評価に、剣道場で一夏の姿を見守る栗色のツインテールがくしゃみをしたが、それを一同が知る由も無い。
――それから数日が過ぎた。
秋斗は鈴の中華飯店に顔を覗かせる度に鈴から口煩く『お洒落しろ』という小言と、サンプルとしての雑誌モデルの写真を幾つも突き渡された。
「――はぁ。仕方ねェな。まったく」
「ん？　秋斗君、どうしたん？」
「……数馬。ちょっと山口と若原を呼んでくれ。俺は弾を呼ぶからよ」
「一体どうしたん？」
「……ちょっと本気出す」
「……マジでか？」
鈴の執念に、秋斗は遂に折れた。
――そしてこの〝妥協〟が、後の事件の引き金となった。

最終章

３０　流血に濡れて、孤独を抱えて

織斑三姉弟が怒った場合。

一夏は典型的な感情的に怒鳴るタイプである。そして千冬の場合は怒りに幾つかの段階があり、最初は理性的に怒り、次に軽く手が出て、更にソレを過ぎると無言で拳を握るタイプ。そんな二人に比べると秋斗は寧ろ〝怒る〟という事、それ自体が稀なタイプの人間だった。

無論、秋斗も声を荒げて叫ぶ事はある。

が、しかしそれは本当の意味での怒りとは程遠い苦言や愚痴のようなもの。

故に、秋斗の怒りを見た事がある者は非常に少ないと言える。

基本的に秋斗は物事をハッキリさせるよりも、曖昧である事を良しと出来る性格だ。故に基本的に他人には無関心である事が多く、故に秋斗の逆鱗に触れるとどうなるかを未だ誰も想像した事がない。

――――唯一、その一端を見たとされる人間こそ、御手洗数馬だった。

そして数馬は唯一、織斑3姉弟それぞれの怒り方を見た事がある人間でもあった。

幾度か織斑家とも交流を重ねた数馬曰く、一夏と千冬が怒りを見せる場合は〝理由〟が見える。しかし秋斗の場合は徹底して静かで、尚且つ淡々と報復を行なうタイプであるとの事。

基本的に流す人間であるからと、侮る事なかれ。後の時代で秋斗を知る彼の友人らの共通の意見として、滅茶苦茶やらかす分、切れるとあの姉弟で一番おっかないというのが、織斑秋斗への評価であった。

そんな御手洗数馬が織斑秋斗と初めて知り合ったのは中学に進級してから程なくしての頃だ。

そしてその出会いから程なくして、数馬は繁華街のとあるゲームセンターのトイレで、２人のチンピラからカツアゲされた。

その時の恐怖は、数馬の中に未だトラウマとして残っている。
なぜなら今では、一人では決してゲームセンターには近づけなくなったほどだからだ。
「――財布出して♪」
その時の数馬は、チンピラ2人の茶化すような声に震えて何も出来なかった。
黙っていたら頬を一発殴られた。
5年生の頃に関西から引っ越して以来、この街に数馬の友達は少ない。
加えて進級した中学でも今後上手くやれるかも不安だった。
だから数馬はゲームの世界にのめりこんだ。
偶々知り合った秋斗と勝負するのが楽しくて、連日のように数馬はゲームセンターに通った。――それが故に、チンピラに眼をつけられた。
財布を取られたこと。そして殴られたこと。そして友達と長く遊べるようにと、財布の中に貯金の殆どを突っ込んでいた自分の迂闊さ。
そんな恐怖と悔しさと自分への情けなさに、数馬は涙をこぼした。
そしてそんな姿を誰にも見られたくなくて、何とか涙の痕を消そうと洗面台で顔を洗った。
だがそこに幸か不幸か、偶然友人(秋斗)が現れた。
「……何があった?」
「っ……」
なんでもないと答えようとしたら声が出なくて、数馬は思わず泣いた。
秋斗はカズマの様子と、頬の傷を見て直ぐに事情を察したらしく、何時よりも更に低くて平坦な声で短く尋ねる。
「……さっきすれ違った2人組の連中か?」
数馬は涙を拭いながら頷いた。
「幾らパクられた?」
嗚咽と一緒に搾り出した「5，000円」という言葉を聞いて、秋

斗は数馬の肩を置いた。
「わかった。お前はそこで待ってろ」
「秋斗君？　秋斗君、何する気や――――」
「いいから。……待ってろ。な？」
「っ!?」
この時の事を振り返る度に御手洗数馬は織斑秋斗に対するある種の畏敬と尊崇の念を抱く。
数馬が思うに、この時の〝秋斗〟は確かな形で静かな形でキレていた。
肌で感じる秋斗の静かな怒気に、素直に頷く事しか出来なかったからだ。
後に数馬はこの日の事を語る際に、秋斗も確かに〝世界最強〟の実弟だったと納得する。
そして同時に、この時の秋斗の様子を注視して覚えておけば、後の〝あの事件〟も未然に防げたかもしれないと数馬は思った。
☆
劉老人から習ったジークンドーの鍛錬が少しずつ実を結びはじめ、模型部で一番のデブだった若原が痩せ始めた。そして細かった山口も食事量が増えたのか、少しずつ体格が良くなっている。
また鈴が発端となったイメチェンにより、模型部の一同は根暗でジメジメとした印象を大きく変えた。
特に秋斗の変化がもっとも大きかった。
不健康そうな隈と、鋭いと印象的だった眼光はそのままに、一夏とは良い意味で対照的な、アウトロー系の青年にその印象が変わったのだ。
その変化に一時期は一部の女子生徒の間で噂になったほどだ。
そしてそんな変化を遂げた模型部も、それまでの趣味を見せる、語る、造るのみに過ぎなかった内向的な活動が、少しずつ屋外へと進出し、今では〝文化研究〟と呼んでも恥ずかしくない程になった。
――――しかし元々スクールカーストの最底辺に居た模型部が、秋

斗を筆頭にそんな〝派手〟な行動を見せる事を気に入らないと目の仇にする者も多くいた。

特に思春期特有の自己中心的な排他的な思考と、芽吹きつつある世間の〝女尊男卑〟の空気に当てられた生徒には、そんな秋斗を初めとする模型部の存在が非常に鼻についたのだ。

それは一年が終わって青峰が卒業し、秋斗達が二年生に進級する頃に一気に表面化した。

「――――あいつらなにか勘違いしてんじゃないの？」

「キモオタ集団の癖に」

「マジでキモい……」

先輩後輩という関係が強く意識されはじめる中学という環境で、1年前は朴訥な小学生だった少年少女は、世間の眼と周囲との差を意識する様に成長していった。

高い社交性を持ち、口にしても恥ずかしくない程度の世論と流行を意識した趣味や振る舞いが〝普通〟。

そして世間の流行や大衆世論の〝平均〟に逆らい、己の趣味を堂々貫くマイノリティーなオタク集団は世間の異端。

そんな考えが学年に蔓延するようになった。

世間では女性の立場が強くなった。

故に女性目線で理解不能なモノは全て〝気持ち悪い〟と評される。

同中学の模型部が、そんな大衆世論に感化された一部の学生らの目の仇にされるのは、時間の問題であると言えた。

今日までの間、同中学のオタク達の楽園――模型部を守り抜いたのは青峰の努力。そして秋斗の存在にあった。

秋斗が学年一の秀才であった事。

そしてお洒落を意識すれば、同中学で一番のモテ男である兄の一夏に匹敵する容姿を手に入れる事。また千冬の弟と言う出自。

それらのステータスが、模型部をまだ決定的な〝異端視〟から遠ざけていたからだ。

しかしその免罪符も、中学2年になり秋斗と共に模型部全体が中学で目立つ存在になると、次第に効力を失っていった。

スクールカースト最底辺である模型部で、最も調子に乗っていると秋斗も一部の女子や男子に思われる様になったのである。

秋斗が何時ものように教室の端で模型部のメンバーと屯していると、これ見よがしに聞こえるような声で女子達が『キモい』と影口を叩く。

秋斗には千冬の弟という一種の免罪符があったが、それ以外の模型部生徒への評価は辛辣だった。特に〝見た目〟を少しずつ意識した後が顕著である。

言葉を放つのは大抵が、気が強いカーストの上位集団だ。

彼ら、彼女らは段々とその悪意と嫌悪のぶつけ方を露骨にした。

「――――鬱陶しいな」

ある日、わざと秋斗の耳に届くように、数名の女子が小声で話していた。

出る杭は打たれるのが世の常。

そう思えば大したことではない。

が、しかし流石に〝友人〟を悪く言われる事には、流石の秋斗も段々と苛立ちを募らせていた。

しかもストレスの原因はそれだけではない。日に日に迫った〝第二回モンドグロッソ〟。

そこで生きるか死ぬか、一夏がどうなるかという不安が、雪の様に少しずつ秋斗の心に圧し掛かっていたからだ。

「……千冬様の弟なら、あんなキモイ集団との付き合いなんて止めればいのに」

「ホントよね。なんで態々、世間に引かれる様なキモい趣味してるのかしら……？」

その声を当然、秋斗も含めた模型部のメンバーも聞いていた。

「……放っとき。秋斗君。関わるだけ無駄やで」

数馬も若原も遠藤もその声を無視してゲームの話題を続けた。

彼らは秋斗と違い小学生時代に似たような経験があったからだ。

――――しかし秋斗は違った。

ついに声を荒げた。

「……俺が誰とツルもうが、俺の勝手だろ？　なにか文句でも有るのか？　あ〝!?」
「――っ!?」
教室中がシンと静まり返った。
それは剣道部の鍛錬上で一夏が発する声と同質の、想像以上に良く通る一種の〝怒鳴り声〟に近かった。
秋斗の怒気を直接ぶつけられた件の女子2人は、青ざめた顔をした。
「そ、そうじゃないけど――」
「じゃあ、なんだよ？　言えよ」
「っ!?」
「あかんて、秋斗君！　ストップや！」
机を殆ど蹴り飛ばすような勢いで一歩前進する秋斗を、慌てて数馬が手を引いて止める。
2人の女子生徒は殆ど何も言えずに、混乱と驚きとで涙を目に浮かべ始めた。
「ちょっと、織斑君！　そういう言い方はないんじゃないの!?」
「そうよ！　この子達は親切で言ってあげてるのよ!?　それを怒鳴る事ないじゃん！」
そこへ気の強いクラスの女子集団が反論を上げた。
庇うように件の女子2人を後ろに下げ、秋斗に真っ向から対立する。
その様子に秋斗は数馬の静止を振り切って、更に一歩前に出た。
「うるせぇよ、喚くなブスが。ロッシーニみたいな顔しやがって、何が親切だ？　偉そうにほざくな、アホ！　他人（ヒト）のダチに文句つけるとか何様だ、コラ!?」
「――っ!?　最低っ！」
秋斗のブス発言にクラス中の女子の怒気が膨れ上がった。
が、秋斗はソレすらも意に返さず、更に続けた。
「最低？　そりゃお前らの事だろうが？　え？　どうなんだ、言ってみろよ？」

「おい、織斑！　もう良いから、その辺でやめとけって――――」

ついにクラスの委員長である男子生徒が秋斗を止めに入る。

当事者だけでは収拾が付かないと、まるで関係のない〝傍観者〟が無理やり介入する時点で、教室内の空気が如何ほどだったかは想像に容易い。

秋斗の発した剣呑な空気と、女子生徒らの怒気に教室が静まり返っていた。

数人の男子が止めに入ったところで、秋斗は大きく溜息を吐き、自分の席に戻る。

クラス中の視線が秋斗を恐々と貫く。

が、それらを一切無視して秋斗はスマホに繋いだイヤホンを耳に挿して、外界を遮断した。

次の授業を受け持つ教師が来るまでの数分の間。女子達の半数は俯き、半数は敵意に近い感情を込めた視線を秋斗に向けていた。

その日以来、クラス内での秋斗の評価は大きく落ち込んだ。

女子のネットワークはその日中に部活動を介して拡散し、翌日には学校全土に広まり、秋斗は女子の間で『最低の方の織斑』という悪辣な謗りを受けた。

「――――なぁ、秋斗君大丈夫なん？」

「ぁん？　なにが？」

深夜。数馬はボイスチャットで恐る恐る尋ねた。

学校での秋斗は良くも悪くも有名人だった。

そして一度は女子全体でその評価が上がり、そして最低レベルに落ち込んだ。

――――そうなってくると今後はどうなるか？

それはオタクとして女子達の強い嫌悪感情を受けた経験のある数馬には、容易に想像が出来る事だった。

都落ちと同じく、それまでの高い評価とはまるで逆の、凄まじい悪感情にさらされる。数馬はそんな風に、今後の秋斗を心配した。それは模型部の一同も同じであった。

が、秋斗は言った。

「……知ったことじゃねぇ。有象無象の凡人なんざほっとけ」
「だけど――――」
「いいから。放っておけって」
「……わかった。せやけど、なんかあったら言うんやで？」
秋斗は何時もの平静とした様子で、淡々と言葉を受け入れた。
が、しかし数馬の懸念はまさしく的中し、その翌日から秋斗に対する小さな嫌がらせが始まった。

☆

水に塗らされた上履き。机の上に何故か置かれた雑巾。そして破り捨てられたノート。
「……やってくれる」
一つ一つは些細なものである。そして『いじめ』だと断ずるには余りに攻撃力が低すぎる。
しかし非常に鬱陶しい事は確かだ。
人を不快にさせると言う意味では効果的で、寧ろもっと大々的に〝闇討ち〟とかを仕掛けろとさえ思ってしまうレベルである。
そんな嫌がらせが三日程続いた頃に、秋斗は廊下で鈴とすれ違った。
「――――アンタ、大丈夫？　嫌がらせとかされてない？」
「ぁん？」
秋斗は突然、鈴に袖を引かれて、人気の無い廊下の隅に呼び止められた。
「嫌がらせ？　何の話だよ」
「とぼけないでよ。この状況でそんな〝来賓用のスリッパ〟履いてるなんておかしいじゃない？　なんかあったんでしょう？」
「……鋭いな」
友人の中で、真っ先に気づいたのは鈴だった。
聞けば、転校直後の小学生の頃に、鈴もクラスメイトから嫌がらせをされた経験があると言う。

そして女子として、学校内の噂が耳に入るが故にであった。
「別に何も、大した事はねェよ。ただ、大した事が無さ過ぎて逆にストレスが溜まってるかな？　もっと本格的に闇討ちとか仕掛けてくれるなら、こっちも反撃をしやすいんだが――――」
「……なら良いんだけど」
女子からの秋斗の評価が異常なほど地に落ちていると知り、鈴は状況を尋ねたが、それに対する秋斗の返答は苦笑交じりの平静とした答えだった。
鈴は少し不安そうな表情を浮かべる。
その顔を見て、秋斗は思わず尋ねた。
「なんだ？　心配してくれんのか？」
「友達なんだから、当たり前じゃない」
鈴は間髪いれずにはっきりと言った。
秋斗は鈴のこの真っ直ぐな性格を、改めて好ましく思った。
そして同時に思った。
「そんぐらいはっきりと一夏に気持ちを伝えたら話は早いのに？　何でいい加減、お前告らねぇの？　早くしろよ」
「っ!?　それとこれとは話が違うでしょ！　って、いうか今はアンタの話をしてるんだから、一夏は関係ないじゃない！　話を逸らすな！」
鈴は顔を赤くして声を荒げた。
そんな鈴の変わらぬ様子に秋斗は思わずカラカラと笑った。
「はいはい。分かってるさ。ま、そんなに気にする事じゃねェよ。本気で仕掛けてくる度胸も無い有象無象の凡人がやる事だ。ほっときゃ良い」
「……私が言うのも何だけど、女子のいじめって結構陰湿よ？　本当に大丈夫？」
「ご忠告どうも。ま、ほとぼりが冷めるまで、俺の近くにはいないほうが良いぜ？　一夏と弾にもそう伝えといてくれ。ま、一夏の奴は気づいてねぇだろうけどな」
「秋斗!?」

此処で余計な茶々入れをされると鈴まで嫌がらせを受ける事になる。
流石にそれは予想が出来たので、秋斗は短く忠告を返しつつ、後ろ手を振って踵を返した。

☆

嫌がらせに対して、秋斗はあえて相手を煽るリアクションをわざと繰り返した。
上履きを濡らされて以来、堂々とした様子で来賓用の豪華なスリッパを使い捨てるように履き、雑巾が置かれていた時はそれをあえて窓の外に投げ捨て続け、最終的にホームルームでクラス全体を『雑巾投棄事件』の容疑者に巻き込んだ。
そして教科書やノートに落書きを施されようがテストでは問題なく満点を取り、学年一位の座を保持しつづけた。
――――素直に凹んでやる気など一切無い。
そんな秋斗の煽るような姿勢に対し、嫌がらせは次第にエスカレートしていった。
それから一週間。
今度は引き出しの中に墨液が流された。
そして外履きの靴に画鋲を仕込まれた。
ついには秋斗の机と椅子のみが、なぜか廊下に放り出されていた。
「飽きもしねぇで、良くやるぜまったく」
流石に机を外に出されては、素直に戻すしかない。
秋斗は溜息を吐きながら机を元の位置に戻した。
この時点でクラス全体が、秋斗に対する数々の嫌がらせの事を知っていた。しかし知った上でも、それを止める為に表立って動く者は居なかった。
正義感を働かせることで、自分も秋斗と同じく嫌がらせの標的になる事を恐れたからだ。
秋斗は心理をよく理解出来た。故にそんなクラスの様子に対して

も、秋斗は特に何も言わずに平然と過ごした。
寧ろ数馬を初めとする模型部の仲間達は、今も良くやってくれると思う。
表だって嫌がらせを止める様には言えなくても、秋斗には親切を貫いていたからだ。
寧ろ逆に秋斗は、大人しくして欲しいとさえ思う。
（……しかし此処まで苛められる可哀想な生徒がいても担任はマジで動く気がねぇのな？　税金払う気が失せるぜまったく）
授業中。秋斗はこれらの事態をまるで知らないと言う態度で通し続ける担任の静観ぶりを見て、思わず苦笑をもらした。
しかしコレには秋斗自身の態度にも原因があった。
流石に担任も、秋斗の側から助けを求められれば対応をした。しかし秋斗の開き直りに近い堂々とした様子が、逆に教師が手助けに介入するタイミングを逸す原因になっていたからだ。
内心では、担任も機会を伺っているところであった。
己のクラスでいじめが横行している現状――しかも世界的に有名人である織斑千冬の弟がその当事者だ。
故に事を大げさにしたくないと言う保身の感情は当然あったが、それと同じくらい何もせずに居ては不味いと言う危機感もあった。
――そして時間だけが過ぎて行った。

☆

「――そろそろ誰が仕掛けてきたのか、大体判ってきたな」
数々の嫌がらせに秋斗の心は精神的な辛さを感じるよりも、鬱憤をぶつける意味での〝苛烈な報復〟を求めていた。
何時しかその心は、自然とそのタイミングを計り始めていた。
秋斗が嫌がらせを受ける度に、その様子を常に見張っているような視線がある。
視線を感じると言う技術は、ある意味では劉老人との連日の鍛錬の結果だ。

そして秋斗はその視線の主がもっとも求める理想的なリアクションの一切をとらなかった。エスカレートする嫌がらせを飄々と受け流す内に、不愉快さを顕にする数名の生徒を発見した。

3人の男子と5名の女子。学年は秋斗と同じ。だがそれぞれクラスが違う――――。

共通しているのは、それぞれがスクールカーストの上位に位置する存在であるという事だ。

そして例外なく、全員が粋がった中学生らしく〝調子〟に乗っている事。

校則違反の化粧や整髪は当たり前。

改造した制服と自分ではカッコいいと思っている微妙な着崩し。

それは〝不良〟と言うには余りに貧弱で、校則違反を行なう程度の矮小な度量と声の大きさでクラスの発言力を得ているだけの存在だった。

そしてその中には秋斗も見知った顔がある。

「――――あの女か」

切っ掛けとなった事件で、秋斗の言葉に真っ先に反論した女子生徒。彼女がそのグループを先導していたのだ。

噂では家はそこそこに大きく、身内が市議会の議員であるという典型的な裕福な家庭の生まれ。

何事も不自由せず、癇癪を起こせばそれなりに思い通りになってきた人生なのだろう。加えて女性に対して優遇するようになった今の世間の風潮から、女尊男卑の急進に近い考えを抱いている。

そしてそんな女子生徒を囲む男子生徒達だが、よくよく考えると、その顔の何れもを秋斗はゲームセンターで見た覚えがあった。初心者狩りに近いプレイで態度が悪かったので、秋斗があえて〝判らん殺し〟と〝ハメ技〟で潰してきた連中である。

また一夏程ではないが、割りと女子に人気が有る方の男子だ。

(……アレに比べたら弾の方がよっぽどイケメンだろうに。この年頃の女子ってのは、ホントに意味が分からんな)

内心でそんな風に評価を下しつつ、犯人に目星をつけた秋斗は密か

に反撃を決意した。
多少のやんちゃは１４歳の特権。
そんな風に秋斗は一時的にあえて自分の精神年齢を忘れて、独りの無謀で愚かで独善的な愚かしい〝中学生〟として振舞う事にした。
無論意味が無いわけではない。
これ以上に嫌がらせがエスカレートすると、一夏や鈴、弾や数馬、模型部の連中が巻き込まれかねないからだ。
それに中学生生活も飽きてきた事も有る。
無理に早起きするのも面倒な上に、鬱陶しい学生社会で粛々過ごすのもアホらしい。
一度前世の学歴社会を経験し、その上で学歴が無くても何とかなる事を身をもって体験したのだ。
惜しいといえば〝模型部〟にいけない事だが、これから先の巻き込まれる事を考えれば潮時である。
――――加えてこれから起こる原作の〝一夏誘拐事件〟の事を考えると、尚更だ。
故に秋斗は、
「――――終わらせてやるか」
と、静かにぼやいた。
☆
翌日、秋斗はゴミ捨て場のように散らかされている自身の机周辺を見た。
――――今日はどうするんだ？
そんな様子でニヤニヤとこちらを見ている件の集団に、秋斗はチラリと視線を移した。
秋斗はとりあえず、溜息を一つ吐いて無言でゴミを片付ける。
「……手伝うよ」
机が外に出された時もそうだが、そこでいつものように数馬と若原と遠藤が手伝うと申し出た。
が、秋斗はソレを制した。
「いや、必要ねェ」

「だけど――――」
「いいから……。無関係って顔してろ」
「――――っ!?」
その瞬間、御手洗数馬は息を呑んだ。
なぜなら数馬に見せた秋斗の形相は、嘗てゲームセンターでカツアゲしたチンピラを追い詰める時の表情とまるで同じだったからだ。
数馬は咄嗟に声が出せなかった。
その空白の隙に、秋斗は数馬達を無視してゴミを片付け終える。そしてゴミ箱を持って、〝件の連中〟が屯する教室の隅へと向った。
いやがらせの主犯達は秋斗の平然とした態度をゴミを片付ける様子を〝面白く無い〟と言う態度で見ていた。
すれ違い、秋斗がゴミ箱を床に卸す。
すると秋斗が踵を返した瞬間、集団の男子が一人そこに近づき、秋斗の足元にゴミ箱を蹴り倒した。
集めたゴミが教室の床に散らばった。
――――もう一回集めろよ？
暗にそう言ってのけるにやけた表情の男女がそこには居た。
――――秋斗はこの瞬間を待っていた。
「……調子に乗るなよ、糞ガキ」
秋斗はポツリと呟き、徐に倒れたゴミ箱を右手に拾い上げる。
そしてゴミ箱を蹴り倒した男子生徒の頭に向けて、そのブリキのゴミ箱を叩き付けた。
――――鮮血が舞った。
1人目の男子をゴミ箱で叩きのめした後、秋斗は絶句する集団に向けてゴミ箱を投げ捨て、拳を固めて一番近くに居た女子の鼻先を殴りつけた。
そして間髪入れずにその隣に居た男子の茶髪を鷲掴み、教室の扉に叩きつけた。
まるで〝嵐〟のように拳と蹴り足を振るって動く秋斗の動きには、一切の躊躇いが無かった。
教室中が騒然となった。

女子の悲鳴が響き、男子は絶句する。
そしてその中でいち早く我を取り戻した生徒が叫んだ。
「――――誰か先生呼んで来い！　早く！」
「織斑、止めろ！」
「先生！」
動揺はクラス中に広がり、瞬く間に廊下に響き、そして両隣の教室から次々と野次馬が顔をのぞかせる。
その中心で秋斗は主犯全員を叩きのめした。
そして同時に、止めに入った教員や男子も見境無く叩き伏せた。
騒ぎに気づいて学年主任や担任などの多くの教員達が駆けつけた時には、同中学内で所謂〝問題生徒〟と言われた男女全員が、額や鼻や唇から流血し、蹲ったまま涙、鼻水、尿を流しての嗚咽をあげていた。
その中央で両手の拳や上履きに返り血を纏った秋斗は静かに佇んでいた。

31　イレギュラーの悩み

救急車のサイレンが鳴り響く――――。

傷を受けた生徒らはそのまま病院に行き、秋斗は取り押さえられて学校の会議室に隔離された。

担任と学年主任を含めた多くの複数の教員が揃う中で、秋斗は事情の聞き取り。――――そして間もなく説教（正論）を受けた。

どんな事情があれ、あまりに短絡的。

暴力に訴えず、先ずは家族や友人、そして学校に相談するべきだ。

それは余りにも当たり前で、欠伸が出るような台詞だった。

だからこそ〝聞く価値が無い〟と、秋斗はそんな教師らの言葉を右から左へと聞き流した。

秋斗は所属する中学の2学年ではトップを誇る成績優秀な生徒。

そして現在は日本で最も有名な織斑千冬の弟。加えてその兄には成績優秀にして品行方正、また所属する剣道部では期待の星の一夏が存在する。故に学校側としてもこの問題をなるべく内々に処理したいという思惑が手に取るように分かったからだ。

――――もっともその思惑があると期待したからこそ、秋斗は今回の行動に至っている。

「――――聞いているのか、織斑秋斗！　君がやった事はどんな理由でアレ」

「ご高説は結構。だがその前にアンタ（担任）さ。俺が連中から散々嫌がらせを受けてた事、知ってただろ？　それで良くそんな偉そうな事をほざけるのな？　……恥ずかしくねェの？」

「っ!?」

長々とした説教の中で秋斗は手持ちのカードを一枚切る。

「模型部の連中も、別のクラスのダチも全員、今日までの事を知ってるぜ？　間違いなくクラスの連中も。その上でさ。……担任のアンタが何も知りませんでした、なんてまずありえねェだろ？　で、俺に説教垂れる前に、なんか俺に言う事あるんじゃねェの？」

秋斗の言葉に担任の男性教諭は蒼白な顔で唇を開いた。

「……それについてはすまなかったと思っている。確かに〝懸念〟はあった。それに対応する機会もずっとうかがっていた。しかし織斑の様子に、まだそこまで深刻ではないという楽観もあったのも事実だ。もっと早くに気づけていたら――――」

「いや早くに気づいてたろ？　机を外に放り出される以前に、毎日スリッパ履いてただろうが？　あんな面倒なこと好きでやってると本気で思ったのか？」

「それは――――」

「まぁ、今となっちゃ。どうでもいいけどさ。……と、言うわけで〝謹慎〟か〝停学〟か〝退学〟か。そのどれでも良いけど、そろそろ帰っていいッスか？」

「何を勝手な事を言ってるんだ!?　まだ話は終っていないぞ！」

「いや、終わりだよ」

「っ!?」

秋斗のまるで反省が見えない態度に、学年主任は声を荒げる。

しかし秋斗はそんな学年主任をはじめ、その場に居る教師全員に対して、千冬譲りの鋭い眼光と束に良く似た冷たい色の視線を向けて言った。

「悪いが、俺は例え死んでもこの件で謝罪する気はねェ。そう、あのクソ共の親にも伝えとけ。裁判する気ならそれも上等。こっちも株の貯金を全額吐き出す覚悟で、出るところはしっかり出てやる。意地でも最高裁まで持ちこんでやるから覚悟しとけってな。……まぁその時は芋蔓式に配りまくったディベートの記録がゴロゴロ出てくるだろうけど」

「織斑！」

秋斗は席を立った。

そして静止を呼びかけ引き止める教員達の顎先に、寸止めで拳を打ち込んだ。

教員達の目に明確な怯えが走るのを見て、秋斗はフッと苦笑をもらし、さっさとその場から離脱した。

校内での流血沙汰。

警察を呼ばれる可能性もあったが、秋斗はその可能性を限りなく低いと見積もっていた。

仮に傷害で逮捕される事になっても、秋斗には今年で１４歳と言う年齢がある。

そしてなにより今日（こんにち）の〝織斑〟という名前の価値がソレを防ぐと思っていた。

加えて逮捕されて実刑が付いたとしても、それはそれで秋斗にとっては旨味が有るのだ。

命の危険があるこの直ぐ後の〝第二回モンドグロッソ〟に、秋斗のみが〝同行出来ない〟という正統な理由が出来るのだ。

故に秋斗は、この事件の幕引きに〝拳〟を使って、保身の為に嫌がらせの加害者を利用する事を選んだ。

地元市会議員の素行の悪い子供と、世界的に有名なＩＳ搭乗者の弟にして学年で最優秀の成績保持者。

その間に起こった対立と流血沙汰の原因が『いじめ』にあるなら、世論がどちらに傾くかは問うまでも無い。

それは世の中が例え〝女尊男卑〟にあってもだ。

故に、学校側は間違いなく〝もみ消し〟に動くと秋斗は推測した。

☆

世間に公表するとなると、確実に事件の全貌を明らかにする必要がある。

そうすると学校側の杜撰な対応を含め、全てが明るみになる。

加えて主犯連中の親は地元の市議会議員。故に間違いなく今後のイメージダウンにも繋がる。

そしてこれは秋斗も多少〝悪い〟と反省している事だが、双子の一夏が剣道部のエースで学校期待の星であり、学校としても学校全体の不祥事で中体連の出場自体が危ぶまれるのも避けたい筈――――。

同時に日本が有する最強のＩＳ操縦者――織斑千冬を預かる政府やＩＳ委員会にしても、間違いなく千冬の作った輝かしい英雄像に汚点（秋斗）を付けるのを嫌がる筈――――。

全ては推測に過ぎないが、しかしそれでもこの事件が、『苛めの加害

者家族』、『学校』、『政府』の三方向から、同時にもみ消し工作が入ると秋斗は考えた。

「――――良くて謹慎。悪くて少年院か。退学は義務教育だからあるかは知らんが、にしても……まぁ、〝死ぬ〟よりはマシか」

通いなれた通学路には秋斗以外の学生の姿が無い。

平日の、しかも時刻が１１時を回った頃。

それは例え遅刻者でも、この時間ならサボった方が良いくらいの時間である。

そんな昼前の晴天の下を堂々歩く秋斗であったが、その心はそんな晴天の空とはまるで反対の、陰鬱とした〝曇り〟であった。

――――今年の〝第二回のモンドグロッソ〟で命の危険があると誰に言えるだろうか？

――――そしてソレを避ける意味でも今回の事件を起したと、誰が信じるだろうか？

遅々として心に圧し掛かる未来への不安に、秋斗は大きな溜息を吐く。

第二回〝モンドグロッソ〟の誘拐事件で、一夏の方は原作通りに無傷で助かる可能性がある。

しかし秋斗には、原作には存在しない〝イレギュラー〟という理由によって、その〝保障〟が無い。

そしてなにより、今までと違って件の事件で確実に助かると言える算段が、まるで思いつかなかった。唯一、確実に安全だと思いついたとすれば、それは先の傷害事件でも少し期待した〝刑務所〟に入る事である。

思えばジークンドーを学んだのも、心のどこかにそんな自分の未来に起こる〝最悪〟を避けたかったからだろう。

そんな胸中の不安を誰にも明かさず、誰にも明かせず、秋斗は傍から見れば世間の〝クズ〟と化した。

そんな自分の有り様と現実に、秋斗は世界を呪いたくなった。

「――――死にたくねェな。どうでもいいから、何とかなりやがれよ」

秋斗はもう一度憂鬱な吐息を吐き出した。

家には誰も居ない。
秋斗は真っ直ぐに自室に篭り、制服を脱ぎ捨ててベッドに身を投げた。
心の中をかき乱す不快な感情と誰にも何も話す事の出来ないストレスと、話しても理解されないと判る上で発生する苛立ち。そして己の脆弱さからくる自己嫌悪が合わさり、唐突に強い喪失感と孤独が秋斗を襲った。
不安の中。レトロな音を刻む『懐中時計』を握り締めた秋斗は、そのカチカチとしたリズムを聞いて何もせずに布団に突っ伏した。
２０分ほど経った頃、秋斗のスマホが震えた。相手は一夏だった。
鬱陶しいと感じた秋斗は、そのまま通話を切り、そして部屋に鍵を掛けると同時にスマホの電源を切った。

☆

翌日に保護者として千冬が学校に呼び出された。
秋斗が傷つけた生徒ら親族との、話し合いの席が設けられたのだ。
第二回のモンドグロッソへの出場を控えた千冬にとって、その身内の〝スキャンダル〟と言うのは非常に大きな問題だった。また件の事件が明るみになると、嫌がらせを仕掛けた相手側の親も、自分達の社会的な立場からそれを公にはしたくなかった。
加えて秋斗が傷害を起した原因が、完全に相手側にあるという証言も多くの生徒から上がった為、事件はまさに秋斗が予想した通りに、学校内でもみ消される事になった。
しかしネット上には一部の生徒が上げたツイートや、ブログ『オリムラ日記』への秋斗に対する批判的な書き込みが相次ぎ、事件の事は密かな形で少しずつだが〝織斑秋斗〟の名前と共に世間に浸透していった。
事件から二日。
秋斗と相手側の双方には、それぞれ一ヶ月という長い自宅謹慎の処分が下った。

そんな処分を受けるまでの間。秋斗は殆ど部屋に篭っていた。
「……秋斗、いいか？」
学校に呼び出され、事件に関する雑事の一切を終らせた後、千冬は秋斗の部屋を訪れた。
事件の顛末を知った千冬は、秋斗の起した傷害事件に対して複雑な表情を浮かべていた。
より深く、掘り下げて考えれば、千冬は自分の高まった名声にも原因があると思ってしまったからだ。
秋斗は千冬を部屋に招きいれた。
秋斗はベッドに腰を下し、千冬はＰＣデスクの椅子に座った。
２人が事件後にまともに顔を合わせるのは初めての事である。
故に、両者の間にはしばしの沈黙が続いた――――。
「なぜ、短慮に拳を使った？」
千冬は口を開いた。
「その方が早いだろ？」
秋斗は短く返した。
「……お前なら。お前ならもっと上手い解決法を思いついただろう？違うか？」
「……俺はそこまで天才じゃねェよ。期待しすぎだ。……それと言うの忘れてたけどよ」
「……なんだ？」
「……悪かった」
「……」
千冬はそこで一度眼を閉じた。
秋斗は昔から千冬の理解の外を歩く少年だったが、今日まで決して〝馬鹿ではない〟事を確信していた。
だからこそ千冬は秋斗の言った理由と同じく、拳を固めた。
「――――っ!?」
徐に立ち上がった千冬は、秋斗の頬を一発殴った。
秋斗は壁に背中を打ちつけた。
「お前の場合、長々とした説教よりもこっちの方が効くだろう？　後

で、一夏にも謝っておけ。それと今度のモンドグロッソにお前は来るな。大人しく家で反省しろ」

「……っ、あぁ。そうする」

「……後、いい加減何か食べろ。この所まともに食事してないんだろう？　これ以上世話を焼かすな。愚弟」

「あぁ、了解だ」

「……」

秋斗は頬を擦りながら短く応えた。

千冬はそこで踵を返し、そして秋斗の部屋を出る際にもう一度秋斗の様子を不安そうにチラリと見た。

☆

「――――秋斗」

「よぅ、なんか飯くれ。腹減った」

「あ、あぁ」

千冬が部屋を去って、もう一度仕事に出てからしばらく経った頃。

秋斗は二日ぶりに部屋を出て、一夏の帰宅をリビングで待っていた。

流石に秋斗の事件の影響を受けたのか、ここ数日は何時もに比べると一夏の帰宅は早かった。

一夏は二日ぶりに見た秋斗の頬に痣がある事を見て驚き、動揺を抱いたまま、とりあえず慣れた様子でエプロンを身につけ冷蔵庫を開けた。

「……なぁ、その顔って――――」

「あぁ、姉貴にぶん殴られた。中々、気合が入ったぜ」

「……そっか」

一夏は秋斗の食事を手早く用意した。

残り物の有り合わせで作ったチャーハンである。

一夏は出来上がったチャーハンを、リビングの机の前に座る秋斗に渡した。

「ほら。残りモンだけど」
「ありがと」
秋斗は軽く手を合わせてから食事を開始した。
一夏は手持ち無沙汰にエプロンを外して脇に置き、秋斗の対面に座った。
「……悪かったな。色々騒ぎになってるだろ？」
秋斗はチャーハンを咀嚼しながら言った。
一夏はその言葉に肩を竦めて溜息を返す。
「いいさ、別に。事情は鈴と数馬達から聞いた。お前、苛められてたんだろ？　なんで相談しなかったんだよ？」
「……それについての〝悪い〟だ」
「ったく……」
一夏も千冬と同じで秋斗と何をどう話せばいいのか悩んでいた。
秋斗が傷害事件を起こしたと聞いた時は信じられなかったし、事情を鈴達から聞いた時は、秋斗への苛めの事を一切知らずに居た事を酷く情け無く思った。例え一夏に情報が回るのを周りが阻止していたとしてもだ。
そんな兄として情けない姿で、弟とどう話せばいいのか？
と、一夏はこの二日間自宅に篭った秋斗に対してずっと悩んでいた。
だからこそ、こうして食事の片手間の世間話のように話を切り出してくれた秋斗に、一夏は内心で安堵した。
「千冬姉も心配してたんだぜ？　もちろん俺や鈴達も」
「だからそれについては悪かった。っつってんだろ？　だから世界最強の姉貴の拳に一発殴らせたんだ。これで反省した事じゃだめかね？」
「ダメだな。最低でも鈴と数馬達にもちゃんと謝ってからだ。後、止めようとした森先生とか水原にも。特に鈴と数馬なんか、秋斗が謹慎になって喜んでた連中に、キレて殴りかかりそうになったんだからな？　弾と俺で必死こいて止めたんだぞ？　ホント、勘弁してくれよ……」

「わぉ。そいつは大変だな？」
「他人事みたいに言ってんじゃねーよ」
日常の一幕と同じ、兄弟の軽口が続く。
そんなやり取りもこの二日まるで一切なかったのだ。
たった二日の事だが、一夏にはそれがとても長く失われていた様な気がした。
そしてそれは秋斗も同じである。
会話を楽しむように薄く笑った秋斗は、チャーハンを平らげて言った。
「……ま、謹慎解けたらな」
「一ヶ月だっけか？」
と、チラリとそこで一夏はカレンダーを見た。
今月の最後２５、２６、２７、２８、２９、３０の部分に『ドイツ旅行』という印が打たれていた。
秋斗もそんな一夏の視線に釣られてカレンダーを見た。一夏が何を見ているのか察した秋斗は薄く笑みを浮かべて言った。
「ま、自宅謹慎だからな。御土産よろしく」
「お前な……」
一夏は深々と溜息を吐いた。
第二回のモンドグロッソはドイツで開催される。
前回大会の覇者である千冬の身内は、揃ってファーストクラスでドイツにいける手筈となっていた。
そんな初めての家族旅行――しかも海外旅行を心底楽しみにしていた一夏は、ソレを台無しにしてくれた秋斗に舌打ちした。
「ったく。千冬姉は俺から説得してみるよ。だから精々反省してろ」
「いやいやいや余計な事しなくていいから。一夏と姉貴で楽しんでこい」
「はぁ？　なんだそりゃ？」
折角、自宅謹慎できる状況をあえて台無しにしようとする一夏の家族愛を、秋斗は全力で拒否した。
「いいのかよ、秋斗？　お前、ドイツ行かなくて？　そりゃ謹慎を破る

のはどうかと思うけど、この状況で1人取り残されるなんて――――」
「だから罰として効くんだよ。いいから、放っておけって」
「……秋斗！」
そこで一夏は声を荒げた。
唐突に声を荒げた一夏に、秋斗は思わず眼を丸くした。
「放っておけとかそういう言い方は止めろよ。今回の事件もそうやって黙ってたから、こんな大事になったんだろ！」
「……」
秋斗は思わず押し黙った。それは余りにも的確な言葉だったからだ。
「せめて俺だけでもいいからさ。いい加減、頼る事を覚えろよ」
「……あぁ」
一夏の真っ直ぐな言葉に、秋斗は素直に頷く事しか出来なかった。

☆

秋斗の鋭さと深い隈を携える特徴的な眼には、日に日に光を映さない暗さが宿った。
対照的に一夏の眼は喜色に光る。
――――日は流れ、〝第二回モンドグロッソ〟に世間が湧く。
そして〝織斑家最後の事件〟が幕を開けた。

32　赤か、黒か……

殆ど冷水に近い冷たいシャワーを頭から被る。
秋斗は瞳は開けたまま、ジッと壁の一点を見つめ続けた。
そして徐に、ガンッと額を壁に叩き付けた。
〝原作知識〟。それから来る一種の未来予知に近い感覚は、もはや秋斗に架せられた〝呪い〟でしかなかった。
未来で起こる〝喜劇〟、〝悲劇〟を先んじて想像できるからこそ、〝それ〟が常に頭に張り付いて離れないからだ。
身の危険を感じる〝展開（未来）〟を前にした時は、尚更。
それは唐突にフラッシュバックする不愉快な記憶（イメージ）のように、秋斗の傍に常に纏わりついた。
〝前世の記憶〟と〝原作知識〟に気づいてから10年弱――――。
もはや原作の記憶は擦り切れたボロ布も同然である。
が、しかしそんなボロボロの記憶が秋斗に警鐘を鳴らしている。
「ドイツでの第2回モンドグロッソで、一夏（主人公）がテロリストに誘拐されて、千冬に救出される。か……」
言葉にすると余りに短く、それでいて状況を掘り下げて考えると、これ程〝恐ろしい話〟はそうはないだろう。
なぜなら想像を働かせる余地が、あまりにも〝多すぎる〟からだ。
秋斗は敵が世界大会のまさに当日に前回優勝者親族という警備上最重要に近い原作一夏を、会場の警備や警戒を掻い潜って五体満足に攫ってのける〝手練〟だと考えた。
更に全世界のISという機密を扱う世界大会の会場警備を欺くならば、敵は事前に〝相当入念〟な下準備を進めているとも考えた。
加えて会場警備を正面突破で突き破ったなら、同時にそれ相応の〝戦力〟と〝組織力〟を保持しているとも考えた――――。
簡単に推測するだけでも敵の強大さが手に取るように判る。
だからこそ、秋斗は憂鬱だった。
「……どうする？」
秋斗は独り、呟いた。

楽観視すれば、件の事件は原作一夏がドジを踏んだとも考えられる。そしてドイツの警備が余りにもザル過ぎたとも。

しかし命の危険がある状況でそんな楽観を持ち、座して待てるほど秋斗は悠長ではない。

秋斗は誘拐犯やそのテロ組織の戦力、組織力を、高く見積もり過ぎるくらいで丁度良いとさえ考えている。

だからこそ――――不安と恐怖で吐き気が込み上げる。

「――――っ！」

秋斗は思わずえずいた。

吐き出される胃の内容物はほとんど無く、出てくるのは胃酸ばかりである。

「……〝血〟が混じってやがる」

秋斗は喉が焼けるような感覚に思わず顔をしかめた。

☆

秋斗は風呂から上がると、直ぐに自室に戻った。

階段を登る際に、ふと台所に置かれたカレンダーの日付が目に入った。――――織斑家のドイツ出発まで、残り一週間を切っていた。

謹慎処分中の秋斗は千冬からドイツ旅行への同行を禁止と言い渡されたが、それを一夏が何とか撤回させようと連日のように千冬の説得に動いていた。故に秋斗が、日本に残るか、ドイツに行くかの可能性は、現在のところ5分5分と言った具合。

それが余計に秋斗のストレスを加速させていた。

秋斗は愛飲する缶コーヒーのプルタブを開き、自室のベッドに腰を下した。

考えれば考える程、日本とドイツのどちらが安全かの優劣もつけられない。それは己というイレギュラー要素がどう動けば〝マシ〟になるのかまるで検討もつかないからだ。

そうなってくると、どうしても〝原作〟という一つの基準に思考が傾いていく――――。

原作の姉一人、弟一人の状況で起こった誘拐事件。千冬はその事件でモンドグロッソの連覇を失うが、一夏は五体満足で救出される事になった。その形が〝最善〟で有るのか、一つの〝基準〟で有るのかは不明だが、しかし命の危険を天秤に載せて考えると、限りなく状況を原作に近づけ、賭けに出るのをなるべくなら避けたいと思った。

秋斗は、一夏に最低限でも身の安全保障があった原作の形に、なるべく状況を近づけたいと思った。

少なくともそれで一夏が〝死ぬ事はない〟という風に信じたかった。

――――しかしそうなってくると、今度は秋斗の身の安全が不安になる。

一夏はまだ原作の状況に近づければ最低限の命の保障がある。が、対する秋斗はどうなるか？

単身で日本に残るメリット、デメリット。

家族についてドイツに行くメリット、デメリット。

その2つに、秋斗の思考が揺れていた。

原作とは違い、弟が二人存在する。その片割れが日本に単身で残っているなら、十分秋斗が〝敵〟に狙われる可能性もあった。

しかしドイツに同行して秋斗がもし人質に取られた場合、一夏の性格からして芋蔓式に捕まる可能性もある。

一夏は確実に、身内を見捨てて単身で逃げるような男じゃない。

加えて敵の目的が千冬を引き摺り下ろしたいだけならば、わざわざ2人を同時に攫う必要も無い。

故に最悪、どちらかを〝捕獲〟する為に、片方が見せしめにされる可能性も十分に考えられた。

「……どっちだ」

秋斗は膝の上に肘を立て、両手で組んだ指の上に額を乗せた。

治安の差と土地柄を考えると、島国の日本よりも陸続きのドイツの方が敵の武装や戦力の持ち込みが容易だと思える。

故に日本に居る方が敵は〝動き難い〟。

しかしその代わりにドイツの会場に比べると、遥かに日本の警備状

況は薄いだろう。

〝赤〟か、〝黒〟か。

〝半〟か、〝丁〟か。

死ぬか、生きるか（DEAD OR ALIVE）の2択――。

同行するにせよ、しないにせよ、どちらを選んでも一長一短という賭け。

そして二つに一つを秋斗は確実に選ぶ事を強いられた。

その気分はまさに、命を対価にした〝賭け〟のテーブルに座ると同じ。

降りる事は決して許されない。

生きる為には賭けに勝つしかない。

そんな瀬戸際に秋斗は立っていた。

「……っ」

秋斗は縋るような思いで〝懐中時計〟を握り締めた。

もしもこの状況をひっくり返してのけるワイルドカード（ジョーカー）が存在するならば、それは秋斗が師匠と呼ぶ〝天災〟――篠ノ之束くらいだろう。

しかし縋るような思いでコンタクトを取ろうにも、束は3年ほど前から〝音信不通〟だった。

最後に話したのは第一回目のモンドグロッソの前後。それ以来、秋斗の側から連絡を取ろうにも、束に通じた今までのあらゆる連絡回線は全て、閉じられていた。

なにかを秘匿しているのか、それとも忙しいのかは分からない。

兎も角、現時点で束の助力を得るのは不可能に近かった。

――しかし、秋斗は同時に思った。

それは昔から束と良く話していた秋斗だからこそ、思う事だ。

〝勝手な都合で助けを一方的に求める〟のは束が一番嫌う所。故に、この状況で連絡が通じようが通じまいが、都合よく束が何とかしてくれるのはただの楽観という思考だ。

「……決めるしか、ないか」

色濃く沈着した深い隈に覆われた、正気を限界の所で保っている鋭

い眼を見開き、秋斗はポケットから小銭を取り出した。
実際の賭場の様に賭け終了のベルは鳴らない。
ノるかソるかの二択に、これ以上の思考は不要だと遂に秋斗は腹を決める。
運否天賦――――。
秋斗は左拳に乗せた百円硬貨を親指で弾き、パシリっと、左手の甲に乗せた。
「表なら〝ドイツ〟、裏なら〝日本〟――――」
秋斗は一度眼を閉じ、そしてゆっくりと、手の中のコインの結果を見た。

☆

海を一望できるとあるホテルの一室。
そのテラスで日光浴を楽しむカップルが居た。
「――――で、だ。スコールよぉ。次の仕事は結局どっちなんだよ？　日本？　ドイツ？」
「成田とフランクフルトの両面に配置した部隊の〝報告結果〟を見て、かしらねぇ」
「……かったりぃ仕事だぜまったく」
カップルは何れも女性である。そしてそのどちらもが共通して豊かな肢体を持つ〝美女〟である。
番いの片割れ――スコールと呼ばれたセレブ然とした金髪の美女は、顔につけたレイバンを外して幽雅に微笑む。
「そんなに気に入らないのオータム？　今回の仕事」
「あったりまえだろ。銃1丁持ち込むのも面倒くせぇ日本のガキを攫って来いなんて面倒でアホらしい仕事、誰が好むか！」
「バカンスだと思えばいいじゃない？」
「お断りだね！」
オータムと呼ばれた片割れは、そう柄の悪い口調を慎みもせずに、吐き捨てる様に言った。

そんな恋人の様子にスコールは下唇を少し噛み、そして悪戯を思いついた笑みで囁くように言った。
「それじゃあ、やっぱり別行動の方がいいかしら？　私が日本で、オータムはドイツ――――」
そこまで言うと遮るようにオータムは言った。
「……誰も、仕事しないなんて言ってねぇだろ？」
ふてくされた様な恋人（オータム）の台詞に、スコールは笑みを浮かべた。
「貴方のそういうところ本当に可愛いわ。好きよ。オータム」
「うっせ」
スコールの言葉にオータムは照れくさそうに顔を赤らめる。
そして話題を変える様に尋ねた。
「で、だ。その上の連中が欲しがってる〝織斑秋斗〟ってガキは一体どんな奴なんだ？」
「つい先日、通っていたジュニアハイスクールで傷害事件を起したそうよ。その結果、一ヶ月の自宅謹慎中の少年」
「へぇ、クソ真面目がとりえの御坊ちゃんかと思えば中々。秋（オータム）って名前に付いてるだけあるな？」
「そうね。だけどオータムが気に入るような子かどうかは判らないわよ？　だって彼、模型部に属してるオタクらしいから？」
「模型部？　なんだそりゃ？」
スコールの言葉にオータムは顔をしかめた。
「上の連中（スポンサー）は、一体なんでそんな奴を欲しがる？」
「……プロフェッサー篠ノ之（篠ノ之束）。彼女を辿る、手掛かりとなる可能性があるからよ」
「なに？」
「ＩＳ学園がまだＩＳ研究用のただの人工島だった頃。まだプロフェッサー（篠ノ之束）がそこの研究室に居た際に、幾度が親しげに口にしたある人間が居たのよ。情報によると〝アックン〟という人物」
「アックン？　おい、まさか〝秋斗〟だから〝あっくん〟って言うんじゃねぇだろうな？　なんだそのふざけた連想ゲームは？　馬鹿じゃねエのか上の連中は？」

オータムは思わず吐き捨てた。
そんなオータムにスコールは苦笑を浮かべる。
確かにスコールもこの任務と目的を説明された際に同じ感想を抱いた。
しかし、本題はそこから先にあるのだ。
「まぁ、オータムの言う通り荒唐無稽な話よ。だから上の連中も当初はその〝アッククン〟と〝織斑秋斗〟を結びつけはしなかった。当時の彼はまだ小学生だったしね。それに織斑千冬もまだブリュンヒルデですらなかったし。……だけどコレを見て？」
「ぁん？」
スコールはタブレットを取り出し、一枚の画像をオータムに見せた。
タブレットに写ったのはとある玩具会社が発売したＩＳ〝白騎士〟のガレージキットである。
それはＩＳ模型という分野では〝原点〟と言われる傑作と呼ばれるキットであった。
「この白騎士の人形がどうした？」
「この人形が発売されたのは今から3年くらい前。発売当時は精巧な白騎士の模型として随分と話題になったらしいわ。そしてこの人形なんだけど、実はこれ、とあるアマチュアが動画サイト投稿した作業動画が発端になって販売されたらしいのよ。そして動画の投稿者にしてコレの原型師となった当時のアマチュアの名前が、ＨＮ（ハンドルネーム）〝アーキトクテ〟」
「アーキトクテ？　あーきと……秋斗？」
スコールはクスリと笑う。
「まぁ、ハンドルネームだから〝偶然〟とも考えられるわ。だけどそれから程なくして組織が運営する検索サイトの〝知恵袋〟に面白い投稿があったのよ。コレを見てちょうだい」
「はっ！　なんだこりゃ！」
オータムは投稿記事を読んで思わず笑う。
それは双子の兄が実姉に恋をし、その奇怪さに悩む双子弟によって

書かれた投稿であった。
「コレの記事の投稿者も〝アーキトクテ〟。丁度時期的に織斑千冬とその弟達の年齢と家庭状況にも見事合致する。そしてこの投稿にある〝レオタードスーツの姉〟が、もしも〝織斑千冬のＩＳスーツ姿〟だと思えば、面白いとは思わない？」
「あぁ、面白ぇな。だけどまだ連想ゲームの域は出てねェぜ？　で、次は何を見せてくれるんだ、スコール？」
「ふふ、慌てないの。コレよ」
スコールは最後に一枚の書類の画像データを見せた。
それは一枚の〝契約書〟であった。
日付は４年前。そこは、ある企業の代表者のサインと印。〝織斑秋斗〟と織斑の印。その代理保護者である〝篠ノ之柳韻〟と篠ノ之の印が押されていた。
それは昔、秋斗が白騎士のガレージキットを企業を介して販売する際に作られた〝販売契約書〟であった。
「――――こんなもん、どっから？」
「ＩＳの模型を売ってる玩具会社の内、唯一プロフェッサーの〝監修〟を受けられた企業があったのよ。そこでなにか良い情報でも無いかと忍ばせた諜報員がつい最近見つけてきたのよ」
「……へぇ」
織斑千冬と篠ノ之束の関係。
〝アーキトクテ〟の名から連想される秋斗の名前と、知恵袋に書かれた家族構成。
そしてアマチュアにしては余りに精度が高く作られた〝白騎士〟の模型――――。
今迄は怪しくとも、余りにも〝若輩〟という理由で、秋斗を〝架空に作られたアバター〟だと眉唾に考える意見も多かった。
が、しかし発見された一枚の企業契約書がそれをひっくり返した。
〝天災〟は身内以外を愛称で呼ぶ事はない。
もしも織斑秋斗が懸念した〝荒唐無稽さ〟を体現する存在ならば、〝天災〟が愛称で呼ぶのも頷ける。

嘘か真か……。

それを一度確かめる価値があると、遂に彼女ら――亡国機業は思ったのだ。

33　ファッキン・ジャップ

織斑一夏は初めての海外旅行に興奮の色を隠し切れなかった。
修学旅行での移動は新幹線を使った。なので今回、飛行機に乗るのも初めてだったからだ。
加えて一夏がはじめて乗った飛行機の客席はファーストクラス。
洗練された客室常務員（キャビンアテンダント）の丁重な扱いや、豪華な椅子、そして振る舞われる料理に、一夏は眼を輝かせた。
「すげぇ……」
「一夏、あんまりはしゃぐな。恥ずかしい……」
「いや、だって千冬姉！　映画見れて、音楽聴けて、ゲーム出来て……って痛って!?」
「……落ち着け」
「……はい」
千冬は一夏の興奮した様子に人目を気にしてか、恥ずかしそうにその頭を引っ叩いた。
そんな織斑姉弟の様子に周囲の日本人クルーはクスクスと笑った。
「お気に召していただけたようでなによりです。なんでしたら今度はケーキでもお持ちしましょうか？」
そこへ柔和な笑みを携えた若いキャビンアテンダントが、流暢な日本語で話しかけた。
「え？　ケーキまで出るんっすか？」
「えぇ、もちろんです。こちらのメニューにあるモノは全て、ご利用いただけますわ。織斑千冬様にもワインでもいかが？」
「いや、結構。流石に泥酔状態でドイツに降りては、日本の面汚しと言われてしまうからな」
千冬は片手を軽く振って拒否した。
「さようでございますか？　では、そちらの……弟さんには？」
「飛行機のケーキとか初めてなんで食べてはみたいですけど……本当に無料なんですか？」
「えぇ。ご利用いただけるモノは全て、搭乗料金に含まれております

から」
　貧乏生活が長かった影響か、後で変に金を請求されないかと一夏は密かに不安だった。
　しかしキャビンアテンダントの言葉を聞いて、少し安堵した表情を浮かべる。
　そんな一夏の様子に千冬は苦笑混じりに言った。
「貴重な経験なんだ。好きに頼んでみるといい」
「いいのか、千冬姉？」
「あぁ」
「ん～、なんか秋斗に悪い気がするけど――――」
　一夏は少し悩む。
　と、その瞬間キャビンアテンダントの瞳が、スッと細くなる。
「いかがなされました？」
「いや、ちょっと弟が直前で具合悪くして留守番してるんですよ。ホントなら一緒にドイツ行く予定だったんですけどね。だから、俺ばっかり良い思いするのも悪いなぁって」
　一夏は思わず、日本に独り残った秋斗に対する申し訳なさを口にした。
　千冬を説得してドイツに来る筈が、出発の前日に具合を悪くして結局日本に残る事になったのだ。
「そういうことですか。でしたら帰りの便で搭乗員にお申し付けくださいませ。弟さんの分もお持ち帰りできるよう手配させていただきますわ」
「本当ですか？　ならお願いします」
「かしこまりました」
　一夏は表情を明るくし、ケーキを注文した。
　そんな一夏の様子に千冬もフッと笑みを浮かべる。
　そしてキャビンアテンダントは優雅に一礼して、その場を去った。

☆

ＩＳの活躍の場は〝戦い〟の中にある。
しかしあくまでもそれは競技用――即ち、夢を与える側にある。
本来の〝宇宙開発〟からはその運用は外れているが、現代は秋斗のイメージする原作世界のように過剰にＩＳが持ち上げられて過度な女尊男卑に至り、男から立場の全てを奪う存在ではなかった。
確かに軍にはＩＳの運用を目的にした特殊部隊が存在する。
しかしその規模は中隊よりも小さいのが殆ど。
未だに戦闘機や空母、イージス艦と言った兵器と、ソレを運用する男の職場は根強く存在する。
故に、世間のＩＳに対する印象は男女共に良好だった。
またそうで無ければ各国のピットに男性スタッフの姿はないだろうし、スタジアムの観客も仲良く男女入り混じってはいないだろう。
――そしてそれは社会の裏側に潜む者達も同じである。
ＩＳが登場したからとて、彼ら男の仕事が無くなるわけではなかった。
『モノクローム・アバター』
表向きはある国に本拠地を置くＰＭＣであり、秘密結社〝亡国機業〟の実質的な実働部隊である。
無論、その兵士の多くは男性で構成されている。
唯一、その部隊を率いるリーダーと、側近が女性であるくらいだろう。
その女性リーダー〝スコール・ミューゼル〟は、移動中の車内で状況を確認した。
「――今、情報が入ったわ。どうやら〝アーキトクテ〟は、体調不良で単身寝込んでいるみたい」
「って、事はつまりだ。奴を守ってるのはこの国の腑抜けたポリ公だけってことか？」
「そう言うことね」
「はぁ」
スコールの傍らに座るオータムは、小さく溜息を吐いて肩を竦める。

それは仕事に先立ち、事前にあれこれと準備したのがアホらしいと言う様子だ。

「コレなら準備の方が忙しかったんじゃねェか？」

モンドグロッソ開催期間という事もあり、世界の目はドイツに向かう。

しかし日本という島国はそのパスポートの価値が示すように、数ある先進国の中でも最も後ろ暗い世界の住人が動き辛い土地であった。

特に海外を根城にして〝武装〟の扱いが当たり前と思考する存在には、だ。

そして〝オータム〟もその一人であった。

「……バカンスなら兎も角、仕事に来るには最低の国だぜ」

オータムはスコールに向けて溜息を吐いた。

先行して日本に忍ばせた諜報員と、成田、旅客機内、そしてフランクフルト国際空港に配置した部下の報告から、スコールとオータムは『〝織斑秋斗〟が日本に単身で残っているのが確実』という報告を受けた。

そしてモノクローム・アバターの面々は、それぞれ独自のルートで日本に集結する様に動いた。

部隊は来日直後に、組織の息がかかる日本のとある高層ホテルの一室に作戦本部を置いた。

そして来日から間もなく、織斑家が存在する住宅地周辺と、その付近を巡回する公安の動きの観察に動く。

またスコールとオータムも、現場の下見に動いた。

二人は通りすがりのＯＬや保険勧誘員。または新興宗教関係者を装い、一日掛けて織斑家周辺の地図と特徴を頭に叩き込む。

そんな中で幾度か織斑家を確認した二人は、微かに感じる違和感に首をかしげた。

――――体調不良の子供が独りだと聞いたが、本当に居るのか？

で、ある。

織斑家は雨戸とカーテンが常に閉め切られ、郵便受けには新聞とチラシが受け取られずに溜まっている。

交代で見張りを続けるが、ターゲットの織斑秋斗自身も一切、その家からまるで出る気配がない。

「――――どうするよ？」

「そうねぇ……」

スコールは諜報活動用に準備した車の助手席に座り、少し考え込む。

事前の予定では少なからず、外から家の中の様子が伺えると思っていた。

その上で最低限、ターゲットの顔と所在の有無を確認してから、その確保に乗り出すつもりだった。

が、しかし丸一日の調査を経ても織斑秋斗は一切、その姿を外に見せない。

情報の通り〝謹慎中〟の身の上とはいえ、多少は外の空気を吸いに出るくらいはあるだろう。少なくとも、郵便を受け取るぐらいの事はしていると思っていた。

「外に出た形跡は無い。というのは、確かなのよね？」

「そう聞いてるぜ？　男共が〝無能〟で無けりゃあな。で、どうするよ？　試しにアタック（突撃）しかけてみるかい？」

「そうねぇ……。だけどその前に、一度お願いできる？」

「あいよ」

主語を省いても通じ合う恋人（スコール）の言葉を受けて、オータムは車内のルームミラーを頼りに少し髪型を弄ると、保険販売担当員〝巻紙礼子〟の名札を胸につけて車を降りた。

そして足早に、織斑家の玄関門を潜った。

「っと……」

オータムが玄関の下まで行くとそこでセンサーが働き、織斑家の軒下のライトが点った。

オータムはそのライトの照明時間を計るように呼吸を置いてから、徐に呼び鈴を押した。

そして耳を澄ませた。

呼び鈴の音に微かにだが、何者かが反応するような物音が聞えた。

「――――居留守、ね」
二度ほど呼び鈴を押してもまるで返ってこない反応とその様子に、オータムは踵を返してスコールの待つ車に戻った。
「どうだった？」
「確実に居る。まぁ、勘だけどな。情報通り寝込んでるんだろうぜ？」
「そう。じゃあ今夜、仕掛けましょうか」
タイムリミットはモンドグロッソ終了時まで。
それが過ぎると〝織斑〟周辺の警戒が再び高まってしまう。
手間取った時間を取り戻す為に、遂に亡国機業の実働部隊――モノクローム・アバターによる織斑秋斗捕獲作戦が開始された。

☆

ドイツ――ベルリン・オリンピアシュタディオン。
第２回モンドグロッソの開会式は、そんな歴史と伝統あるスタジアムで開催された。
今大会では第１回大会よりも更に５つの国が参加する。
加えて各国が更なる発展系のＩＳを揃って繰り出すという前情報もあり、その興奮は第１回大会を大きく凌いでいた。
無論。この日の為に日本も〝切り札〟を大会に送り出した。
純国産の新型ＩＳ――第２世代型『打鉄（ウチガネ）』である。
また、今回の大会では『高機動戦闘部門』という新しい出場枠が設定された。
それはアメリカで誕生し、人気を博したＩＳを使った高速レース――『キャノンボールファスト』である。
その部門において、イタリアとフランスがそれぞれ性能を特化させた新型ＩＳを披露した。
第１回モンドグロッソから、各国はそれぞれ独自にＩＳの発展先を見定め、その国独自の特徴とも言える得手不得手を、より強く明確にしていった。
格闘特化、射撃特化、機動特化。

そんな独特なＩＳが数多く誕生した第２世代機。それらが初めて世間にその姿を現した事もあり、大会は第１回目を大きく凌ぐほどの熱狂の渦に包まれた。

そして花形である無差別級――機体制限一切なしの『総合戦闘部門』の選手入場が始まると、その興奮は一気に最高潮と化す。

第１世代型ＩＳ『秋桜―改』。――通称、織斑千冬専用機『暮桜（くれざくら）』。

そんな前大会覇者――織斑千冬の専用機として改良されたＩＳ〝暮桜〟が登場したからだ。

――――そしてそんなモンドグロッソの大会の模様は、時差の影響で日本の夕方６時から中継される。

世間の多くがその中継を見るように、織斑秋斗は独り静かにその大会の模様をタブレットを使って見ていた。

雨戸を閉じ、カーテンを閉め、部屋の明かりの一切を消した薄暗い部屋の中。

そこには、タブレットの明かりと、ノートＰＣ（トチロー１号）の明かりのみが灯る。

そんな暗い家の中に篭る秋斗の眼には、研磨された日本刀のような、精悍な鋭さだけが残っていた。

腹を決めると肝が据わったのか、それとも吹っ切れたのか――――。

血を吐くほどに悩み続けた日々が嘘のような冷静さがそこにはあった。

「……走り出したら、止まるな」

秋斗は自分に言い聞かせるように呟き、深く息を吐く。

そして拳を固く握り締めた。

暗く、静寂に満ちた家の中には、カチカチと一定のリズムを刻むレトロな音が響く。

その中にたった一人。

秋斗は檻の中に閉じ込められた獣のように、ジッと息を殺して時を待っていた。

☆

「――――こちらα（アルファ）。コレより作戦に移る。オーヴァー」
『了解。ココはアメリカとは違うんだから丁重に。ターゲットは大切なゲスト。傷一つ負わせないように、迎えなさい。オーヴァー』
「了解、交信終了。さて――――はじめようか……」
深夜11時。
ホテルで待機中のスコールの号令によって、作戦は開始された。
裏口1、表2、控え1に人員を割き、織斑秋斗の捕獲に乗り出す兵士は4人居た。
そして用意した車は二台。一台はシルビア。もう一台は〝4WD〟である。
スコールの合図に、捕獲に向う〝チームα〟は、装備を確認して目出し帽を被った。
別働隊が織斑家周辺を巡回する公安に対して、浮浪者や酔っ払いを演じて止めている。
準備は万全である。
しかし心ではそうでもなかった。
――――病弱なガキ一人を捕まえるのに、大げさなこった。
と、それが現場に赴いたαチームの偽らざる本音である。
仕事を直ぐに片付けて、上役（スコール）にターゲットを受け渡して、スシでも食いたいと彼らは思っていた。
事前の報告で、織斑家の玄関には赤外線センサーの外灯がある事を知っていたαチームは、落ち着いて玄関の開錠作業を始めた。
道具で手早く錠を開き、そしてゆっくりと扉を押す――――。
しかし扉はビクともせず、動かない事に兵士の一人が思わず首を傾げた。
「おい、ココは日本だ。扉は引くんだよ」
「あ、そうか。ワリィ……」
「しっかりしてくれよ」
相方のドジに呆れた吐息を漏らしながら、もう一人が前に出る。
そして扉を引くと、すんなりと織斑家への入り口は開かれた。

――――ロックチェーンも仕掛けてないのかよ。

錠を開けば、すんなりと抵抗無く開いた扉に、正面入り口班の二人は日本人の防犯意識の低さを嘲笑う。

そして玄関から突入する一人と、待機のもう一人に分かれて、ブリーフィングの通りに行動を開始した。

ペンライトで照らしながら恫喝目的の拳銃を構えつつ、αチームの兵士が単独で足を踏み入れる。

夜という時間帯もあるが織斑家の中には一切の明かりがついていなかった。

それを男は少し不思議に思った。

玄関を潜って直ぐ脇にある階段を見る。

子供部屋というのは大抵が二階にあるという経験から、男は直ぐに階段を登って、折り返す様に二階の廊下に立った。

扉が４つあった。

一先ず、男は身近な扉に手を伸ばした。

――――その瞬間、男の足がワイヤーを引っ掛けた。

「あぐぁ?!」

激痛が足に走った。

男は悲鳴を上げて、派手な音を立てながら廊下にすっ転がった。

その物音と悲鳴に玄関で待機する男の仲間は、『捕獲に手間取っているのだ』と思った。

――――そんな楽観が命運を分けた。

「足が……足が――――」

負傷した男は本気で撃たれたと感じた。

しかしそれはほんの少しだけ違う。

突如男の右足を貫通するように深々と貫いたそれは、ＢＢＱ用の鉄串である。

それはこの家のある住人が、二階廊下に上がって直ぐの足元に仕掛けたワイヤートラップだった。

踏むと起動するように仕掛けられた、自作ボウガンによるモノである。

「……ファッキンジャップ！」

なんてモノを家に仕掛けてやがるんだと、男は痛みに呻きながら思わず口走った。

と、そこに声が掛かった。

「〝ファッキンジャップ〟ぐらい解るよ、バカヤロウ」

「っ!?」

その瞬間、男の顔に黒い布袋が被せられた。

そして同時に電源コードのようなワイヤーで、男は首を締め上げられた。

足の負傷、視界の封鎖、呼吸器への直接攻撃、背後から強襲に耐え切れず、男はそのまま何者かによって、引き摺られるように二階のある部屋に連れ込まれた。

３４　走り出したら、止まるな！　前篇

コイントスで進退を決めたとき、秋斗は〝裏〟を出した。
それは単独で日本に残るという結果である。
秋斗には、それはまるで世界の意思がそうした様に思えた。
〝原作〟という世界の基準を下に考えれば、モンドグロッソに赴くのは千冬と一夏だけなのが正解だからだ。
しかし不思議な事だが、そんな風に考えると不意に〝ある考え〟が秋斗の脳裏に過ぎった。
故に、秋斗は覚悟を決める事が出来た。
「身内以外で俺の部屋に来たのはアンタが初めてだ。歓迎するよ、盛大に」
「――――っ!?」
秋斗は捕獲したテロリストの一人を自室に引きずりこんだ。
容赦の無い攻撃で無力化した秋斗は、捕獲した男に事前に用意した手錠を嵌め、頭に被せた袋で視界と言葉を封じた。
そしてそう言い聞かせた。
秋斗にとって幸運だったのは直接出向いた人数が４人だった事。
そしてたった１人で〝突入〟してくれた事である。
秋斗は最低でも２人以上を同時に相手にする可能性を考えていた。
故に、予想に反して相手が侮ってくれた事に、秋斗は安堵する。
そして気合を入れるように、大きく息を吐いた。
ココから先の、大まかな〝プラン〟は決めている。が、それは殆どアドリブのようなものだ。
故に結果がどうなるかは、秋斗にも分からない。
――――しかし、〝それで良い〟。
未来は分からない方が正しいのだと、秋斗は己に言い聞かせた。
そして〝走り出したら止まるな〟、〝その時はそれで良い〟と、憧れた映画のヒーロー達の様に立ち向かう事を選んだ。
秋斗は覚悟を決めていた。
日本に残ると決めた際に湧き出た考えと、それに殉ずる覚悟を胸

に、秋斗は己が〝最善〟だと思うように行動を開始する。
秋斗は気絶させた男から奪い取った上着、目出し帽、拳銃、パスポート、携帯電話、トランシーバーを身につけた。
そしてノートＰＣ（トチローイチ号）に予め作っておいた〝プログラム〟を起動させると同時に、〝ＷＥＢカメラ〟である動画を撮影する準備を手早く進める。
目出し帽をかぶった秋斗自身と、足から血を流して手錠を嵌められ、頭に布袋を被せられたテロリストが映る様に――。
「さて……イイ声で泣けよ？」
「っ!?　――っ!?」
秋斗は奪った拳銃をチラつかせると同時に、捕獲したテロリストの耳元でリューターの刃（バイト）をギュインと回転させた。
そして徐にカメラに向けて言い放った。
「さて、皆さんこんにちは。我々は亡国機業だ。我々は現在のＩＳ社会と、その先にある歪みについて警鐘を鳴らす者である。モンドグロッソに出場中の全てのＩＳ乗りに告げる。今すぐに大会を中止しろ。で、なければこのように、諸君らの身内の安全は保証出来ない。諸君らの賢明な判断を願う。以上だ」
そこで秋斗はギュインギュインとリューターの切削刃を回転させた。
顔に袋を被せられて捕獲されたテロリストはそのドリルの音に恐怖し、くぐもった声で悲鳴を上げた。
その様子を見て、秋斗は大げさに悪辣な声で笑う。
これで一見すると秋斗がテロリストで、テロリストが秋斗と言う構図になる。
そこで秋斗は動画撮影を終了した。
そしてノートＰＣ（トチローイチ号）の中に出来上がった動画ファイルを、拝借したテロリストの携帯端末から流れるようにセットし、数年前に見つけた〝ある場所〟に向けて送信した。
「……よし。これで嫌でも警戒するだろうよ。後は――」
秋斗が準備を終える頃。

敵から奪った無線に通信が入った。
『おい、まだか？』
痺れを切らした玄関口に待機する男の声だった。
かつて束が〝日本語喋れない奴にＩＳを教える気は無い〟と、無理やり日本語を共通語にしてくれたお陰か、テロリストも日本語で尋ねていた。
故に、秋斗は反射的に応えた。
「うるせぇ。今、終ったところだよ。ガタイが良過ぎて少し梃子摺ったんだ。っつうわけで、ちょっと手を貸してくれ」
『……わかった。なら撤収準備だ。カルロ達は車を回してこい』
『了解』
『あいよ』
秋斗の堂々とした物言いの所為か、テロリストの仲間達は普通にそう返事を返した。
多少の声の違いは無線の影響。そんな風に多少の違和感を誤魔化す理由もあったのだろう。
テロリストたちに気づかれる事無く、秋斗は密かに入れ替わる事が出来た。
早鐘のように打つ心臓の鼓動を抑えるように一度深呼吸してから、秋斗は二階廊下でテロリストの仲間が階段を上がってくるのを待つ。
「――――随分と手間取ったな？」
「あぁ。まったくだ」
階段を上がってくる男に軽く返事を返しつつ、秋斗は男が階段を登りきる直前で、劉老人から習った鋭い足技で、男の顎を蹴り上げた。
織斑家一族特有の長い足が、真っ直ぐに天井に伸びる。
加えてこの日の為にずっと土足で生活していた秋斗の足は、既にブーツに包まれている。
そんな予想外の不意打ちによって、大きくバランスを崩した男は、派手な音を立てて吹き抜けの階段の頂点から一階に落ち、そのまま気絶した。
秋斗は階段を下り、蹴り倒した男を助け起こすようなそぶりを見せ

つつ、その懐にあった武器を回収する。
そして奪った無線で周囲のテロリストに呼びかけた。
「おい、馬鹿がドジ踏んで階段から落ちやがった。誰か近くに居ないか？」
『はぁ？　なにやってんだよ』
無線から呆れた声が漏れた。
「俺に聞くな。文句ならこの馬鹿に言え」
『ったく、ちょっと待ってろ。何にやってんだよお前等。こんな簡単な仕事に手間取ってんじゃねぇよ』
「分かってるさ」
秋斗はそこで無線を切る。
そして奪った目出し帽とテロリストの上着を身につけた出で立ちで、堂々と外に出た。
するとしばらくして玄関の前に二台の乗用車が止まった。
一台はそこそこに大きい４ＷＤ、もう一台は乗用車（シルビア）だ。
応答に応えた方の一人がこちらに歩いてくる姿を見て、秋斗はハンドサインで家の中だという風に指示を出す。
そんな秋斗の指示に男はおもむろに肩をすくめると、小走りで家の中に走っていった。
――すれ違い、見送った後、秋斗はホッとした安堵の吐息を漏らす。
そして家の前に停めた二台の車の内、アイドリング状態にあるシルビアの方に足を進めた。
「おい」
運転席にいた最後の一人を呼び出すように、秋斗はドアガラスをノックした。
「――ぁん？　どうした？」
秋斗が来るように誘うかたちで手を振ると、カルロと呼ばれた最後の一人は車をアイドリングさせたままドアを開いた。
そして身を乗り出した瞬間を見計らい、秋斗はカルロの襟首を強引に引っ張り、足を引っ掛けて地面に引きずり出した。

その瞬間、男の足がクラッチペダルから外れた事で、車がエンストを起こした。
「っ!?　おい、何の冗談だ!?　お前誰だ!?　待て!?」
秋斗は相手の言葉を無視して、車の内装を確認し素早く運転席に乗り込んだ。
この場合はＭＴの方が都合が良いか――――。
と、秋斗は素早く奪ったシルビアのドアを閉めて、再度キーを回した。
そして蹴るように右足でアクセルペダルを踏んでエンジンの回転数を上げると、ギアを一速に入れて、二速、三速と段階的に加速して、一気にその場を離脱した。
逃走の途中で秋斗はスマホで〝１１０〟と操作する。
『どうされました？』
「織斑さんの家に変な集団が押し入って行くのを確認しました。その後変な物音が響いて、中に居た子供が外に逃げるのも見ました。不審者はまだ織斑さんの家に居ると思います。住所は――――」
秋斗は手早く警察に通報した。

☆

程なくして、更識家一家の有するあらゆるパソコンに謎の動画が送りつけられた。
それはオンラインゲーム〝幻想惑星〟をプレイ中の少女――更識簪のパソコンにも届いた。
「……あれ？」
ゲーム画面が突如停止した事に簪は思わず首をかしげる。そして直後にモニターがブラックアウトし、奇妙な映像が強制的に再生された。
映像には薄暗い部屋の中にいる拳銃を持った覆面の男と、黒い布を被せられた男が映っていた。
『さて、皆さんこんにちは。我々は亡国機業だ。我々は現在のＩＳ社

会と、その先にある歪みについて警鐘を鳴らす者である。モンドグロッソに出場中の全てのＩＳ乗りに告げる。今すぐに大会を中止しろ。で、なければこのように、諸君らの身内の安全は保証出来ない。諸君らの賢明な判断を願う。以上だ』

そしてその直後、歯医者で聞く様なけたたましいドリルのようなキュィインという音が響き、布を被せられた男のくぐもった悲鳴と悪辣な笑い声で動画が終了した。

まるでそれは趣味の悪いスプラッタームービーに出てくるような映像だった。

「うわあぁあああ！」

簪は思わず叫び、椅子から転げ落ちた。

その悲鳴を聞いて、ドタドタと部屋の外から足音が響いた。

「簪ちゃん、どうしたの！」

「お、お姉ちゃん！」

「一体どうしたの!?　なにがあったの!?」

簪の悲鳴を聞きつけた更識家の長女――刀奈が、蹴破るような勢いで簪の部屋に突入した。

簪は思わず、現れた姉に抱きついた。

家庭の事情とすれ違いから、姉妹の間にはそれまで、聊か不穏な空気が流れていた。

しかしこの瞬間は簪も刀奈も、そんな些細なわだかまりは捨てていた。

簪は昔のように、思わず姉に抱きついた。そして刀奈はそれを当然のように受け止め、恐怖に震える妹を強く抱きしめた。

「お、お姉ちゃん……」

「大丈夫よ、お姉ちゃんがついてるわ。一体どうしたの？」

「パ、パソコンがいきなり変な風になって、変な映像が――――」

「変な映像？」

簪が悲鳴を上げた件の映像を刀奈も見た。

画面には先程の映像がループしていた。

『さて、皆さんこんにちは。我々は亡国機業だ。我々は現在のＩＳ社

会と、その先にある歪みについて警鐘を鳴らす者である。モンドグロッソに出場中の全てのＩＳ乗りに告げる。今すぐに大会を中止しろ。で、なければこのように、諸君らの身内の安全は保障出来ない。諸君らの賢明な判断を願う。以上だ』

この時、〝亡国機業〟と名乗る者によって作られた悪趣味な犯行声明は、同時に第２回モンドグロッソの開催委員会にも送りつけられていた。

またそれから程なくして織斑千冬の自宅に不審者が侵入したという通報が、警察に届けられた。

☆

「失敗しただと!?」

日本に用意した作戦室で、オータムは余りにもふざけた実行部隊の報告に思わず声を荒げた。

その傍らに立つスコールも普段はその顔にたたえる笑みを一切消していた。

そんな２人の空気に、作戦室につめる後方の部隊員は戦々恐々と震えた。

「んで、もう一回言ってくれ。……ガキはどうなったって?」

聞けば聞くほど、部下達の無能に怒りが込み上げる。

『すいません！　逃走用の車両を奪ってそのまま――逃げられました』

「お前等、ふざけてんのか！　武装して４人がかりだぞ!?　ガキ１人まともに捕まえられねェってのはどういう了見だ！」

『すいません！』

「この落とし前は後できっちりつけてやるから、覚悟しとけよ」

『っ……』

怒気を一切隠そうともせず、オータムは怒りに任せて近くにあったゴミ箱を蹴りつけた。

「……侮りすぎた。という事かしらね。流石、プロフェッサーの認め

た少年と言ったところかしら？」
「おい、どうするんだよ。スコール？」
「まだ、手はあるわ。こちらの用意した車を奪って逃走したという事なら、追跡は出来るわ。直ぐに追って」
スコールの吐息交じりの声に部下は、一斉に秋斗によって奪われた車のナンバーを割り出し、搭載されたＧＰＳ機能を使ってその位置の割り出しを開始した。
「奪ったのはシルビアだったな。ＭＴだろ？　……あのガキ、何処でドラテクなんて覚えやがった？」
「さぁね。でもコレで確実になった。こんな荒唐無稽な少年なら、篠ノ之束が愛称で呼ぶのも頷ける」
「……」
スコールの言葉に、オータムは腕を組んで眉間に皺を寄せた。
「ちょっと、その顔を拝んでみたくなったぜ。アタシが行く。いいだろう？」
「えぇ、お願いするわ」
オータムは踵を打ち鳴らして短くスコールに問う。
スコールも同様に短く返した。
そして付け加える様に言った。
「おいたが過ぎる子みたいだから、多少派手にやってくれても良いわ」
スコールはそう言って、ジェラルミンケースに収めたアサルトライフルをオータムに投げ渡した。
一見冷静さを保っていたスコールだったが、実は静かに怒りを感じていたのだ。
この時ほど、この作戦にＩＳを持ち込んでおけばと後悔した事はない。
あれば、それさえも使ってのけただろう。
「……ＯＫ」
オータムはニヤリと悪辣な笑みを浮かべる。
作戦が隠密だったために、日本に来て大っぴらに銃を撃つ機会など無いと思っていた。故に、そんな笑みが込み上げるオータム。

そしてオータムは数人の兵士を引き連れ、作戦室を後にした。
――――それから程なくしてだ。
「リーダー大変です！」
「今度は、どうしたの？」
「警察が織斑家周辺に集結中！　それと、コレを見てください！」
コンソールについていた電子工作班の一人が悲鳴に近い声を上げた。
そして映し出された映像を見て、流石のスコールも今度はその顔面を蒼白に変えた。
『さて、皆さんこんにちは。我々は亡国機業だ。我々は現在のＩＳ社会と、その先にある歪みについて警鐘を鳴らす者である。モンドグロッソに出場中の全てのＩＳ乗りに告げる。今すぐに大会を中止しろ。で、なければこのように、諸君らの身内の安全は保証出来ない。諸君らの賢明な判断を願う。以上だ』
映像の中で拳銃をチラつかせ、拷問を匂わせる覆面の装備は、モノクローム・アバターが用意した物である。
そして直ぐにそれをやってのけた犯人が、スコールには想像できた。
「……やってくれたわね。織斑秋斗！」
初めから襲撃を見越されていた。亡国機業の名前も知られていた。
そして何よりこの作戦を成功させる以外に、スコール達が組織の中で生き残る道を断たれたのだ。
〝天災〟
そんな単語がスコールの脳裏を過ぎった。

35　走り出したら、止まるな！　後編

秋斗は目出し帽を脱ぎ捨て、強奪したシルビアを路肩に停めて大きく息をついた。

綱渡りのような賭けだったが、上手く成功した。

ネット上にモンドグロッソの中止を促す脅迫文は、捕獲できた一人によって上手い具合に信憑性が出たはず。

これで少なくとも、ドイツのモンドグロッソ会場の警備は、更に厳重になるはずだ。

しかしそれでも一夏が拉致されるのならば、もはやこの世界の〝運命〟としか言い様が無い。

家に放置したままのテロリストについては一応、警察を呼んだので彼らが片付けてくれるだろう。

もっとも、家の中を調べても何が起こったのか、まるで判らないとは思う。

見つかるのはなぜか縛られた外国人犯罪者なのだ。

そして状況を知る家に唯一残った留守番少年（織斑秋斗）はどこぞに逃げている。――――テロリストから強奪した車で。

「……この後は、どうするか」

こんな荒唐無稽な話の結末がどうなるかは、もはや秋斗にも判らない。

しかしそれで良いと、息を吐く。

血を吐きながらも考えた末に、秋斗は己というイレギュラーが存続できるよう、本来の原作（未来）の形を少しでも別の形に歪めたかったからだ。

純粋に己の為に未来を変えようと思ったのはコレがはじめてである。

この先に待つのが罪をとわれる犯罪者か、それとも別の何か――――。

「ん？」

と、その視線を上げた瞬間、運転席のバイザーにタバコが挟まって

いるのを発見した。
秋斗はそれを徐に取り、躊躇うこと無く一本取り出して、車内のシガーライターで火をつけた。
吸い込むタバコの煙によって、久しぶりの脳がクラッとする感覚に浸る。久しぶりの、酷く懐かしいと思う感覚だった。
思えば、これ程の安堵に包まれるのも久しぶりである。
秋斗はそこで車を降りて、くわえタバコのまま最寄りのコンビニでプリペイドカードを買い、その近くの公衆電話に向った。
そして日に焼けた電話帳の手元の手引きを見ながら、ドイツにいる千冬と一夏に、無事と警告を伝える為に国際電話を掛けた。

☆

その頃、ドイツではモンドグロッソ開催委員会に送られた脅迫文によって騒然となっていた。
直ぐにドイツ政府と公安、軍は会場全域に警戒網を敷く。
また出場者の親族が宿泊するホテルの警備も厳重な物となった。
出場者親族の観光目的での外出。そして宿泊予定者以外のホテルへの入場も厳禁となった。
織斑一夏もその内の一人であった。
日本に残した秋斗への土産を買うために他の出場者親族と一緒に街を散策していた所を、慌てた様子の日本ＩＳ委員会のスタッフに呼び止められ、そのままホテルに連れ戻されたのだ。
それはドイツに応援に来た他の邦人も同じだった。
事情を聞いてもスタッフ達は言葉を濁すのみで、頑なにホテルから出るなと言い張る。
そんな風に対応された一夏も仕方なく用意されたホテルの部屋に缶詰状態のまま、部屋に備え付けられたテレビを見て時間を潰していた。
――――まさにその時、電話が鳴った。
見知らぬ番号に思わず首をかしげた一夏だったが、一応電話に出

た。
「はい、もしもし？」
『一夏か？　俺だ、秋斗だ』
「おぉ、秋斗か！　熱は下がったのか？」
　一夏は日本に残してきた秋斗からの電話に思わず喜色の声を上げた。
「いやぁ、ファーストクラスの飛行機マジで凄かったんだぜ？　それにドイツの料理も中々独特で旨いのも多くてさ――――」
『あぁ、旅行の感想については帰ってから聞くからよ。その前にお前に一つマジで言っておきたいことがあるんだ』
「なんだよ？」
『時間が無いから手短に言うぞ？　家に〝テロリスト〟が侵入した。んで、何とか脱出してよ、今コンビニの公衆電話から掛けてる』
「……はぁ？」
　一夏は秋斗の言葉に思わず間の抜けた声を出した。
「それなにかの冗談か？　またなんかの映画みたいな――――」
『ところがどっこい、そういう冗談を言ってる場合じゃねぇんだ。マジなんだよ。そっちで警備が物々しくなったとか、あるだろう？』
「え……」
　一夏はそこで先程の日本人スタッフの事を思い出した。
「あぁ。突然ホテルから出るなって、他の応戦しに来た人達と一緒に缶詰状態にされたけど――――」
『まぁ、当然だろうな。ネットで話題になってると思うけど、亡国機業って言うテロリストがモンドグロッソを中止しろっていう犯行予告を出したんだよ。そうしなきゃ、出場者の親族を殺すってな。で、まさに俺がそんな状況だ』
　秋斗は電話の奥で苦笑を漏らすような声で言った。
「――――おいおい、落ち着けよ。テロリストって、んな冗談だろ？」
　悪戯にしては度が過ぎる。そして秋斗はこんな下らない悪戯をやるような性格では無い。と、一夏は幼少期からともに生活した経験で知っていた。

故に、段々とその言葉を真実のように感じ始めた。
そこで一度溜息を吐き、秋斗は言った。
『悪いんだけど、真実だ。今、正にそいつらから逃げてる途中なんだよ。いいか、よく聞けよ一夏。奴らの目的は姉貴を決勝大会から引き摺り下ろす事だ。だからお前もたぶん、そっちで狙われる。だから絶対にその場から動くなよ?』
「秋斗?　秋斗、冗談だろ!　お前大丈夫なのか!?　おい――」
一夏は思わず声を荒げた。
『俺は大丈夫だ。兎に角、今はお前の方が危険だ。一夏、良いか?　ホテルから出られない状況なら好都合だ。今すぐ携帯で姉貴に電話して俺の状況を話せ。オレ達の家にテロリストが侵入した。間違いなく海外のプロだ。銃で武装してやがったからな』
「銃で武装って……お前本当に――――」
その時、電話の奥で銃声のような破裂音が響いた。
その音に一夏は思わず受話器から耳を離す。
『一夏!　悪いが後で、かけなおす!　直ぐ姉貴に連絡してそこに居ろよ!　頼むぞ、一夏!』
「おい!　秋斗!」
秋斗は電話を切った。
一夏は切られた電話を握り締めた。そして鳴り止まぬ心臓の鼓動を抑えようと必死だった。
電話の最後。長い間一緒に過ごした秋斗が、あんなに焦った様を見せた事など、一度もなかったからだ。
映画で聞く様な銃声が電話越しに響いた。
そしてホテルの警備の状況。
秋斗の言葉をタチの悪い冗談だと思えず、一夏は慌てて千冬の携帯に電話を掛けた。

☆

モンドグロッソに出場する選手一同は、選手村として用意された応

援親族とは別のホテルに揃っていた。
明日の試合の最終調整のため、自主鍛錬を終えた千冬はシャワーを浴びたところだった。
ふと携帯に眼を向けると、見知らぬ電話番号からの不在着信が一件、入っていた。
ソレを見て千冬は思わず首を傾げる。
と、その時一夏からの電話があった。
「ん？　どうした――――」
『大変なんだ、千冬姉！　秋斗がテロリストに襲われてる！』
「……なに？」
千冬は耳に飛び込んできた一夏の叫ぶような声に思わず眉を顰めた。
その調子は必死に何かを訴える様子で、馬鹿馬鹿しい話だと切り捨てるには余りにも深刻に聞えた。
「落ち着け、一夏。一体、何の話だ？　どういう事だか説明しろ」
『さっき秋斗から電話があったんだ。家にテロリストが来て、それで逃げてるって！　公衆電話から電話してきたんだよ！　銃声も聞こえた』
「なんだと？」
千冬はそこで先程携帯に映っていた番号を思い出す。
一夏の言う話が本当なら、秋斗は千冬にも電話を掛けたのだ。
「秋斗から、他になにか聞いていないか？」
『えっと、ネット上でモンドグロッソを中止するように亡国なんとかって言うテロリストが予告したって言ってた。中止しないと出場者の家族を殺すって！　あと、敵の目的が千冬姉を引き摺り下ろす事って言ってた！』
「っ!?」
千冬はそこまで聞いて、慌てて状況を確かめる為に、運営本部に走る。
『あと、俺も狙われるからホテルから出るなって――――』
「わかった！　これから直ぐに確認する。秋斗の言う通り、話が本当

ならお前も危険だ！　絶対にそこから動くな！」
『だけど――――』
「お前が動いたところで何も変わらん！　いいか、後で連絡するから迎えに行くまで鍵をかけてそこで待て！　いいな！」
『っ!?　判った……。頼む、千冬姉！』
「あぁ！」
と、千冬が電話を切った瞬間、フロアの階段を下りて曲がった通路で、ある人物とぶつかった。
「っ!?」
「痛っ、ちょっと何なのサ。いきなり――――」
「すまない！　って、〝ジョセスターフ〟か……」
御互いに尻餅をつき、千冬はぶつかった相手に反射的に謝った。
すると覚えのある声が返ってきた、イタリアの国旗をつけたジャージを全体的に着崩している赤毛の女性――イタリアの国家代表〝アリーシャ・ジョセスターフ〟だった。
第一回大会で凌ぎを削りあった選手である為、千冬は良く覚えていた。
「織斑千冬か。ったく、本当に突撃するのが好きな女だネ」
「すまん」
アリーシャは打ち付けた尻を撫でながら、皮肉る様に言った。
その言葉を千冬は聞き流して、再度走ろうとする。
が、それをアリーシャは呼び止めた。
「ストップ。一体、何をそんなに慌ててるんだ？　せめて、ぶつかった理由ぐらい話してヨ？」
「悪いが、悠長に話してる時間は無い。日本に残した弟がテロリストに狙われてるんだ！」
「テロリスト？」
「あぁ。大会を中止するような犯行声明がネットに流れているらしい。出場者の家族を狙うと。お前の方でも確かめてみろ」
「おい！」
アリーシャの呼び止める声を無視して、千冬は走った。

その後ろ姿をアリーシャは見届けるが、直ぐにその後を追って走った。

二人が大会運営本部に着くと、そこは物々しい雰囲気に包まれていた。

そして千冬やアリーシャと同様に、今この瞬間に詰め掛けたような各国の代表選手が溢れていた。

千冬がけたたましく扉を開いて登場した事で、一同の目が千冬に向いた。

「織斑――――」

千冬は全員の視線を集めながら、ツカツカと無言で運営スタッフに詰め寄る。

その後ろをアリーシャが続いた。

「織斑さん!?　あの――――」

「聞きたい事がある。大会を中止するような犯行声明が流れたというのは本当か?」

まさに今、それを伝えるべきかどうかで運営スタッフは騒ぎを止めようとしていた。

頷く仕草に、千冬は背筋が凍る思いがした。

「織斑千冬。もしさっきのテロリストの話が本当なら、呆けてる場合じゃないヨ?」

「っ!?」

凍りつく千冬の脇で、アリーシャが言葉を放った。

その言葉に大会運営に参加するスタッフは、まさかという顔をする。

千冬は、先程一夏が秋斗から受け取ったという電話の内容を口にした。

☆

――――ズダン!　ズダダダダン!

セミオートでの1発を起点に、直後にフルオートで弾丸が飛ぶ。

その特徴的な発砲音を響かせるアサルトライフル（ステアーＡＵＧ）を構えたオータムは、運転席の部下に怒鳴った。
「へたくそ！　もっと速度出せ！　奴の脇に出ろ！」
「了解！」
ＧＰＳの反応を追って秋斗の乗ったシルビアを追撃するオータムの乗った四輪駆動車。更にその後ろから同様の車種の４ＷＤが二台、秋斗を追撃する。
助手席でマガジンを再装填したオータムは、再びライフルスコープを覗きながら思わず歯噛みする。
「クソガキが！」
前を走るシルビアは巧みなハンドル捌きで、オータムの追撃を振り切ろうと動いていた。
その車に乗る少年を捕まえるだけだった今回の任務は、それ程大したものではないと当初は高をくくっていた。
――――しかし蓋を開けてみれば、相手はとてもまともな中学生ではない。
それは世界中の同年の不良やチンピラ等、比べ物にならないワルガキ。しかもテロリストから車両を強奪し、更にカーチェイスを容易にこなして、プロを単身で翻弄してのける極上の悪ガキ。
正に〝天災〟の後継者というに相応しい荒唐無稽な存在である。
「ちぃっ！」
オータムが引き金を引こうとした瞬間。前を走るシルビアは、テールを振って闇夜に赤い残光を残しながら、脇道に入り込む。
それは間違いなくＭＴ操作を使いこなしている動きだった。
それ見たオータムは苛立つと同時に、不思議と笑みを浮かべていた。
「いいぜ、お前……それでこそオータム（秋斗）だ！」
生かして捕らえろというスコールの指示には、いつもなら不満の一つもこぼれるところだ。
しかし今回に関しては、スコール直々に灸を据えてやれという命令がある。

同時に、これほど面白いカーチェイスがまさか日本で出来る興奮に、オータムの唇は思わずめくれ上がる。
深夜の車道を疾走する4台の車のスピードメーターが表示する速度は、既に90キロを超えていた。
「オラオラァ！」
オータムは助手席から半ば半身を乗り出す様に引き金を引いた。
ルームミラーに映る、箱乗り状態でステアーを構える敵を見て、秋斗は思わず歯噛みした。
原作知識から直感的に判った。
〝オータム〟という原作の敵キャラだ。
「――――クソババァが！　はしゃぎやがって……！」
後方からの激しい銃撃によって、リアガラスが弾け飛ぶ。
身につけた〝懐中時計〟の力が秋斗の身体を穿つ弾丸を防いでいる為に致命傷は無いものの、このままではジリ貧である。
「〝オータム〟は2人もいらねぇんだよ！」
秋斗は奪取した自宅に侵入したテロリストから奪った拳銃M9A1を左手に構えて引き金を引いた。

36 『原作』にたどり着け！

激走する4台の後方から、パトカーのサイレンが響く――――

『――――そこのシルビアと4WD！　止まりなさい！』

「ちっ、ようやくお出ましか。邪魔するんじゃねぇよ！　おい！」

オータムは追走する部下の操る2台に向けて片手でハンドサインを送る。すると2台は速度を落としてパトカーと併走する様な動きを見せた。

そして同じ頃。

秋斗もオータムと同じく警察の登場に思わず毒づいていた。

「こういう時だけ真面目に仕事してんじゃねェよ、クソ公務員が！　追いかけるのは〝後ろの連中〟だけでいいんだよ！」

バックミラーに映る警察車両の赤いパトランプ。

それに舌打ちしながら、秋斗はクラッチを叩く様に踏んで一気に4速から2速にギアを変速。同時にサイドブレーキを駆使して、強引なハンドル操作で、車体を無理やり捻じ曲げるように進路を変えた。

直後にアクセルを踏み込みエンジンの回転数を上げると同時にギアを4速まで一気に跳ね上げる。

傷害、強盗、器物破損、サイバーテロ、車体窃盗、無免許違反、速度違反、危険運転、銃の不法所持、発砲、モンドグロッソに対する犯行予告――――。

この時点で秋斗の積み上げた罪はそれ程になる。

まともに罪を問われると、もはや終身刑でも文句は言えないレベルである。

が、しかしそれは罪を公に晒して問うことが出来ればの話だ。

秋斗の外見の14歳という年齢と、事件に関係する組織の規模。

それを考えれば、もはやこの時点で一国の警察組織が対応できるような規模の事件ではない。

それほどに荒唐無稽な事件なのだ。

ある意味で、それはかつての〝白騎士事件〟にも等しいだろう。

そしてそれが判っているからこそ、秋斗は既に開き直っていた。

「捕まってたまるかよ……！」

ポツリと零したその台詞は、テロリストに対してか、警察に対してか――。

余りにも現実離れた様々な出来事の末に、秋斗の脳みそからは大量のアドレナリンが分泌されていた。

秋斗は半ばその感覚に酔っている様な気分である。

――直後、銃声が響いた。

秋斗の背後を追走する3台の4WDの内の2台が、警察を牽制するように減速。そしてその車体の窓から銃身を出していた。

――ズダン！　スダダダダ！

特徴的な発砲音が響き、併走した2台から突如一斉に銃撃を受けたパトカーは大きく減速した。そしてハンドル操作を誤ったのか、そのままパトカーはガードレールに鼻先をぶつけるようにクラッシュした。

「滅茶苦茶やりやがる！」

警察車両を無力化した事に気をよくしたのか、虎視眈々と蛇のように秋斗の後ろから追い詰めるオータムは、その笑みを深めていた。

――続きといこうぜ？

秋斗はそんな風なオータムの笑みを、バックミラー越しに見た。

――そして直後。上空からけたたましい〝ローター音〟を響かせて飛来する黒く塗装した一機の武装したヘリが、秋斗とオータムの戦いに乱入するように参加した。

「なんだ？」

「スコールか!?　なんで――」

秋斗とオータムは突然のヘリの登場に驚きを隠せなかった。

『過激な男は嫌いじゃないけど、少しオイタが過ぎたわね。リトルマクレーン！　それと、オータム。状況が変わったのよ！』

ヘリに搭乗する妖艶なる金髪の美女――スコールは、その冷酷な視線で秋斗と秋斗の乗ったシルビアを見据えた。そしてヘリの後部座席に固定された〝機関銃〟を構えた。

☆

「どういうつもりだ、スコール！　アレはアタシの獲物だぞ！」

ヘリに搭乗するスコールに向けてオータムは無線で怒鳴った。

そもそもヘリは『織斑秋斗』を捕獲後に日本から逃走する為の足なのだ。それを持ち出したスコールの意図が判らず、オータムは吼えた。

すると無線からスコールの声が響いた。

その声はオータムの車両と同時に、強奪した無線を乗せた秋斗の駆るシルビアの車内にも響いた。

『だから状況が変わったのよ、オータム。織斑秋斗をなんとしてでも確保して頂戴！』

「そりゃ判ってるが、一体どうした!?　そんなモン（ヘリ）まで持ち出して正気か？」

スコールのいつになく切羽詰った物言いに、オータムは思わず眉を顰める。

するとヘリの助手席に座るスコールは、短く状況を伝えた。

『あの子、ネット上に〝亡国機業〟の名前を使った犯行声明をモンドグロッソ委員会と更識に出したのよ。ご丁寧にこちらの送り込んだ兵士を〝自分〟に見立ててね！　モンドグロッソの参加者の親族を殺すっていう風によ。だからおかげでドイツ側の警備規模も跳ね上がって、予備の〝織斑一夏〟の捕獲プランも完全に潰されたわ！』

「なんだと？」

スコールの言葉にオータムは絶句する。

更にスコールは苛立ちをはき捨てる様に続けた。

『ついでに〝亡国機業〟の名前も世界中に拡散した。ココで確実に捕らえて点数を稼ぐか、確実に仕留めるかしないと、この失態で私達の首も飛ぶわよ！　だから遊びは終わり。手足の1、2本捥げようが、確実に連れ帰る！　良いわね！』

「っ!?　了解！」

オータムは鋭い形相で、前方のシルビアを睨みつける。

そんなオータムとスコールのやり取りを無線で聞いた秋斗も、思わず運転席で表情をしかめる。

「ココまで来て、手足の一本だろうとくれてやるかよ！　ココからどうする？　――何処に行く!?」

秋斗は後方からの銃撃を避けるように全力で車を走らせながら、必死に逃走先を考える。

このままガソリンが切れるまで走り続けるのも無理。

故に、どこかで追跡を振り切るしかない。

その瞬間、車内に飛び散った銃弾が秋斗の肩を掠めた。

「っ!?」

ＩＳコアソケットの〝懐中時計〟が張るシールド防御機能が致命傷を防いだ。

「……コイツもいつまで護ってくれるのかわからねぇ」

ＩＳコアを搭載しているとは言っても、決してＩＳではない。

そしてシールドエネルギーにしても、無尽蔵に有るわけでも無い。

つまりいつかは無くなる可能性がある。

「っ……そうだ！」

――そこまで考えた時、秋斗の脳裏にふと閃きが過ぎる。

『ＩＳ学園』

その場所の事を秋斗は思い出した。

そこはかつて束と後進のＩＳ研究者の育成と研究の為に作られた人工島で、現在は高等学校教育期間として、日本国内にありながらも唯一の治外法権の場所だった。

そこにはおよそ３０機に近いＩＳが常に待機状態で鎮座している。

そして学園の警備職員や教師もＩＳに搭乗できる〝資格者〟。

この状況でこの状況をひっくり返すとなると、もはや『原作（ＩＳ学園）』にたどり着くしかない！』と、秋斗は思った。

故に、秋斗は〝原作の始まる彼の地〟へ向かう為に、クラッチ操作とハンドル、サイドブレーキを駆使して、唐突にカーブを切った。

☆

その頃、千冬は運営委員会から、第2回モンドグロッソに送られた犯行声明が事実だと知った。

そして同時に、日本政府から〝織斑家に何者かが侵入した痕跡がある〟という報告を受けた。

前回優勝者（ブリュンヒルデ）の家族を狙った犯行。

その情報は直ぐに選手間に広まり、モンドグロッソは各国の大会参加者親族の安全確認の為、一時中止となった。

千冬は何とか日本政府の伝を辿って、秋斗の無事とその所在を確かめようとした。

その結果情報として手に入ったのは、一夏の受けた言葉を証明する『秋斗が逃走した』という報告のみ。

つまり襲撃を察知した秋斗が、テロリストに捕まる前に逃亡したという情報だけであった。

秋斗の所在はいまだ判らず、日本政府も公安を通じて全力でその所在を追っている。

が、しかし未だにその安否は不明――――。

千冬は憔悴しきった顔で、一夏の滞在するホテルに向った。

「秋斗なら大丈夫だよ、千冬姉。だってアイツ、いつだって大変な状況をとんでもない方法でひっくり返してきたじゃないか！　だから大丈夫だって！」

「……一夏」

「だからは大丈夫だ。俺達の弟がそう簡単にくたばるわけないだろ！　絶対に――――」

ベッドに腰を下してうなだれる千冬に、一夏は拳を握り込みながら強い口調で言った。

一夏にしても、これ程に憔悴しきった千冬の姿を見るのは初めてだった。

故に、自身の秋斗の安否を不安に思う気持ちを無理やり押し殺して、何とか目の前の千冬を励まそうと、一夏は言葉を紡ぎだす。

「……電話の時の秋斗はさ、なんていうか……いつもの真面目か本気

か良く判らない〝あの〟調子だったんだよ。だからきっとあいつは何とかするよ。絶対に……」

「……そうだな。あぁ、そうだとも」

励まそうとする一夏の言葉に、千冬は顔を上げる。

そして不安を吐き出すように大きく息を吐く。

「〝成るな〟と言っておいて、結局、束みたいに成長してくれた愚弟なんだ。早々、簡単に――――」

「っ!?」

と、そこまで言った時である。

千冬と一夏は同時に気づいた。

あの『天災』ならば、もしかしたら、と――――。

☆

水きり遊びのように連続でアスファルトが破裂する。

そんな強烈な銃撃が、スコールの搭乗するヘリから次々と放たれた。

秋斗は銃撃を避けるように、紙一重な動きで左右にハンドルを切る。

また警戒するのはヘリからの銃撃だけでは無い。後方からはオータムの乗った４ＷＤが迫っている。

スコールとオータム。そんな〝モノクローム・アバター〟の首領と側近が繰り出す攻勢の模様は、まるで羊を追う猟犬の様であった。

「あと少し！」

秋斗は上空からの追撃を避ける為にルートを選ばされつつあるが、同時にこの状況をひっくり返してのける唯一の場所――〝ＩＳ学園〟に向けて懸命に車を走らせる。

そして時々、牽制するように強奪した拳銃（M9A1）を撃つ。

だがそんな射撃がまともに当たるはずも無く、包囲網は徐々に迫っていた。

『この先に工事中のトンネルがあるわ！　その先で追い詰めて！』

『了解！』

強奪した無線からスコールとオータムのそんなやり取りが響いた。

それが秋斗の心を更に焦らせる。

視界の先には工事中の柵が立てられた海底トンネルがあった。

秋斗は進路をどうにか東にずらそうとするが、それを見越して上空からの銃撃が飛んでくる。

「くっそ！」

秋斗はやむなく、視界の先に湾岸沿いにあった工事中札のついた海底トンネルへと潜った。

それを確認したオータムは、後方で笑みを深める。

『――――チェックメイトだ！　織斑秋斗！』

４ＷＤが更に速度を上げる。

秋斗の選んだルートは、選ばされた出口無き終焉への袋小路。

徐々に壁が迫る中、秋斗は奥歯を噛み締める。

――――しかし追い詰められている事を察しても、それでも決して諦めなかった。

「頼む！」

秋斗は神に祈るような気持ちで、壁に向って４速から５速にギアを上げて一気に加速した。

そして壁の直前で急ブレーキを踏み、直後にハンドルを切ると同時にクラッチを外して、サイドブレーキを引き、無理やり車体を旋回させた。

『――――なに!?』

驚愕するオータムの前で、シルビアのブレーキランプが闇を切り裂くように一閃する。

それはサーキットで〝サイドターン〟と呼ばれる技であった。

秋斗は押し戻ろうとする車体の力に逆らわず、リアタイヤが滑るように１８０度の半円を描いたところで、クラッチを再び繋いだ。

――――そして秋斗の駆るシルビアと、オータムの乗った４ＷＤが〝正面〟から向い合う。

「――――クソガキ!?」

「――――くたばれ！」
秋斗とオータムの視線が交錯する。秋斗は運転席から、ハンドルの上で腕をクロスさせるように、左手で発砲した。
直後、秋斗の放った三発の銃弾が、４ＷＤのフロントガラスに蜘蛛の巣の様な皹を作った。
運転手はその影響を受けてハンドル操作を誤り、トンネルの終点にある壁面へと叩きつけられた。
そしてオータム諸共、４ＷＤは爆散した。
「っしゃあ！　オラァ！」
秋斗は思わず叫んだ。
かつて地元近くの埠頭でＭＴを転がして遊んだ経験が生きたからだ。
秋斗はトンネルの出口へとシルビアを加速させる。
そこには進路を塞ぐようにして、機関銃を構えるスコールの駆るヘリが漂っていた。
「警察車両を牽制中のＢ班、Ｃ班は離脱して！　オータム達の回収を最優先！」
「いいんですか!?」
「うるさい！」
怒鳴るように部下に指示を出したスコールは、ヘリから殆ど半身を乗り出したまま片腕で機関銃を構えた。
弾蔵ＢＯＸから伸びる弾帯がジャラリと音を立てる。
スコールの金糸の様な髪が夜空を舞った。
その様は一つの完成された絵の様に成るが、しかしその形相には憤怒の色しかない。
「届けぇ！」
秋斗はハンドルを左右に切りながら、ハンドガンに残った弾をありったけ放つ。
スコールは秋斗の銃撃に晒されながらも、憤怒の形相で片腕で構える機関銃を撃ちまくる。
秋斗の撃った銃弾がスコールの右頬を掠めると同時、シルビアの左

前輪、そしてボンネットとフロントガラスが撃ちぬかれた。
「っ!?」
秋斗はハンドルを大きく左に取られた。
右腕で一本で何とか体勢を立て直そうとするも遂には至らず、そのまま秋斗の乗ったシルビアはトンネルの壁面に叩きつけられた。

３７　その時は、それで良いと思った。

トンネルの壁面に叩きつけられた車の車内に、もうもうと白煙が満ちた。
運転席に座った秋斗はクラッシュの衝撃で、意識を失った。
――――そんな秋斗が夢の狭間で見た〝光景〟は、酷く懐かしいものであった。

☆

「――――ここは？」
エアーズロック。
夕日が浮かぶオーストラリアの荒野に秋斗は立っていた。
その光景を前にして秋斗が思ったのは、前世でこんな風景を見たという懐かしい感想だった。
『――ココは貴方（秋斗）の心象風景』
「ぁん？」
唐突な声に、秋斗は振り返る。
そこには、薄ぼんやりと輝く〝謎の光の塊〟が漂っていた。
光の塊は秋斗の対面に浮かび、そして子供のような――少女のような声で秋斗に語りかける。
秋斗はそれが不思議と何であるかを理解出来た。
それは普段、首から提げる懐中時計――ＩＳコア５０１の持つ〝意識〟であった。
「お前は、アレか？　懐中時計のＩＳコアか？」
『そう。貴方を観測するために生まれたＩＳコア。ナンバー５０１』
「そうか。そいつは……なんって言うか、はじめまして？」
『はじめまして』
秋斗の挨拶に５０１は同じ様に返す。
その言葉と共に明滅する５０１の輝きが、不思議と言葉に〝感情〟を込めている様子に思えた。

秋斗はそこでふと、なぜ５０１と話す状況になったのかを疑問に思った。
「それで聞きたいんだが、なんで俺は此処にいる？　確か俺は――」
秋斗はそこで思い出した。
亡国機業のテロリストから逃げ、何とかＩＳ学園にたどり着こうと奔走していた事。
そして追撃する〝オータム〟を機転で何とか倒し、あと少しのところでヘリからの銃撃でクラッシュした事を――。
秋斗はそこで思った。
「……俺は死んだか？」
口にすると余りに荒唐無稽な話。
だが二度目ともなると流石に慣れが有るのか、秋斗は不思議と状況を俯瞰して見るような、風に漂う凧にも似た気分で５０１に尋ねた。
『いいえ。まだ生きてる。だけど瀕死』
５０１は淡々とした調子で言った。
その返事に秋斗は、『流石に死んだか……』と、先程までの状況を他人事の様に思った。
秋斗はそこで一つ、溜息を吐く。
「瀕死ならココは一体何処だ？　三途の川的な場所か？」
『違う。ココは秋斗の心象風景。つまり、秋斗の心の中にある最も深い意識の中――』
「へぇ」
秋斗は周囲を見渡し、そう短く吐息を漏らした。
――悪くない。
自分の中の風景を見て秋斗は素直にそう思う。
『――秋斗にずっと聞きたい事があった』
「あん？」
５０１は明滅を繰り返しながら、言葉を放つ。
『秋斗は〝何〟？　どういう存在なの？』
「……そいつはまた、随分と〝漠然〟とした質問だな？」

５０１からの問いに、秋斗は思わず苦笑を浮かべた。
対する５０１は、不定形な光の姿で明滅する。その声の調子は淡々と、そして何もおかしな事は尋ねていないと言う真面目な様子であった。
『私は産まれてからずっと秋斗を見てきた。そして他の多くの男性も観測した。そして気づいた。秋斗は他の男性とは〝何か〟が決定的に違う。秋斗は――いえ、秋斗だけがこの世界のずっと〝先〟を見ている』
「へぇ、鋭いな……」
５０１の言葉に、秋斗は思わず感嘆の吐息を漏らした。
「……常に〝観測〟しているだけ、あるってか？　流石、博士に作られただけあるな」
秋斗は思わずそんな褒め言葉を口にする。
しかしそれを５０１は意に介す事無く、更に言葉を続けた。
『〝原作〟。秋斗が時々口にする言葉。そして秋斗の心の中にずっと深くに存在する〝苦痛の元凶〟。秋斗はソレを使って未来を見ている。苦痛にまみれながら、どうしてそんな事をするの？　どうしてそんな事が出来るの？』
「……」
そんな質問が出てくるとは思わず、秋斗はふと言葉を考える。
「――さて、な。その理由は俺にも判らねぇ。寧ろ、教えてくれる奴がいるなら俺が聞きたいくらいだぜ」
不思議とこの空間では、言葉を〝誤魔化す〟事が出来なかった。
反射的に言葉が出るというべきか、紡ぎだす言葉は濁すにしても本音であった。
それに気づいた秋斗は、何となく上手い言い回しを考えようと思わずポケットに手を突っ込む。すると何故か、ポケットの中に前世で愛飲していたタバコとオイルライターが見つかり、秋斗は思わずそれを手にした。
「……なんて言うか、俺には物心ついた時から〝前世の記憶〟ってやつがある。――と、言ったらどうするよ？」

秋斗はそう言葉を続けながら、ソフトボックスから慣れた手つきで紙巻を一本取り出すと、左手に持ったライターで火を点した。

記憶と寸分違わぬ味と臭いを感じつつ、秋斗は立ち上る紫煙を眺めながら探るように呟く。

「５０１が生まれるよりもずっと前からだ。目が覚めると、俺は見知らぬ世界に居た。だけど世界の〝未来〟がどんなのだか、ある程度だけど〝ぼんやり〟分かってな。そんでもって俺って居る事そのものが〝イレギュラー〟らしくて、その所為でまったく歯車が噛み合ってない、ぶっ壊れそうな状況がいきなり目の前に広がってやがった……」

秋斗は前世の記憶に目覚めた日を思い出す。

小学生の一夏。

高校生の千冬。

家に両親の姿は無く、唯一の働き手である千冬も過労死寸前の貧乏家庭――――。

覚醒して初めて目の当たりにした織斑家の状況は、そう簡単に忘れられるようなモノではない。

５０１が明滅した。

『――――だから秋斗はずっと〝孤独〟を感じているの？』

「ぁん？」

『私が観測している限りだけど、秋斗はいつも一人で悩んでいた。それはお母様も知らない心の深い深い部分で。……唯一、秋斗だけが、未来がどうなるかを判っているから。存在しないイレギュラーだと自分を思っているから。だから秋斗は、ずっと苦しいのに誰も頼れず孤独を抱えているの？』

「……そういう言い回しを使われるとちょっと照れくさいが、そりゃ、〝そう〟もなるだろう？」

アキトは紫煙を吐きながら、何処か疲れた様子で呆れた様子の笑みを浮かべた。

「だってこんな〝荒唐無稽な話〟があるわけねぇじゃん？　だけど俺の所為で破綻しかけた家族が居やがって、それを何とかしようと思っ

て、真っ先に出て行こうと思ったらさ……〝泣かれた〟んだぜ？　泣かれちまったら、どうしようもねぇだろ？」

秋斗は言った。

あの時の決意の真実を何となく誤魔化してきた言葉を、今、改めて口にした。

「俺が存在しなけりゃ、何も問題ないんだ。でもそれも出来ない以上、その結果がどうなるか判る以上、〝俺が如何にかする〟しかないだろ？　――――男としてよ？」

『男……。その男という存在が何か、私にはまだ分からないけど、男とはそうする生き物なの？』

５０１は問う。

『辛くて、痛くて、孤独でどうしようもないのに、それでも意地を張るのが男なの？　特に秋斗は〝原作〟を頼りにしているから、それで更に苦しんでた。どうして逃げようとは思わないの？』

「はっ！」

その言葉に秋斗は思わず笑った。

「辛いに決まってんだろ？　んなもん、俺が一番良く知ってるよ。だけど目の前で泣きやがった女が、必死こいて働いた金で飯食ってたんだ。加えてそんな状況を作ったのが俺の存在にあるなら、逃げられるわけねぇじゃん？」

５０１の純朴な質問に、秋斗は紫煙を吐きつつ理由を口にした。

「それに〝何とか出来るなら何とかしてやる〟っていう存在に、ちょっと憧れてたから。ガキみたいな考えだけどな。そん時はそれでいいと思った。男ってのは、やっぱり常に心のどこかで、昔憧れた奴らみたいに成りたいなと思ってるんだよ。多分、大なり小なり皆そうだと思うぜ？」

『憧れ？　……憧れとは何？』

「ロマンの事だ。憧憬の念を抱いたヒーローの様にありたいっていう馬鹿みたいな気持ちさ。形は違えど、男の心には常にそんな馬鹿な考えがある」

『憧れ……ロマン？』

５０１は強く明滅した。
『昔、秋斗はロマンは自分で見つけるモノが正しいと言った。つまりロマンとは千差万別？』
「あぁ、その解釈であってると思うぜ？」
『ならば秋斗のロマンは何？』
「俺の？」
『……』
促すようにジッと漂う５０１に、秋斗は紫煙を吐きながら視線を宙に移す。
夕焼けに染まるオレンジと濃紺のグラデーションの空を見ながら、秋斗はいつか言った言葉をもう一度口にした。
「昔、サボテンの上に裸で飛び降りて怪我した男が居てな。どうしてそんな事をしたと尋ねられた時に、男は言ったそうだ。〝その時はそれで良いと思った〟ってな。まぁ、後で後悔すると思うなら、馬鹿な事でも本気でやってみたって話さ」
『……』
「そんで昔――前世の頃だけど、その言葉に影響されて、〝この〟エアーズロックの上からの夕日を見に行ったんだ。……金もねぇくせによ？　だけどその時に、小さい事で悩んで生きるのは馬鹿らしいと思った。そんで〝好きなように生きて死にたい〟と思った。――それが俺のロマンだよ」
『……』
アキトは紫煙を吐きながら遠くに望む夕日を眺めた。
好きに生きて、好きに死ぬ。
そんな風な秋斗の人生を決定付けた思い出深い景色だった。
「――だけど、まぁ。その結果が今のこのザマだけどな？」
秋斗は死に掛けと言う、５０１の言葉を思い出し自嘲を浮かべる。
すると５０１は強く輝いた。
『今、分かった気がする。秋斗が……男とはどんな存在か――そして私達〝ＩＳ〟がどうあるべきか――』
「……あん？」

『一次移行《ファーストシフト》開始』
強く明滅を繰り返す５０１の形が、ゆっくりとその姿を変えた。
薄ぼんやりと光る不定形の光から、徐々に〝人型〟に――――。
光の四肢が伸び、ふわりとした銀色の髪が後ろに伸びる女性体へと、５０１は各個たる自我を保持する独自の〝アバター〟を形成した。
『……一次移行完了。私はコア５０１。秋斗の傍らに共に在る存在』
秋斗は人型に変化した５０１を見て、驚きを隠せなかった。
銀の懐中時計と同じアッシュグレイの瞳と長い髪。知的で精密な機械を思わせる冷たい印象を持った長身の美女。
――――その姿はまさに、かつて秋斗がオンラインゲーム〝幻想惑星〟で、秋斗自身がクリエイトしたゲーム内の〝アバター〟である。
「……随分とまた成長したな？　博士は女の子って言ってたけど、結構な〝レディ〟じゃねぇか？」
『〝レディ〟――――認識した。これよりコア５０１は、個体名〝レディ〟と識別する』
「……は？」
５０１は己をレディと名乗った。
『私はレディ。秋斗の全てをまだ私は理解出来ないけど、それでも一つだけ判った。貴方の在り方が好ましい。そして貴方のあり方を、憧れを、此処で終らせたくない。だから私が救う。私が――――』
「――――っ」
秋斗の世界は覚醒した。
遠のく意識の中でコア５０１の最後の台詞が秋斗の中に木霊する。
深いまどろみの中から浮かび上がるように、秋斗の意識が覚醒した。

☆

「っ――――」
覚醒した秋斗は押し付けられたエアバックの上で身じろぎした。

鼻を突き刺す焼け焦げたエンジンの酷く不快な臭い、そして全身を軋ませる激痛に、まどろむ隙もなく、秋斗の意識は急速に覚醒する。
パラパラと、フロントガラスの破片が音を立てて零れ落ちた。
「……〝負ける〟な、か。随分ときっつい事言ってくれるぜ、まったく――――」
首から提げた懐中時計の文字盤が、小さく明滅する。
励ますようなその光を見た秋斗は、痛みに顔をしかめて身を起す。
寸前で発動した〝絶対防御〟が、致命傷を軽減したようだ。
「……流石、〝天災〟の秘蔵っ子。随分と手間取らせてくれたじゃない、リトルマクレーン？」
「っ――――」
トンネルの入り口に舞い降りたヘリ。
そこから降りたスコールが、拳銃を構えながらゆっくりと近づいてくる。
スコールは頬から流れる血を指で掬いながら言った。
それは紛れも無く、秋斗の健闘に対する賞賛の言葉だった。
「『トランスポーター』……それとも『ダイ・ハード』かしら？　だけど〝ごっこ〟はもう終わりよ」
「……そこまで禿げてねェよ、バカヤロウ」
秋斗はゆっくり身を起しながら、自力で何とか扉を蹴り破り、車内から脱出する。
左手に持った拳銃の残弾はゼロ。
それを確認して、秋斗は拳銃（M9A1）を捨てた。
スコールはコツコツとヒールを慣らしながら、一歩ずつ秋斗に迫る。
秋斗はスコールの正面に立つ。
そして不思議と脳に流れてくる情報に、呼吸を落ち着けた。
「オータムの代わりにココで撃ち殺してやりたいところだけど、心配しなくても殺しはしないわ。寧ろ、ゲストとして丁重に扱ってあげる」
スコールは嘲笑する様にいった。その声には明らかな怒気があっ

た。
秋斗は不意にスコールの背後を見た。
そこには炎上する４ＷＤが転がっていた。
そしてもう一度正面を見据える。
右手に拳銃を構えてゆっくりと距離をつめるスコールと、トンネルの入り口を塞ぐようにアイドリングするヘリ。そしてアサルトライフルを構える兵士の姿があった。
そして――――。
――――それを見て、秋斗は悪辣に笑って見せた。
「ゲストか、そいつはいいな。特に命の保証があるってのが良い」
「でしょう？　だから――――」
「――――だが、断る」
スコールの笑みが消える。
しかし秋斗はキッパリと言い放った。
「……面白くないジョークね？　下らない意地を張れる状況かしら？」
「昔、裸でサボテンの上に飛び降りた奴曰く、『その時はそれで良い』らしいぜ？　それとついでだ。おあつらえ向きな言葉を贈ってやるよ――――」
「っ!?」
――――その時、何かが飛来する甲高い駆動音が周囲に響いた。
その音にトンネルの入り口からスコールを初めとするテロリスト達が夜空を見上げた。
瞬間、〝プラズマキャノン〟の一発がヘリを打ち抜いた。
この世でその〝兵装〟を持つ存在は一つしかない。
そしてそれは、秋斗にとって最も思い出深い存在だ。
故に、遠巻きでもその『白』が、なにかを察した。
「あれは――――そんな、嘘よ!?」
爆散するヘリを見て狼狽するスコールもソレの存在に気づいた。
スコールの視線が秋斗から外れた瞬間。
秋斗は奪ったもう１丁の拳銃（M9A1）を懐から抜く。

――そして言った。
「イピカイエー！」
連続して放たれる銃弾が、スコールを吹き飛ばした。
地面に叩きつけられたスコールを見て、秋斗は最後の強がりを振り絞って笑みを浮かべた。
「……俺の勝ちだクソッたれ」
飛来する、今や伝説と化した原初のＩＳ〝白騎士〟の――その一号機。
秋斗は舞い降りた白騎士を確認して、安堵と共にゆっくりと地面に膝をついた。
『――束様、あっくん様を発見しました。ついでに敵武装ヘリの無力化に成功』
『了解、くーちゃん！　兎にも角にもあっくんの救助を最優先だ！』
『了解』
意識を手放す瞬間、秋斗は酷く懐かしい声を聞いた様な気がした。

38　コラテラルダメージ　前篇

《――――よぅ、クソガキ？　久しぶりだな？》
「お前は……」
見覚えのある美女が目の前に立っていた。
「〝オータム〟死んだんじゃ――――」
《残念だったな。トリックだよ》
オータムは不敵に笑い、銃口を向けた。
「――――っ?!」
撃たれると思った瞬間。
秋斗は思わず眼を覚ました。
飛び起きて周囲を見ると、そこは見覚えの無い窓一つ無い薄暗い部屋の中だった。
秋斗は肌触りのいい高級感漂うベッドの感触と同時に、突然身体に走った激痛に顔を思わずしかめた。
「痛っ!?」
「あぁ、まだ起きてはダメです！」
「……ぁん？」
と、そこに一人の少女が現れた。
長い銀髪を揺らす神秘的な見た目と同時に、秋斗は彼女が盲人の様に眼を閉じている事を確認する。
秋斗はその銀髪の少女にベッドに押し戻された。
「おはようございます。あっくん様。今、束様を呼んできますから、少しお待ちください」
「あっくん……様？」
「はい。束様の一番弟子で、私の兄弟子ですから。あ、そう言えば申し遅れました。私、クロエ・クロニクルと申します」
「……クロエ？」
「はい。〝クロエ〟とでも〝くーちゃん〟とでも好きにお呼びください」
銀髪の少女――クロエ・クロニクルはそう名乗ると、秋斗に微笑み

かけた。
そしてクロエが一端部屋を去ると、ドタドタという騒々しい足を音を立てて〝篠ノ之束〟が部屋に飛び込んできた。
束は最後に会った時とまるで変わらぬ様子と出で立ちで、秋斗のベッドに飛び込んできた。
「あっくぅぅぅうん！」
「痛〝え〟！」
束の豊満な胸に抱きしめられた秋斗の身体に電流のような痛みが走った。
久しぶりの抱擁は精神的には嬉しいが、肉体的な痛みによってプラマイゼロに変わる。
「――――っぁ」
秋斗は思わず絶句し、脂汗をかきながら身体の痛みに耐えた。
「あ、ゴ、ゴメン！」
そんな秋斗を見て、束は慌てた様子でころころと表情を変えながら思わず謝罪を口にした。
そして束の後ろからトコトコと部屋にクロエが戻ってくる。
「束様お待ちを――――って、言うのが遅かったですね」
クロエは痛みに呻く秋斗の様子を確認すると、そんな風に小さく吐息を吐いた。

☆

秋斗が眼を覚ましたその場所は、束の秘密用基地である潜水艦の中であった。
その潜水艦の概観はなぜか〝人参〟を模しているが、それが束なりのセンスなのだろう。
世界からその身を隠して暮したいのか、それとも奇人として目立ちたいのか否か――――。
何れにせよ、束は最後に秋斗と会って話をした時と変わらぬ様子である。
そして唯一、久しぶりに会った束に変わった事があるとすれば、そ

れはその傍らに〝クロエ・クロニクル〟と名乗る従者の存在がある事だ。

彼女――クロエ・クロニクルは、束曰く、〝義娘〟であるという。しかしクロエ自身は束の弟子2号兼従者として、何処と無くクールな出で立ちでその傍らに立つ。

そんな凸凹コンビに救出された秋斗は、医療用のベッドの中で丸1日ほど過ごして目覚めた。

そしてようやく身を起せるようになってから初めて、秋斗は今日までの〝世界〟の顛末を束から聞いた。

「――――さて、いい加減色々話を聞きたいんだけど、そろそろ良いっすか？」

「うん、いいよ。だけどその前に……ごめんね。私の所為で――――」

「別に良いさ。終わった事だからな」

「だけど――――」

「なら、お詫びと言っちゃなんだが、この数年間何やってたのか教えてくれないか？」

「……うん」

束と秋斗が数年ぶりに交わした久しぶりの会話は、まず束からの悲痛な懺悔から始まった。

束も今回の一件について、決して無関係では無かったからだ。

秋斗は原作知識で身の危険が迫る事を半ば予想して居た為に、その言葉を適当に流したが、束の方はそうでもない。

故に、秋斗は、この数年間束が身を隠していた真意を問うた。

「――――きっかけは〝ある研究〟を見つけたからさ。ＩＳをより高度な形で軍事利用する為っていう計画。それを潰したり邪魔したりしてたのさ」

と、そこで束はクロエに視線を向けた。

束曰く、クロエが、その研究の妨害の過程で見つけた、一人の被害者であると説明した。

潜水艦の中にある居住スペース。一見すると普通の民家のリビングのような畳の一室で、秋斗は束とクロエと共に〝ちゃぶ台〟を囲ん

だ。

その一角はとてもハイテクな潜水艦の一室とは思えない程に、質素で〝古風〟な調度で纏められている。

秋斗は玉露を手に、束が今日まで行方を晦ませ、単身で戦ったという秘密結社――〝亡国機業〟についての話を聞いた。

それは秋斗を襲ったテロリスト集団《ＰＭＣモノクローム・アバター》のスポンサーにして、世界中あらゆる企業や政府の中枢に根を張る秘密結社。

その興りは第二次世界大戦期に遡る。戦勝国となった連合国を中心とする有数な資産家、政治家、軍人達は、二度目の大戦の終結後の冷戦対立構造を見て、後の〝第三次大戦〟を防ぐために、世界の平和的均衡を維持するという崇高な志で、戦争規模、戦力、開戦から終戦に至るまでの状況管理と運営を、自ら行なう為のメガロコングロマリットを形成した。

それらは何れも、現在における高名な企業グループばかりで、中には秋斗も株式を保有する会社もいくつか存在する。

そしてそれら企業の上層部に属し、影で経済や戦争を動かす事の出来る権力者集団の集まり――それが〝亡国機業〟であると束は言った。

それは所謂、一種の〝賢人会議〟である。

しかしそんな亡国機業だが、実は永きにわたり世界の裏側で暗躍した実績と、表向きの権力者と言う顔の二面性が、世代を重ねるごとに組織の評議会メンバー達の心の闇を浮き彫りにしていき、彼らは傲慢にも自らが世界の支配者であるという思想を極めていったそうだ。

そしてそんな彼らにとって〝ＩＳ〟の登場はまさしく火種であり、故にその性能を管理する事を、亡国機業は自らの〝正義〟と考えた。

ＩＳは使い方によっては既存の現代兵器を容易く駆逐する。

故に、開発者の篠ノ之束を含めたＩＳの管理を自らが行なうべきと彼らは考え、しかしそんな思惑を察した束はこの数年間自ら世間から姿を隠して、逆に彼らの思惑を打ち砕く為に動いた。

最近では、亡国機業のドイツ人幹部が指揮し、クロエが生み出され

た原因となる〝プロジェクトアドヴァンスド〟及び〝ヴォーダンオージェ〟。また〝ヴァルキリートレースシステム〟と言う莫大な資金投資で行なわれた計画の一切を破壊して回ったという。

そして束のそうした動きの結果が、今回の秋斗の誘拐事件に繋がったと、束は言った。

日本政府と日本の対暗部用〝更識〟によって、束の家族は厳重な警備が施されている。また唯一の親友である織斑千冬は世界的に有名なＩＳ操縦者。

故に、その弟にして、まだ世間的には弱い立場である秋斗と一夏が、一種の〝見せしめ〟として狙われたのだと、束は説明した。

「――――私が直接接触を仕掛けるのはリスクが高いと思ってね。それでしばらく、あっくんからの交信を受け取れなかったの。あっくんの傍にどんな間者が潜んでいるか判んなかったし」

「……なるほどね」

話を聞いて、秋斗は小さく吐息を吐いた。

束は口の動きや、スピーカーから漏れる些細な音でも、迂闊に己と話した痕跡を周囲に残すわけには行かないと思ったそうだ。

それ程に、束は秋斗の身を案じていた。

秋斗の言葉だけを掻い摘んでも、〝篠ノ之束と話した〟という情報を外に――亡国機業の間者に与えるわけには行かない。

故に束は、コレまでの間、秋斗との直接は疎か通話による接触すらも避けていたのだ。

それほど想ってもらえた事に、秋斗の中に怒りなど湧いてこない。

寧ろ嬉しいと思った。

しかし思った。

「……しかしそんだけ徹底してて、よくこっちの危険が判ったな？　今更思うけど、あの時博士が白騎士寄越してくれなかったらやばかったとヒヤヒヤしてる」

「それについては５０１ちゃん――今はレディちゃんだっけ？　あの子が教えてくれたのと、ちーちゃんからの電話があったからだよ」

「姉貴が？」

「そう、あっくんがテロリストに襲われてるから助けてくれ！　っていう風に頼まれてね」
「なるほど。……つまり、一夏の奴が上手くやってくれたってわけか」
秋斗は一夏に内心で礼を言った。
「に、しても〝あっくん〟さ。滅茶苦茶やったよね？　なにアレ？『我々は亡国機業だ～』って奴。あっくんも知ってたの？」
束は不思議そうに尋ねた。
秋斗は視線を逸らし、吐息を混ぜるような声で言った。
「さて、な。実は〝クラッシュした所為〟で、あの辺りの事はあんまりよく覚えてないんだよ。もしかすれば捕まえた連中から聞いたのかも判らんね」
「ふ～ん」
束は訝しげな視線を秋斗に向けた。
この時、秋斗はふと思った。
原作や前世の知識云々について５０１（レディ）は知っている。
が、しかしそれらを一切、束には説明していないと。
故に、秋斗は〝相棒〟らしく余計な事は言わないでくれた５０１（レディ）の気使いに、思わず小さな笑みを浮かべた。
「まぁ、いいか。でもさ。すっごい派手にやったよね？　レディちゃんから聞いたけど、まんま〝ホームアローン〟じゃん？　後でちーちゃんに怒られるんじゃない？　あんなに家の中、改造（・・）したら？」
「あ～」
秋斗は今更になって思い出した。
何とかテロリストを捕獲して脱出しようと色々とトラップを考えたのだ。
それを幸いにして一番殺傷力の高い罠に相手が掛かってくれたので、それは唯一解除されているが、他にもいくつか仕掛けた罠が存在する。
実に、今更な話だが、内部を調査した警察が〝怪我〟をした可能性も無きにしも非ず。加えて千冬、一夏が出発した後、ずっと〝土足〟で生活していた為、家の中の汚れ具合も酷い。

再会したら確実に千冬から拳骨が飛んでくるのは間違いないと、秋斗は思った。

「まぁ、あれだよ。一種のコラテラル(必要経費)ダメージって奴。そう解釈してもらうしかない。――――だからできれば博士。……あの、ほとぼりが冷めるまでの間、ちょっとココに置いてくれません？」

秋斗は思わず頭を下げた。

そんな秋斗に、束はにんまりと笑みを浮かべながら言った。

「あっくんってアレだよね？　焦ると敬語になるよね？」

「まぁ、はい」

「ん～、どうしよっかな～」

束は嗜虐的な笑みを浮かべて天真爛漫な笑みを浮かべる。

と、その脇からずっと静かに様子を窺っていたクロエが口を挟んだ。

「別に断る必要等無いのでは？　それに束様、以前からずっと〝あっくん様と暮らしたい〟って仰ってましたよね？　なら今更変な意地悪をする意味なんてありませんよ？　それに――――」

「く、くーちゃん！」

束は慌ててクロエの口を塞いだ。

クロエはモガモガとふさがれたまま何かを秋斗に伝えようとする。

そんな目の前で繰り広げられる2人の様子を見て、秋斗は思わず悪辣に笑った。

「なに？　そんなに好いてくれてんの？　なら何も心配する事は無さそうだな。博士！　お世話になります！　ちゃんと生活費も入れるんで！」

「え!?　あ、ちょっと待って！」

顔を赤くして焦る束に、秋斗は正面から堂々、頭を下げた。

３９　コラテラルダメージ　後編

秋斗誘拐未遂事件から半年の時間が流れた。
その期間の間に、秋斗の持つＩＳコア――通称レディ[501]の宿るＩＳコアソケット[懐中時計]が、束によって大幅な改良が加えられた。
改良を行う事になった原因は、先の秋斗誘拐事件の反省と、件の一件で大きく自己進化したコア５０１―通称〝レディ〟自身からの要求である。
男を学習するという意味で、コア５０１は十分な結果を出したと言える。
かつて織斑千冬がその基準と成ったように、今後は秋斗が男性搭乗者の基準となる。適正ランクで表すならば、女性の中で最上位の千冬と同じく、秋斗はまだコア５０１限定だが、適正ランク〝ＳＳＳ〟という評価になる。
今後、コア５０１に蓄積された経験をどのような形で発表していくかは未定であるが、そう遠くない将来。
何らかの形でＩＳは別のステージに上がる事になるだろう。
「――――さて」
潜水艦のトレーニングルームで、秋斗は大きく息を吐く。
その首には、新しく生まれ変わった〝懐中時計〟が下げられている。
外観は殆ど変わっていないが、その中身は大幅に改良された。
以前と同じく〝ＩＳ〟としてフレームを持たない〝異端のＩＳ〟としての側面はそのままに、以前までの〝絶対防御〟と〝シールドバリア機能〟の性能の向上に加え新たに〝量子格納庫機能〟と〝ＰＩＣ〟と〝ハイパーセンサー〟を搭載する様に生まれ変わったのだ。
ＰＩＣ――それは〝慣性制御システム〟と言い換えられるＩＳならではの機能だ。
慣性という代物をざっくばらんに説明すると、早い話が〝力の影響を受けた物質が動かされる力の方向〟の事である。
例えばビリヤードなんかが、その慣性を利用した遊びで、白球をぶ

つけて⑨をポケットに落とす際、白球をぶつけられた方の⑨が受けた力の大きさと方向で〝運動〟する様。それが慣性だ。

ＰＩＣとはそれを制御するシステムであり、それを搭載する事でＩＳに何が起こるかと言うと、早い話が〝空中に浮かぶ〟事が出来る。

ＩＳが空に浮かぶ際にＰＩＣがどのように仕事をしているかと言うと、大雑把に言えば〝重力〟という常に下方向に掛かる力を打ち消し、同時に跳躍等で上がろうとする力を相殺している。

つまり３６０度から干渉される、自然界のあらゆる〝力〟にカウンターを当てるように釣り合いを取って、一種の無重力状態を擬似的に作り出し、空間に浮かんでいるのだ。

この状態で推進翼のエネルギーを吐き出すことで、ＩＳは既存の戦闘機やヘリを大きく上回る圧倒的な機動力を手に入れることが出来るのだ。

そしてこのＰＩＣを搭載した懐中時計を身につけた秋斗がどうなるか？

早い話が、重力の影響を無視した無類の機動力を生身で身につけるに等しい。しかも、自在に力の干渉を打ち消せるので、叩きつけられたり落下したりの衝撃にも強い耐性を持つ事が出来るようになったのだ。

それは束が持つ超人的な〝身体能力〟の一つの回答――マジックの種でもある。

そしてそれをこの時から、秋斗は身につける事を許されていた。

「――しかしあれだな。ＰＩＣの応用で身体能力を上乗せしても、その性能に生身で互角で迫ってくるウチの姉貴――織斑千冬ってなんなんだよ？　もうあれ、人間じゃねぇだろ。ゴリラだろ？」

トレーニングルームで秋斗は、ＰＩＣを使った身体能力強化訓練に励んでいた。

幾らシステムの恩恵を受けると言っても秋斗は生身である。

故に肉体の頑強さを少しでも上げる為、そして今後、この『インフィニット・ストラトス』の世界で〝生存〟していく為に、秋斗は束に頼んで鍛錬用の部屋を用意してもらった。

その部屋は重力制御が可能で、設定によって現在は常に2Gという重さが掛かっている。
その中で秋斗は、劉老子から習ったジークンドーと、基礎体力向上。
そして〝射撃訓練〟に勤しんでいた。
「――――あっくん様。失礼します」
「お？　どうしたん？」
と、そこに重力制御装置を切って、クロエが部屋に入ってきた。
瞳を閉じて杖を突いて歩く様はまさに〝座頭市〟。
そんな軽口を以前秋斗が叩いた所為で、クロエの杖は実は〝仕込み杖〟に改良されているのだが、それについては割愛する。
クロエはトコトコと秋斗の下に歩いてくると、一つのジェラルミンケースを秋斗に差し出した。
「我輩は猫（名前はまだ無い）であるが先程、完成させました。どうぞご確認くださいませ」
「早いな……」
秋斗はクロエが差し出したケースを受け取り中を確認した。
そこには一丁の〝リボルバー拳銃〟が入っていた。
かつて映画〝ダーティーハリー〟の影響で『最強とはなんぞや？』という、一種のロマン論争を生んだ傑作拳銃である。
タウロス社製大口径リボルバー拳銃
レイジング・ブル
装弾数は5発。
４５４カスール弾使用の怪物拳銃。
潜水艦のシステムでタウロス社から設計図をハッキングし、それを自立型工作機械――通称《吾輩は猫である》を使って製作したのだ。
完成した拳銃を見て、秋斗は思わず笑みを浮かべた。
「……かっけぇ」
「個人的な意見を申し上げますと、デザートイーグルの方がよいのでは？」
「ぁん？」
感動する秋斗に、クロエは淡々と言った。

「いくら量子格納庫に弾薬を積んで、弾倉に直接〝リロード〟すると言っても、リボルバーですから廃莢の手間は必要になりますよ？　その点、オートマチックならその手間は省けます。ですので威力的にほぼ同等ならば、オートマチックの〝デザートイーグル〟の方が良いのでは？」

「ん～クロエは分かっちゃねぇなぁ。〝切り札〟ってのはな。ちょっと使い勝手が悪いぐらいで丁度良いんだよ。それに普段使うのは流石にＭ９Ａ１ベレッタの方だ。……レイジング・ブルなんて、普段からぶら下げて歩かねぇよ」

「そうなのですか？」

秋斗は苦笑を浮かべながらクロエの頭を鷲掴んで撫でる。

クロエはコテン、と首をかしげて不思議そうな顔をした。

「まぁ、ようするにアレだな」

秋斗は同時に用意された４５４カスール弾を一発づつ込める。

そしてリロードが終わると空間に溶かすようにして、懐中時計の量子格納庫に銃を仕舞った。

「こんな事もあろうかとって言うタイミングで、〝ジョーカー〟を切れる奴が一番カッコいいんだ。だからクロエも、カッコいい大人になりたいなら、覚えといて損はねぇぜ？」

「なるほど、覚えておきます」

クロエは素直に一礼した。

☆

「――――で、一夏はその時なんて答えたんだよ？」

『ん？　何って、普通に〝じゃあ、楽しみに待ってる〟って答えたけど？』

「あぁ。そう」

秋斗は一週間ぶりに、兄の〝一夏〟と電話で話していた。

例の誘拐未遂事件以来。秋斗は一度だけドイツの地で千冬と一夏に安否と無事を伝える顔見せを終えてから、一度も家には戻っていな

い。そしてそれ以降は、ずっと束、クロエと一緒に潜水艦での逃亡生活を続けていた。あの事件でいろいろと〝しがらみ〟が増えた所為だ。

そしてまた同時に千冬の方も、一時は中止すら危ぶまれた第二回モンドグロッソで見事連覇を果し、そして引退して〝別の仕事〟に就いた為、家を空けることが多くなったそうだ。

故に、一夏は広い家に独りという寂しさと退屈さから、こうして一週間に一度位の頻度で、こまめに秋斗に電話を掛けてくる様になった。

世間では冬の始まり。

学年で言うと中二の終わり頃。

そんな時期に一夏が秋斗に齎した一報は、兄弟の友人――凰鈴音の中国への帰省と、同時に出立の間際に鈴が一夏に送ったという〝告白〟の言葉についてであった。

――原作の通り鈴は転校の間際に一夏に向って、その胸の内を明かしたそうだ。

曰く、――アンタに毎日酢豚を作ってあげる。との事。

秋斗は一夏から又聞きで鈴の告白の言葉を聞き、そして鈴には悪いが、本気で一瞬〝意味が分からなかった〟。

実際、原作知識が無ければ詰みである。

そしてそれを一夏に察しろというのは、実際無理があると思った。

「毎日酢豚、か……。〝痛風〟にならないように気をつけろよ？　痛風って死ぬほど痛いらしいからよ」

『だよなぁ。流石に好物って言っても毎日となると困るよなぁ』

「……ちなみに一夏よ。その言葉に他の解釈の仕方があるとしたどう考える？」

『他の解釈？』

電話越しに一夏は不思議の声を上げる。

『……他の解釈ったって、毎日酢豚を食わしてくれるんだろ？　それ以外に有るかよ』

「……だよな」

月が綺麗ですね。
死んでも良いわ。
というシャレた言い回しの告白が世の中に無いわけでは無い。
しかし〝酢豚〟は流石に――――〝華〟が無い。
そして原作ではこの解釈を巡って、一夏と鈴の間に少々〝争い〟が起こるというの秋斗は知っていた。
が、知っていたがあえて秋斗は、鈴が言葉に秘めた真意を教えず一夏の将来的な己の判断に委ねた。
理由は〝無粋〟だからだ。
『――――それはそうと、秋斗は受験どうするんだよ？　来年もまさか束さんのところに居る気か？』
「ぁん？」
と、一夏は話題を変える様に尋ねた。
直に中学三年生。受験生といわれる年の始まりである。
世間的には秋斗もそれに倣うべきだが、少々事情が事情である。
その為、秋斗は今更、中学生生活に戻る気は余り無かった。
「まぁ、来年もこのまんまかな？　別に高校生にならなくても死にはしないし。必要なら適当な通信教育で〝資格〟だけとるさ」
『え～、なんだよそれ』
「なんだ？　俺に高校生やってほしいのか？」
一夏の不満な声に、秋斗は笑いながら返した。
『そりゃあ、そうだろ？　弾も数馬も同じ高校受けるし、何よりお前の将来がマジで不安なんだよ。兄貴として』
「そう心配しなさんなって。俺は何処でも何とか生きていけるよ。で、ちなみに一夏は何処の高校受けるんだ？」
『第一志望は〝藍越〟のスポーツ特待かな？　千冬姉が卒業した所』
「ふ～ん。いいんじゃね？　特待取るだけの実績あるし、成績も悪くないし」
一夏の目指す予定の私立藍越学園。
学費が安く、就職率が高い事で近隣でも有名な高校である。
但し〝特待〟を取るとなると中々に至難である。

だが今年の中体連で一夏は再び全国に出場したほどの実績がある。故にそれ程の無理難題だとは思えなかった。

「ま、がんばれ。一夏。俺は遠い〝異国の地〟から応援してるぜ」

『異国の地って、そういえばお前、今何処に居るんだよ？　って言うかなんか騒がしくないか？』

「あ～」

吐息交じりで尋ねる一夏に、秋斗は周囲をぐるりと見渡して短く言った。

「イタリアの〝ベニス〟――――を、模したアメリカのラスベガスの〝カジノ〟だな」

『はぁ!?　ちょ、お前、本当になにやってんだよ!?』

「何って、ちょっとした〝社会勉強〟の最中？　〝調子に乗ったら痛い目をみる〟って言う――――」

『はぁ？』

秋斗はディーラーの手から転がされる〝玉〟を観察し、素早く22、18、29の数字と赤の位置にチップを置く様に、後ろから〝クロエ〟の肩を叩いて指で指示を出した。

クロエがその合図に頷き、手早く賭けを終えると同時に賭け終了の合図が鳴り響く。

そして程なくして、玉は赤の18のポケットにするりと落ちた。

「――――良し！」

『良しじゃねぇ！　お前なにやってんだよ、ホントに!?　っていうか、お前そんなところ入って良いのかよ？』

「大丈夫だから此処にいるんだよ。ま、というわけだからそろそろ切るぜ。一夏は受験、頑張れよ？」

『おい、秋斗――――』

叫ぶ一夏を捨て置き、秋斗はスマホをポケットに戻した。

「――――もう良いんですか？」

「あぁ。しっかし、コレでまたしばらく帰れなくなったな。絶対にアイツ（一夏）、姉貴にチクリやがるからよ」

「それはあっくん様が態々教えたからでは？」

「……教えないともっと、うるせぇぞ？　まぁ、それは深く考えるな」
「わかりました」
クロエの隣に座り、秋斗は再びルーレットに挑む。
今度は０の一点賭けで、秋斗は勝ちを拾いに行った。

☆

束と共に暮す様になってから知り合ったクロエという少女とは、割りと良いコンビを組んでいる。
クロエは束の従者を自称し、その身の回りの世話を秋斗も含めて甲斐甲斐しく見てくれるが、どうにも料理が壊滅的。故に秋斗が料理を教えており、代わりにクロエは自らが持つ生体融合〝ＩＳ黒鍵〟のワールドパージ（能力）を使って、秋斗の見た目を大きく誤魔化す手助けをしてくれる。
故に、秋斗とクロエは揃う事で初めて力を発揮すると言ってもいい。
特にカジノ――ギャンブルの世界では、だ。
カジノという場所は、本来は未成年の立ち入りは禁止。
そしてゲームで遊ぶには最低でも２０才を超えていなくてはならない。
しかしワールドパージの力を使えば、そんな世間の目など関係なく、秋斗もクロエも十分な大人として世間に認識される事が出来る。
それはある意味で、束が世間から身を隠してのけた一端である能力だ。
故に、２人は堂々とした様子で、カジノで賭けを楽しむ事が出来た。
そして秋斗の方だが、こちらは性能も大幅に改良された〝レディ〟という相棒のお陰で――――特に〝ＰＩＣ〟と〝ハイパーセンサー〟の応用で、弾道予測という〝反則〟に近い方法で、ルーレットで馬鹿勝ちをしていた。
印象は悪いかもしれないが、コレもちょっとしたＩＳの〝性能試験〟と思えば良いと秋斗は開き直っている。

そして何より、このカジノに配慮する気が元より無い。
故に秋斗とクロエは堂々、ＩＳという世界最高峰の技術を生かして、ギャンブルの本場ラスベガスでのゴト（いかさま）に勤しんでいた。
「……勝てるギャンブルって、何でこう面白いのかねぇ」
「それは勝てるからでは無いでしょうか？」
「そりゃそうだな」
秋斗は苦笑を浮かべながらクロエの突っ込みに返した。
既にテーブルの上にはチップが山のように積み重なっている。
またそんな２人から少し離れたカードゲームのテーブルでは、〝束〟がブラックジャックに興じていた。
こちらも持ち前の天災的な頭脳と記憶力で馬鹿勝ちを繰り返している為に、それなりの人だかりが出来ていた。
「……さて、そろそろかねぇ」
「来ますかね？」
「来るさ、確実に――――」
秋斗はウィスキーを煽りながら、チラリと視線を周囲に向けた。
すると数人の黒服を引き連れた白人の男性がこちらに向ってきた。
秋斗はその顔を見て、スッと席を立ち、一礼した。
「いやぁ、どうも。オーナー今夜もお世話になります」
「ははは、お楽しみいただけたようでなにより。見たところ、今晩も相当、運がよろしいようで？」
「まぁ、ビギナーズラックって奴ですよ。ルーレットの勝ち方が判り始めたのは最近ですから」
「ほぅ」
ブルネットの髪をキッチリとセットした白人の美丈夫。このホテルのオーナーの挨拶に、秋斗はそう答えた。
ここ３日程、秋斗達がカジノで馬鹿勝ちをしている故に、流石にオーナー自ら直接挨拶に出向いたらしい。
――――そして他ならぬ彼のオーナーの来訪こそが、今回の秋斗、束、クロエの目的であった。
秋斗、クロエ、束がカジノに来訪した理由は、〝生活資金の確保〟。

――というのもあるが、一番の理由はこのホテルとカジノのオーナーが〝亡国機業〟の幹部にその名を連ねる富豪であるが故。

そして組織の実質的な実働部隊であるＰＭＣ――モノクローム・アバターを自宅に送り込んでくれた礼に、組織最大の〝資金源〟の一つを潰してやろうと画策したが故にである。

「――――折角ですからＶＩＰ用のフロアで一勝負と参りませんか？なんでしたら、御連れの〝彼女〟もご一緒に？」

と、オーナーは視線をブラックジャックで大勝ちしている束に向けた。

この瞬間の会話を束も聞いている。

なので直ぐに、コアネットワークで〝いいよ♪〟という束からの返事が返ってきた。

ちなみにこの時の束だが、普段の不思議の国のアリス衣装とは一線を画す上品な大人の出で立ちであった。

箒ちゃんセンサーというウサギ耳も外し、普段とは大きく印象が異なる知的なメイク。そしてブルネットのウィッグと、背中の大きく開けられた紫のマーメイドドレスに身を包んでいた。

束はチラリと秋斗を確認し、そしてこちらの視線に今、気づいたという様子で、席から立ち上がる。

それを確認して、秋斗はほがらかに返した。

「――――えぇ、なら折角ですから、お付き合いいたしましょう」

「そうこなくては」

そしてオーナー自らの案内で、３人はカジノの最奥にあるＶＩＰ専用ルームに移った。

そこには見るからに品格のある客達が揃っていた。

カード、ルーレット、スロット――――。

カジノの三種の神器も、一般フロアに比べるとかなり質が高い事が見て取れる。

そして同時に、一度の勝負で動く〝金額〟も凄まじかった。

――――しかし秋斗達はそんなモノに興味など無かった。

目的は初めからただ一つで、あるが故に。

「では、なにで勝負なさいますか？」
「そうだねぇ。なら、クロエ？」
「はい」
秋斗はそこでクロエに指示を出した。
クロエは合図を受けて、その黒地に金星のような色を宿した特徴的な眼を見開き、そしてＩＳ黒鍵の能力を発動させた。
「ワールドパージ！」
「っ!?」
部屋全体が、クロエの発動した能力に包まれた。
幻覚を操るワールドパージの能力で、その場に居た従業員と客の全員が区別無く〝幻覚〟を見せられた。
そして秋斗、束、クロエの三人以外の〝体感する時間〟が、一時的に停止した。
また同時にクロエと秋斗に掛かっていた偽装が解け、それぞれ少女と中学生の元の姿に戻った。
「さて、始めよう♪　盛大にね！」
束は悪辣に笑うと１０枚もの空間ウィンドウを同時に展開し、量子格納したラップトップを取り出して、カジノとホテル全体のハッキングを開始した。
この瞬間の為にあらかじめ行なった事前の下準備もあって、ホテル内部の監視カメラもその制御室も災害用のスプリンクラーも非常警報装置も全て束によって掌握された。
「あっくん！」
「任せな……」
秋斗はクロエの能力で渡される様に仕向けられた〝金庫の最終ロックの鍵〟を受け取り、事前に頭に叩き込んだホテル内の地図を頼りに、その場から移動を開始した。
「あっくん様、残り１５分です！　後武運を！」
「おう！」
秋斗の背中にクロエは呼びかける。
能力でオーナーを初めとする多くの人間の思考を停止できる限界

を15分と聞いた秋斗は、後ろ手を振ってそれに答えた。
残り時間15分――――。
「〝レディ〟。起きろ、仕事だ！」
『了解。ハイパーセンサー。及びPIC起動――――READY(開始)』
秋斗の目の前にコア501――レディが、そう空間ウインドウを開く。
秋斗は走りながら上着を脱ぎ捨て、同時に量子格納庫に仕舞っておいた目出し帽をかぶった。
そして発動したPIC――パッシブイナーシャルキャンセラーによって、秋斗は〝重力〟という枷から開放され、常人には決して到達できぬレベルの〝反応速度〟と〝無類の機動力〟を発揮し、金庫へと走った。
――――通路の最初に見える最初の関門。
三層構造の鉄格子に覆われた、厳重なパスロック前――――。
「博士！」
『OK、解除したよ！』
「よし！」
秋斗が到着すると同時にブザーが鳴り、格子の扉が連続で開いた。
その先にある赤外線センサーのレーザートラップに覆われた通路も、束のハッキング能力によって警報装置すら作動させずに突破。
そして最終関門である網膜と指紋による電子ロックは、〝安全装置〟を働かせる事で強制的に解除させる為、秋斗は量子格納庫から拳銃を抜いた。
「――――古今東西、〝機械〟を動かすにはこの方法が一番だぜ！」
秋斗は量子格納した拳銃(M9A1)を抜いて、コントロールパネルを破壊した。
この時点で使った時間は大よそ5分程――――。
そしてこの時の銃声を聞いて、金庫の前に待機していた監視の2人組みが、秋斗の存在に気づいた。
――――が、しかし応援を呼ぶより早くに、秋斗の拳足が2人を襲った。

重力の縛りから解き放たれた凄まじい速度の〝拳足〟の打突によって、監視はそれぞれ一撃で昏倒した。
そして遂に、秋斗は巨大な金庫の門の前にたどり着いた。
「ご開帳、ってな……」
オーナーから拝借した鍵を使って、秋斗はその厳重な扉を開いた。
中には５００億ドルという途方も無い額の紙幣と、金塊、美術品が納められていた。
「レディ、ありったけ回収しろ！」
『了解』
秋斗は美術品には目をくれず、紙幣と金塊のみに絞って可能な限りどんどん紙幣を量子格納した。
量子格納庫は仕舞うモノが複雑な構造であればあるほど、容量を使う。
しかし今回。回収するのは金塊と紙幣のみ。
加えて秋斗のＩＳ〝レディ〟は、ＩＳとしての装備もフレームを持たない為、他の多くのＩＳに比べて、遥かにその容量が余っている。
故にそれを使って秋斗は莫大な亡国機業傘下のカジノの金庫から、資金を回収した。
――その頃には、残り時間が5分を切っていた。
『あっくん様！　急いでください！』
「あぁ、今から外に出るぜ。ちょっと待ってろ！」
去り際。秋斗は持ち去れない残りの紙幣の山に向けて、ホテルで事前に手に入れたマッチを投げ込んだ。
燃え広がっていく紙幣を尻目に、秋斗は息を吐く暇無くその足でカジノ最寄りにあるトイレに篭り、目出し帽を抜いだ。
そしてトイレから出る振りをして、ＶＩＰルームから出てきた束、クロエと合流し、３人はそろってホテルを出た。
「作戦成功ってな。しっかし、疲れたぜ……」
ＰＩＣを停止し、秋斗は大きく息を吐いた。
ＰＩＣは生身で発動するには少々堪える機能なのだ。
しかし優秀なシステムであるのは確か。

そして束、クロエ、レディ、そして秋斗が存在しなければ、今回の作戦は成功しなかったと言える。

「束様、あっくん様、上手く行きましたね」

「くーちゃんもあっくんもお疲れ！　いやぁ、ザマァミロだね♪」

大きく息を吐く秋斗の脇で、束とクロエが労うように言葉を駆ける。

そして3人は路上でコールガールのチラシを配る黒人達の脇を通り過ぎ、予め用意しておいたキャデラックに乗り込み、そのままラスベガスから一目散に遁走した。

――――そして程なくして、金庫が破られた事を知ったオーナーの怒号が響き渡った。

翌日の新聞にその事件の模様が大々的に報道された。

が、しかし遂に、織斑秋斗、クロエ・クロニクル、篠ノ之束がそれを行なったという真実は、誰にも悟られる事は無かった。

こうして粛々と亡国機業に対する報復活動を続けながら、秋斗の新しい日々は流れていった。

最終話　原作とは少し違う『未来』へ

（――――こ、コレは想像以上にキツい……）

あくる年の四月。

中学から高校へと進級した多くの学生達が心機一転。新しい学び舎で緊張を顕にする今日この頃。

織斑家の長男――織斑一夏も、そんな世間の新入生らと同じ様に、入学した新たな高校での初日を開始した。

そして〝緊張〟を顔に貼り付けていた。

否、唯一他と違う点を挙げるとするなら、緊張どころかもはや死にそうに青白いという具合にあるだろうか？

右を向いても女子、左を向いても女子――――。

そんな環境の中に一夏は居た。

ココは〝国立高等専門教育学校兼ＩＳ技能開発訓練校〟――つまり〝ＩＳ学園〟と呼ばれる学校である。

そして世間ではＩＳがまだ〝女子〟のみにしか扱えない為、一夏のいるその場所は所謂〝女子高〟であった。

故に、その中にたった一人で通う事になった一夏の顔は、今にも死にそうなほどに憂鬱に染まっていた。

（……どうしてこうなった？）

一夏は深い溜息を吐きながら、教室の中に唯一見知った顔を見つけて助けを求める。豊満な胸、そして昔と変わらぬポニーテールを揺らす大和撫子――篠ノ之箒に向って。

しかし箒は、数年ぶりに再会した幼馴染である一夏の必死な〝救援要請〟を、「すまない……」というどこか悲痛な様子で無視した。

このタイミングでクラスに唯一の男に話しかけるなど、注目の的になるに決まっている。そんな目立つ真似を敢えて買ってやれるほど、箒の性格は今も昔も豪胆では無いのだ。

（箒ェ……）

一夏は薄情な幼馴染に向って呪うような視線を送る。

しかし箒は何処吹く風で窓の外に視線を向けた。『空はあんなに青

いのに……』と、聞こえてきそうな出で立ちである。
なので仕方なく、一夏は視線を己の机の上に落とした。
一夏の横顔をジッと観察する無数の女子――。
ＩＳ学園の一年一組は、まさにそんなどこか奇妙な静寂に包まれていた。
――と、そこに声が掛かった。
「随分と緊張しているようだが、大丈夫か？　体調不良なら医務室に行く事をお勧めする」
「あ、えっと――」
「〝ラウラ・クロニクル〟だ。織斑一夏」
「お、おう。ありがとう」
声を掛けてきたのは眼帯を纏った銀髪の少女だった。
そしてこの瞬間まで、一夏の身に一番大きな〝プレッシャー〟を与えるガン見の視線を送っていた張本人である。
しかし口を開いたラウラと名乗る少女は、堂々落ち着いた様子であった。
それが意外にも、この瞬間の一夏の緊張を解く手助けとなった。
「……俺の事知ってるのか？」
「無論だ。と、言うよりこの教室内で、お前の名前を知らない奴が居るとしたら、それは相当の世間知らずだぞ？　まぁ、私の場合はわけあってお前の弟から頼まれた事も関係するが――」
「弟って言うと〝秋斗〟の知り合いなのか？」
ラウラの言葉に一夏は思わず首をかしげる。
するとラウラは「あぁ」と短く返事を返し、そして思い出すような口調で口を開いた。
「秋斗には私の姉共々世話になったからな。それに、祖国での同僚以外で、ずっと出来損ないだった私に〝価値〟を見出してくれたのは秋斗と博士と、お前の姉の織斑千冬教官ぐらいだ。だからその借りを返す為に私は此処にいる。だから存分に〝頼る〟といいぞ」
ラウラは腕を組んでドヤ顔で言った。
その様子を、その一夏とラウラのやり取りに耳を傾けていたクラス

の多くの女子が『何、あの可愛い生き物！』と、小さく歓声を上げている。

そんなラウラの妙な頼もしさに一夏はホッと吐息を漏らし、そして短く言った。

「じゃあ、改めて織斑一夏だ。秋斗の知り合いなら一夏って呼んでくれ」

「無論だ。私の事も、ラウラでいい。よろしく頼む」

「こちらこそ、だよ」

一夏は安堵の吐息を漏らしながら、弟――秋斗に対して内心で強い感謝の念を送った。

程なくして、クラスの担任が教室の戸を開いた。

☆

「……コレでやっと〝呪い〟が解けたか」

フランス――パリ。

雑踏の中を行き交う人々を尻目に、秋斗は一人、銜えた紙巻に火を点し、そして大きく息を吐いた。

世間ではこの冬に発見された〝世界初〟の男性ＩＳ操縦者――〝織斑一夏〟の報道で持ちきりであった。

今年四月から、一夏は原作と同じく〝ＩＳ学園〟に入学する事になった。

それにさし当たって、秋斗は己がこのインフィニット・ストラトスの世界で生きる為に変えてしまった幾つかの〝要素〟を補完する為に動いていた。

秋斗の介入の所為で一番変わった要素といえばラウラ・ボーデヴィッヒに他ならない。一夏が〝亡国機業〟に誘拐されず、そして千冬がモンドグロッソを連覇の末に引退した。

その結果千冬は原作のようにドイツで〝１年〟の教導を行なう必要が無くなったからだ。

千冬は国家代表の引退後ＩＳ学園に属し、モンドグロッソの騒動に

〝詫び〟の意を込めて、出向で世界各地のＩＳ乗りに教導を行なった。

その間に千冬はドイツでラウラと知り合った。

が、しかし時間が足りない所為か、遂に千冬でも、その時のラウラに押された〝出来損ない〟の烙印を、完全に取り除く事は出来なかった。

プロジェクトアドヴァンスト――簡単に言ってしまえば遺伝子操作で人工的に誕生させる〝強化兵士〟である。

その結果生み出されたクロエの姉妹個体が、ラウラ・ボーデヴィッヒという少女だった。

しかし兵士としては成功体であったラウラだが、その後のＩＳの登場によって、新たに研究されたヴォーダンオージェという試作型の特殊なナノマシンを投与された事で、それまでの性能を発揮する事が出来なくなった。

――故に彼女は、兵士としては出来損ないの烙印を押されてしまったのだ。

束の潜水艦での共同生活で、クロエは度々そんな唯一の姉妹であるラウラの様子を、密かに観察していた。

その頃は秋斗達も〝亡国機業〟に対する嫌がらせを続ける日々を送っており、また同時に明らかな〝人手不足〟に悩まされていた。

故にクロエのラウラを想う気持ちと、〝嫌がらせ〟の人手不足の解消を兼ねて、束は密かにドイツと交渉してラウラ・ボーデヴィッヒの身柄を受け取った。

この交渉の際に、世間では違法のＶＴシステムを搭載したＩＳシュヴァルツェア・レーゲンの存在が明らかになり、密かに浄化作業という名でオーバーホールされたそうだ。

そしてラウラはドイツ軍を除隊し、新たにラウラ・クロニクルという名前で、束の〝私兵〟と成った。

この際に束によって調整されたヴォーダンオージェの影響で、ラウラは元の高いスペックを宿した兵士に生まれ変わり、秋斗とツーマンセルを組んで世界各地の〝亡国機業〟傘下の違法研究所や資金源を

強襲した。

そして今後は、〝織斑一夏〟の身辺警護という名目で、ＩＳ学園の生徒の一人として入学する手筈になっている。

「――――さて、行くか」

秋斗は吸殻を量子格納庫に仕舞ってゆっくりとその場から移動し、不意に見つけたタクシーを呼び止め、それに乗った。

パリといえば、一時期は表の通りから直ぐ脇にそれると立ちんぼの娼婦が大量に居ることで有名だった。

が、しかしＩＳの登場の所為か、そうした貧困層の女性にもＩＳ乗りという一攫千金のチャンスが生まれた事により、かつてとは打って変わって裏も表も一見すると綺麗な景観になっている。

しかしその代わりに女性に対する支援や優遇政策が大きく進められ、結果所謂、過激派――女尊男卑派と呼ばれる一部の勢力の台頭も許している。

特にフランスはその傾向が強く、それによって経営が狂い始める幾つかの〝企業〟が顕著になった。

秋斗がこれから向うデュノア社もその一つである。

会社の創設期からの社長派。そして創設を支援した社長夫人派の対立で、現在のデュノア社は大きく揺れている。

争いの発端は、現在世界で開発中の〝第三世代ＩＳ〟の開発状況だ。

欧州圏でイギリスとドイツが試作型第三世代機の開発に成功したという動きから、フランスで最大手と呼ばれるデュノア社も相当な突き上げを喰らっているらしい。

そして今日は、まさに今回の男性ＩＳ操縦者の登場で、今度デュノアがどう動くかを話し合う会議が、本社の方で開かれる。

幼少の頃からデュノア社の株式を買っていた秋斗は、いつの間にかその保有率が単独で全体の９％を超えていた。故に、かねてから総会に出ろという御達しが再三出されており、秋斗は遂にその会議に出席するつもりでフランスの土を踏んだ。

「お待ちしておりました。〝ミフネ・サンジュウロウ〟様ですね？」
タクシーを降りてデュノアの本社に向かい、受付で担当を呼び出すと、程なくして秋斗と同い年の金髪を結った礼装の少女が現れた。
アメジスト色の瞳が特徴の美少女。まさかこのタイミングで会うとは思わず、秋斗は内心で少しだけ驚く。
「えっと、アンタは？」
「シャルロット・デュノアです。ココから先は僕が案内いたします」
「そうかい。それじゃ、よろしく」
「かしこまりました」
出で立ち、立ち振る舞い。
それだけ見ても十分に教育が行き届いている。
問題があるとすれば、シャルロット自身の〝立ち位置〟だ。
秋斗はシャルロットと共にエレベーターに乗り込み、会議場へ向う途中でふと尋ねた。
「で、オタクはどっち側なん？　社長？　それとも夫人？」
「……それは」
シャルロットは少し困った表情を浮かべた。
そもそも秋斗が呼び出された理由は小学生でも察しが付く。
秋斗の持つ９％の株を自陣に引き込めば、それだけで会社内の社長派、社長夫人派の争いに決着が付くからだ。
故にシャルロット自身がその意思決定を左右する為のハニートラップ要員を任されていると言ってもそれ程、不思議な話では無い。
故に答えは直ぐに出てくると思った。
が、しかしシャルロットは口ごもった。
それを見て秋斗は何となく思った。
「……心情としては社長派。だけど夫人派に属してるから言えないって感じか？」
「何のことでしょうか？」
シャルロットは一瞬動揺を瞳に込めてから、平静を取り繕って愛想よく笑った。
一瞬の動揺さえなければ、上手いなと秋斗は思った。

同時に、原作の知識から、その笑みを身につけた一端を察して〝世知辛い〟と感じた。

故に秋斗は不意に思いついた。

「まぁ、この際だから言うけど、俺はこの会議でどっちに属すかなんて決めてないんだよ。ただ、昔俺の家がクソ貧乏でな？　その時に買ったデュノアの株でそれなりの生活が出来るようになったから、その借りを返してやろうってぐらいは思ってる。もしもアンタが、こうした方がいいって思うのなら、それに従ってもいい。なんなら、アンタが俺の代理って事で、この〝９％の株式〟握って会議に出てみるか？」

「……え？」

秋斗の台詞に、シャルロットは眼を丸くした。

不幸に流され、最後にはその救いさえ〝曖昧な形〟に終った原作のヒロイン――シャルロット。

その人生の旅路の終着点が余り良いものになるとは到底思えなかった秋斗は、此処で会ったのも何かの〝縁〟だと感じて、一枚の１ユーロ硬貨を取り出した。

そしてこれから何をするかを示すように、秋斗は左の親指でコインを弾いた。

「……どうする？　乗ってみるか？」

「……」

秋斗が取り出したのはフランスで発行されているユーロ硬貨である。

その裏面には、命・連続性・成長を象徴する木。フランス国土を象徴する六角形。そして共和国の〝自由・平等・友愛〟を刻んだ文字がある。

「僕は――」

直にエレベーターも目的の階層につく。

残り５階――。

シャルロットはごくりと、唾を飲み込んだ。

そして秋斗に問うた。

「――あなたは何を考えてるんですか？」

「別に何も。ただ経営のド素人で、しかも外国人の俺よりも、フランス人でデュノアって名乗ってるアンタが、この会議に出るのに相応しいんじゃないかと思っただけさ。別に嫌ならこの話は無かった事にしていい。……だが、選んで勝負するかはアンタの意思だ。負けたら現状のまま。勝ったら……まぁ、ある程度の〝自由〟は買えるんじゃないか？」

「っ!?」

「どうする？　直に到着するみたいだぜ？」

「……〝裏〟」

秋斗の問いにシャルロットは内心で幾ばくかの葛藤を乗り越えた末に、小さく頷き、そして〝自由〟の刻まれた面が〝欲しい〟と選んだ。

「そっか。……叶うと良いな」

その意思を受けて、秋斗は小さく笑いコインを弾いた。

――そしてシャルロットは、勝ちを拾った。

☆

既に原作とは大きく未来が変わっていた。

織斑秋斗は単身。雑踏の中を歩きながら、今日までの事をふと思い返した。

今日までの積み重ねの結果、原作のようなゴーレムの襲撃事件やＶＴ事件、そしてその後スコール達が引き起こした襲撃事件は恐らく起きないだろう。

――しかしこの世界の『運命』に導かれてか、一夏は原作と同じく試験会場で迷った末に、そこで見つけたＩＳに運悪く触れて起動させてしまった。

起動の理由は恐らく、秋斗と同じで〝千冬の弟〟だからだろう。

思えばこれまで一夏が意図的にＩＳに触れる機会は無く、触ったのはその時が初めてであった。

そして結果として、男性がＩＳに乗ることが出来るという荒唐無稽

さを、一夏は世間にさらしてしまった。
その男性が乗れるという証明のタイミングは、束が意図する時期とは大きく違った。
その為現在、束は秋斗が積み重ねたデータのアップロードを、どの様なタイミングで行なうかを検討中である。
またコレを機に、世界中で一斉に〝男性ＩＳ操縦者〟の捜索が始まった。
その際に最も可能性があると期待された一夏の双子の弟である秋斗だが、秋斗は今も世界からその身を隠している。
そしてそんな世間を尻目に、秋斗は今はオーストラリアのシドニーに居た。
一夏は単身でＩＳ学園に入学する事になり、その結果秋斗のスマホに再三、『頼むから一緒に入学してくれ！』という伝言を入れてくる。
が、秋斗はそれらの一切を無視した。
――――これから始まるのは、他でも無い〝織斑一夏〟の物語。
故に秋斗は、兄に対して『頑張れ』と、内心で短くエールを送った。
「まぁ、たった高校生活の３年だ。……俺はその前に単独で〝１０年〟戦ったんだから、そのくらい耐えろ」
秋斗はタバコに火をつけた。
そして原作とは少し違う〝未来〟にたどり着いた世間に、秋斗は視線を向けた。

番外編
タバネサブマリン♪　ラウラ・レポート　前篇

薄暗い深海をゆっくりと進む一隻の潜水艦。それはこの世のあらゆる国家に属す事が無く、唯一にして最高峰の技術を持って建造された〝天災〟の城である。

その外観は天災が建造しただけあってか、一般的な潜水艦のそれとは一線を画し、具体的に説明するならば所謂――〝人参〟の形をしていた。

そしてそんな天災の居城――『タバネサブマリン』に搭乗する乗組員は、その時点で４人。

栄えある〝一人目〟にして船長の『天災』――篠ノ之束。

その天災に娘として迎え入れられ、記念すべき弟子２号の名を賜った従者――クロエ・クロニクル。

そして天災の一番弟子にして後継者と目される少年――織斑秋斗。

最後に新参にして、栄えある天災の娘その２と相成ったラウラ・ボーデヴィッヒ改め、ラウラ・クロニクル。

以上の４名である。

一同は紆余曲折あって世間から身を隠す生活を送っていた。

時に〝亡国機業〟と名乗る秘密結社に対して〝嫌がらせ〟を実行し、時に気分の赴くままにロマンを探求するというまさに何者にも縛られぬ〝自由〟な日々を謳歌していた。

コレは世間の鼻摘み者にして、無駄に厄介極まりない〝自由人〟が集う居城――『タバネサブマリン』で起こった〝ある日〟の物語である。

☆

「――――まいった」

その日。その時、織斑秋斗は鍛錬場の床に叩きつけられたままの姿

勢で、徐に両手を挙げて降参した。
　咄嗟に受身を取ったとはいえ、打ち付けた背中には鈍い痛みが走る。が、秋斗はそれ以上に、喉下に添えられたコンバットナイフの鋭さによって、背筋に冷たさを感じていた。
　そんな秋斗を見下ろす銀髪の少女――ラウラ・ボーデヴィッヒ改め、ラウラ・クロニクルは、秋斗の降参の意を受けてゆっくりとナイフを急所から外した。そしてナイフをシースに収めながら、にやりとした笑みを浮かべた。
「ふむ、流石に教官の弟だけある、か。動きは日に日に良くなっているが、まだまだだな」
「そいつはどうも……。こっちとしちゃ、日に日に勝てなくなって憂鬱極まりないぜ」
　ラウラは秋斗の近接戦闘の身体捌きを見て賞賛を送り、秋斗はその言葉に吐息交じりに返す。
　模擬戦の結果はコレで7対3。もちろんラウラが7で、秋斗が3の方だ。
　ラウラがドイツ軍で落ちこぼれとなった所以の〝ヴォーダンオージェ〟の不具合を調整したばかりの頃は、まだ秋斗とラウラの模擬戦にこれ程の差は無かった。が、しかし〝眼〟の不具合が無くなったラウラは、日に日にその生まれ持った戦士としての力と、軍人として培った経験を取り戻していった。
　その結果、素人に毛の生えた程度の秋斗が、模擬戦でほとんど勝てなくなったのは言うまでも無い。
　秋斗はゆっくり身を起しながら、結果を皮肉るような文句を浮かべてコキリと首を鳴らした。
「流石に付け焼刃の技で勝てるほど甘くないか……。元とはいえ流石〝職業軍人〟だぜ。すげぇよ、まったく――」
　秋斗の身長は既に１７０を超えている為、秋斗とラウラと並んで立つと２人の間には大人と子供程の〝身長差〟が生まれる。つまりそれは、秋斗の方にウェイトとリーチに〝分がある〟という事。
　が、しかしそれを補って余りある機動力と軍事訓練で培った経験と

勘は、圧倒的にラウラが上であった。
それが如実に出た結果を理解出来ない程抜けてもいない為、秋斗はしみじみと言った。
「――――ココまで綺麗に負かされると感服するね。悔しいって気持ちすら出てこねぇぜ」
「ほぅ、なら諦めるか？」
にやりと笑う秋斗に、ラウラも嘲笑を送る。
「いや、まさか。ここまで付き合ってもらって『何も学べませんでした』じゃ、格好つかねぇだろ？　絶対にその技、モノにしてやるさ」
「なら盗んでみろ。技を盗むのが日本での〝慣わし〟なのだろう？」
「……まぁ、その言い回しは間違っちゃいないが」
秋斗は深々と息を吐きながら笑って見せる。
対するラウラはそんな秋斗の言葉に、何処と無く楽しそうに笑みを浮かべた。
秋斗がラウラとの鍛錬で身につけようしているそれは、所謂〝軍隊格闘術〟と呼ばれる代物である。そして広義的に言えば、〝ＣＱＢ〟と呼ばれる閉鎖空間での〝戦闘技法〟のノウハウであった。
これまでの秋斗は〝レディ〟の力と拳銃の火力。そして齧ったジークンドーでゴリ押しだった。しかしそんなゴリ押しでも生き残れたという実績こそあれ、今の時勢――そして今の生き方を続けるには、どうしてもそれなり以上の〝力〟が必要になると秋斗は感じていた。
故に、『タバネサブマリン』の乗員に、新たに〝ラウラ〟という軍事、戦闘の専門家が仲間になった際、秋斗は早速、ラウラから銃と戦いの基礎を師事したのだ。
またその時のラウラは落ちこぼれの烙印を受けた事による精神的な疲弊を感じており、同時に姉（クロエ）との出会い、そして束の庇護の下に入るという人生の大きな転機にあった。故にラウラにとっても、皮肉だが自身のアイデンティティである戦闘、軍事の方面で師事を仰ぎたいという秋斗の提案は、非常に都合が良かったのだ。
軍を退役して〝自由〟という時間を持て余しており、新生活に対す

る不便さもあった。
それを手伝うという対価に加えて、言い方こそ悪いが秋斗の〝指導〟に並行して一度、ラウラ自身に己の有り方を見つめ直す機会が生まれる。
そうした互いの利害が一致した事で、ラウラは以前のような関心の薄い人柄を転換し、非常に根気良く秋斗の鍛錬に時間を費やした。
――――そして余談ではあるが、そうしたラウラの根気強い指導には、どこか織斑千冬の指導方法の面影があった。そしてそれを指摘する人物は、この潜水艦の中には存在しなかった。
「――――に、してもだ。どうして〝ああ〟も簡単に懐に潜られるのかねぇ」
「そのように考えて動いているからだ。と、しか答えようが無いな」
「ですよねー」
格闘訓練と射撃訓練。
その二つで3時間ほど鍛錬場で汗を流した後、2人はドリンクを片手に汗を拭いながら小休止を取った。
秋斗はラウラのあっけらかんとした返答に、小さく苦笑を漏らした。
するとラウラは真面目な様子で言葉を付け加える。
「しかしそう腐る事は無い。望んでも伸ばしようの無い〝リーチ〟と〝ウェイト〟は、十分に備わっているんだ。それに実戦では〝レディ〟という反則技も使うのだろう？　アレを使われたら、流石に私もISを持ち出さないとお前には勝てん」
「……切り札だから早々、使う事はねぇけどな」
「だが、それでも切り札がお前にはあるんだ。そう急く事はないさ。はっきり言って技術等、後からいくらでも身につく。教官（織斑千冬）もそう仰っていたぞ？」
訓練の際、ラウラは秋斗の指導に、ドイツ時代に受けた千冬の鍛錬方法を踏襲した。
流石に軍隊式の鍛錬と、ISの操縦技能に特化した千冬の訓練とは大きく勝手が違うものの、その二つの間を取って旨く調整して指導し

てのける程度には、ラウラは有能であった。
　そんなラウラ教官の言葉に、秋斗はまたしても苦笑を漏らした。
「随分と優しいじゃねェか、教官殿（ラウラ）。俺は最初に軍隊式って聞いてたから、もっとこう……なんて言うか〝フルメタル・ジャケット〟的な訓練を想像してたんだが――――」
「完全被甲弾（フルメタルジャケット）？　なんで被覆鋼弾が例えに出てくるんだ？」
　秋斗の台詞にラウラは小首をかしげた。
「あぁ、違う違う。銃弾の事じゃなくて、映画の方さ。ベトナム戦争時代の新米海兵隊員が特殊訓練を受けて実戦に出るまでを描いた映画があってな？　俺はてっきりその訓練風景の一幕みたいのを勝手に想像してたって事」
「なるほど、映画の名称か。それは知らなかった」
　秋斗が手を振りながら解釈を正すと、ラウラは腑に落ちた様子で短く頷いた。
「そういえばドイツに居た頃、隊の仲間が時々映画の話をしていた気がする。……映画とは、面白いものなのか？」
　と、ラウラはふとそんな風に秋斗に尋ねた。
「なんだお前。映画見た事ねェのか？」
「生憎、その手の娯楽には触れた事がない。その頃の私は知っての通り〝落ちこぼれ〟だったからな。娯楽に現を抜かす暇など無かった。それに必要無いとすら思っていた」
「……ん な悲しい事、ドヤ顔で言うなよ」
「ドヤ顔？」
「今のお前の堂々とした顔（ツラ）の事だ」
「あぁ、なるほど。コレはドヤ顔というのだな？」
「あぁ」
　悲壮感の漂う台詞に思えるがそれを言ってのけるラウラの堂々としたドヤ顔に、秋斗は思わず苦笑を浮かべた。
　特殊な生まれと、軍という特殊環境での育ち。
　故にラウラは戦場では非常に頼りになる。――――が、しかし如何せん日常生活となると、中々にすっ呆けな様子を度々見せる天然少女

であった。
その様子は秋斗から見て、ラウラの姉の〝クロエ〟によく似ていた。
なので秋斗は、これが〝銀髪兎姉妹〟特有の素養なのだろうと密かに思った。
また同時に、ある意味でこの『タバネサブマリン』の乗員として〝正しい〟とも感じる。
「そう言えば、確かクロエの奴も〝映画好き〟だったと思うんだが、ラウラはクロエと一緒に見たりしないのか？　映画？」
ふと、秋斗は思った。
ラウラと同じ軍事計画で誕生したラウラの先任個体――クロエ・クロニクル。そのクロエこそが、ラウラがこの『タバネサブマリン』に住む様になった一端である。
そして潜水艦での共同生活でラウラの面倒を最も見ているのはクロエと言ってもいい。なのでラウラも、世間の姉妹特有の付き合いという形で、クロエの趣味につき合わされて映画を観ているのでは？
と、思ったのだ。
「そういえば確かに、姉上（クロエ）も何かの映像ソフトを観ていた様な気がする。だが、もしあれが映画だとしたら私は――」
「……ぁん？　どうしたよ？」
ラウラは、何かを思い出したように顔を青ざめさせた。
唐突なラウラの変貌した様子に、秋斗は思わず首をかしげた。
するとラウラは恐る恐る言った。
「実は先日、私が姉上（クロエ）の部屋に入った際に、姉上は薄暗い部屋の中で人間同士を連結させたり、人間と武器を合体させる類の猟奇的なスナッフフィルムを見ていた」
「あ～」
秋斗はそこで全てを悟った。そして「可哀想に……」と、神妙な表情の裏で笑いそうになった。
「アレの映像は恐ろしかった。それ以上になぜ姉上はあんなおぞましいモノを見ているのか、まるで理解が出来なかった。思えば、アレが

秋斗の言う映画なのだろう。もしそうだとしたら、私に映画は――――
――無理だ」
「そいつはご愁傷様。ま、運が悪かったな……」
ラウラの青ざめた様子での言葉に、秋斗はクロエの映画趣味に流石は〝束の従者〟だという、らしさを感じた。
クロエが観ていたそれらは、なんともマニアックでゴアい代物として、界隈ではそこそこに有名な作品である。
そして秋斗も、初見で鑑賞した時は笑い半分、どん引き半分ぐらいの気持ちを抱いた覚えがある。
秋斗は遂にそんな作品にも手を出すようになったクロエの映画趣味の高ぶりに、内心で思わず拍手を送った。
そもそも、クロエに映画を勧めたのは秋斗であるからだ。
――――ちなみに秋斗がクロエに対し、一番最初に勧めた映画作品は、黒澤明の『夢』とスピルバーグの『E・T』だったりする。
「――――しかしまぁ、いきなり『ムカデ人間』は流石にキツイか。それは確かに同情するぜ」
トラウマと化したのか、映画の内容を思い出して青ざめるラウラ。
秋斗は思わずその頭に手を乗せて、猫のように撫でた。
クロエにも思わずやってしまう事だが、見た目と身長差的にこの銀髪兎姉妹は非常に頭に手が乗せやすい。
「……子供じゃない。撫でるな」
ラウラは少しふてくされた様子で言った。
しかし秋斗はラウラの頭から手を放さなかった。
「素直に撫でられとけよ。まぁ、それは兎も角だ。クロエには後で俺から一言添えとくよ。んでもって、ラウラみたいな初心者にお勧めしやすい面白い作品を後で教えてやる」
「……私にも楽しめる映画はあるだろうか？」
「あるに決まってんだろ。年間何百本、世界で作られてると思ってんだ？」
秋斗はそう言葉を投げつつ、頭の中でラウラのような純真無垢な映画初心者にお勧めする丁度いい作品のピックアップを開始した。

「とりあえず、今度クロエに何かの映画を勧められた時は、先ず内容がどんなのかを尋ねろ。もし解釈が難しそうなタイトルで不安があるなら、せめて見る前にどんな感じか聞きに来い。もしかしたら俺が事前に見た事がある奴かもしれないしな」

「すまない。流石に私も、出来ることなら姉上の趣味を忌諱する事無く、なるべくなら理解してやりたいからな。その提案は素直に助かる」

「……姉想いだねぇ。さて――――」

ラウラの育ちからしていきなりファンタジー要素が全開の作品よりも、多少はリアリティーを重視した作品である方が良いだろう。

その上で楽しめるとなると、出来れば直球で面白い方がいい。

そう考えた秋斗は、一先ず日本の劇場用アニメ作品に方向を定めた。

「――――まずは『９９９』か、『愛・おぼえていますか』か、『パトレイバー』だな」

――――と、そんな風にいつもと変らぬ日々を送っていたまさにその瞬間である。

突然、潜水艦全体を揺らす様な、ゴウンっという鈍い音と衝撃が秋斗とラウラの身体を揺らした。

「……なんだ？」

「判らない。とにかくブリッジに行くぞ！」

駆け出すラウラに続いて、秋斗もその背中を追って束とクロエの居る潜水艦のブリッジに走った。

☆

「――――で、その後はどうなったんだ？」

「……本当に聞きたいのか？」

「いや、そこまで振りを聞かされたら最後まで聞かないと気持ち悪いだろ？　一体、何があったんだよ？」

所変わって、ＩＳ学園。

世界初の男性ＩＳ操縦者として同学園に入学するハメになった不幸な少年――織斑一夏は、弟（秋斗）を知るという〝ラウラ・クロニクル〟から、ラウラと秋斗が知り合ってからの話に耳を傾けていた。

ＩＳ学園に入学したまさに初日である。気疲れするような自己紹介という名のＨＲが終わり、そして直後に始まった最初の授業を終えた後の昼休み。一夏は幼馴染の篠ノ之箒と、そして件のラウラ・クロニクルと共に食堂で席を囲んだ。

ＩＳ学園に在籍する男は現時点では一夏のみ。故に、周囲に座る無数の学園の女子達の視線は、刺す様な形で一斉に一夏達の席に注がれている。

しかし気づけば、ラウラの〝話〟に鋭く耳を澄ませる生徒が多数存在し、中には一夏達のクラス担任である〝山田真耶〟の姿もあった。

ラウラの語る〝タバネサブマリン〟での日々。

その話の続きを促すような視線が、３６０度、あらゆる方向から一斉に注がれる中、ラウラの右隣に座る篠ノ之箒が、話の続きを促した。

「それで直後に一体、何があったんだ？　その様子だと、あまり良い話ではなさそうだが――」

「……叔母上」

「だから叔母上、言うなと言っただろうが！」

「ふぎゅっ!?」

ラウラの〝叔母上〟という呼び方に、箒は思わずツッコミを入れた。

幼少の頃の転校生活で大阪に移り住んだ時に身につけた技であった。

そんな風に箒に頭を叩かれたラウラは、頭を擦りながら口を開いた。

「しかし叔母上。私と姉のクロエは博士の娘として迎え入れられている。故に博士の妹である貴女が私達姉妹の〝叔母〟であるのは解釈としても日本語としても正しいのではないのか？」

「確かに――」

「おい、一夏……。頷くな！」

「ごめん、ごめんって！　冗談だよ箒！　だからその拳を下ろそう……な？」

苦笑いを浮かべて納得する一夏に、箒は握りこんだ拳をチラつかせる。

すると一夏は反射的に机の上で土下座の姿勢をとった。

「――っ！　私の事は〝箒〟と呼べ。だから、間違っても〝叔母〟という呼び方は止めてくれ」

「了解した」

「……ったく」

箒は溜息混じりにラウラの叔母上呼ばわりを訂正した。

箒は昔から人見知りの激しい性格であるが、入学直後のこのラウラによる〝叔母上〟呼びの所為で、既にラウラに対し大きくその態度を砕いていた。ある意味でそれは、入学早々から気を使う必要の無い友人を得られたに等しい。が、しかし箒は、欠片ほどの感謝すら、姉――篠ノ之束に抱きそうもなかった。

箒は静かに溜息を吐いた。

「――――何が悲しくてクラスメイトに叔母と呼ばれなくてはならないのか？　しかも意味合い的にそれ程間違っていないのだから余計に性質が悪い。あの愚姉……次会った時は、ただじゃ済まさんぞ」

「ははは」

一夏はそんな箒の様子を見て、苦笑を浮かべる事しか出来なかった。

そして同時に、そんな箒が実姉に対して抱く憤りと同じモノを、一夏の姉（千冬）が、その実弟（秋斗）に対し密かに抱いている事を思い出す。

「――――やっぱり、秋斗と束さんって似てるんだな」

「あぁ、それは私も幾度か痛感させられた」

「あ、やっぱりラウラもそう思うか？」

「あぁ」

ラウラは緑茶で口を湿らせつつ、うんうんと深く頷いた。

「そもそもこの〝続き〟は、まさにそれを痛感した時の話だ。……あの時の秋斗と博士の様子は今でも思い出す。軍人として多少の事で

はうろたえないと思っていたが、あの2人はそれ以上にうろたえていなかったからな。と、いうよりもいろいろな意味で凄かった」

「……なんか聞くのが怖いんだけど、マジで何があった？」

どこか遠い眼をするラウラに、一夏は恐る恐る尋ねた。

そしてラウラは、『タバネサブマリン』で過ごした思い出を、再び口にした。

「――結論から言うと、私達は〝ダイオウイカ〟に遭遇した」

タバネサブマリン♪　ラウラ・レポート　後篇

その日。平穏に潜航するタバネサブマリンの船体が大きく揺れた。
揺れを感じた乗組員の一同は、直ぐに潜水艦の中枢であるブリッジに集まり、そして中央スクリーンで船外探査ビットのカメラ映像を確認した。
探査ビットが撮影したのは、船体に齧りつく一匹のダイオウイカだった。しかもその全長が推定２２メートルを超えるであろう大物――世界最大とされる超巨大なダイオウイカであった。
ダイオウイカ――それは開眼目ダイオウイカ科に分類される巨大生物で、ヨーロッパにおける伝説の怪物「クラーケン」のモデルになったとも推測される海洋生物だ。直径約３０センチにも及ぶ巨大な眼を持ち、文字通り世界最大級の無脊椎動物。
「――――でけぇな」
その異形を見た秋斗は思わずぼやいた。
その顔に笑みがあったのは、その光景のあまりにあまりなシュールさ故に、である。
タバネサブマリンの外観は人参を模しており、その所為で『人参に貪りつく巨大なイカ』という構図がそこにはあったのだ。
それはまさに世紀の珍景と呼ぶにふさわしい絵である。
またそんな光景を笑う秋斗の隣では、束が興奮の色を隠せずに飛び跳ねていた。
普段の天真爛漫という様子に、更に拍車をかけた笑みを浮かべた束は、喜色の混じった声で大きく叫んだ。
「ヤバイよ！　スーパーゲソだよ！　アルティメット割きイカだ！」
日本人にとって海洋生物の多くが食材である。
認識の程度に多少の差はあれ、ほぼ全てがそうだと言えるだろう。
タコも、海草も、鯨も、イルカも、サメも――
その調理法次第では食べられるという意識を持つのが日本人であり、その人種的思考の為か、秋斗と束の反応はダイオウイカに対する驚きこそあれ、邂逅自体を非常に喜んで受け取った。

――しかし対照的にラウラとクロエの反応は違った。
彼女らはタコを悪魔と呼んでのけるヨーロッパの生まれだったからだ。
クロエ・クロニクル。そしてラウラ・ボーデヴィッヒ改めラウラ・クロニクル。
その姉妹にとってまさにその日の出会いとは未知との遭遇であり、決して好意的に受け止められる発見ではなかった。
「もうだめです、お仕舞いです……！」
クロエは先日見た『巨大イカの大逆襲』という映画を思い出して震えた。イカの嘴の凶悪さ。劇中で描かれた容易に人間を噛み潰すその威力を思い出したからだ。
またその隣に立つラウラも、クロエほどではないが表情を青ざめさせていた。
ダイオウイカのおぞましい姿を見た瞬間。ラウラの心には非常に原始的な恐怖が芽生えたからだ。
その所為かラウラは、自然とクロエの服の裾を幼子のように掴んでいた。
ラウラは卒倒しそうな気持ちを引き締めつつ、何とか悪魔（ダイオウイカ）を倒す算段を考えた。
もしもこの場にラウラの愛用したＩＳシュヴァルツェア・レーゲンがあれば、彼女は例え何と言われようが、その肩部のレールキャノンをダイオウイカに対し、問答無用でぶっ放していただろう。
――しかしそうした強い恐怖を抱くクロニクル姉妹の脇で、どこまでもマイペースな日本人コンビによる緊張感の無い会話が続けられていた。
「――なぁ、博士。こいつって喰えるんかな？」
「ん～たぶん美味しくない、かな？　軟骨魚類のデカイ奴って大抵アンモニアで浮いてるし――」
「へぇ、そりゃあ残念だ。折角、噛りがいのあるでっかいゲソなのに――」
「お、あっくんはゲソが好きなのかい？」

「ゲソって言うか、寿司ネタなら俺はイカが一番好きだな。後、イクラとサーモンと貝と海老とか――あ、なんか久しぶりに寿司食いたくなってきたわ」
「奇遇だねぇ。束さんも丁度そう思ったところだよ。今度、寿司食べに行く？」
「いいね。そいつは悪くない提案だ。是非ご相伴するぜ」
「決まりだね♪」
「――おい、ちょっと待て日本人共」
そんな会話を脇で聞いていたラウラは、思わず日本人コンビの正気を疑った。
悪魔（ダイオウイカ）に拠点を襲撃されている状況にも関わらず、そこで冷静に食事の算段を――しかも悪魔（ダイオウイカ）が食えるかどうかを議論している。その度胸にはある意味で驚嘆するが、確実に何かが致命的に間違っていると強く感じた。
「ぁん？　どうしたよ、ラウラ？」
「あぁ、そう言えばらっちゃんとくーちゃんは海外生まれだっけ？」
「なるほど。外人特有の〝生魚は食えない〟って奴か――」
「そうそう、そう言う事――」
「違う、そうじゃない！」
「――違う？　じゃあらっちゃんはお刺身食べられるんだね。偉い♪」
「だから、そうじゃないと言っている！」
ラウラは秋斗と束の明後日の方を向いた会話に頭を振りながら、有事の際に即対応出来るようにと訓練された元ドイツ軍人として直ぐに状況に対応するべきだと強く進言した。
「船体に致命的なダメージを負う前に悪魔の撃退。もしくはこの海域から急速に離脱するべきです！」
「そ、そうですよ束様！　あっくん様も、のんびり寿司とか言ってる場合じゃないです！　このままでは皆、死にます！　喰われます！」
ラウラに引き続いてクロエも必死に声を荒げた。
――が、束はそんな義理娘2人に困惑した表情を浮かべた。

「そんなに焦らなくても大丈夫だよ。寧ろもっと冷静になって深く観察しようぜ♪　すごいと思わない？　あれこそ人類が長年探した海のロマンそのものなんだよ？」
「何を言ってるんですか!?　博士！」
「何を言ってるんですか、束様？」
束はまるでカブトムシに憧れる小学生男子のような笑みを浮かべた。
その笑みを見たクロエとラウラの思考が思わず停止した。
確かに束が自ら設計したタバネサブマリンは、そん所そこらの先進国が開発した原子力潜水艦を遥かに凌ぐ破格の性能を保持している。
しかし根源的な恐怖ともいうべき原始的な恐れ――つまり外洋に潜む巨大生物に遭遇したラウラとクロエには、そんな束の言葉があまりにも悠長なモノとしか思えなかった。
すぐに逃げるべきだ――
特にそこそこの数のモンスターパニック映画を見てきたクロエには強く思えた。
「束様もご覧になったでしょう!?　この状況はどう見ても『ザ・グリード』で『ビースト巨大イカの大逆襲』です！　早く逃げましょう！」
「え～でもこんな機会もう二度と無いかも知れないよ？　逃がしたら絶対に勿体無いと思うけど本当にいいの？　離脱して？」
「いいんです！」
クロエの剣幕に束は不満げな顔を見せた。
――するとそこに秋斗が口を挟んだ。
「大丈夫だ、クロエ。その手のモンスターパニックで死ぬ奴は大抵決まってる。少なくともこの状況で俺達は死なねぇよ」
「あっくん様――」
クロエの頭を握るように撫でる秋斗は茶化すように言った。
「なぜ、そう言い切れる？」
ラウラが胡散臭そうに尋ねた。
秋斗は、「なぜってそりゃあ性格的に外道な奴は居ないし、お約束的な意味で言うと女の子なポジションは大抵助かるだろ？　それに全

員が処女で童貞だ。これだけ生き残る要素があって死亡する話はあまり聞いた事がねぇ――」と返した。
「――そう、なのか？」
その堂々とした口ぶりに、ラウラは思わず首をかしげた。
すると秋斗は苦笑を浮かべて「映画に限れば、な」と続けた。
「――クロエの言う様にこの状況が映画だとしたら多分大丈夫だ。ちなみにだが怪物を相手に軍人らしさをひけらかす奴はかなりヤバイぞ？　かなりの確率で死ぬ上に、生き残るとしてもかなりの大怪我をするのが常だ。どこぞの元州知事も宇宙人相手には死に掛けてたしな――」
「では、ラウラは属性的にやばいのでは？」
と、ラウラの脇で話を聞いたクロエは、ハッと気づいたようにその閉じた眼を見開いた。
「束様！　直ぐに離脱しましょう！　ラウラは軍人属性です。ヤバイです！　死にます！」
「大丈夫だよ、くーちゃん。落ち着きなって。映画の見すぎだよ――」
「でも――」
「大丈夫だから落ち着くの！　ね♪」
「――っ!?」
束は言い聞かせるようにして、不安がるクロエをその胸に抱きしめた。
その様子を見て秋斗は思わず、「――そうしてるとマジで親子みたいだな？」と感想を口にした。
「――みたいじゃなくて、束さんはくーちゃんとらっちゃんのママだよ！」
「へぇ、あぁそう」
束の照れくさそうな言葉に、秋斗は小さく苦笑した。
結局その後、クロエがあまりにダイオウイカを恐怖した為、その個体の捕獲も観察も全て断念する事が決まった。
――表向きには。
「――なぁ、博士」

「どうしたの、あっくん？」
「マルチフォームスーツって言う位だから、ＩＳって深海でも使えるのか？　だったらちょっと試したいことがあるんだけど――」
「なにするの？」
「実は――」
海の恐怖に疲弊するクロエとラウラを別室に移した後。
秋斗はこっそりとそう耳打ちするような口調で、束にある提案をした。

☆

「――おい、ちょっと待て。なんだその不穏な最後の会話は？」
「いい話かと思ったら最後のは何だ？　秋斗の奴は一体何をやらかしたんだ？」
「――それは私にも判らない」
「「え？」」
所変わってＩＳ学園。
ラウラから話の続きを聞いた一夏と箒は、その最後の最後で不穏な言葉を残したという秋斗の台詞に、薄ら寒いものを感じた。
周囲で話を盗み聞く面々も同じように、一体何があったんだろう――、とひそひそと言葉を交わし合う。
そんな騒ぎの渦中にあるラウラは、そこで小さく溜息を吐いてから首を横に振って言った。
「この一件については私自身もその後の顛末をよく知らないんだ。だから期待されても困る」
「なんで!?」
「ダイオウイカの一件をクロエがひどく怖がってしまってな。この話題は私達の間で一種のタブーになったんだ。だから詳しい事は、秋斗と束博士から聞いてくれ。と、いうかお前達の方がこの話を聞かされやすい立場にあると思うのだが、何も知らないのか？」
ふと、一夏と箒に対してラウラは逆に尋ね返した。

　すると一夏と箒は顔を見合わせた後、同時に首を横に振った。
「姉さんからは特には聞いていないな。と、いうか会話の殆どは姉さんが一方的に始めて、そのまま終わる事が多い」
「俺のほうも同じ。だけどこっちは何やってるか聞いても、アイツ（秋斗）は大抵、その瞬間の事しか言わないし――」
「そうなのか？」
「あぁ。いつだったかな？　電話で秋斗に今、何やってるのかを聞いたらさ。アイツ『ラスベガスのカジノに居る』とか、『フランスでモナリザ見てた』とか、『ちょっとサンフランシスコのカフェで、コーヒーとサンドイッチ食ってる』とかって答えるんだぜ？」
「――流石にそれは冗談が過ぎるだろう？」
「普通そう思うだろ？　だけど違うんだよ箒。アイツの言う事で意外に冗談って少ないんだ。だから多分、全部本当の事だと思う。――だから他の話題を振ろうにも、その瞬間の事が気になり過ぎて逆に話題が振れねぇんだよなぁ」
「それは――」
　一夏の呆れと溜息の混ざった言葉に、箒は思わず苦笑いを浮かべた。
「昔からどことなく姉さんに似ているとは思っていたが、とうとうそこまで――」
「――ふと、今思ったのだが双子とは見た目ほど似ていないモノだな」
「いや、たぶん俺ん家が特殊なんだと思う――」
　ラウラの素朴な疑問に一夏は苦笑で返した。
「――と、そろそろ昼休みも終わりだな」
　時計を確認し、ラウラは空となった食品トレイを持って席を立った。
　それにつられて一夏と箒が立ち、周囲の面々も釣られるように食堂を後にする。
　――と、そこで食堂にある大型のテレビモニターからある緊急速報が流れた。
『――緊急速報です！　アメリカマサチューセッツの海洋生物研究所

に全長約２３メートルを超す世界最大級のダイオウイカを記録した映像と、その〝触腕〟の一部が送り届けられました。この撮影に成功したのはＩＳの生みの親であり現在失踪中の〝篠ノ之束〟博士と、世界初の男性ＩＳ搭乗者〝織斑一夏〟君の双子の実弟で同様に失踪中の〝織斑秋斗〟君によるものとされ、また映像は織斑秋斗君が搭乗したＩＳを用いて撮影されたと、同研究所から正式に発表が成されました。尚、今回の発見により正式に第２の男性ＩＳ搭乗者が〝確定〟したものと思われます！』

それはふと、何気なく見つめたニュースであった。

しかし聞き流すには余りにも大きく身近なニュースであり、程なくして内容を理解した一夏は、顎が外れんばかりの驚愕を顔に貼り付けた。

――またそれは、箒も同様である

「なにやってんだ、あの馬鹿（秋斗）！」

☆

「――なぁ、博士。レポートってこんな感じで良いか？」

「うん、いいんじゃないかな？　どうせ正式に博士号は取れないんだし」

「まぁ、それもそうだな」

深海を行くタバネサブマリンの一室で、秋斗は『深海生物の生態記録調査』というレポートを書いていた。

とはいえそれはクオリティとしては低く、おおよそのアカデミックな教育を受けた者達に比べると、いささかに稚拙であった。

――しかしそれを補って余りある真新しい発見が、いくつも封入された代物であった。

それは後に、アメリカ、オーストラリア、日本を初めとする海洋大学に送られる予定であり、また同時に秋斗の有するブログ『オリムラ日記』にも更新される予定である。

その発表は贔屓目に見ても、中学時代の最後に残した汚点を洗い流

して有り余る波紋となるだろう。少なくとも千冬と一夏に対する汚点とはならないはず――と、秋斗は思っていた。

全長２３メートル級のダイオウイカを発見した日。

秋斗はクロエとラウラに内密で、束協力の元で箒専用機として開発中の試製第４世代ＩＳ――紅椿のテストパイロットとして、ＩＳによる深海探査という試験運用を行った。

展開装甲という環境に合わせて独自にＩＳスーツ本体が形状変化する第４世代機の試験運用としてもＩＳ研究としても、その深海調査は非常に有意義なものであった。

そして調査の際に秋斗が見つけた新種の深海生物は１００種類にも及んだ。

ＩＳの有する『ハイパーセンサー』は、その精度を高めれば海中を泳ぐ無数のプランクトンさえ認識する事が出来る。

そして見つけた総数９０種を超える深海生物の〝稚魚〟とも呼べるそれらを、秋斗はレポートとしてまとめた。

「――なぁ、博士。宇宙行く前に地球の方をもっと調べてみないか？」

「それは私も思った。海ってすごいよね。海底２００００マイルとか本当に行けるか試してみる？」

「面白そうだな。あと、深海って言葉で不意に思ったんだけどさ――」

「なに？」

「宇宙戦艦ヤマトってあるだろ？　第二次大戦で海中に腐るほど漂ってる船舶の残骸探して、それを母体にＩＳ専用母艦みたいな感じで宇宙用に改造したら面白いかなと。まぁ、墓荒しっぽいけど――」

「おぉ!?　ＩＳ母艦か！　なんかいいねそれ！　死人にくちなしって言うし、束さん的には全然問題ないよ！　寧ろ捨てっぱなしで誰も拾わないから、見つけた束さんの自由だもん！　いいかも、それ！」

未知への探索――

それこそが、ＩＳとしてもっとも純粋に求められる性能である。

ある意味でそれを率先して証明してのける今回の深海調査は、秋斗と束の心にまた別の夢とロマンを与えた。

ある日の兄弟

「――例えばそうだな。試しにそこで〝ジャンプ〟してみろ」
『――は？』
「いいから。ジャンプしろ、ジャンプ」
『わ、わかった。そう急くなって――』
日本時間の午後８時。
秋斗はその日も兄の一夏から電話を受けとった。
しかしその日は何時もの〝ＩＳ学園に来い〟という類の説得とは少々違う内容であった。
曰く、クラス代表の座を賭け一週間後にＩＳでの試合を行う事になったという。
そして対戦相手はラウラとイギリスの代表候補生で、このままでは確実に一夏一人が恥をかく事になるのは明白。故にせめて試合までに少しでもＩＳの知識が欲しい――と尋ねてきたのだ。
電話を受け取った秋斗はふと『ＩＳの事を聞く人選がなぜ俺なのか？』、『なぜ真っ先に教員である姉千冬に聞かないのか？』と一夏に対して疑問を抱いたが、続く一言により、その点についてはあまり言及しないでおく事にした。
――なぜか？
唯一の男でオリムラという姓を持ち、女の花園であるＩＳ学園に属すという状況であまり目立つ真似をしたくない。更に言うと学校と教室に常に身内が教師として在籍する『毎日が授業参観』に近い状況で、積極的に家族に顔を合わせたいか？　と逆に問われたからだ。
流石にそうまで言われては秋斗も察しが悪い方では無いので、仕方なくその想いを汲み一夏の提案に付き合う事にしたのだ。
『――で、コレに何の意味があるんだ？』
電話の向こうでトンッという音がした。
秋斗の指示を実行した音であった。
それを確認した秋斗はそこでようやく口を開く――
「――今、一夏はジャンプしたわけだが何で身体が地面に向かって落

ちたか判るか？」
『下に落ちた理由？　そんなの重力があるからに決まってるだろ？』
「そう。つまり重力だ。この地球上の物体は全て重力の影響を受けている。そして重力ってのは下に向かって引っ張る力の事で、もしもその下に引っ張る力を意図的に制御できるとしたらどうなると思う？　例えば下に引っ張る力を限りなく相殺するようにカウンターの力を働かせる事が出来るとしたら？」
『え～っと――』
秋斗の問いに一夏は電話越しで少し唸った。
『――下に引っ張られないって事だから、飛び上がったまま？』
「ま、ある意味ではそれで正解だ。もっと掘り下げて言えば、何かにぶつかるまで一夏の身体は飛び上がり続けるだろうな。まぁ、それはいい――で、そこまで言えば判ると思うが、重力の影響を打ち消すと必然的に無重力状態に近い事が身に起こる。ＰＩＣの仕事はそうした擬似的な形で無重力状態を作り、それを自分に対してのみ作用させる機能だと解釈しておけばいいさ」
『へぇ――』
と秋斗はそこで一度言葉を切った。
そして冷蔵庫から取り出した缶コーヒーのプルタブを片手で開けながら、「ちなみに慣性ってのは力の加わった後に影響を受ける方向とそれ自体の大きさの事。ＰＩＣって言葉は確か、〝受動式慣性除去〟っていう意味だったと思う――」と説明を付け加えた。
『――とりあえずＩＳって凄いんだな。なんか、それだけは良く判ったぜ……』
一夏は電話越しで冷や汗をかくように言葉を返した。
小学生並みの感想と言ってしまえばそこまでだが、しかし秋斗はこの瞬間にふと思った。
「一夏がどのくらい凄いと思ったかは知らないけど、多分ＩＳは俺が思うに、一夏が感じたその数百万倍は凄いと思うぞ？　実際の所、お前まだいまいちよく判ってねぇだろ？」
『――へ？』

「あのな？　３６０度のあらゆる方向から作用する慣性を全て制御するっていう複雑な演算を、一瞬で、連続で、並行して、しかもリアルタイムで行うんだぞ？　更にイメージだけでより高度に制御できるんだ。ついでに言うとこれだけ凄まじいＰＩＣも実際はＩＳを構成する要素の一つでしかない。ＩＳには他にも絶対防御やらハイパーセンサーやら自動修復やらＩＳコアやら量子格納やらっていう、その一つだけでもノーベル化学賞が取れるレベルの技術が搭載されてるんだ。それが全部が詰まってようやく一つのＩＳなんだ。それがどれだけ凄くておっかない事か判るか？」

『――なんかもう、それだけで色々と挫けそうなんだけど』

「ところがどっこい。お前さんはこの先、否応無しにＩＳに関わって生きていく事になる。ご愁傷様だ」

『はぁ!?　なんで――』

一夏は声を荒げた。

そんな反応に秋斗は溜息で返し、呆れを込めた口調で言った。

「失踪中の俺とは違って、現状で世界唯一の男性ＩＳ操縦者だからだよ。それ以外にないだろう？　――っていうか、今の説明でどれだけＩＳが凄いのか理解出来たか？　出来たなら気づくだろ？　それを世界で唯一操れる男の価値に？」

『……マジか』

この時になって一夏はようやく己のやらかした事態の深刻さを思い知った様子であった。

初めは――それこそＩＳに触れた際は、まさに秋斗の指摘する通り『珍しい』や『幸運』という軽い気持ちがそこにあったのだろう。

しかし、好奇心は猫を殺す――という言葉の通り、一夏は問答無用でＩＳ学園に放り込まれる程の処置を施さねば、今後死にかねない立場の人間になってしまった。その実感がこの瞬間まで薄かったのだ。

秋斗の指摘は、端的にそこを突いていた。

「――やらかした事の大きさを少しでも理解できたか？」

『いや。だけどさ――』

「俺が思うに、一夏は道端で拾ったキノコが正しく食用か毒かも判ら

ずに、とりあえずその場で喰ったみたいに近い事をやらかしてる――いやそれより危険で馬鹿な事をやったと思うぜ？　まぁ幸いにしてＩＳと言うキノコを食っても五体満足で無事だったから良かったけど――でも少しでも運が悪かったら、その身に何が起こってたか想像できるか？　最初に一夏を見つけたのが良識のある人間で、偶然試験会場がＩＳ学園で貸しきった場所で、もしも姉貴が学園に所属していなかったら。――それどころかＩＳに関して超ド素人だったら？」

『――――っ』

秋斗の淡々と吐き出す言葉に、一夏は言いかけた言葉を止めて絶句した。

「――その反応を見るにようやく怖くなったって所か。それとも姉貴やラウラに警告された言葉に実感でも湧いたか？」

『……俺は』

秋斗の茶化すような問いに一夏は、電話越しで絶句した。

ＩＳ学園に入学して直ぐに、一夏は千冬やラウラから今後の危険を聞かされた。その全てがまるで与太話ではないという風に今になって気づいたのだ。

特に現在。一夏の脳裏を掠めるのはＩＳ学園で知り合ったラウラの言葉である。

ラウラはその出自から、研究者にモルモット扱いされるという意味についてよく知っていた。しかも被験者として主観的に説明できる経験者だ。

そして知り合った当初に、一夏はラウラからその話の幾つかを聞かされていた。

――裏で束と秋斗がそうするように頼んでいたからだ。

その話をラウラから聞かされた一夏は当時。ラウラの話にまるで現実味を感じていなかった。

同情は出来ても、どこか違う世界の物語に聞えた所為だ。

しかしこの瞬間からは別で、少し間違えば一夏自身も容易くそれに近い事になっていたと察したのだ。

故に一夏は言葉を失ったのだ。

そして、絶句という一夏（兄）の反応を見た秋斗は、その反応があまりにも遅いと小さく苦笑を零していた。

しかし同時に、少なくとも理解したのであればマシだと状況を前向きに考えてもいた。

少なくとも一夏は原作よりも強い危機意識を持った。それだけで十分、ある種の未来（原作）を知る身の上としても家族としても安心できるからだ。

「――まぁ、アレだな。何も知らない一夏の為に姉貴がわざわざ即フォローが出来る副担任の位置に就いたんだ。それにこっちからもラウラを派遣した。意外に今回のクラス代表を決闘で決めるっていう話も、そう悲観する必要は無いんじゃねーの？　逆に考えると一足先にＩＳが学べるって事だし――」

秋斗は絶句する一夏をフォローする様にやや明るく口を開いた。

『――それはどういう意味だよ？』

「姉貴も今、俺が説明したみたいにＩＳの恐ろしいまでの凄さって奴を実地で教えたかったんじゃねーの？　照れくさがって絶対に言いやしないけど、そのくらい贔屓はしてのけるさ」

『だから何で――』

「だって〝ちーちゃん〟は〝いっくん〟の事が大好きだからな。それ以外にねーだろ？」

『っ!?』

電話の奥で一夏が赤面するのを察した秋斗は言葉を続けた。

「ま、そんな姉貴だから一夏に優先してＩＳを学ばせるくらいの事は考えるさ。それに仮にも二度も世界を取ったＩＳ競技者。身内以前に専門家としても判断したんだろう。素人に手っ取り早く危険を教えるっていう意味ではある種、理に適ってるとは思うぜ。ま、あえて痛みを伴うやり方でってのは聊か原始的だと思うが――」

押し黙る一夏に秋斗は諭すように言った。

「まァ要するにだ。折角だから盛大に恥をかいて来たらどう？　やらかした悪戯の罰だと思ってさ。あ、ちなみに勝つ為の努力を放棄しろって意味じゃないからな？　その辺間違えるなよ？」

『判った。……なんかごめんな、秋斗』
「――なにが？」
突然の謝罪に秋斗は思わず首をかしげた。
『いや、その上手く言えないけど、なんて言うか――』
「よく判ってないのに謝られても困るぜ。それより、明日にでも学校の訓練機借りてそれに乗ってこいよ。ＩＳ勉強したいならそれが一番早いぜ？　コレ経験談な？」
秋斗が空気を換えるように言うと、一夏も電話の奥で笑った。
『――そういえば秋斗もＩＳに乗れたんだっけ？　ニュースで見たぜ。って言うか、なんだよダイオウイカって？　何やってんだよ、お前――』
「いやぁ、すげぇ発見だろ？　俺もアレに遭遇した時、マジでビビッた。いや本当にマジでデカイんだよ。――ちなみに触腕の一本でも採取して御土産に一夏に贈ってやろうとか考えたんだけどさ。博士が言うにはアンモニア臭くて食材としては使えないだろうってさ。ニュース見て期待してたのなら、すまん！」
『馬鹿！　食うか、そんなモン！　見つけても絶対に持って帰ってくるんじゃねぇ！』
「――それはフリか？」
『んな、訳あるか！』
「はいはい冗談だ。――で、少しは元気でたか？」
『っ!?　お前（秋斗）――』
カラカラと笑う秋斗とは対照的に一夏は声を荒げる。
普段通りのやり取りがそこにはあり、そこで遂に一夏の調子は戻った。
「まぁ、それは兎も角。さっさとＩＳ乗って感覚を知ってこい。一夏の質問は自転車の乗り方を口で説明してくれって言ってるようなもんだ。小難しい理屈を聞く前に、とりあえず乗って〝怪我〟してこいよ。寧ろその方がお前の性に合ってるんじゃねーの？」
『いや訓練機の貸し出し許可ってさ。直ぐに降りないんだって。今から申請しても最短で一週間後らしい――』

「――じゃあ諦めて教科書読んで頑張れよ。間違えて捨ててないならな」

と、秋斗は原作一夏がやらかした最初の失敗を思い出した。

原作一夏は確か、古い電話帳かなにかと間違えて参考書を捨てたのだ。

今生の織斑一夏がどうだったのかを確かめるように秋斗がそう示唆すると、一夏は電話口で苦笑混じりに言った。

『流石に教科書なんて捨てるかよ』

「――本当に？」

『あ～実は中学時代の教科書仕分けする時に、危うく一度やりかけた。けど流石に直前で気づいたから、ちゃんと手元にあるぞ』

「そうかい、なら良かった。もし捨ててたら姉貴の事だ。一週間で覚えろとか無茶苦茶言うだろうよ」

『確かに――。あぁ、それはそうとさ。秋斗？』

「ぁん？」

一夏は佇まいを治すように口調を真面目なモノに変えた。

それに対して秋斗はふと首をかしげたが――

『頼む、コレを機にお前もＩＳ学園に――』

と一夏が言いかけた所で秋斗は徐に通話を切った。

「――すまんな、一夏。手が滑った」

案の定。この日も挨拶のように繰り出された一夏の『ＩＳ学園に来てくれ』の定型文に、秋斗は苦笑を漏らした。

天災の予感

「――なぁ、博士よ。これってさ」
「うん、原子力潜水艦だよね。間違いなく――」
その日。タバネサブマリンのクルーはとある６０００ｍ付近の海底で、一隻の原子力潜水艦の残骸を発見した。
それ自体に問題はないのだが、問題は海流に押し流されて海を漂っていたその残骸が、放射能を纏っている事にあった。
放射性物質に対して束が無駄に高い耐性を付与したタバネサブマリンだから良かったものの、その性能が無ければ最悪クルー全員が被曝するのもありえた。
そう考えると秋斗を含めた全員の背中に冷や汗が垂れる思いである。
この発見に際し一同は、一先ずコレに対してどう対応するかを議論した。
「――ダイオウイカよりよっぽど怖いんだけど」
「だよねぇ。で、どうしようか。コレ？」
束はモニターに映る残骸を指差し、秋斗とクロエを振り返った。
回収するにしても放射能塗れな残骸など誰も欲しいとは思わない。流石の束でもだ。
「――放っておくしかないのでは？　それ以外に何か出来ますか？」
クロエが真っ先に言った。
「束様なら汚染を除去する方法も作れるかもしれませんが、そこまでして回収する様なモノでも無いでしょう？」
「でも放っておくにしても、コレがこのままずっと海を漂ってるってのは、流石に気分悪いぜ？　今後、気分良く魚食えるか？」
「……まぁ、それは確かに」
秋斗の返した意見にクロエは思わず頷いた。そして束の方を振り返った。
「ん～汚染の除去なら何とかなるけど……やる？」
すると束は少し悩むように顎に手を当ててから、珍しく乗り気でな

い提案をするように秋斗の方を向いた。
海底に漂う放射性物質に対しては、それを食べるようにプログラムしたナノマシンを散布する等して汚染を除去する装置自体は作れるかもしれない。
しかし最終的にもっとも大きな汚染物質である原潜本体の残骸の片付けは秋斗による手作業だ。
深海で放射能洗浄――これ程に危険な仕事は他にないと束は言う。
それに対して秋斗は小さく溜息を吐いた。
「――ISを使ったら何とかなるか？」
「まぁ、なんとかなるね。宇宙空間を想定して放射能云々についての対策は真っ先にしてあるし。だけど――」
「どうした？」
「別に～。ただ凡人の尻拭いみたいであんまり気分が乗らないな～って」
束は心なしかアンニュイな表情を浮かべて言った。
「ISの性能を使って掃除するのは良いよ。だけどこんなまともに扱えもしない代物（原子力）を使って調子に乗ってる連中には流石にイラっとする……」
束が心なしか不機嫌に見えたのには理由があった。
ISの性能を使って困難を実現するのは構わない。
しかしその困難が、他でもない束の嫌う凡人の汚した後片付けという状況が気に入らないのだ。
「――いつだったか、アルフレッド・ノーベルにはなりたくないって言ったけどさ。実際、束さんもそうなりそうな気がするよ。たぶんISを広めても、結局それを使うのはああいう馬鹿なんだもん」
「束様――」
束はモニターの奥に写る原子力潜水艦の残骸を顎で指した。
掃除も回収もまともに出来ないから放逐する――
一応大丈夫だからと放逐する――
束も割りと好き勝手に振舞う方だがそれでも自分で管理が出来ないレベルの代物を平然と使い、それを投げ捨てるような行いはしな

い。
　少なくとも束は、科学に対しては真摯であった。
　故に、目の前の残骸を見て、束は珍しく気分を害していた。
「――他人にあれこれと好き勝手に在り方を決められたく無いなら、それこそ博士が率先して使い方を示してくしかねぇよ」
「ふぇ？」
　とそこへ秋斗が口を挟んだ。
　秋斗は首をかしげる束に対して、あっけらかんと言った。
「他人を思い通りに動かすより、自分なりに考えて動く方が早い――違うか？」
「まぁ、そうだね。だけど――」
「なら、答えは簡単――思うままに動け、だ。俺達がいつもやってる事だろうが」
「っ!?」
　秋斗のきっぱりとした言葉に束は思わず虚を突かれたという様子を浮かべた。
　自ら証明する。その原動力こそＩＳを生んだのだ。
　ならばそこから先も同じである。
　ＩＳに賭ける何らかの想いがあるのなら、それを率先して自ら証明するのが正しい――
　秋斗は暗に、そう束に指摘した。
「いっその事、『サルでも判るＩＳの正しい使い方』っていう本でも書いてみたらどう？　で、ＩＳ学園の教科書として配布する、みたいな――」
「なにそれ――」
　カラカラと笑う秋斗の笑みに釣られて束は笑った。
　クロエもそれに釣られて笑いながら、「それならＩＳ学園の講師に就任して、束様の望むように生徒達を洗脳してみてはいかがでしょう？」と提案した。
「――面白い提案だけど、流石に洗脳って言い方は止めようぜ、クロエよ」

「ですが教育なんてそんなモノなのでは？」
「まぁ――確かに？」
クロエの過激な意見に秋斗は思わずそうツッコミを入れるが、歴史教育などを思い出すとあながち間違いでも無いかと思ってしまう。
そんなクロエと秋斗の脇で、束はふと考え込むように腕を組んだ。
「ねぇ、あっくん」
「ぁん？」
「くーちゃんの言う通り、ＩＳ学園で先生やるってのも意外に悪くないかもね」
「……え？」
秋斗は束の口から漏れた予想外の提案に思わず固まった。

☆

ＩＳ学園の職員室。
各クラスの教員達がこの日の授業の準備を始める中で、千冬は一人、疲れた顔でコーヒーを煎れて朝刊を手に休息を取っていた。
本来の千冬の立場は技術指導教官で、元々は各クラスのＩＳに関する実技を取り仕切る側の人間だ。
故に朝からＨＲ等の対応を要求される他の教職員とは違い、多少は時間にゆとりがある方である。
しかし最近は学園教職員の中でもっとも多忙な立場だと自他共に認識されるようになった。
なぜか？
それもこれも全ては弟一夏がＩＳを動かした事でＩＳ学園に強制編入した事と、もう一人の弟にして現在世界から失踪中の弟秋斗が世界最大級のダイオウイカを発見すると同時に束の元で第二の男性ＩＳ操縦者と化した事実が明らかになったからだ。
加えて一学年の副担任という立場から、今後学園に訪れる編入生の対応にも追われている。
「ったく――」

千冬は無愛想な顔の裏で、弟2人の今後の将来を案じて深い溜息を吐く。

本気の心配がそこにはあった。

――が、しかしそんな心配を余所に一夏はＩＳ学園で顔を合わせて早々危機感の薄い顔で「げぇ、関羽」というあまりにあまりな普段通りのリアクションを返し、秋斗は相変わらずな好き勝手に更に拍車をかけて、連絡の一つも寄越さずに自由気ままに〝天災〟と行動を共にしている為、ひどく内心ではイラついていた。

振り回されるのはいつも私だ――

と千冬は思わず自前の握力で陶器のコーヒーカップを握りつぶしそうになった。

「――あの、織斑先生？」

「更識か。どうした？」

と、そこへ一人の少女が千冬を尋ねてきた。

ＩＳ学園2年に属す更識楯無であった。

彼女は生徒会長としてＩＳ学園を取り仕切る立場にあり、故に顔には千冬と同じ強い疲労を浮かべていた。

それはとても17歳の少女の顔では無く、言うなれば42歳でリストラにあった世の男性に近いだろう。

そんな楯無は何時もの快活な雰囲気も、常に纏う妙な胡散臭さも消して、ただ言い辛そうに沈痛な面持ちで千冬に要件を告げた。

「先日の続きです。織斑秋斗君について詳しく話を聞きたいと委員会が――」

「その件はもう捨て置けと返事をしておけ」

「出来るならやってます」

「――っ」

楯無の言葉に間髪入れずにそう答える千冬だったが、楯無は余命を告げる医師のような面持ちで首を横に振った。

それを見て千冬は思わず舌打ちをした。

最近はこの手の話題ばかりだった。織斑秋斗に関する情報請求と、それに付随して発生する各種問題への対応。

それに千冬と楯無は追われていた。
秋斗がダイオウイカを発見したと同時に明るみになった第二の男性ＩＳ操縦者としての資格。そして天災篠ノ之束に最も近い存在である事実。加えて秋斗の存在が明るみになるにつれて明らかになる第二回モンドグロッソの裏の真実――
大衆には多くを秘匿されて報じられた日本政府最大の失態とも揶揄される『テロ事件』の全容が、今更になって織斑秋斗の名前と共に掘り起こされるのだ。
千冬は身内として、楯無は更識という日本政府が有する対暗部用暗部という家柄として――
それぞれが織斑秋斗という存在に大きく振り回された。
それがこの数日である。
――逆に考えるとそうした秋斗の天災ぶりがある所為で、もう一人の弟一夏の方で掛かる心労が程よい気分転換になったのは、ある意味で皮肉だと言えよう。もしも束のところから派遣された元千冬の教え子であるラウラの存在がなければ、恐らく2人のうちどちらかは過労で倒れていた。
と、そんな風に千冬は思った。
「織斑先生――」
「わかった。わかった。対応すればいいんだろう。ったく――」
千冬はまだ煎れたばかりの熱いコーヒーをグイッと飲み干し、ダンッと机を叩いて席を立った。
委員会を初め、学園に話を聞きにくる各国の内心は透けて見えた。
織斑秋斗は現状、天災篠ノ之束の足跡を辿る唯一の痕跡なのだ。
そして織斑一夏とは違い現在失踪中という身の上。その為に何処もかしこもが、その最終的な帰属先を自国にしようと目論んでいるのだ。
確かに千冬から見ても、織斑秋斗が取れればそれに付随して何らかの形で篠ノ之束にも干渉できよう。故に秋斗が今後、ＩＳ学園に属する事になれば、あらゆる障害を踏破してでも積極的に関わりを持ちたいと考えるのは普通である。

そしてＩＳ学園で織斑秋斗を受け入れる用意があると、その意思の確認だけでもしておきたい。というのが現在、対話を要求してくる者達の思惑であると千冬は推測できた。

――しかし千冬は思った。

「あいつら（秋斗と束）が凡夫の思惑通りに動くモノか。その辺を理解していない馬鹿が多すぎる――」

千冬が吐息と共に内心をはき捨てた。

いつだって奴らは人の想像の斜め上を飛ぶのだ。御せるならそれこそ、とっくの昔に千冬自身が己の手で2人を御していると、千冬は思った。

その瞬間、千冬の持つ携帯から着信のベルが鳴った。

反射的に電話を取って宛名を確認した千冬は、そこに『束さん♪』という表記があるのを見た。

「――――」

「お、織斑先生？　あの――」

千冬の纏う雰囲気が変わるのを楯無は間近で目にした。

楯無が恐る恐る千冬に声をかけると同時。千冬の手の中で携帯が音を立てて軋んだ。

「もしもし――」

『あ、ちーちゃん？　やぁやぁやぁ。久しぶりだね。元気にしてた♪』

「あぁ。おかげさまでな。思わず縊り殺してやりたいほど気分が高揚している」

『それはよかった。とりあえずビールでも飲んでリラックスしなよ』

「相変わらず面白い事を言う奴だな」

『そうかな？　じゃあもっと面白い事を提案するよ』

漏れ出した殺気に青ざめる楯無を尻目に、千冬は能天気に電話を寄越してきた束に応答した。

その時点で千冬は予感にも似た寒気を感じた。

そして案の定――

千冬も最初こそ落ち着いた様子で会話を続けていたが、程なくして声を荒げた。また同時に卒倒しかけた。

「――ふざけるな馬鹿モン！　一体、何を考えてるんだ貴様は！」
『何ってそんなのＩＳの未来に決まってるじゃないか。その点だけは昔から真摯だよ私は。でね、ちーちゃん。束さんもそろそろ表舞台に立つ日が来たのかなって。あっくんも他人に期待するより自分で動いた方が早いって言ってくれたしね。まさにその通りだと――』
「～～っ!?」
職員室にある全ての視線が向かうほど声を荒げた千冬は、そこで絶句した
「――あの、織斑先生。一体何が」
それまで一歩引いた立場で様子を静観していた楯無だったが、好奇心を抑えきれずに遂に尋ねた。
すると千冬はチラリと楯無の顔を見た。
そして机の上にあった付箋にサラサラと情報を書き、楯無に渡した。
――束と秋斗が放逐された原潜の残骸を海底で発見。現在ＩＳを用いて汚染に対応中――
「っ?!」
情報を扱うその道のプロであった事が幸いして、楯無は驚愕を外に漏らす事はなかった。
が、同時に思った。
こんな情報を渡されてどうしろというのか？
更識刀奈改め更識楯無は強く困惑した。
すると千冬は一端電話を脇に置いて、小声で手短に言った。
「――以上を含めて今後はアイツ自らが、ＩＳの在り方を率先して実践するそうだ。加えてＩＳ学園でその活動を後押しろとな。何を思ったかは知らんが……まぁ、要するに、奴はウチで働きたいそうだ。まぁ、元々この〝人工島〟は奴の為に作られた場所だからな。ある意味では里帰りとも言うべきか――」
「っ!?」
篠ノ之束（天災）がＩＳ学園（ＩＳ研究島）に舞い戻る――
その言葉を受けた楯無も、余りの問題の大きさに千冬と同じで卒倒

しそうになった。
そしてこれほどの大事件の渦中で生徒会長をやる事になった自身の不運に対し、楯無は『厄払いしよう』と強く思った。
――しかしこの時、重要な事実がもうひとつ存在した事を2人は知らなかった。
実は放逐された原子力潜水艦の残骸から計３４基の核弾頭が発見されたのだ。
そして束達により秘密裏に回収されていた事を――
つまり束を受け入れるという事はそのままＩＳ学園が〝核武装〟するに等しいという事実を、この時の2人は幸か不幸か知らなかったのだ。
そしてこの後。
束が学園の特別顧問兼講師に就任する事を知った各国は、その目論見に悉く挫折して天災の天災たる片鱗を目の当たりにする事になる。
そして人の手に負えないからこそ天災なのだ――と世界は再び天災を思い出す事になった。

ロケットダイヴ

ＩＳ学園の立地は日本国に存在する。しかし立場的には学園自体は一種の独立自治領域に近く、その為その周囲にある海の一部は、日本国の領海であって領海でないというある種の矛盾をはらんでいる。

つまりＩＳ学園の周辺にある海も『例外なく各国の干渉を受けつけない』というＩＳ学園の土地であり、当然その領海の侵犯を行えば直ぐにＩＳ学園側の警報が鳴り、ＩＳという過剰な防衛戦力によって拿捕される事になるのだ。

そして近年はその学園生徒会長が〝更識楯無〟というその道のプロである事もあいまり、領海、領空の侵犯者への対応は非常に苛烈なモノになったと強く認識された。

――――しかし唯一、例外があった。

無論、天災篠ノ之束である。

理由は実に単純で、そもそもからしてＩＳ学園自体が束の古巣と呼べる場所であるのとその警備システムを初めとする防衛技術の根幹を作ったのが束に他ならないからである。

そして自分で作ったモノに負けるほど束は愚鈍ではなく、また同時に常に進化を遂げている。

故に、この日――ＩＳ学園の海域に一隻の潜水艦がその船体をゆっくりと海上に顕にしたが、学園側はその接近に関してまるで気づく事はなかった。

海上に姿を見せたそれは、人参を模したオレンジ色という迷彩という意識を遠く彼方に投げ捨てたに近い高い彩度でコーティングされていた。

通称――タバネサブマリン。

その上部ハッチが開き、中から3人の男女が姿を見せた。現在世界から逃亡中の自由人――束、秋斗、クロエの3人だ。

「――っと、天候、風速、湿度はオールクリアだね。それじゃ、はじめようか」

束は眼前のＩＳ学園に視線を向けると、投影させたタッチスクリー

ンで操作を開始した。
　するとガコンッと船体が揺れ、海面に顔をのぞかせた潜水艦の上部が大きく開かれた。
「ＩＳ学園側から見たらこれほど恐ろしい光景はないだろうな」
　潜水艦内部に格納された巨大な〝人参型のロケット〟が、開放された上部ハッチから徐々に顔をのぞかせる様を見て、秋斗は思わず苦笑いを浮かべる。
「そうかな？」
「いや、誰がどう見たって弾道ミサイルの発射シークエンスじゃん？　流石にコレを見て平然とできる人間はいないと思うが？」
　秋斗の言葉に束は首を傾げてみせた。
　しかしこの場合は確実に秋斗の方が正しい認識であるのは言うまでも無い。
　界隈の専門家が見れば、誰がどう見ても弾道ミサイルの発射シークエンスそのもの。そしてこれから打ち上がるモノが『ミサイルであってミサイルではない』と知るのは、束達の他には誰も居ないのだ。
　加えて打ち上げに使う技術も性能も、現存するあらゆるミサイル技術よりも遥かに上――。
（――とりあえず判るのは、確実に後で姉貴がキレるって事だな。ご愁傷様）
　秋斗はそんな風に心の中で束に向い、合掌した。
　人参ロケットの発射機構は旧来のミサイルのような燃料点火方式ではなく、電磁力を駆使したリニアレールの推進システムを応用したモノで、更にはＰＩＣの技術もふんだんに使われている。打ち上げ後は一度成層圏にまで上がった後、搭乗者による監視衛星を駆使した着弾地点の設定が行われ、自由落下に近い形で目標地点に対しほぼ垂直に降りるという軌跡を描く。しかも着陸地点の算出は打ち上げ後の宇宙空間で調整することが可能且つ、ＰＩＣ制御によって落下中にもリアルタイムで着陸地点の変更が可能なのだ。更に付け加えると落下速度でさえも変更可能で、しかも今回はクロエの操る〝白騎士〟がその直衛に着いている。

もしもこの瞬間の事を学園の側で正確に観測している者が存在するとしたら、その人物は間違いなく泡を吹いて倒れる事請け合いである。

「――束様。こちらは準備完了です。いつでもいけます」

「ＯＫ、クーちゃん♪」

秋斗と束の２人から少し離れた位置に立ったクロエは、そこで専用機である〝白騎士〟を展開した。

クロエが出発準備を完了した後、束は離陸を待つ人参ロケットに単身で乗り込み「それじゃ、あっくん！　留守番よろしくね♪」と笑顔で手を振った。

その様子に秋斗も軽く手を上げて応えた。

「おぅ、いってらっしゃい。――あ、ハンカチ持ったか？」

「持った！」

「ちり紙は？」

「持った！」

「財布は？」

「持った！」

「〝紅椿（ＩＳ）〟は？」

「持った！」

「常識は？」

「持った！」

「ダウトだ。博士」

「ふはは！　バレたか！」

元気良く答えて束はカラカラと笑った。いろんな意味で今日は記念すべき日となる所為か、束のテンションはいつもより高かった。

そこで秋斗はクロエの方に目配せし束をよろしくという意味で目礼した。秋斗はクロエが答礼したのを確認し、その場から一歩下がった。

「――それじゃ今度こそいってらっしゃいだ。姉貴と一夏によろしく。クロエも頼むな？」

「お任せください、あっくん様」

「じゃあ、あっくん。準備よろしく！」
「はいはい」
クロエは人参型ロケットと白騎士のフレームをアンカーで繋いでポジションを固定し、発進の衝撃に備えた。
秋斗は潜水艦の内部に引っ込み中枢ブリッジへ向うと、予め用意しておいたプログラムを起動し、船外スピーカーから〝一曲の洋楽（エアロスミス）〟を流して雰囲気を作った。
それは禿げた海底油田採掘業者が巨大隕石に穴を開けに行く映画のテーマソングで、曲がサビになる直前で束は人参型ロケットの最終セーフティーを解除した。
「――待ちに待った時が来たのだ！　多くの凡人が持ち腐れにしたＩＳの性能を正す為に！　再びＩＳを研究する為に！　学園よ！　私は帰ってきたぁ！」
ドンアイノークロズマイアーイ――
空気を切り裂く衝撃と爆音を引き連れて、束を乗せた人参ロケットと白騎士が宇宙にへと打ち上がった。
同時に潜水艦の制御は自動的に自立コンピューターの《吾輩は猫である（名前はまだ無い）》に切り替わり、秋斗には艦長代理として潜水艦内の最高権限が譲渡された。――もっとも乗組員が秋斗の他に居ない為、別にする事が増えるわけではない。
「――博士の奴、ポケットに核とか入れてないだろうな？」
束とクロエが出発後。秋斗は発進のカウント代わりに束が放った言葉にふと寒気を覚えた。しかし真面目に考えたところでもはやどうにもならないので、秋斗はそれについてはそこで考える事を止めた。

タバネサブマリンにある小さな給湯室。
秋斗はそこの空気清浄機と換気扇の前で紙巻を吹かしながら、ふと思った。
それまで洋上に浮かぶタバネサブマリンから陸に上がる際の方法は二つしかなく、陸に上がるには小型潜水艇（ＳＤＶ）による隠密潜航からの上

陸か、ＩＳを使っての強襲のどちらかに頼ってきた。
その手段は確かに不便ではあったが、そこまで無理に改善を必要とする問題でもなかった。しかし束は第三の移動手段として〝あの〟人参型ロケットを造った。
秋斗はふとその理由について考えた時、脳裏に以前束が移動中にやらかした〝ある〟事件の記憶が思い起こされるのを感じた。
二度と悲劇を起こさない為に――
そう考えるとロケットの開発を急ぎ、その性能を束らしい荒唐無稽なモノにしたのにも納得が行く話であった。
そしてそれ故に秋斗は顔に苦笑を浮かべた。
「もしかして博士はまだ〝あの〟事を気にしてるか？　もういい加減、忘れりゃいいのに――」
人参型のロケットを作り出し、それに乗ってＩＳ学園に向った束とクロエの目的をざっくばらんに説明すると仕事の為だ。紆余曲折あって束は半ば強引にＩＳ学園の特別講師就任を認めさせた。そして今日がまさにそのＩＳ学園での特別講師就任日。それに合わせて密かに作っていた第三の移動手段である人参ロケットを解禁させた――というのが、今朝の〝アレ〟。
千冬の言い方を借りるならば、それは史上類を見ない程の馬鹿な行いで、秋斗もその謗りだけは流石に擁護できないと思った。
しかし世界に轟くその天災性を遺憾なく発揮したＩＳを、唯一作り出せる天才が、全力でそのどこか常識から外れた頭脳を駆使して件の事件の再発防止対策を練った結果がアレなのだと思うと、秋斗の顔にはなんとも言えない笑いが浮かんだ。
秋斗は給湯室でお湯を沸かしながら、人参ロケット誕生のきっかけとなった事件を思い返した。

☆

その日。秋斗と束はネオン輝くマカオの歓楽街を歩いていた。
その頃はまだラウラが仲間になったばかりの頃だった。故にラウ

ラとクロエはまだ互いに親睦を深め合う時間が欲しいだろうと気を利かせた秋斗と束は、宿泊先のホテルに2人を残してひっそりと観光を楽しんでいた。

アジア人の顔立ちの幼さがこの国では余り問題にならず、身分証さえ偽造していればカジノでも遊べる。そして秋斗と束の手元には、亡国機業に対する〝いつもの嫌がらせ〟で迷惑料として頂戴した資金が腐るほど存在した。

2人はマカオらしい賭け事でそれらを盛大に発散して遊んだ。

あぶく銭で行う賭け事は勝ちも負けもそれなり以上に楽しめたからだ。

――そんな風に夜もふけた頃に事件は起こった。

「――ぁん？　どうした博士？」

「ん？　いや、なんでもないよ。気にしないで――」

「そうか」

その時、束に感じたある違和感を悟っていれば、後の事件も起こらなかったと秋斗は思う。

しかしその当時は気づかなかった。

2人は宿泊先のホテルからタクシーでしばらく移動した先にあるカジノで遊んでいた為、その帰宅も当然タクシーを使う事になった。

マカオの移動は徒歩かタクシーかバスが一般的だが、需要に対して供給が追いつかず、非常に混んでいた。

そしてようやく捕まえて乗れたタクシーで宿泊ホテルに向う途中で、悲劇は起こった。

「――事故ったか？」

通りの先で事故が発生しその結果渋滞が発生していた。

秋斗は懐中時計（レディ）のハイパーセンサーを駆使して視線の先にある事故現場周辺を確認した。幸いにして車列全体が止まるほどではなくゆっくりとだが流れていた事、そして多少料金は掛かろうがその金自体も亡国機業から頂戴したモノだと考え、秋斗は車で待つほうが良いと判断し、待つ事を選んだ。そして秋斗の判断に束も頷いた。

その判断は正しく、20分ぐらいで渋滞の列を抜ける事が出来た。

しかしそこから更に5分程過ぎる頃。
束の様子が変わった――
「――ねぇ、あっくん。後どのくらいで着くかな？」
「ぁん？　まぁ、流れも戻ってるし後１０分もすれば――」
「……そう」
「博士？」
「――――」
後部座席のシートの右隣に座る束は何時に無くしおらしかった。
加えて顔を俯かせて、心なしか小刻みに震えていた。
――具体的に言うならば膝をすり合わせて骨盤を揺らすような動きをし、額に薄っすらと汗を浮かべていた。
その時の秋斗は束の様子をカジノで飲んだ酒で悪酔いしたモノだと判断し、「気持ち悪いなら、背中擦るけど？」と提案した。
しかし束はその提案に対して首を微かに振り「――大丈夫」と心無く素っ気無く返した。
思えばその少し前から束の口数が少し減ったように秋斗には思えた。秋斗はもしも体調不良ならば早く宿泊ホテルに戻った方が良いと考え、運転手に急くように提案した。
しかしそれから5分――
「あっくん。あのね――」
「ん？」
「だから……その、ね――」
「んん？」
「～～っ」
渋滞は抜けたが運悪く信号に捕まる事が多く、ホテルまで後少しといった所で、束が小さな声で俯きながら秋斗に何かを告げようとした。
秋斗はその声に耳を済ませた。
が、しかしあまりにも束の発する声が小さ過ぎて聞き取れず、秋斗は殆ど傍らに寄り添うような形で、束の訴えに耳を傾けた。
すると遂に束の訴えを理解出来た。

「――トイレ、行きたい」
　ホテルまで残り数分と言ったところで、束は蚊の啼くような声でそう秋斗に告げた。
　それを告げるのがどれ程に恥ずかしかったは想像に容易く、それ程に束は顔を耳まで赤くしていた。
「大丈夫か？　後数分もすれば着くと思うが――」
「もう無理。限界……漏れちゃう……」
「――っ」
『いつから尿意を我慢していたのか？』などと口が裂けても聞けるはずがない。故に秋斗は推測するしかなかったが、それでも束の限界が相当に近いと手に取るように察した。
　途中の渋滞がなければ何も問題なかった事だが、今更それを悔やんでも仕方がない。酔いもすっかり覚め、今まで見たことがないほどに悲痛で泣きそうな表情を浮かべる束を見て、秋斗は意を決して尋ねた。
「――この通りを抜けて曲がった先だけどそれまで持つか？」
「……微妙、かも。どうしよう――」
「――――」
　余りに悲痛に、そして泣きそうに訴える束の返答に、秋斗は最寄りのトイレまでの距離とそこまでに立ちはだかるであろう障害を素早く逆算した。
（――残り５０ｍを直進して右折した先がターミナルで、そこでタクシーを下車して料金を払ってホテルの敷居を跨ぎ最も近いトイレまで７０ｍ弱をダッシュ。更にそこから女子トイレの個室の空きを見つける運ゲーに勝ち、入室してパンツ下ろして……か。流石に無理っぽいな――）
　ふと気づけば、束は凄まじい力で秋斗の右腕を掴んでいた。そしてその手すらも小刻みに震えていた。それ程までに何らかの方法で気を紛らわせねばならない程、束は追い込まれていた。
　秋斗はタクシーを降りた先の事を考えた結果、かなり状況が厳しいモノだと判断し、チップもかねてメーターよりも多めの金額を支払っ

た。

とりあえずコレで後はトイレまでダッシュするのみ――

しかしそんな状況の中で、ホテルに続く最後の信号が赤く染まった。

「～～～っ」

赤信号を見て束は声にならない悲鳴を上げた。

そこで秋斗は遂に判断した。

「此処でいい。車止めてくれ」

「あっくん……」

「いいから、ちょっと待ってろ！」

秋斗は路肩にタクシーを止めて、素早く車を降り、回り込んでから束の側の後部座席を開けた。そして正面からかかえるように束を抱き上げた。

「え――っ!?」

大の大人ならば膀胱を決壊させてタクシーのシートを汚すなんて恥は死んでも残したくない筈。

それを思えば、多少身体に触られて抱き上げられたくらい許せるだろう――

それになにより心という器はひとたび……ひとたび皹が入れば二度とは――

秋斗はそんな風に考え友人として恩人として、ただひたすらに束の名誉と尊厳を護る為に意を決した。

抱きかかえられた束は唖然とした声を上げたが、秋斗の意図を察したのか縋るように強く秋斗に抱きついた。ドレスコードのあるカジノで遊んでいた為に、束は肌触りのいいマーメイドドレスを身に着け、上品な香水を纏っていた。

首下から香る香水とアルコールの臭いと、見た目以上に豊満な女性らしい肢体の温もりと柔らかさを感じつつ、秋斗は束を抱きかかえた状態で懐中時計（レディ）のＰＩＣを起動させる。

ＩＳフレームという頑強で鈍重な金属の塊を纏っても搭乗者に重さを感じさせないのはＰＩＣによる副次効果――その応用で一時的

に抱えた束の重さを消し、秋斗は自身も重力の縛りから解き放って、宿泊先のホテルのトイレへと走った。

「――レディ、いくぞ！」

人目を避けてその性能は大幅にダウンさせたが、それでも人一人を抱えて普通に走るよりは遥かに早い。

すれ違った通行人の奇怪なモノを見るような視線が集まるが、それらを無視して秋斗は走った。

――しかしホテルのロビーを抜けたところでその努力は空しくも空回りに終った。後、ほんの少し。本当に目と鼻の先という所で束の防波堤は決壊したのだ。

秋斗が抱きかかえた束の腰元から生温かい雫が染み出したと察した時には既に、束は擦れる様な声で嗚咽を上げ、震えていた。

「……とりあえず、後の事はクロエに任せるけどいいか？」

「――ひぐっ――うぐっ――えぐ……」

秋斗は目の前にあるＷＣの文字を一瞥し、無力さを噛み締めながら束に尋ねた。

泣きじゃくる束を女子トイレの個室に運び入れた後。

秋斗はなるべくラウラには内密にという形で、クロエに連絡を取った。

その日以来である。

束は屋外での活動よりも潜水艦内部で後方支援に徹する事が多くなり、そして凡人の都合で移動時間を左右されない無敵の移動手段として特製の人参型ロケットの開発に着手するようになった。

☆

自分の持ち物ならば最悪それが汚れようとも気にならない。

空を飛ぶなら渋滞にも左右されない。

他人の目が無いなら恥をかく必要も無い。

そうした様々な思惑があっての事だろうと秋斗は思う。

「――ま、本当の所がどうなのかは流石に聞くわけにはいかねぇか」

タバネサブマリンの給湯室でお湯を沸かしコーヒーを煎れた秋斗は、マグカップと紙巻を手に小さく苦笑いを浮かべた。
「――護るって大変だぜ、一夏。……その気があるなら、頑張れよ」
俺は護れなかったからなと、秋斗がそんな風にぼやくのと同じ頃。ＩＳ学園のアリーナの外壁を突き破り、人参型のロケットと白騎士が登場した。
それはクラス対抗戦の渦中であった一夏と鈴の幼馴染対決に乱入する形となった。
「な、何よアレ――」
「アレは――あの人はまさか!?」
「オハヨウゴザイマース！　久しぶりだね、いっくん！　そしてＩＳ学園よ！　私は帰ってきたぜ！」
その日、天災がＩＳ学園に降臨した。

交錯する人々　胎動編

〝天災〟篠ノ之束がＩＳ学園に特別講師として赴任。

その情報は津波のような速度で世界中に拡散し、否応無く関係各位の視線がＩＳ学園に集中する事になった。

織斑一夏に続き、第二の男性ＩＳ操縦者織斑秋斗の登場、そして今回の篠ノ之束の一件。

ＩＳ学園に在籍する現場教職員の一人――特に天災と幼少の頃からの付き合いがある織斑千冬は、天災のＩＳ学園赴任問題に関して最後まで徹底的に断固とした抗議活動を続けた存在であった。しかし彼女の抵抗が空しくも受け入れられなかったのは、偏に篠ノ之束が持つ天才性とそのブランド力、技術力にある。

結果的に束の提案は受け入れられ、それに差し当たり国連、国際ＩＳ委員会、ＩＳ学園等で度重なる協議が遂に終了し、本日、遂にかの天災の行う初の講義の日となった。

「一夏……」

「落ち着けよ、箒。大丈夫だって！　千冬姉も講義を見守ってるし」

「それはそうだが、どうにも嫌な予感がしてな……」

ある日の月曜日。その日はクラス対抗戦というイベントが終わってから一週間がたった日である。

ＩＳ学園の特別大教室に集められたＩＳ学園の一年生一同は、緊張した面持ちで本日の特別講師である束の登場を今かと待ち構えていた。世界に名を轟かせたＩＳの生みの親による特別講義はＩＳ学園でも初の試みである為、補佐としてこの場に待機する一学年の教職員らも同様の緊張を顔に貼り付けている。

そうした雰囲気の中で箒はとりわけ不安そうな面持ちで吐息を吐いた。

無理も無い――

そんな風に一夏も箒の様子を見て、内心で溜息を吐いた。

一夏も幼少の頃から篠ノ之束という人物を割りと近い位置で見てきた一人である。故に、とりわけ大教室の中でも特に不安な表情を浮

かべる実姉千冬と、束の妹である箒の心情を手にとるように理解出来た。

「――それにしても、何で束さんはわざわざ今になって学園に戻ってきたんだ？」

「私が知るか！　秋斗かラウラにでも聞けばいいだろう？」

ぼやく様な独り言が口から漏れ、その言葉聞いた箒はフンと気炎を吐く。

箒の言うようにラウラか秋斗ならば確実に事情の一端を知っているはずだと一夏は思ったが、しかし今回の一件はラウラにとっても驚愕する出来事であり、また秋斗については連絡が通じないという状況で、故に、一夏の疑問は氷解する事無く未だ心に残り続けている。

「ね、ねぇ。友達の家族にこういう聞き方をするのはなんだけど、篠ノ之博士ってそんなにヤバイ人なの？」

と、一夏を挟み、逆隣の席に座る鈴が小声で箒と一夏に尋ねた。

鈴は二組に属す生徒だが、今回の授業では講師の束の要望もあってか学年単位で行うらしく、この場には一夏を含める一年一組から四組までの一年生の生徒全員が揃っていた。つまり席順も通常の元のとは違い、それぞれの自由で決めることが出来たのだ。

「姉がどういう人間か、か――」

「ヤバイって聞き方をされるとそうだな――」

箒と一夏は鈴の方を向き、少し考えた末に揃ってその人物像を端的に揶揄した。

「秋斗より頭がキレる自由奔放な人だな」

「秋斗の親友で〝師匠〟……かな？」

２人を答えを聞いて鈴は察したように短く「あぁ」と頷いた。そして同時に秋斗の名が出されると少し複雑そうな顔をした。

「――大丈夫だって。中学時代のアレは鈴の所為じゃねぇよ」

「だといいけど――」

一夏は鈴の様子を察して言った。

「ねぇ、秋斗の師匠で親友って事なら私ってさ、その博士に……恨まれてるとかない？」

「――大丈夫だと思うけど、もし何か言われたら千冬姉の所まで逃げろ」
「……覚えとくわ」
「お二人とも私語は慎んだほうが宜しくてよ。そろそろ時間ですわ」
階段状になっている大教室で、丁度一夏の前の座席に座るセシリア・オルコットが小声で注意を送る。心なしかその顔には他の生徒と同様に若干の期待と緊張の色が見えた。
時計を確認すると間もなく開始の時刻であった。
皆何処と無く浮ついた気配と緊張の色を表情に浮かべている。それは無理も無い話で、この場に揃った人間は一夏と箒を除いて多かれ少なかれ過酷な入試競争を突破した優等生。つまり皆エリート意識が強いのだ。加えて今回の講師はＩＳの生みの親。将来的にＩＳに関わる事を目指す若者にとってその存在は一種の信仰の対象でもある。
――そして始業のベルがなると同時に、教室の自動扉が音を立てて開かれた。
「おはよう！」
その声は何故か、全員が意識を向けた教室の扉の反対側――即ち窓の方から聞えてきた。そこには特徴的な空色のエプロンドレスを纏った天災がいた。
篠ノ之束は扉からでは無く、窓を開けて外から大教室に入ってきたのだ。
その行動に一同は思わず「そこから!?」とツッコミを入れそうになった。――が、しかし相手が相手である所為か、生徒達はまともにその天災の行動にツッコミを入れる事ができなかった。
そうした唖然とする生徒一同の視線の一切を無視するように束は教卓に向うと、バンと教卓を強く叩いて宣言した。
「これから皆に殺し合いをしてもらう！」
「真面目にやらんか！　馬鹿兎！」
その直後、千冬の投げつけた出席簿が天災の顔面を強打した。

☆

「はぁ……」

憂いを込めた深い溜息を吐くのはＩＳ学園の二学年に属し、同学園で生徒会長の職を勤める更識楯無である。彼女にとってここ数年がひどい〝厄年〟の様に思えた。

日本国の有する対暗部用の暗部として連綿と続いてきた一家の、その当主の座を引き継いだのが今よりおよそ一年ほど前。そのきっかけとなった〝ある事件〟で楯無は、長年の憂いであった妹との和解を果し、同時に歴代最年少で家督を譲られる事が決まった。――しかし思えば、その一件こそがそもそものケチの付き始めであった。

「――もう死にそう」

「ほらお嬢様。もう少しですから頑張ってください」

「うぅ……もう生徒会長なんて辞めたいよぅ。当主なんて辞めたい――」

「何を言ってるんですか、お嬢様……」

篠ノ之束が教師として着任する数時間前。つまり日曜の深夜にして月曜の午前に差し掛かった頃。

日本の暦に習いＩＳ学園もこの日は休日であったが、そんな世間の休日など欠片も関係が無いと、楯無は生徒会長室の机に顔を伏せ、仕事に溺れながら泣いていた。泣いたところで仕事が減るわけでは無い事など百も承知の上だが、それでも楯無は泣いた。泣きたかったのだ。

しかしそんな楯無に対して優しく声をかける専属従者にして同学園の３年生布仏虚は、容赦なく新たな仕事を楯無の下に運んだ。――

――ご丁寧に書類の脇に栄養ドリンクを添えて。

「辛いのはお嬢様だけではありません。今は一家全員が忙しいのです。ですから耐える他ありませんよ」

「知ってるわよ！　ちくしょう、ちくしょう！　天災め！　織斑秋斗め！」

楯無はその美貌に強い疲労の色を貼り付け、充血と隈の刻まれた両

眼を見開き虚を睨むと、全ての元凶である天災と、それに確実に関与したであろう男の名を慟哭してさめざめと泣いた。

織斑。かの存在こそが、今日（こんにち）の楯無に降りかかる災厄の元凶である。姓は同じ織斑でもその最年長である織斑千冬に対しては楯無も尊崇に近い念を抱いているし、そのもう一人の弟である一夏の方は大きな厄介事を持ち込んだとはいえまだ対応の最中に娯楽を見出せるだけ可愛いと思える。

――しかしその姉弟の末弟である織斑秋斗に関しては、流石に看過出来ない。奴こそがまさしくここ数年の更識楯無に降りかかる大いなる災厄の権化にして、現更識家当主更識刀奈――つまりＩＳ学園の生徒会長である更識楯無が対応せざるを得ない〝ほぼ〟全ての案件に関わる悪魔であった。

日本政府最大の失態とされるテロ事件。それ以前の世間では織斑千冬と織斑一夏が有名であり、織斑秋斗の名前と存在はまだ所謂〝凡夫〟だとされていた。しかしその当時の評価がどれほどに楽観的であったかと、楯無は今更になって行き場の無い憤りを感じた。近代国内史の中でも1，2を争う大きな事件の渦中にあり、同時に荒唐無稽な規模の爪痕を残すだけ残して、天災と共に霞のように失踪した男。そしてその火消しともみ消し工作に奔走した全ての暗部に多大な迷惑を振りかけた悪魔。そして最近になってダイオウイカ発見という荒唐無稽な偉業を成し遂げ、同時に天災との深い交流が確実となった第二の男性ＩＳ操縦者であるその異端児は、今代の楯無にとって最大最悪の疫病神である。

故に今回の一件にも、織斑秋斗が何らかの形で関与するか、もしくはしてくるであろう、もしくはしでかした後なのだろうと、楯無は思っていた。

「――――空が白んで来たわね」

それから黙々と仕事を続けた楯無は不意に窓の外を見てぼやいた。すると気づけば東の空が白み、朝焼けの色が夜空に浮かんでいた。直に夜明けであった。

「少し、仮眠なさいますか？」

「寧ろガチで寝たいわ」
「後、2時間ほどで始業ですが？」
「あっそ……」
楯無は虚の問いにノータイムでそう返事を返したが、すぐに「承服しかねます」と言う旨のこもった返事がノータイムで返ってきた。
楯無は無言で積み上がった書類の山を見た。
仕事はまだまだ終りそうになかった。
楯無の手元にある仕事は、その殆どが生徒会長として処理するには余りに越権しているモノが多く、本来ならば教職員か、それ以上の権限を持つ職員が対応する者ばかりである。しかし楯無はＩＳ学園の裏表に密接に関わる更識の当主としての体面もある為、歴代のＩＳ学園生徒会長と比べると極度に多忙な存在と化した。
織斑秋斗が第二の男性ＩＳ操縦者として名乗りを挙げた事。深海探査とダイオウイカの発見でＩＳでの深海探査という新たな概念が誕生した事。そして表に出た事で浮き彫りになる第二回モンドグロッソの真実に対する調整。加えて現在の事実上の織斑秋斗の保護者である篠ノ之束が、先のクラス代表戦に乱入し明日――否、本日からＩＳ学園に赴任する事。そしてその際に語った授業の一環で、ＩＳ学園に篠ノ之束による新型のＩＳシミュレーターが導入される一件。
同時に今後3年以内を目処に男性にも対応可能にする為のＩＳコアのアップデートと、その調整等の案件が楯無を追い込んでいく。
「――織斑秋斗め」
「織斑秋斗は余り関係ないのでは？」
「いいえ、全てあの男が悪いわ。近くにいるならせめてもう少し良識ある行動を心がけさせるべきよ！」
とにかく全て、織斑秋斗が悪い。少なくとも篠ノ之束に関する件については、もっとも近くにいた秋斗がその手綱を握って最低限の良識ある対応を心がけさせるべきだったと楯無は思った。
楯無は写真資料で見た織斑秋斗の顔を思い出し、そのニヒルで悪辣な笑みを心の中でクリアパッション（焼き払う事）にする。

――――その更に前日である土曜の深夜。日曜の午前。日本の某所。

本州近海の海温は海水浴としゃれ込むにはまだ少々冷たい今日この頃。楯無がその名を呪詛と共に慟哭したかの少年は、その時既に日本に向けての航路である領海の、その深部を泳いでいた。小型潜水船（SDV）を駆使して。

秋斗が黒いポリ・サーマルのスーツで身を包み、足ひれ、ゴーグル、酸素ボンベを初めとするスキューバダイビングの装備に身を包み、母艦である人参を模したタバネサブマリンの、その魚雷発射口から海に飛び出しておよそ３０分。

ようやく秋斗は己が目的とする湾の入り口に辿り着いた。

秋斗の駆るＳＤＶの性能水準は間違いなく世界最高峰で。その隠密性能も静音性も推進性能も恐らくは各国の海軍に実戦配備されたモノを大きく上回る程だ。

現にその動きは近海にある海上自衛隊の有する哨戒艇等のソナーさえも欺いていた。

（さて――）

自動操縦で目的地に近づいた事で自然と推力を落とし始めたＳＤＶを量子格納した秋斗は、自力で足ひれを動かし一度海面に浮上した。そして目視で陸地を確認した。

埠頭にある微かな明かりから角度を確かめた秋斗は、そのまま真っ直ぐに陸地までの４００ｍの距離を泳ぐ。

「ぷはぁ！　あぁ、しんど――」

ざぶざぶと海を掻き分けて砂浜に上がると、秋斗はそこで大きく息を吐いてゴーグルを外した。そして海から完全に上がると、全身を覆う海水ごとダイビング装備を量子格納して、黒を基調にした余所行きの私服を身に纏った。

黒いワークパンツ、ブーツ、グレーのシャツ、濃紺の長袖ジャケット、サングラス、薄いニット――

ＩＳを駆使した量子格納技術による早着替えを終えた秋斗は、慣れた手つきで同様の手法で空中からソフトボックスとライターを取り

出し、左手で火を点した。
「久しぶりの日本だぜ……それほど味噌臭くは無い、かな？」
長期出張等で海外から帰国する多くの人間の共通の意見をふと思い出し、久しぶりの祖国の香りを堪能した後、秋斗は手の中に収めた懐中時計――ＩＳ〝レディ〟を見た。
時刻は朝の５時を回った頃である。
まだ周囲は薄暗く、街道にも人気は無い。
――しかしそれはそれで秋斗にとっては非常に都合が良い状況である。ＩＳ学園に天災篠ノ之束が赴任した一件で世界中の視線のほとんどが秋斗から逸れているとはいえ、それでもそれなり以上の有名人だという自覚があるからだ。
「さて――」
秋斗は砂浜を歩いてやや風化した路上に踏み込んだ後、周囲を二、三度チラリと確認してから量子格納していた〝ママチャリ〟を虚空から取りだした。そして同時にスマホを取り出し、音声通話ソフトで事前に約束した人物に連絡を送る。と、同時にイヤホンを挿して耳に装着する。
「――こちら秋斗。〝部長〟、一先ず現地に到着した。合流地点の指示を、と」
スマホに繋いだミュージックファイルから伝説の傭兵のＢＧＭを流して雰囲気を作りながら、秋斗は約束の人物に連絡を送った。
程なくしてチャットという形で返信が返ってきた。
『レゾナンス最寄りのゲーセン　３Ｆ　艦コレ　右から３台目』
「――了解っと」
サドルに跨った秋斗は咥えタバコでキコキコとペダルを漕ぎ、人気の無い街道を北上してゆっくりと駅を目指した。

交錯する人々　束編

「――さてさて、自己紹介も終ったところで少し説明しようか。とりあえず前提として、授業では凡人どもの書いた下らない教科書の反芻や、君達に無駄に時間を使わせるレポートみたいな無駄に時間の掛かる宿題の提出は要求しない」

大教室の教壇の上に立った篠ノ之束は集まったその場の全員――ＩＳ学園一年生の一同と、その場に待機する教職員達に向けて宣言した。

その言い回しは篠ノ之束の人物像が事前の説明で知らされた通りの性格であると多くの者は強く実感したが、同時にその歯に衣を着せぬ意見が、一部の教職員や少し斜に構えた一部の生徒の感心を買う事にも繋がった。

静寂の中で自らの言葉に対するリアクションを受け取った束は、心なしか満足げな笑みを顔に貼り付ける。そして同時に、空間に展開させた情報ウィンドウから、事前に用意した資料を生徒全員の卓上ディスプレイと教師陣の持つタブレットに一斉送信した。

資料には『ＩＳの運用における操縦者の心得』という表題がつけられていた。

「あの篠ノ之先生。こちらの資料は――」

「その口を開く前にまず挙手と名前と出席番号を言ってもらえるかな？」

「あ、あの、すいません！　一年一組担任　山田真耶です……」

「あぁ、そう。で、質問をするからにはもう資料の中身にはもう眼を通したのかな？　見たところまだの様だけど、それとも一々言われなきゃ内容の確認も出来ないのかい？」

「す、すいません――」

束の配布した資料に対する大まかな疑問を尋ねる真耶の言葉を遮り、束は心なしか冷たい声で言い放った。

そうした束の言葉に真耶は涙目になり、あわてて資料を読む。

そしてその動きに、生徒らも慌てて続いた。

「――さて、中身を読んでもらっているところで悪いんだけど、正直この段階では、まだ君たちに中身の本当の意味を理解してもらうのは難しいと思っている。だからまずそれを説明しようか。あぁ、読みながら聞いてもらってかまわないよ。ついでに質問はその時にまとめて受け付けるから」

束は生徒らが資料を読み解く最中にそう口を開いた。

「それじゃあまず前提として、束さんが思うにＩＳに対する現代人の認識が、本来意図したものとはすこぶる違う事を理解して欲しい。その勘違いが生まれたのは恐らく一番最初の段階――白騎士事件でその戦闘力の一端を見せてしまったことが原因だと思うんだ。それについては今になって心底後悔しているよ」

その台詞に、「１０年越しにしてようやく反省したか――」と、当時の関係者である織斑千冬は、教室の壁際で小さく溜息を吐く。

そんな千冬の反応を意図的に無視してか、束は言葉を続けた。

「確かにＩＳはマルチプラットフォームスーツとして開発したし、その汎用性の高さはある意味戦闘力にも特化出来るから、多くの意見の様に兵器として扱う事も可能と言えば可能だ。だけど正直言ってＩＳをそれだけの存在に終らせるつもりは私には無いし、これから先、そんな兵器を作った人間とだけ言われるつもりも到底無い。――またしてやＩＳは女だけの代物みたいな気持ちで作ったモノでもなければ、ＩＳから生まれてしまった権威を笠に着て横暴に振舞うゴミ共を量産する象徴（イコン）でも無い。世間で束さんが失踪した理由とかについていろいろ囁かれているみたいけど、実際のところはそれなのさ。――そして肝心のＩＳコアを５００しか作らなかった理由もその内の一つ。代替の利かない総数５００の兵器なんて、とてもじゃないけど兵器とは呼べないからからね。精々、競技用の玩具が関の山だ。だけどまぁ、そっちのほうが束さん的にはありがたいと思っているよ。まだ夢を作ってる側だからね。つまり何が言いたいか、と言うとだね――」

１００名以上が揃う大教室には束の言葉のみが響いた。

生徒らは資料を読み解きと拝聴に同時に意識を割く事を要求され

た。この時点で多くの生徒が。この先の授業で要求される最低限の予習や、技能として要求されるハードルが聊かに高い事をすぐに悟った。

しかしそんな生徒らを尻目に束は独白の様に言葉を続けた。

そして言葉の中には、未だ嘗て正確に聞く事のなかった失踪の原因や、永きに渡って議論の的となったコアを５００しか作らなかった意図の真意が秘められていた。

いつしか、資料に落とされた生徒達の視線は全て束の方を向いていた。

束はそれらの視線を受け止めつつ言った。

「今後、私はＩＳで夢を作る側の人間を増やしていきたい。表舞台に立ったのはそれが理由だよ。そしてこの授業の根本にあるテーマがそれだ。皆にはＩＳの持つ夢やその可能性を様々な方面から探ってもらいたい。否、常に考えるようにして貰う人材に最低限進化してもらう。その為の用意は既に終えているし、こちらの準備は既に整っている。後は君達の意識のみだね。――――さてここまで何か質問があるなら聞こうか。大概の事には答えるつもりだけど、下らない話がしたいなら今すぐ消えてもらって構わないよ。私は無理強いはしない。だけどついて来るつもりがあるなら、それなりに厳しい事は要求すると最初に警告しておくよ」

束は笑みを浮かべて最後通牒のような恫喝染みた提案を生徒らに送った。

それは今後も束の授業を受けるつもりがあるなら浮ついた学生としての意識をここで捨てろという警告であった。

それは非常に挑発な言葉であった。学園では厳しいと評判の千冬をも、ある意味で凌駕する暴君の誕生を予期させる台詞であった。――しかしその言葉に深く感銘を受けた人間も存在した。

「質問、宜しいでしょうか？」

一人の生徒の挙手が上がった。

「一年一組、出席番号７　イギリス代表候補生、セシリア　オルコットです」

セシリアは心なしか緊張した面持ちでゆったりとした礼をとりながら起立し、口を開いた。

「――何かな？」

「篠ノ之博士のお言葉には大変な感銘を受けましたわ。確かに現状、戦闘能力の発掘以外でのＩＳの可能性については、現時点では欠けている要素だと思います。実際、わたくしも代表候補生となって幾許か経ちましたが現状のＩＳの活躍の場としてもっとも華々しい舞台は未だモンド・グロッソですし、最終的にその舞台を目指して勉強する者が殆どでしょう。ですが実際、わたくしもそれ以外でのＩＳの活躍できる可能性の場――というモノをいくつか知っておりますわ。例えば過酷な――海底や森林火災等の現場。資料にあるように先の博士の行ったダイオウイカの発見という未開地の探査等。過酷な現場ほど実際にＩＳを持ち込むことが出来ればその場で何が出来るか、どのように対処できるかの考察は非常に有意義なモノであると思います。――しかしながら現時点で資料にある様な革新的な試みが可能なのでしょうか？　資料にある『自由なＩＳの可能性の探求』というテーマを実行するためには正直な所、やはり実機による実地訓練などが望ましいことが多いと思います。しかし現状はＩＳの訓練機の台数は少なく、この授業で得られた何かしらを実際に実地、もしくは復習するには余りに難しいと思います。なのでその点についての御考えがいただければと思いますわ。今後、わたくし達はどのような形での学習が必要になってくるのでしょうか？」

セシリアは内心で挑発的に捉えられないだろうかという緊張を心に秘めながら言葉を口にした。己には代表候補生という立場もあり、相手は世界的なＩＳの権威であり第一人者である。そしてセシリアの発言をまとめると、具体的に授業で何をするのか？　そして本当に出来るのか？　という点に尽きるのだ。

そしてその意図を正確につかんだ一部の生徒はセシリアの発言に同じような緊張を顔に浮かべると同時に、どのようなリアクションが束から返って来るのかを恐々と見守った。そうした緊張のやり取りが沈黙の中で行われた後、束は「ほぅ」と、嘲笑とも賛美とも取れぬ

笑みを浮かべて口を開く。
「――ふむ。中々の良い質問だね。いや、まったくもって良い質問だ。確かに配布した資料には〝具体的に何をするのか〟についてを書かなかった。書かなかったのは今日ここで実際に体験してもらったほうが早いと思ったのと、始まりにして、基本にして、究極の〝意図〟だけを精確に察して欲しいからなのだよ」
「はぁ、と、言いますと？」
「大前提としてこちらから要求する内容が『可能性の探求』というひどく曖昧なものなんだ。だからそれ以外の点での疑問を最初に作ると、余計な事で悩ませると思ってね――」
束は心なしか上機嫌に見える言葉を口にした。そして同時に手元の空間ウィンドウを操作し、大教室の中央にあるプロジェクターに一枚の画像を表示させた。
それはカメラの画像であった。
場所は学園の地下施設の一部であり、中には医療用のメンテナンスベッドに似た機材が、数十機という単位で並べられている見慣れない施設であった。
「この場所は学園の地下施設で昔研究実験場として使っていた一角で、今日の日の為に束さんが手塩にかけて一週間で改築した場所だね。今後の名称は仮想訓練室（ワンダーランド）とでも呼んでくれたまえよ。まぁ、名前なんてどうでもいいんだけどね。で、今後の授業はこっちの場所の使用が非常に重要になる。なぜならこの機材を使って君達にはよりＩＳという存在と密接に関わってもらう事になるからね。まぁ、一言で言ってしまうとヴァーチャル空間で擬似的にＩＳに乗るための施設さ」
「っ!?」
擬似的にＩＳに乗れる仮想訓練施設。束の言うその言葉に多くの生徒が息を呑んだ。
一年生が学園に入学して一ヶ月程経つ頃。そこで先ず初めに入学生らが実感したのは、ＩＳの実機に乗るための過酷な抽選競争であった。訓練をしようにもいかんせん訓練機の台数が少なく、それに対し

て生徒数が圧倒的に多いという状況により、学園は以前から放課後の生徒の手慰みに大会にすら出る事の無い部活動に勤しむ事もやむなしだったのだ。そして束の作り出した仮想訓練室はある意味でそうした学園の問題を一挙に解決しうる荒唐無稽な代物ですらあるのだ。

現に、束は言った。

「――この仮想訓練機の凄い所は仮想空間内での情報処理速度だね。実際には30分しか経ってないけど、体感では2時間ぐらいの訓練をする事が出来る。まぁ、健康状態の管理やらなにやらという理由で使用には学園から配布されるＩＤの登録と、一日の使用限度は一回という制約があるけど。まぁ、訓練機に乗る事すら困難っていう子は、こっちの部屋で自由に使うといいよ。幸い一度に50人は収容できるし。後、実機に乗る感覚も大事だからそこらへんの匙加減は各自で自由に決めてね。それともう一つ。この仮想訓練機は現在までに開発されたあらゆるＩＳ――まぁ、ラファールまでの第二世代機までを全て扱える。つまり『白騎士』も使おうと思えば使える――」

「全てのＩＳを!?」

セシリアが驚愕して束の言葉を遮るように口を開いた。

ＩＳコアに限りがある為、古くに作られた機体の一部には廃棄されてしまったモノすら存在していたからだ。

「それどころか、開発中止になった機体もいくつか使えるよ」

セシリアの驚愕を見てさらに気分が乗ったのか、束は殊更楽しげに言った。

「後々この技術をＩＳ委員会を介して各国に配布する予定だからね。代わりに各国には既存のＩＳのデータを提供してもらったのさ♪ ただ一つだけ、君の使ってるブルーティアーズだっけ？　流石にああいう最新の試作機なんかについてはデータは入ってないから注意してね。もしこの仮想空間内でその機体を使いたいなら、その交渉は自分で自分の所の政府とやる事。仔細なデータがある程度必要になるからね。一応警告するけど特殊な専用機持ちっていう自覚がある子は、仮想訓練でそれを運用した場合についての問題については基本的に学園と相談する様にね。束さんは知りません――っと、話が逸れた

ね」

束はそこまで言って一度言葉を切った。

「後はこの中で出来る状況設定だけど、いろいろ細かく調整が出来る。例えば天候なら晴天から雨に変わるとか、景観も市街地から、砂漠、凍土、樹海、湾口、深海、成層圏（ストラトス）、爆心地（グラウンド・ゼロ）――とか、まぁ格ゲーのフィールド設定みたいな感覚だ。この辺の調整は後で詳しく説明するよ」

「ＩＳ／ＶＳかよ……」

束の説明の中で唯一最後の点だけを大まかに理解した一夏は、思わず小声で感想をぽそりと言った。

近年、家庭用ゲーム機でモンド・グロッソに登場したＩＳを操作して戦う対戦ゲームが登場したが、それがまさに束の説明したＩＳの仮想訓練機の発展系に近い代物であったからだ。

「そう、まさにいっくんの言う通りＩＳ／ＶＳに近いね。だけど出来る事は戦い以外にもかなり幅広いよ♪」

「っ!?」

そして驚愕する事に束は一夏の独り言のような小さな呟きを精確に聞き取ってみせ、その視線を頬杖を突いていた一夏のほうに向けて言った。束の超反応によって急に大教室に居る全員の視線が一夏の方に向けられた為、一夏は慌てて姿勢を正し、恥ずかしそうに顔を下に向けた。

しかし束は一夏の態度にもその後の教室中のリアクションにも一切反応せず、淡々と言葉を続けた。

「仮想訓練って大層な名前だけど実際はゲームと同じだと思って間違いないね。だけどゲームだと侮る事無かれだよ。実際に旅客機のパイロットなんかは実機の操縦時間よりも仮想訓練時間のほうが長いんだ。そして逆に言えば、今迄ＩＳという代物はその性能に比べて操縦者の訓練の時間が余りにも少なかった。それはＩＳコアの数が根本の原因何だけど、その点を解消するにはまだ時期尚早だと束さんは思うのだよ。だけど裾野が狭いままだと真の理解者を増やすには時間がかかりすぎる――」

束は教卓の上に手を乗せ身を乗り出すようにして言った。

「ＩＳの可能性を狭めているのが他ならぬＩＳ操縦者の持つ発想の貧困具合にあるのは明白だ。だけど今はＩＳコアの量産をするつもりはない。だけどＩＳに触れる機会を増やしてあげたい。だからＩＳを擬似的に理解できるコレをつくり、私はコレをＩＳ学園に導入させた。なぜならこの場には一応だけど選りすぐりの学生が揃ってるんだよね？　だったらその可能性に期待させてもらおうかと思ってね。それに――」

「っ!?」

束がそこで、にんまりと悪辣に笑って見せた。不思議と一夏には、その笑みが良く知る弟の笑みに似ているように思えた。

「――着任の挨拶の時に言わなかったっけ？　今後3年以内にＩＳコアは男にも適合する様にするって。そしてこの仮想訓練機は設計上、男にも使うことが出来、同時に技術協力として簡易版だけど各国に同じ様なシミュレーターが作られる事になるってさ♪　ＩＳ学園に用意したモノほど高度な仮想訓練設備は他には生まれないだろうけど、後々オンラインゲームのネットワーク対戦みたいに、今後は仮想空間上のモンド・グロッソが誕生するかもね♪　だけどそれ以外にも星の数ほど玉石混淆な発想が生まれてくるだろうね。もしそうなった時に将来的に君達が持つ事になる『ＩＳ学園の生徒だった』という価値に、どれほどの意味が生まれてくるのだろうね――」

束の意味深な台詞に多くの者が呆気に取られた。

そして次の瞬間、目が覚めるような衝撃が彼女らの――特にプライドが高い事で有名な生徒らの心を刺激した。

「さて、とりあえず質問に対する返答はこれでいいかい？　この授業では仮想訓練機で想像できるあらゆる状況を自分で試してもらって、それについて思ったこと、感じた事、そう言った点について皆で考察、議論をする会議の場だよ。ぶっちゃけ成績なんてつける気はないし、付ける意味が無い。そして言っておくけど、前提として私は指導者でもなければ先導者でもない。一介の研究者だよ。だからこそ、未だ実験して、考察して、というＩＳに関わる者にとっての最高の環境を求めている。そしてその研究の一端に君達にも触れさせてあげる。だ

から今日から自分で考えて自分で努力する事を考えないと、この場に来ても無為に過ごすだけになるよ？　目的はＩＳの持つ可能性の探求だ。お分かりかな？」

最後に束の言い放った台詞に生徒一同はゴクリと唾を飲み込んだ。

緊張感の漂う空気の中で、千冬は何時もと変わらぬ様子で小さく溜息を吐き、そして小さく笑みを浮かべていた。

束という天災の与える環境の中で、生徒らはどのように立ち振舞うか？　それを自分で、あるいは仲間で考えさせる事がこの授業の本質である。そしてそれは間違いなく生徒らに強い自立を促すと千冬は思った。

「ＩＳの持つ可能性、ですか――」

千冬の隣では山田真耶が他の一年生の生徒らと同じく緊張した面持ちで束の授業に参加していた。

お前は教師の側だろう――と、千冬は内心で真耶の様子に溜息を吐いたが、ある意味でそれも仕方が無い事かと思う事にした。

山田真耶の実力は国家代表に届きうるほどだったと界隈では有名な話である。が、いかんせん本人の性格が戦闘競技向きでは無く、故に彼女は候補生止まりであったと度々自嘲する。

しかしＩＳを心から愛しており、また同時に失礼な物言いかもだが、束と同様にＩＳの闘争以外での利用方法を真剣に考えている人物でもあった。つまりある意味で彼女こそが、この場では一番束の授業に期待している人物の一人なのかもしれない――と、千冬は密かに思った。

「――ったく、言わんこっちゃない。やっぱり無理だよ。お前には」

千冬は束にお前に教師等無理だと再三告げたが、まさにその通りになったと笑みを浮かべた。

見てのとおり、教えることが教師というならば束は完全に失格である。それにそもそもからして教師をやるような人格者ではないのだ。

そしてその点は千冬にも言える事であり、千冬は少なくともそれを自覚しているからこそ一夏が入学するまでは学園で〝技術指導教官〟という役職についていたのだ。

しかしある意味それほど悪い事では無いのかも――と、千冬は束を見てほんの少しだけ感じた。彼女がこの場に来て、どこか同胞を求めている様に思えたからだ。

――しかし本人にその点を指摘するとへそを曲げかねないので、千冬はそんな想いを胸の内に秘める。

「みせてくれよ。お前達の可能性を――」

千冬は腕を組んだまま壁に背を押し付け、緊張の面持ちの生徒らを見守るように、束の進める授業を観察した。

交錯する人々　千冬編

ＩＳが有するハイパーセンサーとＰＩＣ制御から産み出す無類の機動力は、時に銃弾の回避すらも可能にする。

そして国家代表という一部の修羅達は、基本的にそれを可能とする領域の手練である。

故にＩＳに対して『銃器』という人類史の生んだ必殺の武装は、武装足りえない――と、言うのが昨今のＩＳ関係者に共通する認識であり、それ故にモンドグロッソにおける上位入賞者はほぼ全員と言っていい程格闘戦に精通する猛者ばかりであった。

その様な猛者達がひしめき合う世界の頂点に君臨した究極系こそが、現代の世界最強（ブリュンヒルデ）と呼ばれる織斑千冬である。

彼女が修練の果てに生み出した一撃必殺剣――零落白夜。その零落白夜はこのＩＳ時代におけるＩＳ唯一の天敵と称され、千冬はその零落白夜の力で世界の頂点を捕った。

――そしてそうした結果が残ると聡い者は考えるようになる。

第三世代機の特殊兵装として、標準装備と化した零落白夜。兵器としての量産化である。

この時代において最も警戒されるテロとは、ＩＳを用いてのそれである。故に国防を担う次世代のＩＳとして、対ＩＳ能力に特化した無類の武装を標準とし、それを任意に制御できる量産機が求められるのは、ある種の必然であったと言える。

そしてそれが当初の、日本が考える第三世代機の設計構想（コンセプト）であった。

そして結果的に開発された試作機が、一夏の乗る『白式』という機体であった。

「ままならないものだねぇ～♪」

一日の授業も終わり、消灯時間も少し過ぎた頃。ＩＳ学園の郊外の敷地にいつの間にか建てられた独特な景観の建物を根城にする天災――束は、記録された白式の戦闘映像を見て密かに笑みを浮かべた。

そしてそんな幼馴染の相変わらずな様子をコーヒー片手に見守る

千冬もまた、同意するとばかりに小さく溜息を吐いた。
「一夏もしっかり秋斗の兄だったという事だろうさ。良くも悪くも他人の気も知らずに期待を裏切ってくれる――」
「そこが面白いじゃん♪」
「傍観者気取りのお前に公務員の苦悩がわかってたまるか」
「ところがどっこい、束さんは先生なんですよ。これが？」
「ほざけ。貴様の様な教師がいるか、馬鹿たれ」
「痛っ！」
千冬は束の頭をパコリと叩いた。
束が学園で教鞭をとるようになった事で、必然的にそのお目付け役と護衛のポジションに千冬が立つ事になった。
腐れ縁故に――という、ある種暗黙の了解のように、そんなリードのポジションについてしまった千冬は、せめてもの抗議として学園の敷地の郊外に勝手に作られた束の自宅兼研究ラボにて、よく暇をつぶすようになった。
「しかしカッコいい台詞だね～」
「その直後に自滅してくれたんだ。所詮は道化の台詞だ」
「手厳しいね？」
「私にしたって恥ずかしいんだ」
千冬と束が二人して見ているのは、ＩＳ学園に入学した一夏の行った最初の戦闘映像であった。
内容はイギリスの代表候補生――セシリア・オルコットとの、クラス代表を賭けた一戦である。
詳細は割愛するが、その勝負の一夏は素人でありながらも倉持技研から送られた試作第三世代機白式を見事に乗りこなした。しかしその結果は一夏の敗北に終り、その途中で一夏の行った悪い意味での見世物により、千冬はその映像を直視しようとはしなかった。
「ねぇ、ちーちゃん」
「なんだ？」
「もしもこの勝負でさ。いっくんがまともに白式を動かせなかったらどうするつもりだったの？」

「その時は訓練機を使わせる予定だったさ。その為にわざわざ一夏の専用としてＩＳを一機貸与するように調整がなされていた」
「へぇ、そうなんだ。でも――無駄に終ったね」
「言うな……」
千冬は束の質問に答えながら、若干疲れた様子で目頭を揉んだ。
映像の情報は一部の関係者を多いに苦悩させ、千冬と束をして、今後はどうするんだろう？　と、白式を一夏に与えた日本政府と、その機体を預かる倉持技研への疑問を顕にする。
その意味では、一夏の行った最初の戦闘模様は、非常に興味深い内容であった。
と、いうのも白式に搭載されたＩＳコアの根幹には織斑千冬の使用した戦闘データのコピーが存在するからだ。そしてそれが零落白夜を発動させる為に必要最低限の要素だったのは間違いなく、同時にそれこそが、白式が一時日の目を見なかった最大の要因であったからだ。
そもそもが専用の搭乗者による膨大な戦闘記録の蓄積によって、独自に最適化、進化して生み出されたワンオフアビリティーを、まったく別の搭乗者が使おうとしたところで、そこにエラーが発生するのは当たり前のことである。故にそのエラーの原因を突き止め、ワンオフアビリティーを特殊兵装としての形にデチューンする事が、第三世代機開発の大きな焦点となるのだ。
しかしその作業の難しさは語るまでも無く、他多くの例に漏れず、白式という機体もまた開発陣に望まれた結果を出せる事無く計画が凍結され、結局は倉持技研の倉庫で埃をかぶる結末を迎えた。
その後零落白夜の量産化に頓挫した日本は、織斑千冬が零落白夜を発動させた改秋桜――通称『暮桜』の、その高い格闘戦能力を見直し、更に完成度を高めた後期型の二世代機として『打鉄』の開発に着手するという逸話があるのだが、どちらにせよ白式と言う機体は、本来ならば一度も日の目を見ること無く、ひっそりと闇に消えていく宿命だった機体なのだ。
――しかしそこへ織斑一夏という織斑千冬に限りなく遺伝情

報の近い男性ＩＳ操縦者が現れた事で、話が変わった。
そしてその運命的な出会いにより白式は時代に台頭した。
そこにはある種のロマンがあったと白式の秘話を知る者達はこぞって興奮した。
しかし同時にその結果を歯がゆく思う者達も居た。その内の一人が、他ならぬ織斑千冬であった。
「一夏は一次移行の段階からワンオフアビリティーを発現させた。その結果を見て白式と第三世代機の開発に光明が見えたと倉持の関係各位はたいそう驚いてくれたが、お前に言わせればこの結果は想定内のことなんだろう？」
千冬はズズッとコーヒーを啜りながら、モニターに映る記録映像に視線を落とした。
場面は一夏が瞬時加速から零落白夜を発動させた瞬間である。
束は退屈そうに口を開いた。
「まぁ、それは間違いないね。予め予定されていた性能を白式が発揮しただけに過ぎないっていう、倉持技研の所長の――誰だっけ？　アイツの見解は正しいと思うよ？」
「篝火ヒカルノだ。名前ぐらいは覚えておいて損は無い」
「そうそう。それそれ」
束は飽きたと言わんばかりに戦闘映像から眼を逸らした。
「あっくんもそうだけど、ちーちゃんといっくんも遺伝情報がそれなりに近いからね。ワンオフを発現させる可能性は十分あった。でも白式から派生する第三世代機云々の問題と、男性ＩＳ操縦者のデータ取得は別問題だよね？　二兎追う者は――って、まさにその通りの結果に終るんじゃないかなぁ？」
「言ってやるな。その問題については頼まずとも、連日のように上の連中が議論してくれている。政治も絡んでくるデリケートな問題なんだ。まぁ、介入してやりたいというのなら話は別だがな」
「まさか。死んでもゴメンのすけだぜ♪」
皮肉るような千冬の言葉に束はぐっと背筋を伸ばすと、虚空から千冬とおそろいのマグカップとココアの入った電気ケトルを取り出し

た。
「一夏の成長幅とその方向性に、大きな枷が嵌められてしまったのはある種の皮肉だな」
一夏は初のＩＳの搭乗で、白式が本来求められた要素と性能を限りなく最高の形で発揮してしまった。そしてその結果こそが、一夏にとっての幸運であり不運であると思った。
千冬は小さく息を吐いた。
今後一夏はＩＳと関わって生きる事を余儀なくされた。
しかしその現実を悲観に思う段階は疾うに過ぎ、そうであるならばと千冬はＩＳの先達として一夏を鍛える腹積もりであった。
しかし白式という余りにも尖った機体が一夏の専用機として与えられた事で、大きく予定が狂ってしまった。
「男性ＩＳ操縦者としてのデータを取りたいなら、多少型落ちしていてももう少し汎用的な機体を回すべきだったろうにな」
「そうだねぇ～」
ＩＳに関わる人間としても教職員としても、千冬は間違いなくそのように考えていた。なぜならどんな分野でも、さしあたり基礎を疎かにするわけにはいかないからだ。
しかしそこに待ったをかけたのが倉持の一部の技術者と政治屋である。彼らは白式を半ば強引な形で一夏に渡し、そして最終的に一夏に白式を託した。
恐らくだが倉持としても、当初は〝動けば幸運〟という位の実験のつもりだったのだろう。しかし一夏はその主人公力とでも言うべき幸運でなまじそれを求められる最高の形で動かせてしまった。それが故に一度断たれた国産の第三世代機開発という夢を再び開花させてしまったのだ。
それは確かに国益にとっては素晴らしい事なのだろう。しかしそれは結果的に希少希少と騒ぎ立てた男性ＩＳ操縦者の将来の可能性の一部を大きく潰した事にも繋がり、それが故に一夏を中心とした政治的な対立の火種が出来てしまった。
その点が千冬を大きく苛立たせていた。

「知らぬは本人ばかりだ。どいつもコイツも他人の弟を好き勝手に――」

最強――織斑千冬のあり方とまるで同じタイプの操縦者。それはある意味で一種のロマンさえも感じる要素である。

その点は倉持の多くの研究者や、国家としての単位で一夏を含むＩＳ業界に密接に関わる政治家にとっても共通する見解だった。しかし成長の余地がある初心者を強烈な個性のある機体に押し込めてしまった事は、結果的に他の分野で開花したであろう可能性を潰すに等しいものだ。そして多くが誤解する点として、千冬はＩＳに必要な多くの要素において、ほぼ全ての分野での一流。そして知られてはいないが、実は平均以上の射撃の腕前もある。

たまたま近接戦闘の技術が超一流だった事と、モンド・グロッソの上位ランカーとの鎬を削る要素に近接戦闘の技巧が必要になっただけで、それらの結果が世間的には近接戦闘分野のスペシャリストとして浸透しただけである。

千冬の実態はＩＳのほぼ全ての分野を修めるゼネラリストだった。少なくともそうでなければ技術指導教官という名目での教職員の地位などありえないし、何よりＩＳの分野に進むと決めた時から、そうした生き方を自ら望んできた。

しかし一夏は違う。一夏は初心者である。しかも基礎の鍛錬もまだ行っていない段階の素人。血縁と来歴の共通点だけを結べば、確かに一夏と千冬には共通する項目があるが、しかしそれがそもそもの間違いである。

そしてそれに気づかず国が、世界が、好き勝手に一夏に掛ける多く期待が、余りにも度が過ぎていると千冬は思っていた。

「――ままならんものだな」

千冬はコーヒーを啜りながら思わずぼやいた。

確かに一夏と千冬はタイプが似ていた。

戦闘競技者としての個性は共に剣を使った近接戦闘であるという点がそれだ。しかし言ってみればそれだけである。

織斑の三姉弟の長女として千冬は、自分達姉弟がそれぞれ違った形

の個性を持っている事をよく理解していた。
千冬は清廉で生真面目な性格だが、面倒になると考えることを放棄して大雑把に物事を片付ける癖がある。
一夏は単純で一途。しかし穏やかな気性に反し、意外に頑固で融通が利かない部分が多く、そして寂しがり屋。
秋斗は時に千冬でも頼りにする程の非凡だが、頼りになると同時にひどく勝手気ままな気分屋の快楽主義者だ。
「どうしてこうなったんだろうな」
「なにが？」
ふと零した千冬の疑問に、束は首をかしげた。
千冬は一夏の巻き込まれた運命を悲観する姉としての気持ちを吐露しかけたが、気恥ずかしさからそれを飲み込み、冷静な第三者としての仮面を纏った。
「――白式と言うある種の特殊機体に搭乗させるという事自体がそもそも、連中の言う貴重な男性操縦者の無駄使いではないかと思ってな」
「あーまぁ、そうだね」
千冬は上の連中が連日のように議論する内容を半ば他人事のように揶揄した。
それに対して束も同じ様に呆れの笑みを浮かべた。
「いっくんがもう一人居たらいいのに……って、有象無象が思うのも無理も無いね～」
「秋斗の事か？」
束の言わんとする事を察して、千冬は疲れたように溜息を吐いた。
現状、束が保護している第二のＩＳ操縦者である織斑秋斗。その身の振り方については各国が議論していた。特に日本政府としては、織斑一夏と同様に秋斗にはＩＳ学園に入学して欲しいという強い要望があった。
一夏を白式の専属。秋斗の方を汎用的なデータ取得の専属。そうすれば少なくとも大方の問題について片がつくからだ。
故にＩＳ学園には織斑秋斗の学園入学がいつなのかを問い合わせ

る電話やメールが数多く送られていた。
　――――ちなみにその熱烈なラブコールに対して最前線で問い合わせに対応しているのが学園生徒会長の某少女である。
「――あの馬鹿（秋斗）は居ても居なくても面倒ばかり掛けてくれる」
　千冬は怒気を押し殺したような声でポツリと言った。
　その瞬間。千冬の手の中にあるマグカップが、ミシリッ……という音を立てた。
　千冬が秋斗に最後に会ったのは2年前のドイツが最後である。テロリストの襲撃を辛くも単独で逃げ切り、運よく束に保護されてしばらく経った頃だ。その際に千冬は、弟の無事な姿を見て素直に涙した。
　そして事の顛末を聞き、亡国機業という組織から身柄を守る為にしばらく束の所で身を隠すという親友と弟の判断を、姉として泣く泣く受け入れた。
　――――そして帰宅して靴跡に汚れた自宅のフローリングの掃除と、そこらじゅうに張り巡らされたトラップによって怪我をした警察官らに対する謝罪等に奔走した。近況も含め、家中を汚してその後始末を完全に放り投げてくれた弟に対して幾ばくか話したいことも多々ある。
　そんな気持ちをふと抱いた千冬は、現在の保護者である束に尋ねた。
「秋斗で思い出したがアイツは今どうしてるんだ？」
「ん～？」
　束は両手に持ったマグカップからココアを飲みつつ、考える様に唸った。
「元気にしてるんじゃないかぁ。先週ぐらいから友達のところに遊びに行ってるみたいだけど」
「……アイツも一夏と同様に自分の立場を理解していない愚か者か」
「理解はしてると思うけど、その上で前進する子なのは間違いないね♪　まぁ、何か起きたらこっちにある『あっくんセンサー』が反応するから大丈夫だと思うよ？　それに今のあっくんを如何にかしよう

と思ったら、それこそ本気でＩＳを持ち出さないとどうにも出来ないよん♪」

疲れた表情を浮かべる千冬を励ますつもりか、束は笑みを浮かべて言った。

しかしその笑みは千冬にとってはより深く辛い心労へと誘う悪魔の笑みの様に思えた。

「まぁ、無事ならそれで――」

その瞬間、千冬の脳裏にはＩＳを使って止めねば止まらぬほどに天災化した最愛の問題児の悪辣な笑みが過ぎったが、まともに考えたくないと思考を放棄した。

「あぁ、そう言えば出発前に面白い事、言ってたね」

「――なんだ？」

と、その瞬間。思い出した様に束は口を開いた。

「実はシミュレーターを学園に導入するって話をした時に――」

千冬はそうして放たれた束の言葉に壮絶に嫌な予感を覚えた。

交錯する人々　飛翔編

篠ノ之箒にとってＩＳ学園への入学は決して本意なモノでは無かった。故に世間の関心が最も高いＩＳに触れられる環境に身を置いても、そこに大した感慨を抱くことさえも余り無かった。

状況が、環境が己の自由を許さぬから。この先に起こりうる多くの危険から身を守る為の力が無いから。そうした外部の人間の判断によっての判断により半ば強制的に入学を強いられたのが、篠ノ之箒という少女のＩＳ学園に入学した来歴である。

その胸の内に秘める学園生活に対する熱意は他の多くの生徒に比べると余りにも薄く、それはＩＳに搭乗する初の訓練でも同じで、他の多くが眼を輝かせる中で箒は何処と無く冷めた目でＩＳを見ていた。

しかしその際に視線を上にあげると、そこには白式を纏って空を飛ぶ一夏の姿があった。

一夏は初めて纏うＩＳに対し、戸惑いと同時に喜色を顔に浮かべていた。

ＩＳは女性のモノという風潮が世間にはあるものの、男性が空を駆けるソレに対して興味を抱かないという話は余り聞かない。そして一夏もその類の人間の一人であった。

一夏も箒と同じく強制的にＩＳ学園への入学を強いられた生徒であるが、その理由はある意味で自業自得だという風に断じる事も出来た。しかしそれでも置かれてしまった状況に対する同情の念は抱けるものだった。

だが箒は、それが不謹慎だという自覚を持ちつつも、一夏が学園に置かれたというその状況そのものを実は素直に嬉しいと思っていた。

話相手が存在するという事。

理由はそれだけに過ぎないが、他の生徒のようにＩＳに対する強い熱意を抱けなかった箒にとって非常に救いになる話であった。加えてそこにはもう一人、理由は違えど学園に入学させられたラウラという生徒が居た。ラウラである。一夏とラウラという2人の存在が無

ければ、今の箒のＩＳ学園での生活は、何よりも耐え難い苦痛でしかなかっただろう。箒にはそんな確信があった。

姉がＩＳを生み出さなければ――

箒がそんな風に束に対し思った事は幾度もあった。

しかし話を聞けばラウラに関しては箒の姉の束に強い縁のある人間であり、そんなラウラの話を聞いて居たが故に箒は、束と再会した時に恨むよりも先に嬉しいと思う気持ちを抱くことが出来た。

束という存在は昔から天才だった。妹だからそう断じる事が出来た。そして常に箒の考えの及ばない領域で物事を考え、悩む人物であった。

その前提があり、その上でラウラから聞かされた束の話を聞いて箒は、〝あの〟天才をしてままならない事が世の中には有るのだと改めて知った様な気がした。

「――――っ」

そんな姉と再会して早々に箒は、束から『紅椿』というＩＳを直接託される事になった。

それは世界で唯一の第四世代機であり、同時に他の誰でも無い唯一、箒を守る為に製作された束の手製であった。

束が用意できる最高峰の護りがＩＳであった事。

それは箒にしてみれば非常に〝らしい〟と思う出来事で、相変わらずだと苦笑を浮かべるにたる出来事であった。

しかし同時に、非常に煩わしいほどの厄介事を持ち込んでくれたと昔のように溜息を吐きたくなった。

ＩＳ学園の生徒としてはあまりにやる気が薄い方だと自覚する箒にとって紅椿というＩＳは、まさに扱い悩む程に強大すぎる代物であった。

「――――っ」

「箒さん大丈夫？」

「えぇ、なんとか――――」

「無理はしないでね？」

「えぇ。大丈夫です……まだいけます」

箒は先導するＩＳの背をゆっくりと追うように紅椿を操作した。それと並行して呼びかける声に対して無事を伝えるが、お世辞にもそのバイザー越しにある表情は良いとは言えなかった。

適正ランクＣ。

箒は自身に宿るその平均よりもやや低いそのＩＳ適正ランクを少しばかり呪った。

「一旦降りましょう。流石にその表情で大丈夫だと言われても、ね？」

「すいません……」

「いいのよ。まずはゆっくりでもいいから慣れる事を重視しましょう」

「はい」

束から託された紅椿を乗りこなす為の訓練に際し、ひたすらにアリーナで試行錯誤する箒の傍らには常に学園の生徒会長である更識楯無の姿があった。〝天災〟篠ノ之束が作り出した世界で唯一の第四世代機の専用機持ちの護衛と、その訓練教官役として白羽の矢が立てられたからだ。

楯無と共に箒は紅椿を託されてからの放課後は常にＩＳ操縦訓練に時間を割いていた。

「ふぅ――――」

アリーナに降りた箒は紅椿の展開を解き、事前に用意しておいたアイスマスクで瞼と額を冷やした。

紅椿の高すぎる性能とは対照的に、露見する自分の凡庸さと適正ランクＣという現実を痛感して、箒はたった一日で白式の性能を引き出してみせた一夏の類稀なる〝才能〟に溜息を吐く。

しかし一夏の持つ非凡さについては幼少の頃から良く知っている為、そこに今更嫉妬の感情等浮かんではこなかった。

「――やっぱり打鉄とは違う？」

「えぇ、まるで違います。一夏はよくもまぁあんなに簡単に乗りこなしたと、今更ながら不思議に思いますよ」

「まぁ、白式は少し特殊な機体だし、良くも悪くも使う側に要求する内容もそう多くは無いからね。近づいて、斬る。極端な話、白式に要求

される要素はこの二つだし」
「……羨ましい限りです」
楯無の言葉に対し、箒は思わず深々とした溜息を吐いた。
箒の駆る紅椿は究極の汎用機である。つまり単独の性能で、何処までも状況に対して対応できる機体である。第四世代機とは束曰く、『機体本体の性能だけで完結する究極』がコンセプト。故に発揮できる性能は搭乗者が求めるその全てという優れものだ。その証拠にマニュアルで微細に調整できる項目が数百項にも及び、ＰＩＣやハイパーセンサーに類するＩＳならではの機能もまた一般的な量産機を遥かに凌駕する代物。――そしてそれ故に搭乗者に求められる最低水準が非常に高いというじゃじゃ馬な機体。
「こんな事言っては何ですが、紅椿も打鉄ぐらいに単純な機体でよかったのに……」
「まぁ、うん。その気持ちはわかるかも」
訓練で初めて使った打鉄を思い出し箒は実に贅沢な願いを思わず吐露した。
打鉄は良くも悪くも使いやすい機体であった。その操作性はオートで簡略化されたイメージインターフェースで、操作性は殆ど操縦者が直感で動かせるほど素直だ。そして性能が持ち合わせる得意不得意がハッキリしている点が、非常に初心者向けであった。
対して紅椿は余りにも上級者向けの機体であった。その性能はＩＳが非常に高度な〝精密機械〟であることを如実に教えてくれる程で、故に自他共に初心者だと認める箒はどうにも紅椿の性能を持て余していた。
「それにしても、ハイパーセンサーというのは非常に酔うものなんですね」
「学園にある打鉄のハイパーセンサーは文字通り誰でも乗れるように調整がしてあるからね。だけど2、3年生は訓練機でも使う際には独自の設定を入力して使うのがあたりまえになってくるわよ？　それに専用機を自分なりに調整するとなったら、その苦しみは誰でも必ず通る道。適正ランクＡと言っても最初からＩＳを乗りこなせるわけ

ではないし、センサー類の感覚の類だけはオートで設定できないもの」
「先輩も似たような経験があるんですか？」
「もちろんよ。自分にとって一番いい設定の数値を見つけることが専用機持ちの第一歩ね」
楯無は専用機を持つ先達としてアドバイスを送る。
「ふと思ったんですが、そう言えば一夏の白式は――」
「あ～彼の場合はこれまた少し特殊ね。織斑先生が予めいくらか調整した数値が上手い具合にはまったみたいなのよ」
「なんと言うか、そういうところは実に一夏らしいですね」
「でもその所為で『センスじゃどうにもならない部分を指導できる時間が増えたな』って織斑先生凄く悪辣に笑ってたから、どっちがいいのかは判断しかねるわね」
「……」
楯無のそんな注釈を受け、箒は不意に抱いた一夏に対する羨ましいという気持ちをかき消した。

☆

アリーナ使用時間の終わりが差し迫り楯無は箒に、実機による訓練はコレで最後しようと提案し、本日教えた事柄を一人でやってみせるように指示を出した。
空を舞う真紅のＩＳ。その動きを地上から見守る傍ら、楯無は紅椿の〝テストパイロット〟を引き受け、その機体の完成に多大な貢献をしたという人物――織斑秋斗の持つであろう〝操縦技術〟の高さに対してふと興味を抱いた。
追加装備に頼らず、本体が持つその性能のみで全ての状況に対応する汎用機の究極系。そんな紅椿の開発過程には、かのダイオウイカ捕獲という偉業が存在した。そしてその際に対応したのが織斑秋斗であった。
織斑秋斗は深海という特殊な状況で試作ＩＳを乗りこなし、作戦と

いう一種の縛りの中で必要とされた対応を見事にやってのけた。それはダイオウイカの捕獲という記録の中では、添え物のように存在する周知の事実であったが、故に当初は見落とされていた。

それは楯無にしても同じであった。

そして気づいてしまうとその事実がどれほどの事かは想像に容易いものであった。恐らくその荒唐無稽な逸話の中に秘められた織斑秋斗の非凡さを、この時点で気に留めた者はそう多くはないと楯無は感じだ。そして同時に、出来ればそのまま一生、気づかれるなと思った。

織斑秋斗に関する情報の開示要求とその身柄をＩＳ学園の中で匿う事を求める声は連日のように各所から楯無の下に届いているが、その代理保護者である篠ノ之束は疎か、その実姉である織斑千冬にしても織斑秋斗に関しては所謂〝放任〟というスタンスをとっており、楯無はＩＳ学園とカウンター暗部の両面で組織の長として君臨する為、日夜、世界中の関係者からネチネチ、クドクドと鬱陶しい程の突き上げを食らっていた。

そこへＩＳの操縦技術が実は非常に高いという話が加われば、どれほどのモノになるか？

もはや考えたくも無い。

「――――まぁ、気にしたって仕方がないわね。もう彼の事は」

楯無は無理やり思考を切り替えた。

真面目な話、今後織斑秋斗はどうするのだろうか？

楯無はふと疑問に思った。

このまま社会に関わらず、どこかで生きていくのだろうか？　しかし〝あの〟篠ノ之束にしても、数年の時を経て社会に復帰したのだから、どこかのタイミングで織斑秋斗も表に出てくるのではないかと、楯無の常識的な部分の思考が思わせた。

「まぁ、私には関係の無い話であって欲しいわね」

アリーナの使用終了の時間が訪れると、楯無は箒を伴い今度は仮想訓練室へと足を運んだ。

☆

束が導入したシミュレーターは、放課後の訓練における生徒の訓練機待ちというのっぴきならない状況を見事に改善してのけた。

一時期は仮想訓練室に生徒が押し寄せ、その順番調整に楯無自ら立ち回ったこともあったが、差し迫ったタッグマッチトーナメントの影響もあってか1年生は実機による訓練、2年生、3年生はシミュレーターという訓練の住み分けが行われるようになった。

現在のＩＳ学園における充実した訓練の体制は、学園のＯＧが来年から学園に再入学したいという声を上げ、2、3年生が本気で留年を検討する程である。

その点は楯無も同意であった。

「――さて、準備はいいかしら？」

「えぇ。いつでも」

仮想訓練室を総括する束の従者――クロエ・クロニクルから仮想訓練室の使用の許可を得た箒と楯無は、専用のベッドに横たわり、専用のヘッドギアを装着して待機状態のＩＳを接続した。

楯無にはロシアの国家代表という側面も有り、仮想空間で愛機を使うことには幾ばくかの難題も存在した。仮想空間に登録する際に機体スペックを晒す事を要求されるからだ。しかし間近で天災の研究に触れられる希少価値と、あわよくば天災と御近づきになれれば最良という政府関係者の思惑もあり、その問題は瞬く間に解決した。

仮想空間の中で愛用機を展開する傍ら、楯無はどこの専用機持ちの代表候補生も似たり寄ったりの状態だという事を察した。隣のベッドには3年生の専用機持ちが横たわっていたからだ。

考える事は国を隔てても同じかという笑みを零しながら、楯無は仮想空間にダイブした。

実機で訓練した時と同様に、今度は模擬戦闘と言う形をとり、楯無は箒の駆る紅椿に相対する。

楯無の駆るＩＳは天衣無縫という言葉が良く似合った。それ程に

ミステリアス・レイディというＩＳはトリッキーな機体である。その性能は世界最小の兵装とも揶揄されるナノマシンを制御する事に特化し、それを散布する事で〝水分〟を武器や鎧に変幻させる性能を持つ。

――――そしてそれ故に海風の吹きすさぶ人工島に立地する〝ＩＳ学園〟という環境においては、文字通りの最強を誇る機体であった。

フィールドの設定はデフォルトの市街地。オブジェクトとして高層ビルが乱立する首都を模した場所を選択した。その上で箒を気遣い、訓練を見世物にしない為に外部から新たにログインする者が居ないようパスワードで仮想空間にロックを施した。

そうした調整が終わり慣らし走行にも似た相対速度をあわせての軽い打ち合いを続ける事、数分――――

堅実に一歩ずつ紅椿の性能に追従してゆく箒の成長を微笑ましい気持ちで見守る楯無の下に、それは姿を現した。

「――――なんですか、あれは？」

それは〝黒い怪鳥〟――もしくは〝黒い怪魚〟と形容する以外に無い程、不気味なＩＳであった。

箒は新たに出現したＩＳを見て困惑した声を漏らす。

仮想訓練を行う際の注意点として、乱入と言う形で敵性のＣＰＵが時々戦闘を仕掛けてくることがある。大抵はゴーレムⅡで、時々レアキャラとしてゴーレムⅢという名称を持った多腕多脚のアッシュグレイの機体が現れる。

しかしこの瞬間、楯無と箒の下に飛来したそれは、少なくとも今までＩＳ学園の生徒が相対した仮想訓練の敵性ＣＰＵとは一線を画す剣呑な雰囲気が備わっていた。

――――そしてそれ以前に〝ＣＰＵ〟ですらもなかった。

「――――識別信号は学園の生徒のモノ？　だけど〝Ｕｎｋｎｏｗｎ〟って何？」

解析情報からそれはＩＳ学園の生徒のモノであると言う情報が

入ってきた。
その情報に思わず困惑する箒と楯無だったが、しかしそんな2人を余所にその黒いＩＳはアクションを起こした。
「っ!?　ロックオン警報！　散開して！」
咄嗟に声を荒げた楯無の指示で箒は急速に高度を上げた。
その刹那、非実弾兵装（レーザー）に匹敵する速度の射撃が放たれた。
カァオ――――
空気を切り裂くような独特の甲高い発砲音は、レーザー兵装のそれとは一線を画していた。
また同時に着弾後の破壊痕の規模も尋常では無かった。
乱立する建物オブジェクトが一部崩れ落ちる様を見て、楯無はすぐにその正体を看破する。
「――――レールキャノン？」
それはドイツが作った試製の第三世代機が、実験的に搭載したというレールガンに他ならない代物であった。
楯無も独自のルートで仕入れた資料でしかお目にかかったことが無い特殊な兵装で、それを直接目にした事は一度も無かったが、それ以外に形容できる性能ではないと判断した。
混乱の中で思考が戦闘態勢に移行した。
同時に、楯無は箒を背に庇いながら黒いＩＳに相対した。
「先輩！」
「ここで引き下がるのも癪だし、少し様子を見ましょう。箒ちゃんは下がって――――」
「いえ、私も戦います！」
「そう……無理はしないでね？　撃墜されるとそれなりに痛いらしいから」
「嫌というほど知ってます！」
箒は紅椿主兵装の刀〝空割〟を正眼に構えた。
「それにしても無駄に大きいわね」
「アレもＩＳでしょうか？」
「――――みたいね」

通常のＩＳの平均体高がおよそ３ｍ弱というところを、件の黒いＩＳは全長およそ１２ｍに近いほどの巨躯を持っていた。加えてその形状も異質で、形を抽象的に表現するならば横倒しの円錐の底部に枝を四方に広げ、更に葉を生やしたような形だ。

固定型の巨大なウィングバインダーが四機、本体から後方に大きく伸びた細い尾を一本棚引かせる異形。そして機体の底――所謂魚の腹部にあてはまる部分には、まるで猛禽の脚のような形状のレールキャノンを二門備え、機体上部の背びれに似た部分には、脚部のレールキャノンとは別種の兵装であろう砲身のような突起が一基備わっている。

「ミステリアス・レイディ！」

楯無は主兵装である槍――ナノマシン制御用のコントロールユニットを兼ねるそれを天高く掲げて、空気中の水分を急速に集めた。そして周囲に瀑布のような巨大な水の壁を展開して、障壁を作った。

楯無は発生させた水塊を一纏めにして竜巻のような奔流を作り出し、それを一直線に敵ＩＳに叩きつける。

――――が、その直後に黒いＩＳはまるで音速戦闘機がアフターバーナーを吹かせたような尋常でない加速力で以って、その場から急速に離脱した。そして大きく迂回しながら２人に接近してその脚部の砲門を向けた。

「っ!?」

その巨躯に似合わぬ機動力は、楯無が操る水の勢いを速力だけで振り切る程であった。

「速い！」

「援護します！　先輩はそのまま攻撃を！」

「了解！」

箒は黒いＩＳから放たれる砲撃の一部を切り払う事で楯無を援護した。

水の檻に一度でも捕らわれてしまえば脱出は不可。それぞれの機体の性能と特徴を鑑みて、一瞬で各々の役目を決めた楯無と箒は、２人掛かりで黒いＩＳに立ち向う。

攻撃は楯無が、守備は箒が――――

それぞれが得意の位置で応戦するが、しかしそんな2人の連携をあざ笑うかのように黒いＩＳはまるで海中を泳ぎ回る巨大な鮫のように空を縦横を飛び回った。

「くっ！」

「箒ちゃん！」

「大丈夫です！　まだいけます！」

黒いＩＳの主兵装は猛禽の脚部にも似た機体下部のレールキャノン。

彼我の距離と機体本体とのサイズから相対的にアサルトライフル程度の口径にも見えるが、それは実は平均的なＩＳが使用するスナイパーキャノンよりも大口径な代物であった。

性能的に敵の砲撃を切り払う事を可能にする紅椿であっても、その防御を容易く貫通してくるレールキャノンの攻撃力は決して侮れるものではない。

苦悶の声を上げる箒を見て楯無は状況が非常に不利である事を察した。

「なんて非常識な――――」

音速戦闘機にも似た航空力学に忠実な形状を持つが故に、そのマニューバの軌道のセオリーを先読みして攻撃を仕掛けた瞬間だった。黒いＩＳは攻撃ヘリのような横軸方向のスライド移動で、楯無の攻撃を回避した。付け加えるとその動きの最中には急停止からの急加速というＩＳ特有のＰＩＣ制御を前提とする変則機動のおまけをつけてだ。

「もう！　なんなのよコイツ――」

水の防壁程度では殺しきれない威力の高さの砲撃を連射しまくる攻撃スタイル。

遠距離を得意とするミステリアス・レイディよりも更にアウトレンジからの砲撃を得意とするような性能。

音速を超えた領域の中でも平然と精密なＰＩＣ制御をやってのける手腕。

的の大きな七面鳥という認識は早々に消え、楯無をしてその黒いＩＳは文字通りの怪物的な存在だという認識に変わった。
「先輩！」
「っ!?」
箒がカバーしきれない程の砲撃が連射された。
楯無は咄嗟に攻勢に移していた水の防壁を一端解除し、それを防御に回した。
――――が、それでもレールキャノンの砲撃は展開した水の障壁を貫通した。
咄嗟の機体制御で何とか直撃を避けるも、それは回避をしたと呼ぶには余りにも重い傷跡を残した。
装甲を削りながらの回避だったが、その掠めた一発の砲撃でも絶対防御が発動したのだ。
直撃ならばまだしも掠めただけ――
たったそれだけで削りとられたシールドエネルギー量は、楯無の背筋は凍りつかせるには十分だった。
「箒ちゃん、下がって――――」
「しかし！」
「邪魔だって言ってるのよ！　巻き込まれたくなかったら下がりなさい！」
「っ!?　了解！」
仮想空間での撃墜はそのまま強制ログアウトである。そして箒は既に、紅椿でこれ以上の戦闘を続けるのが難しいほどのダメージを負っていた。
強い口調で放たれた楯無の指示に唇を噛みながら下がった箒だったが、それでもすぐにカバーに入れるぎりぎりの位置に陣取り、楯無の戦いを見守った。
「……あまり生徒会長（学園最強）を舐めない事ね！」
楯無は槍を構え、遊泳するように空を泳ぎまわる敵ＩＳを見据えた。
ロシアの国家代表である楯無をして、現実にＩＳを用いてこの様な

〝戦い方〟をした経験はなかった。
敵は〝機動砲台〟と呼ぶに相応しい戦い方を得意とし、モンドグロッソの闘技用アリーナという狭い領域の中にはそぐわない性能を持っている。故にその黒いＩＳは、今まで出会ったどの国のＩＳよりも異質で特異な存在だった。
しかしそれはそれ――
そんな事を理由に負けてやれる程、楯無の背負ったモノは軽くは無い。常々自らを〝最強〟と口にするのは、背負ったその重さを忘れぬ為なのだ。
楯無は箒が下がったのをチラリと横目で確認して、縦横に飛びまわる黒いＩＳを包囲するように水を操りながら、槍の先端に格納した４連装ガトリングキャノンを放った。
攻撃の片手間に展開する水のベール程度では敵の砲撃を防ぐには心もとなく、かといって守勢に回れば敵の包囲攻撃を許す事になる。
故にこの非常識なＩＳを倒すには切り札を使うしかない。
（――チャンスは一瞬ね）
楯無は仮想空間にあるまじき〝緊張の汗〟が頬を滑り落ちるような感覚を覚えた。
これから放つ技は本来はモンドグロッソの無差別級と呼ばれる領域で戦い、且つ勝利する為に調整して作り上げた専用の技だ。その発動には幾ばくかの隙がある為、本来ならその隙を消す為に〝挑発〟と言った類の精神攻撃で敵の油断や虚を誘うのが常。
しかしこの状況において敵に楯無の思惑は通じず、また設定上の環境が『開かれた空間』である為に決して有利とは言えない。
しかしそれでも――
それでも――
「――来いっ！」
楯無が人工的に作りだした水の領域。
その稚拙さをあざ笑うかのように自由に大空を泳ぐ黒い怪魚は、まるで獲物を見据えた鮫のようにその機首をミステリアス・レイディに向けた。

その黒い背びれを模した一際大きな砲門に光が収束する――――

常識的に考えた場合、その光は荷電粒子砲かレーザー兵装の類だろう。しかし彼我との距離が詰まっても放たれる気配が無く、同時に楯無の戦闘者としての直感が強かに警鐘を鳴らしていた。

「どうせそれも、マトモな武装じゃないんでしょ！」

背びれに収束した光の正体を見極める為に楯無は眼を見開く。

この黒いＩＳに限って常識を当てはめるな。ただひたすらにそれを見極める事に精神を研ぎ澄ませた楯無は、針の穴を通すような集中力で、唯一最大威力で反撃可能なその糸口を全力で手繰りとった。

「――――っ！」

黒いＩＳはレールキャノンを牽制に放つと同時、〝瞬時加速〟と呼ぶ以外に他ならない速度で楯無に迫った。

そして黒い背びれに似た部分から青いレーザーを薙ぎ払うように発射した。

――――しかし交錯する一瞬とも呼べる刹那の時間を制したのは楯無だった。

紙一重で楯無は回避に成功。対して黒いＩＳの放った横薙ぎのレーザーは空振りに終った。

閃光が走り、地表に乱立する無数のオブジェクトが切り裂れた。

レーザーブレード。それが黒いＩＳの背鰭から放たれた武装の正体であった。

「これで――――」

ハイパーセンサーを駆使して知覚した一瞬という短い時間の中で、楯無は黒いＩＳの巨躯の異形を遂に間近で目の当たりにした。

それは余りにも大きく――――

余りにも強大で――――

そして余りにも非常識だった――――。

その時の楯無の心に湧き上がった感情は、久しく感じていなかった恐怖と呼ばれる類のものであった。

ＩＳを手にしてから手に入れた名声、賞賛、信頼、自負――――それは一人の少女が安寧のために積み上げたあらゆるモノを焼き尽く

し、等しく灰に変えるであろう脅威が現実と化した姿。黒いＩＳは楯無にそんな怪物を連想させた。

「――消えろ、イレギュラー！」

楯無は心の底から叫んだ。

それは恐怖であり、怒りであり、積み上げた安寧の世界を守る為の威嚇でもあった。

楯無は水を操ると同時に領域内に広く散布させたナノマシンを急速に振動させた。

周囲の水分を一気に沸騰させる。それにより微細な水分は気化し、その体積を一気に膨張させる。

――そして仮想世界が白に包まれる。

ミステリアス・レイディの誇る最大、最強の必殺武装『クリアパッション』。何もかもを吹き飛ばす大規模な水蒸気爆発に黒いＩＳは文字通り飲み込まれた。

そして楯無自身の意識もそれから程なくして仮想空間から切り離された。

☆

「――幽霊（ゴースト）ＩＳ？　えっと、なんですかソレ？」

ある日の昼下がり。

織斑一夏は学園の食堂にふらりと訪れた同学園の二年生――新聞部員〝黛薫子〟から眉唾な噂を聞かされた。

「一年生で遭遇したって話は聞かないから、あんまりピンとこないかなぁ。二年生とか三年生では割りと盛り上がってる噂なんだけどね」

「へぇ」

夏も近くと言えば確かに近い頃。しかし怪談話をするには聊か早いような気がした。

しかし別の観点から、一夏は少しだけその噂に興味を抱いた。地元中学や近隣のそれにもあった眉唾な噂話。所謂〝学園７不思議〟に相当する代物が、このＩＳ学園にも存在していたという事実に、素直

な興味を抱いたのだ。
一夏は黛の話を掘り下げて聞く事にした。
幽霊ＩＳ。
曰くそれは、シミュレーターが導入されてから程なくして発生した噂である。
訓練中に突如乱入してくる謎の敵性のＩＳだが、その識別コードはＣＰＵのモノでは無くＩＳ学園の生徒のモノ。
だが正体は決して判らず、通信やコアネットワークでの呼びかけには一切応答することはない。
しかし時折、回線から不気味な鼻唄を垂れ流す事があり、遭遇すると例外なくその隔絶した戦闘力で、容赦の無い攻撃を無差別に浴びせてくるという。
「――それは誰かの悪戯なのでは？」
黛から話を聞かされたのは一夏と同じテーブルに座って昼食に箸をつけていた者達も同様であった。
セシリア、鈴、ラウラ。
中でも黛の話に特にに胡散臭そうな表情を浮かべたセシリアは、黛に対して真っ先にそんな感想を返した。
「同感。それって幽霊って言うより、ゲーセンとかに居るマナーの悪い荒しじゃない？」
そしてセシリアに続けて鈴が言った。だがセシリアの意見と同意の様で、その実、態度だけは対照的に興味ありという風だ。
「――ですが仮にも学園に入学した生徒でしょう？　そんな程度の低い悪戯に腐心する者など本当にいるのでしょうか？」
「だな。しかし仮にそういった者がいたとして、教官や博士の眼を欺ききれるものだろうか？」
すると今度はラウラが眼を伏せ腕を組んで断じた。
「まぁ。無理だわな」
「無理ね」
「無理でしょうね」
「無理だよねぇ」

織斑千冬と篠ノ之束。この両名の監視の眼を潜り抜けて悪戯を成功させる事が果たして可能か？

それを問うラウラの意見には、黛も含めたその場の一同の意見が一致した。

「――――だけどそれが可能なんだから〝幽霊〟って呼ばれてるんだよね？」

「シャルか？」

「ごめん、遅くなった」

ふと、そこに第三者の声が掛けられた。

一同に話しかけたのは昼食のパスタの乗ったトレイを持って佇む３組のクラス代表――シャルロット・デュノア。その後ろには篠ノ之箒と、４組のクラス代表の更識簪の姿があった。

「どうも」

「おじゃまします……」

箒は素っ気無く、簪はおずおずと黛に会釈する。

すると黛は「――――おやおや気づけば一年生の専用機持ちが全員揃ってるよ」と、この場に集った錚々たる面子を見て笑みを浮かべた。そして息を吸うような自然な動作で、その手をポケットの中のデジカメに伸ばしていた。

「題して『織斑ハーレム☆正妻問答』って所かな？」

「すいません先輩！　マジで止めてください、先輩！　いや、本当にマジでお願いします！」

悪戯っぽく笑いながらファインダーを覗き込む黛を見て、一夏は直ぐ様土下座の勢いで頭を下げた。

そんな一夏の姿に対し、セシリアはたおやかに、鈴は悪戯っぽい顔で苦笑し、ラウラはあきれた様子で素っ気無く視線を逸らす。箒と簪とシャルロットも半ばあきれの顔を浮かべた。

束の合同授業や、仮想訓練室での訓練も含めて必然的にクラスの垣根を越えた交流の機会が増え、その結果〝専用機〟という共通した部分が彼女らの友好を結ぶ遠縁となった。

今日の集まりはそうして出来た物だと一夏は黛に説明したが、そん

な真相等ゴシップを好む者からすればゴミクズ同然である。
「――――まぁ、これ以上苛めてもアレだし、今日のところはこの辺で勘弁しておきますかね」
「出来れば、二度とゴメンですよ……」
一通り茶化したところで、黛はデジカメをポケットに戻した。そして気疲れから溜息交じりの声を出す一夏に対し、しめしめと笑う。
「それより先輩。幽霊ＩＳの話をしてたんじゃないんですか？」
「あぁ。そうだったわね。ゴメンね」
一夏に助け舟を出すようにして、シャルロットはこれ見よがしに昼食を載せたトレイを見せつつ、話を元の路線に戻した。
そこで一同の箸を止めていたと察した黛は、手早く用件を告げた。
「幽霊ＩＳに関して目撃情報が増えてるのよ。それでもし一年生で遭遇したって話を聞いたら、教えて欲しいって話よ」
「はぁ、まぁそれくらいなら別に――――でもなんだって俺達に？」
「遭遇した子は何れもパイロット志望で、ＩＳの技量にはそれなりに自信を持ってる子ばかりなのよ。だから多分、もし一年生が幽霊ＩＳの洗礼を受ける事になるなら、必ず貴方達専用機持ちが最初になるかなと思ってね」
「なるほど」
新聞部としては事件の謎を解き明すというより、一種の流行としてこの話題を取り上げた記事を書くという。
そうした話を一同に聞かせた後、黛は去っていった。
「幽霊ＩＳ、ね――――」
テーブルにシャルロットと簪と箒を加えた後、一同の食事は再開した。
「まぁ、多分。束さんあたりの悪戯だろうな。度が過ぎたら千冬姉が黙っちゃいないだろうし、そう心配する事でも無いな」
一夏は鯖の味噌煮定食に舌鼓を打ちつつ、楽観した意見を漏らした。
「そう言えばさ。一夏って幽霊が苦手なタイプだっけ？」
「どうだろう？　そりゃあゾッとする話とかはあんまり得意じゃない

けど――――」

鈴の問いに一夏はふと視線を宙に向けた。

すると不意に一夏の脳裏には、中学時代に起こった嫌な思い出の一つが過ぎった。

「そういえば中3の頃にさ、丁度俺が家に一人でいる時に秋斗の奴が電話で『シャイニング』って映画を薦めてきたんだよ。面白いからって。それで秋斗の部屋にあったソフトを借りて見た後にアイツ――――」

「何かあったの？」

鈴の質問を皮切りに、一同の囲むテーブルでの話題はオカルトな方向へと突き進んだ。

「――――個人的に『ミスト』という映画は中々くるものがあったな」

「え？　ラウラはあの映画、そうなの？」

「うむ。視界不良の中に潜む得体の知れない何かは想像の余地があり過ぎてな。それが実害を振りまくならば尚更だ」

「……そうなんだ」

「シャルロットはどうなんだ？」

「僕？　僕はホラーはあんまり見ないかなぁ。でも幽霊が出てくる映画なら『キャスパー』が割りと好きかも」

「ホラーと呼ぶには難しいジャンルかもしれませんが、わたくしは『シックス・センス』が好きですわね」

「ブギーマンとフレディーはホラーに含まれるのかな……」

「スプラッター系はホラーとは違うんじゃないの？　箒はどう思う？」

「……」

「箒？」

和気藹々とオカルトやホラーな題材を扱う映画の話が進む中、箒だけが黙々と食事に集中していた。

鈴の呼びかける声を受けて箒はようやく顔を上げる。

「ん？　あぁ、すまない。なんだ？」

「……あんたどうしたの？　もしかしてこの手の話題、苦手な感じ？」

「いや、そういうわけではないんだ。ただその――――すまん、なんでもない。忘れてくれ」
「……？」
首をかしげる鈴に向けて、箒はなんでも無いという平静を装った。
箒の脳裏には先日のシミュレーターで起こった戦いの事がこびりついていた。
突然襲ってきた謎の黒い異形のＩＳ。それを決死の覚悟で打ち倒そうとした楯無の姿を箒は今尚鮮明に思い出せる。あの瞬間、楯無は必殺の水蒸気爆発で自分もろとも敵を討ち払うと覚悟を決め、そして文字通りに黒いＩＳを相打ちに巻き込んで見せた。
だがその直後に箒が目の当たりにしたのは今尚信じ難い光景だった。
爆発の直後に箒が見た光景――――
それは爆発によって溶けた黒い装甲を吹き飛ばし、巨躯の中から蛹を脱ぎ捨てるように離脱した細身の人型のＩＳの姿だった。
驚く事にその形状は他でも無い箒の駆る『紅椿』に酷似していた。
鳥や魚に酷似した巨大な装甲を廃して空中に飛び出した黒い人型は、アンロックユニットの無い全身装甲の黒い『紅椿』と呼ぶに相応しい形状で、それは自らの爆発で瀕死になったミステリアス・レイディを一撃で屠りさり、直後に退避していた箒に襲い掛かった。
楯無が撃墜によって仮想空間から弾き出されてから2分も経たない間に起こった出来事。
それが事の顛末であり、決着の光景だった。
その光景を思い出し、箒は思わず割り箸ごと拳を握りこんだ。
（文字通り、手も足も出なかった――――）
幼少の頃より剣を嗜み、普通の高校生に比べて白兵戦にはそれなり以上の自信があった。
そして己には紅椿という稀代の天災が作り上げた現状世界最強のＩＳがあった。
――――しかしそれでも勝てなかった。
敗因はただ一つ。

剣だけでは到達出来ぬ〝ＩＳ〟という分野そのものに対する理解の深さと経験が足りなかった事だ。

（――奴が現れる条件はなんだ？）

学園で噂になりつつある幽霊ＩＳ。その正体が一体どこの誰の仕業であるかは想像がついた。そして同じ結論を楯無も抱いている様子だった。しかしそれを明かすとなると楯無も箒も自らの敗北を衆目に晒す事になる為、両者は暗黙の内に出来事を胸の内に秘める事にした。

臥薪嘗胆の念を抱き我関せずという態度を周囲に貫く箒だったが、その胸中には先日までには無かった強い炎が揺らめいていた。

それはＩＳ学園に属し、競技者として高みを目指す他多くの生徒と同じ〝強くなりたい〟という強い憤りであった。

（――次は負けんぞ！）

箒は憤る心をかみ殺すように白米を噛み締めつつ、黒い幽霊ＩＳへのリベンジを誓った。

夢幻の中の可能性

『究極とは何ぞや？』

それは一年ほど前。タバネサブマリンがまだ世界を放浪し、ラウラがまだそこに居なかった頃。秋斗、束、クロエの一同が揃っての夕食の席で交わされた一つの論争のテーマである。

「究極とは常に一つだよ！　『極』っていう字がそこにある以上、有象無象の追従を許しちゃならないのさ！」

究極を論ずるにはまず根本たるテーマが必要だった。そしてこの時、食卓に居並ぶ面々にとって最もポピュラーな話題がＩＳに関する事であった為に、議題は自然と〝究極のＩＳとは何か〟という方向に移った。

「――〝単一〟が保有するその性能のみで全てにおいて完結する汎用の権化〟！　それこそが究極のＩＳだよ！」

上座に位置する席に座る天災――篠ノ之束が一同に向けてそうドヤ顔で言った。

束の言う究極のＩＳとは『個が宿す性能の高さの追求』に他ならず、他の追従を許さぬ孤高の存在であり、同時にあらゆる存在を神の如き視点で見下せる最高峰の技術の化身であった。

それを宿したＩＳこそが究極である――

当時、そんな風に束は言った。

そしてこの時、同じ食卓を囲んでいた少女――クロエ・クロニクルにしても同じ意見であった。

性能を追求する事こそが究極に至る道である。それ故に己は自然に逆らう形でこの世に生を受けたのだと、クロエはそんな風に自覚していたからだ。

しかしそれはそれ――

束の言う言葉のみが唯一究極の形だとは限らないと、その場で口を挟んだ男が居た。

「別に単一で性能が完結しなくても、用途に合わせて際限なく変化できるならその方が重要だろ？」

「ほぅ。と、言うと？」
織斑秋斗であった。
秋斗は「確かに性能を追求する事は究極に至るに必要な要素だ」と断言した上で、そこへ更に付け加えるようにして意見を述べた。
「一つの時代の中で究極の技術を持って完成した代物でも、恐らくその後１０年足らずで新しい技術に凌駕されると思う。スーファミが、ネオジオが、プレステが、サターンが――そしてドリキャスにしたってそうだった。だから性能を追求した結果だけが〝究極〟ってのは、正直ちょっとどうかと思うね。俺は」
「――つまりあっくんはどういった形が究極だと思うんだい？」
「必要に応じて臨機応変に対応できる多様性――それを受け入れる器、かな？　ローテクかもだが、俺はコレを更に昇華させた代物が〝究極〟だと思うね」
「ほほぅ」
「これは――」
秋斗は資料として一枚の画像をネットから検索し、束とクロエの双方に見せた。
それはテクノロジーとして見るならば既に過ぎ去った過去の代物であったが、過去の遺物とはいえ一種の狂気のようなものが未だに強く滲み出てる様にも感じた。
際限なく進化を遂げ、元の姿から余りに変わり果てた〝機械の異形〟、否、〝機械の塔〟――
「――なるほど。あっくんはこれみたいなのが究極だと言うんだね？」
「正確に言うと、この先だな。俺はコイツに一種の究極を見たぜ？」
束は秋斗の示した己とは別の究極を知り笑みを浮かべていた。
「――さて」
クロエは過去の振り返り、その時の会話こそがそもそもの発端だったのではと苦笑を漏らした。
束と秋斗の考える究極の形はそれぞれ異なるモノであった。しかしどちらもが互いの意見を尊重し、そして互いに尊重したが故に今日

のＩＳ学園における〝幽霊ＩＳの騒動〟は起こったと言える。
『究極の性能を有する個体』か？
『無限の可能性を持つ個体』か？
そしてそのどちらがより究極に近いか？
その時の議論は遂に決着が着かず、そして今日まで持ち越された。
「束様、本日の記録結果です」
「お、集めてくれたのかい？　ありがとね、くーちゃん！」
「いえいえ、お気になさらず」
クロエは仮想領域内で行われた幽霊ＩＳの稼動記録を集め、その観察結果を束に報告した。
「それにしても周囲が随分と騒がしくなりましたね」
「そうだね～。潜水艦に住んでた頃には無かった喧騒だね。束さんも最近、きゃっきゃうふふと騒ぐ小娘共にはイラッとする事があるよ。今期のあいつ等の成績はオール１で決定だね♪」
「流石にそれは可哀想ですのでおやめくださいませ。それとそちらではなくて、ですね。件の〝幽霊ＩＳ〟の方です」
「ん？　何かあったのかい？」
「仮想訓練室の管理を勤める立場ですので仕方の無い事かもしれませんが、最近生徒達からの追及が少々――――」
「あ～」
片手間に仮想空間内での記録映像を再生する束は、クロエの言わんとする事を察し視線をふと宙に向けた。
そしてしばし考えた末に、口を開く――
「――でもちーちゃんも黙認してくれてるし、放っておいていいんじゃないかな？」
「そうですね。ですが――――」
「どうしたの？」
「ラウラと織斑一夏と篠ノ之箒と更識楯無の追求が最近、度を越してウザイです。そして各国の代表候補生らも」
クロエのその冷静且つ端的で歯に衣の着せぬ物言いには、流石の束も不意をつかれ、思わず噴出した。

☆

例年行われる学園のトーナメントのイベントは、今年はタッグマッチという形式に変わった。

その仕様変更の理由が織斑一夏が入学した所為か、それとも一年生に多くの専用機持ちが揃っていた所為か――――

結局それについての言及は遂にされる事は無かったが、結果として催し自体は成功を収めた。

一年生の部門の優勝は三組、四組の代表候補生、シャルロット、簪の『チーム：実弾重火力』。

準優勝はオルコット、ラウラの『チーム：ロングレンジキャノン』。

3位は鈴、ハミルトンの『チーム：アサルト&チャージ』。

そして衆目の的であった織斑一夏と、第四世代機を手にした篠ノ之箒の『チーム：ブレードオンリー』は、総合成績4位であった。

――――ちなみに余談だが、一部生徒の間では『優勝した場合、織斑と付き合える券』が発行されると噂されていたらしいが、最終的にそれについての真偽の程は未だ不明のままである。

閑話休題。

タッグマッチトーナメントとは別に、この一ヶ月の間で幽霊ＩＳの噂には幾つもの尾ひれがついていた。トーナメントに向けて仮想空間訓練を続ける生徒らを無差別に襲撃する黒いＩＳには、件の〝怪鳥〟とは別の姿があるという噂である。

対戦した生徒の目撃情報を集計すると、最も多く目撃されたのは〝黒い怪鳥〟の姿。次点で多いのが半人半戦車の異形だ。

しかし不思議な事に大きなシルエットは共通していても、武装を初め、細かな形状が遭遇する度に微妙に違うという意見もあり、結果として混乱が更に加速した。

そんな生徒間の噂は教員の間にまで広がり、その際に意見を求められた織斑千冬は『――――アレに関しての事情は知っている。放っておけ』と、答えた。

『――不気味であるのは事実だが、所詮電子世界でしか存在しない幻だ。現実世界で実害を齎すもので無い。それに例年見るに耐えない〝あの〟トーナメントが、それなりに面白い物になったのは件の幽霊に叩きのめされたお陰だろう？　奴が気に入らん、もしくは怖いと思うなら、それこそ己の実力で奴を排除してみせろ。お前達にそれだけの根性が有るなら、な――――』

それは挑発の混ざった言葉だったが、それを放ったのが他ならぬ世界最強（ブリュンヒルデ）であった所為か、結果的に生徒のやる気は大いに焚きつけられた。

――そして今日も幽霊ＩＳの噂は既に学園中を席巻しており、その正体についての情報を求める声が其処かしこで囁かれていた。

最近の噂によると幽霊ＩＳは、既に中国とイギリスの代表候補生をそれぞれ負かしたという。

そうした中、一部の生徒はその正体を知っているであろう仮想訓練室の管理人であるクロエと、仮想訓練室の生みの親の束に直接正体を尋ねた。

しかし彼女らはどのような言葉で質問を投げかけても頑なにその答えを濁し続けた。

「――――直接の言及こそされていませんが、恐らく一部の生徒には気づかれていると思います。束様、いかがなさいますか？」

「うん♪　放っておこう。知ったこっちゃ無いぜ。それより今回はどんなのを作ってくれたのか、気にならない？」

「もちろん気になります」

「よろしい、ならば視聴しよう」

「はい！」

ＩＳ学園の敷地内にある束の拠点。

その部屋の一室では、先日行われた仮想空間での戦いを視聴する準備が行われていた。

映像は湾曲した天井を直接使った大型スクリーンによるプロジェクターで、音声は束が趣味で開発した〝椅子と一体型の６４・８ｃｈ〟という規模のスピーカーで臨場感たっぷりに再生され、そこはもは

や並みの映画館を凌駕する視聴室と化した。
これからその部屋で映し出されるのは幽霊ＩＳの行った仮想空間での戦闘模様である。
菓子とコーラを手にした束とクロエは、ふかふかの視聴用ソファに寝そべるように並んで座り、部屋の明かりを落とした。
中国の第三世代ＩＳ――甲龍との戦いの中で幽霊ＩＳは、喩えるならばＡ―１０サンダーボルトのような対戦車グレネードとガトリングキャノンを搭載した姿であった。
必死に食い下がる甲龍だったが、決して近接戦闘に持ち込ませない遠距離からの嵐のような砲撃の前に、攻めきれない様子だ。その様を喩えるならば、所謂〝鳥葬〟に近いだろう。そして開始から１０分で、甲龍は撃墜された。
次の映像はイギリスの第三世代機ブルーティアーズとの戦いであった。この時に姿を現した幽霊ＩＳは、今までの鳥のような形状から一変し、平均よりも巨躯ではあったが一応人型であった。――――問題なのは両手と、背中から伸びる４本の長い触腕である。それらの腕の先端には、格闘戦装備のつもりなのか、パンジャンドラムを模したであろう丸鋸に近い形状のブレードが備わっていた。
「――――ぶはっ！　なにこれ!?　なにやってんのさ!?　触手!?　気持ち悪っ！」
「なんと、面妖な――――」
数多の生徒があの手この手を尽くして必死に戦う様を、独特で面妖な手段を用いて撃墜していく幽霊ＩＳ。その形状は映像が移り変わる度にコロコロと変わり、一体どれが本当の姿で有るのかもはや見当がつかないレベルであった。
幽霊の二つ名に相応しい不気味な風格が既に備わっているそのＩＳの名は〝ナイトライダー〟と言い、由来は黒椿の品種。花言葉は「気取らない優美さ」である。
映像を見たクロエは、一体どこら辺がそうなのかと度々首をかしげたが、その花言葉自体は束にとっては実にらしいと思えるそうで、件のＩＳの名を聞かされた時に今この瞬間のように大きく笑い転げて

いた。
「――ローテクの継ぎ接ぎもここまで来ると確かに芸術的だ！　発想がアナログ過ぎるよ！」
　束は幽霊ＩＳの生みの親とそれを駆る操縦者に向けて惜しみない賞賛の言葉を送った。
　次の映像の中で幽霊ＩＳナイトライダーは、飛行ユニットの機首に大型の削岩機（ドリル）を搭載した異形――ドリルグライダー装備であった。
「束さんの中には絶対生まれてこない発想だね。なんかもう〝メガドラタワー〟みたいだよ。このＩＳ――」
　束はいつぞや秋斗が見せたゲームハードの〝究極形〟の姿を思い抱いた。
　そして映し出された白式対ナイトライダーの戦いは、大型ドリルを伴った瞬時加速体当たり（ＳＬＣダイブ）によって抉られる一夏の絶叫と共に終結した。

☆

　都心から電車で４０分程はなれた住宅街。ベッドタウンの中でも有数な高級マンションの一室に彼らは揃った。
　２０畳のワンルーム。その壁一面をパネルにした豪勢なプロジェクターによって投影された映像には、２機のＩＳが高速で飛び交い凌ぎを削りあう光景が映っていた。それは世間からは秘匿されるべき戦闘記録であり、そして同時に安易に世に出してよいモノですらない。
　しかし男達はソレを見ることが叶った。
　ソレを可能にする伝手を持つ男が彼らの友であったからだ。
「――で、どうよ、貴重な映像を見られた感想は？」
　戦いの模様は次々と移ろい行き、そして場面は男達も良く知る友人のある少女との対戦の映像に移り変わる。
　この場に集った男達に件の映像を見せた張本人――織斑秋斗は缶コーヒーを片手にその場に集った男達に問うた。

「――鈴は相変わらずのワンダフルボディの様で安心した。それよりセシリアさんのお尻がセクシー過ぎて辛いな」
「真っ先にそこに注目するとは流石我等が五反田弾やで。まぁ、セシリアさんについては俺も同意やな。んで鈴に関しては体型は兎も角、たった一年で専用機纏って戦えるってのは相当変わったと思うわ――後は額に〝酢〟って文字を書けば完璧や」
映像を見守るのは秋斗を含めた４人の男達だ。
その内、菓子を頬張りながら感想を零した五反田弾の意見に対し、コーラを片手にした御手洗数馬が答えた。
彼ら二人が見守るのは、中学時代の友人である鳳鈴音と、織斑一夏とのクラス代表決定戦でのやり取りである。
その映像を見た数馬の零したふとした一言に、秋斗と弾は思わず反応した。
「――懐かしいな。キン肉まん３世（サード）の超人募集で鈴の奴が作った双子の正義超人だっけか、それ？」
「たしか正義超人のスブタマンだな。それと力を求めて残虐超人に身を落としたパインスブタマンだったか。ちなみに師匠はラーメンマンだって言ってたな、アイツ（鈴）――」
「アイツ。どんだけ酢豚好きやねん！」
懐かしき中学時代のふとした思い出を語り合いながら、秋斗はふと傍らのソファに座るこの部屋の主にして親友――青峰清十郎に問うた。
「――部長はどうよ？」
茶化しながら問う秋斗に対し、青峰は終始真剣な表情で映像を観察していた。
「――やはり秋斗殿には悪いでござるが、一夏君の白式のヘソ出しのＩＳスーツと白式の顔出しのデザインはどうにも気に入らんでござるな。ぶっちゃけダサいでござる」
「まぁ、女性が乗るなら兎も角、男が乗っていいデザインじゃねぇとは思うな、俺も――」
「しかり」

一夏の纏う白式というＩＳのコンセプトは兎も角、その形状について不満を述べる青峰の意見には、秋斗も同意した。

そしてその点については、この場に居る数馬と弾にしても同じであった。

そもそもＩＳの始祖である白騎士という機体は全身装甲で作られていた。

ソレを大胆にデザインし直し、現代のＩＳの女性用という礎を築いたのが第一回大会でのドイツのＩＳである。

「まぁ、白式のデザインをした奴も男が乗ると思って作ってないだろうしな。微妙な感じがするのは仕方ねぇよ」

「せやな。顔出しのデザインに関しては第一回のモンドグロッソでやらかしてくれたドイツって国が全部悪いわ」

弾と数馬が言った。

それからしばらく４人で一夏の戦いの様子を観察し、その日は解散となった。

「――今日はどうもありがとうございました。青峰先輩」

「あざっした！」

「いやいや、こちらこそ楽しかったでござるよ。弾君も数馬君もまた遊びに来ると良い」

久しぶりに再会した数馬と弾。その２人の去り際に、秋斗はこっそりと懐中時計（レディ）を触れさせた。

「秋斗も元気でな？　後、もげろ」

「まだ言ってるよ、コイツ――。もうええかげんにせぇよ。弾」

「うるせぇな数馬。一夏だけならいざ知らず！　秋斗まで天才美人巨乳女科学者と同棲中とかいうクソ羨ましい状況を楽しんでやがるんだぞ！　俺達のこの差はなんなんだよ！　顔か？」

「――顔は関係ねぇんじゃねェか？」

「モテる奴は皆そういうんだよ。チクショウ――」

一夏がＩＳ学園に入学すると決まった際。弾は心底羨ましいという慟哭を上げたという。そして此処へ来て、中学中退で現在放浪中である秋斗の近況を聞いて弾は再び慟哭した。

「弾君にもそのうち春は来るでござるよ。今は耐え忍ぶでござる」
「青峰先輩――――」
聖者に救いを求める貧民のように、弾は青峰の言葉を恭しく受け取った。
秋斗と数馬は不意に眼を合わせ、此処で弾に青峰にはドイツ生まれの美人でオタクな知り合いがいると言ったらどんな顔をするだろうかという悪戯心が芽生えた。
しかし実行に移すのはまた別の機会にする事にした。
「それじゃまたな。親友」
「またな、秋斗君、部長！」
「あぁ。またなお前ら」
「また」
帰る方向が同じという弾と数馬を先に見送った後。
秋斗と青峰はその2人の背中が見えなくなったところで、視線を交わした。
「さて――――」
「皆まで言うなでござるよ秋斗殿。例のモノは既に出来ているでござる。本日中にデータは送信しておくから、帰ったら確認するでござるよ」
「了解。で、今度の奴ももちろん期待しても？」
「いつも通り、答えはもちろんでござるよ」
元模型部部長――青峰清十郎は不敵な笑みを浮かべた。
「――――〝ディープブルー〟、〝スカイネット〟、〝メイトリクス〟、〝マーフィー〟に続く、新しいナイトライダー専用の特殊兵装外殻。通称――〝アルマゲドン〟パッケージでござる」
「そいつは相変わらず……なんというか実に派手そうな名前だ」
「でも好きでござろう？」
「まぁ、な」
対する秋斗も青峰と同様の笑みを浮かべた。
ＩＳナイトライダー。
ＩＳ学園で幽霊と称されるそれは、実は青峰と秋斗の〝二人〟で生

み出された代物である。
機体のコンセプトは秋斗が、そのビジュアルのデザインは青峰がそれぞれ担当し、仮想空間内でのみ存在するそのＩＳは、彼ら2人の趣味が多分に詰まっていた。
――――それ故に現実世界で再現しようものなら、それこそ国が傾くレベルの莫大なコストを支払う機体に仕上がってしまったのはご愛嬌である。
しかしそれはそれ――――
仮想空間の中だからこそ可能ならばと、その中に〝無限〟という己が思い描く究極を描く事にした。
「――――クラウドに新しい戦闘記録を保存しといたから、そっちも後で確認しといてくれ」
「楽しみにしているでござるよ」
「それは御互い様。――それより部長もそろそろ出撃してみないか？見てるだけじゃ楽しくないだろ？」
「そうでもないでござるよ。ゲームを脇で見ているほうが好きという人間も一定数いるもので、拙者もその類でね。秋斗殿の戦闘記録を見るほうが多分、好きでござるよ」
「そうかい。なら、まぁ――――今度の奴も期待してくれ。それじゃ、また」
「あぁ、また――でござる」
軽く手を挙げ、秋斗は独り雑踏の中に消えた。

織斑兄弟の夏休み　ｓｋｙｒｉｍ編

最近ＩＳ学園を賑わす〝幽霊ＩＳ騒動〟の発起人とも称される（※本人は否認している）織斑秋斗は、天災〝篠ノ之束〟が作りげた移動拠点型人参系潜水艦――通称〝タバネサブマリン♪〟の艦長代理として、日々を趣味に費やす惰性的人生を全力で謳歌していた。

その日々は勤勉な者が知ればただ無為と嘆くか、または時間の盛大な無駄遣いと怒りを覚えるかのどちらか。もしくはプー太郎。あるいはウンコ製造機という軽蔑を受けるに相応しい生き方だ。

しかし秋斗の、常人では決して辿り着けぬ奇妙な第二の人生に端を発した生活は、その年齢と同じく１５年の月日を掛けて完成した不労所得による生活という基盤を軸に、ある種、世間から秘匿されるような形で許されていた。

その生き方を糾弾しようにも織斑秋斗の存在は表向きには失踪中であり、その生き方を矯正しようにも彼の後ろ盾には稀代の天才がある。

唯一、彼の天敵と目される血を分けた姉の存在だけが、秋斗のその安寧を脅かすものの、果たして世界最強の女とて、生身でＩＳ学園から二キロほど離れた沖合い。しかもその海底奥深くにステルスモードで停泊する彼の潜水拠点を見つけ、それを制圧する事は可能であるか、否か――そうした領域での論争になってくる。

つまりこの瞬間の織斑秋斗は、この世で最も自由な立場とも言える領域に存在し、且つ、その生活を脅かすであろう天敵からは遠く離れた楽園にて、今生の生のひたすらに謳歌している真っ最中にある。

「――戦士ぃの心を～英雄はもとん♪　来ぃたる、来るぅは～ドラゴンボンッ♪」

秋斗は機嫌よく鼻歌を歌いながら、潜水艦のメインコンピューターである『我輩は猫である』を駆使し、ある作業に没頭していた。

「とりあえず、コレで８割って所か。競合する部分は如何にかなったけど、翻訳文の怪しい所を直しだすとキリがねェな」

作業開始からおおよそ１８時間が過ぎ、エナジードリンクを片手に

眠気と疲労を誤魔化しながらの作業はそろそろ限界だった。
流石に連日の徹夜に等しい作業で凝り固まった肩の痛みは誤魔化せず、仕方なく秋斗は、「後はよろしく――」とばかりに残りの作業を自身が持つＩＳコア５０１通称レディと、潜水艦のメインコンピューターである『我輩は猫である』に丸投げし、風呂と仮眠をとる事を選んだ。
秋斗が没頭する作業は、一種のデバッグであった。しかし通常のゲームプログラム程度であれば、それ自体を直接人の手で行うよりタバネサブマリンの電算処理機能と『我輩は猫である』の力を使ったほうが圧倒的に早い。故に、その作業時間を見るに、厳密にはデバックと言うよりゲーム自体の改造を行っていると言い換えたほうが正しい。
そんな秋斗が数日掛けて弄繰り回しているプログラムの正体は、一昔前にＰＣ用に発売された一人用の〝オフラインゲーム〟の物である。
それは世界中の有志が独自に星の数ほどの改造パッチ（ＭＯＤ）を作り上げ、発売から大よそ十数年近い月日が流れても尚、ファンが未だにｗｉｋｉを更新し、新しいＭＯＤを作り続けている程の人気タイトル。名を〝ｓｋｙｒｉｍ〟と言い、歴史大河を描くに等しい膨大な量の設定による下敷きと、それを表現しきる当時最先端のゲーム技術。そして多くの一流クリエイターが集結して作り上げた、〝エルダースクロール〟というＲＰＧシリーズの一つであった。
今回秋斗は、如何にかしてそのタイトルを、束の考案した仮想空間内で遊べないかと思案していたのだ。
「――――あ〟～かのラグネル。ロリクステッドに馬を買いにやってきたぁああ！」
連日の作業ですっかりハイになった脳みそ。
その全ての作業が終ったのは、世間が夏休みになるか否かの頃であった。
丁度その頃のＩＳ学園では臨海学校や期末テストと言った催しが行われていたそうだ。またＩＳ学園に通う唯一の男子生徒――秋斗

の兄の織斑一夏が、いろんな意味で笑ったり叫んだりしていたというが、そんな話には微塵も興味が無かった。

毎週末に潜水艦に戻ってくる学園の特別天災非常勤講師――篠ノ之束から聞かされて情報としては知っていたが、それらは秋斗にとって実にどうでも良く、秋斗の興味は既にこれから先にある。

「さて――」

秋斗は完成した仮想空間用〝ＳＫＹＲＩＭ〟通称秋斗ＭＯＤ搭載Ｖｅｒに、逸る気持ちを抑えながらログインした。

我ながら――と、言うより、元々そのように調整したのだから当然な話だが、秋斗の望むままのゲームの世界が、そこには広がっていた。

――しかし調整に費やした期間の１００分の１の時間も経たぬまま、飽きた。

シナリオ周りは特に弄っていないので、真新しさは視覚的な要素のみに終始していたからだ。

しばらく仮想空間内を練り歩いた秋斗だったが、結局メインクエストを今更０からの状態で始める気がまるで起こらなかった。

完成してしまうとなんとも退屈だ。

――ネタバレを知っているからだろうか？

ふと、チュートリアルを終えた段階で秋斗はそう思った。

――そしてその考えに端を発した悪魔的発想が込み上げるのを感じた。

何も知らない一夏やラウラ辺りをゲームの中に放り込み、その反応を見ながら一緒に遊んだらきっと面白い。

それはダンジョンを敷いて勇者を待ち構える魔王のような――

もしくはデスゲームを仕掛けるゲームマスターのような思考であった。

ある種の愉悦とも言い換えられる。

シナリオの流れを知っているからこそ抱く期待。プレイヤーがシナリオの先々で感じるであろう悲しみや怒りが強ければ強いほど、罠を仕掛ける側は楽しくなる。

プレイヤーが全力でゲームにのめり込んでいる姿を、ゲームを仕掛

ける側としてリアルタイムで眺めたい。
トラップで死ぬ瞬間を、救い難い結末を迎えても立ち上がる姿を、そして結末に至る光景を間近で見たい。
そんな欲求が秋斗の中に込み上げたのだ。
「――――と、いうわけで博士！　俺と一緒にデイドラ（混沌の神）ごっこしようぜ！」
「――――え？」
思い立ったらどうしても試したくなった。
夏休みが間近となり、終業式よりも早くに講師活動を終業した束を捕まえ、秋斗は早速その企画を提案した。

☆

世間は直に夏休みとなる。それはＩＳ学園にしても同じ。
しかし多くの生徒がＩＳ学園から実家に一時帰省しても、一夏や箒の場合は安全保障の問題から学園に軟禁される事になる。――ついでに言えば、一夏のほうは余りに残念だった期末テストの結果、夏休みは殆ど補習と言っていいスケジュールとなっていた。
それが余りに哀れだと感じた秋斗は、せめて一夏の灰色な夏休みが楽しくなるようにと、ヴァーチャル空間で遊べるように調整したスカイリムのテストプレイを託す事に決めた。※そこに他意はあるかもしれないが、無いと言い切る。
「――――所で、あっくんや？　デイドラごっこって具体的には何をする遊びなの？」
「ん～見繕った適当なプレイヤーを仮想空間に放り込み、そいつらの冒険を神が如き視点から眺め、愉悦する遊び……かな？」
「ほうほう、つまり夏休みも学園で軟禁状態で暇そうな〝いっくん〟や〝箒ちゃん〟を主人公にして、その冒険の様を眺めるんだね？」
「流石、博士。箒まで絡めてくれるとはな。……理解が早くて嬉しいぜ」
「ふはははは、束さんにこの程度の事など造作も無いよ♪　察するに、君

はいっくんや箒ちゃん以外の凡人にもプレイヤーとして参加して欲しいのだろう？」
「――否定はしない」
「うむ。素直でよろしい！」
その日の夜、テストプレイと称してＶＲスカイリムに束がログインした。
そんな束が冒険を進めていく様を秋斗は外から眺めた。
束にしても秋斗の試みは大変好奇心をそそられるらしく、その表情はいつにも増して明るい。
「ふむふむ――」
束はＶＲ技術駆使して旧来の形であったゲーム世界を高度再構築した仮想空間内を歩き、その調整のゆるい部分を秋斗の代わりに細かく手直ししていった。
「――生身に見えるけど基本的にはＩＳを纏ってるのと一緒なんだね。学園のＶＲ訓練みたいな撃墜死亡判定直後の強制ログアウトみたいな仕様は無い、と。ついでにログアウトは個人の意思で出来るようにしてるか。ふむふむ。複数人で遊べる仕様にすると時間の調整が面倒だから、一回憲兵に捕まって牢屋に入ると面倒な事になるねぇ」
「まぁ、その辺は要、調整だ。牢屋の中だけでも時間の流れを多少弄くるってでもいいし――」
「複数人と言っても１０人ぐらいが限界だろうねー。まぁ、もともと一人用のゲームだし、それはしょうがないか」
原型はＰＣゲームのスカイリム。しかし仮想空間でのプレイングを調整した結果、そこにＩＳの技術を多数応用する事になった。その為、プレイヤーはＩＳの使い方がある程度わかっている事が前提となる。ある意味ではＩＳの慣熟訓練に丁度いい仕様だった。何せゲーム内での活動は常にＩＳを纏っているに等しいのだから、まったくの素人でもメインクエストをクリアする頃になれば、それなり以上のＩＳの使い手に成長出来る。そんな風な感想を束は抱いた。
「プレイヤーのレベルに応じて敵の攻撃力やダメージの計算式が変わ

るって仕様は面倒だけど、いっその事レベルを排除して、熟練度に応じたスキルポイント制のみを採用した方が楽かもね？」

「そういう細かいところは博士に任せるよ」

「了解。いや～それにしてもグロイねぇ……らっちゃんとか、コレ見たら泣いちゃうんじゃない？」

「流石に泣きはせんだろ？　まぁ、泣いたらないたで、それもそれで楽しいだろうけど――」

「まぁ、そうだね♪」

洞窟に潜った束の目の前に複数のドラウグルが現れる。

それはゾンビともミイラとも説明できる生きた屍で、メイン、サブに関わらず、スカイリムのクエストの多くは地下遺跡や洞窟に潜る事が多く、必然的に多くのドラウグルと戦う事になる。

つまり、ゲームとしてはドラウグルが倒せなければ、はっきり言ってどうしようもないのである。

そしてゲーム自体に詰まれては、折角の秋斗も束もまったく面白くないので、本来のスカイリムより表現をマイルドにする事も視野に入れて調整を加えていく。

「おりゃぁ！」

テストプレイという事で束の衣装は何時ものエプロンドレスである。その格好のまま、束は巨大な〝古代ノルドの両手剣〟を装備していた。

気の抜けた声でドラウグルを切り倒していく束だが、その立ち回りは意外に上手い。と、言うより流石、古流剣術道場篠ノ之の嫡子なだけある動きだ。

ともすれば、箒は疎か千冬と比べても遜色の無い剣士である。

そんな束の様子に秋斗は思わず舌を巻いた。

「博士って実は先生から密かに剣術習ってたん？」

「ん？　いや、特にそんな事はないよ」

「あぁ、そうなの……」

秋斗にしても一応は幼少期に剣術を習った身である。それを踏まえて束の立ち回りは、流石天災と呼ぶに相応しき物であり、同時に、

「箒が見たら泣くな……」と、秋斗は密かに思った。
「――さて、ざっとこんなもんかな」
周囲のドラウグルを蹴散らした束は、そのまま洞窟の深部へとたどり着いた。
洞窟の壁面に刻まれたドラゴンの文字。そこから発せられてプレイヤーに届く力強い古代の歌声――
序盤のクエストの一つを消化した束は、そこで一時ログアウトする。
一通りの冒険を終えた束に秋斗は尋ねた。
「――感想は？」
「すっごい面白い！」
キラキラとした笑みを浮かべる束を見て、秋斗もそれに釣られて笑った。
こういう遊びに全力になれる人間が秋斗は大好きであり、それは束も同じ。故にそこからの流れは、ジェットコースターが如く。
定命の者の多くが邪悪な存在だとするデイドラの神々の様に、秋斗と束はそれから3日の時間を掛けて、最終調整を行った。

☆

『やぁやぁやぁ、久しぶりだな一夏！　その後、どうだい？　どうなんだい？　学園での生活は？』
「――なんだよ、そのテンション。一瞬、束さんかと思ったぞ、おい……」
夏休みを翌日に控えたＩＳ学園で、一夏は久しぶりの弟からの電話を受けて思わず困惑した。
「お前から電話を掛けてくるなんて珍しいじゃないか？」
『偶にはこっちからしてやらないとと思ってな。それより博士から聞いたぜ？　ボロボロだったんだろ？　期末テスト』
「うっ……なんで、それを――」
『ついでに言うと、その成績の所為で姉貴から夏休み中ずぅっと補習

を食らうって話も聞いた。いや～可哀想だな。マジで同情する。いや、ホントに。スッゴイカワイソ』

「おいコラ、喧嘩売ってんのか！　同情するならお前も学園に来いよ、この野郎！　この学園のレベルがどんだけかお前知らないだろ！」

『流石にそれは無理だ。言い過ぎた。ゴメンな。そう怒るな』

「この――」

一夏は怒鳴るように言った。

普段はこの程度の事で腹など立てない一夏だが、丁度その件を千冬から聞かされて虫の居所が悪かった所為だ。

秋斗は適当な様子で謝罪の言葉を並べ、その台詞に一瞬キレそうになった一夏だが、いつになく胡散臭い秋斗の様子をふと不審に思い、一夏は溜息混じりに問うた。

「――で、用件は何だよ？　普段は俺から連絡しないと通じない薄情な弟が、今更何の用だ？」

『そう邪険にするなよ。今日は良い話を持って来たんだ。少なくとも勉強漬けの灰色な夏休みが死ぬほど面白くなる――そんな娯楽を用意した』

「用意した？　それってどういう――」

『細かい話は仮想訓練室にいけば判る。簡単に言うと一緒に〝ゲーム〟やろうぜって事さ』

訓練室という件を聞いて一夏はふと思った。

「おい、ちょっと待てゲームってなんだ？　と、いうか何でお前が仮想訓練設備の事を知ってるんだ？　そこでゲームって事はやっぱりお前か？　あの幽霊ＩＳの正体はお前か、秋斗!?」

『そんな事はどうでも良い。とにかくＶＲ空間で会おうぜ』

「おい、秋斗！　――くっそ、アイツもう切りやがった」

思わず手にした電話を投げ捨てそうになる一夏だったが、憤りを超えると、ふと、いつになく楽しそうな秋斗の様子に強い戸惑いを感じた。

――こんなことが前にもあった様な気がすると、そして同時に凄く嫌な予感がする、と。

「――――ったく」

悩んだ末、仕方なく一夏は仮想訓練室へと向った。

普段はＩＳの訓練で使う場所であり、平時は凄く混みあっている場所だ。

しかし夏休みとなり多くの学生が帰省した今、仮想訓練室は人の気配が少なく寂しい印象を受けた。

「一体、なんだってんだよ……」

仮想訓練室を預かるクロエから使用の許可を受け取った後。一夏は丁度、同じタイミングで仮想訓練室を利用していた箒とラウラに近い位置のＶＲ用ベッドに寝そべり、意識を仮想空間に預けた。

一夏が現実から意識を手放す様子を手元の端末で確認した訓練室の管理人クロエ・クロニクルは、一夏に向けて静かに目礼した。

その旅の無事を祈るように――――

「――――おい、ちょっと待て！　どういう事だこりゃ!?」

気がつくと、一夏は見慣れぬ世界に居た。

土地の名はスカイリム。

彼の地に、一夏は何も知らされぬまま降り立った。

――――その両手に重たい手錠をつけて、だ。

帝国への反乱を目論むウルフリック・ストームクローク首長以下、多くの反乱軍兵士と共に、一夏は処刑場が敷かれたヘルゲンの街に馬車で移送されていた。

ソブンガルデ（死後の戦士の世界）で再会を誓い合い、斬首刑を待つ多くのノルド人。彼らのかもし出す終末的な雰囲気の漂う状況の中で、不意に一夏の隣の人物が声を掛ける。

「ようこそ、スカイリムへ」

「おま、秋斗！　何で――――」

「細かいことは気にしなさんな。久しぶりだな、兄弟」
ふと横から声を掛けられ振り返ると、隣には秋斗の姿があった。
久しぶりの弟との再会だが、一夏にはそれを喜ぶ暇はまるで無かった。
目の前では、一夏や秋斗と同じ様に、馬車で移送された多くの者が斬首台で首を刎ねられていたからだ。
「ちょっと待て、ちょっと待てエエ！　どんな状況だこりゃ!?」
「――おい、そこのお前！　次はお前だ」
「はぁ!?」
そして何も判らぬまま、一夏は処刑を執行する女兵士に鋭く指差された。
反射的に逃げようとするが、直ぐに屈強な兵士達につかまり、そのまま斬首台へと組み伏せられる。
「ちょっと待て！　俺は何もやってない！　俺は無実だ！　と言うかなんだこの状況は！　説明しろ、秋斗！　あ、待って！　人違いだ！　人違いだから!!　お願いだから殺さないでくれぇえええ！」
「――あばよ兄弟。ソブンガルデで会おう」
「ふざけんなテメェ！　何がソブンガルデだ。意味がわかんねぇぞ、コラァ！」
秋斗が沈痛な面持ちで一夏に黙祷を捧げた。
一夏は何も判らぬまま、首を刎ねる斧が振り上げられる様を見た。
「いやだあああああ！」
一夏の首がまさに断たれようとした瞬間。
一夏達の目の前に巨大なドラゴンが現れ、その騒ぎで処刑場は大混乱に陥った。
「よし、逃げるぞ！　一夏！」
「よしじゃねぇ！　なんだこりゃ!?　なんなんだこりゃ!?　頼むから説明してくれ秋斗！」
「つまりお前はこの夏休みに世界を救うんだよ」
「はぁあああ？　意味がわかんねぇよ、おい！」
それが運命の始まりであった。

スカイリムの地に降り立った織斑一夏は未だその宿命を解せぬまま――冒険は始まった！　※強制